仙台市文化財調査報告書第58集

今泉城跡

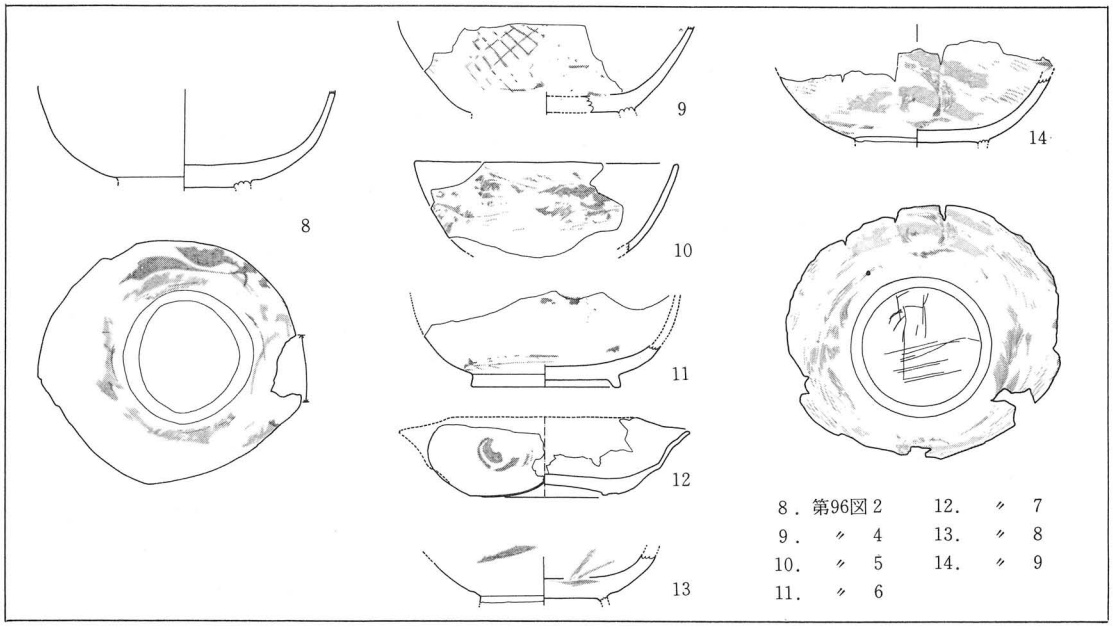
— 名取川下流域における中世城館跡の調査 —

1983年３月

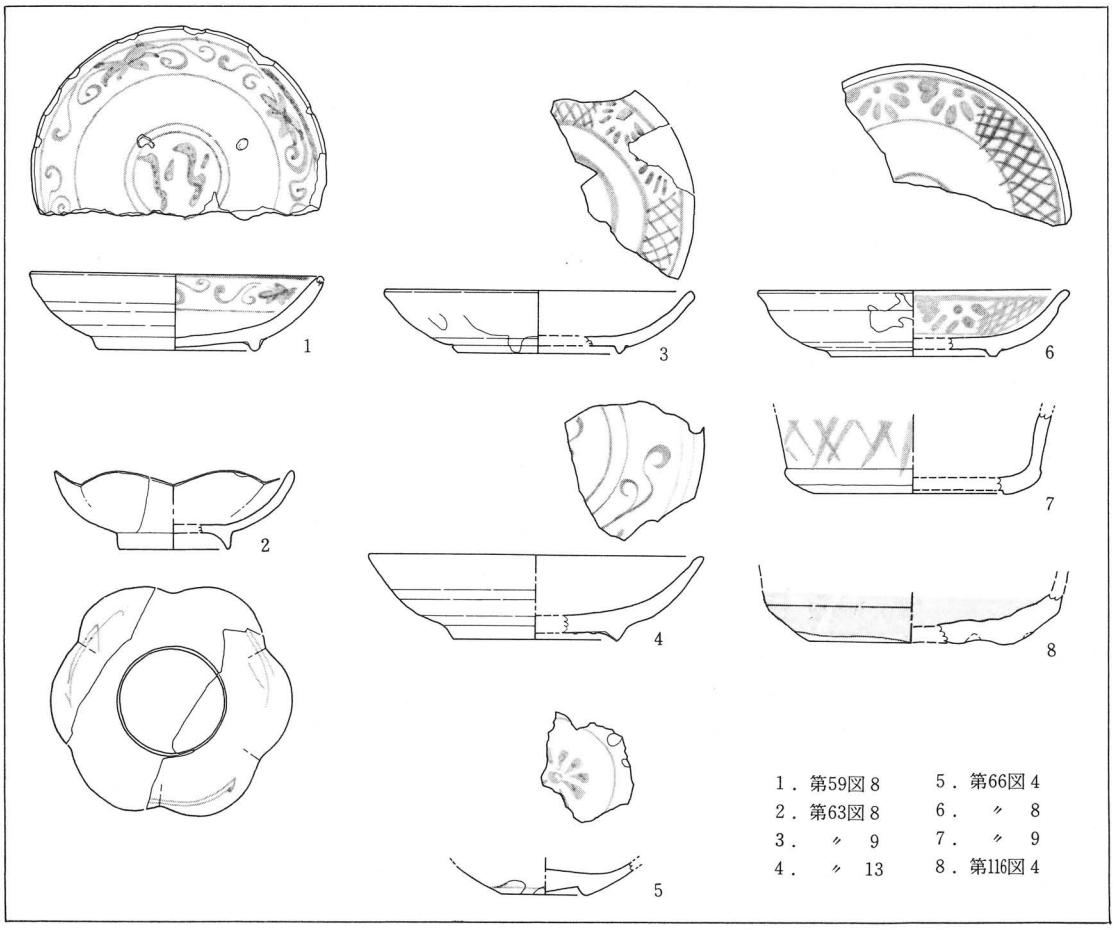
仙台市教育委員会

今泉城跡正誤表

頁		誤	正
	調査体制 担当職員	佐藤	佐藤洋
P23	第3表32の層位	Ⅱ層	2層
P79	第62図の表7	7の長石釉？を6へ移動	
P84	第64図の表3		Ⅴ期？
P86	第66図の表6	不明	Ⅰ期
P114	砥石・礫石器の実測図表現法	◁硬質の石 軟質の石▷	硬質の石▷ ◁軟質の石
P199	20行 26行	1900	1982



8．第96図2　12．〃　7
9．〃　4　13．〃　8
10．〃　5　14．〃　9
11．〃　6



1．第59図8　5．第66図4
2．第63図8　6．〃　8
3．〃　9　7．〃　9
4．〃　13　8．第116図4

仙台市文化財調査報告書第58集

今泉城跡

— 名取川下流域における中世城館跡の調査 —

1983年３月

仙台市教育委員会

序　　文

本市六郷地区は肥沃な田園村落として、豊かな穀倉地帯の一画をなしてきた所であります。

近年、とりわけここ久保田今泉地域は、市街化区域に編入されて以来、宅造計画が進み、いまでは良好な住環境として発展を遂げてきております。

一方、この地は「須田玄藩の居城…今泉城」があった所として周知され、開発の歴史が藩制以前に遡ることを古記は伝えております。

今回の発掘調査は、開発事業の計画に伴い、文化財保護について度重なる協議の結果、事前の記録保存の策として実施したものであります。この度の調査からは、中世～近世初頭にわたる貴重な考古資料が数多く発見され、仙台の中世史を解明する上で、大きな成果を得ることができました。

本書は、その調査の成果をあますところなく一般に公開するものであります。

仙台市には、こうした文化財、とくに埋蔵文化財の包蔵地は約400ヶ所以上にわたっておりますが、これを愛護し、保存・継承していくことは、われわれに課せられた責務と考えます。したがって、本書が多くの方々に積極的に活用され、文化財全般にわたる保護・啓発に資することを切に希望してやみません。

最後に、発掘調査や本報告書の刊行にあたり多大の御指導・御協力をいただきました多くの方々に対し、心から感謝を申し上げます。

昭和58年３月

仙台市教育委員会

教育長　藤井　　黎

例　　言

1．本書は宅地造成に先立って行なった今泉城跡の発掘調査の報告書である。すでに公表された現地説明会等に優先するものである。

2．今泉城跡は、1979年度調査において、弥生時代から江戸時代の複合遺跡であることが判明し、本来ならば今泉遺跡とすべきであるが、従来どおり「今泉城跡」を使用した。

3．報告書作成のため、整理・編集は佐藤洋が担当した。

4．本文の執筆は佐藤洋が、石製品・石器は東北大学院生山田しょうが行なった。また、平川南氏、木村中外氏・内藤俊彦氏、高橋理氏、庄子貞雄氏・山田一郎氏から玉稿を賜わった。

5．作図・写真撮影等については、下記のとおり分担した。

遺構トレース：大場拓俊、古川陸子、大友桂子、小島真弓、松岡敦子

遺構写真：佐藤洋、斎野裕彦

遺物分類・集計：工藤久美子、吉田康子、渡辺修子

遺物実測・トレース

〈土器・土製品〉宍戸美智子、吉田康子、菅原恵美子、平照子、阿部多津子、臼井美津子、金沢君代、小島真弓、佐藤洋

〈陶磁器〉大場拓俊、吉田康子、鈴木昇、阿部多津子、山田しょう、大友桂子、佐藤洋

〈木製品〉松岡敦子、佐藤幸子、山田しょう

〈石製品〉山田しょう、宍戸美智子、臼井美津子、金沢君代、平照子

〈金属製品〉平照子、金沢君代、菅原恵美子、山田しょう、宍戸美智子、臼井美津子

〈骨角器〉金沢君代

遺物拓影：阿部多津子、吉田康子

遺物写真：小島真弓

版組：佐藤幸子、松岡敦子、山田しょう、大場拓俊、平照子、熊谷信一

6．発掘調査及び遺物整理において、下記の方々に助言・協力を賜わった。

伊東信雄（東北学院大学教授）、楢崎彰一（名古屋大学教授）、芹沢長介（東北大学教授）、倉田芳郎（駒沢大学教授）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、藤沼邦彦（東北歴史資料館）、平川南（国立歴史民俗博物館）、光谷拓実（国立奈良文化財研究所）、沢口滋（漆芸家）、佐藤則之・千葉孝弥（多賀城跡調査研究所）、三辻利一（奈良教育大学）、吉岡一雄（宮城県立図書館）、内藤俊彦（東北大学植物園）、木村中外（尚絅女学院短期大学教授）、星川清親（東北大学教授）、庄司駒男（東北大学文部技官）、林信太郎（東北大学理学部院生）、中川高（宮城県刀剣登録審査員）、高橋理・阿部朝衛（東北大学文学部院生）以上敬称略

特に、陶磁器類の鑑定は楢崎彰一氏・井上喜久男氏・藤沼邦彦氏、植物遺存体の同定は星川清親氏・庄司駒男氏、樹種の同定は木村中外氏・内藤俊彦氏・光谷拓実氏、木簡・物忌み札の判読は平川南氏・佐藤則之氏、石質鑑定は林信太郎氏、砥石・金属製品の鑑定は中川高氏、土器・陶器の胎土分析は三辻利一氏、火山灰の分析は庄子貞雄・山田一郎氏、漆器は沢口滋氏、文献関係は吉岡一男氏に御教示をお願いした。なお、胎土分析の結果は第52集南小泉遺跡第2次調査報告書に提載してある。

凡　　例

- 本書中の土色については、「新版標準土色帳」（小山・竹原：1973）を使用した。
- 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1「仙台東南部」である。また城館位置を示した地形図は2千5百分の1の仙台市都市計画図（昭和46年、55年を編集）である。
- 基本層位はローマ数字で示した。
- 図版中の水糸レベルは海抜高を示す。
- Ⅰ・Ⅱ区のグリッドラインは、約N－6°20′－Eである。
- 木製品や金属製品等のうち、直接年代のわからないものは、遺構の年代や埋土の堆積年代を使用している。今後さらに検討が必要と考える。
- 土器や陶磁器類等で中心線が1点鎖線のものは図上復元実測図である。
- 陶磁器類の破片実測図は、石器実測図と同様の図示方法に統一した。すなわち、断面を境に左側は内面、右側は外面を示している。
- は実測図中、火山灰層を示す。
- は実測図中、ワラ灰層を示す。
- は実測図中、鉄釉を示す。
- 実測図中、炭化物・漆は黒塗りした。その区別は図版を参照されたい。
- 遺物の法量は極力、文中には記載していない。図・表を参照されたい。
- 出土遺物は、仙台市教育委員会が一括保管している。

本　文　目　次

序　　文

例　　言

凡　　例

目　　次

第Ⅰ章　はじめに

1．調査に至る経過……(1)

2．位置と環境……(1)

3．歴史的環境……(3)

第Ⅱ章　基本層序

1．Ⅰ・Ⅱ区の層序……(5)

2．Ⅲ区の層序……(8)

第Ⅲ章　Ⅰ・Ⅱ区検出した遺構と遺物

1．縄文時代……(11)

2．弥生時代……(13)

3．古墳時代……(17)

4．平安時代の遺構と遺物

(1)　住居……(26)
(2)　竪穴遺構……(32)
(3)　溝……(34)
(4)　土壙……(38)
(5)　井戸……(42)
(6)　その他の出土遺物……(43)
(7)　須恵器……(47)

5．中・近世の検出遺構……(48)

6．中・近世の出土遺物

(1)　日本製陶磁器……(66)
(2)　中国製陶磁器……(87)
(3)　土師質土器……(90)
(4)　瓦質土器……(93)
(5)　瓦……(93)
(6)　土製品……(96)
(7)　石製品……(99)
(8)　木製品……(123)
(9)　金属製品……(148)
(10)　骨角製品……(162)
(11)　植物遺存体……(164)
　　（樹種同定結果について）
(12)　動物遺存体……(165)

第Ⅳ章　Ⅲ区の調査

1．はじめに……(166)

２．各トレンチの状況 ……(166)
３．Ｅトレンチの検出遺構……(166)
４．遺　　物 ……(173)
５．ま と め ……(179)
第Ⅴ章　考　　察
１．平安時代の出土遺物について……(182)
２．陶磁器について……(188)
３．県内産無釉陶器について ……(190)
４．今泉城をめぐって ……(192)
５．遺構の変遷 ……(200)
６．ま と め……(204)
第Ⅳ章　付　　編
１．今泉城跡の木簡について　　平川南 ……(204)
２．今泉城跡から出土した木製品の素材　　木村中外・内藤俊彦 ……(206)
３．今泉城跡出土の動物遺存体　　高橋理 ……(208)
４．今泉城遺跡の灰白色火山灰　　庄子貞雄・山田一郎 ……(211)

図　版　目　次

第１図　今泉城跡と周辺の遺跡……2
第２図　名取川下流域の地形分類図……3
第３図　今泉城跡周辺の地形図……4
第４図　基本層序模式図……6
第５図　Ⅰ・Ⅱ区西壁実測図……7
第６図　Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図……9・10
第７図　縄文時代土器頻度分布図……11
第８図　Ⅰ・Ⅱ区出土縄文土器……12
第９図　弥生時代土器頻度分布図……14
第10図　Ⅰ・Ⅱ区出土弥生土器(１)……15
第11図　Ⅰ・Ⅱ区出土弥生土器(２)……16
第12図　古墳時代土器頻度分布図……18
第13図　Ⅰ・Ⅱ区出土古墳時代の土師器(１)……20
第14図　Ⅰ・Ⅱ区出土古墳時代の土師器(２)……21
第15図　Ⅰ・Ⅱ区出土古墳時代の土師器(３)……22
第16図　古墳時代以前の石器(１)……24
第17図　古墳時代以前の石器(２)……25
第18図　平安時代土師器頻度分布図……26
第19図　１号住居跡実測図、出土遺物(１)……27
第20図　１号住居跡出土遺物(２)……28
第21図　２号住居跡実測図、出土遺物……30
第22図　３号住居跡実測図……31
第23図　３号住居跡出土遺物……32
第24図　２号竪穴遺構実測図、出土遺物、32号溝跡実測図……33
第25図　８号溝跡出土遺物……35
第26図　24号、33号溝跡出土遺物……35
第27図　30号溝跡出土遺物……36
第28図　32号溝跡出土遺物……37
第29図　平安時代の土壙……38

第30図　16号土壙、25号、28号井戸跡出土遺物……39
第31図　18号土壙出土遺物……40
第32図　21号土壙出土遺物……41
第33図　49号土壙出土遺物……42
第34図　平安時代の井戸跡……42
第35図　III層、II層、出土遺物、表採遺物……44
第36図　中世以後の遺構出土土器……45
第37図　平安時代の陶器……46
第38図　時期不明のピット出土遺物……47
第39図　基本層位、遺構出土須恵器(１)……49
第40図　遺構出土須恵器(２)……50
第41図　中・近世の溝跡(12、13、14、18、19号)、
　１号竪穴遺構実測図……51
第42図　中・近世の溝跡(11、16、21、26、29、
　31号)実測図……53・54
第43図　中・近世の溝跡(１、２、９、11、15、
　16号)実測図……55・56
第44図　１号、２号橋跡……57
第45図　11号、21号、29号溝跡（内堀）
　遺物出土分布図……58
第46図　掘立柱建物跡模式図……59
第47図　Ⅰ・II区掘立柱建物跡配置図……60
第48図　Ⅰ・II区井戸跡実測図(１)……62
第49図　Ⅰ・II区井戸跡実測図(２)……63
第50図　Ⅰ・II区土壙(１)……64
第51図　Ⅰ・II区土壙(２)……65
第52図　３号、14号溝跡出土遺物……67
第53図　11号、27号、28号溝跡出土遺物(１)……68
第54図　11号、28号溝跡出土遺物(２)……69
第55図　12号井戸跡出土遺物……71
第56図　表採、基本層位出土遺物……72
第57図　21号溝跡出土遺物(１)……74
第58図　21号溝跡出土遺物(２)……75
第59図　中・近世溝跡（12、16、９、29、25、
　26号)、１号竪穴遺構出土遺物……76
第60図　15号溝跡出土遺物……77
第61図　10号井戸跡出土遺物……78
第62図　Ⅰ・II区土壙、ピット出土遺物……79
第63図　１号溝跡出土遺物(１)……83
第64図　１号溝跡出土遺物(２)……84
第65図　１号溝跡出土遺物(３)……85
第66図　Ⅰ・II区井戸跡出土遺物……86
第67図　中国製陶磁器(１)……88
第68図　中国製陶磁器(２)……89
第69図　11号、28号溝跡出土遺物……90
第70図　１号溝跡出土遺物……91
第71図　表採、基本層位出土遺物……92
第72図　Ⅰ・II区出土瓦(１)……94
第73図　Ⅰ・II区出土瓦(２)……95
第74図　Ⅰ・II区出土土製品……98
第75図　礫石器(１)……101
第76図　礫石器(２)……102
第77図　礫石器(３)……103
第78図　11号溝跡出土礫統計グラフ……104
第79図　砥石Ⅰ類……107
第80図　砥石Ⅰ類～III類……108
第81図　砥石III類……109
第82図　砥石III類……110
第83図　砥石III類～Ⅵ類……111
第84図　砥石Ⅵ類……112
第85図　粉挽き臼……115
第86図　粉挽き臼(10)、茶臼……116
第87図　大形礫石器Ⅰ類、II類……120
第88図　大形礫石器II類、Ⅳ類、Ⅴ類……121

第89図　大形礫石器III類、珪化木、
スレート片、硯……122
第90図　木製品(1)……125
第91図　木製品(2)……128
第92図　木製品(3)……130
第93図　木製品(4)……131
第94図　木製品(5)……132
第95図　木製品(6)……134
第96図　木製品(7)……136
第97図　木製品(8)……139
第98図　木製品(9)……142
第99図　木製品(10)……143
第100図　木製品(11)……144
第101図　木製品(12)……146
第102図　1号、2号溝跡出土金属製品……152
第103図　11号溝跡出土金属製品(1)……153
第104図　11号溝跡出土金属製品・土製品(2)……154
第105図　12号、14号、15号、16号溝跡出土
金属製品……155
第106図　21号、26号、31号溝跡出土金属製品……156
第107図　I・II区土壙出土金属製品……157
第108図　I・II区掘立柱建物跡、井戸跡
出土金属製品……158
第109図　21号溝、I・II区基本層位出土、表採金
属製品……159
第110図　I・II区出土古銭……160
第111図　21号溝跡、14号井戸跡出土骨角器……162
第112図　A、B、C、Dトレンチ実測図……167・168
第113図　Eトレンチ遺構配置図、Eトレンチ
東壁、北壁、サブトレンチ実測図……169・170
第114図　Eトレンチ井戸跡・ピット実測図……172
第115図　Eトレンチ出土陶器・金属製品……174
第116図　Eトレンチ出土陶磁器……175
第117図　Eトレンチ出土木製品……176
第118図　Eトレンチ出土木製品……117
第119図　時期別遺構配置図……178
第120図　陶磁器類産地別組成……189
第121図　陶磁器変遷図……189
第122図　中・近世遺跡分布……195
第123図　各期の遺構変遷(I・II区)……201
第124図　各期の遺構変遷(I・II区)……203
第125図　ヒノキの自然分布……207

図　表　目　次

第1表　I・II区出土縄文土器観察表……13
第2表　I・II区出土弥生土器観察表……17
第3表　I・II区出土古墳時代の土師器観察表……23
第4表　中世以後の遺構出土土器観察表……46
第5表　瓦観察表……96
第6表　砥石観察表(I類～VI類)……113
第7表　砥石観察表、(形態不明)砥石、
礫石器の実測表現法……114
第8表　粉挽き臼、茶臼観察表……117
第9表　大形礫石器観察表……123
第10表　木製品(1)観察表……126
第11表　木製品(2)観察表……129
第12表　木製品(3～5)観察表……133
第13表　木製品(7)観察表……137
第14表　木製品(8)観察表……140
第15表　木製品(9)観察表……147
第16表　木製品(10、11)観察表……147
第17表　木製品(12)観察表……147

第18表　古銭観察表……161
第19表　植物遺存体同定結果一覧表(１)……163
第20表　植物遺存体同定結果一覧表(２)……164
第21表　Ⅰ・Ⅱ区溝一覧表……179
第22表　Ⅰ・Ⅱ区掘立柱建物跡一覧表……179
第23表　Ⅰ・Ⅱ区井戸跡一覧表……180
第24表　Ⅰ・Ⅱ区土壙一覧表……180・181
第25表　Ⅲ区遺構一覧表……181
第26表　主要遺構出土土器共伴関係……187
第27表　木製品の素材名……206
第28表　動物遺存体出土表……209・210
第29表　重鉱物組成……211
第30表　軽鉱物組成……211

調　査　体　制

遺跡名称　今泉城跡（Ｃ－507）
所在地　仙台市今泉字久保田１－91外
調査主体　仙台市教育委員会
調査担当　仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係
担当職員　Ⅰ・Ⅱ区　佐藤・斎野裕彦
Ⅲ区　斎野裕彦・加藤正範・金森安孝
調査期間　Ⅰ・Ⅱ区　昭和56年４月７日～８月31日
Ⅲ区　昭和56年５月６日～６月11日
調査対象面積　Ⅰ・Ⅱ区　1,375㎡　Ⅲ区　123㎡
調査面積　718㎡　123㎡
調査参加者　大場拓俊、佐々田弥生、長谷川徹(現苫小牧市埋蔵文化財センター)、松木仁、大友透、五十嵐康洋、小野正泰、八島浩一郎、高橋建一、阿部潜、内藤隆史、千葉きよ子、遠藤みさ子、遠藤たつ子、吉田清子、吉田徳子、木村一子、細谷アキノ、平山みや子、平山新太、山田かつの、佐藤光子、赤井沢さだ子、谷津妙子、小島美和子、佐藤奈美江、今野富美子、佐藤良子、金今恵子、佐藤清人、佐藤新吾、石川勝利
調査協力　㈱今武工務店・サカエ興業

第Ⅰ章　はじめに

1．調査に至る経過

近年の仙台市及び周辺部の宅地開発は急激に増加しており、宮城野平野東部から海岸部にもしだいに拡大されつつある。

今泉城跡にも宅地開発の波がおしよせ、近年まで遺跡の中心部は畑地として残されていたが、現在ではほとんど宅地となってしまった。すでに、昭和54年度に宅地造成の事前調査として、900㎡の調査を行ない、確実に城館の存在が明らかになっている。今回の調査の対象となった地区は、前回の調査地区の東側に隣接する畑地であったため、開発者と協議し、その結果、事前の調査が必要であると判断した。

調査は、対象面積1,375㎡のうち、直接開発に関わる部分約700㎡を、昭和56年４月４日より実施した。

2．位置と環境

今泉城跡は仙台市今泉字久保田に所在する。仙台駅の南東約6.5㎞。名取川と広瀬川の合流地点より東へ約1.5㎞の地点にある。

奥羽山系の一部である面白山地に源を発する名取川及び、その支流である広瀬川は、面白山地から東へ連なる七北田丘陵・青葉山丘陵・高館丘陵を開析しながら東流し、中流域を中心に数多くの段丘を形成させている。一方、先の丘陵部から東側には、仙台平野の一部である宮城野平野（仙台周辺）が開けており、名取川と広瀬川はこの平野部で合流している。

名取川は、河川の下刻によって、中流域では峡谷部を形成し、谷口から急に平野部が開けている。この谷口から河川の堆積作用によって、扇状地性の沖積面が形成され、また、下流域では、平野部における自然堤防、後背地、旧河道などの典型的な微地形をみることができる。

仙台市内の平野部における遺跡の大半は、名取川・広瀬川に沿った自然堤防上に立地していると言えよう。

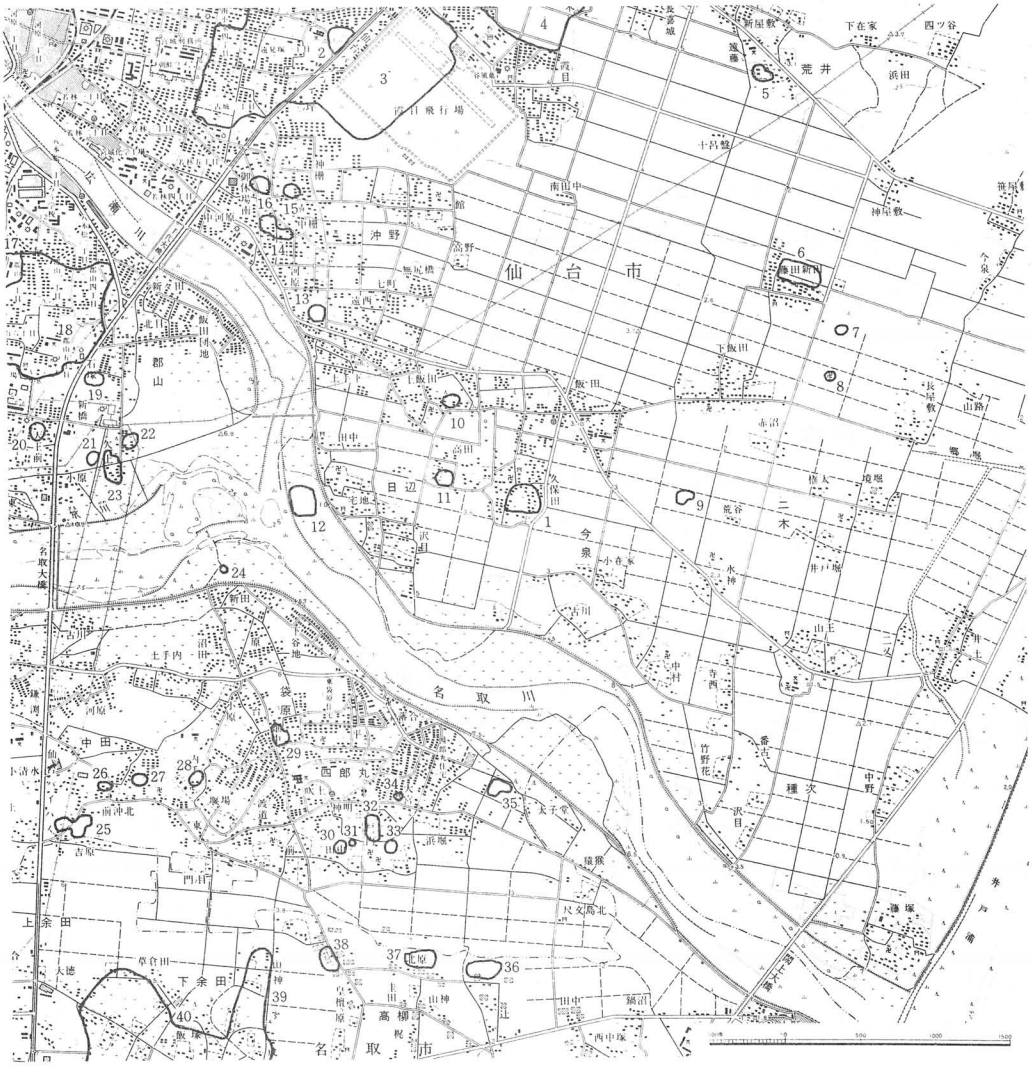
宮城野平野の東部には、後背湿地が広がり、霞ノ目低地（能登・中村）と呼ばれている。また、現在の海岸線に沿うように、いくつかの浜堤列が形成されている。

今泉城跡は、名取川左岸の後背湿地（霞ノ目低地）の中に取り残されたように存在する、自然堤防上に立地している（第２図）。

平野部の地質は、名取川・広瀬川の運搬・堆積作用によって未固結の砂・礫・粘土等の沖積層からなっている。さらに、その下位の基盤は、第三紀層で構成され（地団研1977）、名取川付近では最深部（埋積谷）が－60ｍに達する。これらの沖積層は、深部から岩切層（10～30ｍ）、福田町層（約10ｍ）、霞ノ目層（３～７ｍ）、深沼層（約５ｍ）などより構成されている。この

うち、霞ノ目層中より弥生時代の竪穴住居跡が検出されているという（能登・中村1967）。

本遺跡では、1979年の調査で、第III層（今回の第４層）上面より、弥生時代の土壙が検出されていることから、今回の第４層以下の層は、ほぼ霞ノ目層あるいは、この層の一部に対応するものであろう。

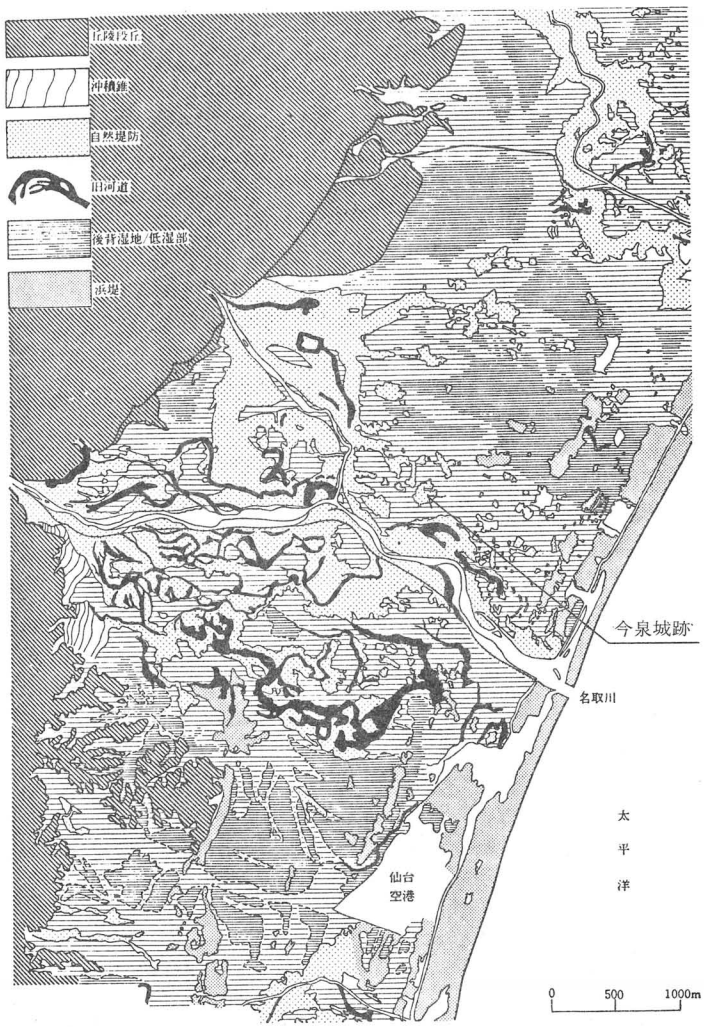


1. 今泉城跡	縄文～江戸	15. 神楯遺跡	縄文～平安	29. 中田畑中遺跡	奈良、平安
2. 遠見塚古墳	古墳	16. 砂押Ｉ遺跡	古墳、奈良、平安	30. 神明遺跡	古墳、奈良、平安
3. 南小泉遺跡	弥生、古墳、平安	17. 西台畑遺跡	弥生、古墳	31. 弁天囲古墳	古墳
4. 仙台東部条里跡	奈良	18. 郡山遺跡	奈良、平安	32. 戸ノ内Ｉ遺跡	古墳、奈良、平安
5. 下荒井遺跡	平安	19. 矢来遺跡	古墳、奈良、平安	33. 戸ノ内II遺跡	古墳、奈良、平安
6. 藤田新田遺跡	弥生	20. 籠ノ瀬遺跡	古墳、奈良、平安	34. 城丸古墳	古墳
7. 屋敷末遺跡	古墳	21. 欠ノ上Ｉ遺跡	古墳、奈良、平安	35. 昭和北遺跡	奈良、平安
8. 下飯田薬師堂古墳	古墳	22. 欠ノ上III遺跡	古墳、奈良、平安	36. 辻遺跡	奈良、平安
9. 築道遺跡	奈良　平安	23. 欠ノ上遺跡	古墳、奈良、平安	37. 中北田遺跡	奈良、平安
10. 上屋敷遺跡	古墳、奈良、平安	24. 大塚山古墳	古墳	38. 皇檀ヶ原遺跡	奈良、平安
11. 高田遺跡	奈良、平安	25. 後河原遺跡	奈良、平安	39. 下余田遺跡	古墳、奈良、平安
12. 日辺遺跡	古墳	26. 前沖中遺跡	古墳、奈良、平安	40. 西田遺跡	奈良、平安
13. 河原越遺跡	古墳、奈良、平安	27. 前沖北遺跡	古墳、奈良、平安		
14. 砂押遺跡	古墳、奈良、平安	28. 内手遺跡	奈良、平安		

第Ｉ図　今泉城跡と周辺の遺跡（中・近世は第122図を参照）

3．歴史的環境

仙台市内では、地下鉄関連の発掘など、名取川・広瀬川下流域の遺跡実体が、かなり明確にされつつある。特に、これらの河川に沿った宮城野平野西側では、発掘調査が増え、原始、古代の遺跡の内容が判明してきている。しかし、同平野中央から海岸部にかけては、調査例は極めて少ない。これは、市街化区域の線引に起因している。ところが、最近では市街化区域あるいは、市街化調整区域がしだいに東側に拡大される傾向にあり、本遺跡の調査もそうした傾向の１つと言えよう。

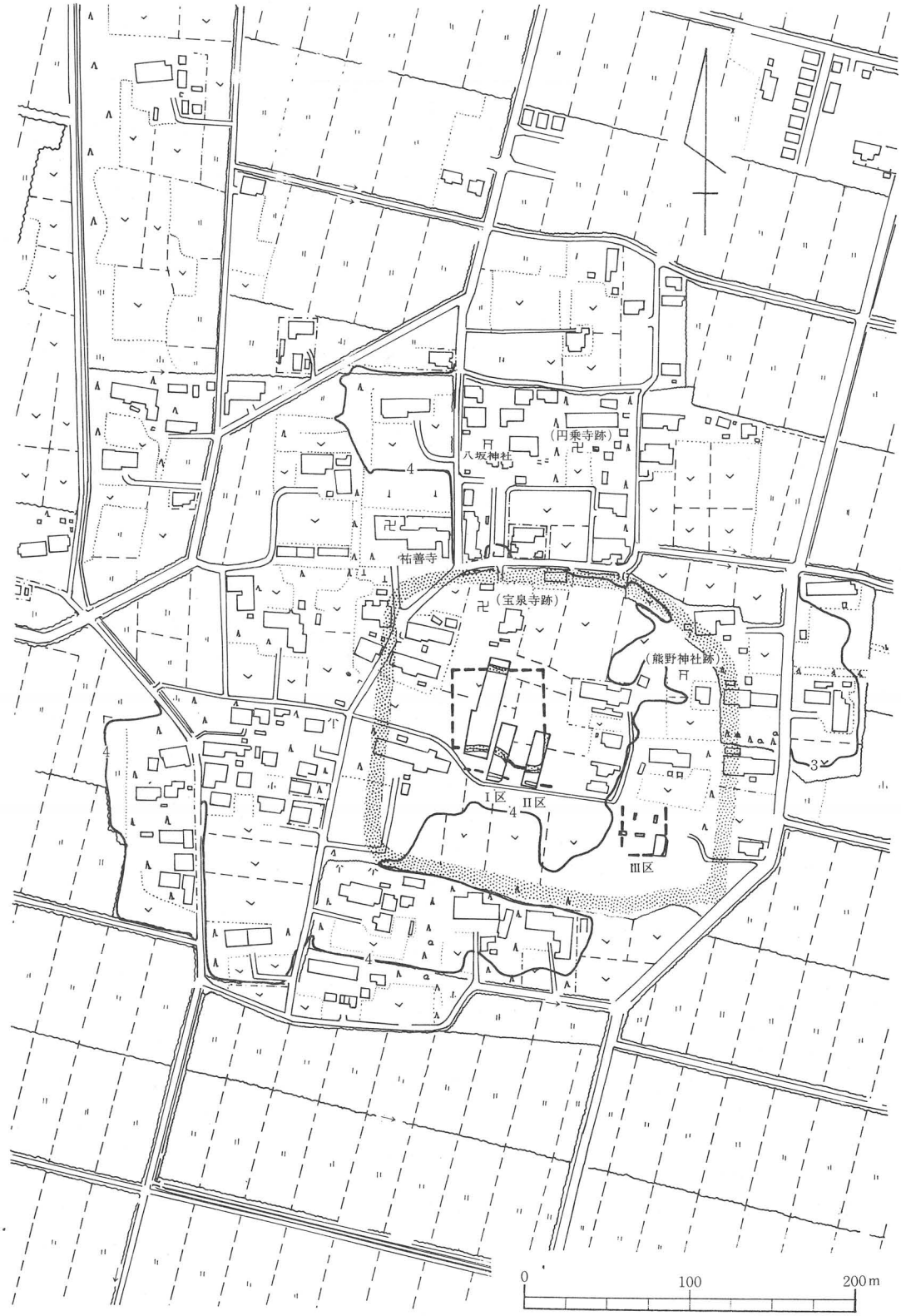


第２図　名取川下流域の地形分類図（清水遺跡より転載）

さて、平野部東側に存在する遺跡は、その内容を十分に把握できるものは少ない。また、近年まで、河川の氾濫等による冠水が頻繁であったためか、遺跡そのものの数も西側に比べて少ない。継続的に営まれた遺跡は少ないようで、この今泉城跡の調査でみるかぎりでは、平安時代前半以降のことではないかと考えられる。平安時代以前は、断続的に遺跡が自然堤防や浜堤上に点在している。

今泉城跡周辺の遺跡（第１図）をみると、縄文時代の遺跡はほとんどなく、現在確認できるのは、後～晩期の土器片が出土した本遺跡だけである。最近、名取川と広瀬川の合流地点より西側では、六反田遺跡、山口遺跡など縄文時代の遺跡が発見されている。

弥生時代になると遺跡数も増え、南小泉遺跡（第１図３）、西台畑遺跡（第１図17）、藤田新田遺跡（第１図６）等があり、自然堤防上に立置するものが多い。ただ藤田新田遺跡は、最も奥に位置する浜堤上に立地している。



第３図　今泉城跡周辺の地形図　スクリーントーンは外堀推定位置　(　)は推定位置

古墳時代には、南小泉遺跡（第１図３）、下飯田薬師堂古墳（第１図８）、遠見塚古墳（第１図２）等があり、また、古墳時代終末から奈良時代の初めにかけて存在した郡山遺跡（第１図18）がある。

奈良から平安時代にかけて、遺跡数は飛躍的に増加し、その大部分は自然堤防上に立地する。しかし、宮城野平野東部では調査例が少なく、必ずしも明確ではない。特に、平安時代後半の様相は不明な点が多い。わずかに、最近、仙台市安久東遺跡や名取市清水遺跡などで、11世紀代の集落が知られるようになった。こうした点では、本遺跡の平安時代後半から末にかけての住居跡等は、のちの中世の城館の成立や立置を考える点でも意義のある発見であろう。

中世の遺跡は、仙台市においては館跡等がある。しかし、一般の集落は調査例がなく、個々の遺跡の調査に付随して、溝や井戸等が調査されたにすぎない。

さて、館跡は、仙台市内においては平野部に多く立地するという特徴がある。市内26ヶ所のうち、13ヶ所で５割を占める。これらの館跡の大部分は、国分氏領に属している。館跡の調査は、県内においてしだいに増加しつつあるが、その全様を知るものはない。仙台市内では、古く1935年に、伊東信雄氏によって、中世留守氏の居城であった岩切城跡の調査が行われている（伊東：1935）。中世の遺跡の調査としては、全国的にみても古い調査の１つと言えよう。しかし、調査では、掘立柱建物跡に伴う柱穴群が発見されたにすぎず、遺跡の内容は明らかではない。また、仙台市安久東遺跡（仙台市教委：1976）では、調査の結果から、これらの遺跡の南に位置する前田館との関連が指摘され、前田屋敷に比定されている。

近世の遺跡は、かって、仙台市街地が城下町であった関係上、個々の遺跡としてとらえることが困難である。そうした中で、伊達藩初代政宗、そして二代・三代の忠宗・時宗の墓の調査は、全国的にみても画期的な調査となった。

いずれにしても、中世・近世の遺跡は、大部分現在の市街地と重複することや丘陵上にあることから、必ずしもその実体が明らかではない。

第II章　基　本　層　序

Ⅰ．Ⅰ・II区

ここでは主として、Ⅰ区のＢ－２区西壁深掘地区を基本とした（第４図）。

Ⅰ層　褐色シルト（10ＹＲ4/4）、数年前まで畑地として利用されていた耕作土である。層厚は平均24cmである。II区では平均９cmで薄くなる。最近、宅地開発に伴ってこの上に盛土がなされるようになった。Ｂ－５区からＢ－８区にかけては、さらに細分される。

IIa層　暗褐色シルト（7.5YR3/3）　層厚は平均10cmである。

IId層　暗褐色シルト（7.5YR3/4）　層厚は平均16cmである。

これらの層は細分できないグリットもあり、特にI区の北西部やII区で顕著である。B－7区ではII層がさらに細分できるが極部的である。これらの層は出土遺物等から、後述するIV期～V期に形成された層と考えられる。11号溝（堀）を境として、I・II区とも北側が厚く、南側が薄い傾向がある。

IIIa層　暗褐色シルト（7.5YR4/3）　層厚は平均約20cmである。平安時代や後述するII・III期の遺構はこの層の上面より掘り込まれている。

IIIb層　褐色シルト（7.5YR4/4）　層厚は平均9cmである。

これらの層は11号溝（堀）の南側では、I・II区ともほとんど細分できない所が多く、存在しない場所もある。F－2区ではIIIa層に対応する層が1号住居跡を覆うが、この層中より常滑の破片が出土する。また、IIIb層のうち、E－8区では弥生時代の土器や石包丁が、B－3区では弥生時代の壺が出土している。B－6・7区等では塩釜式などの土師器が出土する。したがって、場所によって形成年代が異なっているようである。本来はさらに細分されるのかもしれない。大局的には、IIIa層はその上面が平安時代からIII期までの生活面であり、本層は平安時代あるいはそれ以前の包含層と理解される。また、IIIb層はおよそ弥生時代から古墳時代の包含層と考えられる。

IVa層　にぶい褐色シルト（7.5YR6/3）　層厚は平均27cmである。縄文土器は本層上面において確認される。本層以下は、現在無遺物層と考えられる。

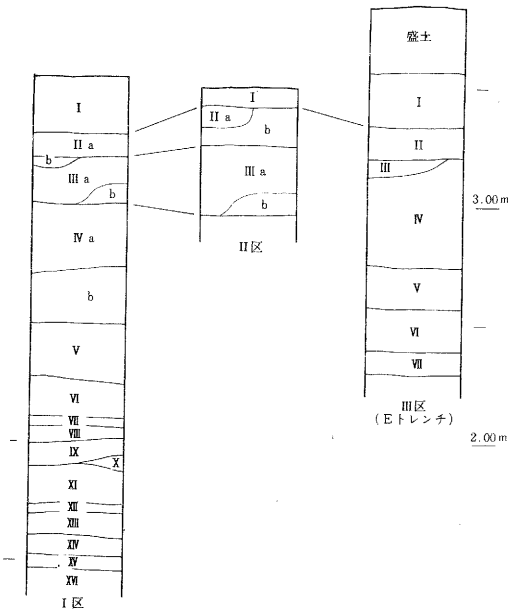
IVb層　にぶい黄橙色砂質シルト（10YR6/3）層厚は約22cmである。下部には、鉄分やマンガンを多く含む。

V層　にぶい黄橙色砂質シルト（10YR6/3）層厚は約24cmである。マンガンを含む。

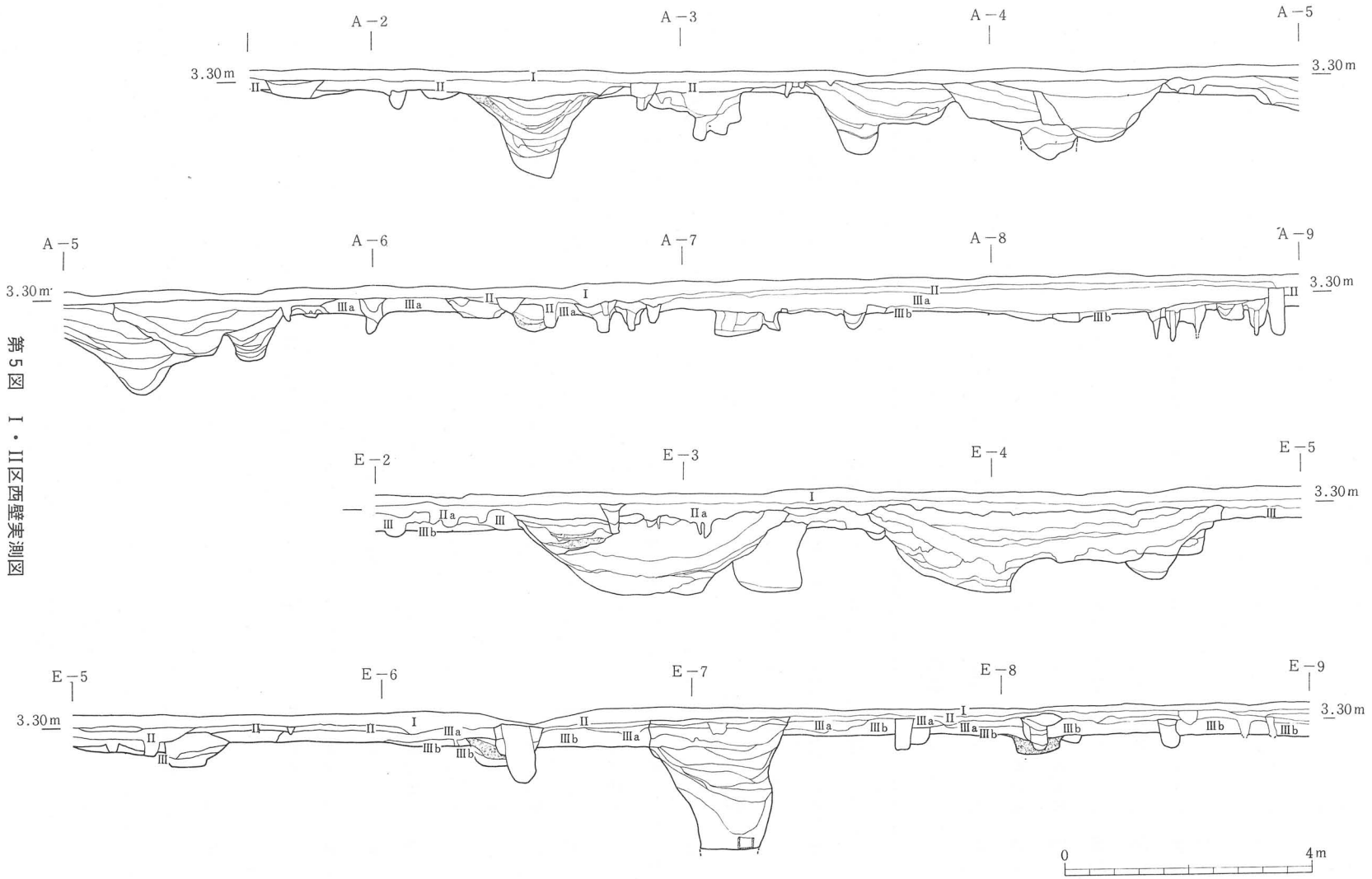
VI層　灰黄褐色砂（10YR5/2）層厚は約15cmである。

VII層　にぶい黄褐色砂質シルト（10YR5/3）層厚は約4cmである。

VIII層　にぶい黄褐色細砂（10YR5/3）層厚は4～8cmである。



第4図　基本層序模式図



第5図　I・II区西壁実測図

IX層　にぶい黄褐色細砂（10ＹＲ5/3）　層厚は約９cmである。Ⅷ層より青くグライ化している。マンガンをわずかに含む。

Ｘ層　褐色砂（10ＹＲ4/6）　層厚は約５cmであり、極部的である。

XI層　にぶい黄褐色砂質シルト（10ＹＲ5/3）　層厚は約14cmである。マンガンを微量に含む。

XII層　にぶい黄褐色砂質シルト（10ＹＲ5/4）　層厚は約５cmである。

XIII層　黄褐色細砂（2.5ＹＲ5/3）　層厚は約８cmである。

XIV層　黄褐色砂質シルト（10ＹＲ5/6）　層厚は約８cmである。

XV層　にぶい黄褐色細砂（10ＹＲ5/3）　層厚は約６cmである。

XVI層　にぶい黄褐色砂質シルト（10ＹＲ5/4）

このうちXIV層以下の各層は湧水があり、本遺跡の井戸跡等に供給していたものと考えられる。

昭和54年度調査との対比は極めて困難である。前回の調査ではII層としたものがさらに３層に細分され、これらはいずれも、黒褐色～黒色のシルトである。今回の調査では確認できない。また、前回の調査のIII層（地山）は今回のIV層である。

２．III　　区

III区はＥトレンチセクションを使用した。III区は前述のＩ・II区と異なり、内堀と外堀のほぼ中間に位置する。III区では、宅地造成に先立って盛土（約30cm）がなされている。

Ｉ層　灰黄褐色シルト（10ＹＲ5/2）　層厚は約23cmである。炭化物を含む。

II層　にぶい黄褐色シルト（10ＹＲ5/3）　層厚は約13cmである。炭化物を含む。

III層　黒色シルト（10ＹＲ2/1）　層厚は約７cmである。本層は極部的にみられるものである。黄褐色土ブロック（５～７cm）を多く含む。

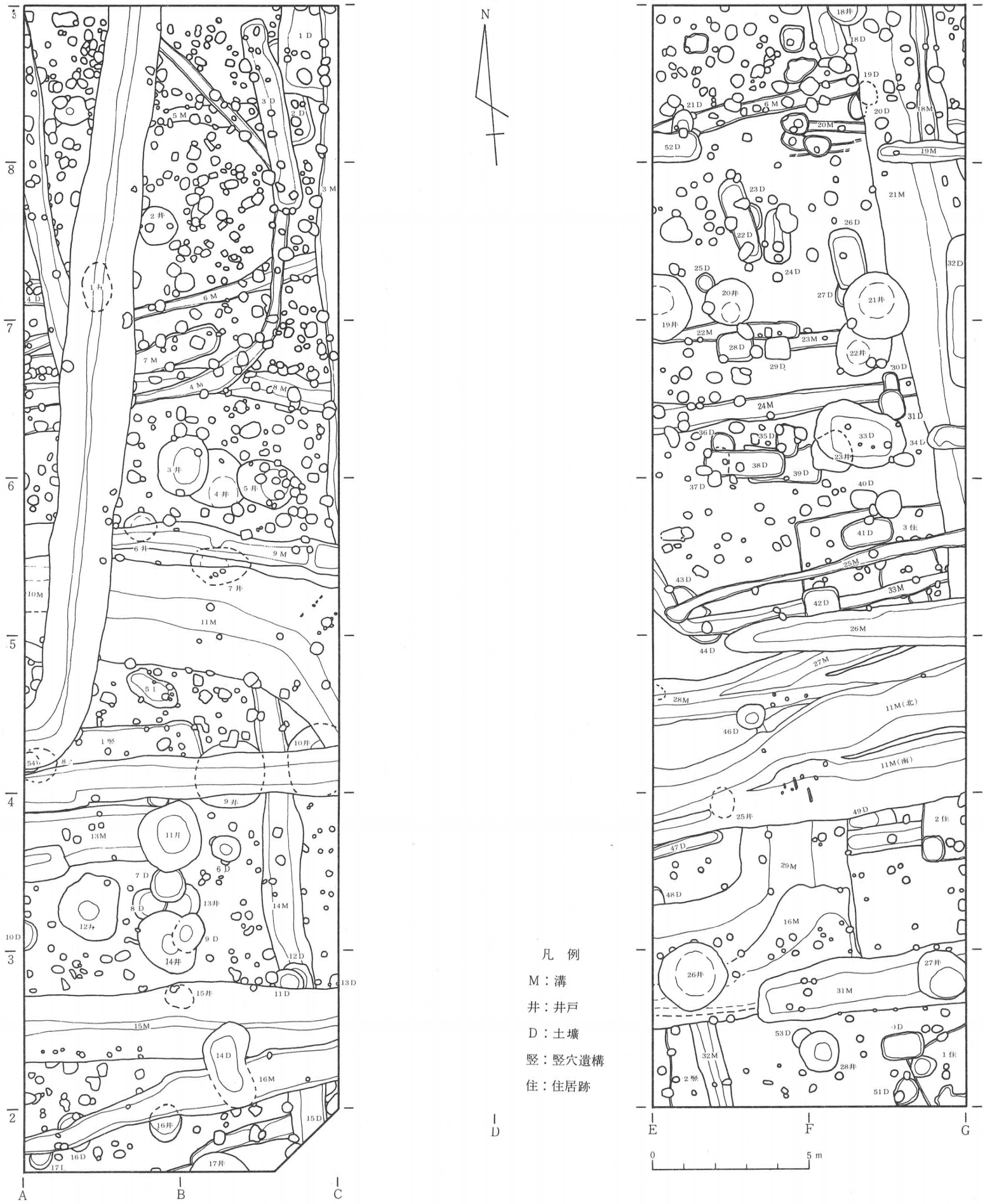
IV層　黒色シルト（10ＹＲ2/1）　層厚は約42cmである。黄褐色土ブロック(1～2cm)多く含む。

Ｖ層　黒褐色粘土（2.5ＹＲ3/2）　層厚は約17cmである。

VI層　黒褐色粘土（2.5ＹＲ3/1）　層厚は約18cmである。

VII層　褐灰色粘土（10ＹＲ4/1）　層厚は約７cmである。

これらの層群はＩ・II区の層と大きく異なる。いずれも含水率が高い。比較的古い時期から水田等に利用されていたのかもしれない。III区より検出された江戸時代半ば以後の井戸跡は、III層上面より掘り込まれている。層位的にみて、Ｅトレンチで最も古いと考えられる４号溝（中世？）はIX層上面より掘り込まれている。したがって、４号溝が構築される時期には、Ｉ・II区の生活面とは１ｍ前後の落差が存在していたことになる。III区は少なくとも中世には後背湿地として、Ｉ・II区は自然堤防上に存在すると理解されよう。また、落差が明瞭であったことは、館の占地に際して立地条件（自然堤防）を容易に選定できたものと考えられよう。



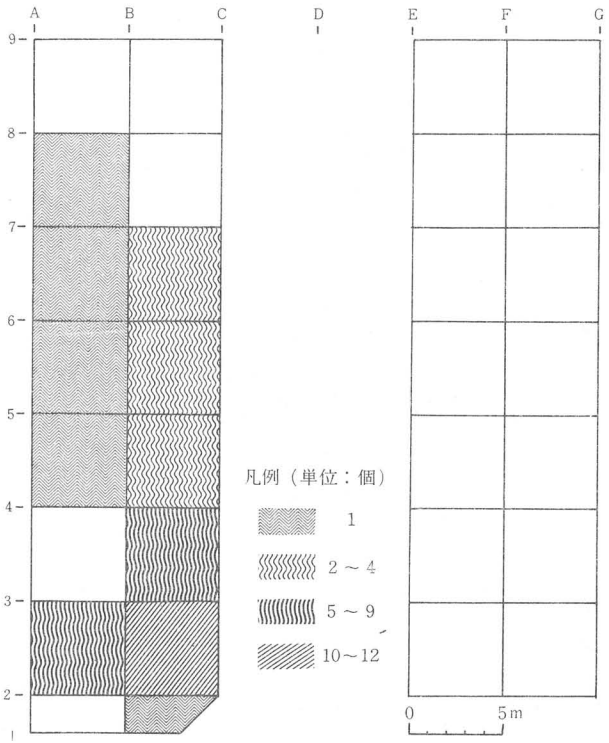
第6図　Ⅰ・Ⅱ区遺構配置図

第Ⅲ章　検出した遺構と遺物

Ⅰ．縄文時代（第８・16図）

縄文時代に属する遺構は、今回の調査では検出できなかった。しかし、土器は予想以上に多く破片総数48点が出土し、第７図のごとくすべてⅠ区から出土している。特にⅠ区でも南側に片寄る傾向がみられ、さらに、南側や西側に展開するものと考えられる。

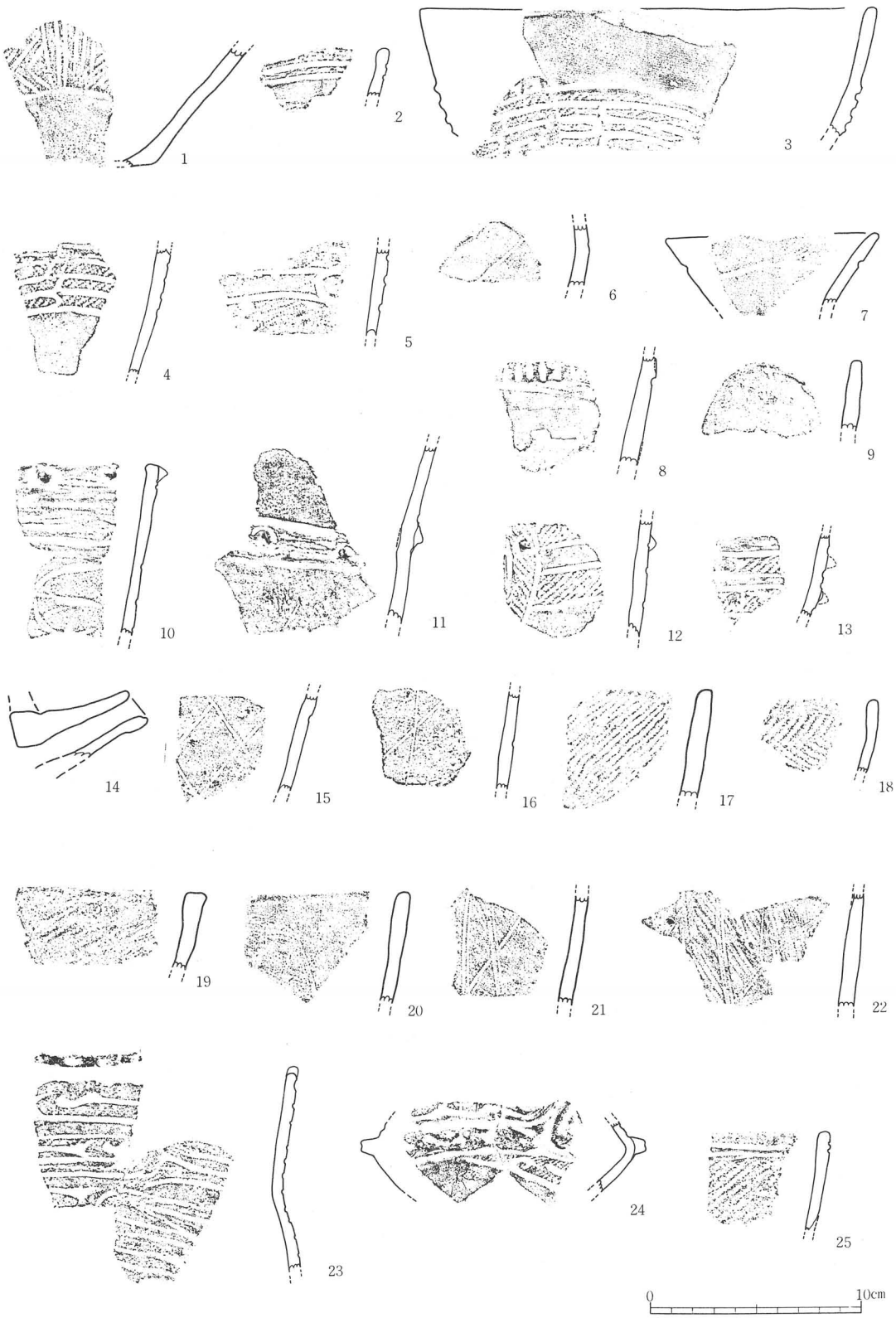
１は後期前葉の宮戸Ⅰ式に比定されるものであろう。今回の調査では最も古い時期の所産である。２～９は、後期中葉の宮戸II_aあるいはII_b式に対応するものである。９は半円形の突起である。10～15は、西ノ浜～宮戸III_a式にかけての所産と考えられる。いわゆる、貼こぶ文系土器群である。16は後期後半と考えられる注口土器である。17～22は、後期中葉から後葉にかけての粗製土器と考えられる。特に20～22は、早期末にみられるのと同様の条痕文を地文とし、さらに、半截竹管による格子状沈線を施文している。23～25は、縄文時代晩期の土器である。23は大洞Ｂ式の深鉢、24は大洞C_1式と考えられる注口土器、25は大洞C_1式と考えられる粗製深鉢である。



第７図　縄文時代土器頻度分布図

石器は小形の尖頭器１点（第16図-1）、スクレイパー１点、二次加工ある剥片４点、剥片２点、砕片２点がある。縄文時代から弥生時代のものと思われる。また、第16図－２は縄文時代の石棒の破片と解したが、中・近世の何らかの石製品の可能性もある。

以上、わずかではあるが、時期的なバラエティーをもって縄文時代の遺物が確認された。本遺跡の場合は、遺構がまったく検出されなかったことや遺物の出土量が少ないことから、集落等は予想しにくいが、周辺に存在するであろう集落の領域の中に、今泉周辺が組み込まれていたことは、ほぼ間違いのないところであろう。



第8図　Ⅰ・Ⅱ区出土縄文土器

第Ⅰ表　Ⅰ・Ⅱ区出土縄文土器観察表

図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	部位	時期	文様	備考	拓本実測(断面)
1	A－3	11号井戸	埋土下部	195	底部	後期(宮戸Ⅰ)	多条沈線	胎土に白い針状のもの含む。	10
2	B－2	15号溝	2層	251	口縁部	後期(宮戸Ⅱ)	平行沈線		21－①
3	A－3、4	12号溝	埋土	288	〃	〃	口縁部無文帯(ミガキ)、磨消縄文(LR)＋楕円沈線文		15
4	A－3	13号溝	埋土上層	703	胴部	後期(宮戸Ⅲ)	磨消縄文(LR)＋楕円沈線文	胎土に白い針状のもの含む。	7
5	B－4	9号井戸	5層	674	〃	後期(宮戸Ⅱ)	縄文(LR)＋楕円沈線文		30
6	A－7	4号土壙	埋土	493	〃	〃	磨消縄文		19
7	B－5	11号溝	2層	306	口縁部	後期(宮戸Ⅱ)	縄文(LR)＋沈線		31
8	A－3	9号土壙	4層	910	口縁部付近	後期(宮戸$Ⅲ_a$)	沈線＋隆帯＋刻み目		26
9	〃	13号溝	埋土上層	703	口縁突起部	後期(宮戸Ⅱ)			6
10	〃	12号井戸	埋土	392	口縁部	後期(宮戸$Ⅲ_a$)	入組文＋沈線文、貼瘤		9
11	A－2	15号溝	2層	170	胴部	〃	沈線文＋貼瘤、網目状沈線		1
12	A－6	1号溝	埋土	164	〃	〃	充填縄文(LR)＋沈線文＋瘤		18
13	B－5(ライン上)		Ⅳ層上面(地山)	502	〃	〃	充填縄文(LR)＋平行沈線縄文＋貼瘤	瘤は剝落。	33
14	B－1	17号井戸	埋土	161	注口部	後期	無文		40
15	A－5	1号溝	(西壁)	155	胴部	後期(宮戸$Ⅲ_a$)	網目状沈線文		17
16	A－2		Ⅳ層上面(地山)	683	〃	〃	網目状沈線文		5
17	B－4	9号井戸	埋土	675	口縁部	後期(宮戸Ⅱ)	縄文(LR)	胎土に白い針状のもの含む。	29
18	B－2	15号溝	1層	296	〃	後期	羽状縄文(LR、RL)		22－②
19	A－3	8号土壙	埋土	543	〃	〃	縄文(LR)		8
20	B－2	15号溝	1層	296	〃	〃	条痕文＋網目状沈線文(竹管)		22－①
21	〃	〃	埋土	832	胴部	〃	〃	№918(B－2 12号土壙埋土)と接合	38
22	B－2	15号溝	1層	296	〃	〃	〃	胎土に白い針状のもの含む。	22－③
23	B－3		Ⅳ層上面(地山)	737	口縁部	晩期(大洞B)	突起、磨消縄文、三叉文		28
24	F－4、5	26号溝	1層	457	胴部	晩期(大洞C_1)	磨消縄文(隆帯＋沈線)		36
25	A－2	15号溝	埋土	162－1	口縁部	〃	平行沈線、縄文(LR)		2

2．弥生時代（第10・11・16図）

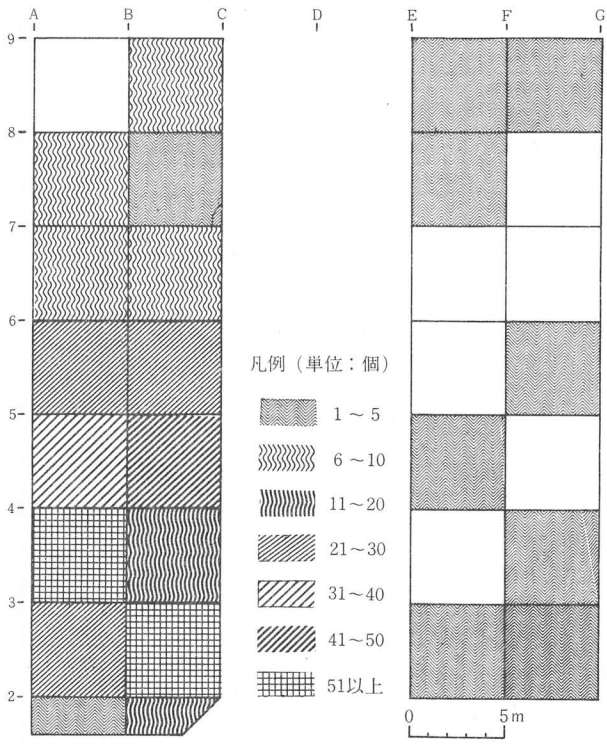
弥生時代に属する遺構は、今回の調査では検出できなかった。わずかに、いくつかのピットにそれらしき可能性を持つものがあるが、断定するに至っていない。また、79年度の調査では土壙が1基確認されている。

ところで、第9図をみると、先の縄文土器と類似した分布状況を示し、Ⅰ区南側に集中する傾向が認められる。また、縄文土器と異なって、Ⅱ区でも出土しており、分布域が広がっていることがわかる。

出土総数は516点で、その内訳はⅠ区320片、Ⅱ区192片、表採4片である。このうち、粗製土器には縄文時代のものと区別のつかないものもが存在する可能性がある。

1は本遺跡の出土品中、最も大型の壺形土器である。頸部外面はていねいなミガキ、また、肩部内面は、輪積痕を消すように粗いミガキがそれぞれ施されている。2はやはり壺形土器である。底部付近にはおよそ横位方向のミガキ、内面には粗いミガキが施されている。胴部最大径の部分に、炭化物の付着が認められる。3は口縁部下に、連続刺突文を施文する甕形土器である。

4～8・9～12は、甕あるいは壺の底部である。ただし、6・9は縄文土器の可能性もある。



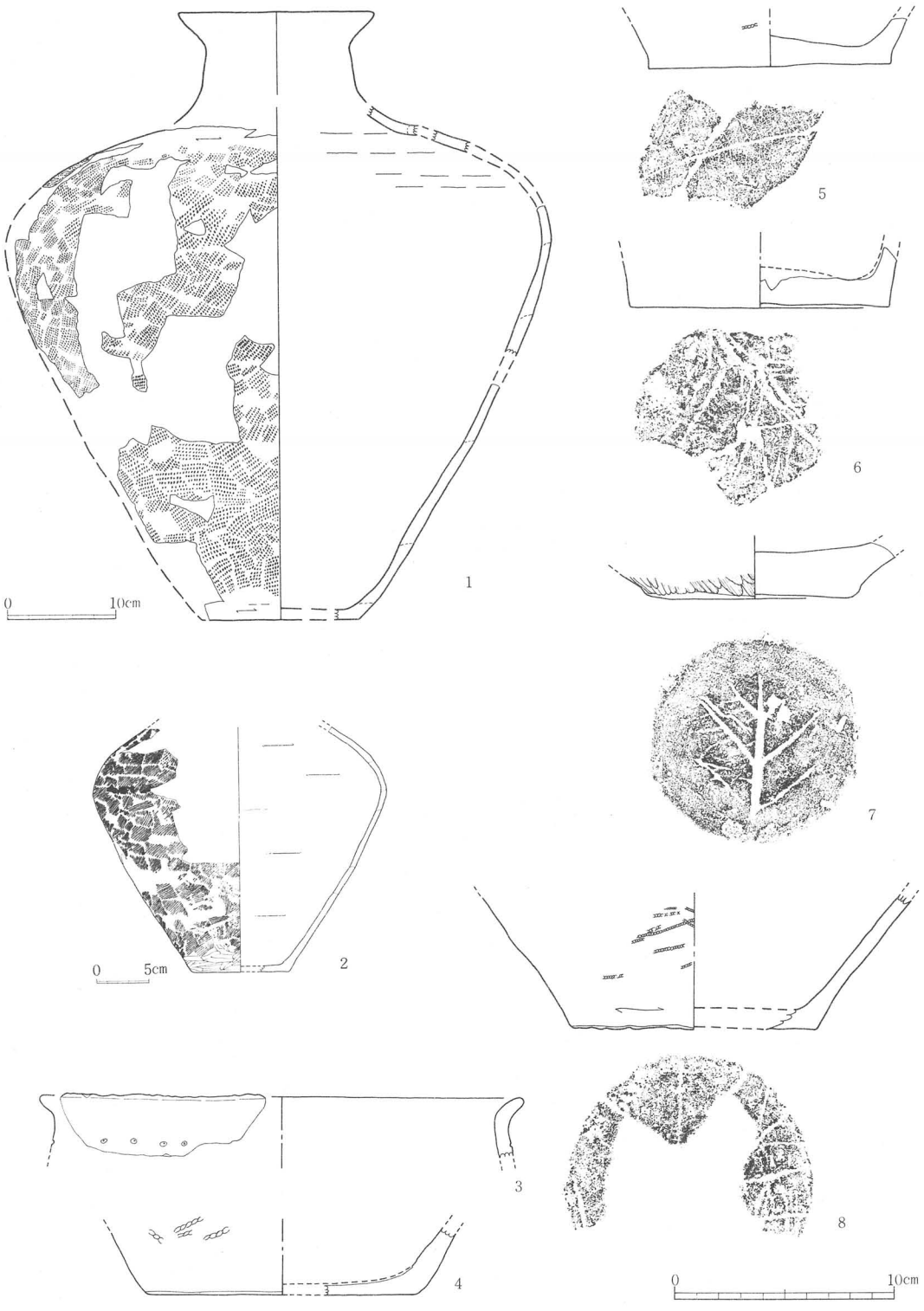
第９図　弥生時代土器頻度分布図

13は、口縁部が「く」字状を呈する大型の甕形土器である。頸部は無文帯となり、ミガキが施されている。14は口縁部に細かい刻み目、口縁部下に刺突文を施文する甕形土器である。15～17は桝形囲式の特徴である口縁部下の連続刺突文を施文する甕形土器である。15は口唇部に単節縄文、また、16は胴部に擬似縄文を施文している。18は磨消縄文を施文する甕形土器であろう。19・20は沈線による渦巻文を施文する壺形土器である。21は小型の鉢形土器と考えられるが、蓋の可能性もある。22･23は細かい充填縄文によるもので、同一個体と考えられる壺形土器である。24は地文に擬似縄文を施文し、沈線によって変形工字文を表現したものと考えられる。また、内面は黒色を呈し、平滑なミガキを行なっていることから、鉢形土器と考えられる。25は磨消縄文を施文する鉢形土器であろうか。26は変形工字文を施文し、内面は黒色を呈し、平滑なミガキが施された鉢形土器である。

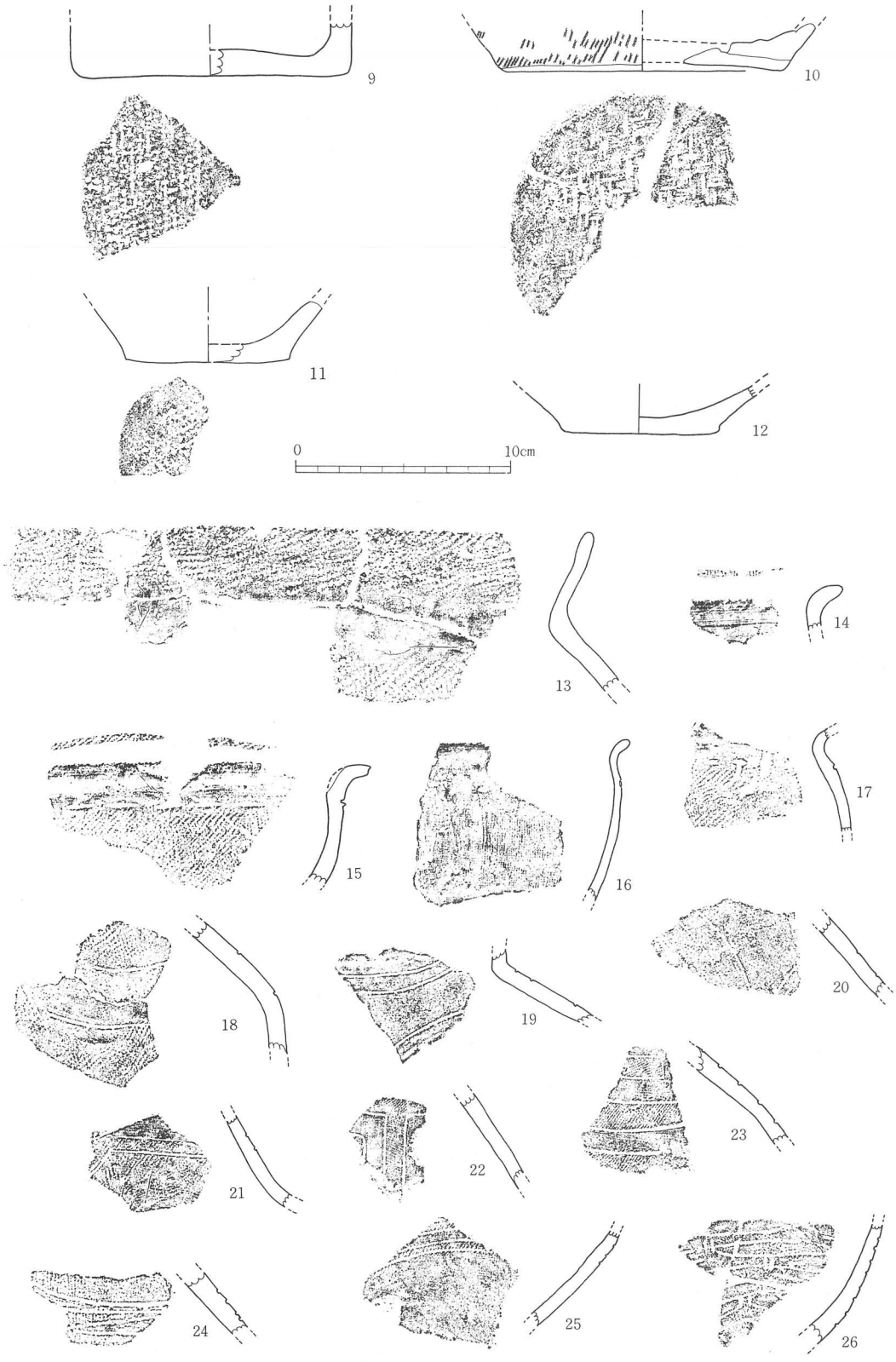
石器は石包丁５点（第16図３～７）、太型蛤刃石斧１点（第17図12）が出土している。前者はいずれも両面穿孔で、４はペッキングによる荒々しい穿孔痕が残され、かつ刃部が薄くなっていない。後者は県内のものとしては、かなり大きいものである。

以上、主要なものについて紹介してきたが、他には縄文施文のみのものや細片の土器が多く図示しえないものが大半である。今回出土した土器群のうち、時期の判定できるものは、中期の桝形囲式期のものであり、ほぼ単一時期としてよいであろう。また、粗製壺形土器等、時期の不明な胴部・底部の破片なども、およそこの時期としてよいであろう。

ところで、比較的多くの土器片を得ることができたが、遺構は弥生時代と認定できるものが皆無であった。79年度調査時に検出した土壙を考慮しても、十分に遺跡の性格を理解できない現状である。ただ、第10図１・２の壺は、底部破片が検出できなかったことや、第10図７は丹塗りの壺（？）であることなどから、遺跡の性格を知る手がかりになりうるかもしれない。



第10図　Ⅰ・Ⅱ区出土弥生土器(1)　　1は1/6　2は1/4



第11図　Ⅰ・Ⅱ区出土弥生土器(2)

第２表　Ⅰ・Ⅱ区出土弥生土器観察表

図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器種	部位	時期	文様	備考	拓本番号
1	Ｂ－２	15号溝	Ⅱ層	275	壺	頸～底部	桝形囲	縄文(ＬＲ)	肩部内面ミガキ,胎土に白い針状のもの含む。	
2	Ｂ－３東壁		Ⅱ～Ⅳ層	812	〃	肩～底部	〃	縄文(ＬＲ)	内面粗いミガキ,胎土に白い針状のもの含む。	
3	Ｂ－７		Ⅲ層	444	甕	口縁部	〃	刺突		29
4	Ａ－４	1号溝西の土壙	埋土下部	922	甕又は壺	底部	桝形囲？	縄文(ＬＲ)、木葉痕	胎土に白い針状のもの含む,石英を多量に含む。	13
5	Ａ－３	13号溝	最下層	705	〃	〃	〃	縄文(ＬＲ)、木葉痕	胎土に白い針状のもの含む。	4
6	Ｆ－２	29号溝	1層	833	〃	〃	〃	木葉痕	縄文の可能性も有る。	110
7	Ｂ－８	1号土壙		886	甕	〃	〃	木葉痕	外面丹塗り。	32
8	Ｂ－４	12号溝	埋土上部	311	〃	〃	〃	縄文(ＬＲ)、木葉痕	No638（Ｂ－４　10号井戸）と接合。	38
9	Ａ－３	11号井戸	埋土下部	174	甕又は壺	〃	〃	網代痕	縄文の可能性も有り。	9
10	〃	〃		150	〃	〃	〃	網代痕、燃系Ｒ	縄文の可能性も有り。胎土に白い針状のもの含む。	6
11	Ａ－３	14号井戸		898	〃	〃	〃	網代痕		11
12	Ｂ－４	11号溝	底	855	〃	〃	〃			24
13	〃	〃	〃	312	甕	口縁部	桝形囲	縄文(ＬＲ)、頸部無文帯	No922と接合、内面ミガキ。	
14	Ｂ－２		Ⅱ層	1011	〃	〃	〃	口唇部連続刻み目、刺突文	内面ミガキ。	35
15	Ｅ－７	20号井戸	上層	903	〃	〃	〃	口唇部,縄文(ＬＲ),縄文(ＬＲ)＋刺突	内面ミガキ。胎土に白い針状のもの含む。	33
16	Ａ－２	15号井戸	1層	914	〃	〃	〃	擬似縄文	内面ミガキ。	36
17	Ｂ－２	15号溝	Ⅱ層	271	〃	胴部	〃	縄文(ＬＲ)＋刺突		18
18	Ａ－１	17号土壙	埋土	550	壺	〃	〃	磨消縄文(ＬＲ)＋沈線文	内面ミガキ。胎土に白い針状のもの含む。	1
19	Ａ－５	11号溝	1層	362	〃	〃	〃	沈線文	胎土に白い針状のもの含む,底部内面炭化物有り。	14
20	Ⅰ区	〃	1層	859	〃	〃	〃	渦巻文(沈線)		30
21	Ａ－１		Ⅲ層	806	鉢	〃	〃	磨消縄文＋沈線文	蓋の可能性有り。内面ミガキ。	2
22	Ａ－３	11号井戸	埋土	183	壺	〃	〃	充填縄文(ＬＲ)	胎土に白い針状のもの含む。	8
23	Ｂ－６		Ⅲ層	424	〃	〃	〃	充填縄文(ＬＲ)	〃	28
24	Ｂ－３		Ⅱ層	838	鉢	〃	〃	擬似縄文＋変形工字文	内面ミガキ。胎土に白い針状のもの含む。	20
25	Ａ－７	4号土壙	埋土	493	鉢？	〃	〃	磨消縄文＋沈線文	胎土に白い針状のもの含む。	15
26	Ｂ－２東壁セクション		Ⅲ層	862	鉢	〃	〃	変形工字文	内面ミガキ,胎土に白い針状のもの含む。	17

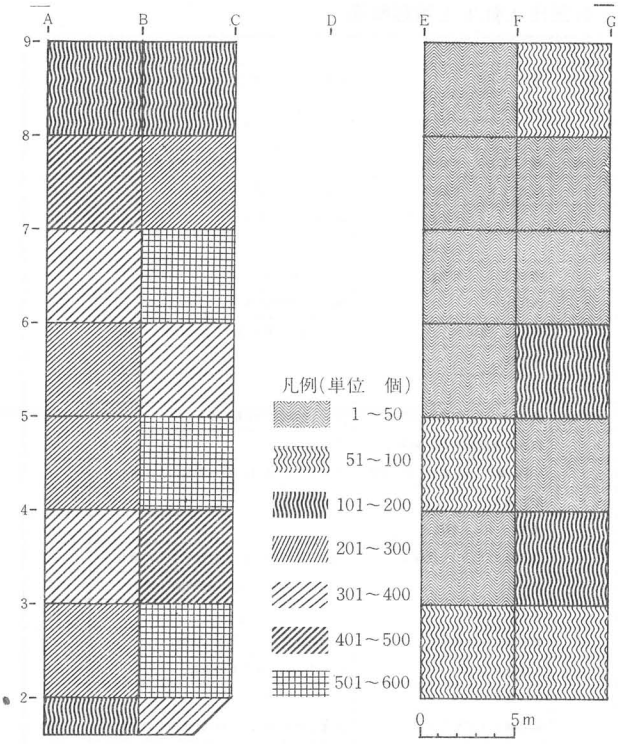
３．古墳時代（第13、14、15図）

古墳時代に属する遺構は、検出することができなかった。ここでも、弥生時代同様、いくつかのピットにその可能性のあるものが存在するが、やはり断定するに至っていない。土器は多量に出土し、Ⅰ区で5,425点、Ⅱ区で1,055点、破片総数6,480点に達している。遺物の分布は、第12図に示すごとくであるが、Ⅱ区からの出土が増加し、Ⅰ区の南側に多く出土する傾向は残っているものの、弥生時代と異なって集中区が分散する傾向が認められよう。この傾向は、当然平安時代以後の遺構による攪乱を考慮しなければならないが、しかし、明らかに弥生時代とは異なった分布である。ただ、集中区が分散する傾向は、この時期の遺構が不明である点で、どのように理解してよいのであろう

さて、土器について概観してみると、塩釜式と南小泉式が混在し、また、実測可能な土器はわずかであった。この他に、６世紀代と考えられる須恵器坏（身）、栗囲式あるいは国分寺下層式と考られる坏体部破片がそれぞれ１点ずつ出土している。

甕

第13図１～10は、刷毛目を特徴とする甕形土器である。２は極めて特徴的で、口縁部の輪積み成形後の指頭痕がそのまま残り、内面にはていねいな刷毛目が施されている。４は頸部以下



第12図　古墳時代土器頻度分布図

がケズリに近いナデ（ナデツケ）が施され、口縁部は外面がほぼ無調整であり、内面は粗いナデである。7は一応図示したが、長胴甕のようになってしまい、本来は口縁部がもう少し開く器形とも考えられるが明確ではない。8は内外面ともに器面が磨耗し、調整は不明であるが、おそらく刷毛目が施されていたものと思われる。これらは、およそ塩釜式期に属するものと考えられるが、7は南小泉式期かあるいはそれよりも後出のものであろうか。10は刷毛目後横ナデを施した甕形土器の口縁部である。口縁部には、工具による押圧が施されている。塩釜式期のものであろう。

台付甕

第13図11～13は、台付甕の脚部である。十分に、その特徴を把めない。

甑

甑の破片は5点出土し、このうち図示し得たものは、第13図14・15の2点だけである。15は外面に刷毛目が残る。

坏

第14図16～19は坏形土器である。16・17は内面にミガキが、18は内面にナデがそれぞれ施されている。19は凹みの底部をもつ坏形土器であろう。内外面いずれもミガキである。時期は明確ではないが、塩釜式あるいは南小泉式期のものと考えられる。

坩

第14図20～22は坩形土器である。20・21は内面はナデで、20の頸部には指頭痕が残る。いずれも外面は磨滅が著しいが、21はわずかにミガキが残る。22は外面が刷毛目後に、ミガキが施されている。内面はミガキが主体を占めるがナデやケズリが混在する。外面は丹塗りである。

時期は明確ではないが塩釜式期と考えられる。

第14図23～33は刷毛目を主体とする壺形土器である。これらは折り返しによる複合口縁と有段口縁によって特徴づけられる。23は従来知られていない有段口縁（２段）をもつ壺と考えられ、内外面ともに平滑なミガキが施されている。24は器台の可能性もあるが、有段の壺形土器と考えられる。29は複合口縁ではないが、折り返し手法によって口縁部が成形される。30は外面丹塗りである。

時期は23～31は塩釜式期、32・34は塩釜式か南小泉式のものであろう。

高坏

第15図34～47は高坏形土器である。34は今回の調査で唯一全体の器形がわかるものである。34～37は高坏の坏部であるが、体部下部に軽い陵線が認められる。また、坏部は直線的に傾斜して立ち上がるものが多いが、35のように弯曲しながら立ち上がり、口縁部が外反するものも存在する。38は唯一、円形透孔をもつ高坏形土器である。39～41は脚部が円錐状に広がるものと考えられる。42・43は脚部が円柱状になると考えられるものである。44～47は脚部が明確に柱状部と裾部が比較的明瞭に区別できるものである。特に47は柱状部にふくらみをもつ唯一のものである。

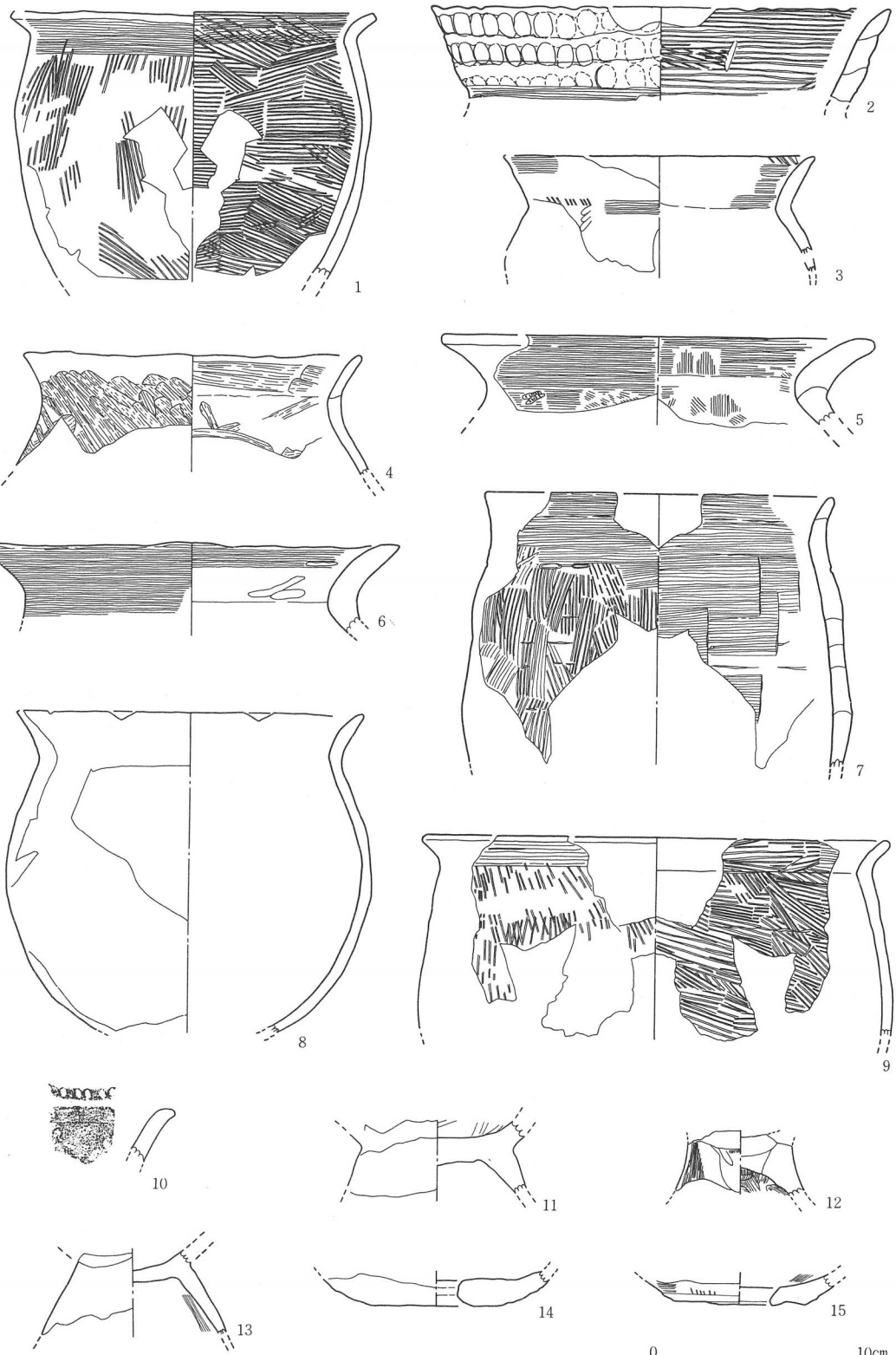
器台

第15図48・49は器台形土器である。48は成形後に脚部に向かって穿孔がなされたものと思われる。49は成形時にすでに穿孔を意識して製作したか、あるいは棒状工具を刺し込んでおいて成形が終了した段階で引き抜いたものと思われる。脚部に透孔が認められる。

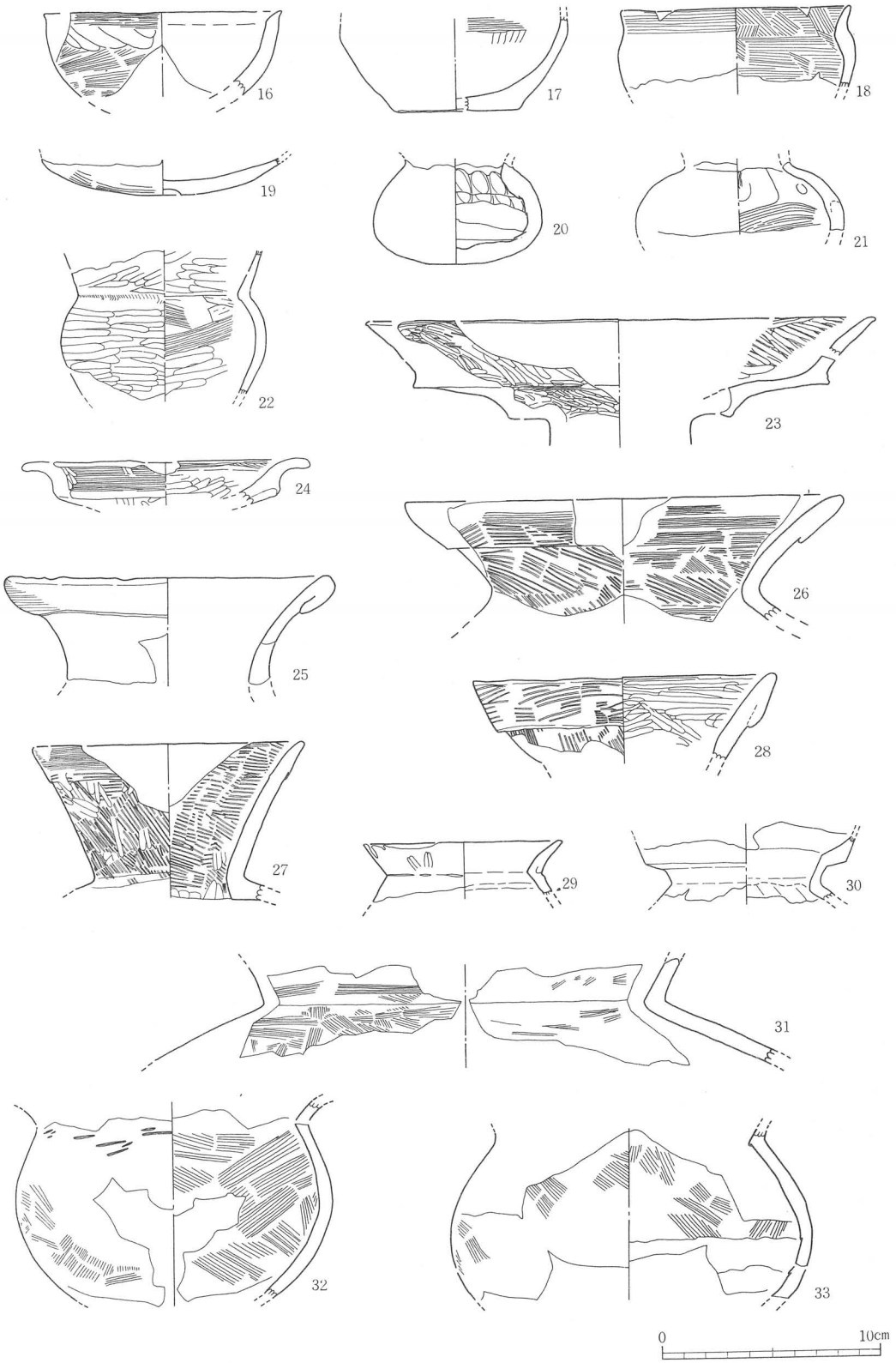
以上各器種ごとに土器を概観したが、これらは主に中世の遺構から出土したものである。また、基本層Ⅲ層より出土したものも、Ⅲ層そのものが古墳時代の包含層に限定できない状況にある。一括遺物もなく、各時期ごとの組成を明らかにすることは困難である。およそ、塩釜式期の後半段階から南小泉式期にかけて推移した土器群であろう。

石製品

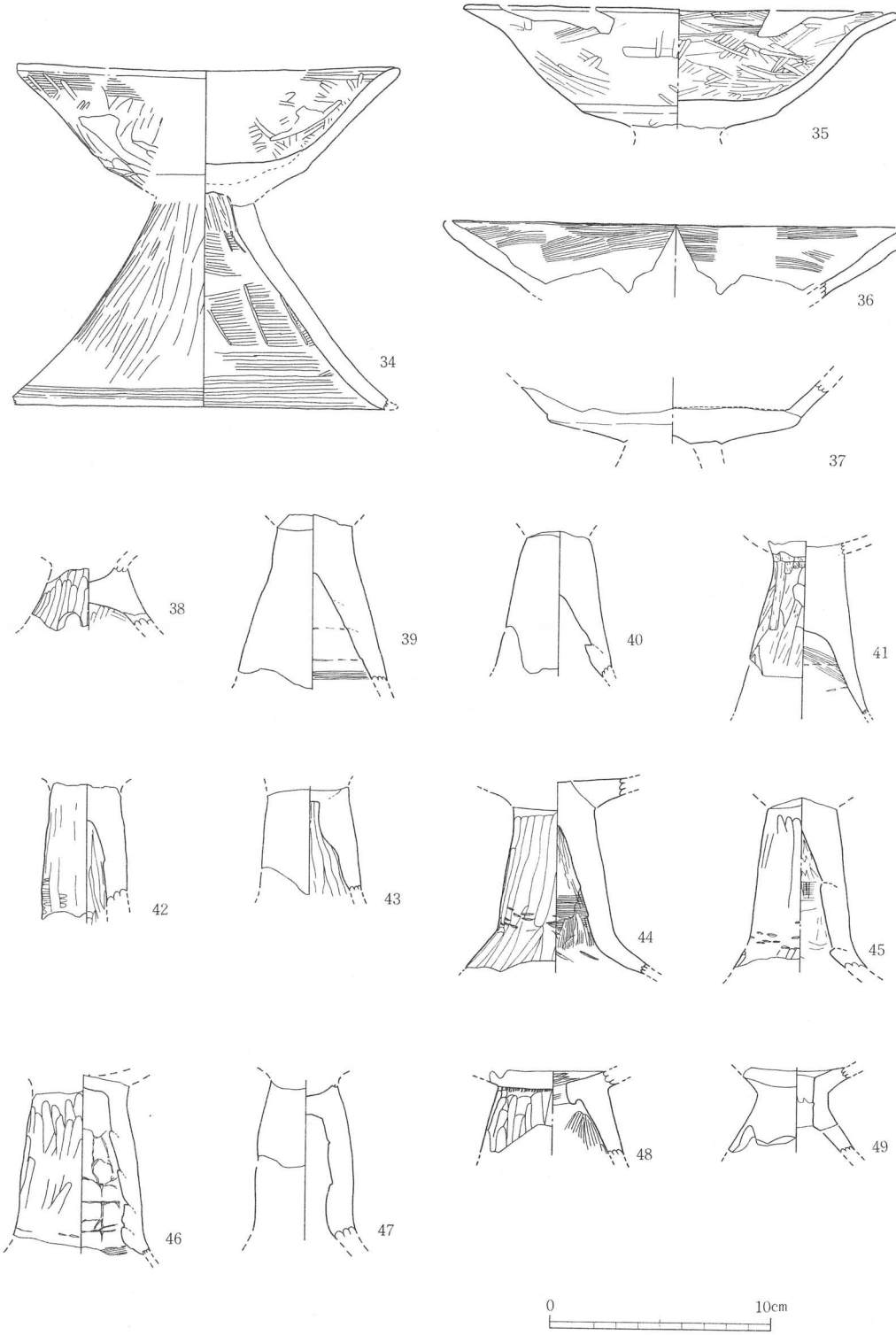
この時代の石製品には、石製模造品３点（第16図８・９・10）、勾玉１点（第16図11）がある。



第13図　Ⅰ・Ⅱ区出土古墳時代の土師器(1)



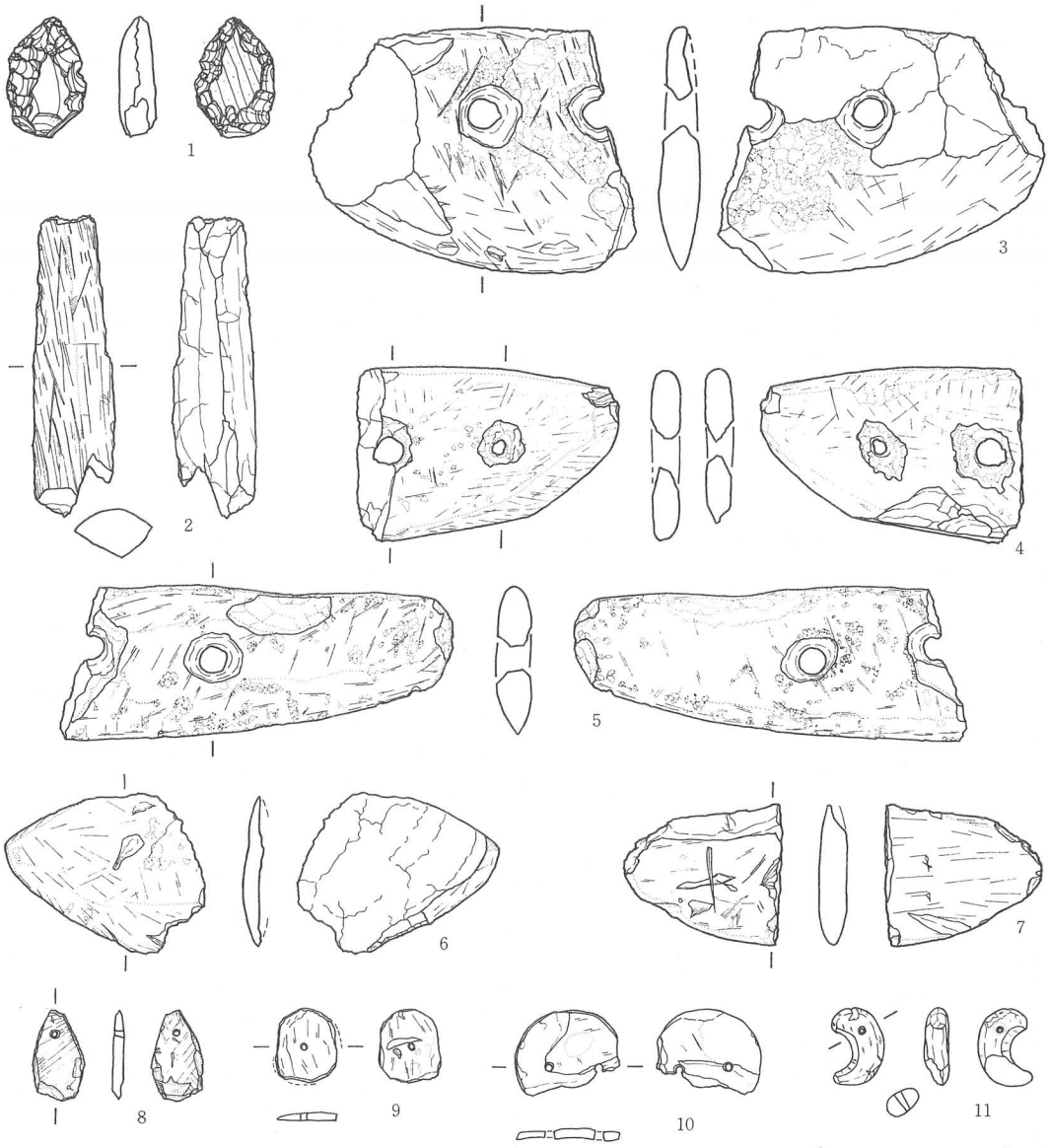
第14図　Ⅰ・Ⅱ区出土古墳時代の土師器(2)



第15図　Ⅰ・Ⅱ区出土古墳時代の土師器(3)

第３表　Ⅰ・Ⅱ区出土土師器(古墳時代)観察表

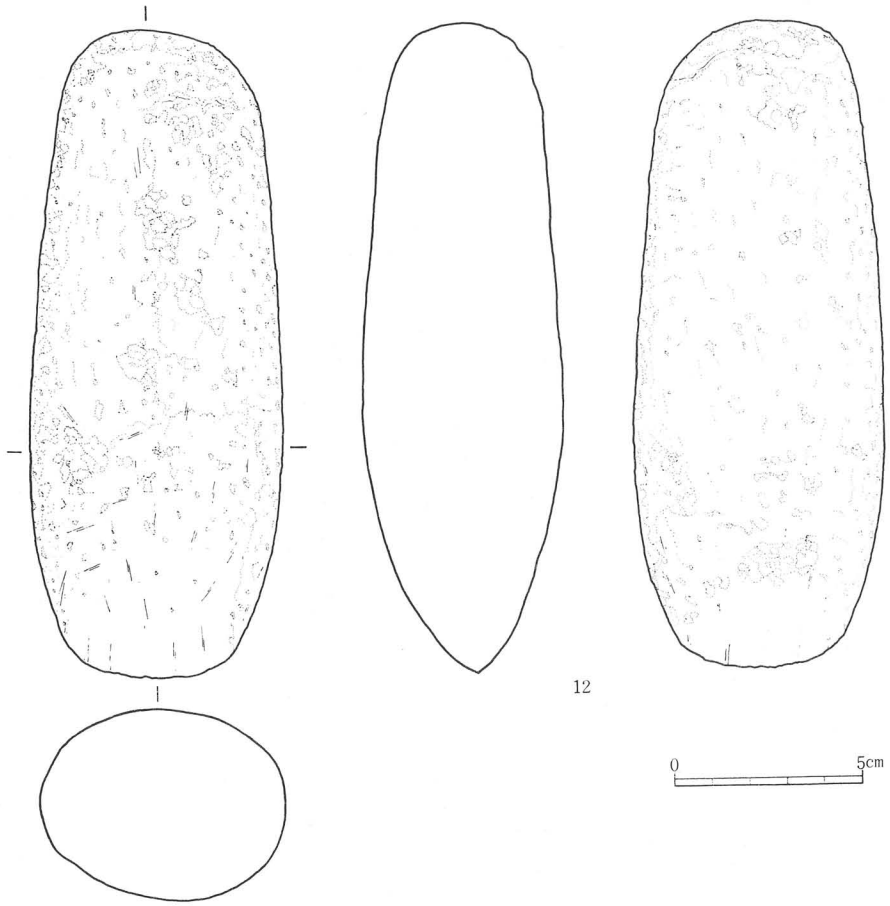
図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	時期	調整 内面	調整 外面	備考	実測番号
第13図1	A－2	ピット	埋土	803	甕	口縁～胴部	塩釜式	口縁部　ヨコナデ、胴部　刷毛目	口縁部　ヨコナデ 胴　部　刷毛目		4
2	A－7	4号土壙	埋土	420	〃	口縁部	〃	刷毛目	ヨコナデ	指頭痕あり	19
3	B－1		Ⅱ層	177	〃	口縁～胴部	〃	口縁部　ヨコナデ 胴　部　刷毛目→ミガキ	ヨコナデ		26
4	B－6		Ⅲ層	453	〃	口縁部	塩釜式？	粗いナデ	粗いナデ		43
5	B－5	7号井戸	埋土	795	〃	〃	〃	口縁部　ヨコナデ 胴　部　ナデ	口縁部　ヨコナデ 胴　部　ナデ		40
6	B－6		Ⅲ層	453	〃	〃	〃	口縁部　ヨコナデ、ミガキ 胴　部　ケズリ	口縁部　ヨコナデ		48
7	〃	3号井戸南	埋土下層	919	〃	口縁～胴部	南小泉式？	口縁部　ヨコナデ 胴　部　ナデ	口縁部　ヨコナデ 胴　部　刷毛目		45
8	B－7		Ⅲ層	480	〃	〃	塩釜式？	磨滅の為不明	磨滅のため不明		53
9	E－2	32号溝	埋土	763	〃	〃	塩釜式	口縁部　ヨコナデ 胴　部　刷毛目	口縁部 ヨコナデ 胴部 刷毛		104
10	A－7	2号井戸		600	〃	口縁部	〃	刷毛目→ヨコナデ	ヨコナデ		－
11	B－3	13号井戸	グライ層（9層）	740	古付甕	脚　部	〃	甕　底部　ミガキ	脚部　ナデ　ミガキ		32
12	B－4		Ⅱ層	194	〃	〃	〃	脚部　ナデ	脚部　刷毛目		37
13	Ⅰ　区		表採		〃	〃	〃	脚部　ナデ	脚部　磨滅のため不明		59
14	A－1・2	16号溝	埋土	68	甑	底　部	塩釜又は南小泉			胎土に白い針状のもの含む	2
15	E－4	11号溝	底	845	〃	〃	〃	ナデ	ヨコナデ　刷毛目		107
第14図16	B－5	7号井戸	最下層（12層）	705	坏	口縁～胴部	南小泉式	ミガキ	口縁部　ヨコナデ 胴　部　ミガキ、ナデ	胎土に白い針状のもの含む	41
17	B－8		Ⅱ層	180	〃	胴部～底部	〃	ミガキ→ナデ	磨滅の為不明		55
18	E－2		Ⅲ層	763	〃	口縁部	〃	ヨコナデ→ナデ	ヨコナデ	胎土に白い針状のもの含む	105
19	A－1		Ⅱ層	517	〃	胴部～底部	〃	ミガキ	ミガキ		57
20	B－6		Ⅲ層	1064	壺	〃	塩釜式	磨滅のため不明	磨滅のため不明	胎土に白い針状のもの含む 指頭痕あり	50
21	B－5	8ピット	埋土	227	〃	胴　部	〃	ナデ	ミガキ（磨滅）		67
22	A－7	1号溝	1層	217	〃	〃	南小泉式	刷毛目→ミガキ	ミガキ　頸部以下 ミガキ ケズリ→ナデ	胎土に白い針状のもの含む 丹塗り	14
23	B－1		Ⅱ層	177	壺	口縁部	塩釜式	刷毛目→ミガキ	刷毛目→ミガキ	有段口縁	23
24	B－5	11号溝	Ⅱ層	307	〃	〃	〃	ナデ　ミガキ	ナデ、ミガキ	〃	39
25	A－7	4号土壙北側ピット	埋土	640	〃	〃	〃	ミガキ　ナデ	ミガキ、ナデ	複合口縁	18
26	B－4	11号溝	Ⅱ層	365	〃	〃	〃	ナデ、刷毛目、ケズリ	刷毛目、ナデ	〃	34
27	B－1		Ⅱ層	177	〃	〃	〃	ナデ、ミガキ、刷毛目	ミガキ、刷毛目	胎土に白い針状のもの含む 複合口縁	27
28	A－7	1号溝	1層	216	〃	〃	〃	刷毛目→ナデ	刷毛目		16
29	A－2	16号溝	埋土下層（4～7層）	149	〃	〃	〃	ミガキ	ミガキ		3
30	B－3	14号溝	埋土	404	〃	〃	〃	ミガキ	ミガキ	有段口縁、丹塗り	31
31	B－4	9号井戸	埋土下層（6～10層）	305	〃	胴　部	〃	ナデ	ナデ	胎土に白い針状のもの含む	36
32	A－5	1号溝	Ⅱ層	256	〃	〃	南小泉式？	ナデ	ナデ		13
33	B－5	7号井戸	埋　土	795	〃	〃	〃	ナデ	ナデ	胎土に白い針状のもの含む	42
第15図34	A－7		Ⅲ層	460	高坏		塩釜式	坏部　ヨコナデ→ミガキ 胴部　ヘラナデ、ヨコナデ	坏部　ヨコナデ→ミガキ 脚部　ミガキ、ヨコナデ	胎土に白い針状のもの含む	57
35	B－8		Ⅲ層	446	〃	坏　部	〃	ヨコナデ→ミガキ	ナデ→ミガキ	胎土に白い針状のもの含む	56
36	B－5	7号井戸	埋土	795	〃	坏　部（口縁部）	塩釜式？	ナデ	ナデ		85
37	B－7	6号溝	埋土	804	〃	坏　部（胴部）	〃	磨滅のため不明	ミガキ		52
38	A－4	1号溝	1層	104	〃	脚　部	塩釜式	ミガキ	ケズリ→粗いケズリ	透孔3コあり	10
39	A－1	16号井戸	埋土	779	〃	〃	塩釜式？	ケズリ	ケズリ→ミガキ	内面　シボリ目あり	1
40	A－3	12号井戸	埋土	620	〃	〃	〃		ミガキ	内面　シボリ目あり	6
41	B－5	11号溝	埋土	485	〃	〃	塩釜式	ナデ	ケズリ		38
42	B－6	5号井戸	埋土	798	〃	〃	南小泉式		ケズリ→ミガキ	内面　シボリ目あり	47
43	B－4	11号溝	底	334	〃	〃	〃		ミガキ	内面　シボリ目あり	35
44	A－4	5号土壙	埋土	470	〃	〃	〃	ヨコナデ、ナデ	ミガキ	胎土に白い針状のもの含む	13
45	B－6	8号溝	埋土上層	949	〃	〃	〃	ヨコナデ	ナデ	胎土に白い針状のもの含む	44
46	F－4	11号溝	底	699	〃	〃	〃	オサエ	ミガキ		114
47	E－3	29号溝	1層	882	〃	〃	〃		磨滅のため不明	内面　シボリ目あり	106
48	A－8		Ⅲ層	401	器台	〃	塩釜式	ミガキ、ナデ	ミガキ、ナデ	胎土に白い針状のもの含む	22
49	A－7	1号溝	埋土	1068	〃	〃	〃	ミガキ	ヨコナデ、ミガキ	透孔3コあり	15



No.	種類	地区	遺構	層位	長	幅	厚	重量	石質
1	尖頭器	表採	—	—	32.3	21.2	12.4	6.3	チャート
2	石棒？	B－5	11号溝	1層					ホルンフェルス
3	石包丁	F－2	27号井戸	1層			(10.9)		粗粒砂岩
4	〃	F－8	21号溝	2層			(8.8)		砂岩
5	〃	B－6	4号井戸	5層			(10.4)		シスト
6	〃	F－2	31号溝	—					粗粒砂岩
7	〃	A－3	13号溝	上部			(7.6)		砂岩
8	石製模造品	〃	12号井戸	1層	(24.8)	13.7	3.1	(1.7)	スレート
9	〃	E－3	11号溝	2・3層	(20.2)	(16.8)	(2.6)	(1.2)	〃
10	〃	—	8号溝	火山灰層下の茶褐色土			(3.0)		細粒砂岩
11	勾玉	E－2	26号井戸	確認面	19.9	8.0	6.5	(2.1)	不明

( ) 内は若干破損しているもの

第16図　古墳時代以前の石器(1)



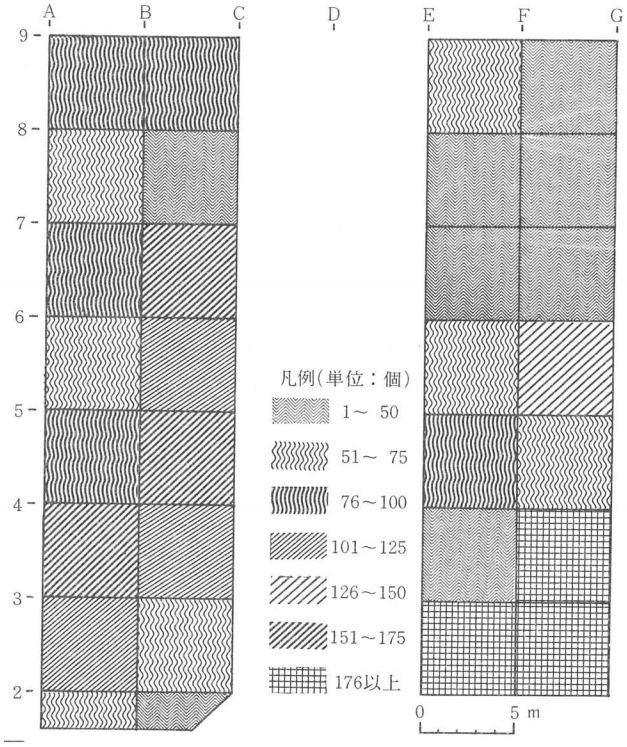
No.	種　　類	地　区	遺　構	層位	長	幅	厚	重量	石　質
12	太型蛤刃石斧	A－1	16号溝	2層	172.1	65.8	53.9	984	安山岩

第17図　古墳時代以前の石器(2)

4．平安時代の遺構と遺物

ここでは平安時代の遺構を扱うが、Ⅰ期（後述）に属する遺構のうち、3号住居跡、25号井戸跡は、便宜上ここで扱うことにする。また、遺物のうち平安時代末期の渥美・常滑などの陶器は、中世の「日本製陶器」において扱い、ここでは、古代の灰釉・緑釉陶器を扱うことにした。

平安時代の遺構には、竪穴住居跡・溝・井戸跡・土壙がある。また、平安時代に属すると考えられるピットが存在するが、そのうちのいくつかは柱穴と考えられる。しかし、建物跡として組むかどうかは、全く不明である。



第18図　平安時代土器頻度分布図

住居跡

1号住居跡（第19図）

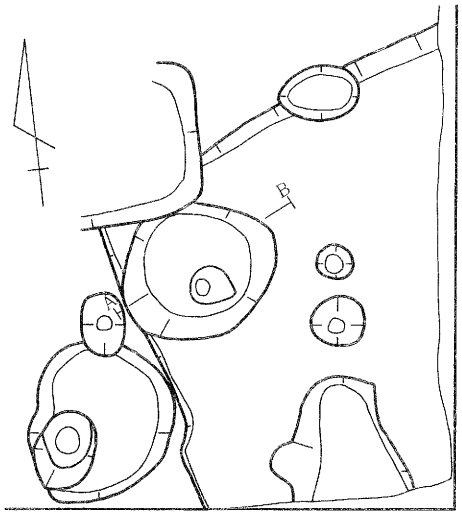
Ⅱ区の南端Ｆ－２区に位置し、Ⅳ層上面で確認された住居跡である。この住居跡は、北西コーナー付近約¼が確認できた。北西コーナーは50号土壙に切られ、51号土壙が西側で接している。北壁約2.1ｍ、西壁1.65ｍまで計測できるが、全体の規模は不明である。壁高は最大９cmである。埋土は２層で構成される。北西コーナーには楕円形の貯蔵穴(86×70cm、深さ30.5cm)が、また、南側には不定形の土壙がある。貯蔵穴の南東に柱穴１個(直径約28cm、深さ28.5cm)が検出された。カマドは検出できない。

出土遺物（第19図１～７、第20図１～４）

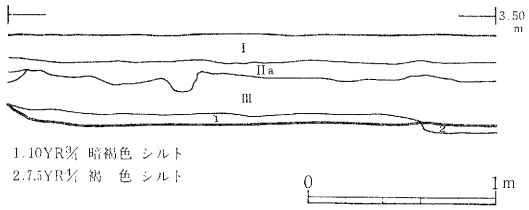
出土土器総数は、竪穴住居跡中最も多く、復元土器と破片合わせて96点出土している。その内訳は土師器坏63点（内黒45点、赤焼18点）、土師器甕31点、灰白色（半環元）の須恵器坏22点が出土している。

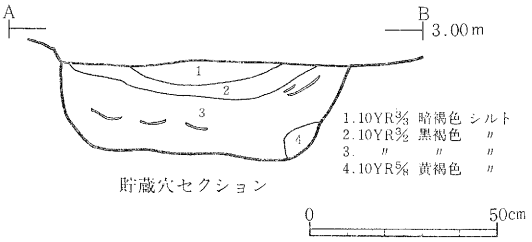
土師器

坏（内黒）　図示できるものは第20図１～５の５個体である。これらはいずれも貯蔵穴より出土したものである。この坏類は、回転糸切り無調整と考えられる。内面のミガキは不規則なものが多く、すべて黒色処理を施す。体部のロクロ痕は、明瞭ではなく、総じて器厚は薄い。

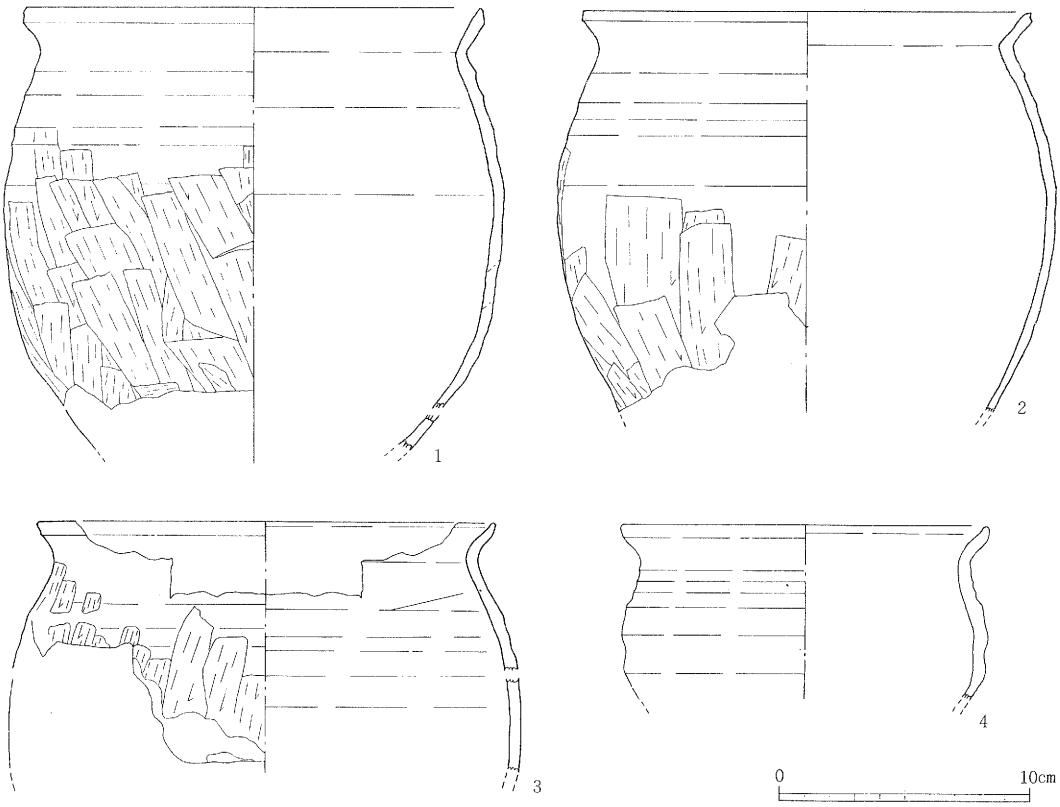


1号住居跡



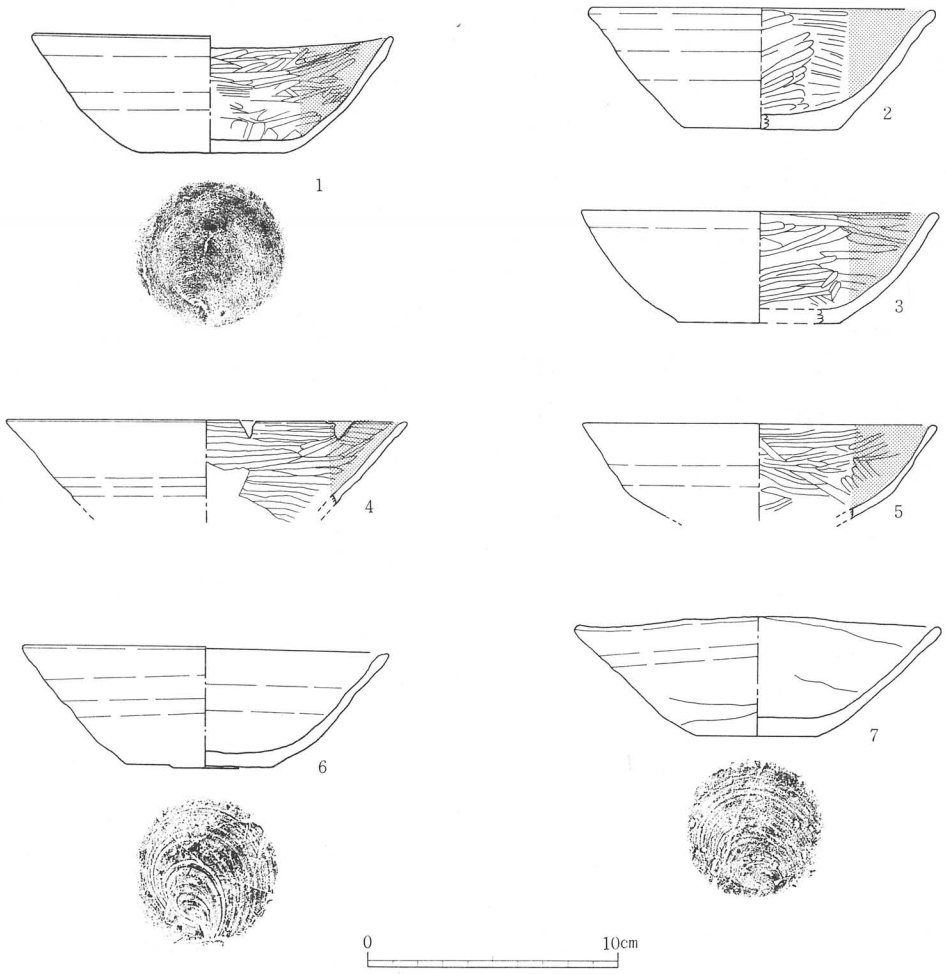


貯蔵穴セクション



図版	層位	遺物番号	種類	分類	調整 内面	調整 外面	備考	実測番号
1	貯蔵穴 3 層	592	土師器 甕	2a-2	ロクロナデ	口縁・胴部、ロクロナデ、胴部下端、ケズリ		190
2	〃	〃	〃	〃	〃	〃		198
3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	外面、炭化物付着	197
4	〃	588	土師器(赤焼)甕	2c-2	〃	ロクロナデ		188

第19図　1号住居跡実測図・出土遺物(1)



図版	層位	遺物番号	種類	分類	調整 内面	調整 外面	備考	実測番号
1	貯蔵穴 3層	592	土師器 坏	1 c	ミガキ・黒色処理	口縁・胴部、ロクロナデ、底部回転糸切り	歪んでいる	194
2	〃	〃	〃	1 b	〃	ロクロナデ、底部回転糸切り		189
3	〃	〃	〃	2	〃	ロクロナデ		192
4	〃	〃	〃	1 c	〃	〃		195
5	〃	〃	〃	1 a	〃	〃		193
6	〃	〃	須恵器 坏	3	ロクロナデ	口縁・胴部、ロクロナデ、底部回転糸切り	黒斑、底部スノコ状圧痕	196
7	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	黒斑	191

第20図　1号住居跡・出土遺物(2)

甕　図示できるものは、貯蔵穴より出土した第19図1～4の4個体である。1～3はいずれも、ロクロ調整後ヘラケズリを施す。このヘラケズリは、体部中央から口縁部付近に及ぶものがある。器厚は薄く、口径と高さがほぼ同じ値を示し、体部は球形に近い。法量に極めて規格性がある。4はいわゆる赤焼の範ちゅうに属するもので、ロクロ調整だけの小型の甕である。

須恵器

坏　須恵器坏は、第20図６・７の２点のみである。貯蔵穴より出土している。いずれも灰白色の色調を示し、６は外面に、７は内外面に黒斑が認められる。７は内面の剝落が著しい。また、６の底部外面には、糸切り後についた３条の平行沈線が認められる。スノコのような台に置いたものであろうか。

これらの土器群は、平安時代の表杉ノ入式期のもので、特に甕類は、白鳥良一氏の編年（白鳥良一：1980）のＦ群土器の甕と形態が類似する。Ｆ群土器の甕はロクロ調整のみで、本例と異なるが、体部が球形を呈する点は共通する。したがって、本住居跡の年代は平安時代後半と考えられ、先のＦ群土器が11世紀以後の年代が与えられていることから、これと同様の年代が考えられる。

２号住居跡（第21図）

Ⅱ区南側Ｆ－３区に位置し、Ⅳ層上面で確認された。住居跡は南西コーナー付近約¼が確認されたにすぎず、全体の規模やカマドは不明である。11号溝・21号・22号掘立柱建物跡に切られ、火山灰を伴う33号溝を切っている。規模は西壁約1.7ｍ、南壁約1.3ｍを確認したにすぎない。壁高は最大で12cmを測る。埋土は、西側が４層で構成されるが、Ｇラインセクションでは２層で構成される。図のようにＧラインセクションでは、11号溝に流入する土とほとんど区別がつかなくなる。南西コーナーには、楕円形の貯蔵穴（81×80cm、深さ16cm）が検出された。貯蔵穴の東側に柱穴が１個検出された。

出土遺物（第21図１～３）

出土土器は破片が多く、総数62点出土した。その内訳は土師器坏48点（内黒19点、赤焼25点、黒色土器４点）、土師器甕14点である。また、他に陶器鉢１点と土錘が１点ある。

陶器

鉢　第21図１は鉢の口縁部破片である。外面はロクロ痕が明瞭であるが、内面は平滑なナデである。この鉢は床面よりわずかに浮いた状態で出土した。楢崎彰一氏より、12世紀の渥美の製品であるとの御教示をいただいた。

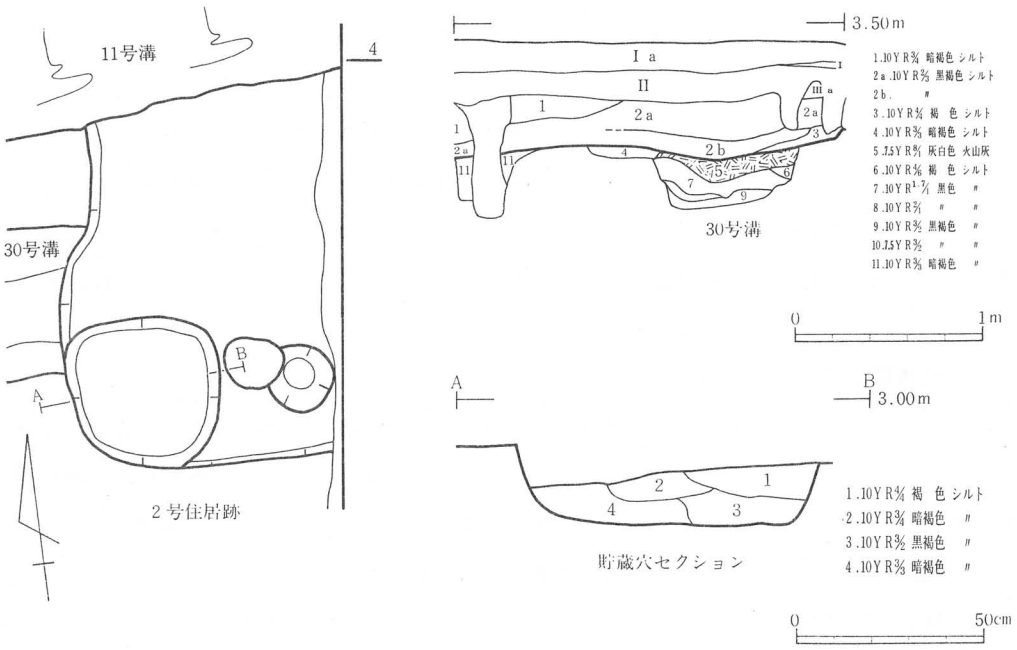
土師器

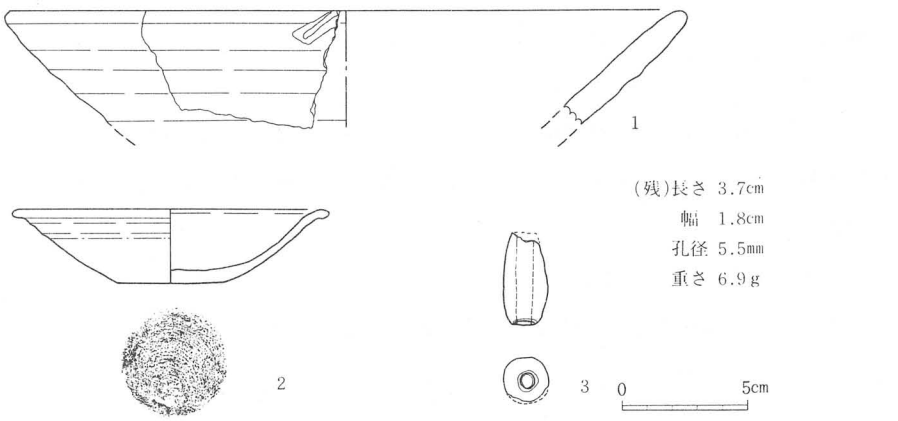
皿（赤焼）　第21図２は口唇部が外反する皿である。胎土は緻密で、砂粒をほとんど含まない。中世の土師質土器の中に胎土・色調の類似するものがある。土師器皿と土師質土器皿の関連を知る重要な資料となろう。

土製品

土錘　第21図３は長さ3.7cm、重さ6.9ｇの土錘である。

土器群は表杉ノ入式期に属するものであるが、渥美の鉢の出土からおよそ平安時代末期12世紀の住居跡と考えられる。





図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	種類	器形	部 位	産地	時期	釉	備 考
1	E－4	2号住	埋土	935	陶器	鉢	口縁部	渥美	12C	———	———

図版	層位	遺物番号	種 類	分類	調整 内面	調整 外面	備 考	実測番号
2	埋土	905	土師器(赤焼)皿	—	ロクロナデ	口縁・胴部、ロクロナデ、底部、回転糸切り	胎土に白い針状のもの含む。F-3、ヒット1	172

第21図　2号住居跡実測図・出土遺物

3号住居跡（第22図）

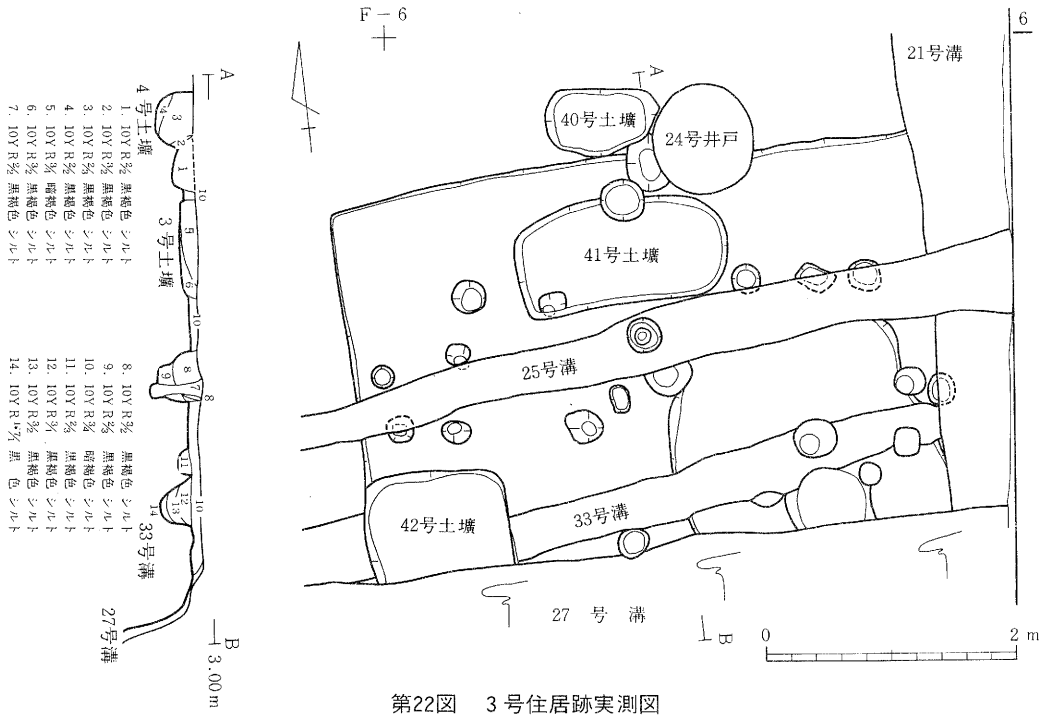
Ⅱ区中央のＦ－５区に位置し、Ⅳ層上面で確認された住居跡である。北西コーナーを含む全体の約⅔が確認できたものと考えられる。本住居跡は21号・25号・26号溝、24号井戸、41号・42号土壙に切られ、33号溝を切る。規模は北壁4.64ｍ、西壁約2.2ｍが確認できたにすぎないが、およそ１辺５ｍ前後になるものと予想される。壁高は最大約８cmを測る。埋土は単層（10ＹＲ¾、暗褐色シルト）である。東寄りの床面には、短軸約２ｍのほぼ隅丸方形になると考えられる土壙がある。底面は凹凸が著しい。さらに、その中に小型の土壙がある。カマドや貯蔵穴は検出できず、また、15個のピットを検出したが、どれが柱穴になるのか判断できない。

出土遺物（第23図１～４）

出土土器は総数88点である。その内訳は土師器坏55点（内黒26点、赤焼28点、その他１点）、同（赤焼）皿１点、同甕28点、同台付鉢１点、白灰色（半環元）の須恵器坏２点、同甕１点である。その他に灰釉陶器（器種不明）１点、平瓦（凸面縄目）１点、土錘１点、鉄滓３点、砥石１点、珪化木である。

土師器

坏　１は土師器坏と考えられる。底部切り離しは回転糸切り無調整である。内面はミガキ調整は施すが、黒色処理は行なっていない。器厚は極めて薄い。２は床面より出土した土師器（赤焼）坏である。ロクロ痕はほとんどみられず、体部は内弯ぎみに立ち上がり、椀に近い形態



第22図　３号住居跡実測図

である。

高台付鉢　3は高台付鉢と考えられる。底部には横位のナデが施される。

土製品

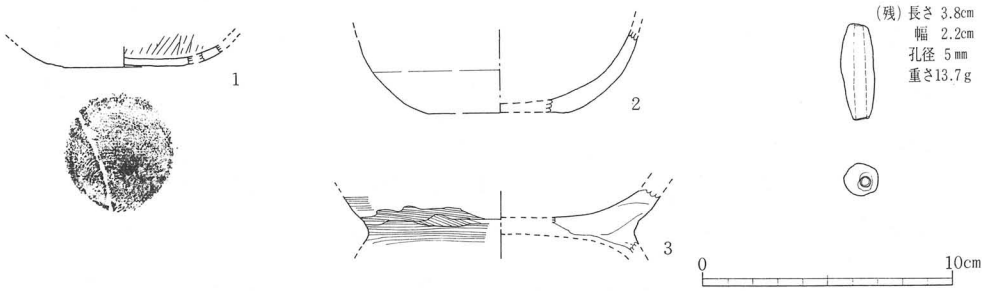
土錘　4は長さ3.8cm、重さ13.7ｇの土錘である。

石製品

砥石　埋土より１点出土している（第７表）

その他に顔料の付着した珪化木１点が出土している。

出土遺物のうち、明確に年代を押えられるものがないが、住居跡の年代は土師器（赤焼）皿等の存在から、平安時代後半と考えてよいであろう。また、鉄滓３点のうち１点は椀形鉄滓と考えられるものがあり、小鍛冶工房跡の可能性もある。



図版	層位	遺物番号	種類	分類	調整 内面	調整 外面	備考	実測番号
1	埋土	17	土師器　坏	2	ミガキ(放射状)	胴部 ロクロナデ　底部 回転糸切り	３号住居下の土壙	201
2	床直	826	赤焼土器坏(椀)	3	ロクロナデ	胴部 ロクロナデ　底部 磨滅の為不明		180
3	埋土	927	赤焼土器台付鉢	—	不明	ナデ		H-2

第23図　３号住居跡出土遺物

（２）　２号竪穴遺構（第24図）

Ⅱ区の南端Ｅ－２区に位置し、Ⅳ層上面で確認された。規模は西壁約2.4ｍが検出されたにすぎず、不明な点が多い。壁高は約10cmである。床面は平坦で、埋土２層（１暗褐色シルト、２黒褐色シルト）で構成される。この遺構は、灰白火山灰を伴う32号・29号溝に切られる。

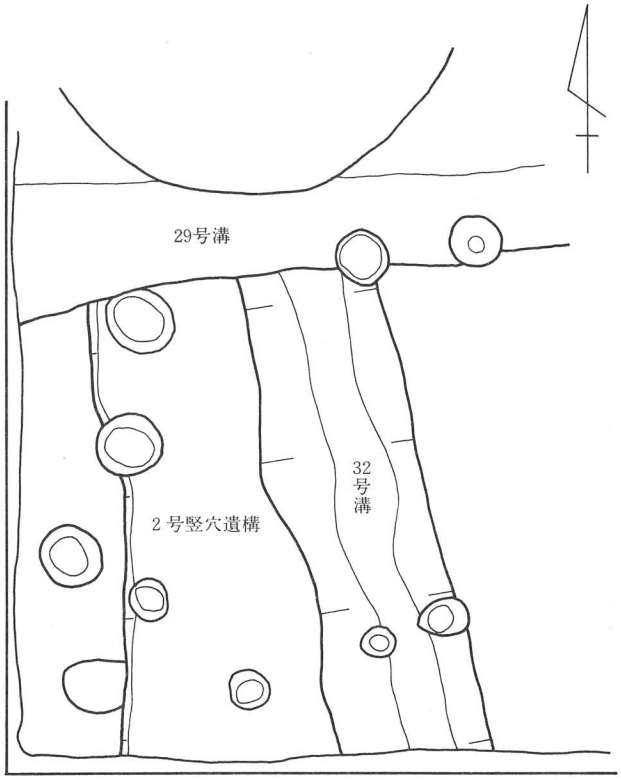
出土遺物（第24図１・２）

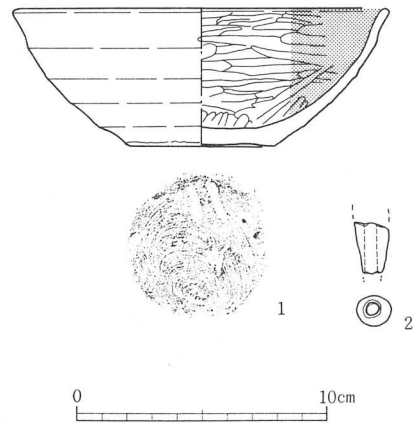
土師器

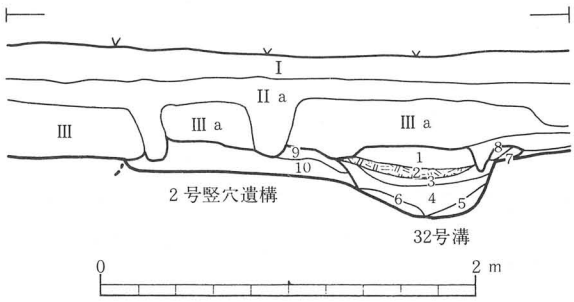
坏（内黒）　１はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。底部は回転糸切り無調整である。

土製品

土錘　２は約½を欠損する土錘である。







32号溝
1. 10YR3/1 暗褐色 シルト
2. 7.5YR5/2 灰白色 火山灰
3. 10YR3/3 暗褐色 シルト
4. 10YR3/2 黒褐色 シルト
5. 7.5YR3/2 灰褐色 シルト
6. 7.5YR2/1 黒 色 シルト
7. 10YR3/1 褐 色 シルト
8. 10YR3/1 褐 色 シルト

2号竪穴遺構
9. 7.5YR3/1暗褐色 シルト
10. 10YR3/3 黒褐色 シルト

図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	種類	分類	調整 内面	調整 外面	備考	実測番号
1	E－2	2号竪穴遺構	埋土上部	766	土師器 坏	16	ミガキ・黒色処理	口縁、胴部ロクロナデ 底部 回転糸切り		134

図版	グリット	遺構	層位	大きさ(長さ×最大幅)cm	孔径(cm)	重さ(g)	登録番号
2	E－2	2号竪穴遺構	埋土	(残) 1.9×1.3	0.5	2.4	887

第24図　2号竪穴遺構実測図・出土遺物　32号溝跡実測図

（3） 溝　跡

溝跡については、その各々の特徴は第21表を参照されたい。また、紙数の都合上、各々の図面は示していない。

ここでは、これらの溝跡群に関する問題点について若干ふれてみたい。

平安時代の溝跡は、およそ各調査区の北半に集中する傾向があり、東西方向に伸びるものが多い。昭和54年度調査区の溝も東西方向に伸びるものが多い。さて、これらの溝跡は、比較的深く断面形が鍋底状を呈するもの（Aタイプ）と、極めて浅く断面形が皿状を呈するもの（Bタイプ）がある。また、Aタイプには火山灰を伴うものが大部分である。

すなわち

Aタイプ……8号・24号・30号・32号・33号溝

Bタイプ……4号・5号・6号・7号・17号・20号・22号・23号溝

に分類される。

Aタイプのうち、33号溝には火山灰が確認できない。また、I区の8号溝はII区の24号溝に連なる可能性が高い。6号溝は前回調査の14号溝に、8号は同じく15号溝に続くものである。これらの溝は、前回調査を行なった20号溝が介在することによって、6号溝が8号溝よりも古いことがわかる。Aタイプは土器類が比較的多く出土するが、Bタイプは出土量が少なくいずれも細片であるという異なった特徴をもつ。こうした現象は、おそらく性格が異なるためと予想されるが、明らかにできない。

出土遺物

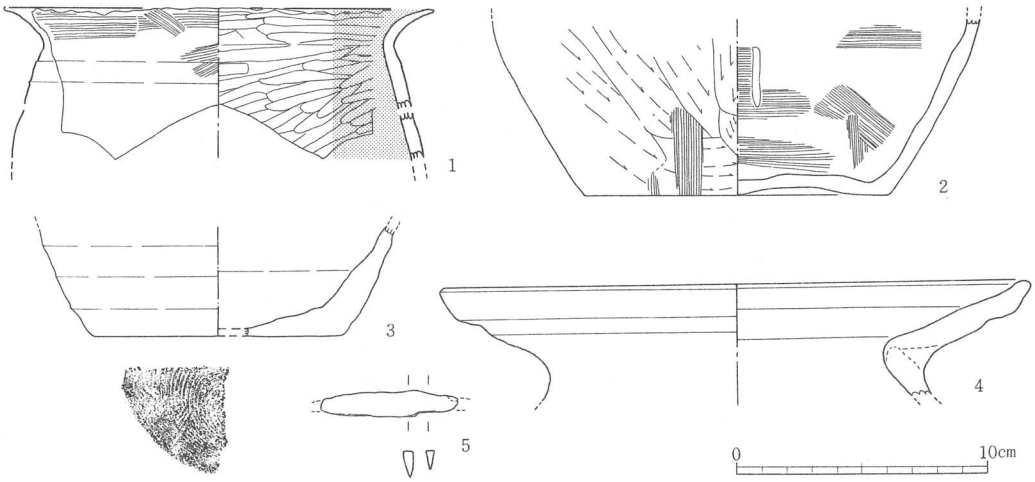
8号溝（第25図1～5）

土師器

甕　1は土師器甕である。ロクロ調整後、口縁部外面に横ナデを施す。内面はミガキ後、黒色処理を施す。口唇部が尖頭状を呈する。2は土師器甕の底部付近の破片である。外面はヘラケズリで、一部にナデが認められる。内面はナデが施される。底部は凸凹が著しい。3・4はいずれもロクロ調整を施す甕の破片である。赤褐色を基調とするもので、いわゆる赤焼土器の範ちゅうに属するものである。

金属製品

刀子　5は鉄製の刀子である。全長は約7～8cmになるものと考えられるが、鋒と茎の先端を欠く。



図版	層位	遺物番号	種類	分類	調整 内面	調整 外面	備考	実測番号
1	3層(火山灰層下)	866	土師器 甕	1b	ミガキ(横) 黒色処理	口縁部 ヨコナデ 胴部 ロクロナデ	B－6区	92
2	埋土上部	949	〃	2a1？	ナデ	胴部 ヘラケズリ 底部 不明	〃	87
3	3層(火山灰層下)	866	〃 (赤焼)	2c2？	ロクロナデ	胴部 ロクロナデ 底部 回転糸切	〃	88
4	〃	16	〃 (赤焼)	2c1	〃	ロクロナデ	〃	98

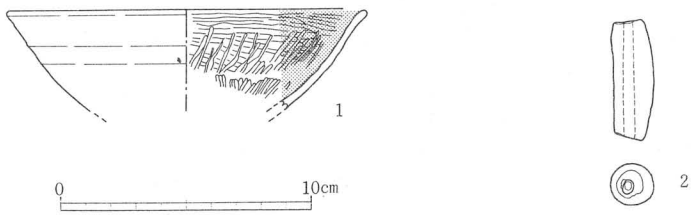
図版	グリット	遺構	層位	種類	材質	法量 長さ(cm)	(寸)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	(匁)	備考	登録番号
5	B－6	8号溝	1層	刀子	鉄	5.4	1.78	1.1	0.4	2.9	0.77	刀身3.75cm、区1.65cm	945

第25図　8号溝跡出土遺物

24号溝（第26図１）

土師器

坏（内黒）　１はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す坏である。内面のミガキは、横位ミガキ後、口縁部付近まで達する暗文風の放射状ミガキが施され、さらに下位に２段の放射状のミガキを施す。器厚は極めて薄い。



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	種類	分類	調整 内面	調整 外面	備考	実測番号
1	E－6	24号溝	最下層	880	土師器 坏	16	口縁部 ミガキ(横) 胴部 ミガキ(縦) 黒色処理	ロクロナデ	胎土に白い針状のもの含む	151

図版	グリット	遺構	層位	大きさ(長さ×最大幅)(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	登録番号
2	E－5	33号溝	埋土	(完) 4.9×1.6	0.5	11.0	870

第26図　24号・33号溝跡出土遺物

30号溝（第27図１～６）

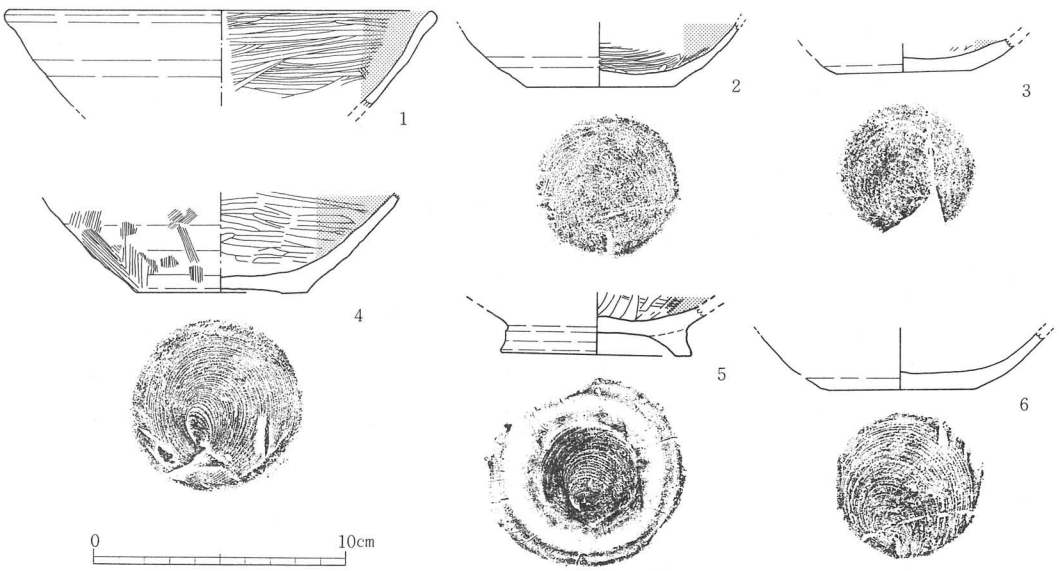
土師器

坏（内黒）　１～４はロクロ調整後、内面にミガキ、黒色処理を施す坏である。いずれも回転糸切り無調整と考えられる。２の底部外面には４条の平行沈線が認められる。４はロクロ調整後、体部外面にナデが認められるが、調整を意図したものか判断できない。

台付坏（内黒）　５は台付坏で坏部内面はミガキ・黒色処理を施す。

須恵器

坏　６は灰白色を基調とする須恵器坏である。底部外面には２と同様の沈線が２条認められる。



図版	層位	遺物番号	種類	分類	調整 内面	調整 外面	備考	実測番号
1	4層	871	土師器・坏	1a	ミガキ（横）黒色処理	ロクロナデ		168
2	埋土下部（5～6層）	872	〃	1	胴部 ミガキ（横） 底部 ミガキ（放射状）黒色処理	ロクロナデ　底部 回転糸切り		167
3	4層	871	〃	〃	ミガキ、黒色処理	〃　〃		170
4	〃	〃	〃	1c	〃　〃	胴部 ロクロナデ→ナデ　〃		171
5	〃	〃	土師器高台坏	1	胴部 ミガキ（横） 底部 ミガキ（放射状）黒色処理	胴部 ロクロナデ　〃	胎土に白い針状のもの含む。	169
6	埋土下部（5～6層）	872	須恵器坏	－	ロクロナデ	〃　〃		－

第27図　30号溝跡出土遺物

32号溝（第28図１～８）

土師器

坏（内黒）　１～３はロクロ調整後、内面はミガキ・黒色処理を施す。１は底部外面に９条以上の平行沈線がみられる。２は底部外面に記号の一部が認められる。

高台坏　５は高台坏の底部破片である。

坏（赤焼）　4・6はいわゆる赤焼土器の坏である。6の底部外面には1条の沈線が認められる。

金属製品

鉄製品　7は棒状の鉄製品で後述する中世の火箸としたものと類似する。

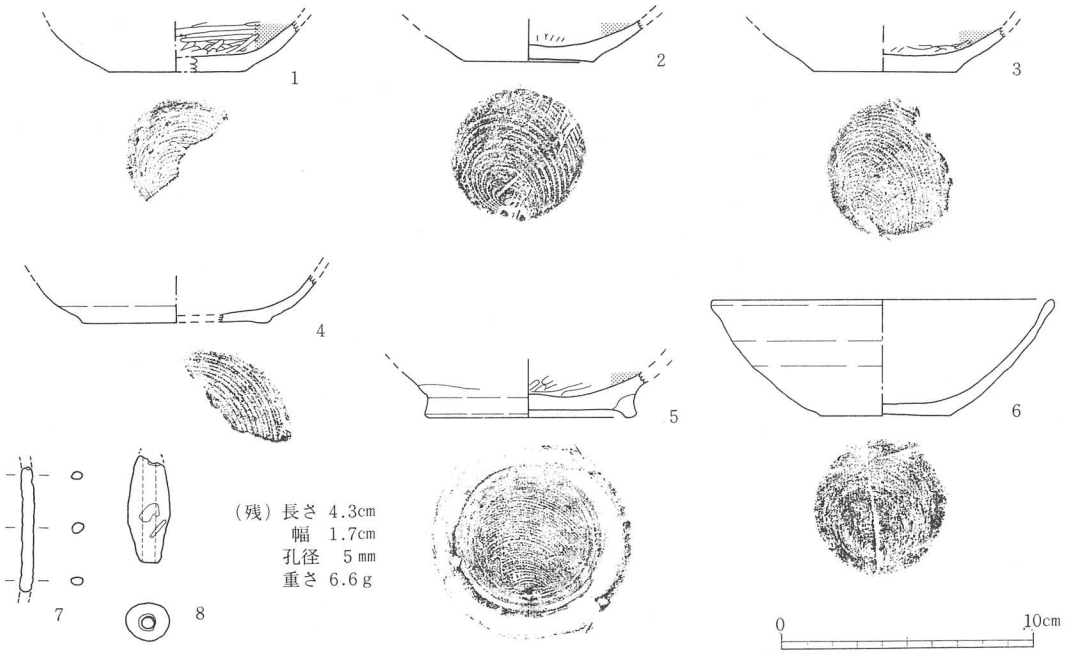
土製品

土錘　8は管状の土錘である。重さ6.6gである。

33号溝

土製品

土錘　第26図2は埋土中より出土した土錘である。長さ4.9cm、重さ11.0gである。



図版	層位	遺物番号	種類	分類	調整 内面	調整 外面	備考	実測番号
1	埋土下部(4～6層)	765	土師器 坏	1	ミガキ 黒色処理	胴部 ロクロナデ 底部 回転糸切り		120
2	埋土	878	〃	〃	〃 〃	〃 〃	底部スノコ状圧痕？	118
3	〃	〃	〃	2	〃 〃	〃 〃		121
4	〃	763	〃	2？	ロクロナデ？（又はミガキ）	〃 〃	胎土に白い針状のもの含む	131
5	〃	878	土師器 高台坏	1	胴部 ミガキ 底部 ミガキ（放射状） 黒色処理	〃 〃		126
6	〃	〃	赤焼土器 坏	3	ロクロナデ	〃 〃	内面に使用時の付着物あり	119

図版	グリット	遺構	層位	種類	材質	法量 長さ(cm)	(寸)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	(匁)	備考	登録番号
7	E－2	32号溝	埋土	？	鉄	(残)5	1.65	0.5	－	1.9	約0.50		878

第28図　32号溝跡出土遺物

（4） 土壙 （第29図）

ここでは、平安時代の土壙のうち、I期（後述）以前のものを扱う。ただし、平安時代でもI期以前のものかあるいは以後か判断できないものもここで扱うことにする。さて、こうした条件に合う土壙は合計18基存在する。また、形態分類は後述する中世以後の分類に従っている。

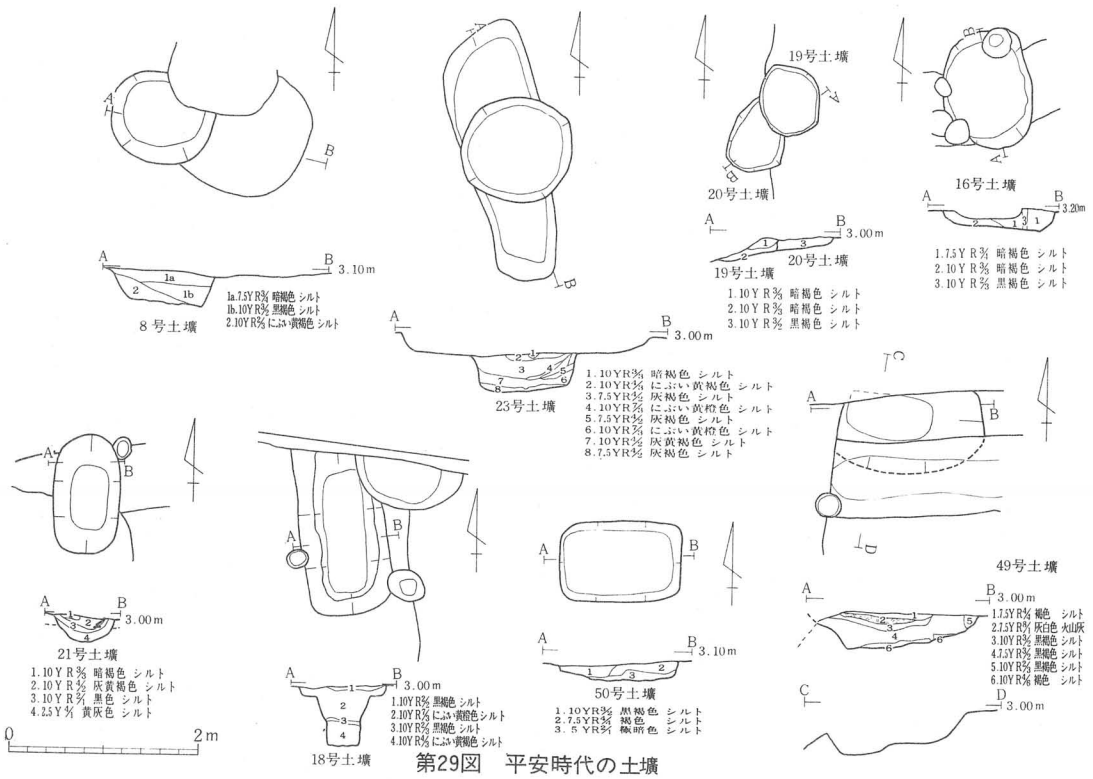
I期以前の土壙…… 4号・15号・16号・17号・18号・19号・20号・21号
43号・44号・49号・51号・52号

I期以前か以後か不明の土壙…… 6号・25号・30号・31号・40号・50号

このうち、15号土壙は平安以前に遡る可能性もある。19号・20号土壙は焼土を伴い、49号土壙は火山灰の堆積がみられる。また、21号土壙は土器の出土量が豊富で、住居跡の貯蔵穴の可能性も考えられる。また、18号土壙は自然堆積と考えるには、やや不自然な状況を示す。

次に形態別にみると以下のようになる。

A Iタイプ　25号・51号
A IIタイプ　6号・52号
B_1 Iタイプ　16号・19号・20号
40号・(49号？)
B_1 IIタイプ　17号・21号
C_1 Iタイプ　18号・31号
C_1 IIタイプ　30号
形態不明　4号・15号・43号・41号



第29図　平安時代の土壙

上記のものをみると、円形や楕円形が主流を占める。方形のものは、後出の傾向がありそうである。

出土遺物

土壙から良好な形で出土する遺物は極めて少なく、しかも図化できないものがほとんどである。18号・21号土壙は出土遺物が多く、逆に特異な感じがする。

4号土壙（第82図17）

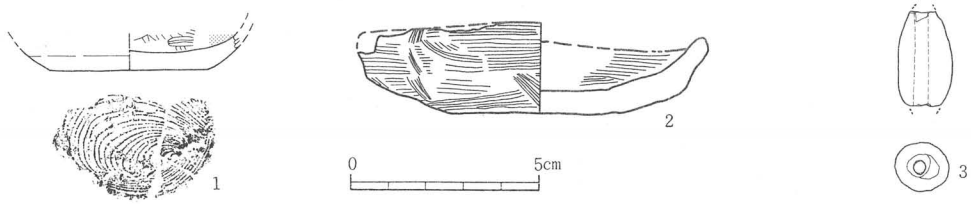
石製品

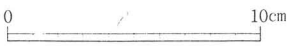
砥石・磨石　各1点出土している。

16号土壙（第30図1）

土師器

坏（内黒）　1はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。底部は回転糸切り無調整である。





図版	グリット	遺　構	層位	大きさ(長さ×最大幅cm)	孔径(cm)	重さ(g)	登録番号
3	F－2	28号井戸	底	(残)3.8×2.2	0.5cm	13.7	942

図版	グリット	遺　構	層　位	遺物番号	種　類	分類	調整 内面	調整 外面	備　考	実測番号
1	A－1	16号土壙	埋　土	925	土師器坏	1	胴部　ミガキ　底部　ミガキ(放射状)黒色処理	胴部　ロクロナデ　底部回転糸切り		62
2	E－3	25号井戸	4層(グライ層)	794	土師器皿	—	胴部　ヨコナデ	口縁　胴部　ヨコナデ　ナデ	手担ねと思われる内外面黒斑多い	139

第30図　16号土壙、25号・28号井戸出土遺物　2のみ½

18号土壙（第31図1～6）

土師器

坏（内黒）　1・2はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。1は回転糸切り無調整である。いずれも、体部外面のロクロ痕が比較的明瞭で、体部は外傾して立ち上がるものである。

甕（内黒）　3はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。外面にヘラスズリが加えられるのかは不明である。

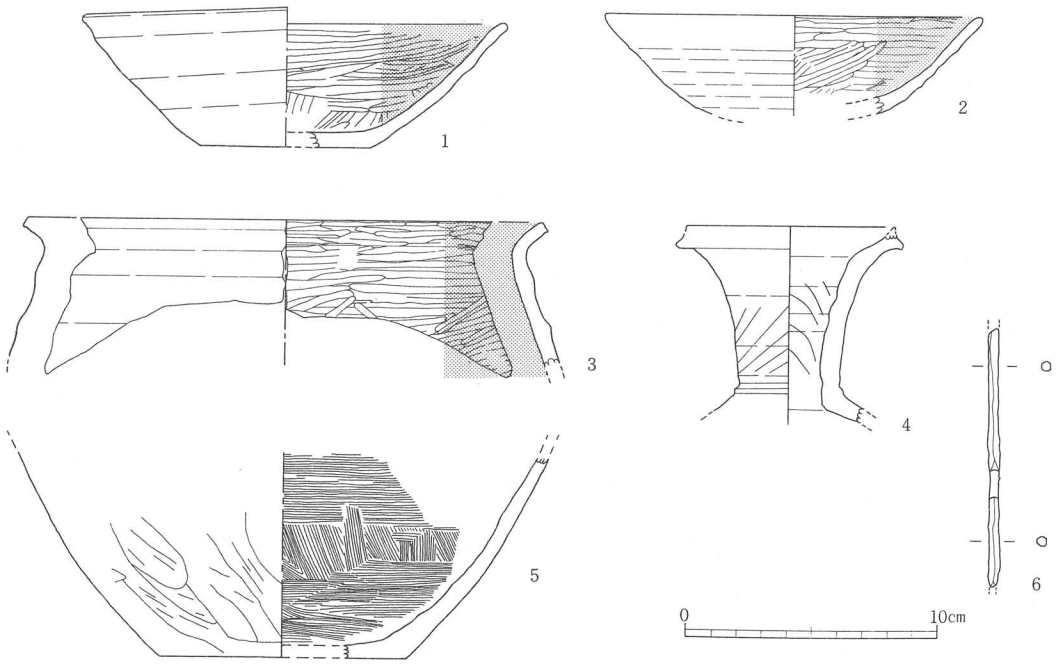
須恵器

長頸壺　4は灰白色（半環元）を呈する長頸壺である。口縁部の内外面にはシボリ痕が認められる。また、頸部には凸帯が巡ぐる。

甕　5は甕の底部付近の破片である。外面にはヘラケズリ、内面はナデが施されている。

金属製品

鉄製品　6は長さ10.3cmの棒状鉄製品である。性格不明であるが、中世の火箸としたものに類似する。



図版	層位	遺物番号	種種	分類	調整 内面	調整 外面	備考	実測番号
1	埋土	1012	土師器 坏	1c	口縁・胴部 ミガキ(横) 底部 ミガキ(放射状) 黒色処理	口縁・胴部 ロクロナデ 底部 回転糸切り	胎土に白い針状のもの含む。	182
2	〃	101	〃	〃	ミガキ 黒色処理	ロクロナデ		185
3	〃	1012	土師器 甕	1b	〃	〃		186
4	〃	〃	須恵器長頸壺	—	ロクロナデ	〃	内外面シボリ痕あり。外面 頸部に1条の凸帯あり。	—
5	〃	〃	須恵器 甕	—	ナデ	ケズリ	霜降り状の自然釉。	—

図版	グリット	遺構	層位	種類	材質	法量 長さ(cm)	(寸)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	(匁)	備考	登録番号
6	F－8	18号土壙	北壁	棒状鉄製品	鉄	(残)10.3	3.4	0.4	0.4	5.4	1.44		421

第31図　18号土壙出土遺物

21号土壙（第32図１～５）

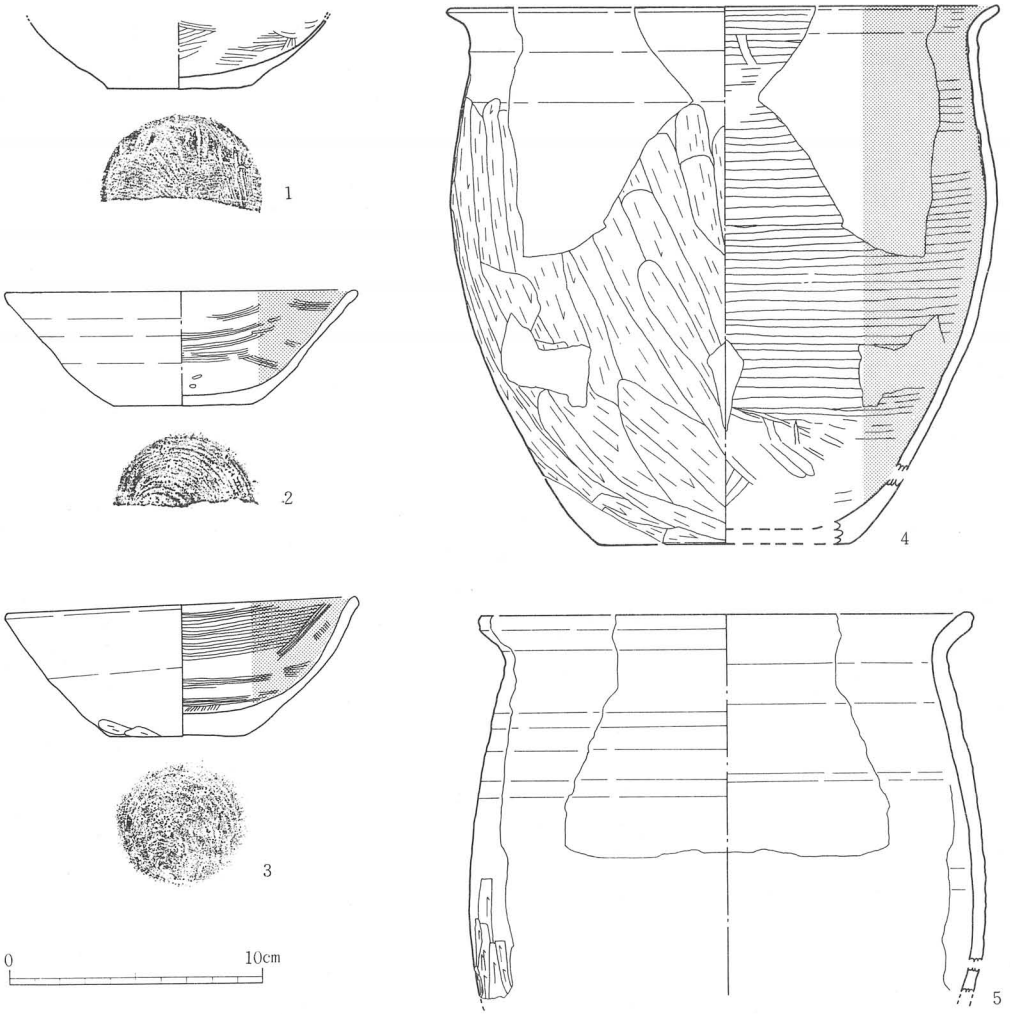
土師器

坏　１はロクロ調整後、内面にミガキを施すが黒色処理は行なっていない。器厚は口縁部付近が１mmと極めて薄い。底部は回転糸切り無調整であるが、糸切りを二度行なっている。

坏（内黒）　２・３はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す坏である。両者ともミガキの条の幅は狭まい。３は底部の器厚が厚く、安定感がある。また、底部付近の一部にケズリが認められるが、調整を意識したものか不明で、回転糸切り無調整と考えられる。２も回転

糸切り無調整である。

甕　4はロクロ調整後、外面は体部下半ヘラケズリ、内面はロクロによるミガキ後、黒色処理を施す。内面ミガキは底部付近では不規則となる。口径と高さがほぼ等しい。口縁部は短い。5はロクロ調整後、体部外面にヘラケズリを施す長胴甕である。口縁径は短く、口唇部断面は丸味が強い。



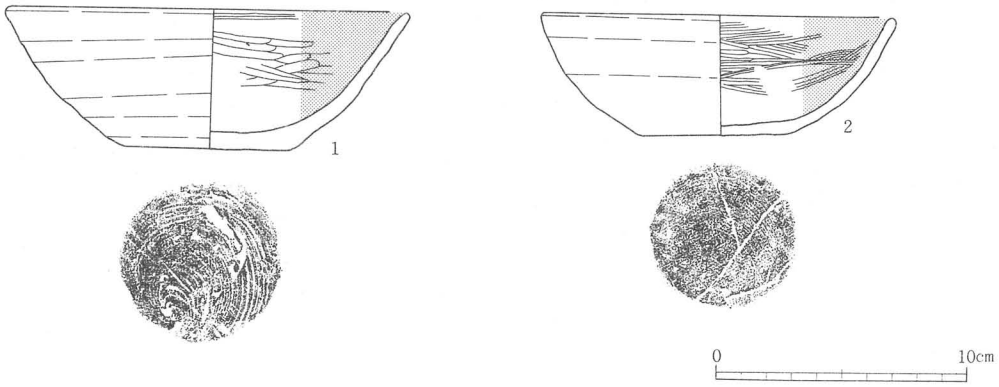
図版	層位	遺物番号	種類	分類	調整 内面	調整 外面	備考	実測番号
1	埋土下部	1013	土師器坏	2	ミガキ	胴部 ロクロナデ 底部 回転糸切り	胎土に白い針状のもの含む	155
2	〃	1020	〃	1C	ミガキ(横)黒色処理	口縁 胴部 ロクロナデ 〃	〃	157
3	〃	974	〃	1a	〃	口縁 胴部 ロクロナデ 胴部 下端 ケズリ 〃	〃	154
4	埋土上部	907	土師器甕	2b	〃	口縁部 ロクロナデ 胴部 ケズリ		153
5	埋土下部	923	〃	2a	ロクロナデ	口縁 胴部 ロクロナデ 胴部 下端ケズリ		159

第32図　21号土壙出土遺物

49号土壙（第33図）

土師器

坏（内黒）　1・2はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理が施される。いずれも回転糸切り無調整である。1の底部外面には沈線が2条以上認められる。

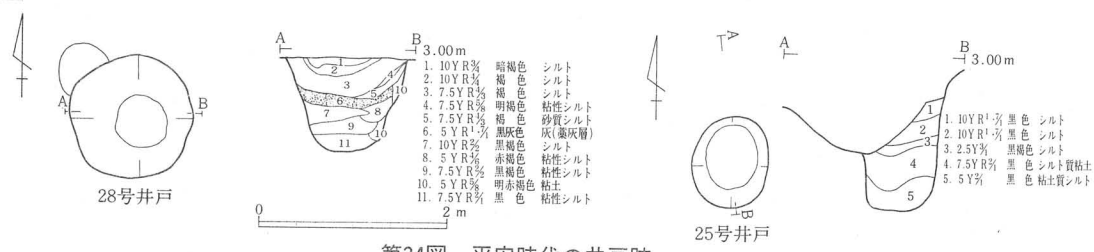


図版	層位	遺物番号	種類	分類	調整 内面	調整 外面	備考	実測番号
1	埋土	975	土師器坏	1a	ミガキ　黒色処理	口縁　胴部　ロクロナデ　底部　回転糸切り	叔痕あり	173
2	〃	926	〃	〃	〃	〃	胎土に白い針状のもの含む	174

第33図　49号土壙出土遺物

（5）　井戸跡

平安時代に属する井戸跡は、2基（25号・28号）確認されている。井戸跡の特徴は第23表を参照されたい。井戸の形態（中世の井戸参照）は、25号がBタイプ、28号がAタイプである。



第34図　平安時代の井戸跡

出土遺物

25号井戸跡（第30図2）

土師器

皿　2は内外面ナデの手捏ね小皿である。本例と類似するものに、岩手県平泉町毛越遺跡（高橋信雄：1982）より出土の皿があり、本例は12世紀代のものと考えられる。

28号井戸跡（第30図3）

土製品

土錘　3は長さ3.8cm、重さ13.7ｇの土錘である。

他に土師器坏・甕・坏（赤焼）の細片が出土している。

以上、これらの井戸跡出土の遺物は極めて少ない。しかし、25号井戸跡出土の皿は貴重な発見であった。この25号井戸跡が、ほぼ12世紀のものと考えられることから、前述した２号住居跡に関連する可能性もある。また、28号井戸跡の年代は、平安時代と考えられるが、詳細な時期は不明である。１号住居跡と関連するものであろうか。

（６）　その他の出土遺物

ここでは、基本層位III層、II層、表採、中世以後の遺構などより出土した遺物を扱う。

III層（第35図１～３、９）

土師器

坏　１～３はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。１・３は回転糸切り無調整である。２は底部切り離しは不明である。また、体部外面には縦位のナデ、ケズリが散発的にみられる。内面のミガキは放射状のものが最終調整となる。

甕　９は赤褐色を呈する甕の口縁部である。口縁部は長く、器厚が厚い。

II層（第35図４・７・８）

土師器

坏（赤焼）　４・７はロクロ調整のみのいわゆる赤焼土器坏である。７の底部外面には１条の沈線がみられる。

高台坏（内黒）　８はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。底部は回転糸切り後に台を貼り付けている。

表採・出土地点不明（第35図５、６）

土師器

皿（赤焼）　５はいわゆる赤焼土器皿である。底部は回転糸切り無調整である。

坏　６はロクロ調整後、内面にミガキを施す。黒色処理は行なっていない。底部は回転糸切り無調整である。本例は整理中に帰属不明となったものである。

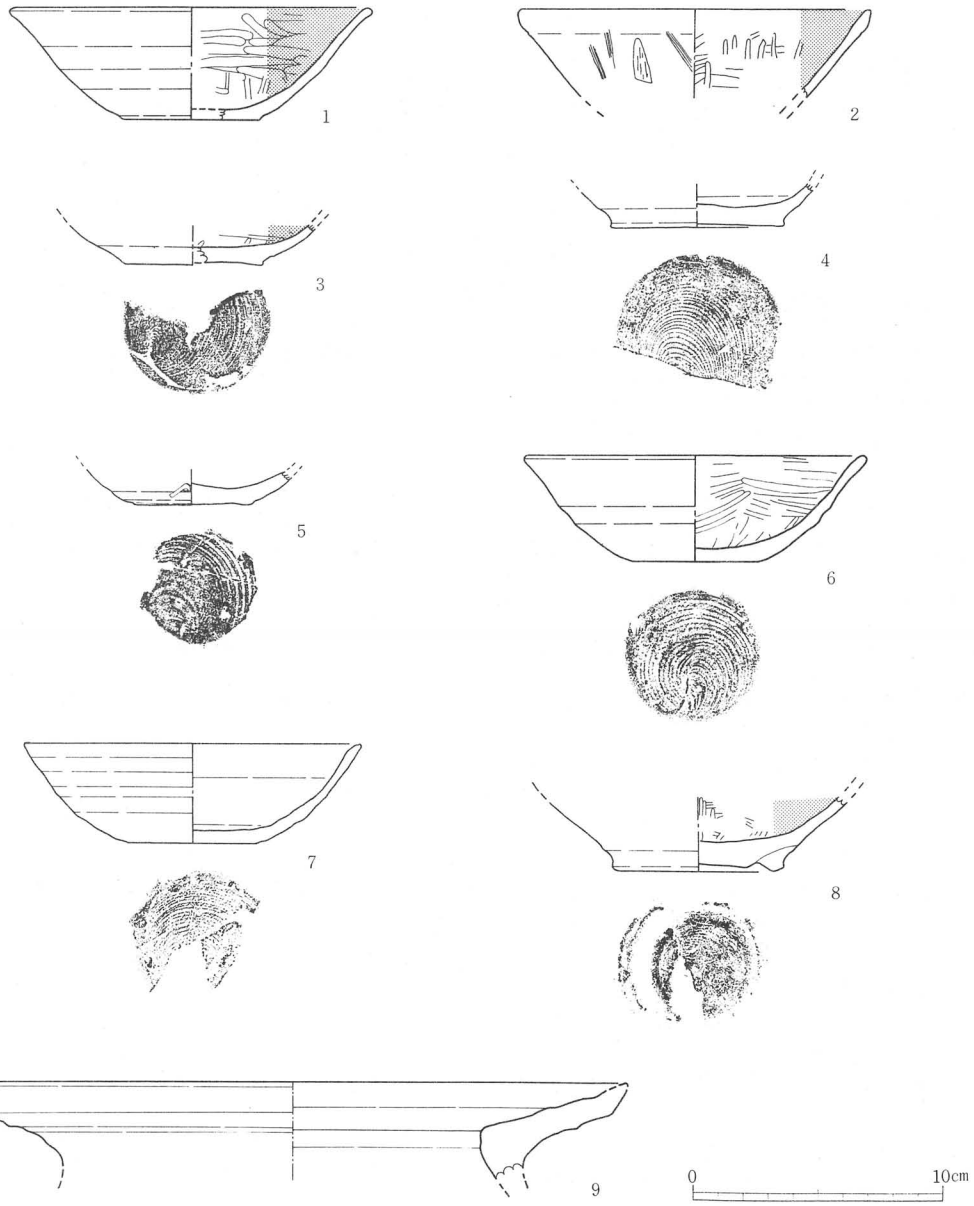
中世以後の遺構出土土器（第36図１～16）

土師器

坏（内黒）　１、３、５、７は、ロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。いずれも回転糸切り無調整である。３の底部外面には沈線が１条認められる。

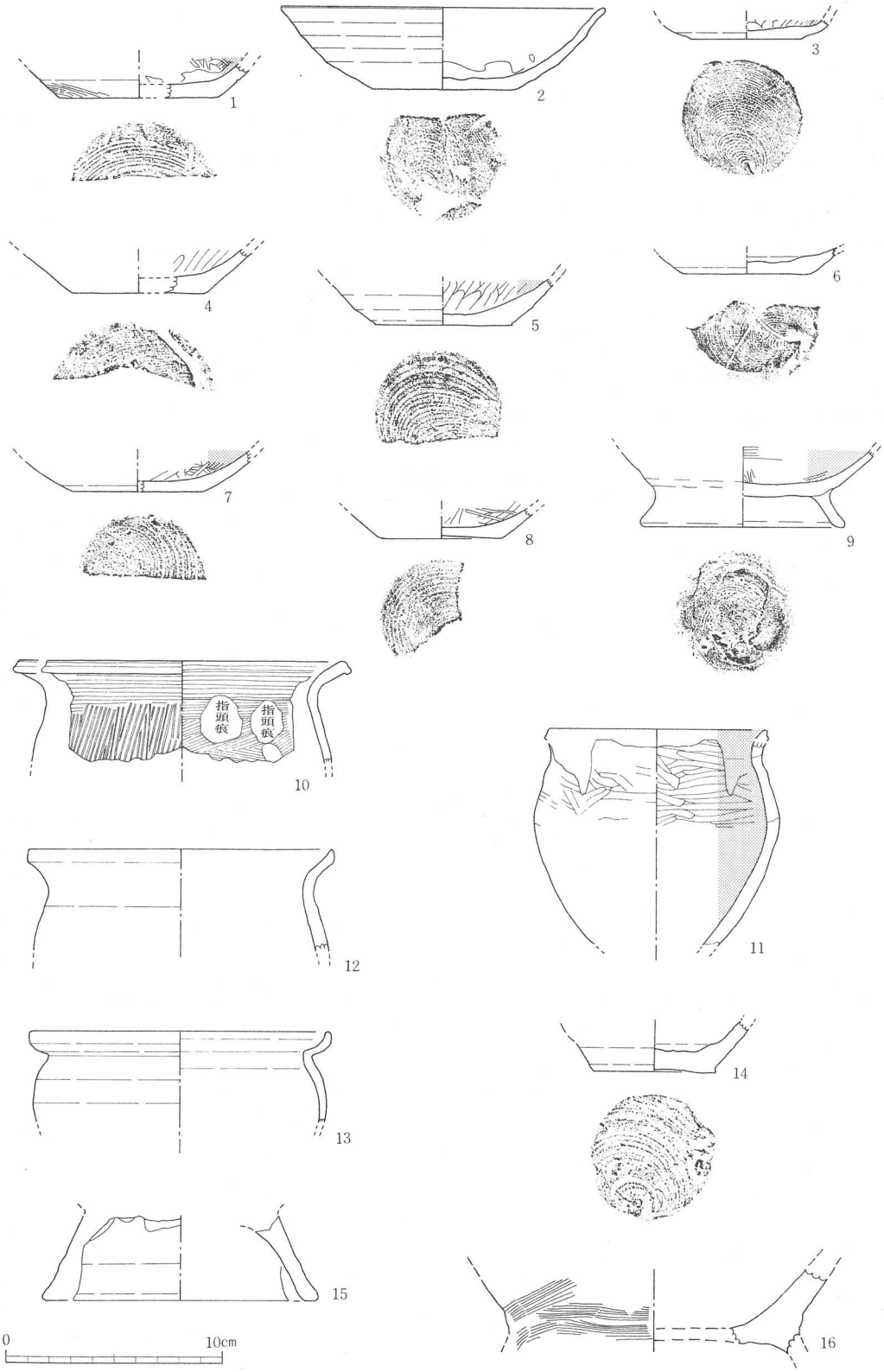
坏（赤焼）　２・６はロクロ調整のみの、いわゆる赤焼土器坏である。いずれも回転糸切り無調整である。６の底部には「×」の記号がある。

坏　４・８はロクロ調整後、内面にミガキを施す。黒色処理は行っていない。４の底部外面



図版	グリット	層位	遺物番号	種類	分類	調 内面	整 外面	備考	実測番号
1	B－8	III層	16	土師器 坏	1b	ミガキ 黒色処理	胴部 ロクロナデ 底部 回転糸切り	胎土に白い針状のもの含む	99
2	F－3	〃	817	〃	1c	〃	口縁部 ロクロナデ 胴部 ロクロナデ、ナデ、ケズリ		162
3	E－2	〃	384	〃	1a又は b	胴部 ミガキ(横) 底部 ミガキ(放射状)黒色処理	胴部 ロクロナデ 底部 回転糸切り		137
4	A－8	II層	204	〃 (赤焼)	3	ロクロナデ	〃 〃	胎土に白い針状のもの含む	76
5	F－2	表採	1042	〃 (赤焼)皿	〃	〃	〃 〃	外面に粘土塊付着	199
6	地点不明		－	〃 坏	2	胴部 ミガキ(横) 底部 ミガキ(放射状)	〃 〃	胎土に白い針状のもの含む	200
7	F－2	II層	381	〃 (赤焼)坏	3	ロクロナデ	〃 〃		165
8	E－3	〃	82	〃 高台坏	1	ミガキ 黒色処理	〃 〃	胎土に白い針状のもの含む	142
9	A－7	III層	460	〃 甕	$2c_1$	ロクロナデ	ロクロナデ		74

第35図　III層・II層出土遺物、表採遺物



第36図　中世以後の遺構出土土器

には平行する沈線が２条ある。

高台坏（内黒）　９はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。

甕　10は口縁部横ナデ、体部外面刷毛目の小型の甕である。内面は体部ナデ後に指頭痕が三ヶ所につく、土器の特徴から平安時代のものと考えられる。11は内外面にミガキを施し、内面を黒色処理した小型の甕である。

甕（赤焼）　12～14はいわゆる赤焼土器甕である。いずれも小型で、14は底部が回転糸切りである。また、13の口縁部は内弯ぎみに立ち上がる特徴をもつ。

台付鉢　16は台付の鉢と考えられる。底部から台部にかけて、不規則なナデが認められる。

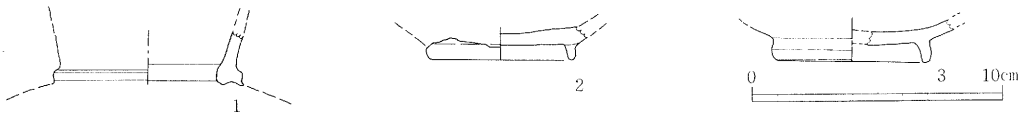
器種不明　15は土師器坏あるいは皿の高台部と考えられるが、詳細は不明である。

第４表　中世以後の遺構出土土器

図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	種類	分類	調整 内面	調整 外面	備考	実測番号
1	B－6	5号井戸	埋土	798	土師器 坏	1	ミガキ 黒色処理	胴部 ロクロナデ 底部 回転糸切り	内面に炭化物付着	93
2	B－5	11号溝	底	485	〃	3	不明	口縁 胴部 ロクロナデ 〃	〃	83
3	A－5	〃	1層	277	〃	1	ミガキ 黒色処理	胴部 ロクロナデ 〃		70
4	B－5	〃	2層	307	〃	2	ミガキ（放射状）	〃 〃	スノコ状圧痕 胎土に白い針状のもの含む	82
5	B－3	14号溝	埋土	407	〃	1、？	ミガキ 黒色処理	〃 〃	胎土に白い針状のもの含む	78
6	E－4	11号溝	1層	527	〃	3	ロクロナデ	〃 〃	底部に×印（窯印？）あり	145
7	E－8	18号掘立柱ピット2	底	727	〃	1	ミガキ 黒色処理	〃 〃		160
8	E－3	11号溝内ピット	埋土	393	〃	2	ミガキ	〃 〃	胎土に白い針状のもの含む	140
9	F－4	11号溝	底	850	土師器高台坏	1	ミガキ 黒色処理	〃 〃	〃	177
10	B－6	5号井戸	埋土	798	土師器 皿	1a	口縁 ヨコナキ 胴部 ナキ	口縁 ヨコナデ 胴部 刷毛目	〃	46
11	A－3	12号井戸	埋土	620	〃	1b	ミガキ（横） 黒色処理	ミガキ		203
12	E－8	18号掘立柱ピット2	埋土	727	赤焼土器 甕	2、2	ロクロナデ	ロクロナデ		161
13	E－4	11号溝	2・3層	852	〃	〃	〃	〃		143
14	F－2	31号溝	1層	425	〃	〃	〃	胴部 ロクロナデ 底部 回転糸切り		H-1
15	E－4	28号溝	埋土上部	588	土師器高台坏		胴部 ヨコナデ	ロクロナデ		147
16	F－5	21号溝	1層	553	赤焼土器台付鉢		ナデ	ナデ		H-4

陶器（第37図１～３）

１、３は灰釉の水瓶（12世紀）と碗（10世紀後半）である。２は緑釉碗である。



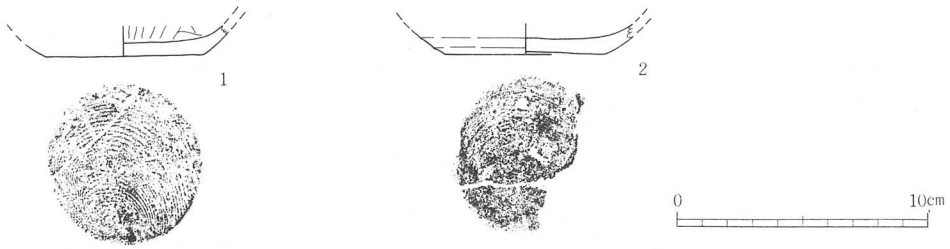
図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	E－2	31号溝	埋土下部	598	水瓶	頸部	常滑	12ｃ初	灰釉（灰白7.5Y R9/1）斑状	
2	F－2	〃	3層	1506	碗	底部	？	10ｃ？	緑釉	
3	B－5	4号ヒット	埋土	434	碗	〃	美濃	10ｃ後半	灰釉	内面 磨耗している。縦位の沈線。

第37図　平安時代の陶器

時期不明のピット（第38図１、２）

土師器

坏　１はロクロ調整後、内面にミガキを施すが黒色処理は行っていない。２はロクロ調整後の内面調整は磨滅しているために不明である。これは１と同様のものか赤焼土器になるのか判断できない。



図版	層位	遺物番号	種　類	分類	調整		備　考	実測番号
					内　面	外　面		
1	埋土	803	土師器 坏	1	ミガキ（放射状）	胴部ロクロナデ、底部回転糸切り	13号溝南、Ａ－２区	64
2	〃	〃	〃	3	磨滅のため不明	〃	〃　Ａ－２区　赤焼か？	63

第38図　時期不明のピット出土遺物

須恵器（第39・40図）

須恵器は合計358点出土し、その内訳はⅠ区255点、Ⅱ区104点である。これらは少なくとも古墳時代と平安時代のものが混在していると考えられる。しかし、細片が多く明確な時代区分ができないものも存在する。観察の結果では、９割以上が平安時代のものといえよう。

須恵器は、古代の土器総数の約４％であり、また、仮にすべてが平安時代のものとすると、平安時代の土器・陶器数の約13％である。いずれにしろ出現率は低い。

器種別にみると、甕の破片が圧倒的に多く約82％を占める。次いで坏約８％であり、他は長頸壺や器種不明のものである。坏の減少は、土師器（赤焼）坏の増加と補完的な関係にあるためであろう。なお、坏はいずれも回転糸切り無調整である。

平安時代の須恵器には、環元したものと灰白色の半環元状態の大きく２種類がある。前者は甕と長頸壺があり、後者には坏と長頸壺がある。このような現象はどのような意味をもつものであろうか、器種別に異なる窯から供給されるのであろうか。

最後に、遺構に伴うものは、すでに述べたので、ここでは、他の時代の遺構あるいは包含層出土のものについて概観しておきたい。

坏　（第39図）

第39図１～４は、いずれも灰白色を基調とする半環元状態の坏である。体部外面にロクロ目残こすものはほとんどない。１・２のように外傾しながら立ち上がるものが多いが、３のごとく、やや内弯ぎみに立ち上がるものもわずかにある。４は器形の特徴は不明であるが、底部内面に螺旋状の工具痕がみられる。また、２・３の底部には、回転糸切り後についた教条のほぼ

平行する沈線がみられる。この圧痕は、底部切り離し後にスノコ状のものに置いたためについたものであろう。このような例は、図示しなかったものや土師器にも認められる。なお、2の体部外面の圧痕は、糸切り用の糸が流れたものであろう。

これらは、平安時代に属する遺構のうち、比較的古い溝に灰白色火山灰（10世紀前半）を伴うことや無調製の土師器坏の存在から、これらの坏類もおよそ10世紀以後のものであろう。

甕　（第39図6～9、第40図1～9）

甕は第39図6～9、第40図1～9がある。第39図6は小型の甕で口縁部が肥厚する。同図8の頸部付近には、叩き用工具の先端部圧痕が残る。同図9や第40図5・6・8は、体部の叩き目の条がかなり大きい。逆に、第40図7は目が細かく、密に叩かれており、内面には青海波文（同心円文）がみられる。これは他に比べ古い特徴である。この7のように青海波文をもつものは少なく、大半は内面がナデである。第40図1・2・4は、口縁部外面に波状文を施すものであるが、前述の青海波文と同様に数量は少ない。また、本遺跡の須恵器の特徴に第40図4・9のように、ヘラ状工具の木口部によるものと考えられるナデ調整をもつものがある。甕の口唇部形態は、第39図7・8や第40図2のようにあまり特徴のないものが多い。

甕も坏と同様の理由から、およそ10世紀以後のものであろう。

長頸壺　（第39図5・10）

長頸壺はわずか9点出土している。図示できるものは第39図5・10と18号土壙の1点がある。5・10はいずれも底部付近の破片であって、全体的な特徴は不明である。いずれも底部内面のロクロ目が明瞭である。10の底部外面には、ロクロ台（？）の圧痕がみられる。

長頸壺も坏・甕と同時期と考えてよいであろう。

以上、須恵器について概観してきたが、これらは、白鳥編年（白鳥良一：1980）によるE・F群土器と類似するものである。したがって、これらの須恵器はおよそ後半段階（10世紀～11世紀）の製品であろう。

5．中・近世の検出遺構

中・近世の遺構には、溝跡・橋跡・掘立柱建物跡・井戸跡・土壙・ピットがある。調査時には湧水や梅雨と重なり、遺物の所属が不明なものや、特に井戸跡は断面実測中に土層の崩壊したものがあること等、細部にわたって十分に特徴をつかむことができなかったものもある。

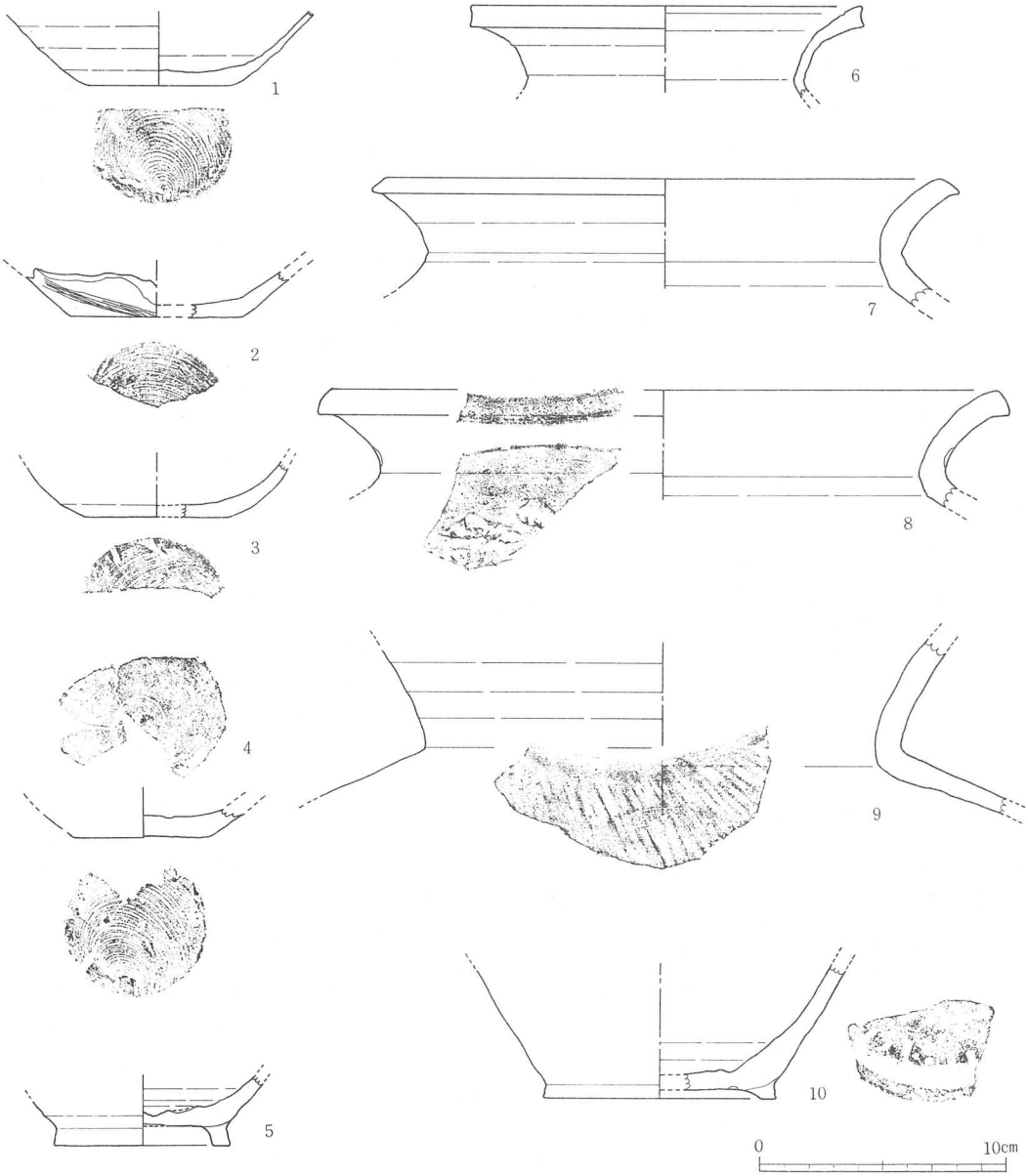
遺構の年代観は、出土遺物や切り合い関係から以下のように考えられる。

Ⅰ期　平安時代末から鎌倉時代中期（およそ12世紀～13世紀中）

Ⅱ期　鎌倉時代後半から南北朝時代初期（およそ13世紀後半～14世紀初）

Ⅲ期　南北朝時代から室町時代中期（およそ14世紀前半～15世紀後半）

Ⅳ期　室町時代末期から江戸時代初期（およそ16世紀前半～17世紀前半）



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器種	部位	時期	内面	外面	備考
1	B－7	－	Ⅳ層（地山）	447	坏	胴部～底部	平安	ロクロナデ	胴部ロクロナデ、底部回転糸切	
2	B－4	9号井戸	6層	1063	〃	〃	〃	ロクロナデ	胴部ロクロナデ、底部回転糸切、スノコ状圧痕	糸切に接触した糸切痕あり。
3	B－6	5号井戸	埋土上部（1～7層）	796	〃	〃	〃	ロクロナデ	胴部ロクロナデ、底部回転糸切、スノコ状圧痕	半環元
4	A－7	2号井戸	黒色土層	801	〃	〃	〃	ロクロナデ、見込みに渦巻状沈線あり。	胴部ロクロナデ、底部回転糸切	〃
5	B－5	3号溝	埋土上部（2層）	489	長頸壺	〃	〃	ロクロナデ	胴部ロクロナデ	高台付、胎土に白い針状のもの含む
6	B－8	－	Ⅲ層	446	甕	口縁部	〃	ロクロナデ	口縁部ロクロナデ	内面上り外面口唇部に自然釉
7	F－3	29号溝	埋土	754	〃	〃	〃	ロクロナデ	口縁部ロクロナデ	内面に自然釉
8	F－8	21号溝	1層	749	〃	〃	〃	ロクロナデ	口縁部ロクロナデ、頸部に叩き板先端の圧痕	胎土に白い針状のもの含む
9	F－3	11号溝	埋土	842	〃	頸部～胴部	〃	ロクロナデ	頸部ロクロナデ、胴部平行叩き目	内面にキズ跡
10	B－6	3号井戸	8層下	1017	長頸壺	胴部～底部	〃	ロクロナデ	胴部回転ヘラケズリ、底部刻み目あり	高台付、胎土に白い針状のもの含む

第39図　基本層位・遺構出土須恵器(1)

図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器種	部位	時期	内面	外面	備考
1	A－4	12号溝	埋土上部	269	甕	口縁～頸部	平安	ロクロナデ	口縁部 ロクロナデ　頸部に波状沈線	
2	B－8	3号溝	埋土	478	〃	〃	〃	ロクロナデ 口縁・口脚部に磨耗痕	口縁部 ロクロナデ 頸部に波状沈線＋沈線＋波状沈線	口脚部は丸味をもち接線は甘い
3	〃	1号土壙	〃	888	〃	〃	〃	ロクロナデ	口縁部 ロクロナデ　頸部 ロクロナデ	霜降り状の自然釉
4	B－3	13号井戸	グライ層（7層）	700	〃	頸部	〃	ナデ	頸部 ハケ目（木口状工具）＋波状沈線	
5	F－6	23号井戸	1～2層	904	〃	頸部～胴部	〃	頸部 ロクロナデ 胴部、同心円文のタタキ目	頸部 平行叩き目　胴部 ロクロナデ	胎土に白い針状のもの含む
6	A－4	11号溝	1層	233	〃	〃	〃	ナデ	頸部 ナデ　胴部 平行叩き目	
7	F－7	21号溝	3層	891	〃	胴部	〃 ？	青海波文	胴部 平行叩き目	
8	〃	〃	2層	610	〃	頸部～胴部	〃	ロクロナデ＋指ナデ	頸部 ナデ　胴部 平行叩き目	きれいな自然釉
9	B－6	5号井戸	埋土上部	796	〃	胴部	〃	横位ナデ＋ハケ目（木口状工具）	横位ナデ＋ハケ目（木口状工具）	

第40図　遺構出土須恵器(2)

Ⅴ期　江戸時代（およそ17世紀中期～19世紀前半）

溝跡（第41・42・43図）

ここでは各時期の特徴や問題点を述べ、個々の溝の特徴は第21表に示してあるので、ここではふれない。

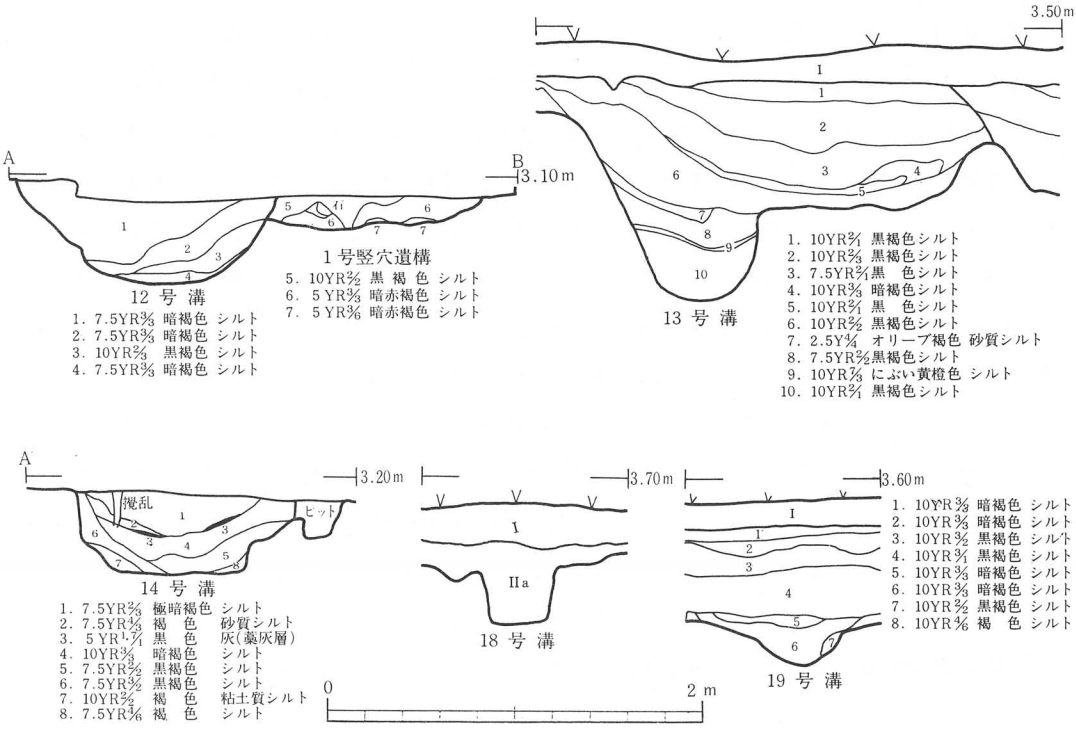
〔Ⅰ期〕

Ⅰ期に属するものは、3号・14号溝跡で、いずれも南北に伸びる。

なお、昭和54年度調査の12号溝もこの時期の可能性が強い。この溝も南北に伸びる。性格は不明であるが、方向に統一性があり、何らかの区画のための溝であろうか。3号・14号溝跡からは渥美の甕破片が比較的多く出土している。

〔Ⅱ期〕

Ⅱ期には館の成立に伴う堀が出現する。この堀には11号・21号・29号溝が該当する。堀に付属する溝に9号・27号・28号溝がある。このうち、11号溝と29号溝は切り合っており、29号溝が古い。したがって、Ⅱ期のある時期に堀を改築している。29号溝埋土の特徴は、その上部2/3は人為的な堆積層で、多量の地山ブロック（Ⅳ層）の混入する土層である。11号・21号溝の埋土は、いずれも大別3層に分類でき、溝底や最下層（3層）から、およそⅡ期の遺物が出土する。また、1・2層からはⅢ期の陶磁器類が出土し、特に1層からは、15世紀前半の瀬戸の製



品が多く出土する。

〔III期〕

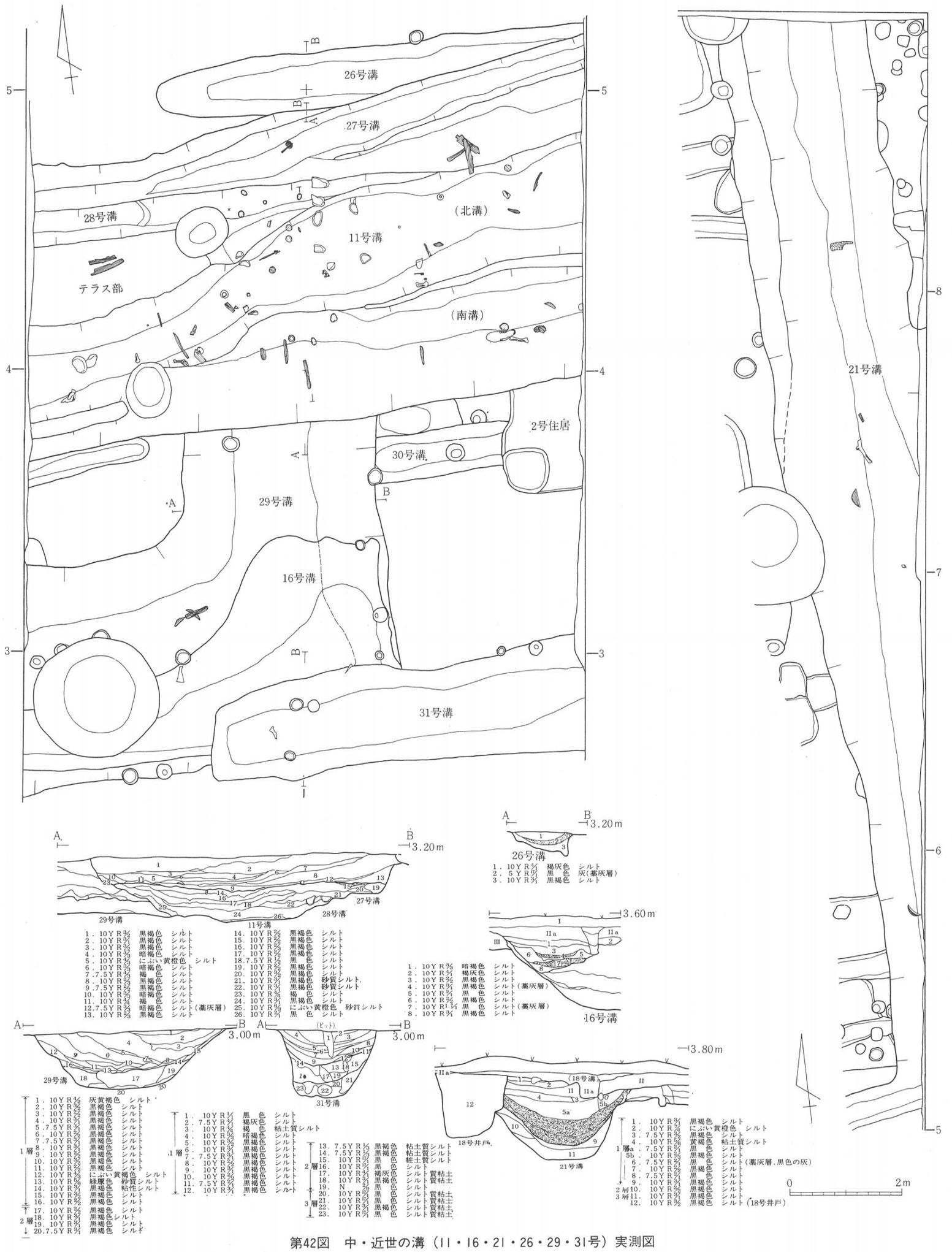
III期には、II期に構築された溝跡（堀）が継続使用され、前述したごとく、15世紀前半にはほぼ埋没が完了する。また、この時期に構築される溝に10号・13号・15号・16号・31号溝跡がある。31号溝の溝底からは15世紀の青磁が出土し、また、16号溝が介在することによって、15号→16号→31号の順で構築されたことがわかる。断面形は15号溝がV字形（薬研堀）、16号溝は鍋底形、31号溝は箱形（箱堀）と様々である。これらはIII期でも比較的新しい期期に構築されたと考えられる。おそらく、15号・31号溝は前述の11号溝が機能しなくなった時点で、新に構築されたものであろう。とすれば、この2条の溝は堀としての性格をもつものとも考えられる。16号溝の性格は不明であるが、B－2区最下層より魚骨が出土し、注目される。10号溝は全く性格が不明である。この溝は11号溝より新しく1号溝より古い。前回の調査で16号溝としたものが該当する。13号溝は鍋底形の断面を示し、南側では隅丸長方形の土壙を伴う。性格は不明であるが、北側に位置する竪穴遺構と関連する可能性もある。15号・16号・31号溝は、出土遺物から判断して、遅くともIV期には埋没が完了している。

〔IV期〕

IV期に属する溝は、1号・2号・12号・18号・19号・25号・26号溝跡である。1号溝（第43図）は、断面形はほぼV字形になるが、南側の一部では薬研堀になる。この溝は前回調査の22号溝に該当し、さらに西側に伸びることがわかっている。何かを区画する溝であろう。詳細は後述するが、ほぼ同じ時期に須田玄蕃という人物が、居住していたことが文献にあることからこの溝は館に伴うあるいはそれを区画する堀と理解してよいであろう。この溝はII期の堀に次いで遺物の出土量が多い。主な遺物は明の染付磁器、黄瀬戸、志野、志野織部、唐津、土師質土器皿等がある。また、特異な例として、15世紀代の備前(？)壺があり、伝世品であろうか。1号溝に付属するのではないかと考えられる溝に2号溝がある。この溝は極めて浅く、埋土中に大型の炭が含まれる。12号溝は断面がU字形に近いもので、I区のみに存在し、II区には続かない。性格は不明である。18号・19号溝は規模が小さく、断面がほぼU字形を呈する。この2条の溝も性格が不明である。ただ、18号溝は18号掘立柱建物跡に平行して存在することから、関連性をもつものかもしれない。25号溝は断面がU字形を呈し、さらに東側に伸びる。溝の東側先端部より志野織部の皿が出土している。26号溝は断面が鍋底形を呈し、25号溝同様東側に伸びる。この2条の溝も北側の20号掘立柱建物跡に関連するものであろう。

〔V期〕

V期の溝は今回の調査では、確認されていない。



第42図　中・近世の溝（11・16・21・26・29・31号）実測図

第43図　中・近世の溝（1・2・9・11・　・16）実測図

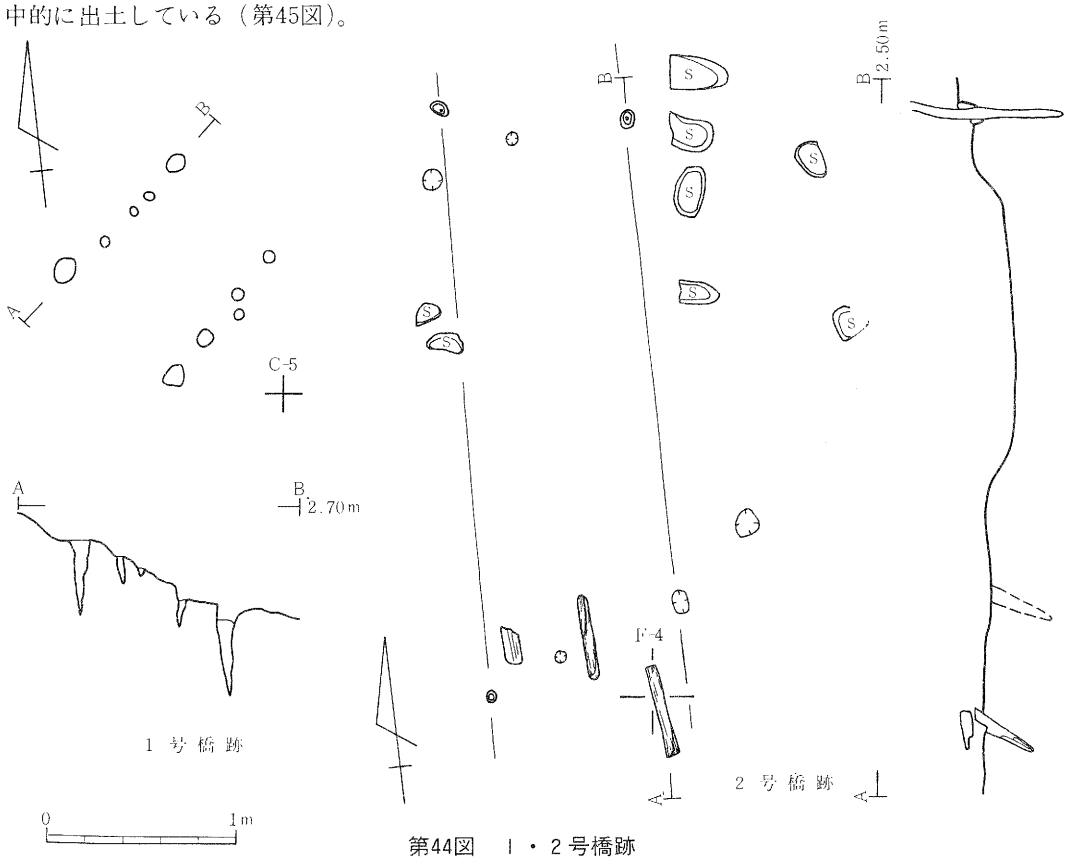
橋跡（第44図）

1号橋跡

11号溝北岸B－5区より、平行に並ぶ杭列を検出した。この杭列は、杭そのものは検出できなかったが、穴の形状から杭を打ち込んだものと理解される。列間の幅は約80cmである。特に西列のものは両端のものの径が大きく、その間のものは小さい。一応、橋として扱ったが対岸に同様の施設がないことから、洗い場のような施設とも考えられる。今後の類例を待って検討したい。なお、この橋跡の南側（溝の中心部付近）からは、比較的多くの漆器椀と1号木簡などが出土し、何らかの関連性があるものと考えられる。II～III期の施設と考えられる。

2号橋跡

11号溝E－2区の溝底より、杭や小型のピットが確認された。これらは、その出土状況から、橋脚の杭と杭穴と判断した。掘り方はほとんどみられず打ち込まれたものである。長さ約5.5m、幅約1mの橋跡と考えてよいであろう。北側の橋脚はほぼ垂直に、南側のものは70～80°の角度で打ち込まれている。また、この橋の東にこれと平行する石が4個検出されている。11号溝でも、II区内は最も遺物の出土が多く、特に動物骨・鏡・柄杓・曲物等が、橋跡付近より集中的に出土している（第45図）。



第44図　1・2号橋跡

第45図　11号・21号・29号溝主要遺物出土分布図(出土層位は考慮していない)

掘立柱建物跡（第47図）

今回の調査で確認できた掘立柱建物跡は25棟である。各建物跡の特徴は第22表に示した。今回の調査では、４類型８種の建物跡を検出した（第46図）。

Ａ類　側柱式のもので、２×２間・２×３間・３×３間・３×４間の４種類がある。ほぼ東西棟のものがほとんどである。

Ａ1（２×２間）　12号？、14号、21号・(23号)

Ａ2（２×３間）　22号（変則）

Ａ3（３×３間）　15号・18号

Ａ4（３×４間）　５号

Ｂ類　総柱式の東西棟で、すべて２×２間である。

この類型には、３号・13号・25号（変則）がある。

Ｃ類　側柱式の東西棟で南側に庇を伴うもの。

Ｃ1（３×４間）　７号

Ｃ2（３×４間、内部に柱をもつ）　８号

Ｄ類　側柱式の南北棟で、４種類に細分される。

Ｄ1（３×４間）　６号

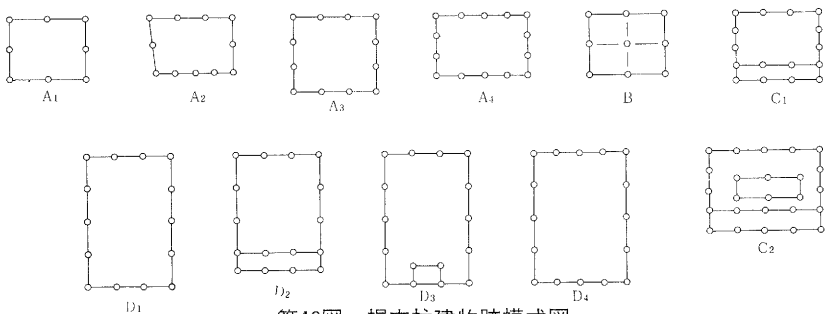
Ｄ2（３×４間＋庇）　10号、20号？

Ｄ3（３×４間、内部の南寄りに柱をもつ）　９号、19号

Ｄ4（４×４間）　４号

この他に分類不明のものに、１号・２号・11号・16号・17号・24号があるが、これらはおよそＡ類に属する可能性が強い。

本遺跡では、Ａ・Ｄ類が最も一般的な建物構造と考えられる。Ｂ類は倉庫などが考えられようか。Ｃ2類は主殿のような性格をもつものであろう。また、Ｄ3類とした建物跡の南側の柱の配列は、入口のような性格をもつものと考えられる。Ⅰ区の南側のＡ類に属する小型の建物跡（12号～15号）は、他のⅠ期の埋土との類似性などから、Ⅰ期項の建物群と考えられる。21号

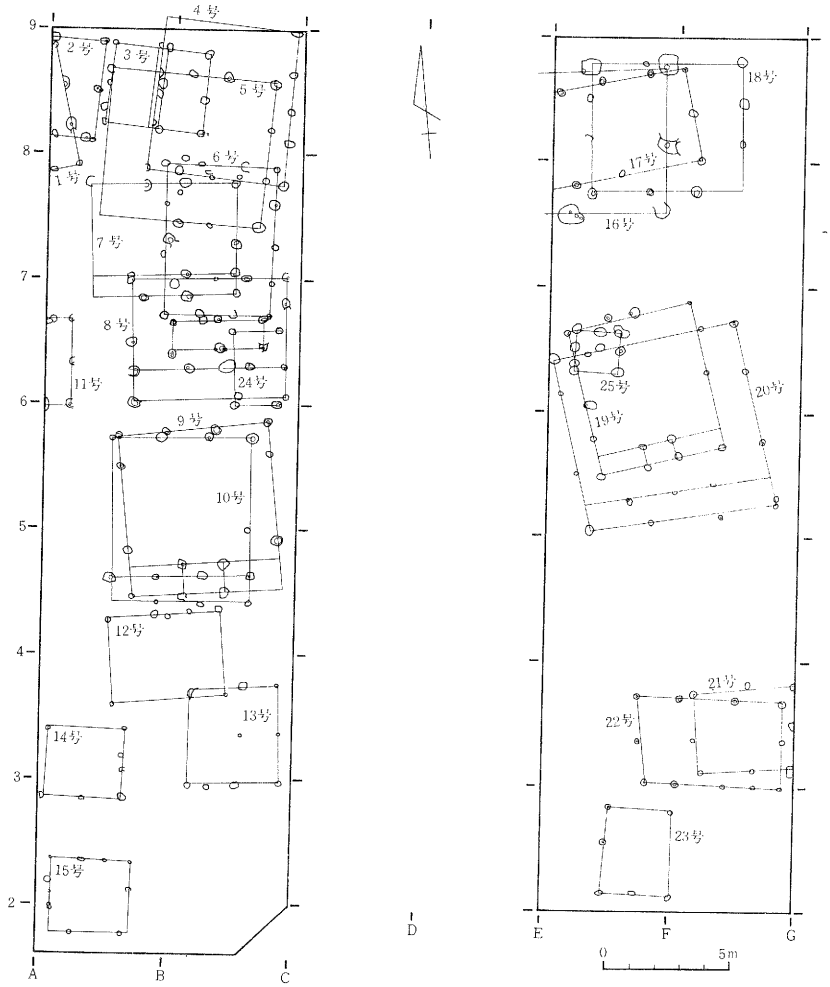


第46図　掘立柱建物跡模式図

は11号溝にかかる橋脚との関連性が推測される。つまり、この建物跡は見張小屋や作事小屋的な性格があったのではなかろうか。16号は大型の掘り方をもつもので、このような例はIII区に類似するものがあり、ほぼ同時期（V期）のものであろう。

各時期の建物跡（第22表）の間尺は、不揃いのものがほとんどであるが、I期は4～7尺と不規則で建物面積が狭い。II・III期はおよそ6～7尺でほぼ一定している。IV期はややばらつきが大きく6～8尺である。V期は建物が明確ではない。ところが、前回調査で確認された平安時代のものは、間尺が9尺で一定しており、中世のものとは極めて対称的で規則性がある。

ところで、鎌倉時代には引違いのふすまの出現に伴って、丸柱から角柱に変化したことが知られる（太田博太郎：1971）。また、仙台周辺の中・近世の建物跡に関して、興味ある指摘がある。すなわち、隣接する名取郡六郷村と宮城郡七郷村（現在はいずれも仙台市）では民家の間取りが違い、これは藩制以前の領主が異なることに起因するのではないかという（小倉強：1972）。これらの問題点は興味深く、今後の調査・研究の課題として指摘しておきたい。



第47図　I・II掘立柱建物跡配置図

井戸跡（第48、49図）

本遺跡より検出された井戸跡は28基である。このうち、Ⅰ～Ⅴ期に属するものは27基である。各井戸跡の特徴は第23表に示したので、ここでは扱っていない。およそⅤ類型に分類することができる。

A類　直径が１ｍ前後で円形を呈し、断面が逆台形のもの。

B類　直径が１ｍ前後で円形を呈し、断面が円筒形のもの。

C類　直径が1.5～２ｍで円形を呈し、断面が円筒形のもの。

D類　直径が1.5～２ｍで円形を呈し、断面が円筒形で、ゆるい段をもつもの。

E類　直径が1.5～２ｍで楕円形を呈し、断面が円筒形で、ゆるい段をもつもの。

A類には、平安時代の28号井戸跡があるが、Ⅰ期以後には今回の調査では確認されていない。B類には２号・６号・８号・14号・15号・16号・18号・23号・24号・25号がある。C類には３号・４号・13号・19号・20号・27号がある。D類には５号・９号・10号・11号・12号・21号・22号がある。E類には１号・７号がある。分類できないものには17号・26号がある。時期的な傾向としては、B類はⅠ・Ⅱ期に多く、その他にはC、D類がⅡ～Ⅲ期にやや多いが、さほど時期的傾向はない。井戸の分布には偏在性があり、Ⅰ区の中央から南側に多く分布する。Ⅴ期の井戸は１基（19号井戸）だけであるが、後述するⅢ区では集中的に検出されている。Ⅴ期を除けば、時期別の増減はあまり認められない。

今回調査した井戸跡で、井戸枠材が出土した例は、２号・４号・12号・15号・23号・27号である。

土壙（第50・51図）

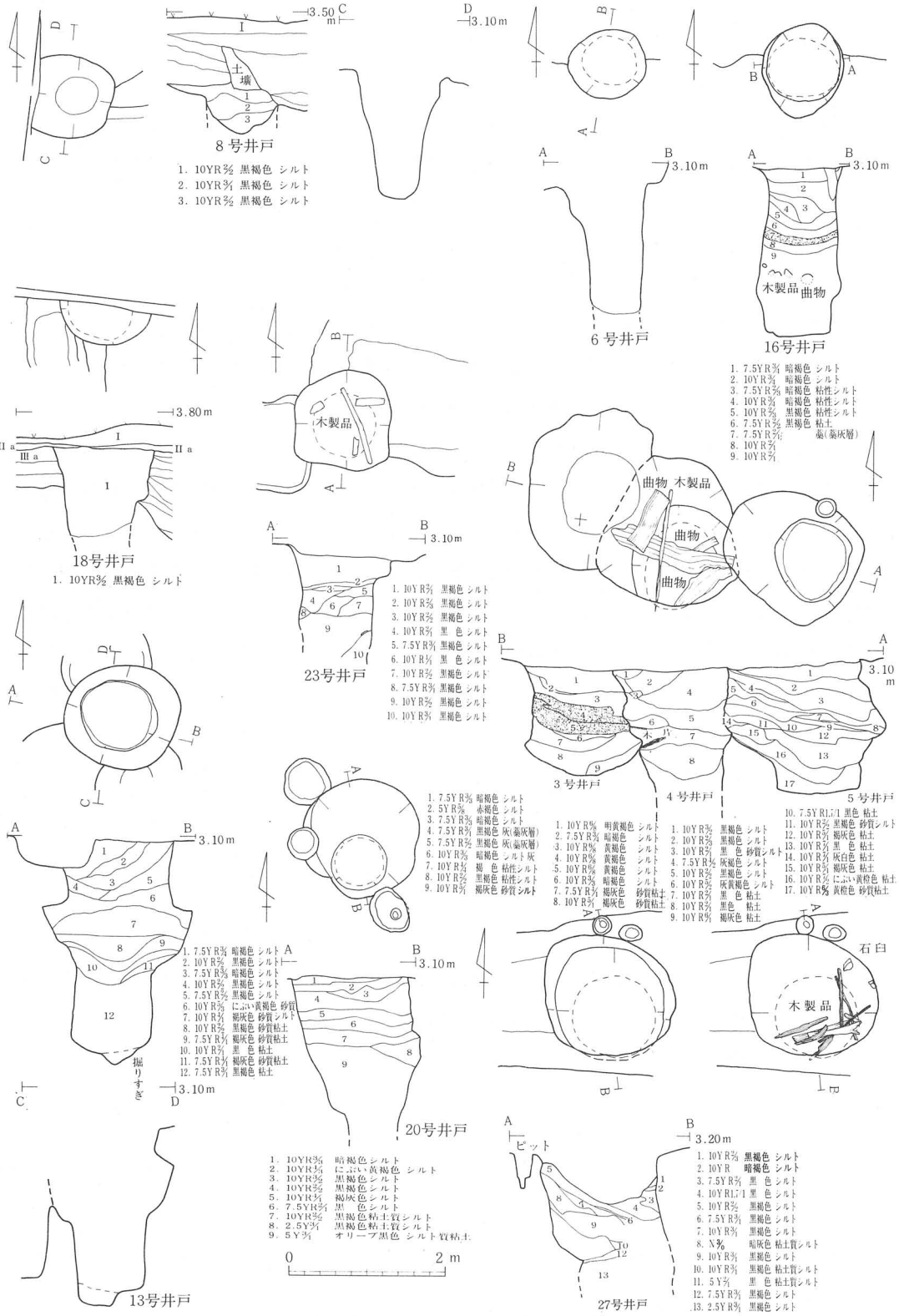
本遺跡より検出された土壙は54基である。このうち、Ⅰ～Ⅳ期に属するものは38基である。Ⅴ期に属するものは明らかでない。さて、各土壙の特徴は第24表を参照されたい。これらの土壙は、およそ４類型12種に分類できる。土壙の平面形は、円形のもの（A）、楕円形を基調とするもの（B）、隅丸方形を基調とするもの（C）、不定形のもの（D）がある。断面は鍋底形（Ⅰ）、皿形（Ⅱ）、舟底形（Ⅲ）がある。これらは、さらに細分できるものがある。B型には楕円形（B_1）と長楕円形（B_2）が、C型には隅丸方形（C_1）と隅丸長方形（C_2）がある。分類はこれらの条件の組合せによって行った。なお、平安時代の土壙も（　）を付して明記した。

A Ⅰ型……７号・８号・11号・23号・25号・36号・(51号)

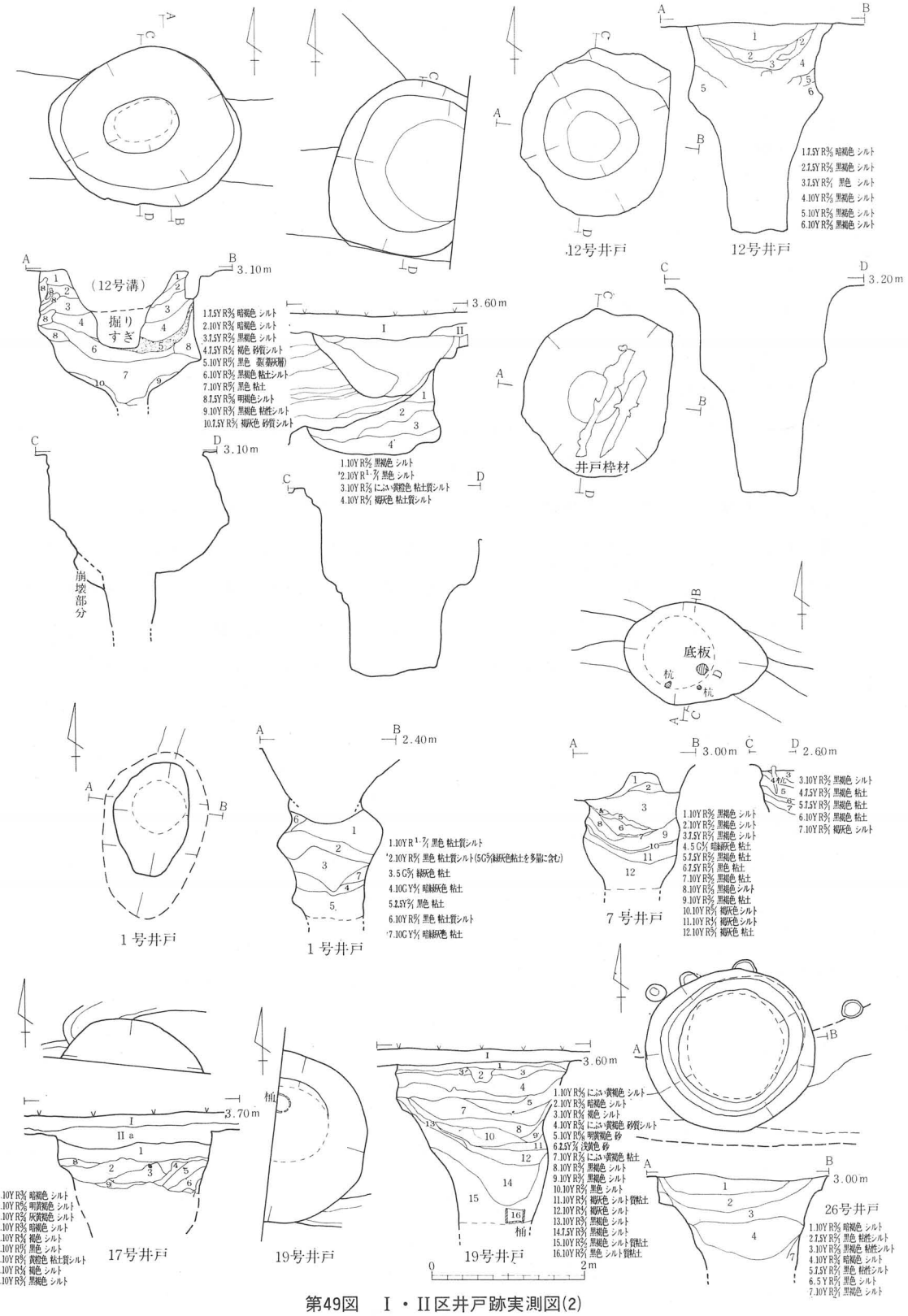
A Ⅱ型……６号・(53号)

B_1 Ⅰ型……９号・15号・(19号・40号)

B_1 Ⅱ型……33号・46号・(17号・21号)



第48図　Ⅰ・Ⅱ区井戸跡実測図(1)



第49図　Ⅰ・Ⅱ区井戸跡実測図(2)

B_2 Ⅰ型……34号

B_2 Ⅱ型……32号？（C型の可能性もある）

C_1 Ⅰ型……1号・14号・24号・26号・28号・29号・35号・37号・41号

（19号・20号・40号）

C_1 Ⅱ型……（30号）

C_1 Ⅲ型……50号

C_2 Ⅰ型……2号・3号・38号・39号・47号（長軸と短軸の差が2倍を越えるもの）

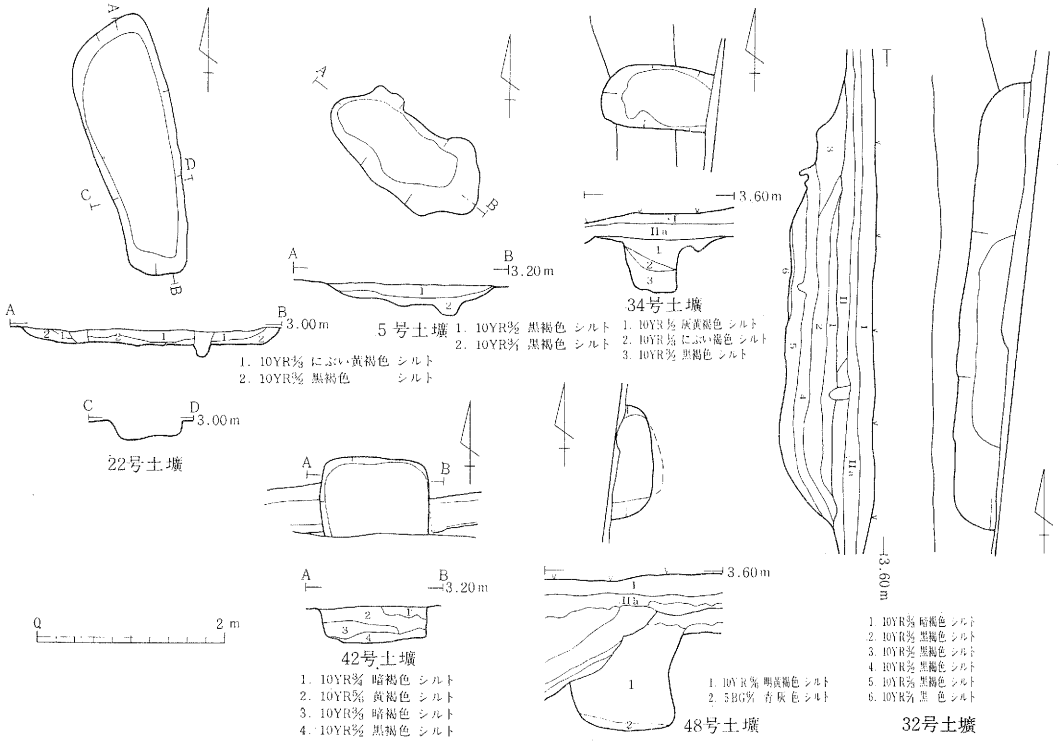
D Ⅰ型……22号

D Ⅱ型……5号

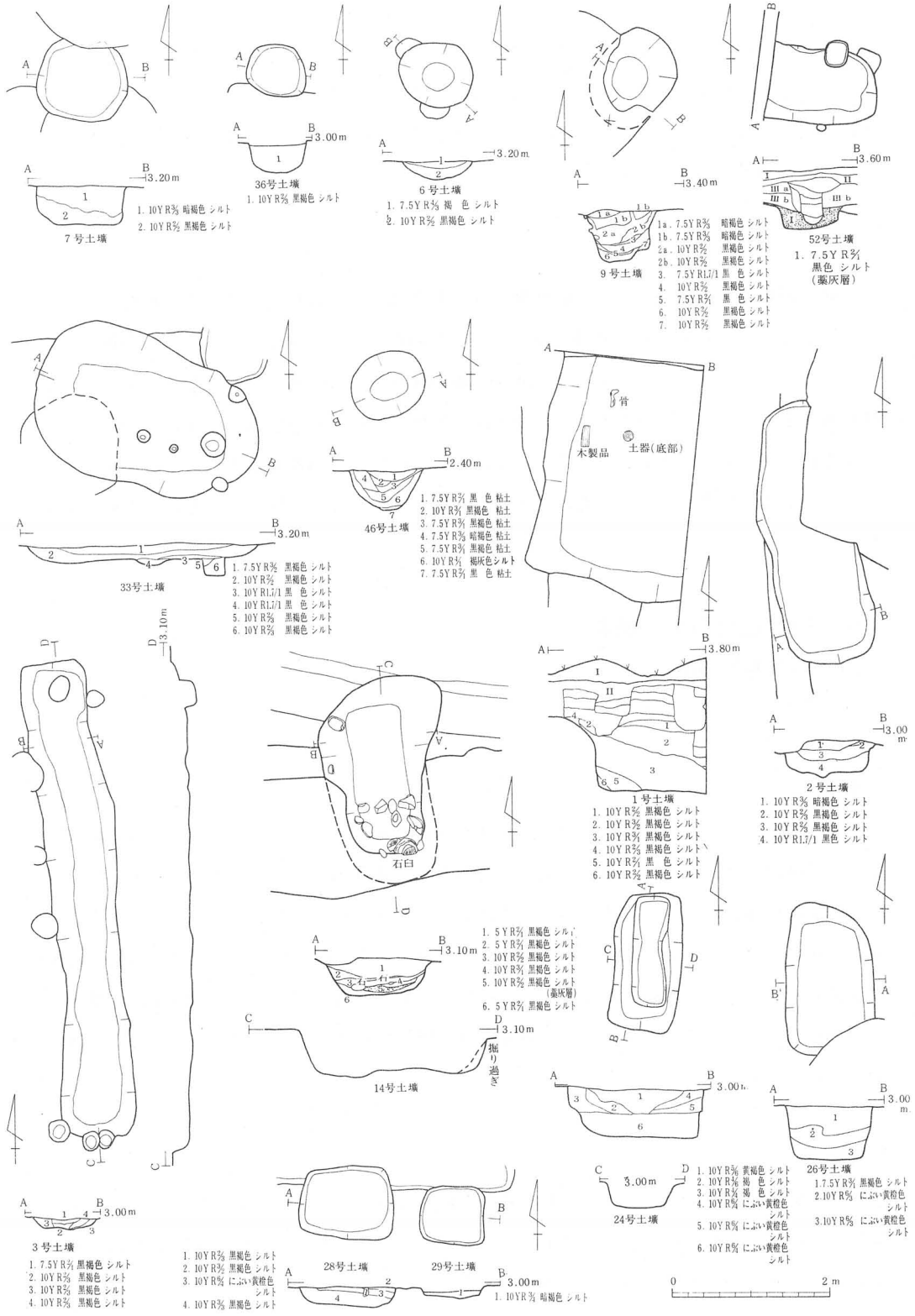
分類不可能なもの……10号・12号・13号・27号42号・45号・48号・54号

（4号・15号・44号・49号）

これらの土壙において、人為堆積と考えられるものは、22号・23号・24号・26号・48号の各土壙がある。しかし、その性格を推定できるような遺物がない。14号土壙は石臼の破片が多く出土している。ゴミ捨て用の穴であろうか。52号土壙は、ワラ灰が充満しており、囲炉裏やカマドの焚口ではないかと考えられる。この土壙と組む建物は、16号建物跡が該当しそうであるが、断定できない。33号土壙は20号建物跡に付属する可能性が強い。C_1 Ⅰ型は偏在性が強く、



第50図　Ⅰ・Ⅱ区土壙（1）


7号土壙
1. 10YR3/3 暗褐色 シルト
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト
36号土壙
1. 10YR3/2 黒褐色 シルト
6号土壙
1. 7.5YR3/3 褐 色 シルト
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト
9号土壙
1a. 7.5YR3/3 暗褐色 シルト
1b. 7.5YR3/3 暗褐色 シルト
2a. 10YR3/2 黒褐色 シルト
2b. 10YR3/2 黒褐色 シルト
3. 7.5YR1.7/1 黒 色 シルト
4. 10YR3/2 黒褐色 シルト
5. 7.5YR3/1 黒 色 シルト
6. 10YR3/2 黒褐色 シルト
7. 10YR3/2 黒褐色 シルト
52号土壙
1. 7.5YR3/1 黒色 シルト (藤灰層)
33号土壙
1. 7.5YR3/3 黒褐色 シルト
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト
3. 10YR1.7/1 黒 色 シルト
4. 10YR1.7/1 黒 色 シルト
5. 10YR3/3 黒褐色 シルト
6. 10YR3/2 黒褐色 シルト
46号土壙
1. 7.5YR3/1 黒 色 粘土
2. 10YR3/1 黒褐色 粘土
3. 7.5YR3/2 黒褐色 粘土
4. 7.5YR3/3 暗褐色 粘土
5. 7.5YR3/2 黒褐色 粘土
6. 10YR3/1 褐灰色シルト
7. 7.5YR3/1 黒 色 粘土
骨
木製品
土器(底部)
1号土壙
1. 10YR3/3 黒褐色 シルト
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト
3. 10YR3/1 黒褐色 シルト
4. 10YR3/2 黒褐色 シルト
5. 10YR3/1 黒 色 シルト
6. 10YR3/2 黒褐色 シルト
2号土壙
1. 10YR3/3 暗褐色 シルト
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト
3. 10YR3/3 黒褐色 シルト
4. 10YR1.7/1 黒色 シルト
石臼
14号土壙
1. 5YR3/1 黒褐色 シルト
2. 5YR3/1 黒褐色 シルト
3. 10YR3/2 黒褐色 シルト
4. 10YR3/1 黒褐色 シルト
5. 10YR3/2 黒褐色 シルト (藤灰層)
6. 5YR3/1 黒褐色 シルト
掘り過ぎ
3号土壙
1. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト
3. 10YR3/2 黒褐色 シルト
4. 10YR3/2 黒褐色 シルト
28号土壙
1. 10YR3/2 黒褐色 シルト
2. 10YR3/2 黒褐色 シルト
3. 10YR5/6 にぶい黄橙色 シルト
4. 10YR3/2 黒褐色 シルト
29号土壙
1. 10YR3/3 暗褐色 シルト
24号土壙
1. 10YR3/2 黄褐色 シルト
2. 10YR3/2 褐 色 シルト
3. 10YR3/3 褐 色 シルト
4. 10YR5/6 にぶい黄橙色 シルト
5. 10YR5/6 にぶい黄橙色 シルト
6. 10YR5/6 にぶい黄橙色 シルト
26号土壙
1. 7.5YR3/1 黒褐色 シルト
2. 10YR5/6 にぶい黄橙色 シルト
3. 10YR5/6 にぶい黄橙色 シルト
0
2 m

第51図　Ⅰ・Ⅱ区土壙(2)

Ⅰ区の北半に集中する。前回の調査においても、この型の土壙に偏在性が認められる。類型別の時期別変遷は明確ではないが、平安時代にB1Ⅰ型がやや多い程度であるが、バラエティーに富む。Ⅰ期ではＡⅠ型、Ⅱ期ではC1Ⅰ型がやや目立つ程度である。時期が下るにしたがって、しだいに土壙数は減少傾向を示す。

ピット

今回の調査（Ⅰ・Ⅱ区）では、建物跡の柱穴も含めて、合計約800個検出された。これらのピット群は、Ⅰ・Ⅱ区とも11号溝を境にして、その北側に偏在する傾向があり、全体の７割以上を占めている。この傾向は、逆に11号溝等が館を区画する堀の傍証資料となる。また、およそ11号溝（Ⅰ・Ⅱ区）の北側のピットの埋土は、黒色～黒褐色系の色調を呈するものが多く、南側は褐色系の色調を呈するものが多い。これはある程度、時期差を示すものであろう。また、ピットの平面形は円形を呈するものが多いが、掘り方ではなく、柱穴そのものが方形を呈するものが少なからず存在する。

６．中・近世の出土遺物

（１）日本製陶磁器

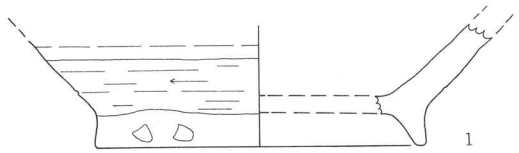
ここでは、中近世（今泉城Ⅰ期～Ⅴ期）の陶器を扱う。

渥美

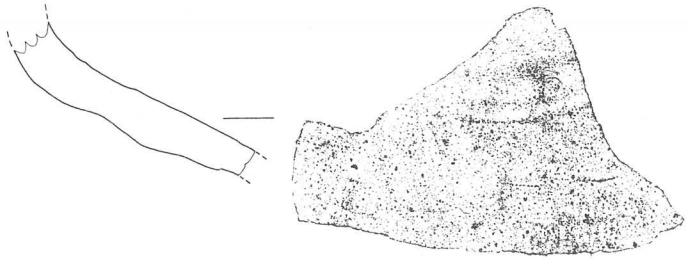
渥美の製品は合計26点出土し、甕・壺・鉢がみられる。いずれも破片で図示できるものは少ない。第66図７は、刷毛目・押印のある甕であろう。鎌倉前半のものと考えられる。第52図５は短頸壺の口縁部、同図７は甕あるいは壺の破片と考えられるもので、割れ口及び外面には磨耗痕が認められる。第52図１は貼り付高台のある鉢である。高台脇にはケズリ、内面には使用痕が認められる。釉は認められない。ほぼ12世紀の製品と考えられる。第54図１は、甕あるいは壺の肩部付近の破片と考えられる。外面には、極めて特徴的な押印がみられる。ほぼ鎌倉初め頃のものであろう。

常滑

常滑の製品は合計134点出土し、県内産の瓷器系陶器に次いで出土量が多い。赤羽一郎氏の編年によれば、第２段階から第３段階にかけてのものが多く出土し、特に後者が多い。常滑の製品には、甕・壺があり、わずかに鉢が加わる。また近世に属すと考えられる灰釉の大平鉢が１点出土している。

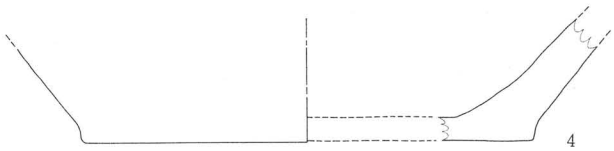

1

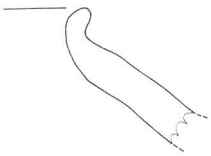
2

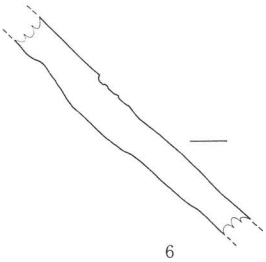

3

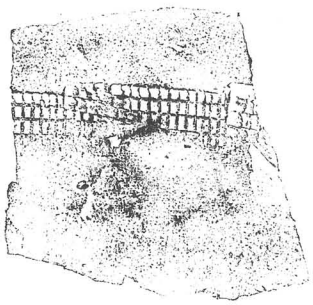
0 10cm

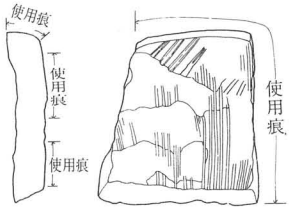
図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	B－7	3号溝	埋土	476	鉢	底部付近	古美	12c		焼成良好
2	B－8	〃	埋土中位	486	甕	胴部	常滑	鎌倉？		外面に押印あり（印花文）
3	〃	〃	1層	441	〃	〃	〃	鎌倉？	自然釉（オリーブ黄5Y 5/4）	外面に押印あり


4

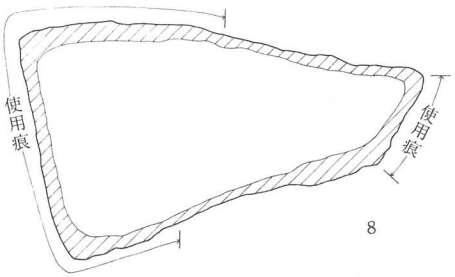

5


6





7

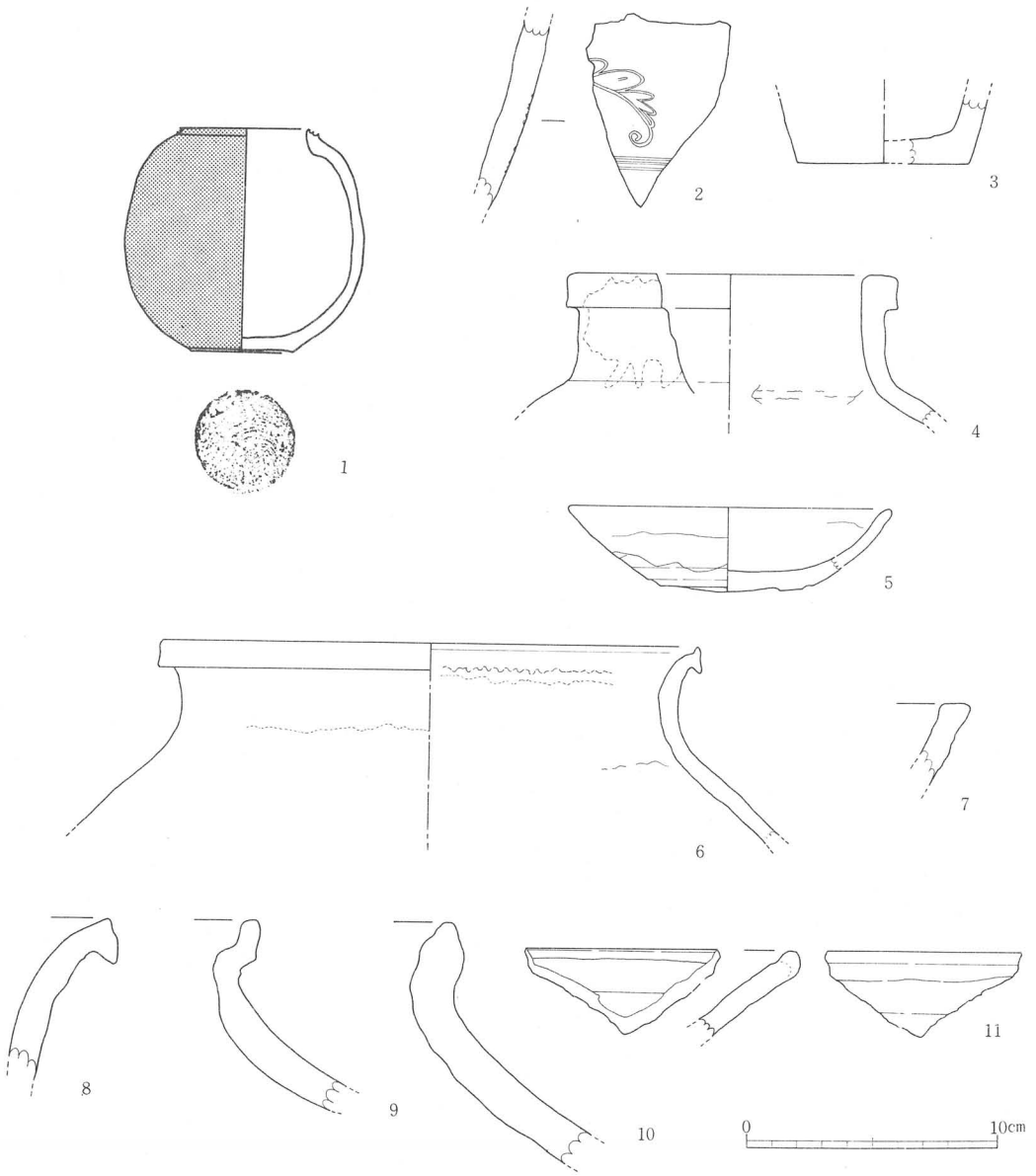


8

0 10cm

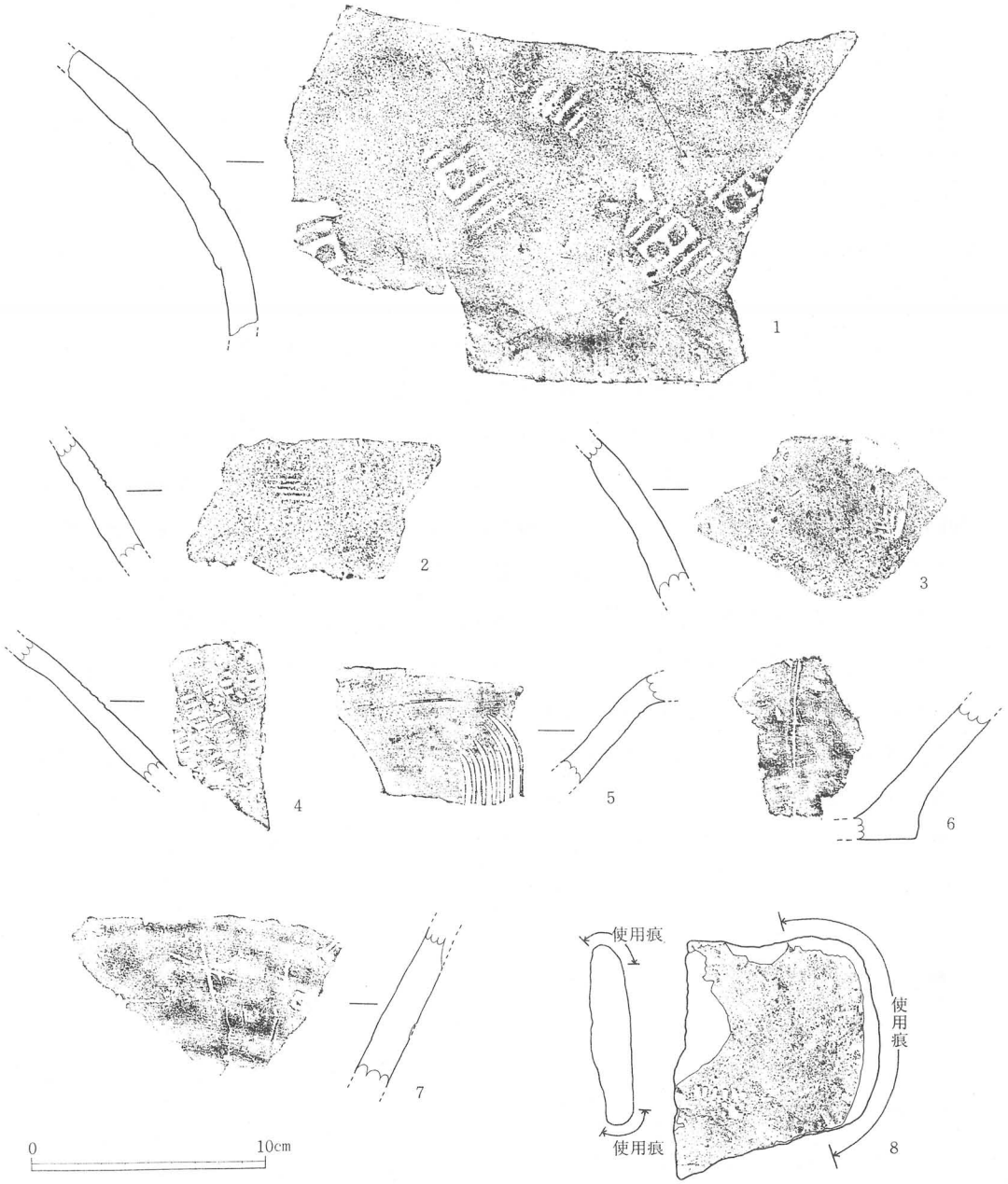
図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	産地	時期	釉	備考
4	B－2	14号溝	埋土	832	鉢	底部	県内	II期		
5	B－3	〃	〃	407	壺	LI縁部	古美	不明	自然釉	
6	〃	〃	〃	〃	甕	胴部(肩)	不明	I期		押印あり。常滑か？
7	B－1	〃	〃	406	〃	胴部	古美	12c？		外面 猫かき（押印）、外面及び断面に磨耗痕あり。
8	B－3	〃	〃	407	〃	〃	県内？	II期		外面の周縁及び断面に磨耗痕あり。

第52図　3号・14号溝跡出土遺物



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	F－5	27号溝	埋土上層	586	肩衝茶入れ	口縁～底部	瀬戸	III 期	鉄釉(緑黒10G5/1)	
2	F－4	11号溝	2 層	526	梅瓶or瓶子	胴 部	〃	〃	灰釉(オリーブ灰10Y5/1)	
3	E－4	11号溝ベルト	3 層	863	小壺	底 部	東北？	II 期		
4	〃	〃	1 層	622	壺	口縁～胴部	常滑	III 期	自然釉	
5	〃	28号溝	埋土上部	541	皿	口縁～底部	瀬戸	〃	灰釉(オリーブ黄7.5Y5/4)	内外面に黒色の付着物あり、見込みにトチン跡1ヶ所あり
6	〃	11号溝	底	17	甕	口縁～胴部	常滑	II 期	自然釉	常滑III期
7	〃	〃	埋土	955	鉢	口縁部	県内	II～III期		
8	F－4	〃	2・3層	664	甕	〃	不明	II 期		
9	E－4	〃	底	845	〃	〃	東北？	II 期		
10	F－4	〃	〃	970	〃	〃	県内	II 期		
11	B－4	〃	〃	314	鉢	〃	常滑	鎌倉初期	自然釉(内面)	

第53図　11号・27号・28号溝跡出土遺物(1) 1½、6⅙



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	F－3	11号溝（南溝）	東壁セクション1層	844	甕又は壺	胴部	渥美	I期	自然釉(水色)	外面に押印あり。
2	II区	〃	2層	603	壺？	〃	常滑	II期	自然釉	外面に刷毛目あり。
3	E－3・4	11号溝	3層	841	甕	〃	〃	〃		外面に押印あり。
4	F－4	〃	2層	610	甕又は壺	〃	〃	不明		外面に押印が連続している。
5	B－4	〃	1層	265	擂鉢	〃	県内	III期？		櫛目7本あり。 胎土に白い針状のもの含む。
6	F－4	11号溝（南溝）	3層	726	〃	底部	不明	II期？		櫛目2本あり。 使用痕あり。
7	E－4	11号溝	底	642	捏鉢	胴部	〃	不明		内面に押印あり。
8	〃	〃	1層	527	甕	〃	常滑	〃		格子状の押印あり、断面に磨耗痕あり。

第54図　11号・28号溝跡出土遺物(2)

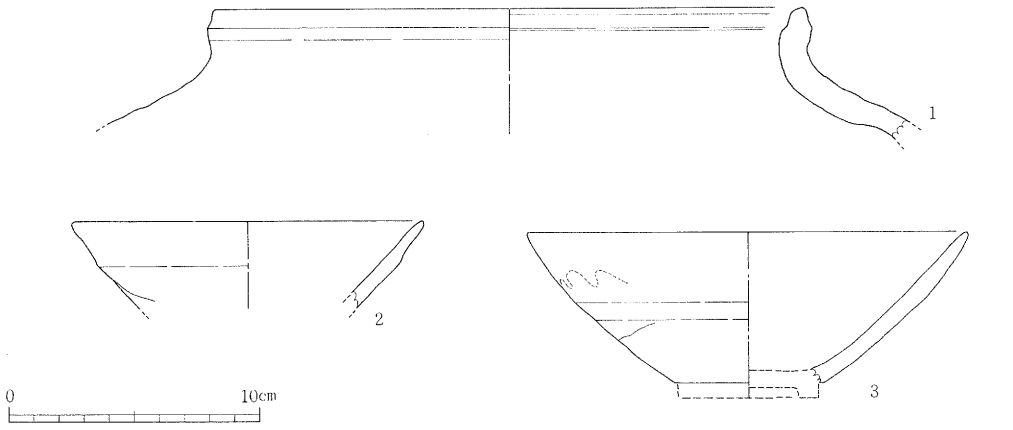
第62図５は、甕あるいは壺と考えられる破片で、菊花状の押印が認められる。第61図３は単線の三筋壺の破片と考えられる。およそ12世紀後半頃のものであろう。第66図３は産地が明確ではないが、おそらく常滑の甕の底部であろう。同図６はヘラケズリ後に高台を貼り付け、ナデが施されたと考えられる鉢である。12世紀の製品と考えられる。第64図３は産地は明確ではないが、江戸時代中期頃と考えられる鉢である。内外面ともに体部上半から口縁部にかけて、浅黄色の灰釉（？）がみられる。それ以下は露胎となり、底面は回転ヘラケズリである。第60図２は比較的小型の甕あるいは壺の底部の破片である。第52図６は、押印がほぼ１列に並ぶ甕の破片であろう。焼成不良で産地は明確ではないが、常滑の製品と考えられる。第52図２・３は甕あるいは壺と考えられ、２は印花文・３は格子状が不明瞭ながら認められる。第53図４は口縁部が肥厚する壺で、楢崎彰一氏の御教示によれば、応永３年銘のある千葉県清澄寺経塚と類似する。室町初め頃の製品であろう。口縁部には灰白色や紫色の釉がみられる。他に類似する胴部破片が１点ある。第53図６は常滑の製品では最も様相のわかるものである。口縁部には縁帯があり、釉の量も多い。赤羽氏の第３段階の甕であろう。同様の口縁部破片が他に２点ある。縁帯が頸部に密着する甕はない。第53図11は内面にも自然釉がかかる鉢である。鎌倉初期（13世紀）の製品であろう。第54図２～４・８はいずれも甕あるいは壺の破片と考えられる。種々の押印が認められるが、２は工具痕と考えられる。第57図６は甕の底部破片と考えられる。底部内面には炭化物が、外面には焼台と考えられる礫が付着している。同図７は押印のみられる甕の肩部の破片である。同図８は底部中央が盛り上がる甕で、底面付近の外面には明瞭なナデがみられる。

瀬戸

瀬戸の製品は合計52点出土し、およそ13世紀～15世紀中頃の製品がみられ、わずかに近世初期と考えられる皿が１点出土している。特に14世紀末から15世紀中頃の製品は11号・21号溝の埋土上部より多く出土し、溝の埋没年代をよく示している。

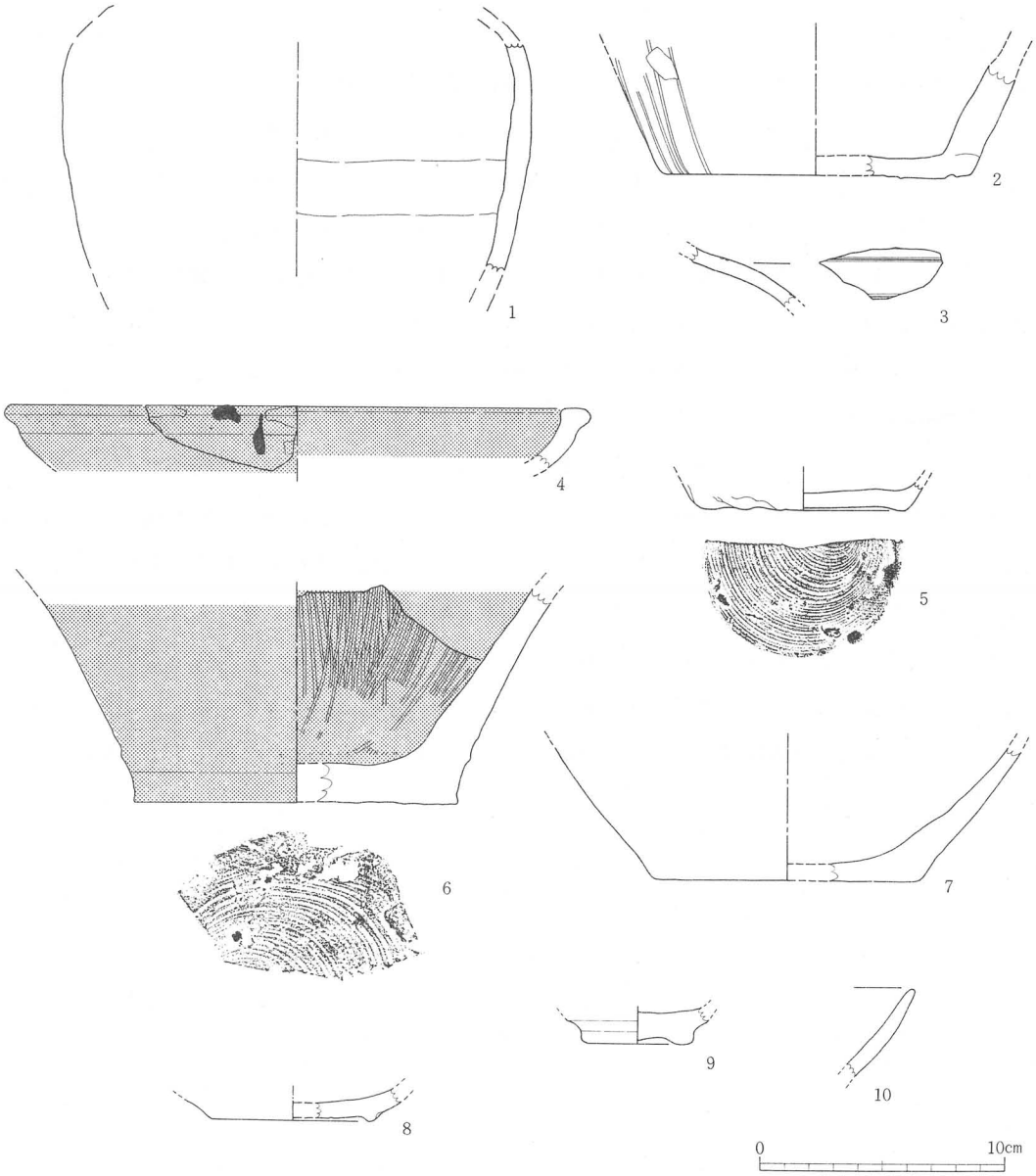
第55図２は口縁部の器厚が薄くなる灰釉の平碗で、外面の胴部下半は露胎になるものと考えられる。15世紀前半の製品であろう。同図３は２と同様、灰釉平碗であり、外面の胴部下半は露胎でケズリがみられる。15世紀初めの製品と考える。第64図９は１号溝の底部より出土したが、溝の年代とは一致しない。溝構築時に混入したものであろう。鉄釉の瓶子と考えられ、内外面ともに鉄釉が施釉されている。底部には回転糸切り痕がみられる。内面の鉄釉には、さらに灰白色の釉が流れている。14世紀末～15世紀初め頃の製品と考えられる。第53図１は鉄釉の肩衝茶入れで、底面には回転糸切り痕が認められる。15世紀初めのものである。同図２はオリーブ灰色の灰釉の施釉された梅瓶あるいは瓶子と考えられる。ほぼ鎌倉末期（14世紀前半）の

ものである。同図５は口縁部の内外のみ施釉のみられる灰釉皿である。高台はケズリ出しによるものである。見込みにはトチン跡がみられる。第58図１は灰オリーブ色の灰釉が内外面の胴部上半に施釉された袴腰香炉である。底部には回転糸切り後、粘土を貼り付けて三脚としている。およそ15世紀中頃の製品と考えられる。同図２は浅黄色の灰釉が施釉されたおろし皿である。内面は使用頻度が高いために、釉がとれ露胎となっている。１と同様ほぼ15世紀中頃の製品と考えられる。同図３～５は鉄釉天目茶碗である。これらの露胎部分にはケズリ調整が認められる。３は15世紀第１四半期、4は同第2四半期に、また５は15世紀前半の製品である。４の割れ口の一部には漆（？）の付着が認められ、接合したことを示すものであろう。第59図５は浅黄色の灰釉が施釉された天目茶碗あるいは平碗であろう。15世紀頃の製品であろう。同図10は灰釉皿の底部破片と考えられる。江戸時代以後のものであろう。第56図１は緑灰色の灰釉瓶子の胴部破片である。およそ鎌倉初期（13世紀）の製品であろう。同図２は透明度の高い緑色の灰釉梅瓶である。外面には単線と複線の縦位沈線がみられる。底部外面は釉が残り、トチン跡がみられる。14世紀の製品であろう。同図３はオリーブ灰色の灰釉の瓶類で、器厚の薄さなどから花瓶ではないかと考えられる。外面には２本１組の平行沈線が２段みられる。ほぼ14世紀頃の製品であろう。同図５は内面に灰釉が施釉され、外面は露胎で、１部に釉の付着や流れた釉がみられる。底部の内外面にトチン跡が認められる。器種は浅鉢と考えられ、15世紀の製品であろう。同図10は表採品で、灰釉の平碗であろう。外面の灰釉は、体部上半まで施釉されている。15世紀の製品であろう。



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	A－3	12号井戸	埋土	293	甕	口縁部	県内	IIorIII期		
2	〃	〃	埋土上部	134	平碗	口縁部～胴部	瀬戸	〃	灰釉(灰白色5Y7/2)	貫入有り、ロクロ目
3	〃	〃	埋土	620	〃	〃	〃	III期 15C初	灰釉(浅黄色7.5Y7/3)	貫入有り。内面の口縁下に黒い付着物有り。

第55図　12号井戸跡出土遺物　1/6



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	A－8		II層	22	瓶子	胴部	瀬戸	I 期	灰釉（緑灰色7.5GY5/1 にぶい褐色7.5YR5/3）	
2	B－8		II層下	16	梅瓶	胴部～底部	〃	II 期	灰釉（灰オリーブ色7.5Y6/2）	外面に沈線数本有り。内面に斑点状に釉が入る。底部にトチン跡有り。
3	B－1		II層	175	壺？	胴部	〃	II～III期	灰釉（灰褐色7.5YR5/2）	平行する２本の沈線が２ヶ所に見られる。
4	B－6		〃	24	擂鉢	口縁部	不明	IV 期	鉄釉（オリーブ黒５Y3/2）	口縁部外面に黒褐色の付着物が見られる。
5	B－5		II層下	151	浅鉢	底部	瀬戸	III 期	灰釉（オリーブ灰色10Y5/2）	貫入有り。内外面の見込と底部の重ね焼のトチン跡が４つ？見られる。
6	A－5		〃	184	〃	胴部～底部	県内?	〃	鉄釉（灰赤色2.5YR5/2）	櫛目が８本単位に有り。外面底部よりに工具跡有り。
7	A－6		II層	29	擂鉢？	〃	不明	不 明	無釉	
8	F－4		〃	93	皿	底部	美濃	IV 期	黄瀬戸（にぶい黄褐色10YR5/3）	高台有り。重ね焼の輪トチン（径３cm）が高台内に見られる。
9	E－3		〃	82	〃	〃	唐津	〃	透明釉（灰白色５Y7/1）	ケズリ高台有り。見込に重ね焼の跡あり。
10	表採			1040	碗	口縁部～胴部	瀬戸	不 明	灰釉（浅黄色５Y7/3）	貫入有り。

第56図　表採・基本層位出土遺物（陶器）

県内産無釉陶器

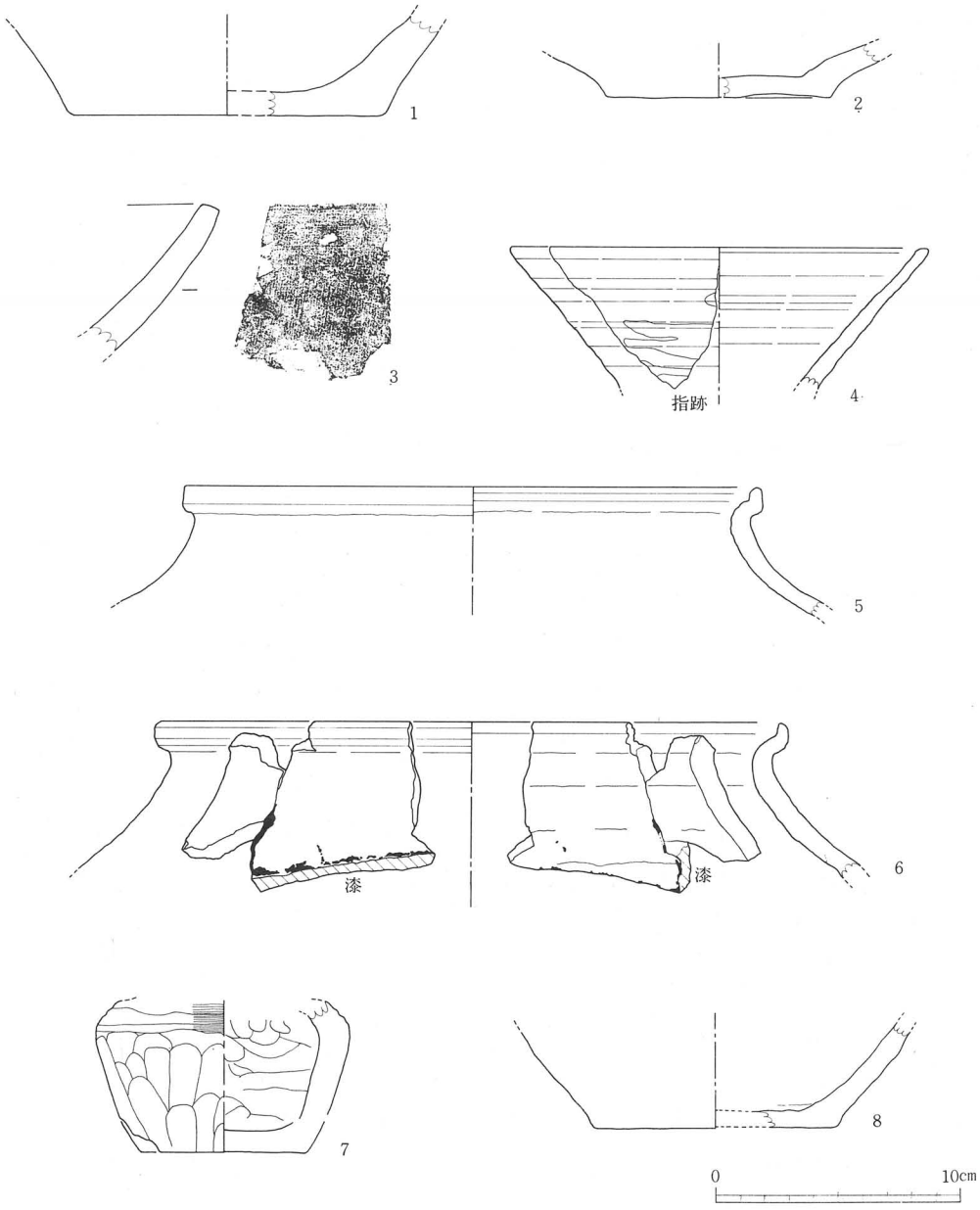
ここでは、東北窯を中心に県内に生産地があると考えられるものを扱う。なお一部県内と限定できないものや不明のものも扱っている。分類の基準は後述するごとく、胎土を主体とし行った。

〔東北窯あるいはその類似品〕

後述するごとく、東北窯の資料と比較して、胎土の共通するもの、あるいは類似するものを一応ここでは東北窯の製品あるいは類似品と推定した。しかし、東北窯と断定する基準がまだ確定していない現状であり、今後さらに検討を要する課題である。これはひとり東北窯に限らないことはいうまでもないことであろう。

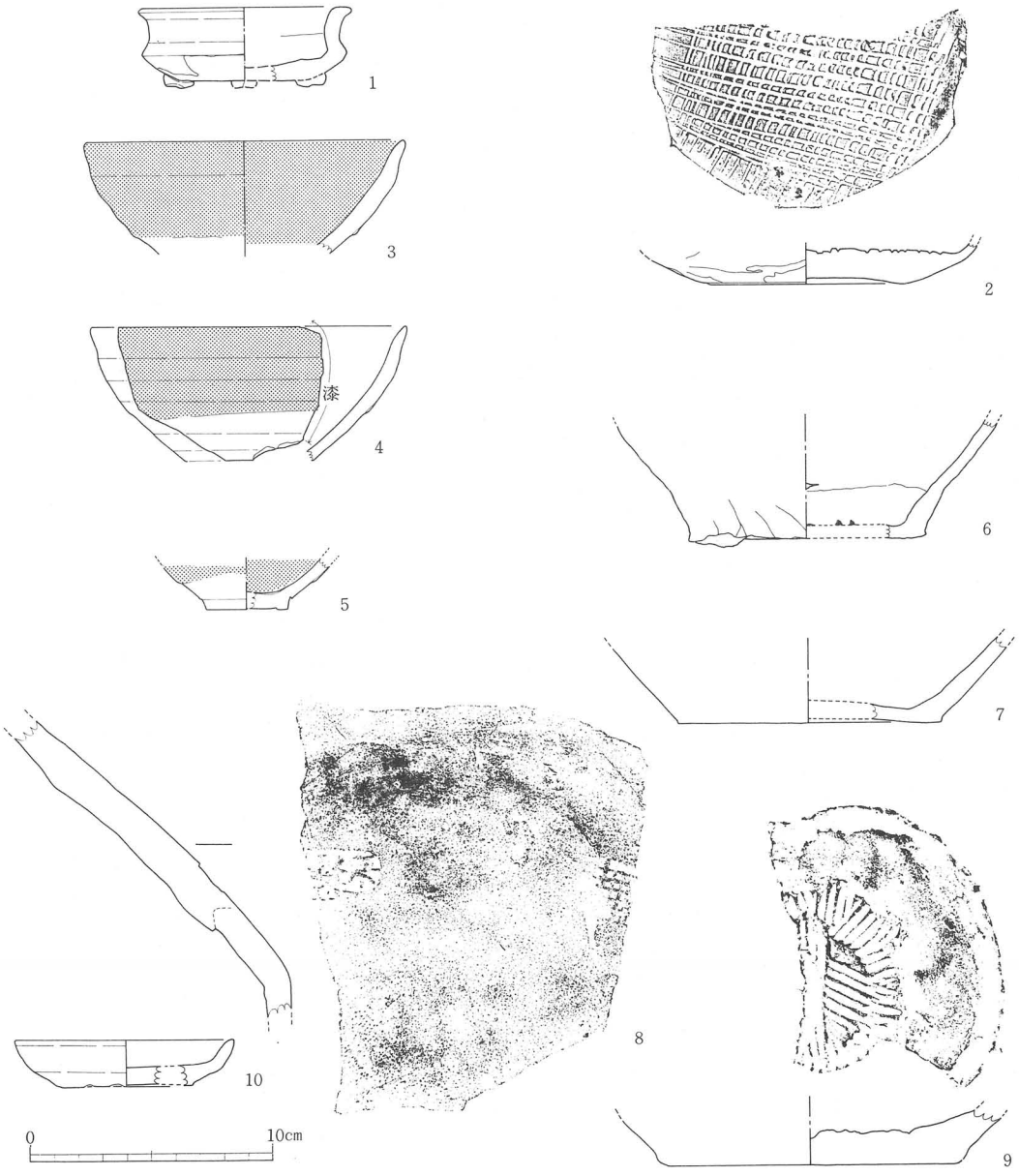
さて、東北窯の製品あるいは東北窯類似品と考えられるものには、甕・壺・鉢があり、合計210点である。

甕はいずれも、受口状の口縁部を特徴とするが、受口が明確なもの（１類）と寸詰りで不明確なもの（２類）がある。壺は胴下半部のものが存在するが、明確ではない。鉢は東北窯の表採品中には、口唇部の断面が丸頭のものと角頭のものがあり、角頭類にはさらに口唇部の凹むものや、段差のあるものなどがある。本遺跡では変化のない角頭のものばかりである。鉢の胴部の特徴には、外傾してそのまま立ち上がるものと、口唇部付近でゆるく屈曲するものなどがある。今回の調査では、東北窯の可能性のある櫛目をもつ擂鉢は出土していない。ところで２類としたものは、他の生産地の可能性が強い。第62図４は角頭の鉢で、口縁部付近にゆるい屈曲が認められる。外面には自然釉がみられるが、口唇部と内面にはみられない。第55図１は受口部が寸詰まりで明確さを欠く２類の甕である。胎土は東北窯のものと類似する。第61図１は甕の底部と考えられ、内外面ともにナデである。同図２は白色の吹き出しのある２類に属する甕の口縁部破片である。焼成は甘い。第66図２は口縁部付近がやや脹らむ角頭の鉢である。第60図１は胴部が急激に立ち上がる点から壺と考えられる。外面の底部付近に記号（ヘラ書きの沈線）が認められる。これは窯印かどうかは不明である。同図４は甕あるいは壺の胴部破片で、指頭による記号が認められる。この記号は１と同様のものであろう。第52図４は、甕の底部破片であろう。同図８は甕の胴部破片と考えられ、割れ口とその周辺部は磨耗している。陶片を二次利用したものであろう。第53図３は小型の壺と考えられる。底部内面には灰が被っている。同図７は角頭の口縁部をもつ鉢である。口縁部には灰が被る。同図９・10は甕の口縁部破片で、９は１類に、10は２類に属する。特に10はほとんど受口状を示さなくなっており、焼成は甘く赤褐色を呈する。第57図１は櫛目のない捏鉢である。内面には使用痕が認められる。同図２は内外面にナデのある甕である。同図３は角頭の鉢で、口縁部外面には横ナデが施される。同図４は外傾しながら立ち上がり、口縁部が角頭の捏鉢である。口縁部の内側と胴部下位に使用痕



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	種類	部　位	産地	時期	釉	備　　考
1	F－6	21号溝	埋土	895	擂鉢	底　部	東北？	II期	無釉	底部、内面、使用痕あり
2	〃	〃	1層	613	甕	〃	〃	〃	〃	
3	F－8	〃	〃	616	浅鉢	口縁部	〃	〃	〃	口縁部、内・外面ヨコナデ
4	F－5	〃	〃	621	擂鉢	口縁～胴部	〃	〃	〃	外面に指跡あり、内面に使用痕あり
5	F－7	〃	〃	614	甕	〃	〃	〃	〃	褐色粒子の吹出しあり、内面にわずかに炭化物付着
6	F－8	〃	2層	807	〃	〃	〃	〃	〃	褐色粒子の吹出しあり、割れ目に付着物あり（漆）
7	F－7	〃	3層	585	小壺	胴部～底部	〃	〃	〃	内・外面共灰かぶりあり、肩部外面ヨコナデ、胴部、内・外面共粗いナデ
8	F－6	〃	2層	720	甕	〃	〃	〃	〃	

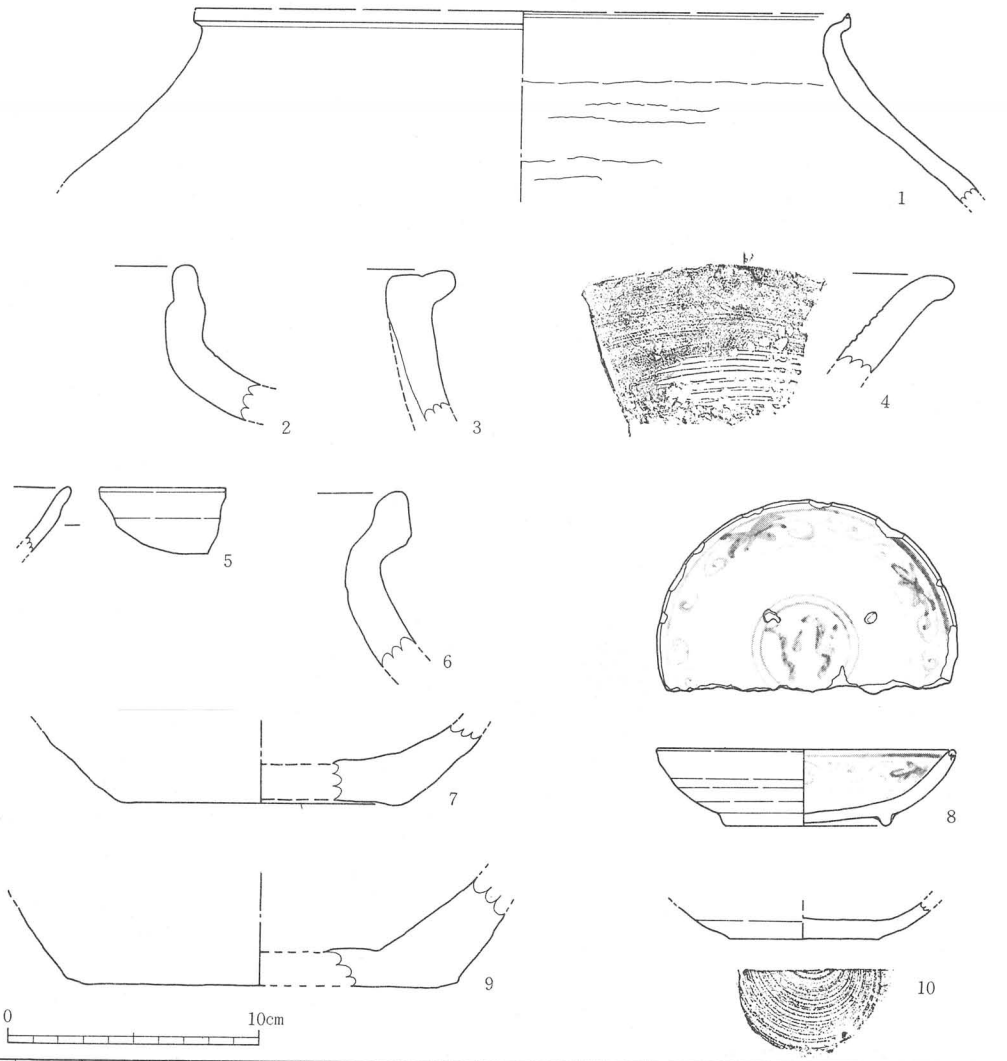
第57図　21号溝跡出土遺物(1)　2・4・5・6・8は1/6



図版	グリット	遺　構	層　位	遺物番号	種　類	器　形	部　位	産　地	時　期	釉	備　考
1	F－7	21号溝	1　層	584	陶　器	袴腰香炉	口縁～底部	瀬　戸	III　期	灰釉(灰オリーブ7.5Y5/2)	脚３本。
2	F－8	〃	〃	572	〃	おろし皿	底　部	〃	〃	灰釉系(浅黄7.5Y7/3)	櫛目４～５本単位。
3	〃	〃	〃	569	〃	天目茶碗	口縁～胴部	〃	〃	鉄釉（黒N1.5/0）	貫入あり。
4	〃	〃	〃	571	〃	〃	〃	〃	〃	鉄釉（黒N1.5/0）	割れ口に付着物あり(漆？)
5	〃	〃	〃	570	〃	〃	胴部～底部	〃	〃	鉄釉（黒N1.5/0）	貫入あり、割れ口に漆の付着あり。
6	〃	〃	2　層	769	〃	甕	〃	常　滑	II　期	自然釉（内面）	底部に黒色の付着物あり。
7	〃	〃	〃	772	〃	〃	底　部	〃	〃		
8	〃	〃	〃	720	〃	〃	胴　部	〃	〃	自然釉	押印あり。
9	F－7	〃	1　層	608	〃	擂　鉢	〃	県　内	III　期		内面に整然とした櫛目が並ぶ。胎土に白い針状のもの含む。
10	〃	〃	〃	612	土師質土器	皿	口縁～底部		III　期		内面 ロクロナデ 外面 ロクロナデ 底部 回転糸切り。

第58図　21号溝跡出土遺物(2)　6・7 1/6

が認められる。また胴部外面に左手の指の圧痕が認められる。同図５は１類に属する甕である。口縁部の内外面には横ナデ、それ以下は内外面ともに粗いナデが施される。褐色の吹き出しがみられ、内面には炭化物が付着している。同図６は１類に属する甕で、調整は先の５と同様で



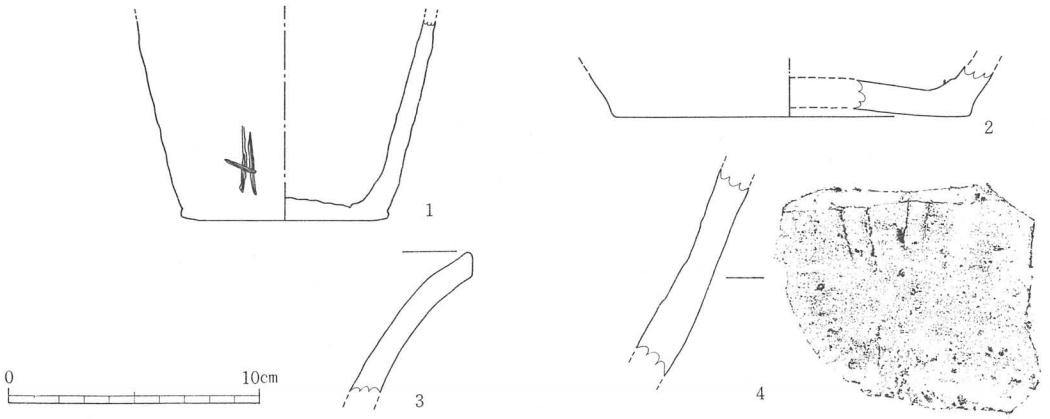
図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	B－4	12号溝	埋土	246	甕	口縁～胴部	県内？	不明		焼きが甘い　内外とも剥離が多い（かなり使いこんだ様子）
2	〃	〃	埋土上部	311	〃	口縁部	東北	Ⅳ期		割れ口に漆が付着
3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	県内？	〃		胎土に金雲母含む
4	A－1・2	16号溝	埋土	68	擂鉢	〃	県内	〃		胎土に白い針状のもの含む　燻焼
5	A－5	9号溝	埋土中位	501	天目茶碗	〃	瀬戸	Ⅲ期	灰釉(浅黄色7.5Y⅔)	貫入あり
6	F－3	29号溝	セクション北1層	742	甕	〃	県内	Ⅱ期	自然釉	
7	E－3	〃	1層	701	甕？	底部	不明	〃		従来の県内の胎土、色調と異なる（県内産で未発見の窯か？）
8	E－5	25号溝	確認面	91	志野織部小皿	口縁～底部	美濃	Ⅳ期	長石釉(？)	文様　内面　水鳥　十蔓草文 見込みに円錐ピン（３本）跡あり元屋敷窯並行
9	E－4・5	26号溝	1層	389	甕	底部	不明	〃		焼きが甘い
10	A－4	1号竪穴遺構	1層	496	皿	〃	瀬戸	〃	灰釉	

第59図　中・近世溝（９・12・16・25・26・29号）、１号竪穴遺構出土遺物　１は⅙

ある。内面には積み上げ痕が残る。また、割れ口やその周辺には漆の付着が認められ、接合痕と考えられる。同図７は小型の壺である。外面は縦位のナデツケ後、頸部に横ナデが施され、内面は粗いナデが施され、肩部に指頭痕が認められる。同図８は甕の底部破片である。第59図１・２・６はいずれも１類に属する甕である。１は口唇部がやや尖鋭化している。焼成は甘く、内外面ともに剥落が著しい。この割れ口には漆が付着している。１は県内産の製品としたが、明確ではない。第62図１は外傾しながら立ち上がる角頭の鉢（捏鉢？）である。

〔胎土に白針を含むグループ〕

このグループは、酸化炎焼成で焼成の甘いものが多いが、その中でも硬質のものと軟質のものがある。前者はおよそII期の遺構を中心に出土する傾向があり、今のところ甕・鉢が判明している。後者はおよそIII期～IV期に属する遺構を中心に出土する傾向があり、櫛目の太い擂鉢・甕（？）がある。これらは器形等を十分理解できるものがほとんどなく、図示できたものは、後者の擂鉢のみである。現在確認しているものは、合計45点である。第62図３は６本単位の櫛目のある燻焼による瓦質擂鉢である。同図９は５本単位の櫛目のある酸化炎焼成の擂鉢である。胎土は精選され、砂粒はほとんど含まない。第65図６は口唇部付近が大きく外反する擂鉢で、口縁部内面には、５本単位の櫛目が横位に施される。器表面は剥落が著しい。第54図５は擂鉢の口縁部付近の破片である。櫛目は７本単位かと考えられる。第58図９は６本単位の櫛目がある瓦質の擂鉢で内面は燻焼である。外面の底部付近には縦位のヘラナデが整然と施される。第59図４は６本単位の横位の櫛目があり、燻焼の瓦質擂鉢である。第71図１は櫛目がない捏鉢と



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	B－2	15号溝	埋土	150	壺	胴部～底部	県内	不明		外面 刻線３本あり（ヘラ描き記号）。
2	A－2	〃	〃	157	甕	底部	常滑	〃		
3	B－2	〃	1層	296	鉢	口縁部	県内？	〃	自然釉	
4	〃	〃	埋土	147	〃	胴部	県内	〃		外面 １図と同様と思われる線あり。但し、指描きである。

第60図　15号溝跡出土遺物 １は⅙

考えられる口縁部破片である。内面には三本沈線による記号が認められる。同図３は５本単位の櫛目のある擂鉢底部である。底部内面に十字形の櫛目が特徴的である。

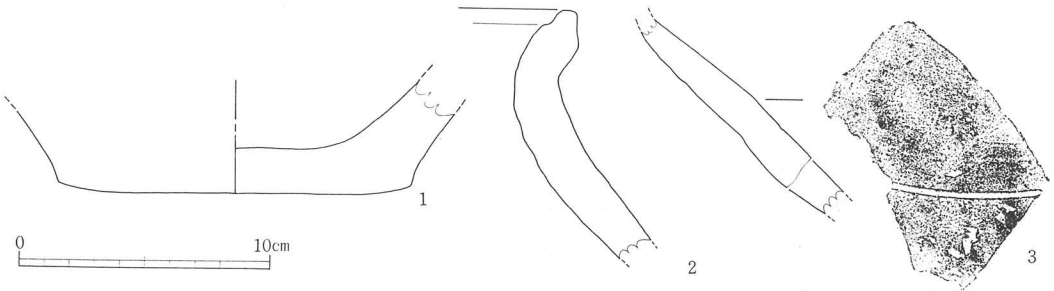
〔胎土に金雲母を含むグループ〕

このグループは極めて量が少なく、わずか３点のみである。９号掘立柱建物と12号溝から出土しており、このグループの年代はIII期末～IV期頃のものであることがわかる。生産地は不明であるが、仙台市内から出土する縄文土器等にも金雲母を含むものがあることから、一応県内を想定している。

第59図３は口唇部が折れ曲がり、その中央には沈線が巡る。おそらく胴部の脹らむ甕であろう。第62図10は８本単位の櫛目のある擂鉢で、内面は燻焼になっている。

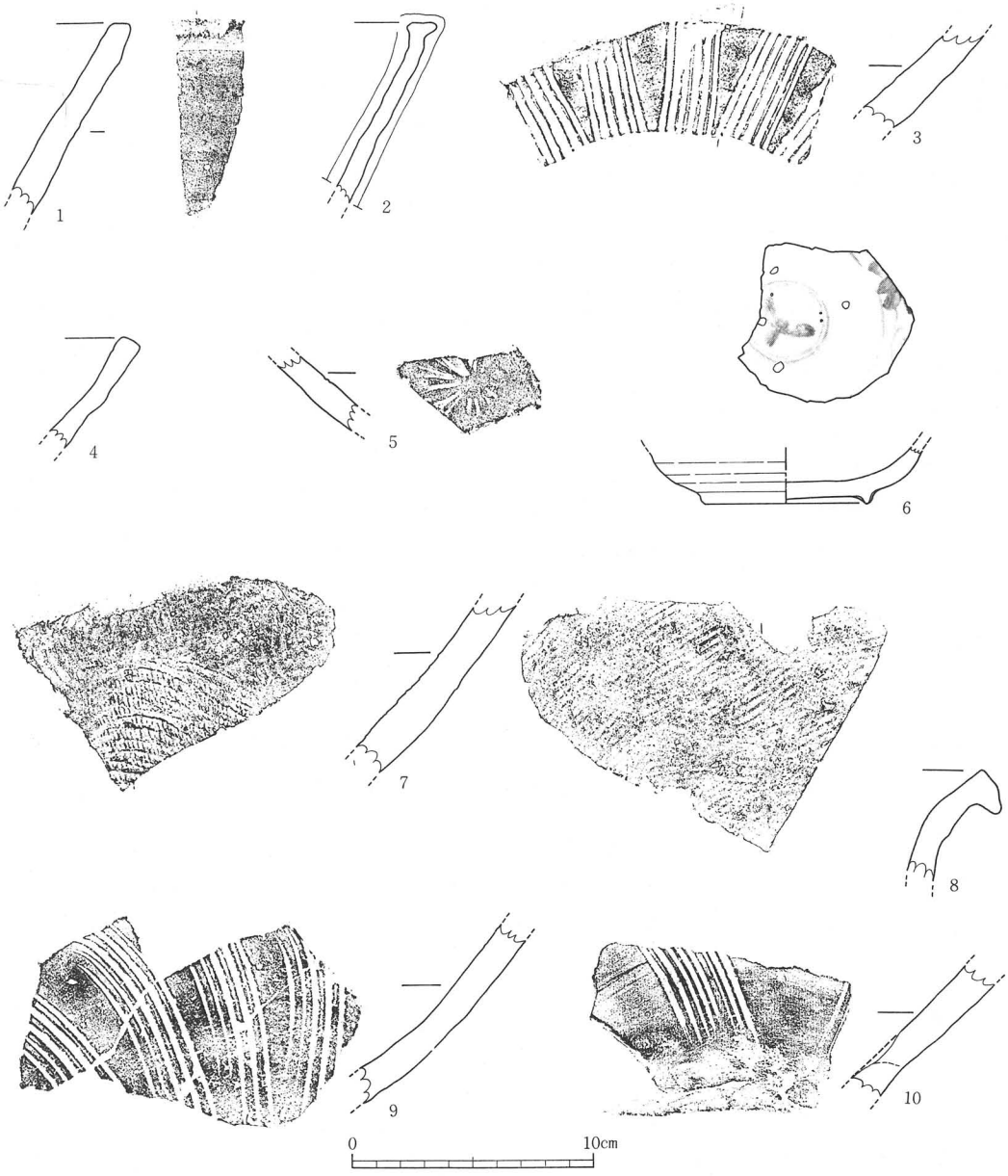
産地不明の中世無釉陶器

第62図７はIV期の遺構（37号土壙）より出土した甕の破片である。外面には平行叩き目、内面には青海波が施され、さらに縄目の叩き目（？）がみられる。須恵器と同様の調整技法をとるが、須恵器そのものではないと考えられる。長石・石英等の砂粒を含み、焼成は酸化炎で良好である。色調はにぶい赤褐色を呈する。中世に属するものと理解したい。同図８は環元炎焼成で須恵器系陶器の甕であろう。これと同一個体と考えられるものに第53図８がある。いずれも12世紀～13世紀の製品であろうか。第66図１は胎土に白色砂礫（長石？）を多く含む擂鉢である。信楽の製品に類似するが、断定できない。およそ室町時代の製品であろうか。第65図４は７本単位の櫛目のある擂鉢である。芹沢長介氏の御教示では、山形県米沢市の戸長里窯（織部系）の製品に類似する。とすれば、この擂鉢は16世紀後半のものであろう。同図10・11は赤褐色を呈する甕の破片である。楢崎彰一氏より、15世紀頃の備前に類似するとの御教示をいた



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	B－4	10号井戸	埋土下部	443	甕	胴部～底部	県内	鎌倉？	——	
2	〃	〃	埋土	638	〃	口縁部	〃	II期	——	白色粒子の吹き出し有り。胴部に刷毛目のようなもの有り。
3	〃	〃	〃	〃	壺	胴部	常滑	I期	——	外面に沈線有り（三筋壺か）。

第61図　10号井戸跡出土遺物



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	B−7・8	3号土壙	埋土	326	鉢	口縁～胴部	県内	IIorIII期		焼きが甘い
2	A−3	9号土壙	〃	105	擂鉢	口縁部	不明	Ⅳ期？	鉄釉(暗赤褐7.5R⅜)	
3	B−2	14号土壙	埋土下層(5～6層)	283	〃	胴部	県内	〃		櫛目6本単位　胎土に白い針状のもの含む　燻焼
4	E−6	38号土壙	埋土	1018	鉢	口縁部	〃	不明		
5	E−7	24号土壙	〃	977	壺or甕	胴部	常滑	〃	自然釉	押印(印花文)
6	F−6	33号土壙	3層	1503	志野織部小皿	胴部～底部	美濃	Ⅳ期		文様 内面 蔓草文(にぶい橙2.5YR⅝　灰赤2.5YR⅜)
7	〃	32号土壙	1層	596	甕	胴部	不明	〃 ？	長石釉？	調整 外面 平行たたき　内面 青海波 織目たたき 調整方法は須恵器と同様の古い手法。外面に炭化物付着
8	A−6	1号溝東のピット	埋土	601	〃	口縁部	〃	不明(鎌倉前半？)		口縁形態は須恵器に似る。
9	A−5	8号掘立柱ピット1	〃	267	擂鉢	胴部	県内	III期？		櫛目5本単位　胎土に白い針状のもの含む
10	A−4	9号掘立柱ピット3	〃	357	〃	〃	〃	Ⅳ期		櫛目8本単位　胎土に金雲母含む　燻焼

第62図　Ⅰ・II区土壙・ピット掘立柱建物跡出土遺物

だいた。もし、備前ならば東北ではおそらく初めての出土例になるが、速断はさけ、今後さらに検討が必要である。第60図３は鉢の口縁部破片であろう。内面は灰被りで、ヘラ書き沈線(記号か？）が認められる。胎土は東北窯のものに類以するが、口縁部の断面形（外削ぎ）は、従来の東北窯の製品中には知られていないものである。第54図６は擂鉢の底部破片である。同図７は内面に「×」のヘラ書きのある捏鉢である。II期の生産品であろう。櫛目は２本認められるが、内面の磨耗が著しく２本単位かどうか定かではない。第59図７・９は甕の底部と考えられる。県内産の製品の可能性もあるが定かではない。第71図12は焼成の甘い赤褐色の捏鉢である。外面には縦位の沈線が20本以上（記号か？）認められる。II～III期の製品であろう。第56図７は器厚の薄い鉢と考えられる。

近世施釉陶磁器

ここでは、今泉城IV期・V期の施釉陶器を扱う。

陶器

美濃

美濃製品と考えられるものには、志野・鼠志野・志野織部・黄瀬戸・御深井釉があり、いずれも16世紀末～17世紀初めの製品である。これらは、特に１号溝から多く出土している。

志野

志野は10点出土し、皿・向付がある。図示し得るものは、向付１点である。第66図９は垣根文（鉄絵）の向付である。16世紀末期のものであろう。

鼠志野

鼠志野は２点出土し、いずれも皿の破片である。第63図13は蔓草文（鉄絵）の皿である。胎土は黒褐色を呈し、高台内に輪トチン跡がみられる。慶長年間初期のものであろう。

志野織部

志野織部は９点出土し、いずれも皿である。いずれも慶長年間のものと考えられる。第62図６は蔓草文（鉄絵）の皿である。見込みと高台内に円錐ピン跡（３ヶ）がみられる。第66図８は垣根文と花文（鉄絵）のみられる皿である。釉は焼成不足のためか白濁している。第63図９は前述のものと同様、垣根文と花文（鉄絵）の皿である。高台内にトチン跡がある。楢崎氏の御教示では、慶長10年前後の製品と考えられる。第59図８は、水鳥（見込み）と蔓草文を配した皿である。見込みと高台内には円錐ピン跡がみられる。慶長年間（元屋敷窯並行）のものである。楢崎氏より元屋敷窯の製品と類似しているとの御教示をいただいた。

これらはいずれも岐阜県土岐市周辺の窯の製品と考えられる。

黄瀬戸

黄瀬戸は11点出土し、いずれも皿類である。平皿・菊皿・折縁深皿がある。

第63図10は２本単位の沈線がみられる菊皿である。17世紀初めの製品であろう。同図11は内面２本単位、外面１本単位の沈線がみられる菊皿である。17世紀初めの製品であろう。同図12はケズリ高台の皿である。16世紀の製品である。第64図１は折縁深皿と考えられる口縁部破片である。16世紀の製品である。同図２も折縁深皿と考えられる底部破片である。17世紀初めの製品であろう。第56図８は灰釉系黄瀬戸の皿と考えられる。およそ16世紀中葉の製品であろう。

御深井釉

いわゆる御深井焼とは異なるもので、わずか１点出土している。

第63図14は御深井釉皿である。釉は長石分が多いためか灰白色を呈する。胎土は瀬戸のものに近い。17世紀初めの製品であろう。

唐津

唐津は12点出土し、碗・皿・鉢がある。このうち碗が最も多い。

第66図４は見込みに花文（鉄絵）を配する碗であろう。産地は唐津としたが、必ずしも明確ではない。底部は碁笥底である。およそ16世紀の製品であろう。同図10は褐灰色の長石分の多い釉がかけられた皿である。およそ16世紀後半のものであろう。同図11は灰オリーブ色の長石分の多い釉がかけられた皿であろう。ほぼ10と同様の年代が考えられる。第63図４・５・６は浅黄色を主体とする色調の釉がかけられた碗で、倉田芳郎氏より、長崎県三川内の製品に類似しているとの御教示をいただいた。これらはいずれも17世紀の製品であろう。同図７は灰オリーブ色を呈する灰釉系碗である。高台脇と見込みの一部に青色の釉がみられる。およそ16世紀後半の製品であろう。第65図９は成形後に化粧土で内面と外面口縁部に文様を描き、褐色の釉を内外面ともに胴部下半までみられ、それ以下は露胎となる鉢である。およそ17世紀初めの製品である。これに類似する緑釉の刷毛目文鉢が１点ある。第56図９は内面に灰白色の釉がかけられた皿（？）の破片である。およそ16世紀の製品であろうか。

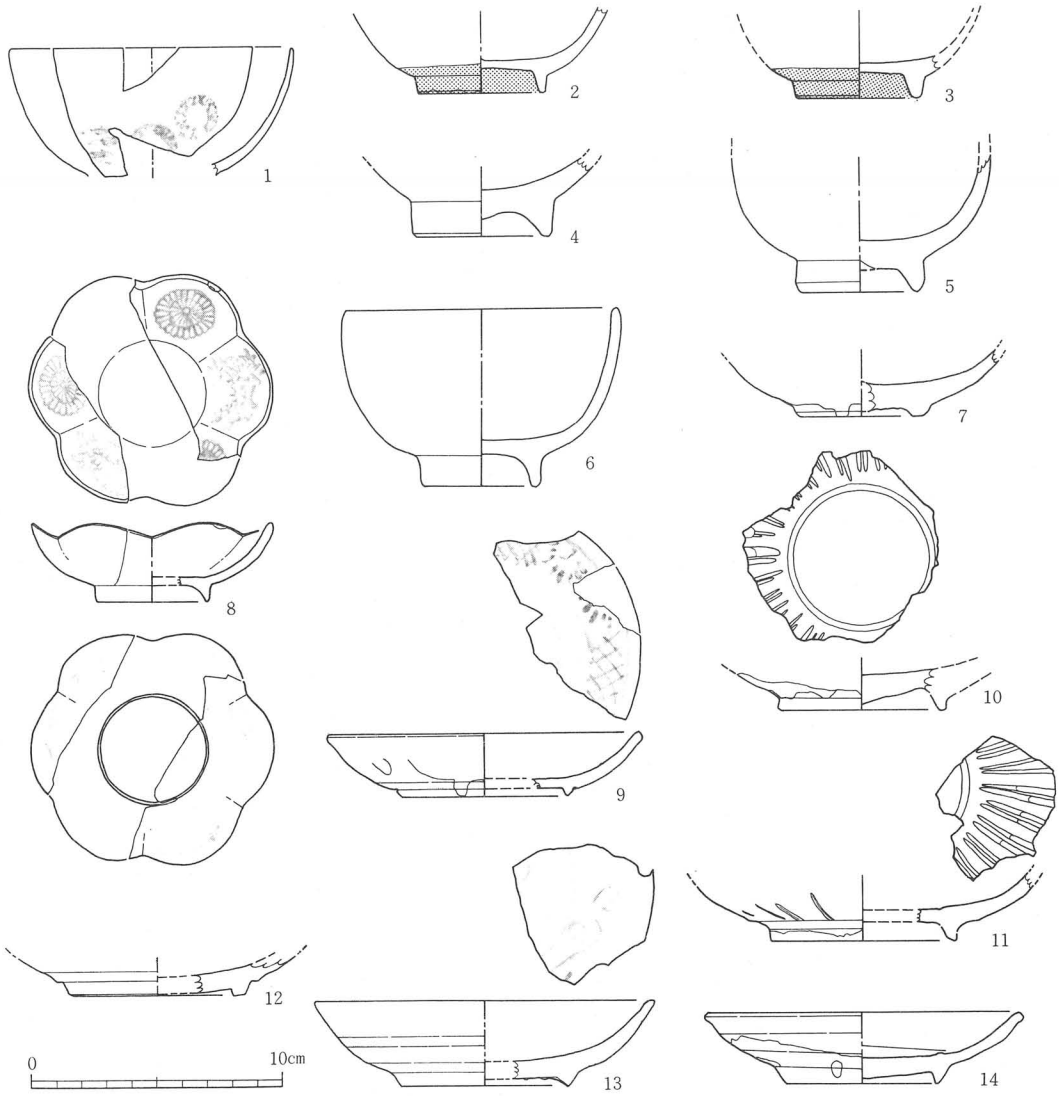
産地不明の施釉陶器

産地不明の陶器は、擂鉢が主体を占めている。これに碗・鉢・壺などが加わる、これらの陶器の大半はおよそ県内あるいは東北地方に生産地が存在する可能性が強い。しかし、近世以後の窯跡の発掘事例がほとんど皆無に等しい現状では、生産地を推定することは困難であろう。第62図２は内外面に鉄釉のかかる擂鉢である。櫛目は確認できない。口唇部は内側に肥厚するのが特徴である。第66図５は外面に光沢のない鉄釉がかかる壺である。耳の圧痕が残る。第63

図２・３は透明度の高い黄褐色の釉のかけられた碗である。成形後に高台脇と高台内に鉄釉が塗られ、重ならないように黄褐色の釉がかけられている。器厚は薄いのが特徴である。口唇部破片にも鉄釉がみられ、肥前磁器と共通する。年代は17世紀以後であろう。第64図４～８はいずれも１号溝より出土した鉄釉擂鉢である。櫛目は４が11本、５が７本、６は単位不明、７は８本、８は６本と様々である。４・６は口唇部内側に突帯が巡り、５・７は口唇部が外側に折れ曲がる。片口部分の凹みは浅い。いずれも焼成は良い。８は口唇部がわずかに外反し、内側に稜をもつ擂鉢である。焼成は甘い。なお、外面の口唇部下に１ヶ所突起が認められる。これらのうち５・７・８は唐津の胎土に類似する。４～８はおよそ16世紀～17世紀のものと考えられる。第65図１・２・５・７・８は、いずれも１号溝より出土した擂鉢である。１・５は口縁部の内外だけにオリーブ黒色の鉄釉がかけられている。１は擂鉢として扱ったが、あるいは鉢の可能性もある。５は櫛目が８本単位で片口部をもつ。また、５と類似する擂鉢が他に１点ある。２は口唇部の内側が肥厚する鉄釉（？）擂鉢であろう。焼成は甘い。県内もしくは東北地方の製品であろう。７は胎土に黒色粒子を含む鉄釉擂鉢である。生産地は不明であるが、東海地方の製品であろうか。８は鉄釉擂鉢の底部破片である。櫛目は６本単位で、底部には糸切り痕がみられる。第64図５・７・８のものと胎土が類似する。これらの擂鉢が16世紀～17世紀初めころの製品と考えられる。第56図４は内弯しながら立ち上がり、口唇部が肥厚する鉄釉鉢である。胎土は唐津のものに類似する。およそ江戸時代以後のものであろう。同図５は８本単位の櫛目をもつ擂鉢である。底部には糸切り痕が残る。年代は不明であるが、およそ江戸中期以後のものであろう。この他に青灰色の釉をかけた製品（器種不明）が１点出土している。これは19世紀前半頃の上野目焼であろう。

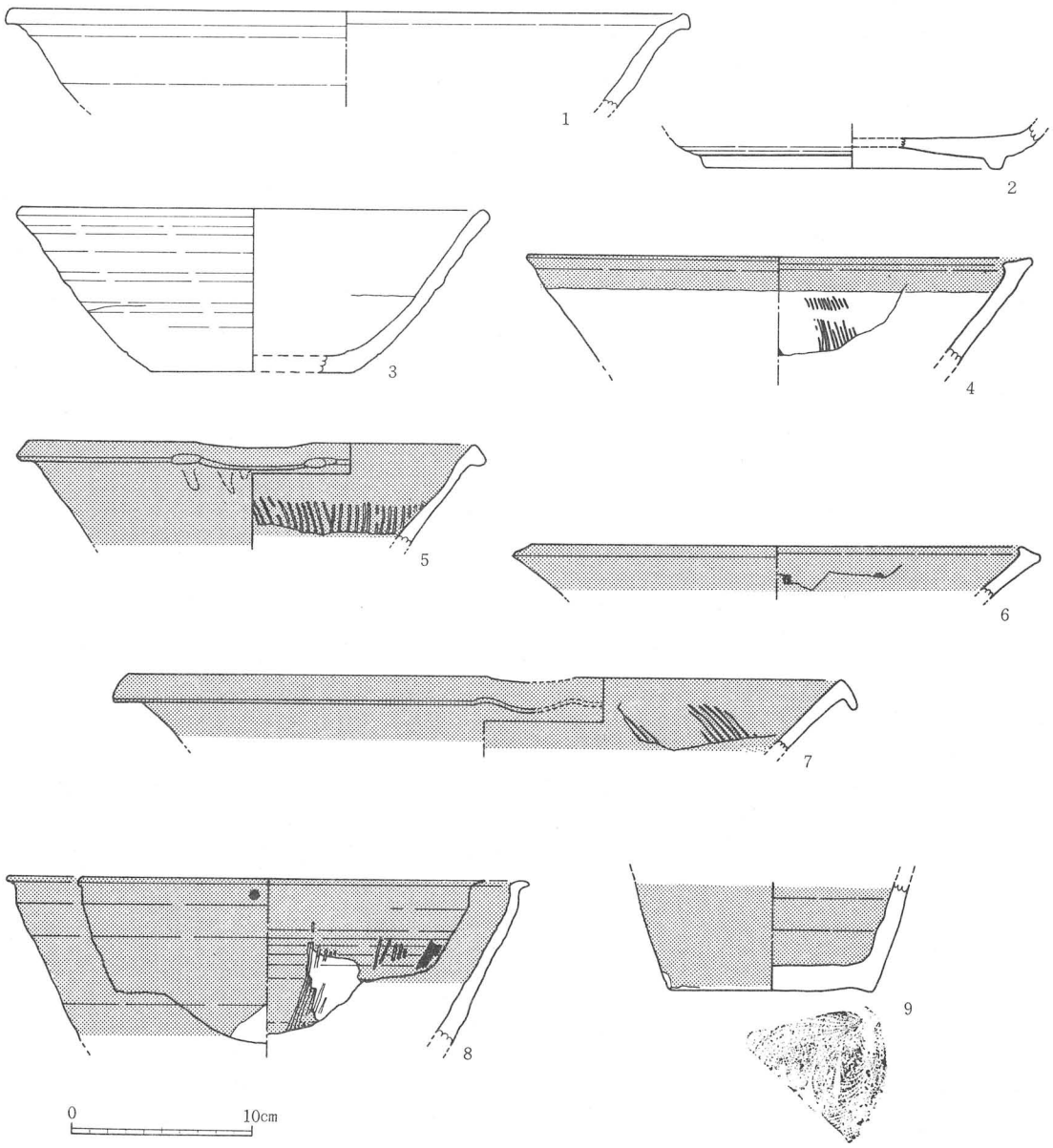
磁器

本遺跡出土の磁器には、肥前35点、切込（宮城県宮崎町）２点があり、前者が主体を占める。また、これらの磁器は、碗・皿の細片で、図示し得るものがほとんどない。第63図１は花文の染付を配した碗である。17世紀～18世紀の製品であろう。同図８は型作りで、ゴム版染付の輪花皿である。およそ18世紀以後の製品であろう。他に麦藁手茶碗やくらわんか碗・皿等があり、18世紀～19世紀頃のものであろう。切込は縦縞の染付を配した碗と考えられる破片が２点出土している。従来、切込の分布は、宮城県北部から岩手県南部に限られていたようで、本遺跡例は、現在分布の南限を示すものであろう。



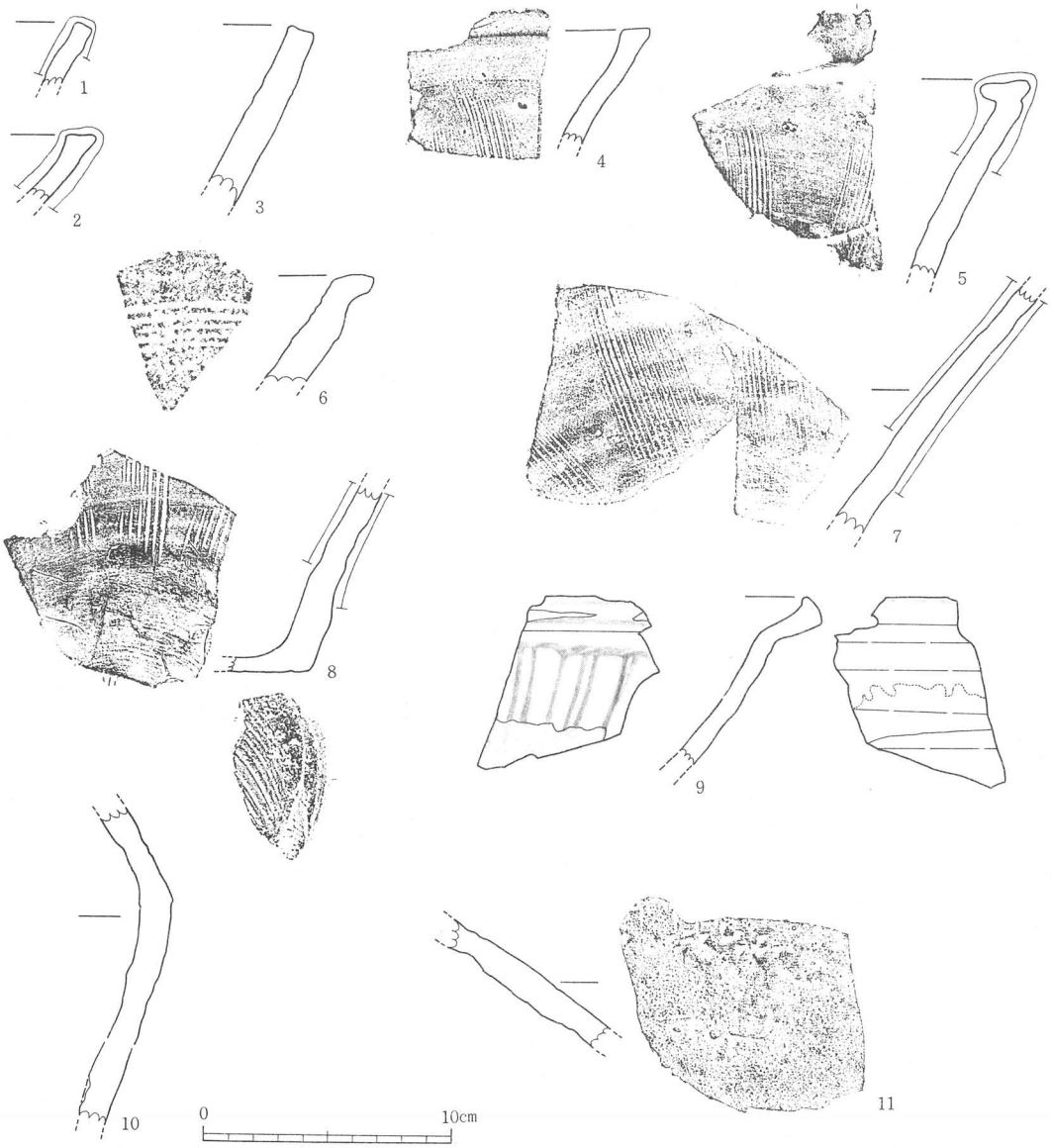
図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	種類	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	A－8	1号溝	1a, 1b層	112	磁器	碗	口縁～胴部	肥前	V期？	透明釉	染付 ブルー 貫入あり
2	〃	〃	埋土	51	陶器	丸碗	胴部～底部	東北地方	〃	透明釉系(明黄褐10YR7/6)(オリーブ黒5Y2/2.高台脇.高台内)	貫入あり
3	〃	〃	〃	146	〃	〃	底部	〃	〃	透明釉系(明黄褐10YR7/6)(オリーブ黒5Y2/2.高台脇.高台内)	〃
4	A－5	〃	1，2層	103	〃	〃	〃	唐津	Ⅳ期	透明釉系(淡橙色5YR8/3)	〃
5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	胴部～底部	〃	〃	透明釉系(浅黄色2.5Y8/3)	〃
6	A－6	〃	2層上面	92	〃	〃	口縁～底部	〃	〃	透明釉系(淡黄色5Y8/4)	〃
7	A－4	〃	6層	62	〃	碗	底部	〃	〃	灰釉系(灰オリーブ7.5Y5/2)	〃
8	A－8	〃	1a, 1b層	112	磁器	小皿？	口縁～底部	肥前	V期	透明釉系	型作り 印盤 染付 内面 (菊花 暗青灰10BG4/1の縁に青灰10BG5/1 外面暗青灰10BG4/1 葉 青灰10BG5/1) 貫入あり
9	A－4	〃	1層	126	陶器	志野織部小皿	〃	美濃	Ⅳ期	長石釉？	文様 花丈(?)＋垣根文様(オリーブ黄7.5Y6/3 灰7.5Y4/1 鉄絵) 貫入あり 高台内にトチン跡あり
10	A－6	〃	埋土	51	〃	平皿(菊皿)	底部	〃	〃	黄瀬戸(淡橙5YR8/3)	菊花文
11	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	黄瀬戸(明黄褐2.5Y7/6)	内面 菊花文？ 外面 高台脇に沈線
12	A－8	〃	1a, 1b層	112	〃	皿	〃	〃	〃	黄瀬戸(浅黄色5Y7/3)	高台内と見込みにトチン跡3つあり
13	A－5	〃	1，2層	103	〃	鼠志野丸皿	口縁～底部	〃	〃	志野釉(灰白色N7/9)	文様 藁草文(暗赤褐2.5YR3/2鉄絵) 貫入あり 高台内に輪トチン跡あり
14	A－8	〃	1a, 1b層	90	〃	丸皿	〃	〃	〃	御深井釉(灰白7.5Y7/2)	貫入あり 釉が山なりにめぐっている。内面に重ね焼きの跡あり。

第63図　1号溝跡出土遺物(1)



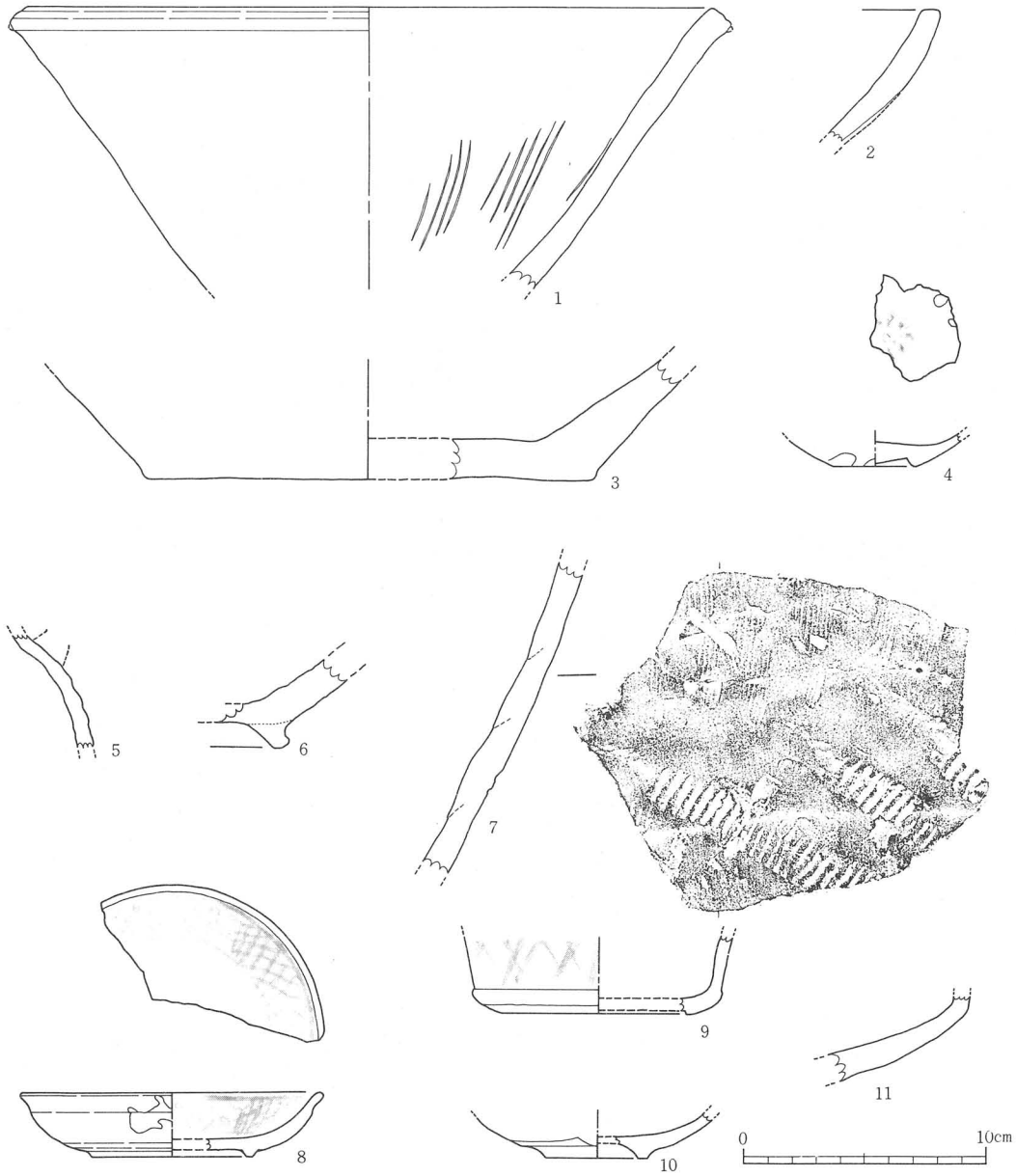
図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	種類	部位	産地	時期	釉	備考
1	A－8	1号溝	1a. 1b層	112	折縁深皿	口縁部	美濃	Ⅳ期	黄瀬戸(淡橙色5YR8/3)	貫入あり
2	A－6	〃	1層	101	〃	底部	〃	〃	〃	
3	A－8	〃	1a. 1b層	112	捏鉢	口縁～底部	常滑		(浅黄色(5Y7/4)	胴部下端より底部にかけて摩耗している。
4	A－4	〃	1層	115	擂鉢	口縁部	不明	Ⅳ期	鉄釉(オリーブ黒7.5Y3/2)	口縁にのみ施釉、櫛目8本単位
5	〃	〃	1.2層	104	〃	〃	〃	〃	鉄釉(暗オリーブ7.5Y4/3)	釉が口縁部外面に厚く流れている。口縁に片口あり 櫛目7本単位
6	A－6	〃	2層	57	〃	〃	〃	〃	鉄釉(暗オリーブ7.5Y5/1)	
7	A－7	〃	1層	123	〃	〃	〃	〃	鉄釉(灰オリーブ7.5Y5/3)	櫛目8本(?)単位　口縁に片口あり
8	A－6	〃	〃	72	〃	口縁～胴部	〃	〃	鉄釉(極暗赤褐2.5YR2/2)	内、外面共に釉のない部分あり。櫛目5本1単位 口縁部下に半球状の瘤あり(暗青灰5B3/1)
9	A－8	〃	底面	193	瓶子	底部	瀬戸	Ⅲ期	鉄釉(黒褐色5YR3/1)	貫入あり

第64図　Ⅰ号溝跡出土遺物(2)



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	種類	部位	産地	時期	釉	備考
1	A－6	1号構	3層	141	擂鉢	口縁部	不明	Ⅳ期	鉄釉(暗オリーブ褐2.5Y⅗)	
2	A－8	〃	1a, 1b層	112	〃	〃	〃	〃	鉄釉(にぶい赤褐2.5Y⅝)	鉄釉の焼甘い
3	A－7	〃	1層	123	〃	〃	県内?	〃		
4	A－4	〃	〃	126	〃	〃	不明	〃		櫛目7本単位
5	A－5	〃	1，2層	103	〃	〃	〃	〃	鉄釉(灰オリーブ7.5Y½)	櫛目8本単位
6	A－7	〃	1層	113	〃	〃	県内	〃		櫛目5本単位(横) 胎土に白い針状のもの含む
7	〃	〃	〃	〃	〃	胴部	不明	〃	鉄釉(にぶい赤褐2.5YR¾)	櫛目17本単位
8	A－8	〃	1a, 1b層	111	〃	胴部～底部	〃	〃	鉄釉(灰赤7.5R½)	櫛目6本単位 著しく摩耗している。
9	A－7	〃	3層	221	鉢	口縁部	唐津	〃	透明釉系(暗オリーブ5Y⅓)	化粧土で文様が描いてある。
10	〃	〃	1層	113	壺	胴部(肩)	備前?	Ⅲ～Ⅳ期		押印あるいは沈線(2本)あり
11	A－8	〃	3層	137	甕	〃	〃	〃		押印あり

第65図　1号溝跡出土遺物(3)



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	A－3	11号井戸	埋土1層	130	擂鉢	口縁～胴部	不明	Ⅲ期		
2	F－2	27号井戸	埋土下部	936	鉢	口縁部	県内	Ⅳ期?		
3	E－2	26号井戸	埋土上部	398	甕	胴部～底部	常滑?	不明		
4	E－7	20号井戸	2層	625	碗	底部	唐津	Ⅳ期	(灰5Y7/2)	文様 内面花文(青灰10BG5/1) 外面(黒褐10YR3/2) 貫入あり
5	F－6	23号井戸	1層	952	双耳壺?	胴部	不明	Ⅳ期(慶長頃)	鉄釉(光沢のない薄い釉)	
6	〃	〃	〃	〃	台付鉢	底部	常滑	不明		
7	F－7	21号井戸	埋土上部	558	甕	胴部	渥美	Ⅰ期		外面刷毛目・叩き
8	〃	〃	2層	1505	志野織部小皿	口縁～底部	美濃	Ⅳ期	長石釉?	文様 花文?)+逆根文様(赤灰5R5/1) 釉薬 焼成不足 高台内に円錐ピン跡あり
9	〃	〃	1層	1502	志野向付	胴部～底部	〃	〃	〃 ?(灰白5YR8/1)	文様(暗赤灰2.5YR3/1 鉄絵) 貫入あり 気泡が少しあり
10	〃	〃	2層	930	皿	底部	唐津	〃	(褐灰10YR5/1)	貫入あり 外面の一部に気泡あり
11	〃	〃	埋土	808	平鉢	胴部	〃	〃	(灰オリーブ5Y5/2)	

第66図　Ⅰ・Ⅱ区井戸跡出土遺物

（２） 中国製陶磁器

これらは、いずれも中国産の製品である。出土点数は41点あり、その内訳は、青磁30点、白磁４点、天目１点、染付６点である。比率をみると、青磁73％、白磁（青白磁）10％、天目約２％、染付約15％である。

青磁

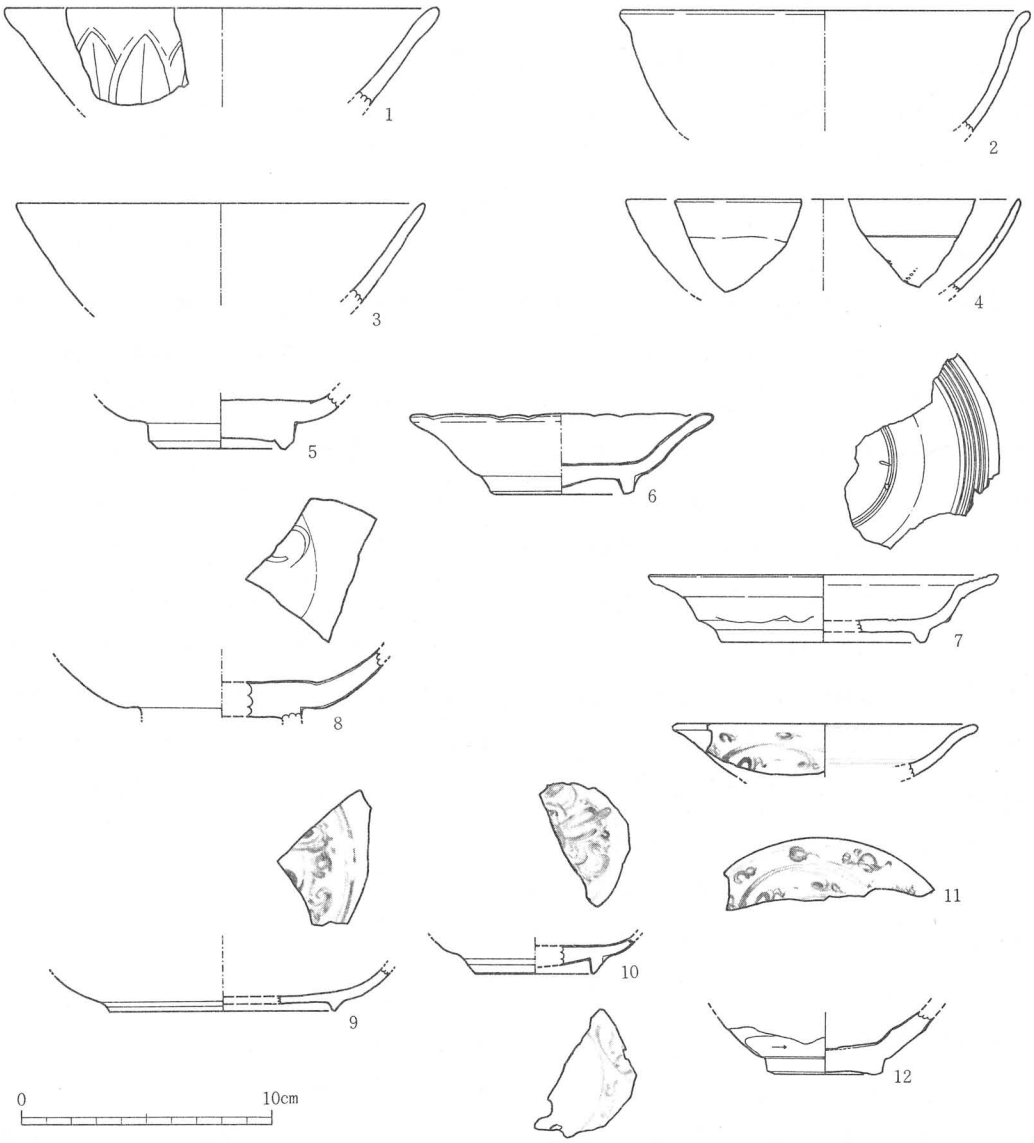
青磁は、およそ13世紀～16世紀までの龍泉窯系・景徳鎮窯系・同安窯系の碗・皿が確認されている。第67図１は片切彫で龍泉窯系の鎬蓮弁文碗、第68図１は、剣頭様の細線蓮弁文碗である。第67図２・３・５は、無文の碗と考えられる。２は口縁部が外反し、３は外傾して立ち上がる碗で、いずれも龍泉窯系のものと考えられる。５は高台内にケズリが認められる。15世紀前半頃の碗である。第67図４は、内面に櫛状工具の刺突が認められ、同安窯系の劃花文碗と考えられる。第68図２は、南宋（？）の劃花文碗と考えられ、本遺跡では最も古い青磁である。第67図６・７は青磁の皿と考えられるものである。６は口縁が稜花をなす景徳鎮窯系の皿である。高台内（外底）は、釉を環状に削り取っている。釉は焼成不良のため、気泡が多く、沈線文様があるが不明である。７は青磁の焼成不足かあるいは緑釉と考えられる皿で、内面に沈線文が認められる。見込み及び高台内にはピンチの跡が認められる。高台・高台脇・高台内は露胎であり、高台脇にケズリが認められる。この皿は、一応青磁として扱ったが、なお検討が必要である。これらの皿はいずれも明代のものであろう。

この他に、図示できないが劃花花弁文碗と考えられるものや、外面に櫛目文をもつ碗などがある。

白磁・青白磁

第67図８はいわゆる青白磁で、高台脇にケズリがある。高台内には釉が認められない。南宋～元にかけての劃花文(?)碗と考えられる。第68図３は口唇部が無釉（口禿手）の碗あるいは皿と考えられる。外面下位にはケズリがみられ、軽い稜がつく。鎌倉中期かそれ以前(南宋～元)のものと思われる。これに類似するものが、光明寺裏遺跡（北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団・他：1980）より出土している。同図４は口唇部付近の器厚が薄くなり、やや外反する碗で、文様の有無は不明である。時期は明確ではないが、元代後半のものであろうか。同図５は唐草文の梅瓶（青白磁）と考えられる。割れ口には、接着剤としての漆の付着がみられる。およそ13世紀末頃の景徳鎮窯系の製品と考えられる。

白磁（青白磁も含む）は、出土量が少なく、全体の様相を知るものがないが、いずれも中国陶磁器の中では古い傾向（鎌倉中期～末期）を示す。



図版	グリット	遺　構	層　位	遺物番号	種類	器　形	部　位	産　地	時　期	釉	備　考
1	B－2	15号溝	1層	222	青磁	碗	口縁～胴部	中国産	元(13C末)	青磁(緑灰色 7.5GY5/1)釉厚0.3～0.5mm	貫入有り　竜泉窯系蓮弁文
2	A－5	11号溝	1層	327	〃	〃	〃	〃	元	青磁(オリーブ灰10Y5/2)	貫入有り　竜泉窯系
3	B－4	9号井戸	7層	615	〃	〃	〃	〃	〃	青磁(明褐色 7.5YR5/1)釉厚 0.3mm位	竜泉窯系器面にロクロ成形の際の泥がみられる。
4	F－6	23号井戸	1，2層	904	〃	〃	〃	〃	不明	青磁(オリーブ灰10Y5/2)	同安窯？に類似。
5	F－8	21号溝西際グリット中央	1層	594	〃	〃	胴部～底部	〃	明(15C)	青磁(にぶい黄褐色10YR5/3)	貫入有り。
6	A－8	1号溝	1a，1b層	112	〃	皿	口縁～底部	〃	明	青磁　上釉が完全にガラス質化していない。	貫入有り。気泡状のものが吹き出ている。
7	F－7	21号井戸	埋土	808	〃	〃	〃	不明	不明	青磁、つや消し状(緑灰10GY5/1)	高台内に直径2mm位の重ね焼(？)の跡。青磁の焼成不足？
8	E－5		Ⅲ層	624	白磁	碗	胴部～底部	中国産	13C	白磁(明緑灰色7.5GY7/1)	貫入有り。
9	A－8	1号溝	1a，1b層	54	染付	小皿	〃	〃	明(16C初)	透明釉(灰色 7.5Y5/1)釉厚0.3mm位	染付(暗青灰色10BG4/1)
10	Ⅰ区表採	(1号溝？)		76	〃	〃	〃	〃	明(16C)	透明釉	染付藍色で濃紺有り。高台内に重ね焼(？)の跡。一乗谷朝倉城出土品類似
11	B－2	16号溝	埋土上部	64	〃	〃	口縁～胴部	〃	〃	透明釉(灰白 7.5Y8/1)釉厚0.3mm	染付(暗青灰10BG3/1～青灰色10BG5/1)
12	A－8	1号溝	1a，1b層	112	天目	碗	胴部～底部	〃	元	鉄釉(全体的に赤黒7.5R1/1に暗赤5/6が流れ込む)	外面高台脇に釉だまり

第67図　中国製陶磁器(1)

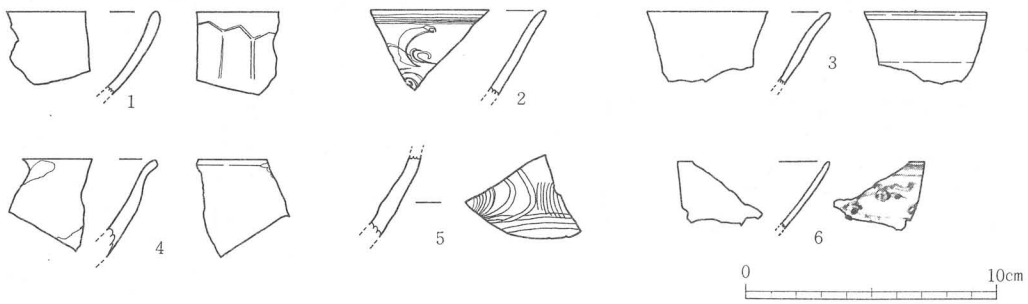
天目

第67図12は、黒釉の天目茶碗である。中国産の天目茶碗は、わずか一点のみの出土である。内面の見込み部に至る部分には軽い稜がみられる。また、高台脇及び高台内は露胎でケズリが認められる。

時期は元かあるいはさらに古い時期のものと考えられる。

染付

染付には碗と皿がある。第67図９は見込みに文様のみられる皿で、畳付には釉が認められない。同図10は所属不明となった出土品である。見込みに十字花文の変様と思われる文様、外面には唐草文（？）かと考えられる文様がみられる碗であろう。高台の付根には釉が厚くたまり、一見碁笥底風にみえる。これと同様の破片が他に１点ある。同図11は、口縁部や体部の内外面に界線があり、外面体部には唐草文（＋牡丹？）がみられる小皿である。第68図６は口縁部内外面に界線、外面には唐草文かと思われる文様のつく碗である。これらの染付はいずれも16世紀の時期のものであろう。



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	種類	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	F－2	31 号 溝	1層	425	青磁	碗	口縁～胴部	中国産	明(16C 前半)	青磁(オリーブ灰５GY⅘)	貫入有り。蓮弁文埦
2	B－6	3号井戸北側	埋土上部	958	〃	〃	〃	〃	南 宋	青磁(緑灰7.5GY⅘)	気泡有り。
3	B－8	1号土壙	中２下層	978	白磁	碗	〃	〃	不 明	白磁(灰白色7.5Y⅞)	外面、施釉前に器面調整として体部に削痕有り。
4	B－7	ピット15	埋土	241	〃	碗	〃	〃	元	白磁(明緑灰10GY⅞)	
5	F－4	11号溝南寄り	1、２層	617	〃	梅 瓶	胴 部	〃	鎌倉中期(13C 末)	灰白色の透明釉	景徳鎮、貫入有り。内面、ロクロ成形痕が見られる。
6	E－4.5	26号溝	埋土１層		染付	碗 ？	口縁～胴部	〃	明(16C 初)	透明釉(厚さ約0.3㎜)	藍色で濃紺有り

第68図　中国製陶磁器(2)

（3） 土師質土器

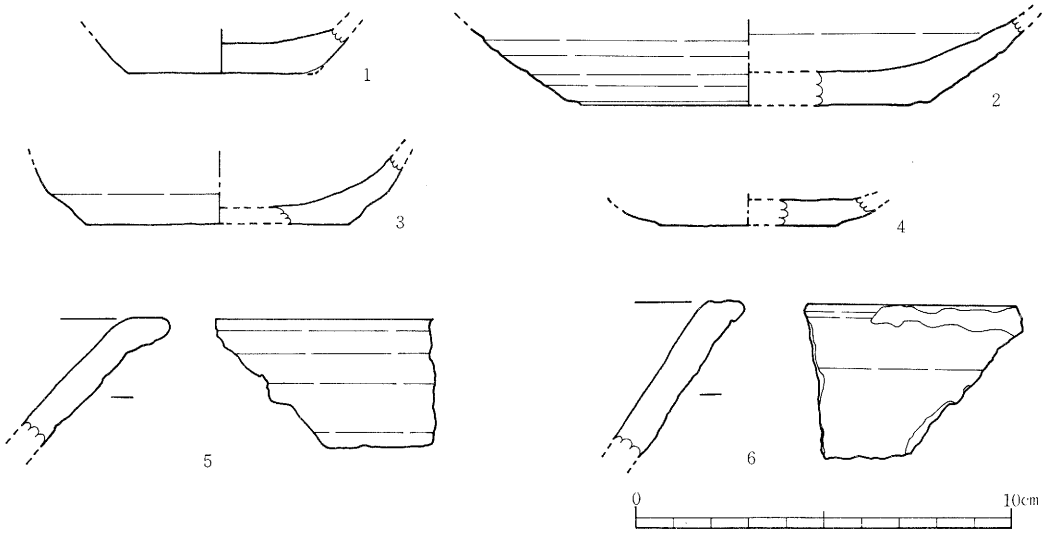
従来、一般に中世以降の酸化炎で焼成された土器類に対して「土師質土器」「中世土師器」「かわらけ」等の名称で呼ばれている。これらは、おおむね古代の土師器の系統を引くという考え方から導き出された名称であろう。ここでは便宜的に「土師質土器」と呼ぶことにしよう。

本遺跡より出土した土師質土器は、皿が主体を占めるが、鉢も存在するようである。これらの土器群は、いわゆる「赤焼土器」と比較した場合、ほとんど砂粒を含まず、焼成も極めて良い。この特徴は特にIII期以降のものに顕著である。ここでは出土数が少ないので器形分類は行っていない。皿類はいずれも回転糸切りで再調整はない。また、I期・II期に属するものは明確ではなく、「赤焼土器」との区別もつけにくい。

ここでは、遺構の時期別に土師質土器の変遷を概観してみたい。

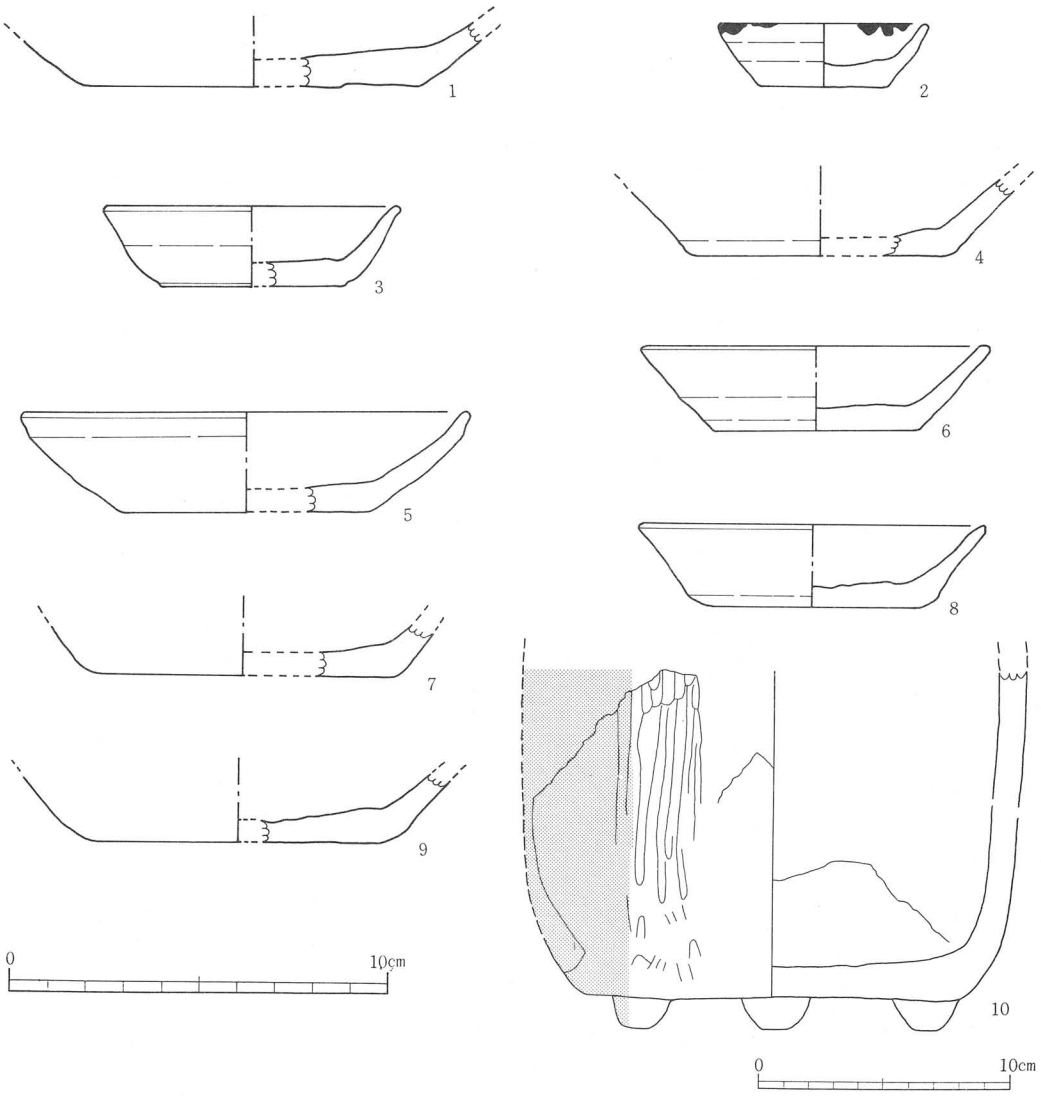
I期後半は土師質土器の存在が予想されるのであるが、「赤焼土器」との区別が明確ではない。現段階では皆無とせざるを得ない。

II期は、やはりI期同様「赤焼土器」と区別がつけにくい。わずかな資料からの判断では、砂粒が少なくなり、焼成はよく「赤焼土器」より硬質であるらしい。遺構の出土状況等から、第69図1、第69図4の皿、第69図5・6、第71図6・7の鉢がこの時期のものと思われる。こ



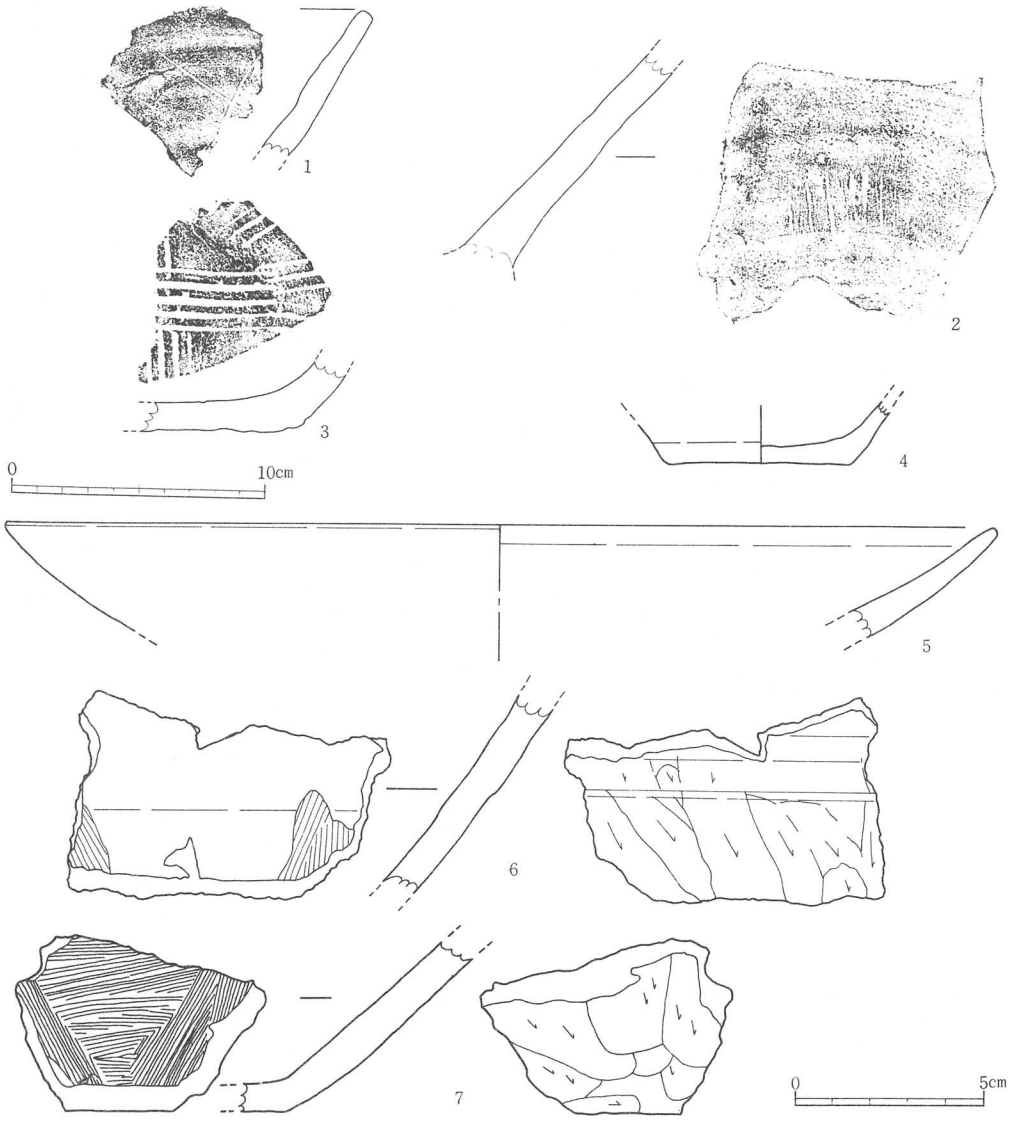
図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	時期	調整 内面	調整 外面	備考
1	B－5	11号溝	底	485	皿	底部	II期	ロクロナデ	ロクロナデ、底部回転糸切り	
2	E－4	〃	1層	527	〃	〃	III期	〃	〃 〃	内面に煤付着、燈明皿
3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	内面に煤付着
4	〃	〃	2層	563	〃	〃	II期	〃	〃 〃	
5	E-3･4	〃	3層	841	鉢	口縁部	〃	〃	〃	
6	F－4	28号溝	最下層	587	〃	〃	〃	〃	〃	

第69図　11号・28号溝跡出土遺物



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	器形	部位	時期	調整 内面	調整 外面	備考
1	A－8	1号溝	埋土	54	Ⅲ	底部	Ⅳ期	ロクロナデ	ロクロナデ 底部 回転糸切	胎土に白い針状のもの含む
2	〃	〃	2層	138	燈明Ⅲ	口縁部～底部	Ⅳ期	〃	〃 〃	口縁部2ヵ所（対応する位置）に焦げ目あり
3	〃	〃	〃	140	Ⅲ	〃	〃	〃	〃 〃	胎土に白い針状のもの含む
4	〃	〃	〃	〃	〃	胴部～底部	〃	〃	〃 〃	
5	〃	〃	2層上	1019	〃	口縁部～底部	〃	〃	〃 〃	底部近くに傷跡あり
6	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃 〃	
7	A－7・8	〃	3層	136	〃	底部	〃	〃	〃 〃	
8	〃	〃	〃	〃	〃	口縁部～底部	〃	〃	〃	
9	A－7	〃	底	220	〃	底部	〃	〃	〃 底部 回転糸切	胎土に白い針状のもの含む
10	〃	〃	〃	282	火消壺（手捻り）	胴部～底部	〃	横ナデ	横ナデのち縦みがき	三足は二等辺三角形の位置

第70図　Ⅰ号溝跡出土遺物



図版	グリット	層位	遺物番号	種類	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	F－2	表採	1042	陶器	鉢	口縁～胴部	県内	不明	自然釉	内面にXの沈線有り、胎土に白い針状のもの含む
2	B－8	II層	136	〃	擂鉢	胴部	不明	不明		外面、底部近くに縦の沈線入る
3	B－3	表採		〃	〃	底部	県内産			胎土に白い針状のもの含む。内面5本単位の櫛目、底部内面に「十」字の櫛目有り
4	A－8	II層	1019	土師質土器	皿	〃		IV期		内面、外面ともロクロナデ、底部回転糸切り。土中で半分色変化
5	〃	II層	〃	〃	大皿？	口縁部		IV or V期		内面、外面ともロクロナデ
6	E－2	III層	〃	〃	鉢	胴部		II期？		内面ロクロナデ後、放射状のナデ。外面ロクロナデ後、弱い縦ケズリ
7	A－6	II層	〃	〃	〃	底部		〃		内面横ナデ後、縦に放射状にナデ。外面、軽いケズリ、内面底部近くにモミガラ痕有り

第71図　表採・基本層位出土遺物

れらの資料をみると、平安時代の土師器皿と調整技法はほとんど変わりないようである。

III期は、II期のものとは異なり、「赤焼土器」と前述したごとく明瞭に区別することができる。この時期には、第69図２・３、第58図10がある。３、10の小皿は、腰が張り、急激に立ち上がる。２はやや大型であるが、外傾しながら立ち上がる。外面のロクロ目が極めて明瞭である。

IV期は比較的量が豊富で、特に、１号溝より集中的に出土している。この時期には第70図１～９、第71図４・５がある。いずれも皿で口径５～９cmの小型のもの、口径10cm以上の中型のもの、そして５のような口径25cm以上の大型のものが存在する。ただ、５については時期が明確ではなく、V期に属する可能性もある。

（４） 瓦質土器

瓦質の土器類には、擂鉢・火消壺・火鉢がある。擂鉢については陶器の項で扱っている。ここでは火消壺と火鉢について扱う。

〔火消壺〕

第70図10は、三足の火消壺と考えられる。外面は縦位のミガキ後黒色処理している。胴部上半を欠くが、おそらく内弯して立ち上がり、蓋が付くものと考えられる。内面はナデで、炭化物の付着がみられる。他の遺物から判断して、およそ17世紀のものであろう。

〔火鉢〕

亀甲文の型押しのある口縁部破片で、細片であるため図示できない。他に、雷文の破片１点がある。

（５） 瓦（第72・73図、第５表）

今回の調査で出土した瓦は、表採品を含めて合計27点出土した。I区は12点、II区は14点(表採品１点)、表採品１点である。

これらの瓦を観察すると大きく４種類に分類することが可能である。

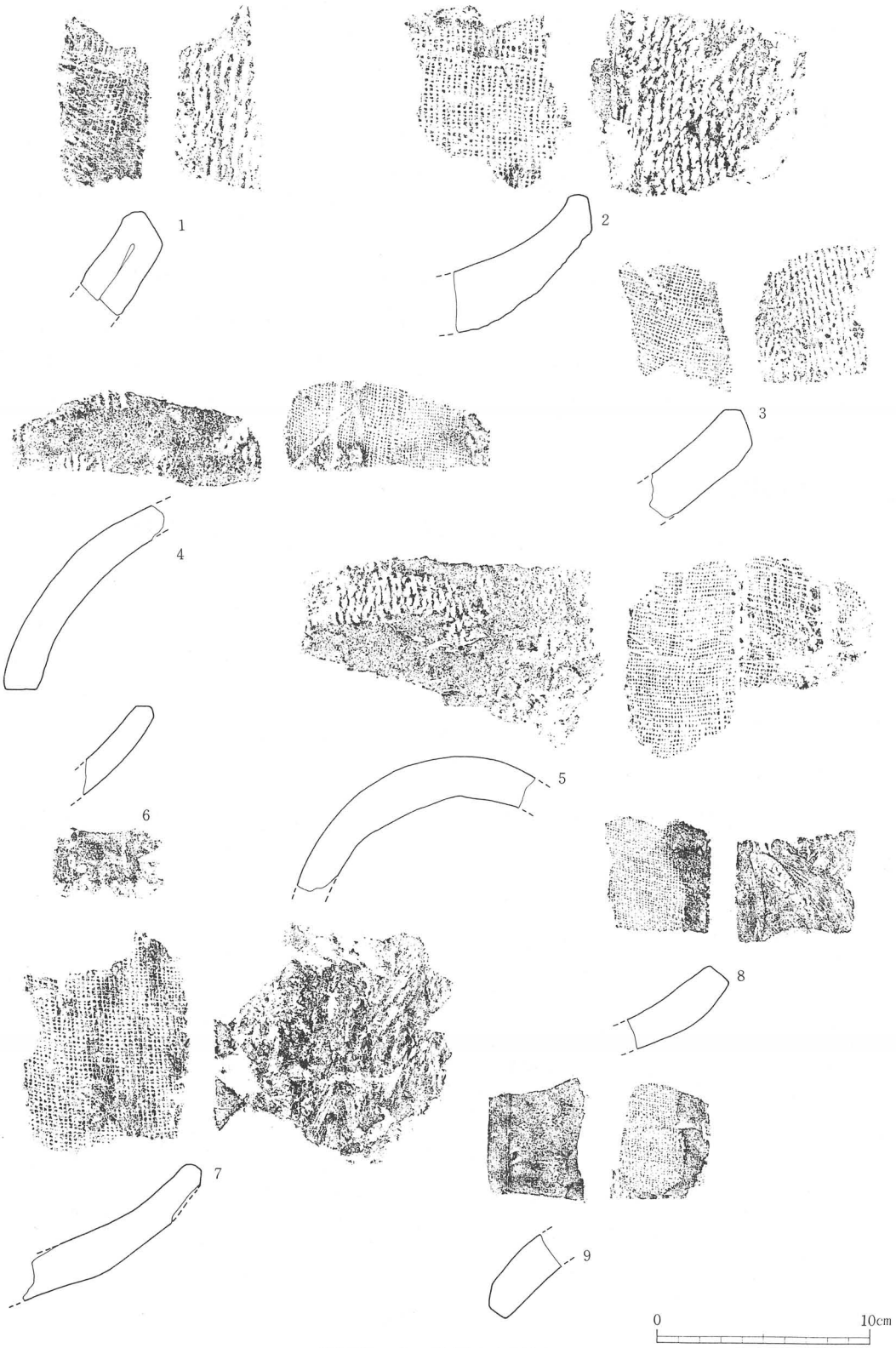
１類　凸面は縄目、凹面は布目のみられるもの（布目のないものあり）。

２類　凸面はナデ、凹面は布目のみられるもの（布目のないものあり）。

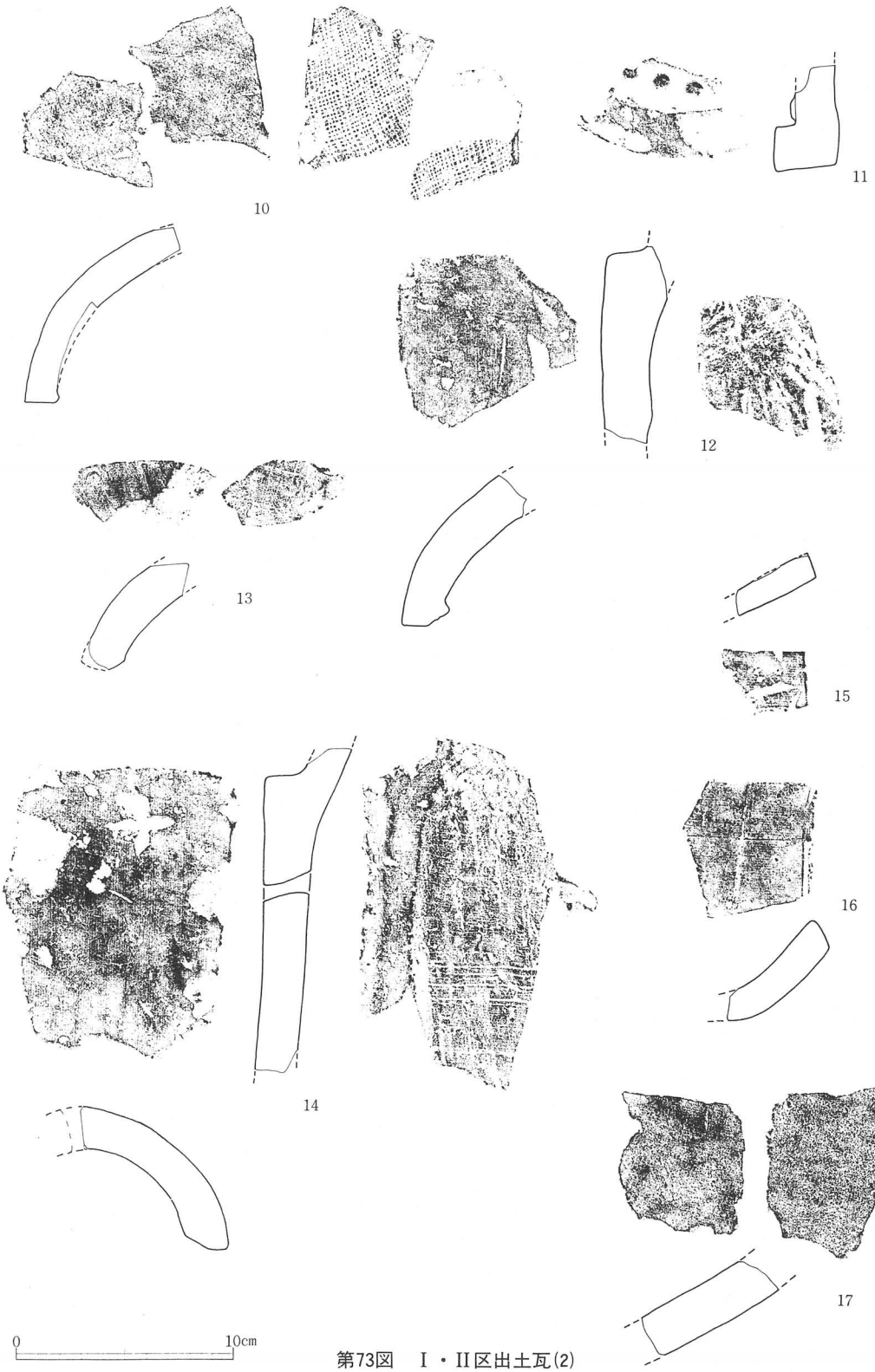
３類　凸面はミガキ、凹面は布目のみられるもの（燻瓦）。

４類　凸面はミガキ、凹面はミガキのみられるもの（燻瓦）。

１類は縄目の節は大きく、布目は大きく荒い。２類は1類に比べ小型化し、布目を消しているものもある。３・４類はいずれも燻瓦であり、凹面の布目の有無の差による。３・４類はいず



第72図　Ⅰ・Ⅱ区出土瓦(1)



第73図　Ⅰ・Ⅱ区出土瓦(2)

第5表　瓦　観　察　表

図版	グリット	遺　構	層　位	取上番号	種　別	調整		分類	時　期	備　考
						凸　面	凹　面			
1	B－3	14 号 溝	上層	708	平　瓦	縄目	布目	1 類	I 期	
2	E－4	28 号 溝	埋土中部	538	〃	〃	〃	〃	III期	
3	F－6	23号井戸	1 層	952	〃	〃	〃	〃	II～III期	
4		11 号 溝	2 層	526	丸　瓦	〃	〃	〃	〃	
5		29 号 溝	1 層	882	〃	〃	〃	〃	II期	
6	E－3・4	11 号 溝	底	843	平　瓦	ナデ	〃	2 類	II～III期	
7	B－4・5	〃	I 層	319	〃	縄目→ナデ	〃	〃	〃	
8	A－3	11号井戸	1 層	130	〃	縄目→ナデ	〃	〃	〃	
9	B－5	11 号 溝	底	485	丸　瓦	ナデ	〃	〃	〃	
10	F－4	〃	2、3 層	605	〃	〃	〃	〃	〃	No.611と接合
11	A－6	1 号 溝	3 層	141	軒丸瓦			3 類	IV期	燄瓦　巴文
12	〃	2 号 溝		53	丸　瓦	ナデ	布目	〃	〃	〃
13	A－4	1 号 溝	3 層	128	〃	〃	〃	〃	〃	〃
14	F－8	18号井戸	2 層	786	〃	〃	〃	〃	〃	〃　中央に釘穴あり
15	B－4		II 層	27	平　瓦	ナデ	ナデ	4 類	〃	〃
16	表　採			201	〃	〃	〃	〃	〃	〃
17	A－3・4	12 号 溝	埋土上部	288	〃	〃	〃	〃	〃	〃

（時期は遺構の所属時期を示す）

れも今泉城IV期以後の遺構に伴うようである。したがって、逆に1・2類は明確な遺構が平安時代以降から出現することを考慮すれば、およそ平安時代から室町時代の中に位置付けることが可能である。1類はその使用年代は明確ではないが、およそ平安時代であろう。2類については、おそらく平安時代後半から室町時代前半の中に位置付けるのが至当であろう。また、3類から4類への変化は、織田信長による安土城築城の際から布目瓦がなくなったという指摘（駒井鋼之助：1981）があり、地域を異にするが、およそ3類から4類へ変遷したものと考えてよいであろう。また、共伴する場合も当然考えられる。以上のことから、本遺跡出土の瓦は、およそ1類から4類へ変遷したものと考えることができよう。瓦の詳細については、第5表に示したが、いずれも細片が多く、平瓦と丸瓦の区別のつけにくいものが多い。中世においては板葺、柿葺などが流行したが、瓦葺は極めて少なく、地方の館や寺院ではなおさらのことであろう。本遺跡出土の瓦は、館か周辺の寺院の棟に葺かれた瓦と理解しておきたい。

（6）　土製品

土製品には土錘・羽口・坩堝・土鈴・その他がある。

1．漁具（土錘）

ここでは重複するが、平安時代の遺構（I期以前）出土のものも含めて述べたい。

土錘は出土総数29点で、いずれも管状で中心孔をもつものである。したがって時期別の形態

変化はない。すでに平安時代の遺構より出土したもの５点は図示した。その他に中世の遺構あるいは遺構に伴わない土錘が24点ある（第74図1～13）。Ⅰ区は北側のＢ－７・８区に多く、Ⅱ区では南側Ｅ－２区やＦ－３区に多い。

土錘は平安時代中期以後、Ⅲ期までの遺構から出土し、他の時期は不明である。平安時代からⅠ期にかけてのものは、長さ3.7cm～4.9cm、最大径1.4cm～2.2cmで比較的小型である。重さは散在する傾向があり、5.1ｇ～13.7ｇである。逆に、Ⅱ・Ⅲ期の遺構出土のものや遺構に伴わないものは、平安時代（Ⅰ期も含む）に比較するとやや大型化の傾向を示している。中世の遺構から出土したものは、必ずしも遺構と同時期のものか判断できない。例えば、本遺跡の南西にある名取市清水遺跡（丹羽茂・他：1981）の出土土錘は２種に大別されるが、古墳～平安時代に位置付けされている。形態等によって時期を限定できないと指摘されている。清水遺跡例は、本遺跡のものと比較した場合、形態や重量にひらきがある。本遺跡出土例のうち、平安時代からⅠ期にかけてのものは、仙台市山口遺跡（佐藤洋：1981）の平安時代の河川跡出土例に類例を求めることができる。年代的にもほぼ一致するものである。また、中世遺構出土のものや遺構に伴わないものは、比較資料がないがここでは中世の土錘と理解しておきたい。土錘の時代的変化等は、川筋（あるいは海）に沿った遺跡の比較検討が、今後必要であると考えられる。本遺跡ではⅢ期の遺構に伴う魚骨が出土しており、魚類との関連も今後の検討課題である。

２．小鍛冶関係土製品

小鍛冶に関係する土製品には、羽口・坩堝がある。

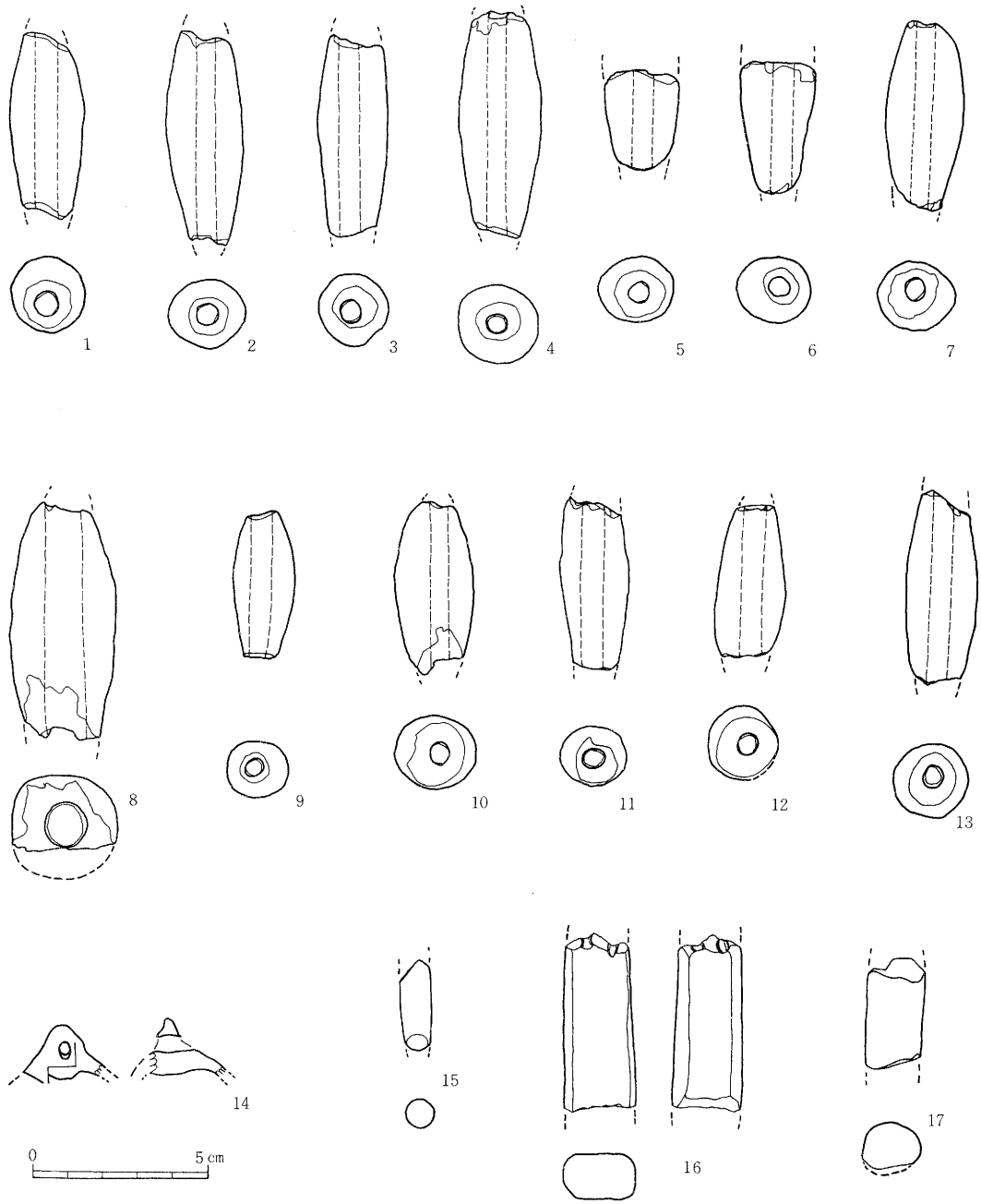
羽口

羽口は２個体出土している。第104図14は現存長15.4cm、最大径9.8cm、内径は一定ではないが約３cmを測る。本例は11号溝（Ｅ－４区）２層より出土したもので、Ⅲ期に属するものと考えられる。古代のものに比べると大型化しているようである。先端には溶解した鉄の付着が認められる。他に12号溝（Ⅳ期）出土の細片がある。

坩堝

坩堝は３個体分出土している。このうち、図示できるものは第107図９の１点である。９は口径7.4cm、器高3.3cmで丸底である。内面には緑青が認められることから、銅製品の製作に利用されたものであろう。46号土壙上面より出土した。本例はⅡ～Ⅲ期のものと考えられる。他に、Ｆ－８区Ⅱ層と表採の各１点あり、いずれも口縁部細片である。

以上、これらの遺物から判断して小鍛冶遺構の存在が予想されるが、今回は明らかにするこ



図版	種類	グリット	道構	層位	大きさ(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	登録番号
1	土錘	B－7		Ⅲ層	(残)5.4×2.2	0.7	20.4	430(No11)
2	〃	〃		〃	(残)6.2×2.2	0.6	24.4	〃(No2)
3	〃	〃		〃	(残)5.9×2.0	0.6	20.4	444
4	〃	B－8	南西ピット	埋土	(残)6.5×2.3	0.5	29.5	916
5	〃	B－8	3号溝	〃	(残)2.9×2.2	0.6	10.1	478
6	〃	〃	1号土壙	埋土中層～下層	(残)3.8×2.1	0.6	12.6	978
7	〃	〃		Ⅲ層	(残)5.5×2.3	0.6	20.2	428
8	〃	E－4	11号溝ベルト	3層	(残)6.8×3.05	1.2	40.9	780
9	〃	〃	11号溝中央ベルト	1層	(完)4.2×1.7	0.5	10.9	527

図版	種類	グリット	道構	層位	大きさ	孔径(cm)	重さ(g)	登録番号
10	土錘	E－2		3層	(残)5.0×2.4	0.5	18.2	1022
11	〃	F－3	29号溝		(残)5.0×1.9	0.6	12.4	709
12	〃	〃	16号溝		(残)4.5×2.0	0.6	14.5	944
13	〃	〃	29号溝	1層	(残)5.6×2.1	0.6	19.4	742
14	土鈴	B－2	16号溝	最下層(7層)		0.4×0.5	4.5	70
15	棒状土製品	〃	〃	埋土上層	(残)2.6×0.9		1.4	64
16	有孔土製品	B－8	3号溝	埋土	(残)5.2×2.1		17.7	478
17	棒状土製品	F－2	31号溝	1層	(残)3.3×1.6		5.7	425

※大きさ（長さ×最大幅）

第74図　Ⅰ・Ⅱ区出土土製品

とができなかった。

3．その他

第74図14は土鈴である。16号溝（III期）B－2区より出土した。信仰に関連するものであろうか。同図15～17は、用途不明の棒状土製品である。16は2ヶ所に孔をもつ。

（7） 石製品

中世以降の石製品として、ここで扱うのは、礫・礫石器、石臼、砥石、大形礫石器、硯、スレート片、珪化木、板石である。石臼を除けば、これらの遺物は館成立以前の今泉の各期にも存在し得るもので、各時期のものが混在している可能性もあるが、明確に分離し得ないので、ここで一括して扱う。

礫・礫石器（第75図～77図、図版21～23）

ほとんど加工しない手に握れるくらいの自然の円礫の表面に、磨痕、敲打痕、凹み等の使用痕を残した石器を、礫石器と総称する。その使用痕の種類によって、磨石（すりいし）、敲石（たたきいし）、凹石（くぼみいし）などと呼びわけられてきたこの種の石器を、実は使用痕の在り方が単純でないことから、それらの分類を一担廃したうえで、把え直そうとする試みもある（後藤：1979）。礫石器は石器時代に最も普通に知られており、古墳時代～平安時代の住居跡から出土することもよくあるが、中世以降ではあまり注意にのぼっていない。また、各時代を通じて、一般に遺跡を発掘すると、使用痕加工痕等は認められないが、本来の自然層中には含まれてない、従って人為的に運ばれた可能性のある礫が相当数出土するものであるが、発掘の際にあまり積極的に採集されないし、採集されてもほとんど分析・報告の対象とならない。

今回の発掘では、中世（II～III期）の内堀と考えられる11号溝で、発掘中に埋土に多数の主として拳大の円礫が含まれていることが注意された。これらの礫は主にグライ化したシルト層である大別した埋土の2層から木製品や植物遺体と混在して出土し、特に一箇所にかたまって出土することは無いが、I区で232個、II区で39個で、溝の屈曲部であるB－5区に最も多い（146個。ついでA－5区88個、B－4区37個）。これらの礫は遺跡の自然層中には含まれておらず、人為的に運ばれたものと思われる。これらが合戦や習俗に関連した「つぶて」（中沢：1981参照）ではないか、との指摘もあり、採集された礫すべてを分析対象として、計測値、使用痕の有無等の属性を記録した。ただし、発掘時に微細な礫や大きな礫など、数としてはごく少なかったが、すべてを採集しているわけではないので、その点、資料に限界がある。他の遺構については、11号溝のような礫の出土状況は見られず、採集されている礫も少く、かつ採集方法も充分でないので、使用痕の認められたものについてのみ報告することにした。礫石器の使用

痕については、一般に客観的な認定基準が定まってないが、一応、ほとんどの観察者が一致すると思われる明瞭なもののみを認定した。磨痕では非常に滑らかな面（図版23－１）と、集中的な擦痕（図版23－２）である。敲打痕は、自然の作用による細かな凹みとの区別がいっそう難しく、確実なものと認定されたのは１点のみである（第76図10)。よって、使用痕が認定されなかったものの中にも、実際には使用されたものが含まれている可能性は当然ある（なお、実測図の表現はP.114参照)。

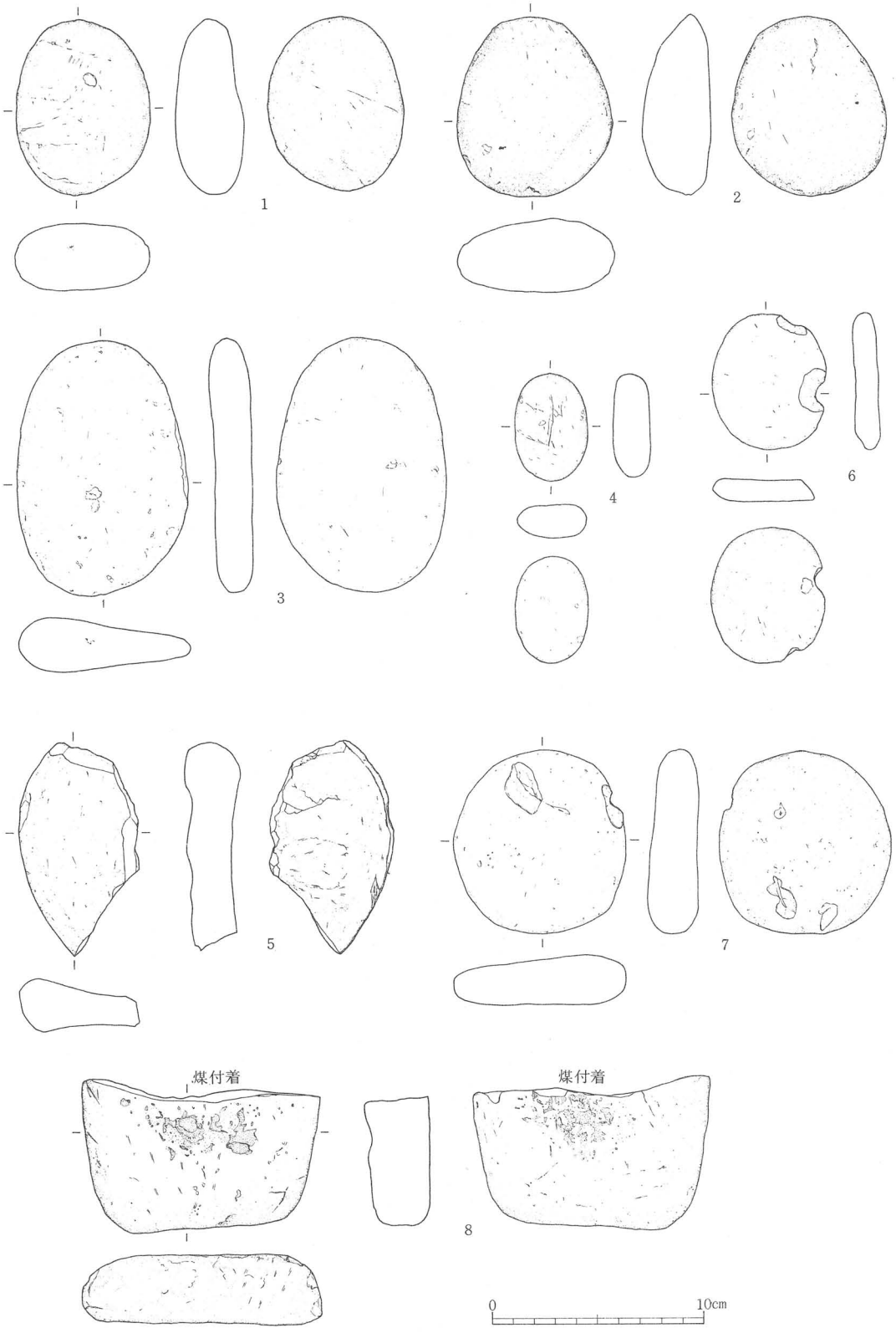
〈11号溝出土の礫〉　計測値の記述的な統計表現は第78図に示した。直接比較できるデータが無いので、これ以上の事は言えないが、長さをとった場合、平均値±12～13㎜の間に全体の約68%が含まれるのは、かなりの集中度と言えよう。形態に関しては第78図４に長さ･幅･厚さの比を示した。このグラフは、縦軸が礫の平面観を示し､1.0が円形で、数値が大きくなるにつれ細長くなることを示す。横軸は断面形で、数値が大きくなるにつれて厚味を増し､1.0が最大で円形になる。このグラフでは、角の有無等細かい形は現れないが、観察所見として、楕円形で偏平ないしや厚味のあるものが大半を占め、角ばって厚味のあるもの、棒状、角柱状のものは非常に少ないことが言える。

使用痕が認められたものは、Ⅰ区で７個（3.0%)､Ⅱ区で６個（15.4%)､計13個（4.8%)で、割合は大変少ない。第75図３は側縁に平坦な磨面があり、６は側縁に二つの抉り状の剝離痕がある。８は破断面も磨られ、二つの凹みには媒状の付着物がつまっている。使用痕を有するものは、必ずしも標準的な大きさ、形態の礫ではない。

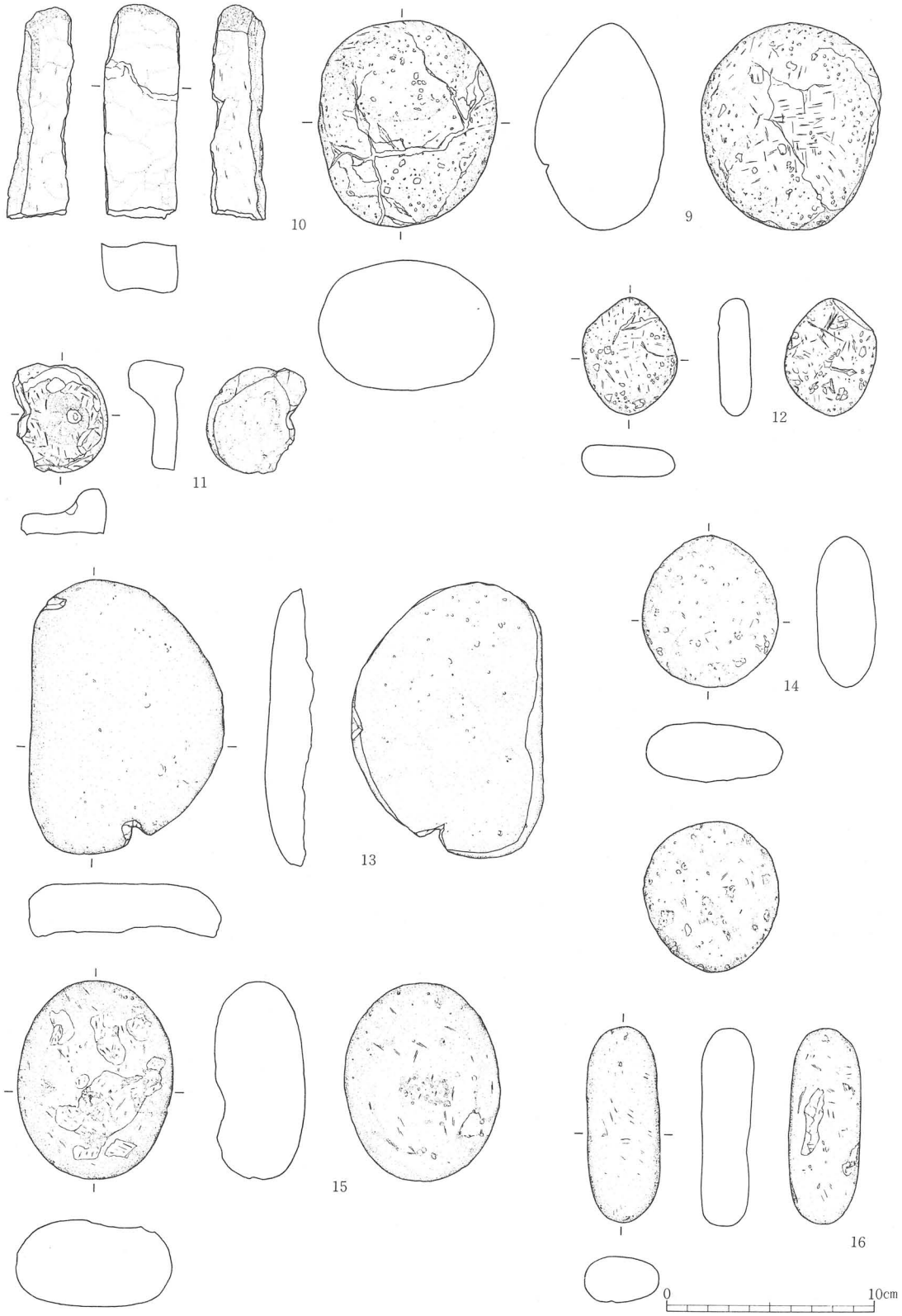
石質では､Ⅰ・Ⅱ区を併わせて、安山岩が40.6%、砂岩系のものが27.3%で大半を占める(第78図5)。安田（1978 P.523）は､名取川の下流域で２㎞ごとの礫の最大粒径（2500㎡内に於ける最大粒径８個の中径を求め、算術平均したもの）を示しているが､今泉城を挟む２地点のそれはは、21cmと12cmであり、かつ安山岩を多く産するという報告は、参考になろう。

〈その他の遺構の礫石器〉　発掘区全体では上述のような小形の礫が131個採集されている。最も多いのが15号溝で14個、ついでＥ－７区19号井戸８個、29号溝６個、21号溝５個で、11号溝に比べ、ずっと少ない。うち、18個に使用痕が認められた（大形の礫は、大形礫石器の項で扱う)。

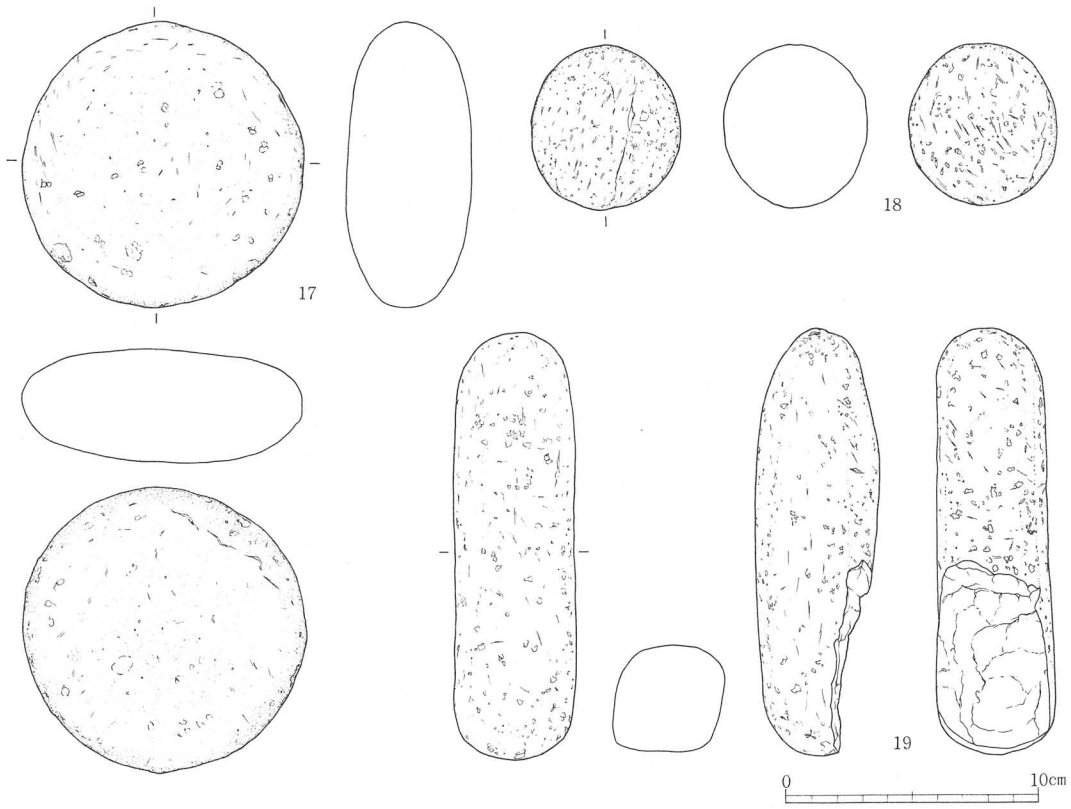
11号溝から集中的に出土した礫については、遺跡の重複性や採集方法の問題もあり、その性格を明らかにし得ないが、出土状況や大きさ・形態の集中性から見て、中世に於いて選択的に今泉城に持ち込まれ、溝の埋没過程に廃棄ないしは取り込まれた可能性が強い。また、礫は遺跡の前面を流れる名取川から採集されたのではないだろうか。使用痕を残すものが確実に含まれているが、平安時代以前の遺跡も重複しているので、中世に於ける礫石器の存在についてはここでは確定的なことは言えない。他の遺構出土のものについても同様である。ただ、形態や



第75図　礫石器(1)



第76図　礫石器(2)



図版	地区	遺構	層位	長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)	石質	磨痕	その他の使用痕	備考	下限
75－1	A－5	11号溝	2層	82.6	64.0	33.2	239	シルト岩	○			III期
－2	〃	〃	〃	85.6	74.6	34.0	314	安山岩	○			〃
－3	〃	〃	〃	121.2	80.4	23.0	191	細粒砂岩	○			〃
－4	B－4	〃	〃	51.0	34.2	18.0	30	凝灰岩	○			〃
－5	〃	〃	〃			27.1		細粒砂岩	○		破損	〃
	B－5	〃	〃	99.1	87.9	36.7	230	〃	○			〃
	〃	〃	〃	73.4	60.6	31.1	200	安山岩	○			〃
－6	E－4	〃	〃	66.4	54.6	12.9	35	シルト岩	○	縁辺に抉り二つ		〃
－7	E－6	〃	〃	86.6	82.3	24.3	113	凝灰岩	○			〃
－8	F－4	〃	〃	113.0	69.4	31.3	410	流紋岩	○	凹み二つ	凹みに煤付着	〃
76－9	E－4	〃	〃	99.7	86.1	63.1	702	安山岩	○			〃
	〃	〃	〃			39.2		〃	○		破損	〃
	〃	〃	〃		61.0	49.4		中粒砂岩	○		〃	〃
	A－7	4号土壙						シスト	○		〃	平安
	E－3	29号溝	2層					細粒砂岩	○		〃	II期
－12	〃	〃	〃	54.4	44.0	15.0	58	安山岩	○			〃
－10	F－7	21号溝	埋土中位	(102.1)	35.8	23.7	157	ホルンフェルス	○	先端に敲き痕	破損?	III期
－11	F－8	〃	2層	54.8				シルト岩	○		破損	〃
	〃	〃	1層					ホルンフェルス	○		〃	〃
	A－3	13号溝	最上層					中粒砂岩	○		〃	〃
	B－2	16号溝	埋土下部						○		〃	IV期
－14	〃	15号溝		72.7	64.4	29.4	199	中粒砂岩	○			〃
－13	B－4	12号溝		133.3	92.5	(20.9)	(233)	粗粒砂岩		擦痕のある抉り2つ	破損?	〃
－15	〃	1号竪穴遺構		95.9	74.8	44.1	240	シルト岩	○			〃
	B－2	14号土壙						スレート	○		破損	〃
77－19	B－3	13号井戸		(169.7)	46.1	43.1	(554)	石英安山岩	○		破損?	III期
	E－7	19号井戸				15.3		シルト岩	○		破損	V期
	B－5	7号井戸						〃	○		〃	I期
76－16	A－1		II層	94.6	34.1	25.4	72	〃	○			不明
77－18	E－7		〃	66.3	58.2	55.0	273	中粒砂岩	○			〃
－17	F－5		III層	111.5	110.1	48.8	944	〃	○			〃

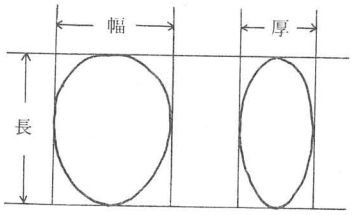
第77図　礫石器(3)

		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)
I区	個数 n	208	208	216	204
	平均 $\bar{x}$	88.2	65.6	31.1	236
	標準偏差 $\sigma n-1$	11.8	9.6	7.1	76
	最大値 max.x	138.4	88.9	56.7	550
	最小値 min.x	51.0	34.2	13.5	30
II区	n	30	33	33	29
	$\bar{x}$	84.9	68.0	31.8	251
	$\sigma n-1$	12.9	9.1	9.5	128
	max.x	113.0	86.7	63.1	702
	min.x	54.8	52.0	12.9	35
I・II区計	n	238	242	249	233
	$\bar{x}$	87.8	66.1	31.2	238
	$\sigma n-1$	12.0	10.2	7.4	84
	max.x	138.4	88.9	63.1	702
	min.x	51.0	34.2	12.9	30

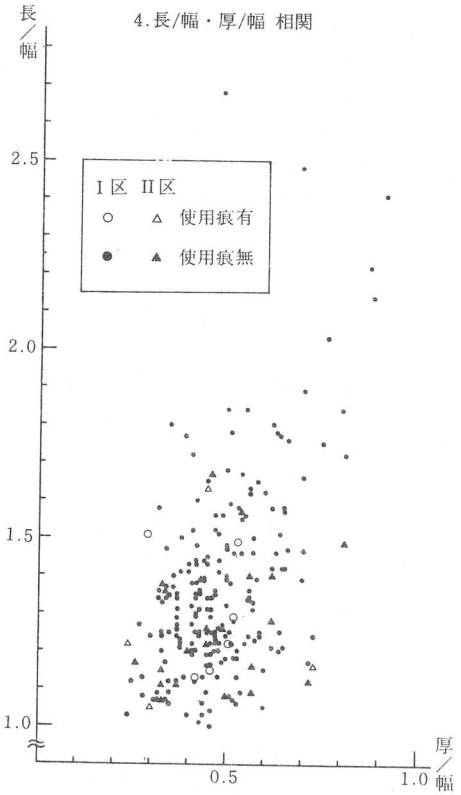
＊$\bar{x}$、$\sigma n-1$は右のグラフより簡易的に求めた

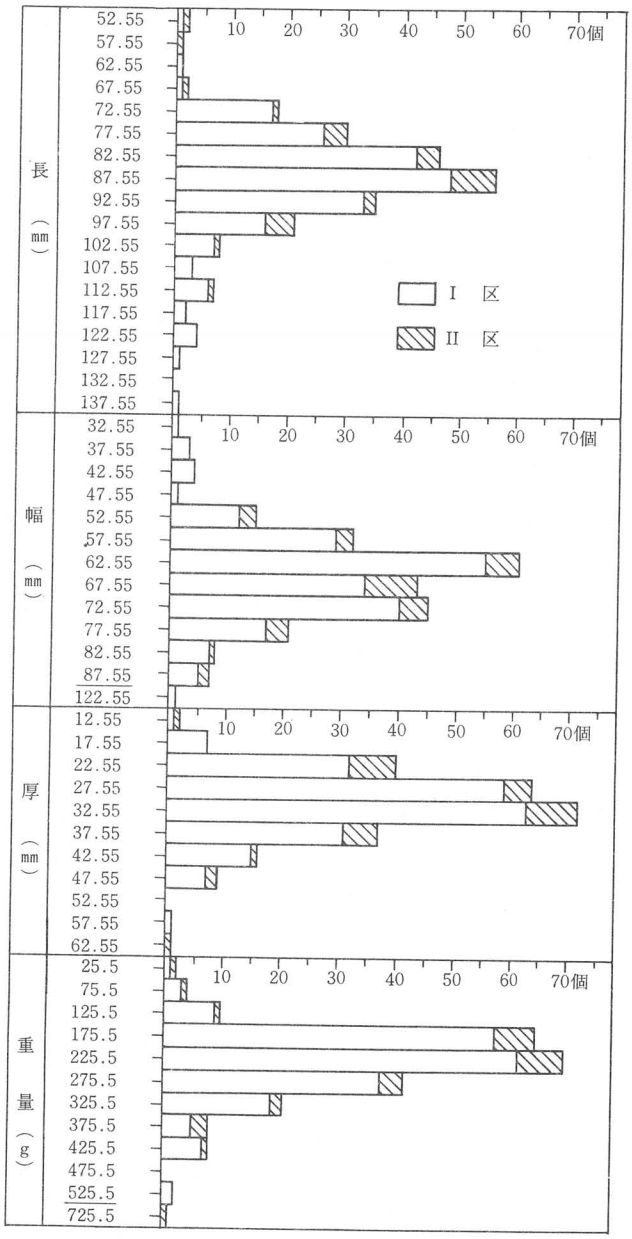
1.平均、標準偏差

2.計測法



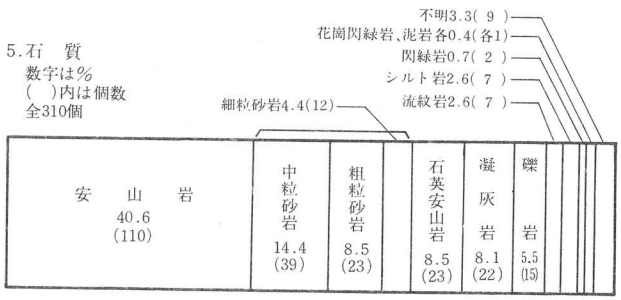
4.長/幅・厚/幅 相関





3.長、幅、厚、重量度数分布

5.石　質
数字は%
(　)内は個数
全310個



第78図　11号溝出土礫統計グラフ　(個々の礫の観察表は紙数の都合により省略した)

使用痕の在り方を見た場合、いわゆる石器時代の礫石器とは多少異なった印象を受けるものが含まれる。今後、中世以降の遺跡におけるこのような礫の出土に、より注意が払われるべきだろう。

砥石（第79図～84図、図版235・236）

今日、我々が普通に目にする砥石は金属を研ぐものであるが、広く物を研ぎ磨く道具と定義され、我々が〝砥石〟として認識する遺物は石器時代に遡る。古墳時代以降になると我々が日常刃物を研ぐために使うような方形の砥石はかなり普通に見られるようになる。ここでは比較的粒子の細かい岩石で、平坦な磨面をもつものを砥石として分類した。分類した砥石は、宮城県刀剣登録審査員の中川高氏に鑑定頂いたが、すべて金属に対して使用可能とのことである。

小片も含めて88点が得られ、かなりの出土量と言える。他の石製品同様、個々の砥石の正確な時期は決め難いが、出土量の多さから見ても中～近世のものが主体を占めると推測される。

砥石を用いる人による最も一般的な分類は、荒砥・中砥・仕上砥であり、この三つの区分は、高級品・特殊品を仕上げる場合などを除けば、対象や人によって極端な差は無いようである。もちろん、目の粗さは原石によって決まるので、上記の三つの中でも様々な段階のものがあり中間的なものもある。それ以上の細かい分類は用途・産地を併わせ、地名等を冠した固有名詞的なもの、商品名で、高級品や名品に主眼が置かれ、時代や人によっても様々で、考古学で通常用いるような、属性に与えた優先関係に基づく分類ではない。このような名称については、和漢三才図会（寺島良安編　1712正徳２年　105巻）、日本山海名産図会（蔀関月画　1799寛政11年、５巻）や現在販売されている自然砥石の名称が参考になろう（なお、村松　1973　P.171～195参照）。

ここでは、全体を便宜的に形態によりⅠ～Ⅳ類に分類して提示することにした。Ⅰ・Ⅱ類は直方体にきれいに面が画されたもので、Ⅰ類は断面に厚味があり、Ⅱ類は偏平なものである。破損品が多く、かつ砥石の場合破損面と磨面の新旧関係が明瞭でないので、大きさでさらに分けることはしなかった。Ⅲ類は大形で不定形なもの、Ⅳ類は末端が石斧のような形をしたもの、Ⅴ類は中央に溝がある有溝砥石、Ⅳ類はいずれにも属さない不定形なものを一括し、小片で形態不明のものも表にまとめた。この他に、中川氏によれば、大形礫石器のⅣ類としたものが固定式の砥石として使用可能とのことである。

〈目の粗さ〉　今回出土した砥石は中川氏によれば、概ね中砥の範中に入るもので、日用品を対象とするなら、仕上砥として使用可能なものも含まれる。本格的な荒砥は無い。また、名品の類は１点も含まれてない、とのことである。石質との関連をみると、シルト岩が中砥から仕上砥に、細粒砂岩やホルンフェルスが中砥からやや荒い方に対応するようである。

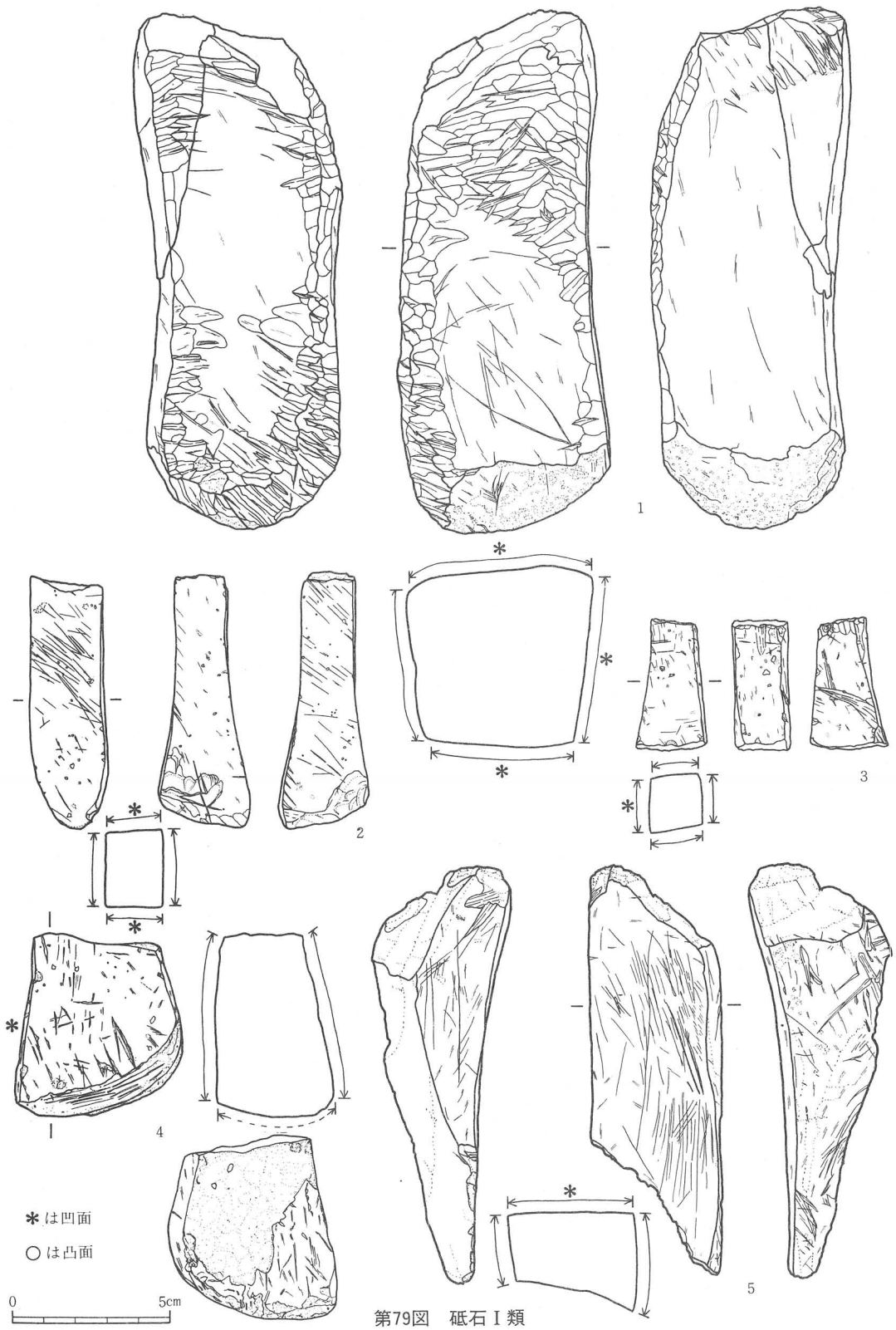
〈面の状態〉　Ⅰ・Ⅱ類の場合、特に、最も使用されたと思われる１～２面が凹面となり、他の面に比べて滑らかに磨り上がっていることが多い（実測図に＊印で表示)。これは必ずしも砥石の正面側(幅広の面)とは限らない。逆に凸面をもつ例もある（No.29　第80図10。○で表示)。Ⅲ類では、No.44（第81図14）が平坦面と側面に凹面を、No.37（第81図15）が平坦面、凸面、凹面を持ち、ぞれぞれに使用されているようである。用途に応じて使い分けられたのだろう。Ⅳ類では、貝殻状の剝離面の内部を磨りこんだり（No.59､第84図26)、破片全体を特殊な面の形に磨ったり（No.63、第84図27)、折れた角と折れ口の部分を幅狭な砥面として利用している例（No.57）がある。

〈擦痕・その他の痕跡〉　砥面の表面は研磨によって滑らかになっているが、その上に多数の線状の傷（擦痕）が残されている（図版23-3.5)。このような擦痕の大きなものは､我々の通常の砥石の用法からすれば、刃こぼれを消したり、研ぎすぎた刃を潰すため、刃を垂直にあてた結果と思われるが、全体に現在の砥石に比べ擦痕が非常に多い。これらの擦痕は幅・深さとも様々で、同じ砥石の面には同種の擦痕がある程度集中していることから、こすりつけられた刃物の多様さを反映しているものと思われる。

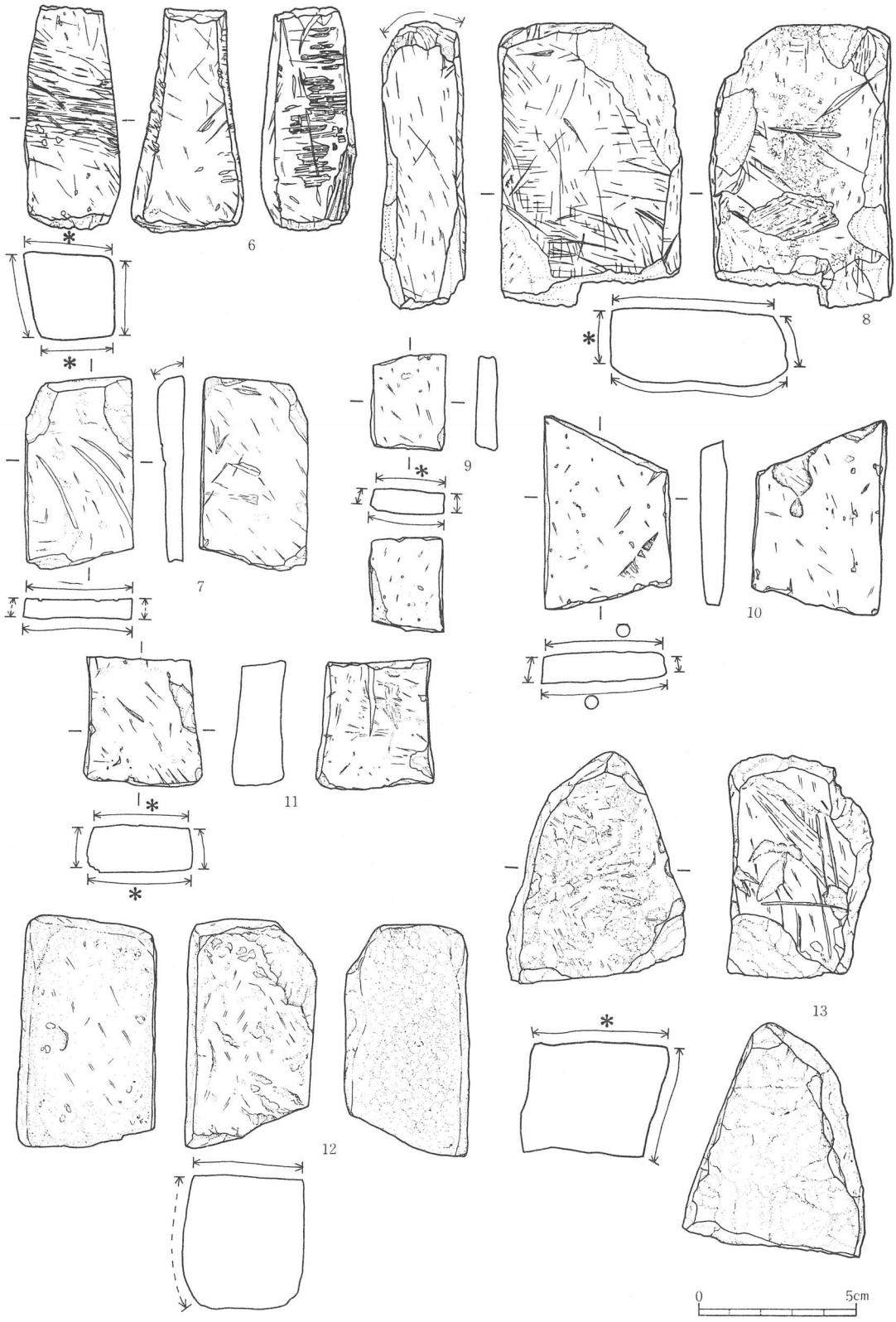
また、砥面や破損面に、特殊な刃先や部分を研いだような小さな溝がいくつか見られる場合がある。No.54（図版23－６）は幅１㎜位の溝が数本１組で、側面に抉りをつけている。

No.25（第80図８、図版23－７）では敲打痕が見られ、No.１（第79図１、図版23－４）では整形のためか、削り取られたような跡がある。Ⅱ類のNo.27､No.35は側面が切り離されたままになっている。

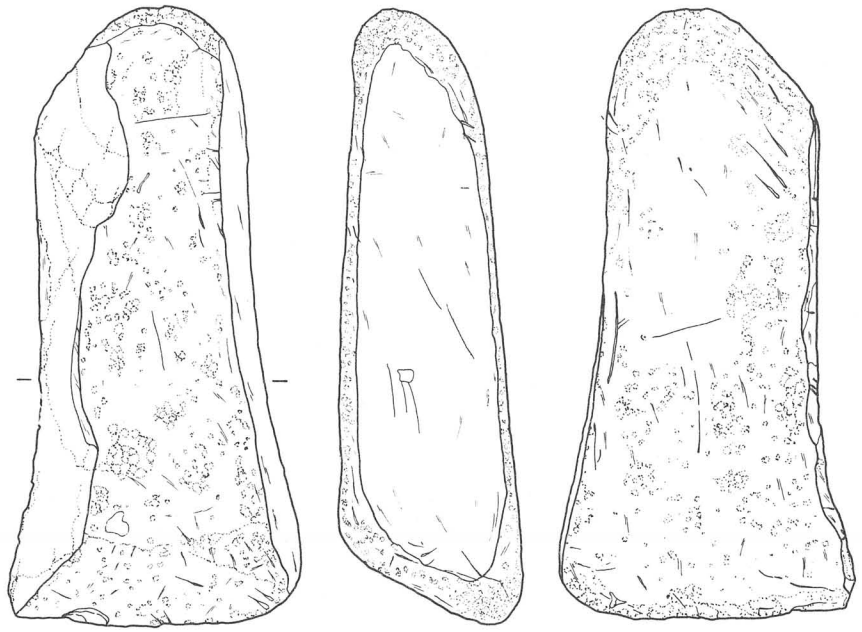
以上、出土した砥石について概括した。これらの砥石の様々な面の形状、擦痕は多様な刃物（農具、武器、工具等）の存在を想せるが、具体的な使用対象・使用法等を明らかにすることはできない。使用痕をいくらていねいに観察しても、それ自体からは解釈は成立しないのが使用痕研究の原則であり（芹沢・梶原・阿子島　1981)、砥石の場合、実験が難しく､用法が変化に富んでいるため、民俗例の援用も容易でない。分類した各形態と用法の関連も、今回充分明らかにし得なかった。観察表も、あくまで記述的な段階にとどまるものである。また、砥石の原産地同定については、これまでほとんど試みられてないが、追求してみる価値はあろう。自然砥石の採掘は、近年急速に衰えており（村松　1973)、宮城県内で現在採掘が行われているところはない。しかし、各遺跡出土の資料の比較や、最近まで採掘されていた砥石との比較、伝承によるかつての砥石産地の探索などの基礎的作業を通して、ある程度明らかにできる可能性もある。



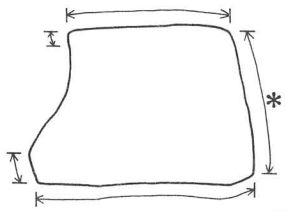
第79図　砥石Ⅰ類

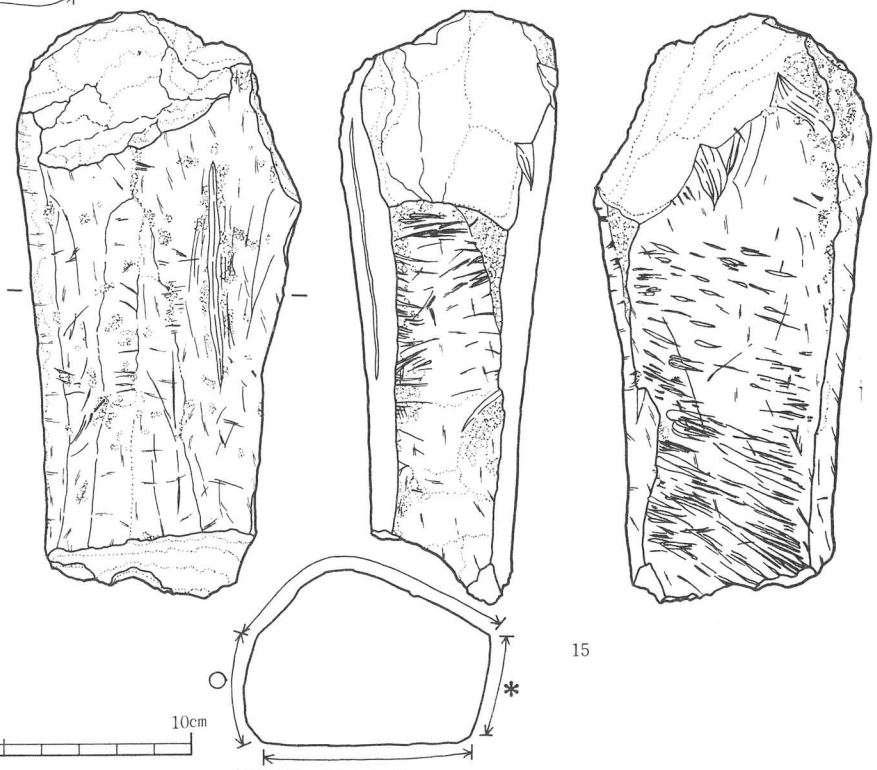


第80図　砥石Ⅰ類(6)、Ⅱ類(7～11)、Ⅲ類(12・13)



14

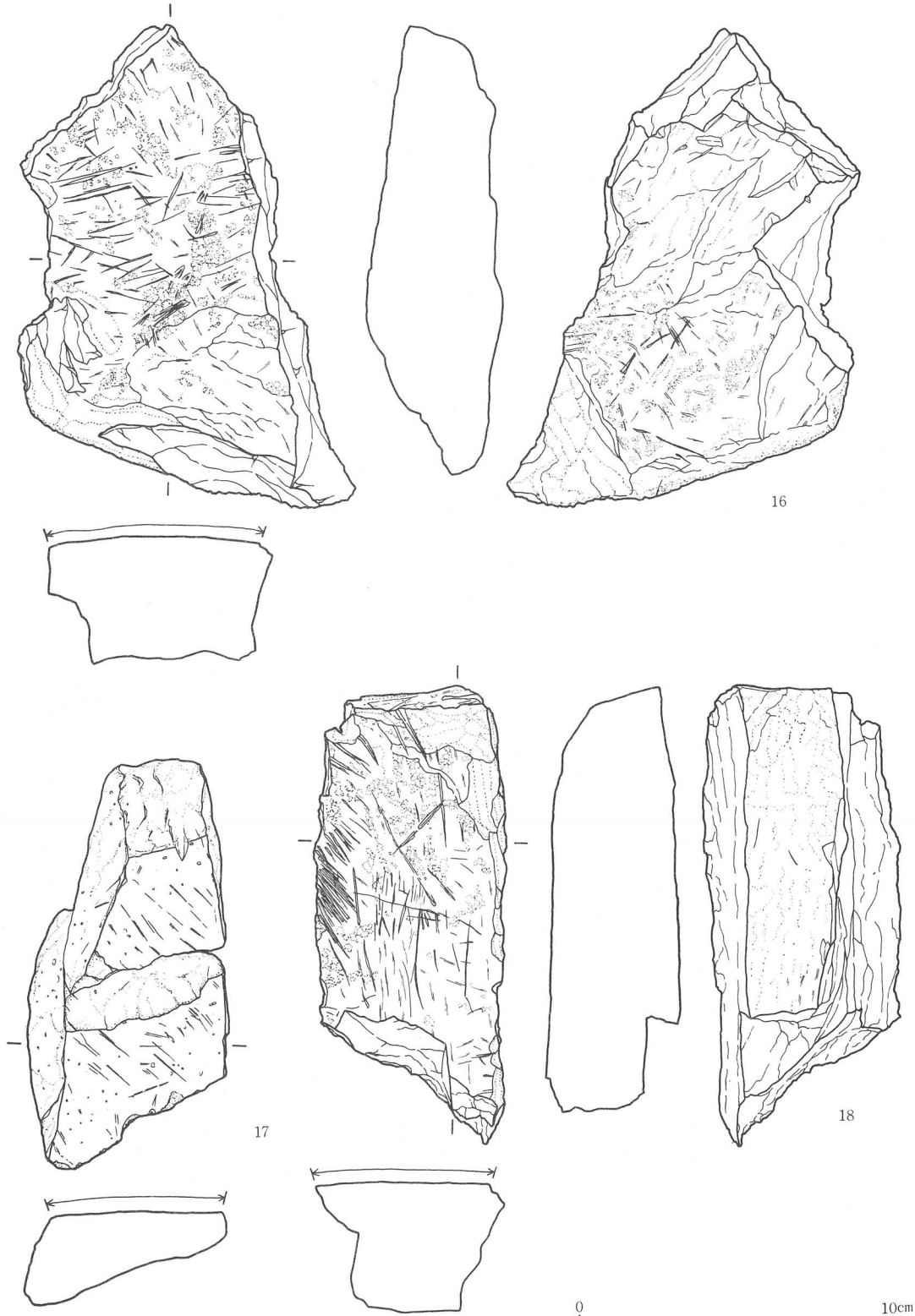




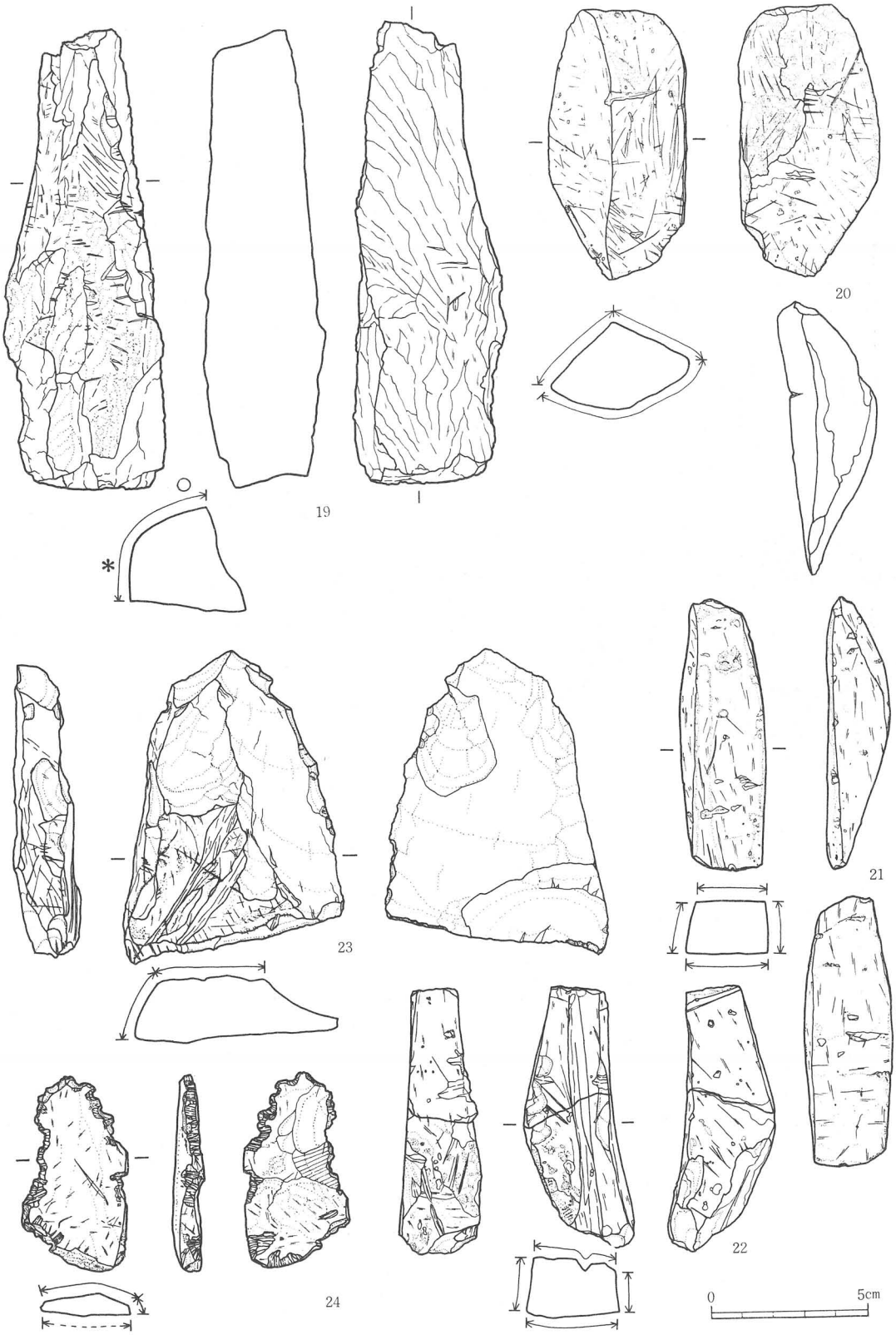
15

0 10cm

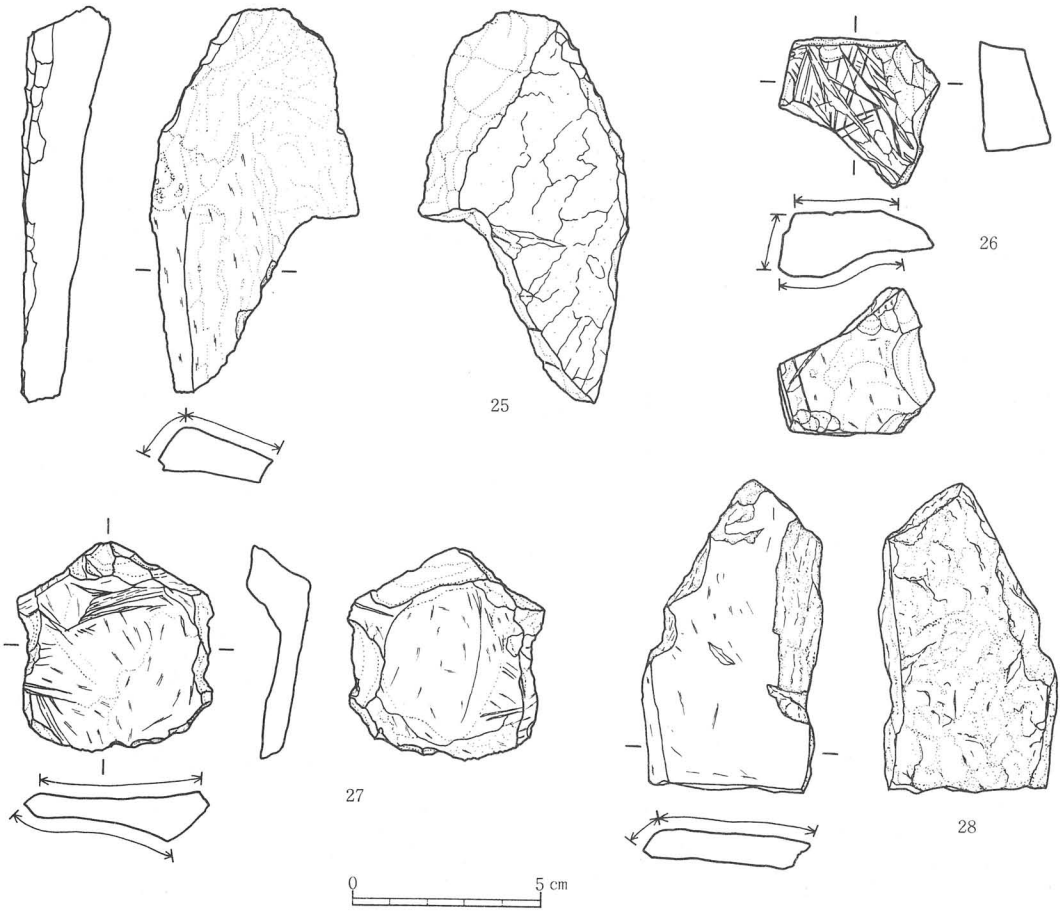
第81図　砥石III類

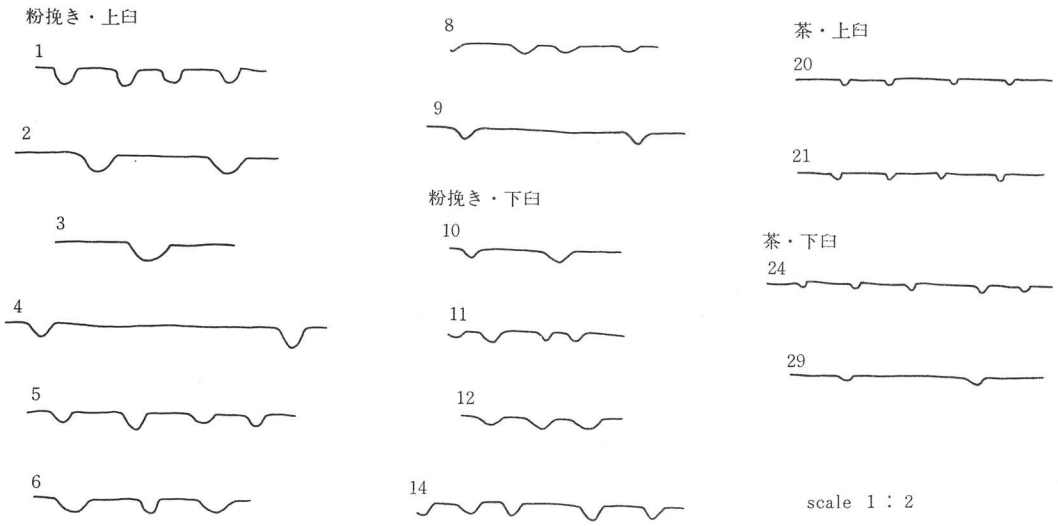


第82図　砥石III類



第83図　砥石Ⅲ類(19)、Ⅳ類（20・21）、Ⅴ類(22)、Ⅵ類（23・24）





第84図　砥石Ⅵ類、石臼の目

第6表　砥石観察表

Ⅰ類(No.1～21)・Ⅱ類(22～35)・Ⅲ類(36～49)・Ⅳ類(50・51)・Ⅴ類(52)・Ⅵ類(53～66)

＊「平」は平担面。凹は凹面、凸は凸面　＊「擦」は擦痕が累しい、意。
＊目の荒さで特に記載の無いものは中砥　＊単位はmm、g

No.	図版	地区区	遺　構	層　位	幅	厚	石　質	備　考	下限
1	－1	E－3	25号井戸		64.1	61.4	シルト岩	中～仕上砥 凹3、平1	Ⅰ期
2	－4	B－7	3号溝		37.4	50.8	細粒砂岩	凹2、平2	〃
3		〃	〃				シルト岩	小片	〃
4	－2	F－7	26号土壙	埋土上部	24.2	29.4	〃	凹2、平2、黒色付着物	Ⅱ期
5		F－4	11号溝	3　層	20.8	17.0	細粒砂岩	凹3、平1、溝1	〃
6		A－3	12号井戸	埋土上部			〃	やや荒目	Ⅲ期
7		A－5	11号溝	2　層			〃	凹1、平2、破損面も研磨、溝2	〃
8	－3	〃	〃	〃	23.0	17.5	〃	凹2、平2、溝2	〃
9	－6	E－4	〃	1　層	27.0	34.9	〃	凹2、平2、擦	〃
10			〃	1　層	34.4	37.5	〃	凹1、平3、全体にうすい黒色付着物	〃
11		F－4	〃	2　層	47.1	30.2	〃	凹2、平2	〃
12		F－3	〃		40.7	28.3	シルト岩	やや荒目、凹2、平2	〃
13	－5		〃				〃	中～仕上砥、凹1、平2、溝2	〃
14		A－2	15号溝	1・2層	37.2	43.8	泥　岩	凹1、平3、黒色付着物	〃
15			21号溝	2　層	57.9	89.3	細粒砂岩	凸1、平1(溝1、擦多)、凹1、「備水」にやや似る	〃
16			〃		44.0	48.0	〃	凹1、平3(擦)、天童産？	〃
17			〃				〃		〃
18		A－7	1号溝				〃	頂部に溝	Ⅴ期
19		〃	〃	1　層			シルト岩	凹2、平2、部分的に黒色付着物、溝1	〃
20		F－4・5	26号溝		31.5	29.1	〃	凹2、平1、黒色付着物、溝1	〃
21			〃	1　層			細粒砂岩		〃
22	－11	B－3	14号溝		36.9	17.1	中粒砂岩	凹2(溝1)、側面凹2	Ⅰ期
23		A－8	2号ピット(2号掘立)		39.4	12.7	〃	凹1(溝)、平1、側面平2(擦)	Ⅲ期
24		A－5	11号溝	2　層	30.1	16.2	〃	凹1、平1、側面平2	〃
25	－8	F－4	〃		56.1	26.0	細粒砂岩	中～仕上砥、凹1、平1、側面凹2、溝2、擦、敲打痕	〃
26		F－6	21号溝	2　層	44.6	14.7	凝灰岩	凹2、側面凸2、溝1	〃
27	－7	A－2	15号溝	1　層	34.5	8.9	細粒砂岩	中～仕上砥、凹1、平1、両側切り放し、溝3	Ⅳ期
28		A－1・2	16号溝		24.9	10.4	中粒砂岩	凹2(溝1)、側面平2	〃
29	－10	A－2	1号溝	3　層	40.1	9.0	細粒砂岩	凸2(溝1)、側面平2	Ⅴ期
30		B－8	3号土壙		40.9	10.4	〃	凹1、平1、側面平2	不明
31	－9	B－6		Ⅲ　層	23.7	7.1	凝灰岩	凹1、平1、側面凹2	〃
32		A－8			57.3	16.4	〃	凹1、平1、側面凸1、平1	〃
33			表　採		30.1	15.0	〃	凹2、側面平2	〃
34			〃		48.1	17.2	シルト岩	凹1(溝3、擦)。凸1(擦)。側面平2	〃
35			表採？		27.3	5.6	〃	凸2、両側切り放し	〃

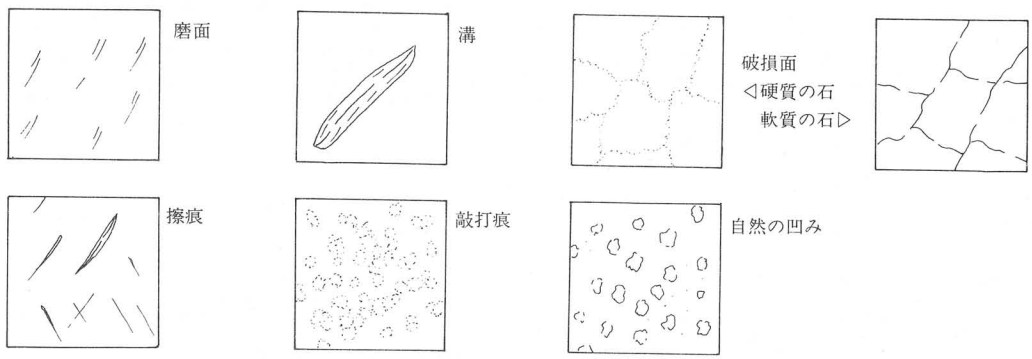
No.	図版	地区	遺　構	層　位	長	幅	厚	重量	石　質	備　考	下限
36	－17	A－7	4号土壙						凝灰岩	平1、右側辺切断痕	平安
37	－15	F－4	11号溝	底	(154.9)	73.4	52.6	(726)	中粒砂岩	凸1(溝1)、平1(黒色付着物、擦)、凹1	Ⅱ期
38	－16	E－3・4	〃	3　層	(162.0)	(90.7)	(42.0)	(673)	ホルンフェルス	平1、(擦)	〃
39		F－2	29号溝	1　層			57.0		細粒砂岩	平4、黒色付着物	〃
40	－18	A－4	5号土壙		(144.0)	(69.1)	41.3	(460)	ホルンフェルス	平1(擦多)	Ⅲ期
41	－19	B－4	11号溝	2　層	(144.4)	45.6	38.8	(350)	〃	凸1(擦多)	〃
42	－12	E－4	〃			40.0	43.2	(251)	〃	平1(うすく黒色付着物)	〃
43			13号溝	埋土下部		(63.2)	(53.9)		〃	平1、凸1？	〃
44	－14	F－8	19号溝	〃	164.9	76.0	46.5	691	シルト岩	中～仕上砥、平1、凹1	Ⅳ期
45		F－5	25号溝			57.2	46.0		細粒砂岩	凹1、平2、一部に黒色付着物	Ⅴ期
46	－13	A－6	19号ピット			(56.6)	(38.4)		中粒砂岩	荒砥、凹1(擦)、平1	不明
47			不明土壙		(130.0)	37.5			細粒砂岩	平1、あまり使用しない、自然石に近い	〃
48		A－6・7	ピット				(51.6)		〃	平1(擦)	〃
49			表　採						中粒砂岩	平1(擦)	〃
50	－20	E－4	11号溝	1　層	88.1	44.0	26.3	98	細粒砂岩	やや荒目	Ⅲ期
51	－21	A－7・8	1号溝	1　層	86.2	27.9	18.2	62	シルト岩	〃	Ⅴ期
52	－22	A－3	12号井戸	埋土上部	(84.0)	31.2	24.8	(73)	中粒砂岩	〃　、側面凹	Ⅲ期
53	－25	B－8	1号土壙	最下層			(18.2)		〃	平1、破損面にも擦痕	Ⅰ期
54	－24	F－7	21号溝	〃	61.7	32.6	7.6	18	シルト岩	中～仕上砥、側面に数本1組の抉り込み	Ⅱ期
55	－28	B－6	3号井戸	8下層		(44.2)	9.3		中粒砂岩	平1、側面平1	Ⅲ期
56		A－3	9号土壙						ホルンフェルス	平1、側面平1(擦)	Ⅳ期
57		A－4	12号溝	1　層			7.1		シルト岩	破損した三角形の角と割れ口も使用、平2	〃
58	－23	B－4	〃		92.9	72.9	18.8	136	〃	平1、側面平1、溝2、擦	〃
59	－26	B－2	15号溝	1　層	39.0	42.0	16.9	21	〃	平1(擦)、凹1(剝離面内も磨る)	〃
60		〃	16号溝						凝灰岩	平1、破損面も磨る	〃
61		F－2	31号溝	1　層	(50.0)	15.4			シルト岩	平2(側面)	〃
62		A－6	1号溝	〃					細粒砂岩		Ⅴ期
63	－27	A－5	〃	3　層	55.6	51.4	16.5	25	〃	凹2、破片を利用	〃
64		A・B－1		Ⅱ　層	(54.5)	21.7	9.5	(20)	〃	平1、凹1、擦	不明
65			表　採		(49.6)	(47.3)	17.4	(50)	ホルンフェルス	三角形、凹1(側面)、黒色付着物	〃
66			〃			(42.4)	7.2		シルト岩	中～仕上砥、平1	〃

第７表　砥石観察表（形態不明）

No.	地　区	遺　構	層　位	石　　質	下限
67	Ｆ－５	３号住居		砂　　岩	平安
68	Ｅ－３	29 号 溝	最 下 層	凝　灰　岩	II期
69	Ｅ－４	11 号 溝			III期
70	Ｆ－４	〃	１　層		〃
71	Ｂ－６	３号井戸	８ 下 層	細 粒 砂 岩	〃
72	Ａ－５	９ 号 溝		シ ル ト 岩	〃
73	Ａ-3･4	12 号 溝		ホルンフェルス	IV期
74	Ａ－４	〃	最 上 層	シ ル ト 岩	〃
75	Ｂ－４	〃	埋土上部	細 粒 砂 岩	〃
76	〃	〃	〃	中 粒 砂 岩	〃
77	Ｂ－２	15 号 溝	最 上 層	細 粒 砂 岩	〃

No.	地　区	遺　構	層　位	石　　質	下限
78	Ｂ－２	16 号 溝		細 粒 砂 岩	IV期
79	Ａ-7･8	１ 号 溝	１　層	〃	V期
80	Ｆ－５	25 号 溝		中 粒 砂 岩	〃
81	Ｂ－４	９号井戸	２　層	細 粒 砂 岩	III期
82	〃	〃	７　層	中 粒 砂 岩	〃
83	Ｂ－１	17号井戸		ス レ ー ト	不明
84	Ｂ－４	ピ ッ ト		凝 灰 岩 ？	〃
85	Ｂ－２		II　層	ス レ ー ト	〃
86	〃		〃	凝　灰　岩	〃
87	Ｂ－７		〃		〃
88	Ｆ－８			中 粒 砂 岩	〃

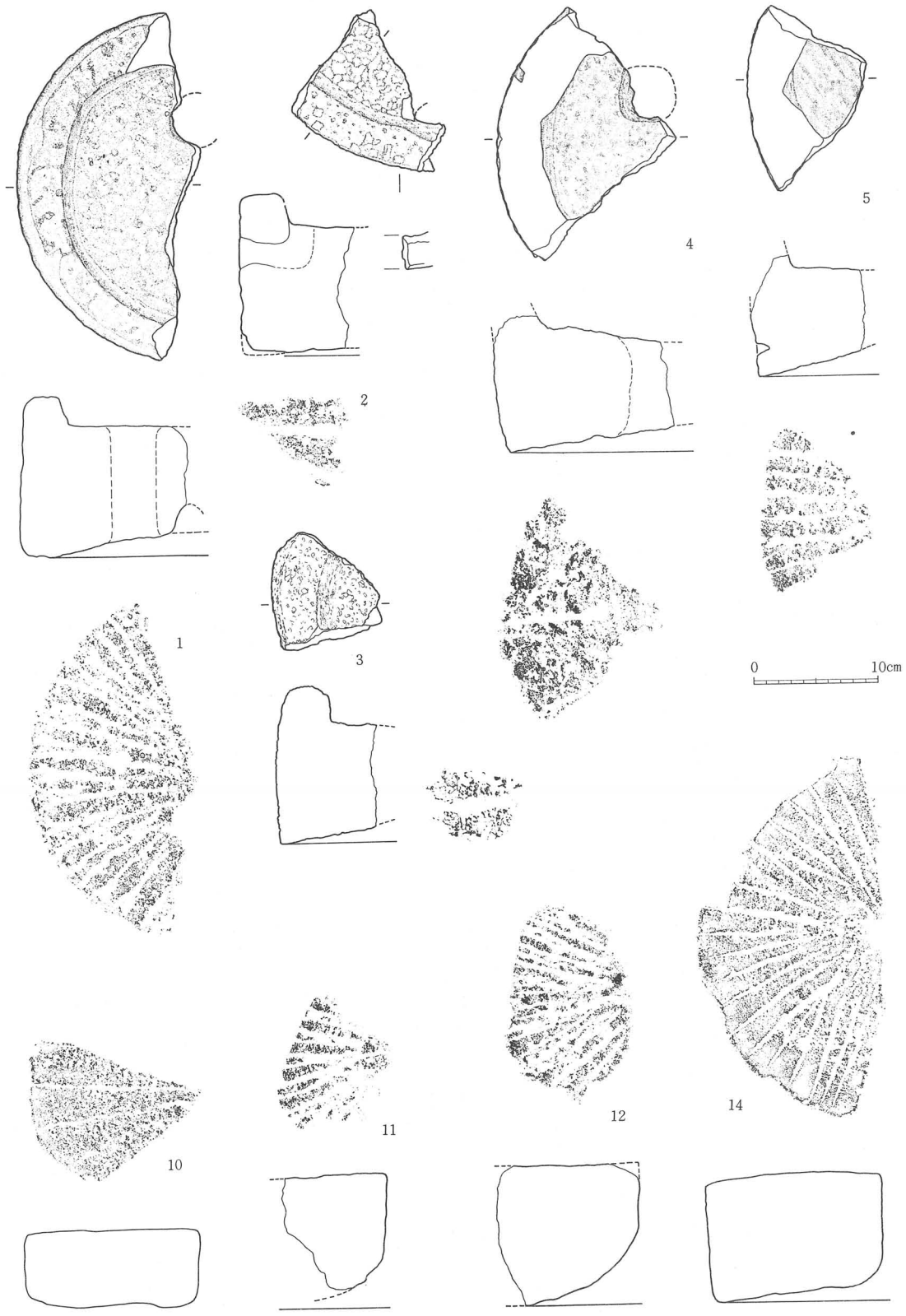
砥石・礫石器の実測図表現法



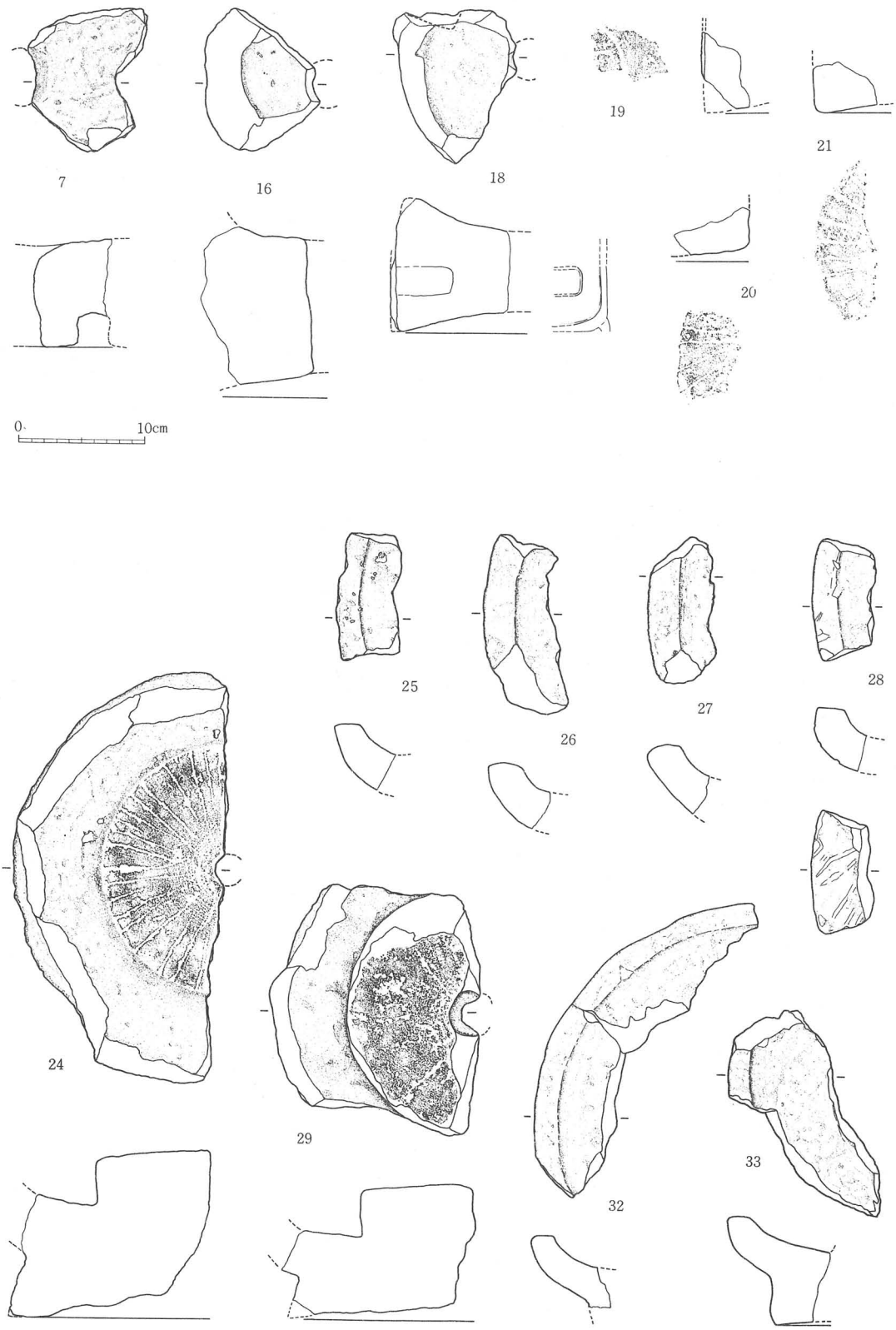
石臼（第85図・86図、図版22－2･3）

石臼には粉挽き臼と茶臼があり、三輪（1978ａ、ｂ）に詳しい。今回の発掘では粉挽き臼の上臼９、下臼６、茶臼の上臼８、下臼10の計33個体分が出土した。すべて破片である。Ⅰ期を下限とする茶臼１点（No. １８）、３期を下限とする茶臼１点（No. ２０）、５期を下限とする茶臼１点、粉挽き臼２点の他は、すべて４期を下限とする遺構から出土している。今泉のⅠ期は12世紀～13世紀中葉に定められており、石臼としてはかなり古い出土例となる（三輪　1978ｂ、PP.30―31参照）。

Ｂ－２区14号土壙では、粉挽き臼５点、茶臼３点が一括して廃棄された状況で出土した。こ



第85図　粉挽き臼



第86図　粉挽き臼(7)、茶臼

第8表　粉挽き臼・茶臼観察表

粉挽き・上臼

単位はmm

No.	地区	遺構	層位	＊1 直径 D	＊2 高 H_1	上縁 t ＊3	上縁 h	ふくみ S	＊4 分画×溝	＊5 供給口 a×b	石質	残存率	備考	下限
1	B－2	14号土壙		(310)	129	28	23		不明	35×？	安山岩	1/2	供給口内に放射状の溝 側面に縦のノミ痕	Ⅳ期
2	〃	〃		(350)	131	28	24		〃	－	〃	1/10	供給口・挽手孔つながる 側面に縦のノミ痕	〃
3	B－4	12号溝	埋土上部	(248)	127	41	33		〃	－	安山岩 (発泡が良い)	1/10	臼面かなり磨滅 破片2点	〃
4	A－7	1号溝	1層	(280)	(93)	(35)			〃	45×45	安山岩	1/4	供給口内に放射状の溝	Ⅴ期
5	F－2	27号井戸	埋土上部	(320)	(85)	(30)			12？×3？	？	〃	1/10	側面・上面にノミ痕 臼面外縁に黒色付着物	？
6	A－6	1号溝			(92)				不明	－	〃	〃	側面に縦のノミ痕 臼面・上面よく磨滅	？
7	F－8	18号溝							溝無？		〃	1/8	臼面よく磨滅 芯棒孔残存	Ⅴ期
8	E－7		Ⅱ層	(382)	182	39	27		不明	－	〃	1/10		？
9	F－2	3号土壙		(284)	(83)	(38)			〃	－	〃	1/10	側面やや内傾 側面に縦のノミ痕	？

粉挽き・下臼

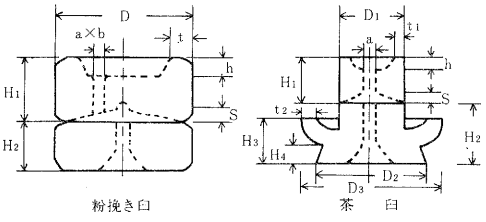
No.	地区	遺構	層位	直径 D	高 H_2	ふくみ S' ＊6	分画×溝	石質	残存率	備考	下限
10	B－2	16号溝		(226)	63＋α		不明	安山岩	1/6	臼面が傾斜	Ⅳ期
11	〃	15号溝	最上層				分画有り	〃	1/10	芯棒孔からえぐりに放射状の溝	〃
12	〃	14号土壙		294	114		不明	〃	1/4	〃	〃
13	〃	〃		(238)	110＋α		〃	〃	1/6		〃
14	E－3		Ⅱ層	301	104	12	6×5	〃	1/2	臼面よく磨滅 芯棒孔からえぐりに放射状の溝	？
15	F-4･5	26号溝		(270)			18？×3	〃	小片	側面に縦のノミ痕	Ⅳ(～Ⅴ)期

茶・上臼

No.	地区	遺構	層位	直径 D_1	高 H_1	上縁 t_1	上縁 h	ふくみ S	分画×溝	供給口 a	石質	残存率	備考	下限
16	A－4	12号溝	1層		(117＋α)				溝無		安山岩	1/5	上面・臼面及び 芯棒孔よく磨滅	Ⅳ期
17	F－2	31号溝		(208)		32			－	－	石英安山岩	小片		〃
18	B－4	10号井戸	埋土中位	(220)	106		25	19	溝無		安山岩	1/6	上面皿状のくぼみでよく磨滅 挽手孔に装飾	Ⅰ期
19	A－6		Ⅱ層						－	－	〃	小片	挽手孔に装飾	？
20	F－4	11号溝							不明		〃	〃	臼面よく磨滅	Ⅲ期
21	F-4･5	26号溝	1層	(176)					分画無？	－	〃	〃	〃	Ⅳ(～Ⅴ)期
22	B－2	14号土壙	埋土下部	(186)					不明	－	〃	〃	火を受けてかくなっている 粉挽臼か？	〃
23	B－1	17号井戸	埋土中位						〃	－	〃	〃	茶臼？	？

茶・下臼

No.	地区	遺構	層位	直径 D_1 D_2 D_3	高 H_2 H_3 H_4	皿縁 t_2	分画×溝	石質	残存率	備考	下限
24	B－2	14号土壙		182 (320)	134 52		8×(2･3･5)	安山岩	1/2	えぐりに放射状の溝 臼面よく磨滅	Ⅳ期
25	〃	〃		(402)			－	〃	小片		〃
26	B－1	17号井戸	埋土上部	(300)		28	－	凝灰岩	〃		〃
27	B－4	12号溝	〃	(300)		28	－	安山岩	〃		〃
28	A－8	1号溝	〃	(286)		23	－	〃	〃	受皿外面に放射状の溝	Ⅴ期
29	F－5	26号溝	埋土下部	178	32		不明	〃	1/3	底面に放射状の溝 臼面よく磨滅	Ⅳ期
30	F-4･5	〃	1層			17	－	〃	小片		Ⅳ(～Ⅴ)期
31	〃	〃	〃				－	〃	〃		〃
32	B－4	12号溝	埋土上部	(364)		18	－	〃	1/6	2点接合	Ⅳ期
33	B－2	14号土壙		(326)(204)	87 39	19	－	〃	〃	底面に放射状の溝	〃



計測法は三輪（1978a、b）に基く。
＊1完形品が無いので直径を2倍した。(　)内は外縁の弧から推定したもので相当の誤差を含む。
＊2〔　〕内は上縁欠損の為H_1-hを計測。
＊3(　)内は欠損した上縁の基部の割れ口を計測。
＊4「不明」は溝は有るが分画の有無が不明、の意。
＊4＊5「－」は該当部分が残存しない。
＊6S'は下臼の突出度。
No.は図と一致

の他では、26号溝がやや多い。表面に黒色の付着物が見られるものが多い。破損面にも付着している場合が多いが、性格は不明である。火を受けたものとはやや異なる感がある。

三輪によれば、地方によって独特の形態・目のパターン、石材等が見られ、特徴的なものについては、産地同定・流通範囲の追跡が可能であるという。このような作業は考古学的には、まだあまり進められてないが、試みるべき課題である。宮城県内では、まだ充分な資料の集成が行われておらず、報告例も他との比較が可能なようなデータの提示をしていない。今後、このような作業を進めていくためには、規格的な計測方法によるデータの提示が望まれるので、三輪（1978ａ、ｂ）の示した計測方法を、ほぼそのまま採用した。ただし、発掘品ではどうしても破片が多くなるので、より細かい部分についても、できるだけ計測値を採ってみた。供給口、芯棒孔、挽き手孔の残るもの、えぐりの残りの良い物等はすべて図示してあり、計測できない項目、図上で計測可能な項目は、表に含めてないものもある。もの・くばりが確認されたものはない。観察表の不備については、今後、経験的に修正されるのが良いと思う。近隣地域でこのようなデータの提示をしているものに、福島県伊達郡の梁川城の報告がある（福島県教委1981）。

破片が多く、法量や目のパターンについて、はっきりした傾向はつかめないが、全体にえぐりが大きく、供給口や芯棒孔～えぐりに放射状に広がる溝状のノミ痕を残すものが見られる（図版22－3）。側面を縦方向の浅いノミ痕がめぐるものも数例ある。供給口と挽手孔のつながる例（No.2）、下臼面が傾斜している例（No.10）、上臼側壁がかなり内傾する例（No.3）が各１点ある。石材はほとんど安山岩が使われている。No.3は発泡の良い多孔質で硬質の安山岩を用い、他と質感が異っている。

現段階では今泉城出土の石臼の規格性等について、はっきり論ずることはできない。製作法についても今回は充分観察しきれなかった。Ⅰ期を下限とするような古い石臼については、今後の類例を待ちたい。

大形礫石器

これは一般的な名称ではないが、大形の礫を素材として、使用痕や加工痕を残すものを、ここに一括した。すべて破片で完全な形状を知り得ず、残されている部分の特徴から、とりあえずⅠ～Ⅵ類に分類したものであり、同じ類として分類したものが、実際に同じ種類のものだったかどうかはわからない。

Ⅰ類（第87図1･2　図版22－9･10）

推定で直径20～25cm、厚さ３～５cm程度の楕円形で偏平な礫を素材とし、表面に磨痕を残すと思われるものをⅠ類とした。表面に皮膜状の黒色物質が付着している。破損面にも付着して

いる場合があり、性格は不明である。磨痕が確認できないが形態的に同じものは、これに含めた。13点出土している。

II類（第87図3・4　第88図5　図版22－11・12）

大きさはI類とほぼ同じだが、表裏両面が平坦で平行しているものをII類とした。縁辺の形状は破損しているため、ほとんど知り得ない。I類同様、黒色の付着物が覆っているものが多い。13点出土している。

III類（第89図8・9　図版22－5・6）

多孔質で、レンガ状の平坦な面を残すもの。磨痕はあまり明瞭でない。3点出土。

IV類（第88図7　図版22－7）

台上の石で、滑らかな凸状の磨面を持ち、反対面にも若干の磨痕がある。中川氏より固定式の砥石ではないか、と御指摘を受けた。図示した1点の他に、これに類すると思われる破片が1点ある。

V類（第88図6　図版22－4）

石鉢や松明台と称されるものの破片かと思われる。第88図6は、縄文時代の石皿とも考えられる。4点出土。

VI類

厚さ10～20cm位の台状の石と思われる破片で、磨面が複数のものもある。5点出土している。

以上、便宜的に分類したが、他に形態は不明だが、大形礫石器の破片かと思われるものが31点ある。この種の石製品については、今後類例や完形品の発掘に注意したい。

硯（第89図12）

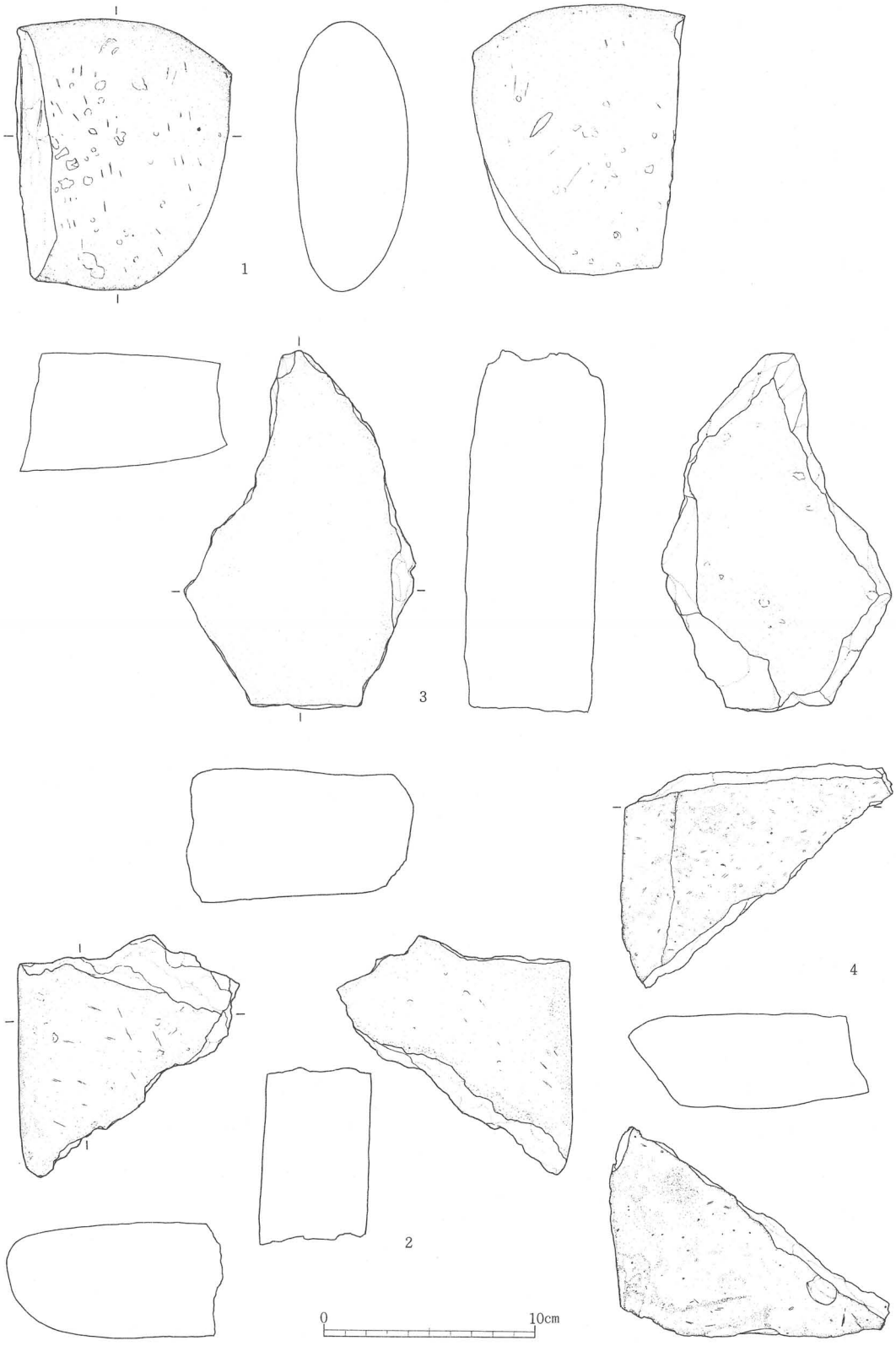
11号溝の底から1点出土している。

スレート片（第89図11　図版21－13）

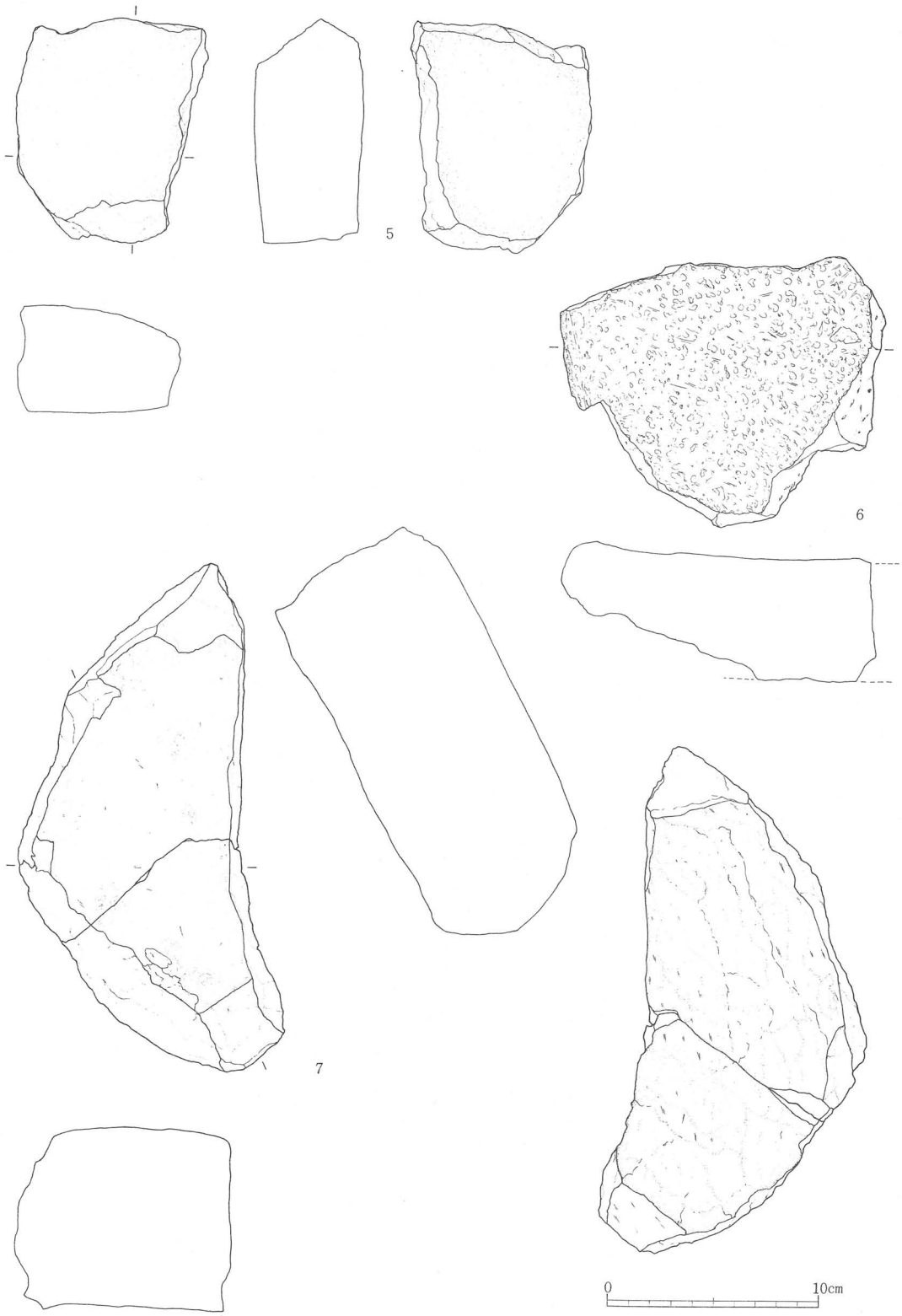
大きなものは一辺20cmを越えるものまで、大小26のスレート片が出土している。うち、磨面や擦痕が認められるもの12点、擦切痕のあるもの3点、磨面と擦切痕の両方を有するもの1点、格子目状の刻線をもつもの1点がある。刻線は細く浅い線で、各々の線は一気に引かれず、何度かずつに分けて引かれている。線はa面でははっきりしているが、b面では非常に弱い。性格は不明である。

珪化木（第89図10　図版22－8）

16点出土している。うち、おそらく流水の作用で全体が磨滅した長さ10～15cm位になると思われるものが7点ある。その中の図示した1点には、明瞭な磨面と鈍い擦痕が認められる。何



第87図　大型礫石器Ⅰ類(1・2)、Ⅱ類(3・4)



第88図　大型礫石器II類(５)、Ⅳ類(７)、Ⅴ類(６)

第89図　大型礫石器Ⅲ類(8・9)、使用痕有る珪化木(10)、刻線のあるスレート片(11)、硯(12)

第9表　大形礫石器観察表

	No.	図版	地区	遺構	層位	石質	備考	下限
I類	1		A－6	8号溝		安山岩	黒色付着物	平安
	2		B－3	14号溝		閃緑岩	〃　（破損面にも）	I期
	3		E－3	29号溝	2層	玄武岩	〃　（　〃　）2点接合	II期
	4		A－3	12号井戸	埋土中位	安山岩	〃　（　〃　）	III期
	5		〃	〃	〃	中粒砂岩	〃　（　〃　）	〃
	6		B－2	11号溝		流紋岩	〃　（　〃　）	〃
	7		B－5	〃		凝灰岩	黒色付着物	〃
	8	－1	〃	〃		〃	〃	〃
	9		E－4	〃		泥岩	〃　（破損面にも）、加熱・はじけ、2点接合	〃
	10	－2	F－4	〃	2層		〃　（　〃　）、	〃
	11		B－2	15号溝		安山岩	〃	IV期
	12		A－8	1号溝	底	中粒砂岩	〃　（破損面にも）	V期
II類	13		E－2	29号溝	1層	安山岩	〃　（　〃　）	II期
	14		F－3	〃	〃	〃		〃
	15		A－5	11号溝	2層	凝灰岩	黒色付着物	III期
	16		〃	〃	1層	安山岩		〃
	17	－3	〃	〃		〃	黒色付着物（破損面にも）	〃
	18		F－4	〃		〃	〃　（　〃　）	〃
	19	－4	B－4	12号溝		〃	〃　（　〃　）	IV期
	20		E－2	31号溝	1層	〃	黒色付着物	〃
	21	－5	A－6	1号溝			〃　（破損面にも）	V期
	22		A－7	〃	1層	安山岩	加熱？	〃
	23		〃	〃	〃	中粒砂岩	黒色付着物、加熱？	〃
	24		E－4		II層	安山岩	加熱？	不明
	25		不明	不明		安山岩		〃
III類	26		B－4	11号溝		〃		III期
	27	－8	A－8	2号溝	上面	凝灰岩	加熱？	IV期
	28	－9	B－4	12号溝		安山岩	黒色付着物（破損面にも）	〃
IV類	29	－7	F－2	31号溝	1層	凝灰岩	固定砥石か。2点接合	IV期
	30		B－8		II層	安山岩	固定砥石か。	不明
V類	31			11号溝	1層	石英安山岩	黒色付着物	III期
	32	－6	B－2	14号土壙	埋土下部	安山岩	石皿か？	IV期
	33		B－4	12号溝		安山岩		〃
	34		E－2	31号溝	1層	〃	黒色付着物（破損面にも）、内面よく磨滅	〃
VI類	35		E－8	21号土壙	埋土上部	粗粒砂岩		平安
	36		A－2	15号井戸		中粒砂岩	黒色付着物。加熱？5点接合	II期
	37			11号溝		安山岩		III期
	38		B－2	14号土壙	埋土下部			IV期
	39		〃	16号溝		中粒砂岩	加熱？	〃

かに使用されたものだろう。また、朱色の斑状の付着物が一部に認められるものが1点ある。使用と関係したものかどうかはわからない。

板状の石

砂岩・安山岩等の厚10㎜程度の板状の石の破片が31点出土している。加工痕・使用痕は認められない。

軽石片

軽石片が7点出土している。加工痕・使用痕は認められない。

（8）木製品

木製品はI・II区から合計995点出土している。ぼろぼろとなって個体数の数えられないものも存在することから、総計は1,000点を越えることは確実である。このうち、堀と考えられる溝（11号・21号・29号溝）からの出土数が最も多く、336点で全体の34％を占める。木製品の種

類では、加工痕をもつ木片が最も多く294点、次いで曲物類136点、自然木116点、削片78点、切片63点等である。他には竹製品や漆器が目立つ。

ここでは、民具研究の分類を基本として概説したい。

1．履物

履物には、下駄・草履・田下駄が出土している。このうち田下駄については後述する。

（1）下駄

さて、下駄には有歯と無歯のものがあり、本遺跡では前者のみである。有歯下駄はさらに、連歯・差歯に細分される。

本遺跡出土のものは、合計7点出土し、連歯のものが5点、差歯2点である。第90図1～5は連歯下駄である。小判形あるいは楕円形で小型のものが多い。同図6・7は差歯下駄の破片である。6は足駄であろうか。この6・7は露卯か陰卯のものか不明である。成人女子の下駄幅は3寸～3､4寸、7～9歳女児用は2寸8分との指摘（潮田鉄男：1982）があり、また、この指摘にある出土下駄の形態を考慮すれば、本遺跡出土の下駄は、1～3は子供用、4～7は成人用のものと考えられる。また、6を除いて女性用の可能性が高い。鼻緒穴は、径や位置がやや不揃いであり、樹種や木取り方法も不統一である。

（2）草履

鎌倉市諏訪東遺跡（鎌倉考古学研究所：1981）では、この種の木製品にワラの付着や鼻緒のついたものが出土していることから、草履の芯と考えている。

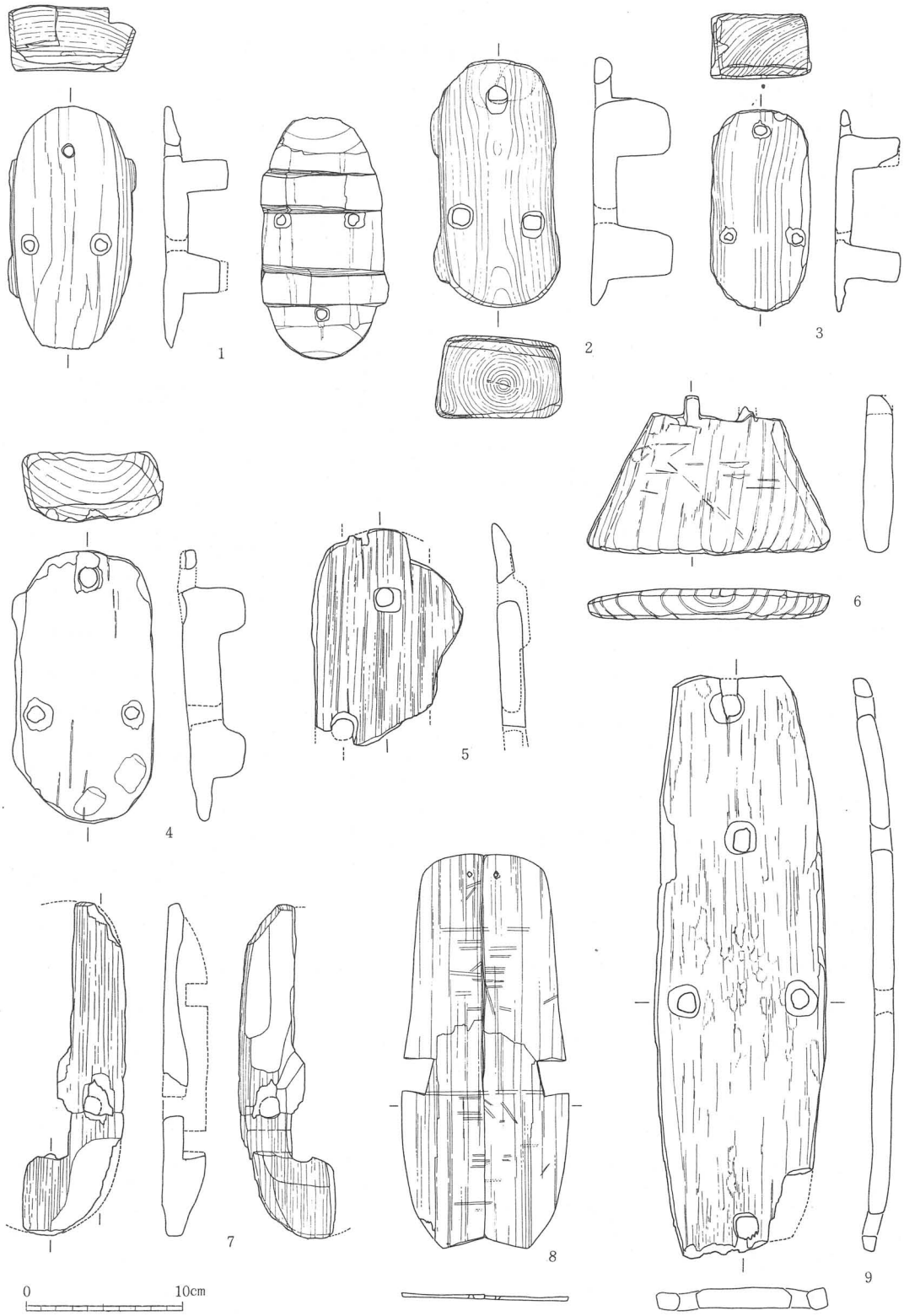
第90図8は、現在本遺跡では唯一の出土品であり、草履の芯になる板材と考えられる。県内では、高清水町観音沢遺跡（加藤・阿部：1980）に出土例がある。

2．桶類

桶類には曲物・刳物・結物の3種類があり、曲物は古くから存在し、結桶はおよそ鎌倉後期以後に出現したようである（宮本常一：1981)。第93図9はⅤ期の井戸から出土したもので、唯一全体のわかるものである。槽（側板）は10枚で構成されている。箍（竹）が三段はめてあったが、取り上げ時には腐敗してしまった。この桶は出土状況から考えて水汲み用の小桶、あるいは釣瓶と考えられる。

底板

同図10～13も9と同様の桶の底板と考えられる。13は底板の内面と考えられる面に無数の傷



第90図　木製品(1)

第10表　木製品(1)観察表

図版	グリット	遺　構	層　位	種　類	木取り	時期		登録番号
1	B－4	9号井戸	埋土下部 北東壁付近	下　駄 （子供用）	板目	I 期	松材、長さ15.3cm、幅7.7cm、高さ4.1cm、台厚さ1.5cm、連歯。後が少し細くなった楕円形で歯の一部は欠損。台板の裏側は前後共に削ってある。鼻緒穴は直径0.6～0.7の円形で、台板に対して垂直に穿たれている。歯は厚さ1.8～2.0cmで下方が少し広がっている。	390
2	F－4	11号溝		下　駄 （子供用？）	板目	III 期	ケヤキ材、長さ15.6cm、幅8.0cm、高さ5.0cm、台厚さ1.5cm、連歯。前歯の厚さは3.5cm、後歯は3.0cmで歯は丸くなっており、後歯は斜めにすり減っている。前壺は斜めに、後壺は垂直に穿たれており、0.9cm×1.1cmの方形。前壺の前方が少しくぼんでいる。	388
3	E－4	〃	2層	下　駄 （子供用）	板目	III 期	ケヤキ材、長さ12.2cm、幅6.2cm、高さ4.1cm、台厚さ1.1cm、連歯。歯は厚さ1.9cmで前後共に少し斜めに作り出されている。鼻緒穴は少し斜めに穿たれており、前壺は0.8×0.55cmの楕円形、後壺は0.7－0.4cmの不定形。歯は殆んど減っていない。台板の裏は削痕あり。	389
4	B－5	〃	2層	下　駄	板目	III 期	キハダ材、長さ17.2cm、幅8.6cm、高さ4.0cm、台厚さ2.3cm、連歯。歯は丸くなっており、後歯はすり減っている。台の表は中高で、後部に削痕がある。鼻緒穴は1.1～0.8cmである。	391
5	B－4	〃	埋土	下　駄	柾目	III 期	台厚さ1.4cm連歯。半分くらい欠損。前壺が歯の上に穿たれており、中央部が少しくぼんでいる。前壺は直径1.0cmの円形。	392
6	I区	表採 （11号溝？）		下駄（歯）	板目	III 期？	銀杏材、差歯下駄の歯、上底8.2cm、下底15.3cm、肩高8.5cm全高10cmの台形。台部の枘穴に入る突起を2つ持つ。全体的に丸味を帯びており、傷がある。	393
7	E－4	11号溝	埋土	下駄（台部）	柾目	III 期	長さ21cm、差歯下駄の台部。半分欠損し、後壺も半分欠損。台の裏面後部は膨みを持つ。	395
8	F－4	11号溝（南溝）	3層上面	草　履	柾目	II 期末	長さ25.0cm、幅10.5cm、厚さ0.2cm、薄い2枚の板を左右対称に合わせている。前方部に方形の貫通穴2個あり、後方部は少し広がっている。両側縁に方形の抉りあり。中心よりに押圧されたような極めて浅いくぼみあり。	263
9	A－7	2号井戸	2段目上面付近 黒色粘土	田下駄	板目	III 期？	棗材（残）長さ37.0cm、幅10.7cm、厚さ1.3cm、足板の側縁は一方が直線的、一方が中央部に膨らみを持つ。鼻緒穴3個、その他に前後端の中心に1個すつ穴あり。	396

跡があり、9～12にはこのような傷がないことから、用途に差があるのであろうか。同図14・15は前述のものと異なり、直径が60cm前後と大きく、木釘穴の位置も異なる。おそらく、盥や半台のようなものであろう。10～15については、一応桶類の底板と考えた。これらは10を除いて、いずれも縁辺部に木釘穴を有する点で共通している。ただ、曲物か結物か判断できない。

曲物側板

ここでは便宜上、厚さ0.5cm以上で罫引の線を内面全面にもつものや、厚さが薄いものでも幅（高さ）が約10cmを越すものを桶類として扱った。しかし、桶類の基準は、今後さらに検討する必要がある。

曲物側板には、厚さ0.2～0.3cmの薄いものと、厚さ0.5～0.6cmの厚いものがある。前者には、とじ目の内側にのみ罫引の切り込み線が認められるものがある（第91図４）。後者には罫引による切り込み線（平行のものと格子のものの２種類あり）が内面（一部外面につくものも存在する）にみられる。

第91図２は曲物の箍（木釘穴あり）。同図３～６は側板である。３は内外黒漆塗り、４・６はとじ皮やとじ穴が認められる。罫引は、いずれも間隔が不揃いであるが、およそ0.6cm～2.0cmに納まる。５は外面に格子、内面に平行の罫引がみられる数少ない例である。６の外面にもそれらしき痕跡を留めている。

刳物

刳物はわずか２点出土している。これらも大小の差はあるが、桶類として扱った。

第91図１は直径42.8cmと比較的大型である。作りは粗雑で、内面の一部に削痕を留める。本例は半台や手洗い桶の大きさに近いが用途は不明である。第95図１は直径15.8cmと極めて小型で、内外面に黒漆（？）が塗られている。製作工程を推定しにくいのであるが、おそらく刳物の小桶の一種と考えられる。用途は不明であるが、あるいは湯桶のようなものであろうか。これらはいずれも、鎌倉時代に属すると考えられる井戸から出土したもので、曲物が主体を占める中にあって、桶類の変遷を考える時、刳物は興味ある存在といえよう。

３．柄杓

全体を予想できるものはわずか２点で、他は底板や側板だけのものが多い。このうち、幅(高さ）が約10cm以下の柄杓と考えられる側板については割愛した。

第92図１は、ほぼ完全な形で出土した唯一のものである。底板内面は手斧のような工具による２方向の削痕が認められる。これは後述する底板についても同様の傾向を示している。側板は２重に巻き上げ、とじ皮（桜）でとじている。このとじ皮は、表が長く、裏は短かくなっており、最下位のものだけ位置をややずらしてあり、最後に一坦外側に出して、とじ目から再び内に入れてとじ終わる。柄は先端を細く削り出し、先端から約11cmの部位に止め穴が認められる。同図２は曲物部分のみであるが、柄の一部が残存している。本遺跡では最も大きい柄杓である。とじ方は柄を跨いで反対にも一ヶ所とじ目があり、前述の１と大きく異なる。とじ方の最終段階は、１と全く同様の方法である。ところでこの２には、とじ皮のある前後の曲物の内側にのみ罫引による切り込み線が認められる。これと同様の例が、第91図４にみられる。このような例は、とじ皮の装着に際して、滑り止めの役割を果しているのであろうか。

底板

底板の直径はおよそ３～４寸に集中する。

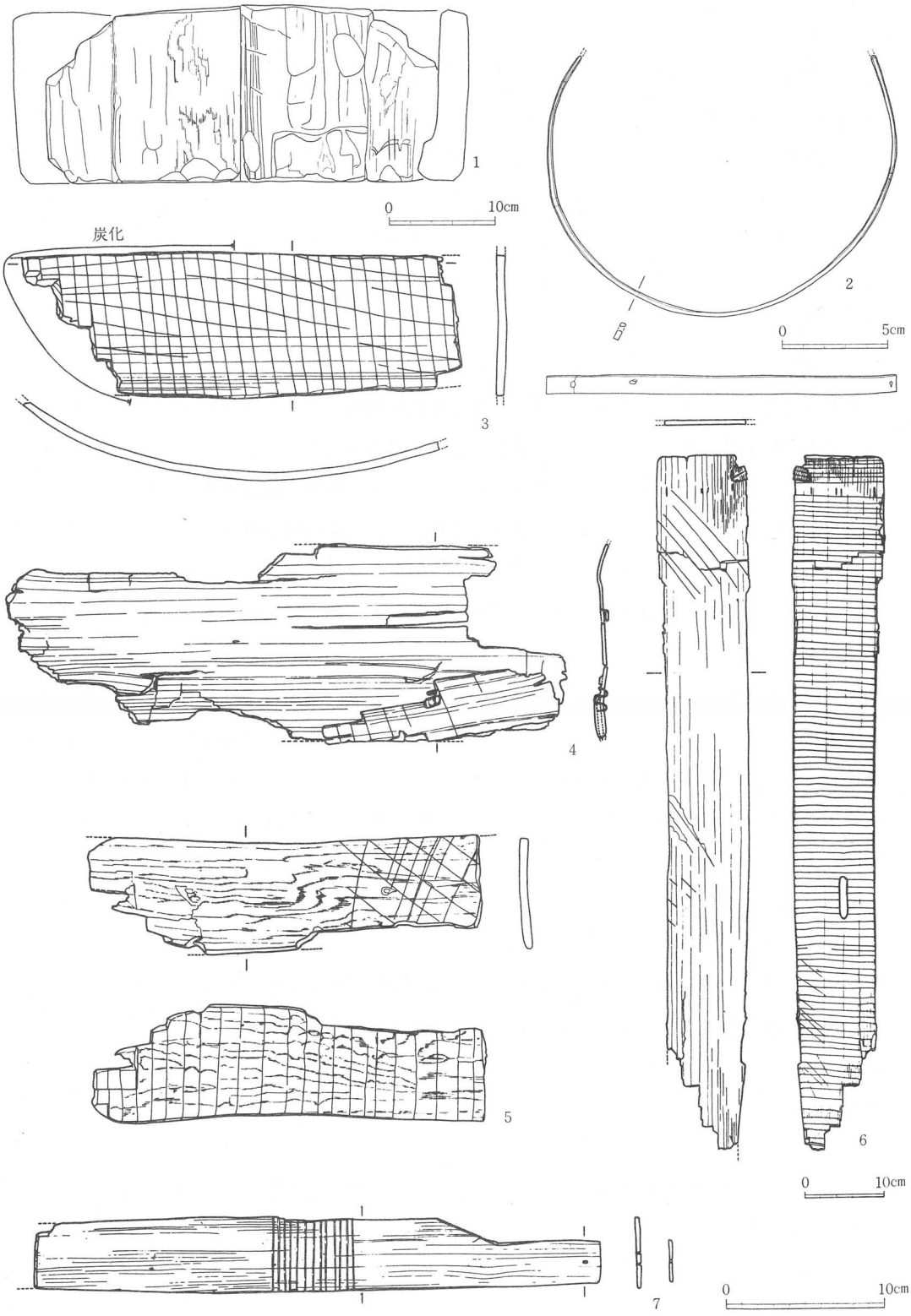
第92図３～８は柄杓の底板と考えられる。４・５には貫通孔が認められるが、これは性格不明で虫食いの跡であろうか。１～７には底板に木釘穴が認められないが、８には木釘穴が３ヶ所認められる。すでに述べた桶類に木釘穴が存在したことから、柄杓ではなく、小桶の可能性も考えられる。

柄

第93図16・17は柄杓の柄であろう。特に17は細身で面取りが丁寧である。16はほぼ完形品、17は欠損品である。

４．折敷

本遺跡で確認できる折敷は、いずれも曲物である。足の付く例は現在確認できない。



第91図　木製品(2) 1 1/6、2 1/3、6 1/8

第11表　木製品(2)観察表

図版	グリット	遺　構	層　位	種　類	木取り	時期		登録番号
1	A－7	2号井戸	黒色土、1番目のレベルと同じ	桶(刳物)		II　期	底径42.8cm、高さ16.8cm、内外面とも粗い削痕あり。厚さ0.85cm、厚さ0.15～0.25cm、貫通孔5個あり。	73
2	A－3	12号井戸下端	埋　土	タ　ガ	板　目	III　期	幅0.85cm、厚さ0.15～0.25cm、貫通孔5個あり。	138
3	F－4	11号溝	2層 No.1	曲物の側板	柾　目	〃	厚さ0.5cm、内外面に黒漆が塗ってあり、部分的に剝れている。内面は間隔が0.7～1.2cm、深さ0.3cm位の切り込み線が斜めに入り、削痕が斜めに交差する。外面の一部焼けている。	223
4	F－6	21号溝	3層上面	〃	〃	III期初	厚さ0.2cm位、2枚の側板がとじ皮で綴じられ、切り込み線が入っている。貫通孔が左端の下から寸のところに1個ある。	24
5	B－4	10号井戸	埋土下層（2～4層）	〃	板　目	I　期	厚さ0.5cm、内面は間隔が0.6～1.6cm、深さ0.2cm位の切り込み線が斜めに入る。外面は斜めに交差する切り込み線が入る。	11
6	B－6	4号井戸	6　層	〃	柾　目		厚さ0.6cm、内面は間隔が0.4～2.0cmの切り込み線が入り斜めの傷？がある。外面は間隔が0.7～1.9cmの切り込み線が入り、数ヶ所ある。とじ皮が2個、とじ皮の跡が2個ある。	275
7	E－4	11号溝	3　層	折敷の側板	〃	II　期	厚さ0.15－0.3cm、一方の端は切断、貫通孔のある側辺の寸は切断。中央に深さ0.1cm位の切り込み線が数条ある。貫通孔1個、盲孔2個あり。	19

第91図7、第95図2は一定の間隔に罫引による切り込み線がみられ、折敷の側板と考えられる。罫引のみられる部位は、おそらくコーナー部分になるものと考えられる。罫引は平行のものと平行のものに格子目を加えたものの2種類が認められる。

第95図6・7・9は折敷の底板である。このうち7は八角形になる角折敷であろう。全体の大きさを推定できるものはなく、唯一6は一辺が26.3cmで8寸を越す「大角」（古泉弘：1974）に属するものであることがわかる。7や9は一部に加工痕を留める。これらの折敷は、いずれもおよそ鎌倉時代に属するものである。

5．笊

第94図18は21号溝より出土したもので唯一のものである。編み方はまさに笊編み（1本越え・1本潜り・1本送り）で、緯条は約0.2cm、経条は0.4～0.9cm幅である。III期の笊（竹製）と考えられる。

6．面桶

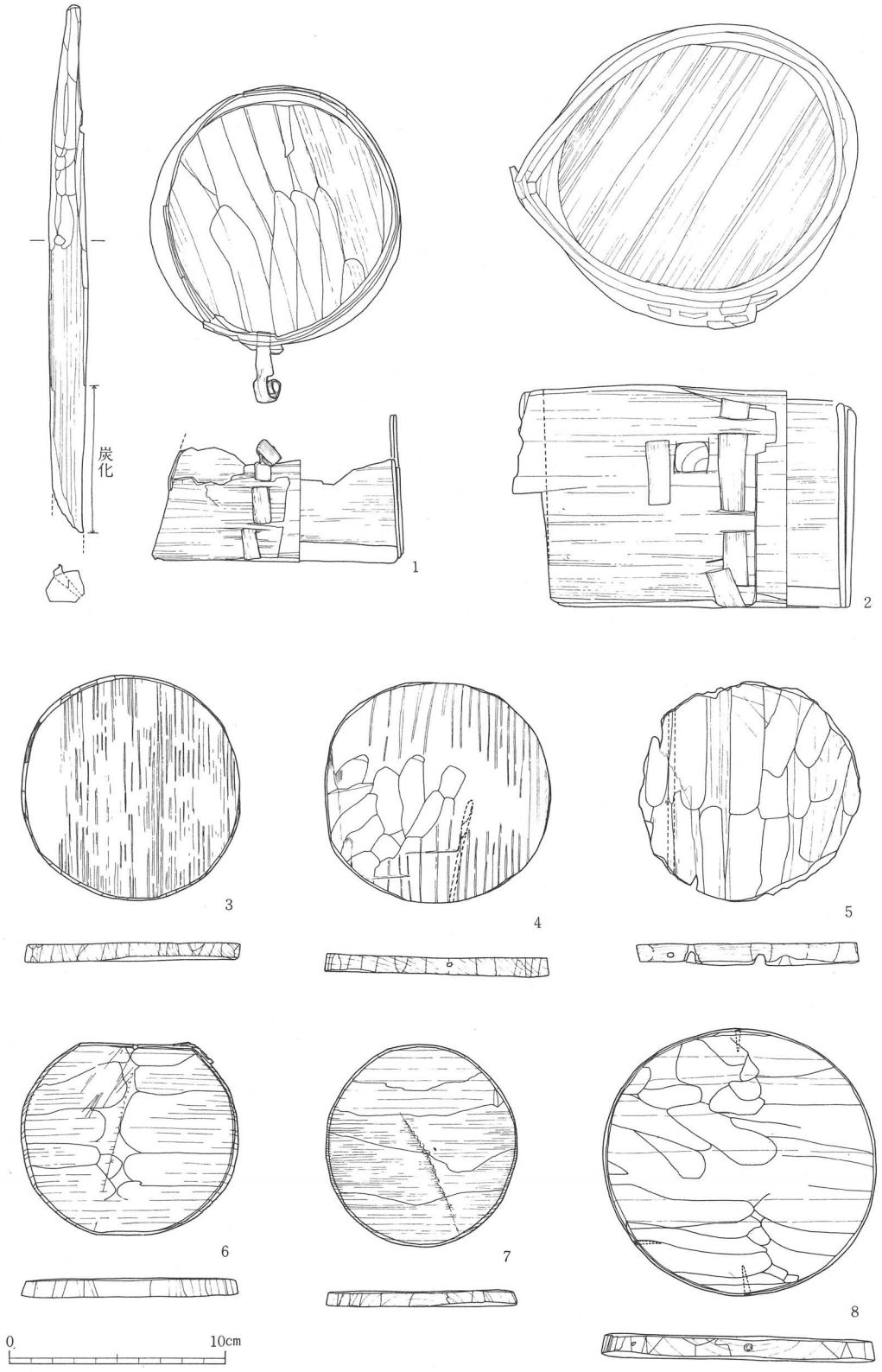
曲物のうち、弁当箱として用いるものに面桶があり、一般に丸型のものをワッパ、楕円形のものをメンパ等と呼称する。

第95図8は面桶のうち、メンパ等と呼ばれる楕円形のものである。ただ甲板か底板か判断できない。木釘穴と考えられる穴が2ヶ一組で、2ヶ所に認められる。

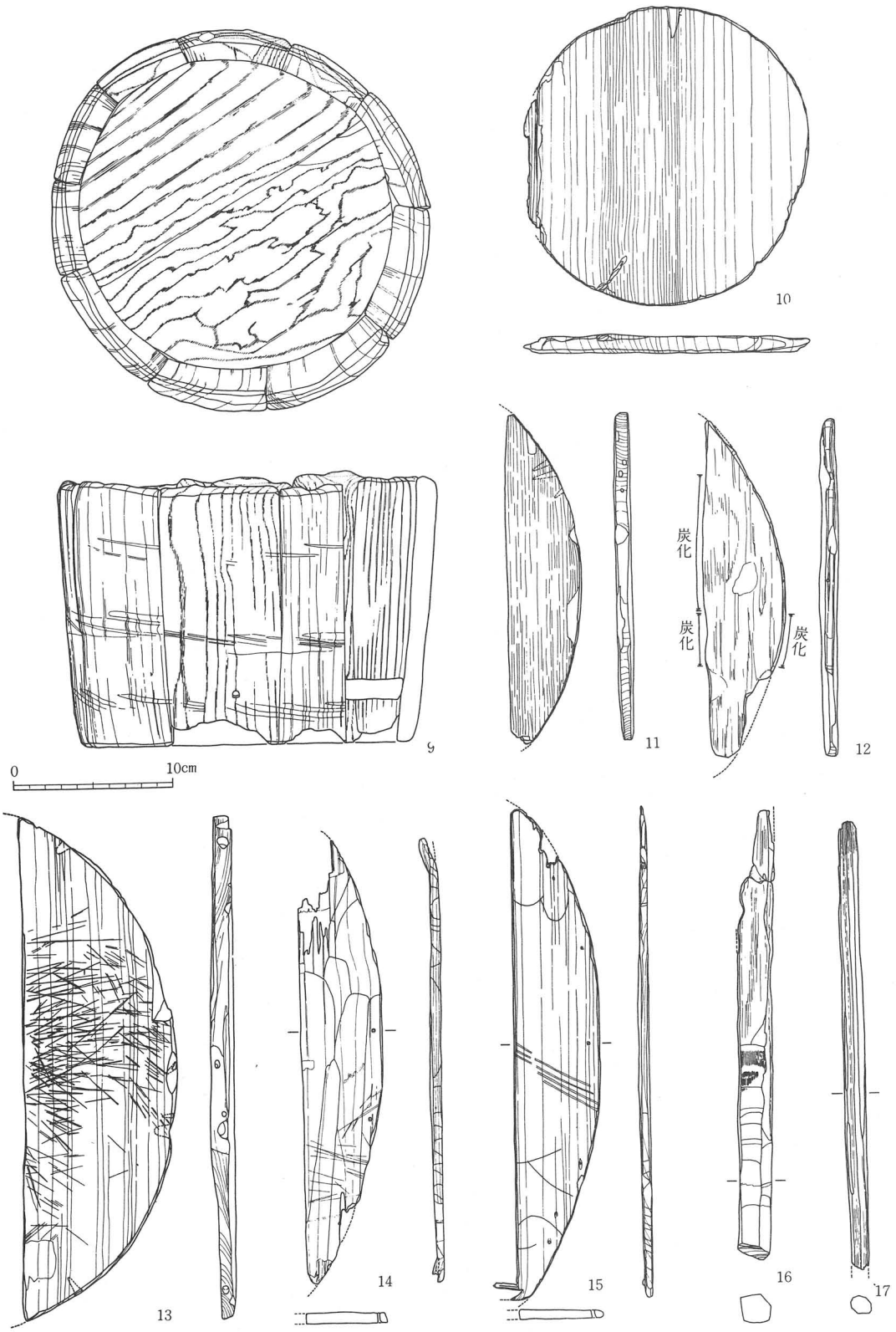
7．箸

箸および箸の可能性のある木製品は合計6本出土している。しかし、1膳という単位で数えられるものはない。I期～III期の遺構に伴って出土しているが、II期に属するものが多い。いずれも完形品はなく、折れたために捨てられたものであろう。

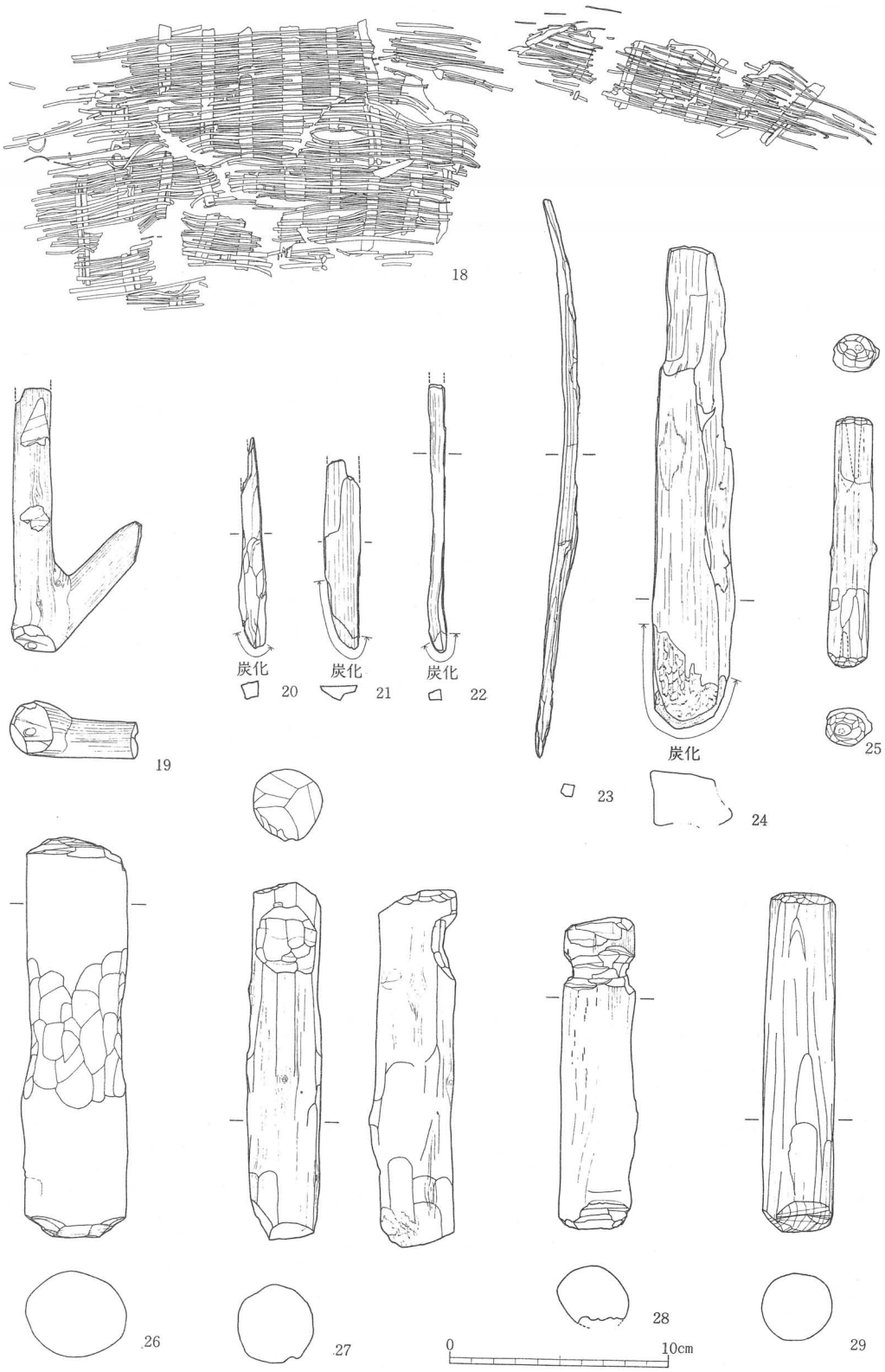
第95図3～5は比較的保存のよいものである。いずれも先端を細く削り出しており、面取りも比較的丁寧に行なわれている。



第92図　木製品(3)



第93図　木製品(4)



第94図　木製品(5)

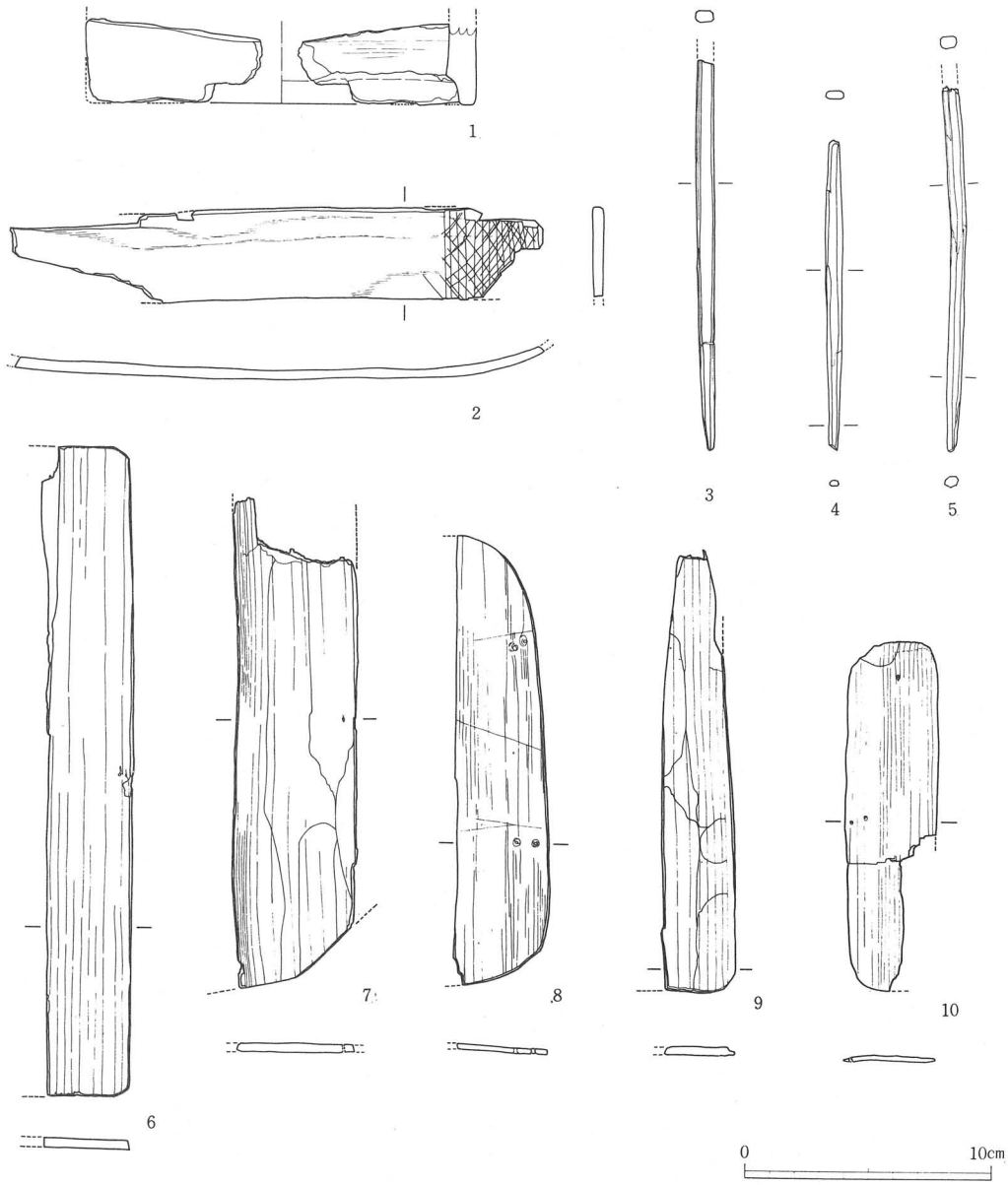
第12表　木製品（３～５）観察表

図版	グリット	遺　構	層　位	種　類	木取り	時　期	備　考	登録番号
1	Ｅ－４	11号溝	２　層	柄　杓	柾　目 板　目	３　期	柄…(残)長さ24.4cm、幅1.8cm、先端に粗い削痕があり細くなっており、他方は欠損し焼けている。削痕のある先端寄りにくぼみ？がある。中央付近に貫通孔１個あり、木釘が残っている。柄杓はヒノキ 側板…身の直径11.6cm、厚さ0.15cm、側板は２重巻になって上方は欠損。中間付近に一部削痕あり。腐蝕が著しく歪んでいる。とじ皮あり。 底板…厚さ0.8～0.9cm、内面に削痕、外面に傷あり。(使用時のもの)	259
2	Ａ－１	16号井戸	５　層	柄　杓	柾　目 柾　目	１　期 or ２　期	側板…身の直径13.85cm、厚さ0.2～0.45cm、側板は２重巻。とじ皮付近に0.5cm前後の切り込み線が入っている。方形の貫通孔があり柄が残っている。一部破損のため歪んでいる。 底板…厚さ0.9cm、内面に削痕、外面に傷？あり。側面に傷？あり。	261
3	Ａ－４	竪穴遺構ベルト	最下層上 No.33	曲物底板	柾　目	３　期	直径10.4cm、厚さ0.8cm、側面に細かい面取りがあり、縁辺の一部が丸味を帯びている(丸くしたものかは不明)杉	250
4	Ｅ－４	11号溝	１　層	〃	〃	３期末	直径10.4cm、厚さ0.9cm、片面の一部に削痕あり。木釘穴と思われるものが斜めに貫通している。側面に面取りあり。杉	248
5	Ｅ－４	11号溝テラス	埋　土	〃	板　目	３　期	直径10.3cm、厚さ1.0cm、両面とも削痕あり。一方の面は腐蝕が著しく、一方の面に付着物あり、傷が少しある。貫通孔１個あり人意的なものかは不明。周縁は殆んど欠落し、一部残存。側面に面取り？あり。杉	257
6	Ｅ－４	11号溝ベルト	３層上面 No.32	〃	柾　目	３期初	直径10.5cm、厚さ0.85cm、両面に削痕、傷あり。縁辺に穴？あり。側面に面取りあり。杉	258
7	Ｅ－４	11号溝ベルト	３層上面 No.31	〃	〃	〃	直径9.4cm、厚さ0.6cm、両面に削痕、一方の面に傷あり。縁辺の約½の範囲丸味を帯びている。側面に面取りあり。杉	256
8	Ｂ－４	11号溝	２　層	〃	板　目	３　期	直径12.85cm、厚さ0.9cm、両面に削痕あり。側面に面取りあり。木釘穴３個あり。	59
9	Ｅ－７	19号井戸		桶	側板(３枚)―板目 側板(７枚)―板目 底板―板目	５　期	底径20.85cm、上径24.0cm、高さ17.0cm 側板…厚さ1.1～1.4cmぐらい。側板は10枚でそのうち４枚は木釘穴１個ずつあり、それぞれに木釘残っており、もう１枚は木釘穴２個、木釘１個残っている。タガ痕３段あり。 底板…厚さ1.3cm、側面に面取りあり。	100
10	Ｂ－５	７号井戸	中端埋土	桶底板	柾　目	１　期	直径19.1cm、厚さ0.9cmぐらい、木釘穴１個あり木釘が残っている。側面に面取りあり、摩耗している。杉	249
11	Ｆ－８	21号溝	１　層	〃	〃	３　期	直径約33.6cm、厚さ約0.7cm、木釘穴３個あり。杉	247
12	Ｆ－４	11号溝(南溝)	No.10	〃	〃	〃	直径約29.2cm、厚さ約0.7cm、木釘が残っている。一部焼けている。全体に腐蝕が著しい。ヒノキ	253
13	Ｆ－７	21号溝	下から２番目の黒色土	〃	板　目	〃	直径約37.2cm、厚さ1.2cm、傷が一方の面に多数、他方に少数あり。側面に木釘穴4個、盲孔（直径約1.0cm）１個あり。一部面取りあり。腐蝕が著しい。杉	255
14	Ｅ－３	29号溝	底	盥？底板	〃	２　期	直径約59.7cm、厚さ0.6cm、両面に傷が多数あり、一方の面に削痕あり。貫通孔３個あり、削痕のない面から穿たれている。側面に粗い削痕あり。杉	254
15	Ｅ－２	29号溝	〃	〃	柾　目	〃	直径約62.6cm、厚さ0.5cm、一方の面の両端に削痕あり。貫通孔８個（２個は？）あり始んど斜め方向より穿たれている。木目に対して斜めにくぼみの線が数条あり。側面に面取りあり。ヒノキ	252
16	Ｅ－４	11号溝	１層No.③	棒状木製品		３　期	長さ28.5cm、幅2.2cm、先端は５面（粗い削痕の４面と削痕の見られない１面）で、他方は欠損し４面である。	112
17	Ｂ－５	７号井戸		棒状木製品(柄杓のようなものの柄)		１　期	長さ28.5cm、幅1.3cm、先端は切断面あり、他方は欠損。全体に細長い削痕あり	79
18	Ｆ－７	21号溝	２　層	笊		３　期	笊の胴あみの部分。幅は縦材5～9.5mm、横材１～３mm。半籠で笊編みであり、左側は皮竹と身竹もしくは皮竹の裏側を数本ずつ組にして交互に編んでおり、右側は身竹もしくは皮竹の裏側の材で編んでいる。	445
19	Ａ－７	２号井戸	２段目の上面粘土黒色土	自在鉤		２　期	木の枝分れ部分で、木から切断された面は５面の削痕あり。枝先の一方は２面の削痕と折れた面があり、他方は欠損。斜めに刃が入っている部分２ヶ所あり。	329
20	Ｂ－６	３号井戸	南側 ８～11階下層	薪	削　片	〃	(残)長さ9.7cm、先端は焼けており、他方は欠損。	91
21	Ｂ－６	３号井戸	北側埋土８層下	〃	〃	〃	(残)長さ8.8cm、先端は焼けており、他方は欠損。	81
22	Ａ－１	16号井戸	５　層	〃	〃	１　期 or ２　期	(残)長さ12.4cm、先端は焼けており、他方は欠損。	213
23	Ｆ－７	21号溝	３層下部	〃	〃	２　期	長さ25.7cm	74
24	Ｆ－４	11号溝(北溝)	No.②	焼けている木片(角材)			長さ22.25cm、幅3.75cm、4面の角材で一方の端が焼けている。腐蝕が著しい。	146
25	Ｆ－７	21号溝	３層上部	工具の柄？		２　期	長さ11.6cm、直径1.8cm、丸木の両端に削痕あり、その中心が穿孔しており、穴の位置は少し偏ってる。表面の両端よりに粗い削痕あり。	149
26	Ｆ－８	21号溝	下から２番目の黒色土	つちのこ		３　期	長さ18.5cm、直径4～4.5cm、両端は丸く削痕あり、中央に削痕があり少し括れている。	56
27	Ａ－５	11号溝	２層No.302	棒状木製品		〃	長さ16.5cm、直径3.4cm、両端に削痕あり。一方の偏った所に削痕があり抉れている。全体に粗い削痕あり。一部に樹皮あり。	89
28	Ｆ－７	21号溝	３層上面	〃		３期初	長さ14.4cm、直径3.3cm、両端に削痕あり。一方の端から2.3～2.5cmのところに削痕があり、括れている。縦長に欠損。樹皮あり。	70
29	Ｂ－３	９号土壙	グライ層(３層)	棒状木製品(橋木)	縦割材	４　期	長さ15.7cm、直径3.25cm、削りにより丸く成形。両端とも削痕あり、一方は丸味を帯び、他方は粗い削痕のままである。	69

８．漆器

漆器は、出土数が比較的多く、挽物26点、板物１点で、他にすでに述べた曲物や刳物が１点ずつあり、また、漆のみ（いずれも赤漆）となったものも４点ある。

漆器は堀と考えられる11号溝が多く、その中でも橋脚の検出されたＥ－４・Ｆ－４区が13点



図版	グリッド	遺構	層位	種類	木取り	時期	備考	登録番号
1	A－1	16号井戸	下層	小桶		1期or2期	直径15.8cm、厚さ1.1cm、内外面黒漆塗りで、細かい格子状の木質がみられる。年輪より丸木を刳り貫いて、内面に段を作る。	15
2	B－4	9号井戸	7層	折敷(側板)	板目	2期	(残)長さ21.5cm、幅3.7cm、厚さ0.4cm、一部に縦と斜めに幅0.1～0.3cmの細かい切り込み、	29
3	〃	〃	〃	箸		〃	(残)長さ16.8cm、幅0.7×0.4cm、先の方が細くなる。大きな削面が4面あり。その角を取るように小さな削面あり。	226
4	F－6	22号井戸	埋土下部	〃		1期	(残)長さ14.3cm、幅0.6×0.5cm、7～8面の削りあり。	136
5	A－2	15号井戸	埋土	〃		2期?	長さ26.3cm、厚さ0.4cm、隅丸で辺の中央付近に貫通孔と思われる小穴あり。	225
6	B－8	1号土壙北壁	最下層(6層)	折敷	柾目	1期	厚さ0.35cm、隅丸?で両面に削痕あり。貫通孔1個あり。	65
7	F－6	22号井戸	埋土下部	〃	〃	〃	長径18cm、厚さ0.2cm、平面形は楕円形。貫通孔4個。2個ずつ2箇所にある。一方の面は黒くなっている(漆)。	136
8	〃	〃	〃	メンパ(甲板)	〃	〃	厚さ0.3cm、隅丸?で一方の面に削痕あり。	〃
9	B－4	9号井戸	6層	折敷	〃	2期	厚さ0.3cm、隅丸?で一方の面に削痕あり。	221
10	F－6	22号井戸	埋土下部	ナンバ?	〃	1期	長径14.2cm、短径3.5cm、厚さ0.2cm、平面形は楕円形。貫通孔3個。	136

第95図　木製品(6)

で特に多い。また同じ11号溝でB－4区・B－5区の1号橋跡付近からも6点と多い。他は溝や井戸からわずかずつ出土している。

これらを製作技術から分類すると（Ⅲ区を含む）、曲物1点・刳物1点・板物1点・挽物27点・漆のみ4点であり、また時期別にみると（Ⅲ区を含む）古代に属するものはなく、Ⅰ期1点、Ⅱ期8点、Ⅱ期末～Ⅲ期初1点、Ⅲ期17点、Ⅳ期1点、Ⅴ期1点である。Ⅰ期やⅡ期のものには漆塗りの薄いものがある。

椀

本遺跡出土の椀は、いずれも横木取り、ロクロ挽きである。合計27点（Ⅲ区を含む）である。

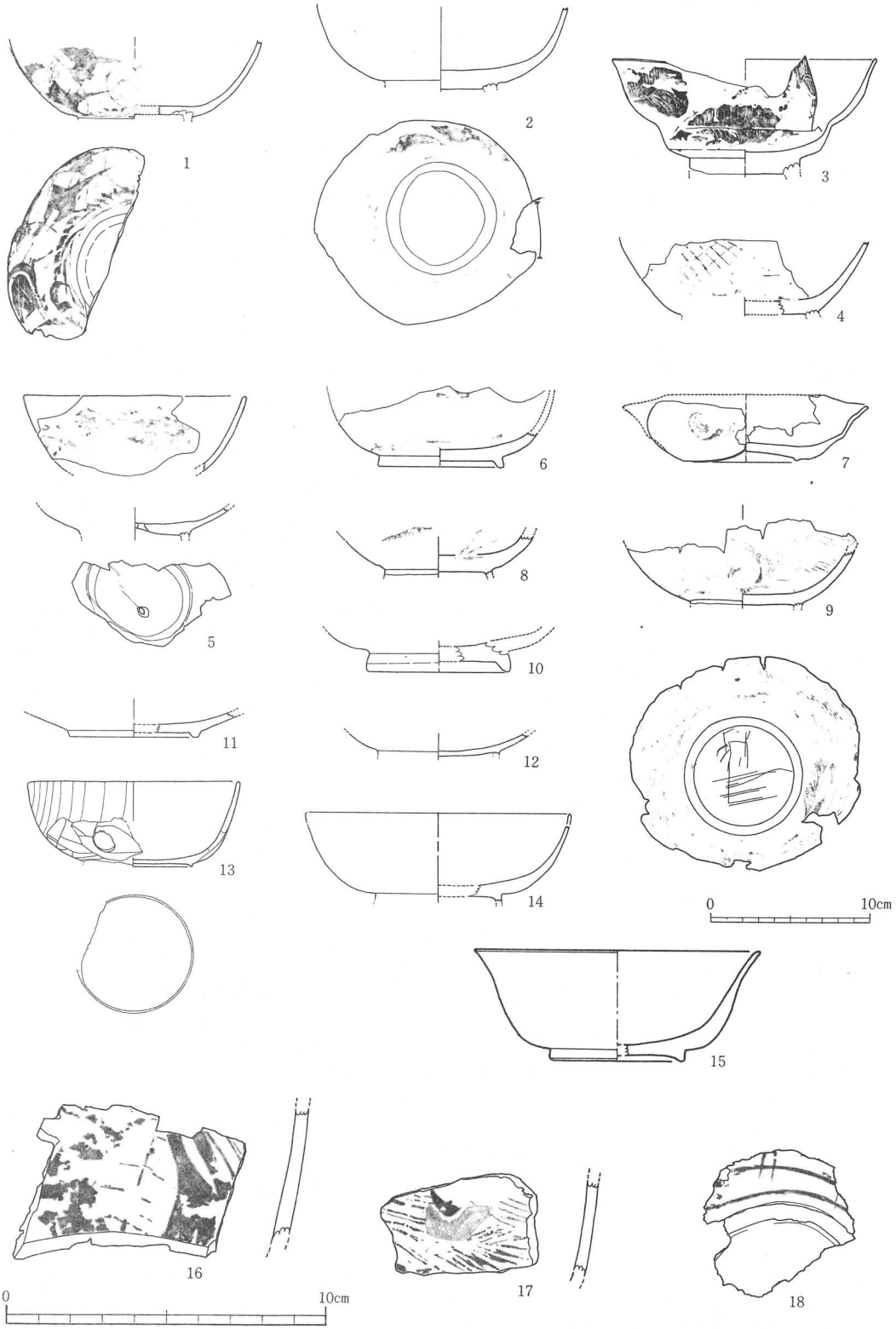
これらの椀には、器厚が薄く、体部の立ち上がりのゆるいものと高台脇の器厚が厚く、腰が張り、体部は急激に立ち上がるものの大きく2種類がある。この2つのタイプは、混在しているようで、必ずしも年代差を示すものではないようである。しかし、後者は年代が下がるに従って、多くなる傾向がありそうである。また、形態の差は生産地の違いによる可能性も考えられよう。いずれにしろ、今後の資料の増加を待ちたい。

本遺跡では、朱漆によって文様を描くものが多く、漆の色調の差や文様の有無によって、下記のようになる。

	外面	内面	文様の有無	数
1．	黒	赤	—	3（文様の確認できないものを含む）
2．	黒	赤	朱（赤）	14
3．	赤	赤	—	1（Ⅵ期）
4．	黒	黒	—	5
5．	黒	黒	朱	1

これを見ると、2が最も多い。このような組合せの差は何に起因するのか明確ではないが、1～3は祝い事や接客用等の「ハレ」の食器、4・5は不幸な出来事や仏前等に使用する「ケ」の食器と考えることも可能かもしれない。椀の多くはブナ材を使用している（第27表）。

第96図1～15、17、18は漆器椀である。椀の法量は歪みが著しく、必ずしも正確ではないが、口径は15を除いて、13～16cm、底径6～8cm、高さ5～7cmに集中する。3は体部に段をもつ柏文（？）椀で葉脈は針書きによって表現されている。5は同一個体で歪みが著しく、底部に穿孔がある。今回の漆器椀で最も注目されるものに13がある。これはロクロ挽きの後、高台脇を削り（その際、高台の一部まで削っている）、器厚を薄くし、直径1.5cmの孔を穿っている。さらに内外面に薄い黒漆を塗って仕上げている。これは孔に注口が取り付けられていたものと考えられ、銚子や湯桶のような用途として使用されたものと推定される。なお底部に小孔が認められるが、性格不明である。おそらく、虫食いの穴であろう。15は菜物入れか酒杯の用途が推



第96図　木製品(7)　15½

第13表　木製品(7)観察表

図版	グリット	遺　構	層　位	種　類	木取り	時期	備　　考	登録番号
1	B－4	11号溝	東壁付近	漆器　椀	横木	III期	底径7.2cm、高台部、口縁部は欠損している。内面朱漆、外面黒漆に朱漆で文様が描かれており、濃淡がある。花鳥文？	414
2	B－4	11号溝	埋　土 No.1	〃	〃	〃	底径7.0cm、高台部は欠損している。全体的に歪んでいる。一部焼けている。内面うるみ色漆、外面黒漆に朱・うるみ色の文様（葉文？）が描かれている。内外面共に漆が剝離している。	401
3	B－4	11号溝	東壁寄り 2　層	〃	〃	〃	底径7.0cm、口径16.6cm、高さ7.2cm、高台部は欠損している。著しく歪んでいる。内面は朱漆、外面は黒漆に朱漆で柏葉の文様があり、葉脈は針書きで描かれている。内外面共に漆が剝離している。底部が厚くなっている。体部は段をなす。ブナ	403
4	B－4	11号溝	埋　土 No.2	〃	〃	〃	底径8.6cm、高台部、口縁部は欠損している。内面はうるみ色の漆、外面は黒漆に朱漆で格子目状の文様が描かれている。内外面共に漆が剝離している。	402
5	F－4	11号溝(北溝)	No.1	〃	〃	〃	口径14cm、底部が変形しているため、口縁部が接合できない、内面はうるみ色の漆、外面は黒漆に朱漆で文様が描かれている。内外面共に漆が剝離している。底部に穿孔されている。葉文？	412
6	E－4	11号溝	2　層 No.12	〃	〃	〃	底径7.7cm、口縁部は欠損している。内面はうるみ色の漆、外面は黒漆に朱漆で文様が描かれており、高台部付近に残っている。内外面共に漆が殆んど剝離している。ブナ	410
7	F－4	11号溝(南溝)	2　層 No.13	〃	〃	〃	口径15.4cm、底径6.6～7.0cm、全体的に歪んでいる。底部は中央が盛りあがっている。内面は朱漆、外面は黒漆に朱漆で文様が描かれている。巳文？　ケヤキ	416
8	F－4	11号溝テラス	2　層	〃	〃	〃	底径6.8cm、高台部、口縁部は欠損している。内面は朱漆、外面は黒漆に朱漆の文様が描かれている。	415
9	E－4	11号溝	底	〃	〃	II期	底径7.1cm、高台部、口縁部は欠損している。内面はうるみ色の漆、外面は黒漆に朱とうるみ色の漆で文様が描かれている。高台内に直線的なひっかき傷がある。内外面共漆が剝離している。高台脇の文様は葉文と考えられる。	409 （ブナ）
10	F－4	11号溝	3　層	〃	〃	〃	底径8.8cm、口縁～胴部は殆んど欠損している。内面はうるみ色の漆、外面は黒漆に朱漆で文様が描かれている。	408
11	E－4	11号溝ベルト	2、3層	〃	〃	〃	底径8.4cm、口縁～胴部は殆んど欠損している。内面は朱漆、外面は黒漆である。	417
12	E－3	29号溝	2　層	〃	〃	〃	底径7.9cm、口縁～胴部は欠損している。高台部も欠損している。内面はうるみ色の漆、外面は黒漆に朱漆で文様が描かれている。一部焼けている。ブナ	404
13	B－6	4号井戸	7　層	〃	〃	〃	底径6.8cm、口径13.4cm、高さ5.7cm、内・外面共に黒漆、外面の胴部下半より高台部に削りがあり、胴部下半に直径1.5cmのほぼ円形の貫通孔がある。底部に中心よりはずれて直径0.1cmの斜めの貫通孔がある。湯桶あるいは銚子のような用途が考えられる。	418
14	F－6	23号井戸	4層(グライ層)	〃	〃	I期	底径7.9cm、口径16.7cm、高さ5.2cm、台部は欠損している。内・外面共に黒漆、漆が剝離している。ケヤキ	407
15	F－7	21号溝	3　層	〃	〃	II期	口径9.0cm、高さ3.5cm、内・外面共に黒漆、保存が良い。	419
16	E－4	11号溝	1　層 No.4 ●	漆器(板物)	—	III期	胴部破片、内面は朱漆、外面は黒漆に朱漆で文様が描かれている。重箱か箱膳のようなものであろう。	425
17	E－4	11号溝	2、3層	漆器　椀	〃		胴部破片、内面は朱漆、外面は黒漆に朱漆で文様が描かれている。	420
18	F－4	11号溝	1　層	〃	〃？	III期	体部下半から底部の破片、高台部は欠損している。木質部が薄くなっており、0.2cm位である。内面は朱漆、外面は黒漆に朱漆で文様が描かれている。	421

定される。16は器厚が厚く均一である。これは重箱や箱膳等の板物の破片と考えられる。

なお、昭和54年度調査時に検出された37号土壙より出土した高台内に文様をもつ漆器椀は、沢口滋氏の御教示によれば、いずれも特注品の可能性が考えられる。これらの椀は内外面ともに朱漆塗り（高台内は黒漆地に朱漆文様）で、今回の調査成果から考えてⅣ期に属するものと考えられる。今回の椀１点と合わせてⅣ期の漆器は、いずれも内外面ともに、朱漆塗りの漆器椀である点で注目されよう。

９．自在鈎

囲炉裏に関しては、いつごろから出現したかは定かではないが、平安時代の住居跡には、床面中央付近に焼土を伴う浅い土壙が存在するものがある。この種の遺構は火の使用に際して、用途の分化を考える場合には極めて重要な資料となろう。しかし、囲炉裏の用具となると不明

な点が多い。古代や中世の絵巻物を見ると、囲炉裏が描かれているものが少なくないが、「福富草紙」「慕帰絵」等いずれも五徳が使用されている。

第94図19は、小枝を利用した自在鉤と考えられる。本例は２号井戸跡（II期）から出土している点を考慮すれば、水汲み用に使用された可能性もある。類例を待ちたい。

10．燃料（薪）

意識的に木を割き、ほぼ一定の大きさに加工したものを薪と推定した。これらは先端が焼けているものが多い。また、自然木でも先端が焼けているものは、中世の遺構に伴う焼土が全く階無であり、直接火災に遭遇した状況が認められないことを考慮すれば、燃料あるいは照明用として利用されたものであろう。

第94図20～24は薪（図中の矢印は炭化範囲を示す）と考えられる。前述した絵巻物等には、囲炉裏に放射状に配列した薪を見ることができる。

11．農具

本遺跡より出土した木製品のうち、農具はわずか２点である。

第90図９は田下駄の足板である。長さは37cmで、田下駄としては比較的小型に属し、稲刈用枠形田下駄であろうか（中村たかを：1981）。

第100図6は鋤である。現存長は69cmで、柄および風呂の一部を欠く。本例は直線的な一木作りで、いわゆる櫂状の鋤と呼ばれるもの（中村：1981）である。１号溝底より、手燭台とともに出土した。

12．諸職用具

諸職用具は、大工道具や紡織具等の職人の道具類を言い、ここでは一括して扱う。

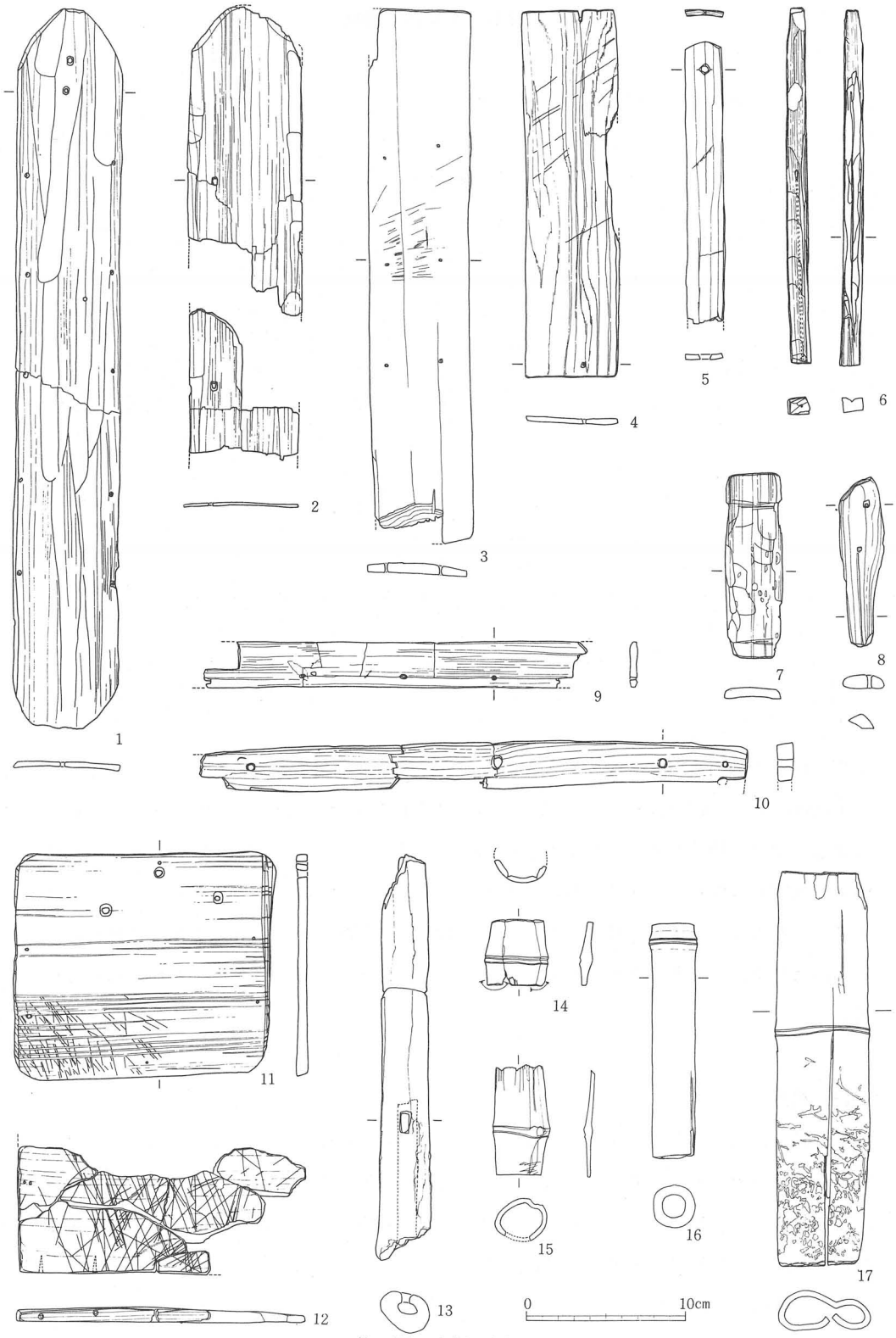
本遺跡では用途を推定しにくいものが多い。

第94図25は工具の柄と考えられる。両端の切口には１ヶ所ずつ穴が認められ、金属器が刺し込まれていたものと考えられる。

同図26は両端を切断した棒状のものであるが、中央部を加工して凹部を作り出している。おそらく、つちのこと考えられる。

同図29は図の上端の切断面は丸味をもつ。表面は軽く面取りが施される。おそらく、擂木と考えてよいであろう。調理具と考えられるが、ここで扱った。

第97図６は比較的丁寧な面取りが施され、片面に凹みをもつ棒状のもので、工具の柄ではないかと考えられる。先端の尖らない点で柄杓とは区別されるものと考えられる。同図13は柄穴



第97図　木製品(8)

第14表　木製品(8)観察表

図版	グリット	遺　構	層　位	種　類	木取り	時期	備　考	登録番号
1	E－2	29号溝	底	有孔板状木製品	柾目	II期	長さ45.0cm、幅6.6cm、厚さ0.3cm、先端部に大きい（直径0.3cm）貫通孔2個並んである。側縁に小さな穴（直径0.15cm）が10個（貫通孔9個、盲孔1個）あり、ほぼ等間隔に5個ずつ2列に並んでいる。その他に盲孔1個あり。一方の面に削痕あり。全体が緩やかに反っている。	224
2	A－3	10号土壙	4　層	〃	柾目	(中世)	幅7.2cm、厚さ0.2cm、方形の貫通孔2個あり。一方の面の周縁に削痕あり。	222
3	B－6	3号井戸	8層下部	〃	板目（丸木の外縁）	II期	長さ33.4cm、幅6.3cm、厚さ0.7cm、貫通孔6個あり、ほぼ等間隔に3個ずつ2列に並んでいる。両面に傷あり。	434
4	B－8	1号土壙	最下層（6層）	〃	板目	I期	長さ23.0cm、厚さ0.3cm、貫通孔2個あり、1つは欠損している。両面傷が少しある。	90
5	F－8	21号溝	3　層	木　札	柾目	II期	（残）長さ17.7cm、幅2.3cm、厚さ0.3cm、方形の貫通孔1個、その周縁に穿孔時の傷あり。先端を削り細く尖らせている。	220
6	F－4	11号溝	2　層	棒状木製品		III期	長さ22.2cm、幅1.3×0.9cm、1つの面に溝があり、断面形はV字形。小さい側面から斜めに穴が穿ってある。（人工のものであるかは不明）	35
7	A－3	14号井戸		板状木製品	柾目	IIorIII期	長さ11.1cm、幅3.4cm、厚さ0.6cm、折れている部分にわずかな段があり、中央部に削痕あり。	137
8	F－7	21号溝	2　層	有孔板状木製品	板目	III期	長さ10.7cm、幅2.8cm、厚さ0.8cm、貫通孔2個あり、1つには木釘が残っている。	61
9	B－4	11号溝	〃	〃	柾目	〃	幅2.9cm、厚さ0.4cm、貫通孔3個あり、ほぼ等間隔に1列になっている。	85
10	〃	9号井戸	中端埋土上	〃	板目	II期	長さ34.3cm、厚さ1.0cm、貫通孔4個あり、大きさがそれぞれ異なる。貫通孔と思われる孔が他に1個あり、欠損している。	438
11	B－6	3号井戸	8　層 南側壁密着	絵　馬	柾目	II期	縦14.2cm、横16.4cm、厚さ0.7cm、横長の長方形で四隅は丸い。周縁に小さい貫通孔（0.2×0.25cmの楕円形）6個あり、上下に1個ずつ、左右に2個ずつである。左の貫通孔に木釘が残っており、裏面より打ち込まれている。周縁の貫通孔は縁材のとめ穴と考えられる。上部に大きい貫通孔（直径0.3～0.45cmの円形）3個あり。両面に傷が多数あり、表面に白い付着物？がある。杉材	251
12	A－5	11号溝	セクションベルト 1　層	有孔板状木製品	板目	III期	厚さ0.7cm、両面に傷あり、一方の面に著しい。貫通孔2個あり。側面に盲孔2個あり、6片に壊れている。	87
13	B－5	〃	2　層	有孔棒状木製品		〃	（残）長さ25.5cm、直径3cm、方形の穴あり下部からの長い穴と続く。	355
14	E－4	46号土壙	埋土中位	蓋置？		II期？	長さ4cm、直径3cm、両端を平坦に切断し、節を抜いている。一方が少し焼けている。竹製	230
15	II区	11号溝	1　層	〃		III期	（残）長さ6.9cm、直径3.3cm、一方の端を平坦に切断し、端よりに傷があり、他方は細かく削られている。節を抜いている。竹製	228
16	A－7	2号井戸	2段目上面付近 黒色粘土	切断のある竹		II期	長さ14.8cm、直径2.6cm、両端を平坦に切断。竹製	229
17	E－4	11号溝	3　層	切断のある竹		〃	長さ24.6cm、両端は切断し、一方の端には細かい削痕が縁に沿ってある。節を境に一方に使用したと思われるような傷あり。つぶれている。竹製	240

が穿たれた工具あるいは武器の柄と考えられる。柄穴に直交する止め穴がある。

第100図10は両端を切断して、中央に柄穴が穿たれた木製品である。これは木槌の槌部あるいは鋤などの柄の把手が考えられるが、6.6cmと太く握りにくい点を考慮すれば、前者の可能性が強い。同図11は楔状を呈する木製品である。先端を欠くがほぼ完形品である。形状どおり、楔と考えられよう。同図12～15は小杭として分類した木製品である。先端を削って鋭角にしている。14は基部に2ヶ所穿孔が認められる。これらは一応道具類として扱ったが、建築部材とも考える。

13．絵馬

第97図11は穴の位置等から考えて絵馬と考えられる。縁辺部の小孔は木釘穴で、おそらく、縁板を取り付けたものと考えられる。また、三角形に配した穴は紐穴であろう。赤外線カメラによる観察では、墨書は認められず、平川南氏より彩色の絵馬ではなかったかとの御教示をいただいた。この絵馬は2号井戸（II期）より出土し、出土絵馬としては山形県道伝遺跡（8世紀末）、（藤田・渡辺：1982）に次いで2遺跡目であろう。

14．木簡

木簡は５点（第98図１～５）出土している。解読文等は後述する平川氏の論文を参照されたい。これらの木簡は、仙台市内では初めての発見となるものである。中世の木簡としては、東北では初めてであり、特に物忌札については東日本では類例を知らない。

いずれも11号溝（内堀）から出土し、およそ南北朝時代（Ⅲ期）に属するものと考えられる。

１号はＡ－５区、２号はＥ－４区と単独で出土しているが、物忌札はＡ－５区より一括出土している。おそらく、同時に使用・破棄されたものと考えられる。１号木簡は欠損品であって、解読文の意を十分に理解できないが、あるいは、３～５号木簡（物忌札）と関連するものかもしれない。１号・２号は欠損品であり、また３号は片面を失っているが、４号・５号と同様の星印・その他が書かれていたものと思われる。

「卦内風土記」名取郡今泉村の条には、かつて熊野神社とともに、牛頭天王社が存在していたことを伝えている。創建年代は不明であるが、おそらく中世のものと考えられ、物忌札とともに民間信仰として、陰陽道がこの地にも浸透していたことが知られ、興味深い。

15．建築部材

用途不明のものが多いが、杭・橋脚・柱材等がある。建築部材として扱ってよいかどうか判断できないものもあり、その数を確定できないが、約50点以上ある。

井枠材

第99図１～３は２号井戸から出土した杭形のもので、出土状況から地下の井枠材と考えられる。同図５も27号井戸からの出土で、他の井枠材と一括出土している点で、地下の井枠材であろう。同図７も地下の井枠材と考えられる。７は96.8cmの長さをもつ点から、井枠の一辺の長さは１ｍを起すものであろう。

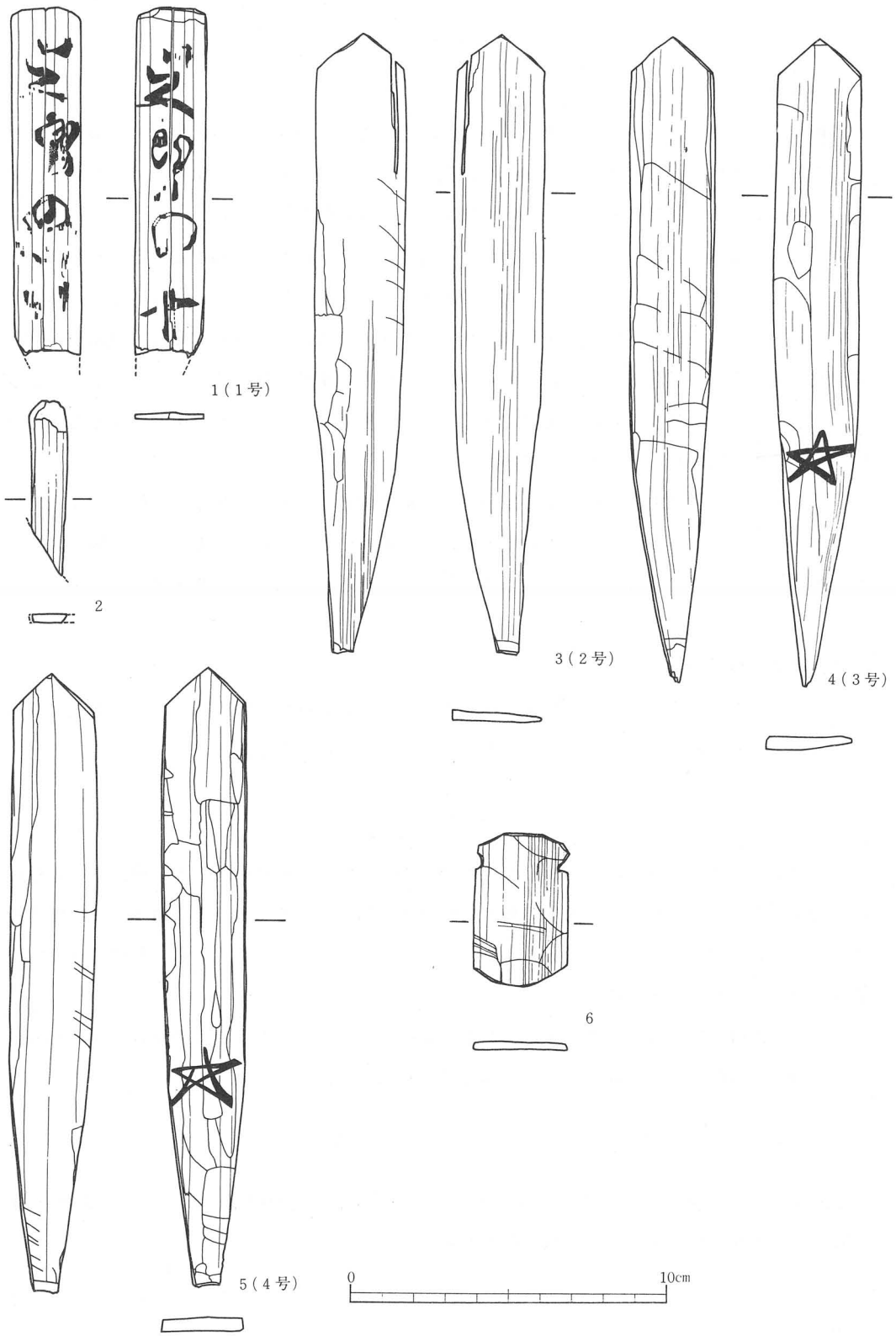
地下の井枠材の出土は、Ｂタイプとした小型井戸で、Ⅰ～Ⅱ期のものにやや多い傾向がある。また、地上の井桁材は、今回の調査では確認できない。

杭

第99図4，第100図8･9 は杭である。8は１号溝の底に垂直に打ち込まれていたものである。9は面取りが施された杭である。いずれも用途不明である。

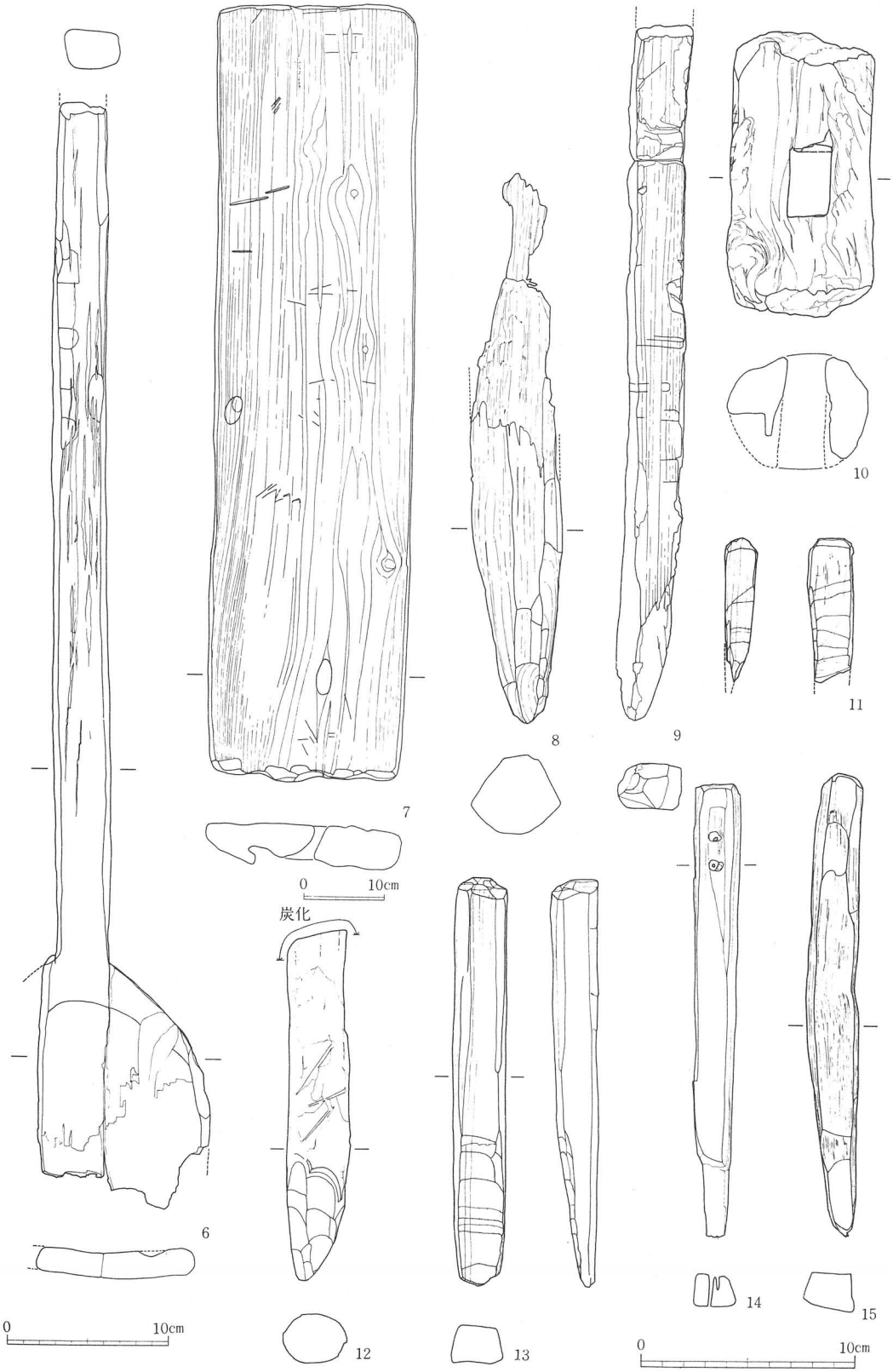
橋脚材

11号溝Ｅ－４区より橋跡が検出され、橋脚は10ヶ所存在したと考えられる。このうち、橋脚



第98図　木製品(9)

第99図　木製品(10)



第100図　木製品(II)　6・8・9は¼　7は⅛　10～15は⅓

材は７本（図示したものは５本）出土した。

第101図１～５が橋脚材である。１～４は自然木の先端を加工したものであるが、５だけは粗雑な面取りがなされている。II期～III期にかけて使用されたものであろう。

16．竹製品

製品・加工痕をもつものを一括して扱う。竹製品は総数64点あり、そのうち製品と考えられるものは、わずか４点である。破損・変形したものが多く、その用途は推定しにくい。

第97図14・15は節が抜かれており、蓋置（茶道具の一種）のようなものであろうか。同図16・17は節の残っているもので、用途は不明である。16については、把手や柄のようなものかもしれない。

17．用途不明木製品

（１）棒状木製品

第94図27・28は、先端付近に一部または、全周に抉りがある木製品である。

（２）板状木製品

第95図10は、楕円形を呈する薄い有孔板状木製品である。曲物の一部かもしれない。第97図１～４・９・10・12はいずれも有孔板状木製品である。１・３はほぼ等間隔に並列して木釘穴がみられ、用途の類似性があるものと考えられる。１は完形品である。４・９には折敷の底板や側板の可能性もある。

（３）木札

板状木製品のうち、一端に意識的に頭部を作り出しているものを木札とした。この木札と考えられるものは、わずか２点である。

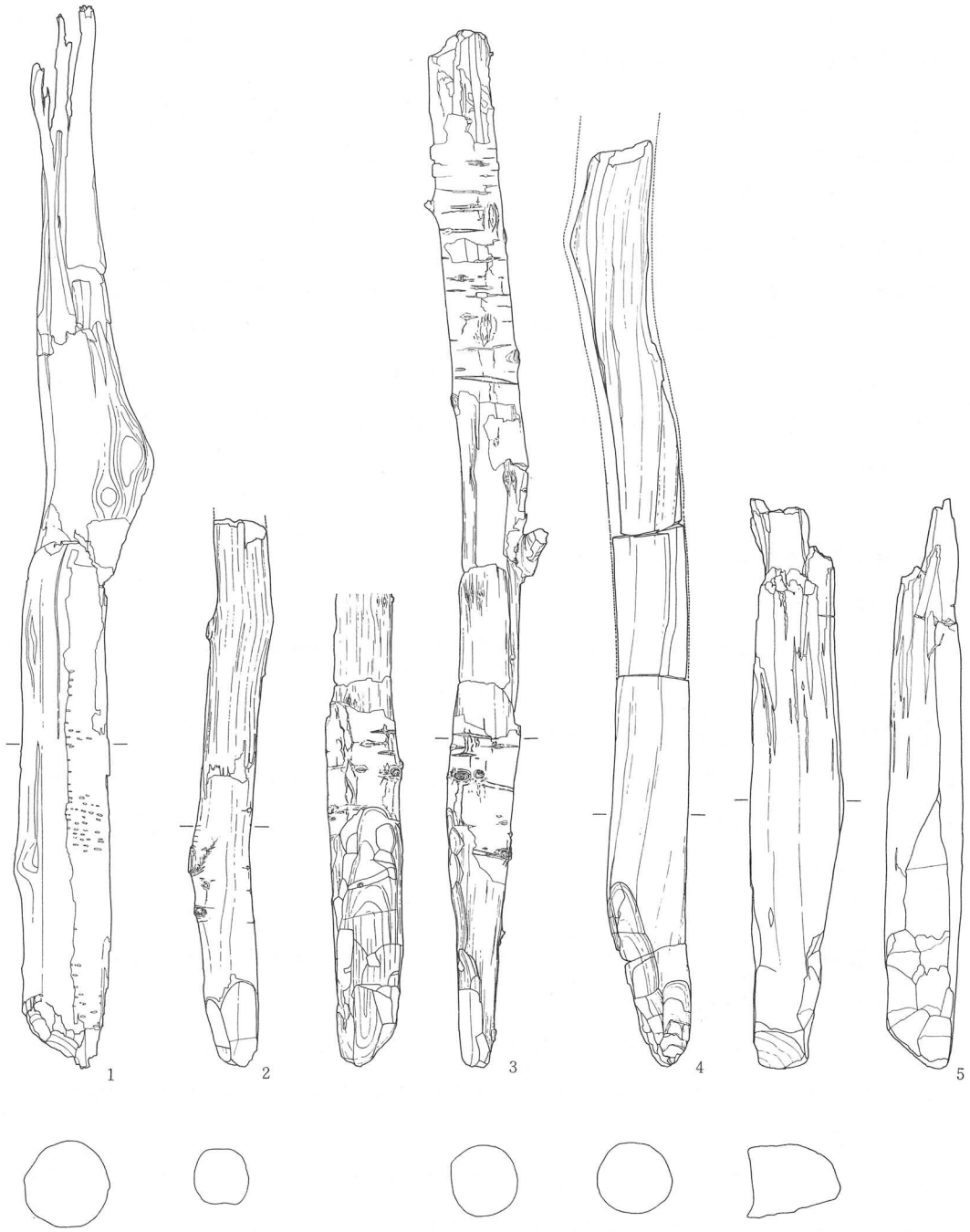
第97図５は山形に頭部を削り出した有孔の木札である。欠損品。第98図６は両端を丸味の強い山形に削り出し、そのうちの一端に抉りを入れた完形品である。表面には加工痕が残る。

（４）その他

第97図７は一端を削り残し、頭部状のものを作り出す板状木製品である。表面には加工痕が認められる。同図８は２ヶ所に木釘穴をもつ板状木製品である。葛西城址（宍戸武昭：1976）出土の人形の足に類似するが定かではない。

以上、木製品を概観してきたが、観察不足の感は否めない。また強引に分類したものもある。今後さらに検討していきたいと考えている。

最後に木製品の中で焼けているものについて若干ふれてみたい。木製品は総数約1,000点出土し、このうち、焼けているものは、全体の6.4%である。極めて出土率が低い。焼け跡の認めら



第101図　木製品(12) 橋脚材

第15表　木製品(9)観察表

図版	グリット	遺構	層位	種類	木取り	時期	備考	登録番号
1	A－5	11号溝	2層	1号木簡	柾目	III期	(残)長さ11.0cm、幅 2.2cm、厚さ 0.3cm　下端欠損。片面の一方の端に削痕がある。19型式	397
2	E－4	11号溝テラス	〃	木簡	〃	〃	厚さ0.25cm　欠損している。斜めの切断面がある。取上番号No⑥ 判読不能	267
3	A－5	11号溝	〃	2号木簡	〃	〃	長さ 19.6cm、幅 2.7cm、厚さ 0.2cm　上端を山形に削り、下端も尖らせている。片面は削痕があり一方は剥離され木簡面を失っている。　物忌み札	398
4	〃	〃	〃	3号木簡	〃	〃	長さ 20.4cm、幅 2.7cm、厚さ 0.3cm　上端を山形に削り下端も尖らせている。両面に削痕がある。物忌み札	399
5	〃	〃	〃	4号木簡	〃	〃	長さ 19.4cm、幅 2.5cm、厚さ 0.3cm　上端を山形に削り、下端も尖らせている。両面に削痕がある。物忌み札	400
6	A－7	2号井戸	黒色粘土層レベル 400～195	札	〃	〃	長さ 4.9cm、幅 2.9cm、厚さ 0.25cm　両端を削り丸くなっており、一方寄りに丸味のある抉りがある。片面に削痕がある。	265

第16表　木製品（鋤、井枠材、杭、木槌？、契？、小杭）観察表

図版	グリット	遺構	層位	種類	木取り	時期	備考	登録番号
1	A－7	2号井戸	二段目の上面付近黒色粘土	杭(井枠材)	－	II期	長さ 67.2cm、直径 6.0cm、両端に 4 面の削痕あり。左の側辺は平らである。	296
2	A－7	〃	〃	〃	－	〃	長さ 67.0cm、直径 4.8cm、両端に削痕あり。少し反っている。腐蝕が著しい。酸化鉄が付着。	292
3	A－7	〃	〃	〃	縦割り材		長さ 60.7cm、幅 6.8cm、先端に削痕あり、細くなっている、地方は削痕が見られない。深い傷あり。	291
4	B－5	11号溝	北岸	〃	－	III期	長さ 68.8cm、直径 8.7cm、先端に削痕あり、他方は欠損。	430
5	F－2	27号井戸		〃	－	IV期	長さ 74.9cm、直径 7.2cm、先端は 2 方向からの削痕があるが尖っていない。他方は二股に分かれ両端共に削痕があり、一方は尖っており、他方は丸味がある。二股に分かれている付近に傷あり。削痕あり。一部に樹皮あり。腐蝕しており、ひび割れが多数あり。	289
6	A－7	1号溝		鋤	板目	〃	全長 69.0cm、柄の長さ 53.3cm、柄の幅 3.5cm、風呂の厚さ 1.7cm、風呂と柄は 1 本作り。風呂の一部と柄の上部欠損。肩は下がっている。風呂の上面は削痕がありくぼんでいる。柄は削痕があり角が丸くなっている。	287
7	B－6	4号井戸	7層下 No.1	井枠材	〃	II期	長さ 96.8cm、幅 24.2cm、厚さ 5.0cm、両端に切断面あり。斜めの貫通孔 1 個、盲孔 1 個あり。傷が数ヶ所あり。少し反っている。	247
8	A－7	1号溝	底	杭	－	IV期	長さ 34.3cm、幅 5.6cm、先端に削痕あり、他方は欠損。腐蝕が著しい。	431
9	B－4	9号井戸	中端上埋土	〃	縦割材	II期	長さ 43.5cm、幅 3.6cm、先端に 2 面の削痕あり。他方は欠損。断面は方形。	438
10	E－4	11号溝（北溝）	2層	木槌？	－	III期	長さ 13.4cm、直径 6.6cm、両端とも欠損？　中央に柄穴あり。両側面に削痕と傷あり。	86
11	B－5	11号溝	3層	契	板目	II期	長さ 6.75cm、最大幅 2.1cm、最小幅 1.65cm、厚さは最大厚1.5cmで先端が薄く平らである。全体に粗い削痕あり。	78
12	F－8	21号溝	下から2番目の黒色土	小杭	－	III期	長さ 16.4cm、長径3.0×短径2.3cm、先端に削痕あり、他方は端より0.5cm位焼けている。中央部に傷あり。樹皮あり。	215
13	E－4	11号溝	3層	〃	－	II期	長さ 19.1cm、幅 2.4cm、先端に 1 面の削痕あり、扁平な先端部を作る。他方は面取り。傷あり。	37
14	E－4	〃	〃	〃（有孔）	－	〃	長さ 21.2cm、幅 2.1cm、先端は縦に貫通孔 2 個、下の貫通孔の右並びに盲孔 1 個あり。右の側面の下半分は裂けており、壊れているかは不明。	〃
15	E－4	〃	〃	小杭	－	〃	長さ 21.6cm、幅 2.4cm、先端に 3 面の削痕あり、他方は面取り？(粗い削痕あり)	〃

第17表　木　製　品（橋　脚）

図版	グリッド	遺構	位置	種類	木取り	時期	備考	登録番号
1	II区	11号溝	北部東側	橋脚	－	II～III期	長さ 77.5cm、直径 6.3cm、先端は削痕、他方はひび割れて縮んでいる。縦半分に樹皮あり。サクラ材	442
2	E－4	〃	北部西側	〃	－	〃	長さ 39cm、直径 4 cm、先端は 2 面の削痕、他方は欠損。中央部に樹皮あり。クリ材。	337
3	〃	〃	南部東側	〃	－	〃	長さ 75.6cm、直径 5.2cm、先端は 1 面の削痕、他方は欠損。中央部に樹皮あり。サクラ材。	338
4	〃	〃	南部中央	〃	－	〃	長さ 67.4cm、直径 5.5cm、先端は大きい削面 1 つと小さい削面あり。上部は発掘中に縮んだため、太さはあわない。クルミ材？	339
5	〃	〃	南部西側	〃	縦割材の $\frac{1}{4}$	〃	長さ41.5cm、幅 6.8cm、先端は 1 面の削痕、他方はひび割れている。一方　側の側面に大きな削面、もう一方に小さな削面あり。ブナ材。	341

れるものは、薪や自然木が大半であって、至極当然である。整理開始当初は、後述するごとく幾度かの戦乱に遭遇したであろうと予想し、焼け跡の認められる木製品の出土率が高いと考えていたが、大きく裏切られる結果となった。

（9） 金属器

金属器は平安時代のもの（８点）も含めて、出土総数203点である。この中には鉄滓等の製品でないものも含まれる。種別に出土数の多いものをみると釘57点、古銭45点、鉄滓26点等であり、用途不明（37点）の製品も多い。また武器類は全体の約８％である。材質は鉄が最も多く、銅・真鍮・鉛がある。

１．化粧具（鏡）

化粧具としては鏡一点がある。直角式中縁で中線単圏の蓬莱鏡（第104図13）である。全体の⅓を欠損し、鈕は不明である。割れ方が不自然で故意に割った可能性が考えられる。文様は松竹が描かれ、下位には洲浜らしき文様が認められる。

蓬莱文の出現は平安時代後期以後と考えられ、また蓬莱文の完成はおよそ鎌倉時代以後と考えられ、室町時代には慶賀文様に発展するといわれる（中野政樹編：1969）。

したがって、本例の製作年代は、鎌倉時代中期以後（Ⅱ期）とみてよいであろう。

２．炊事用具（鍋）

炊事用具には鉄鍋が２点ある。

第103図５の口縁破片と第108図7の胴部破片である。7は口径が約40cm前後になるものと予想される。いずれも詳細は不明である。前者はⅢ期に、後者はⅠ期に属する。

３．嗜好品用具（煙管）

煙管はⅢ区の出土例を合わせても、わずか２点である。

第109図７は銅製の煙管の吸口である。吸口の内部には竹製羅宇の一部(3.5cm)が残存する。Ｂ－６区より出土したが、層位不明である。Ⅴ期のものであろうか。吸口は段をもつのが特徴である。

４．囲炉裏用具（暖房具）

囲炉裏用具には火箸がある。本遺跡では第105図4がその典型であろう。現存長が24.5cmで、火箸の長さは８寸前後あったものと考えられる。両端は細く尖っており、断面は円形を呈する。

その他にも棒状鉄製品で火箸の可能性のあるものがある。第103図３、第105図14、第106図２・６、第109図２がそれに該当するものと考えられよう。断面形は円形と角形があり、所属年代は火箸の可能性のあるものも含めて考えてみた場合、Ⅲ～Ⅳ期の遺構に集中し、それ以前の遺構に伴うものがない。

ところで、火箸は火鉢の出土等から考えて、必ずしも囲炉裏用具に限定することはできないが、便宜上ここで扱った。

５．照明具

照明具には第102図5の燈明皿（手燭）がある。皿内部には仕切り板があり、その中央部には

凹みがある。おそらく、ここに芯を挟んだと考えられる。また、本例には短い把手がつく。これに類似する例に陸奥国分寺中門跡出土の鉄皿がある（伊東信雄：1971）。本例はIV期に属する。

6．農具

農具には、第106図１の鎌がある。本例は片側の錆が取れず十分にその特徴を把握できない。峰幅は約0.2cm、平部と刃部に折曲はなく、まだ刃は直線的であるがやや内弯する。込（仲子）には目釘穴はない。刃と込の角度は、約132°である。刃先には角はないものと考えられる。本例は、III期でも後半と考えられる。

7．諸職道具

諸職道具のうち、その主体となるのは大工道具である。本道具類には釘・錐・鑿がある。

釘

釘はいわゆる和釘（57点）であって、断面はいずれも角形である。破損品が多いが、およそ４cm代、６cm代、７cm代に集中する。完形品をみると4.8cm、5.4cm、6.5cm、7.0cm、7.2cm、8.1cm、9.35cmの長さのものがあり、1.6～1.8寸、2.1～2.4寸、3.12寸と大きく３つのグループに大別できる。また、欠損品であるが１点だけ11.5cm（3.48寸）と大型のもの（第109図4）があり、用途が異なるものと考えられる。

釘は断面形が、ほぼ正方形を呈するものが大半であるが、全体の約５％は第105図３、第107図４のごとく、断面形が長方形を呈する偏平な釘がある。この種の釘も用途が異るものであろう（この種の釘は船釘と類似する）。また、特異な釘として、第107図５に示したような一部が中空になるものがある。内部には炭粒子が若干入っていた（図版29、VI）。

本遺跡出土の釘は、頭が折れ曲がっているものが大半であるが、中には折れ曲っていないものもある。これは未使用の釘と考えられる。未使用の釘には、第102図１、２、第107図６等がある。

本遺跡ではＩ期の遺構に伴う釘が最も古く、しだいに増加するがIV期は極めて出土率が高く、全体の約42％を占める。前述の偏平なものや中空のもの、そして大型の釘は、いずれもIV期以後であり、釘の用途の拡大を示すものであろう。

錐

錐はその可能性のあるものを含めてもわずか２点である。

第105図13は錐の可能性をもつものである。基部は断面がほぼ正方形でしだいに細くなる。先端部付近は断面が円形に近く、先細りとなる。第106図３は完成品と考えられ、先端部は螺線状に作り出されている。これらはいずれもIII期の遺構に伴って出土している。

鎹

鎹は４号掘立柱建物跡の南東コーナーの柱穴より１点出土している(第108図1)。この建物に使用されていたものであろう。長さは6.8cm（2.27寸）で、比較的小型に属するものと考えられる。この建物跡は、およそII～III期と考えられることから、本例もその時期のものであろう。

８．古銭

本遺跡出土の古銭は合計45枚出土し、その内訳は中国銭が唐銭１枚・北宋銭24枚・南宋銭１枚・元銭１枚・明銭７枚である。日本銭は４枚出土している（第110図、第18表)。その他不明７枚である。出土状況をみると堀（11号溝・21号溝）が最も多い。この堀でも11号溝と21号溝では傾向が異なる。すなわち、11号溝では初鋳年が10～11世紀代のもののみであり、それに対して21号溝は、12～15世紀初めのものが多い。また他の遺構については、溝や土壙から出土するものが多く、意外に井戸跡から出土するものは少ない。日本銭（寛永通宝）は、いずれも１号・２号溝埋土１層より出土している。

古銭の出土はII期の遺構に伴うもの５枚(北宋銭)、以下III期18枚(北宋～明銭)、III～IV期４枚(北宋～明銭)、IV期４枚(明銭)、IV～V期５枚(明銭・日本銭)で、III期の出土例が最も多い。

II期以後、貨幣経済の発展によって年貢の代銭が行なわれ、その後、貫高制に移行したものであろう。

９．計量具

計量具には17号井戸跡（IV期）出土の銅錘（権）がある。本例（第108図５）はひょうたん形で上部に穿孔のある小突起をもつ。また文様はなく、底面に盲孔がある。重量は120.1ｇである。中国の重量単位（岩本義雄：1981に詳しい）に換算した場合約77.48銖となり、すっきりしない、これを日本重量単位に換算した場合32.03匁（約32匁）となり、日本重量単位によって製作された可能性が高い。

江戸時代には守随氏（東国）・神氏（西国）が秤座の支配権を確立するが、特に守随氏はすでに、慶長19年に関東地方の秤独占権を得たことが知られる（林英夫：1973)。秤座の成立(衡制の統一）以前は各地方ごとに度量衡が定着していたようで、本例もそのような社会的背景のもとに制作されたものであろう。林氏の指摘によればひょうたん形の錘に「越前」「天下一」の二つの銘のあるものがあり、江戸時代以前のものと推測され、また、同形のもので無名のものは、中国製の可能性があるという（林：1973)。本例は中国製の可能性もあるが、前述した理由から国産品と理解したい。

10．武器（加工具）

武器類には、刀類・刀装具・鉄鏃・鉄砲玉・その他がある。

刀類

刀類は刀２口である。第105図９は刀類の茎である。目釘穴や茎鎬はなく、茎尻は張りの弱い

栗尻である。茎は現存長18.6cmであるが、さらに続くものと考えられる。中川高氏より、長巻（薙刀）の茎ではないかとの御教示をいただいた。本例は15号溝（III期）より出土したものである。第109図８は短刀の刀身であろう。身幅は2.5cmであり、刃は平造りか切刃造りか判然としない。また、フクラもつくのかどうか判然としない。棟は直線的であるが刀先の方は不自然である。21号溝（III期）より出土したものである。

第105図６・12は刀子の茎である。特に12は大型のものと考えられる。第108図２・４も刀子の茎である。４は茎幅の差が大きい。第109図３はＡ－７区II層より出土したもので、最も残りの良い刀子である。刀長は約10cm前後になるものと考えられる。前述した平安時代のものも含めて、刀子は時代が下がるにしたがって、大型化する傾向がありそうである。第109図３等は小柄の可能性もある。

刀装具

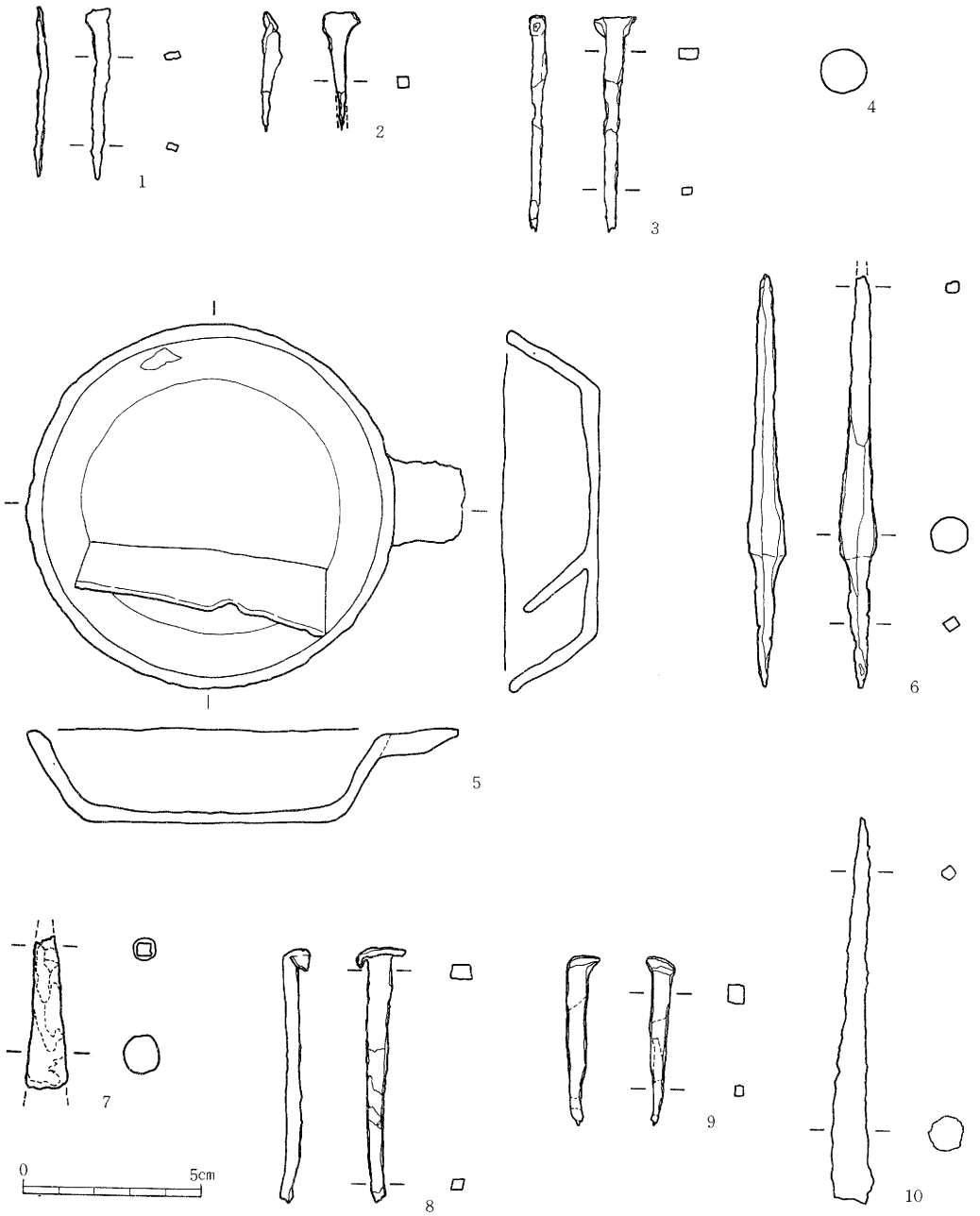
刀装具には、帯執座金具・鮫皮・小柄櫃・鞘尻（あるいは柄頭）金具が、各一点ずつある。第103図11は縁辺に刻みのある帯執座金具である。第105図８は銅製鮫皮で柄の装飾品である。第106図7は小柄櫃と考えられる銅製品である。本例は銅板を折り曲げて鞘状に製作されている。同図８は銅製の鞘尻あるいは柄頭の金具である。本例は完形品であるが鍬形は変形している。全縁辺は大小の弧の組合せによって形成され、表裏は対称形になるが左右は長さが異なる。長い方の一側縁には、先端部付近に目釘穴１ヶ所がみられる。これらの刀装具はいずれもIII期に属すると考えられるが、第106図７はIV期のものである。

鉄鏃

鉄鏃と考えられるものは５点出土している。これらの鏃は大きく２種のタイプに分けられる。すなわち、先細形と平根形である。さらに前者には茎をもつものと、茎がなく基部約⅓が中空になるものとに細分される。第102図６は先細形で茎をもつ鉄鏃である。全長11.6cmである。第102図７・10、第109図１は、先細形で基部が中空となる鉄鏃である。このうち、第102図７はほぼ完形に近く、全長10.85cmである。第109図１は平根形の鉄鏃である。このタイプは時代とともに多少の変化はあるが普遍的な形態である。先細形のものはIV期以後の遺構から、平根形はIII期の遺構からそれぞれ出土したものである。

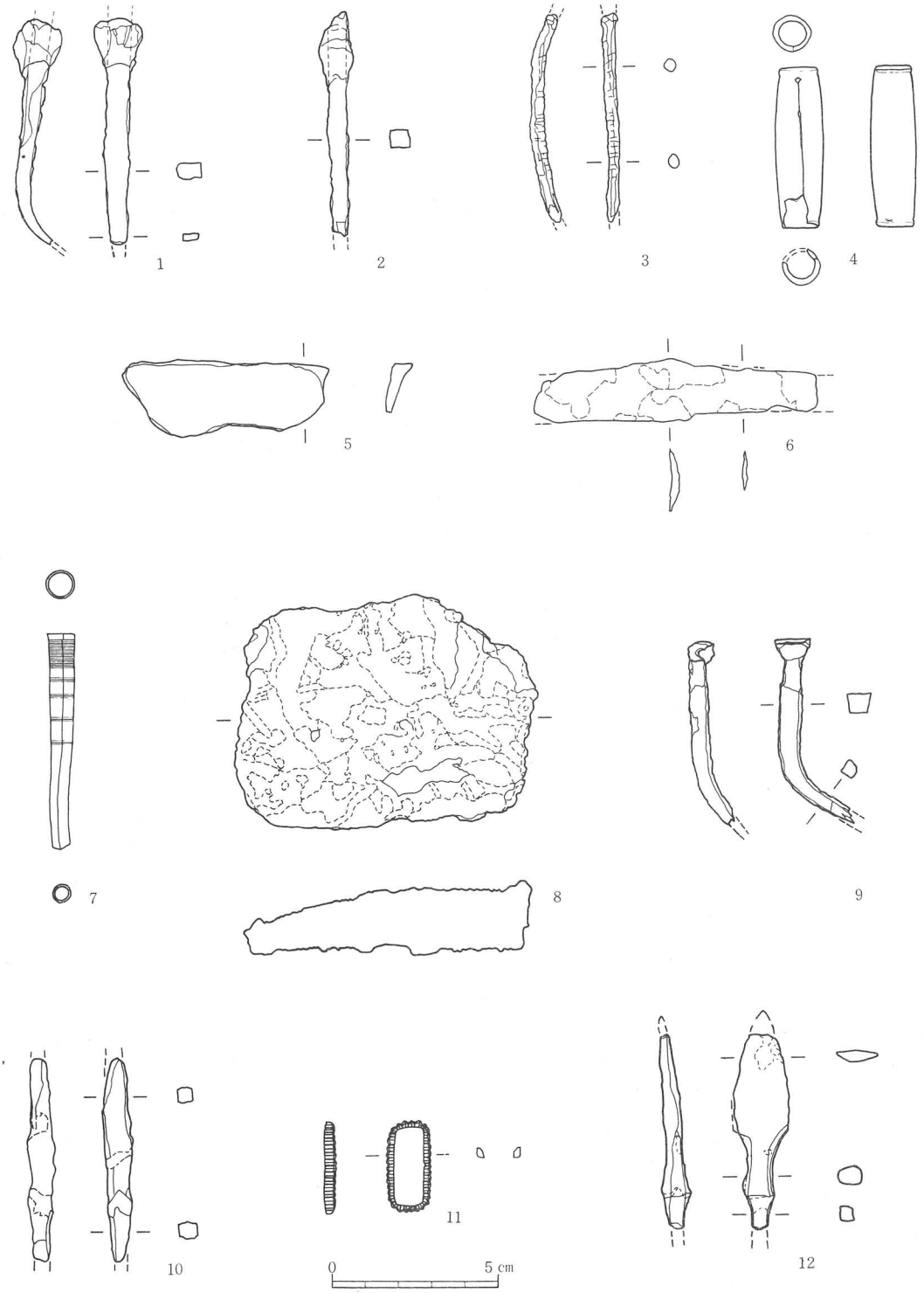
管状銅製品

管状銅製品は２点（第103図４、第105図11）出土している。いずれもIII期に属すると考えられる。この管状銅製品は、奈良春日大社若宮御料古神宝類中の牡丹文蒔絵弓（12世紀）に類例がある（東京国立博物館：1976）。この弓の弭につく胴輪が、本遺跡例と極めて良く類似しており、本遺跡の２例も弭の胴輪と考えてよいであろう。春日大社例は、合成弓ではなく丸木弓である。平安末期以後は合成弓が主流となるようであるが、本遺跡例は胴輪の存在から丸木弓を



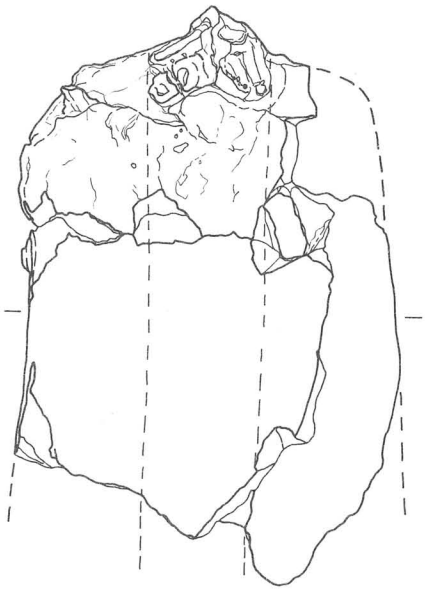
図版	グリット	遺構	層位	種類	材質	時期	寸法 長さ(cm)	(寸)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ (g)	(匁)	備考	登録番号
1	A－4	1号溝	1 層	釘	鉄	Ⅳ期	(完) 4.8	1.58	0.75	0.25	2.4	0.64		126 ②
2	A－5	1号溝西壁	埋 土	釘(2寸釘?)	〃	〃	(残)3.35	1.11	1.0	0.45	1.7	約0.5	先端部欠損、釘頭有り。青色付着。未使用。	155
3	A－6	1号溝	〃	釘(2寸釘)	〃	〃	(完) 6.1	2.01	1.2	0.35	3.3	0.88	断面は長方形で、頭は平たく茎に垂直である。	51-①
4	A－7	1号溝東側	2層上面	鉄砲玉	鉛	〃?	(完)直径1.25	—	—	—	6.7	約1.8		1010
5	〃	1号溝	3 層	灯明皿	鉄	〃	(完)直径10.2	—	最大高2.6	0.65	250.0	約66.7		—
6	A－8	〃	1a、1b層	鉄 鉄鉄	〃	〃	(残)11.6	3.83	最大径1.1	—	12.1	約3.2	鉄身8.1cm、茎部3.5cm、茎部は短形で先細である。	112
7	A-7-8	〃	3 層	鉄 鉄鉄?	〃	〃	(残) 4.3	1.42	1.2	1.8	4.4	約1.2	中空?	139-①
8	A－7	〃	1 層	和 釘	〃	〃	(残)7.15	2.36	0.7	0.45	8.2	約2.2		123
9	A－8	2号溝	埋 土	〃	〃	〃	(残) 4.8	1.58	0.85	0.59	6.6	1.76	ほぼ完形品	73
10	A－7	〃	〃	鉄 鎌	〃	〃	(完)10.85	3.58	最大径1.15	—	12.1	約3.2		60

第102図　1号・2号溝跡出土金属製品

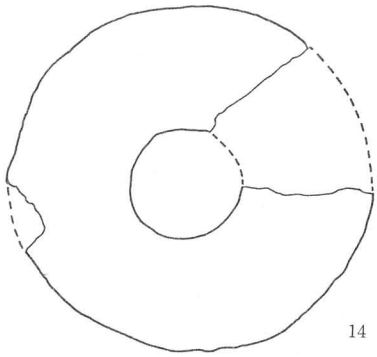


第103図　11号溝跡出土金属製品(1)

13



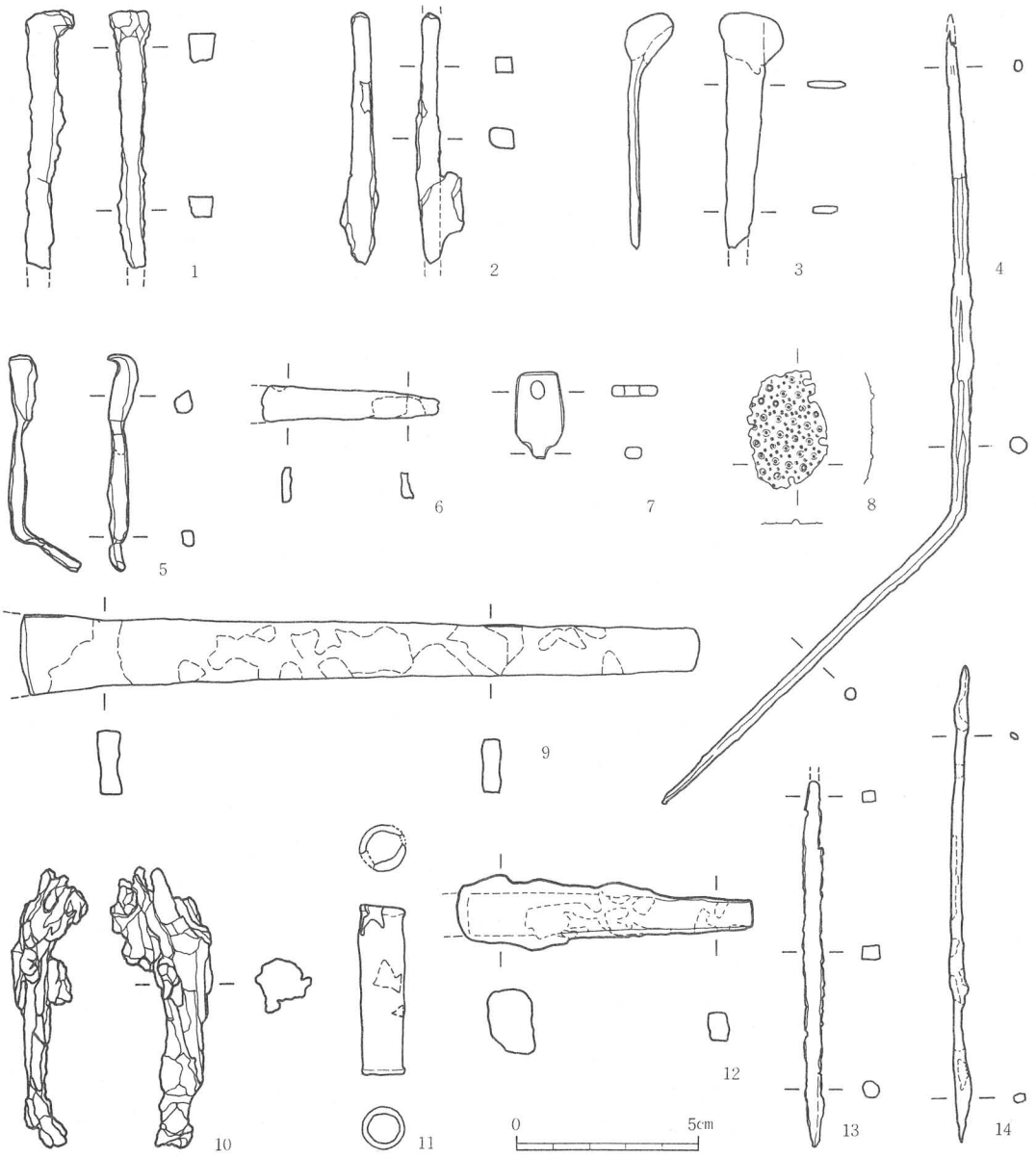
0　5 cm



14

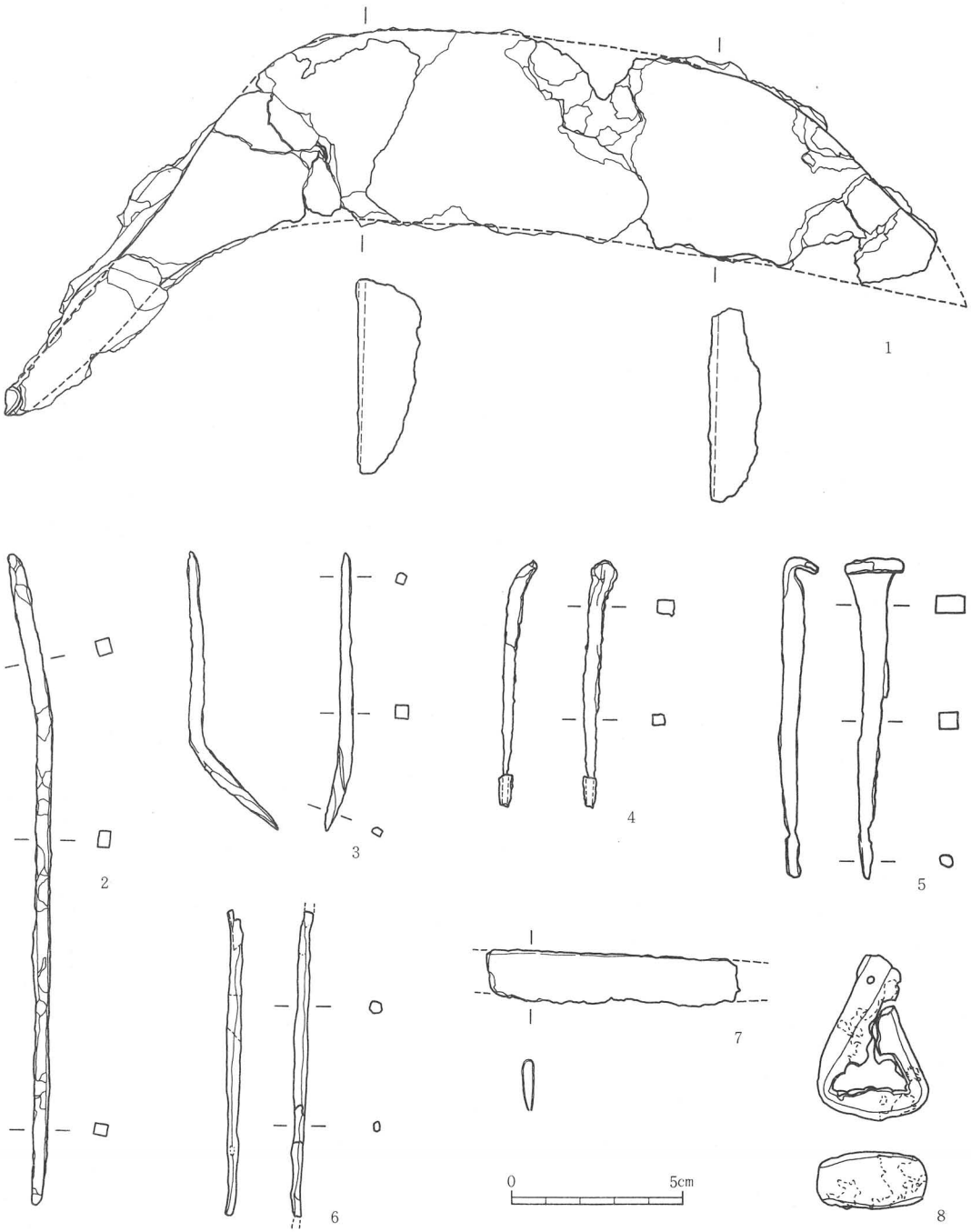
図版	グリット	遺構	層位	種類	材質	時期	寸法				重さ		備考	登録番号
							長さ(cm)	(寸)	幅(cm)	厚さ(cm)	(g)	(匁)		
1′	B−4	11号構	2 層	釘	鉄	Ⅲ期	(残) 7.1	2.34	1.45	1.4	7.3	約1.95		365
2	〃	〃	1 層	〃	〃	〃	(残) 6.85	2.27	1.1	1.1	7.9	約 2.1		274-②
3	A−5	〃	〃	火箸?	〃	〃	(残) 6.35	2.1	0.5	0.4	3.6	約 1.0	丸棒状のものに対してやや垂直に多数の傷跡がみられる。	327
4	B−5	〃	2 層	勾 (胴輪)	銅	〃	(残) 4.9	1.62	1.4	内径 0.8 外径1.15	10.8	2.88	殆んど錆なし。	988
5	Ⅰ区	〃	1 層	鍋(口縁)	鉄	〃	(残) 6.2	—	2.4	0.7	20.2	約 5.4	錆付着	423
6	B−4	〃	〃	不明	〃	〃	(残) 8.5	2.81	1.9	0.25	10.3	約 2.8	刃身4.8cm、関3.7cm、断面がすっ曲、片面に反り、中央部のくびれを境に幅が細くなっている	274-①
7	A−5	〃	底付近	不明	銅	Ⅱ期	(残) 6.6	2.18	径 0.85	—	4.4	約 1.2	青色付着、火箸に付属する金具?	980
8	B−5	〃	2 層	鉄塊	鉄	Ⅲ期	(残) 9.15		7.15	2.6	338.0	約90.1	青色付着 (グライ化したためか?)	864
9	E−3・4	〃	3 層	釘	〃	Ⅱ期	(残) 6.7	2.21	1.1	0.75	8.7	2.32	釘頭に錆付着、釘先欠損	993
10	F−4	11号溝(北溝)	確認面	釘?	〃	Ⅲ期	6.2	2.05	0.9	0.85	4.4	約 1.2	青色錆付着	604
11	Ⅱ区	11号溝テラス部	5or6層	鞘・金具	銅	〃	2.8	0.92	1.25(0.41)	0.35	2.2	約 0.6	帯執座金具	983
12	E−4	11号溝	確認面	鏃	鉄	〃	(残) 5.9	1.95	1.7	0.9	5.6	約 1.5	平根型	1002-①
13	〃	〃	1 層	蓬萊鏡	銅	〃	(残)直径11.3	—	—	—	130.5	約35.0	直角式中線、中線界圏、松、竹、雲と洲浜らしい文様。製作は Ⅱ期、出土は Ⅲ期の層	982
14	〃	〃	〃	ふいごの羽口	—	〃	(残) 15.4	—	最胴径 9.8	孔径 3.0	835.0	約 222.7	円筒状、側面はヘラ削り	848

第104図　11号溝跡出土金属製品・土製品(2)



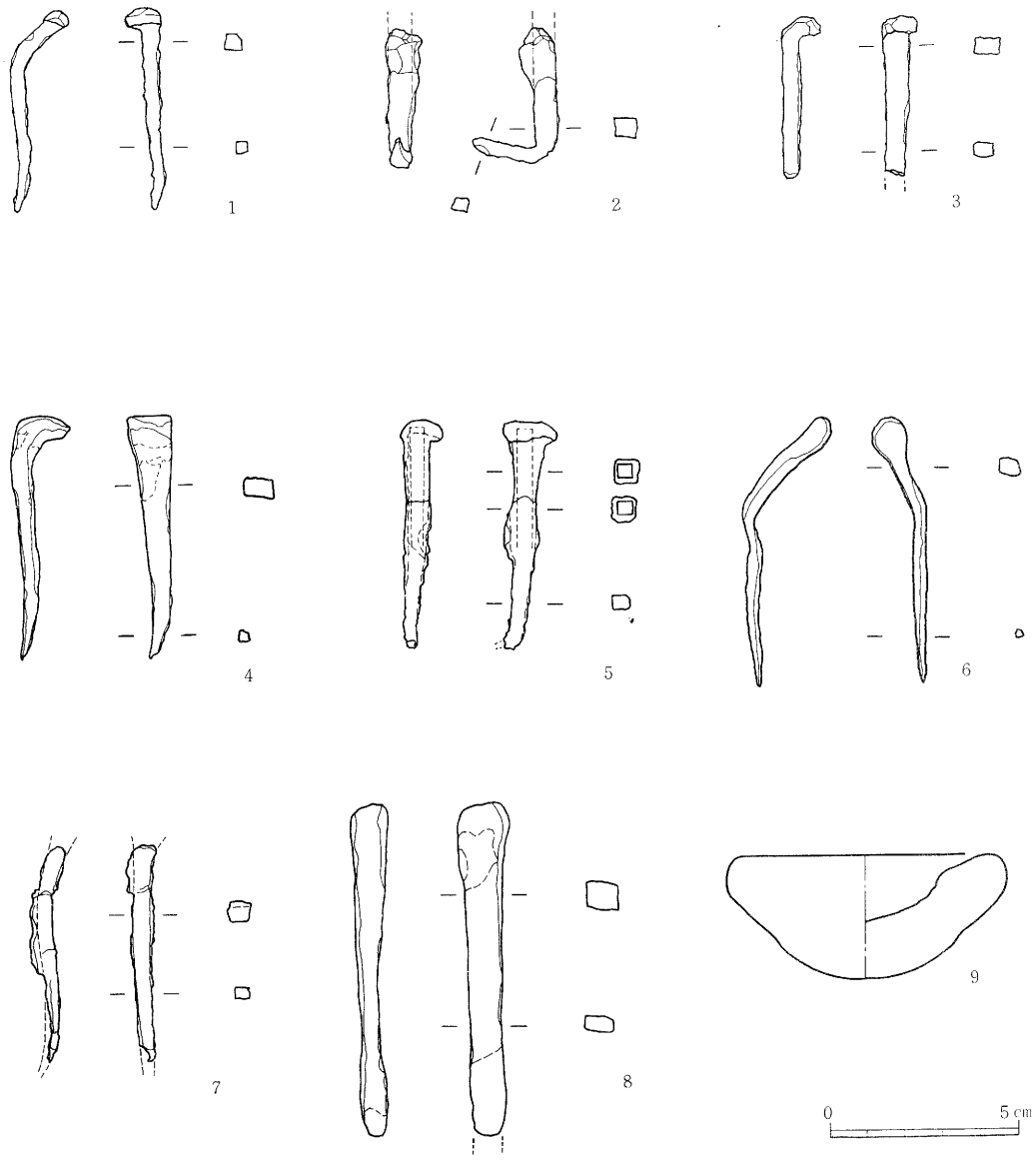
図版	グリット	遺構	層位	種類	材質	時期	寸法 長さ(cm)	(小)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ (g)	(匁)	備考	登録番号
1	B－4	12号溝	1層	釘	鉄	Ⅳ期	(残) 7.1	2.34	1.1	1.3	9.0	2.4	L字形、頭が曲がり、頭部は平担である。	244
2	〃	〃	埋土上部	釘	〃	〃	(残) 6.9	2.28	1.4	0.9	7.9	約2.1		311-①
3	〃	〃	〃	釘	〃	〃	(ほぼ完)6.5	2.15	1.7	0.3	7.0	約1.9	錆付着	311-②
4	〃	〃	2層	火箸	〃	〃	(残) 24.5	8.09	径0.5	—	14.4	3.84	棒状で両端尖頭、一方欠損、断面は丸い。	25
5	B－2	14号溝	埋土	釘	〃	Ⅰ期	(完) 7.0	2.31	0.8	0.6	4.8	1.28		832
6	B－3	〃	〃	刀子(茎)？	〃	〃	(残) 4.8	1.58	1.0	0.3	4.3	約1.1	錆付着	407
7	A－2	15号溝	1層	有孔の金具	銅	Ⅳ期	(完) 1.2	0.4	0.6	0.15	0.8	約0.2		985
8	B－2	〃	〃	鮫皮(刀装具)	〃	〃	(残) 3.3	—	2.2	0.04	1.3	約0.3	柄の部分？	986
9	A－2	〃	埋土	刀(茎)	鉄	Ⅲ期？	(完) 18.6	6.14	2.2	0.85	93.7	約25	茎錆は無し、反り無し、目釘穴不明	995
10	B－2	〃	1層	銅滓	銅	Ⅳ期	7.8	—	2.8	2.1	46.9	約12.5		984
11	〃	15号溝張り出し部	埋土	弾(胴輪)	〃	Ⅲ期？	4.7	1.55	内径0.9	外径1.3	6.8	約1.8		253
12	〃	16号溝	—	刀子(茎)？	鉄	Ⅲ期？	8.1	2.67	2.1	1.3	47.2	約12.6		63
13	A-1-2	〃	埋土	錐？	〃	〃？	(残) 10.1	3.33	0.6	0.5	5.3	約1.4		830
14	〃	〃	〃	火箸？	〃	〃？	(完) 13.2	4.36	最大径0.5	—	6.2	約1.7		967

第105図　12号・14号・15号・16号溝跡出土金属製品　7は½



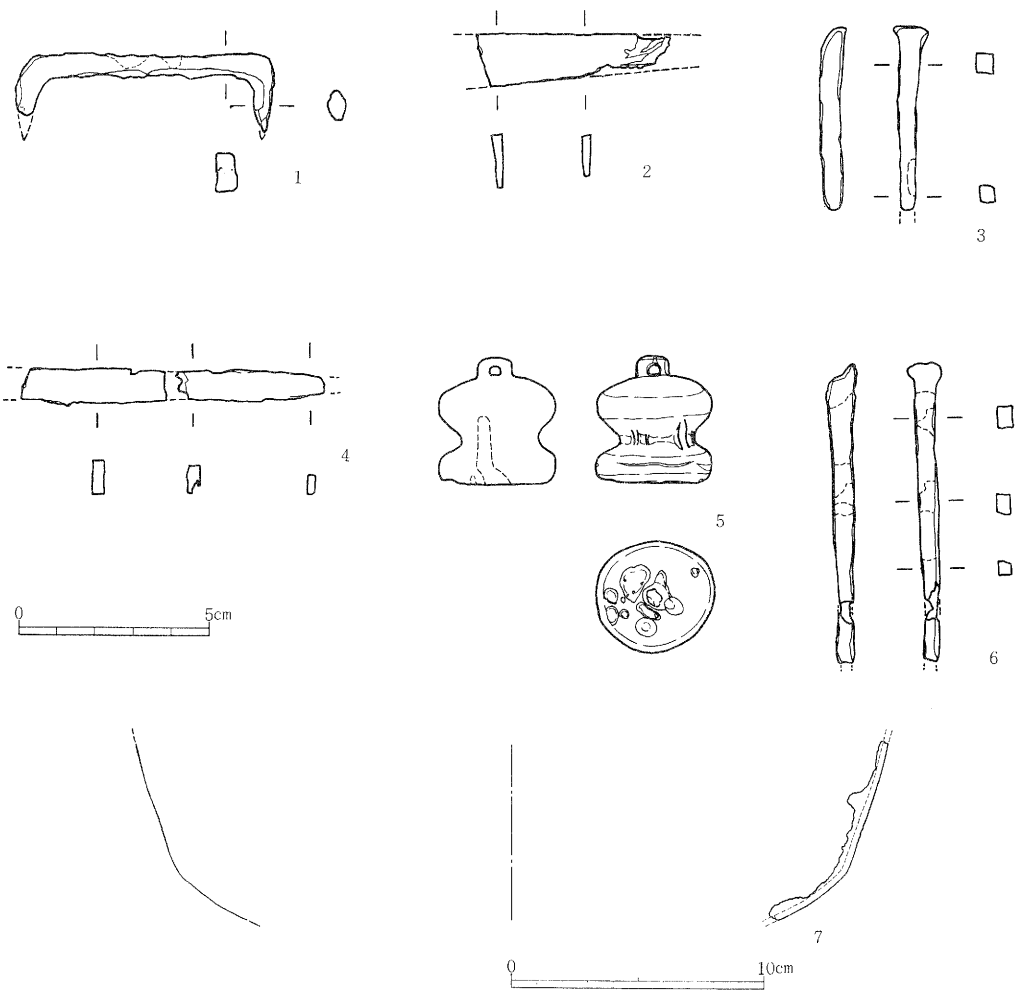
図版	グリット	遺構	層位	種類	材質	時期	寸法 長さ(cm)	(寸)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ (g)	(匁)	備考	登録番号
1	F－5	21号溝	1層	鎌	鉄	III期	(残)26.9	8.88	6.4	2.6	215.0	約57.3	錆多く、非常にもろい。込の端部は折れ曲がる	890
2	F－8	〃	〃	火箸？	〃	〃	(完)19.2	6.34	0.5	—	17.7	4.72		616
3	F－6	〃	埋土	錐	〃	〃	(残) 8.1	2.67	〃	0.5	5.8	約1.5		992
4	F-4･5	26号溝	底	釘	〃	IV期	7.2	2.38	0.8	0.45	4.4	約1.2	未使用釘？	1003
5	〃	〃	1層	〃	〃	〃	(完)9.35	3.09	1.2	0.9	11.9	約3.2		1005－②
6	〃	〃	〃	火箸？	〃	〃	(残) 8.9	2.94	0.43	0.4	4.4	約1.2		1005－①
7	F－5	〃	埋土	小柄櫛	銅	〃	(残) 7.4	2.44	1.4	0.3	2.9	約0.8		823
8	F－2	31号溝	〃	刀装具	〃	III期	10.1	3.33	1.7	0.2	15.7	約4.2	柄頭あるいは鞘尻金具	425

第106図　21号・26号・31号溝跡出土金属製品



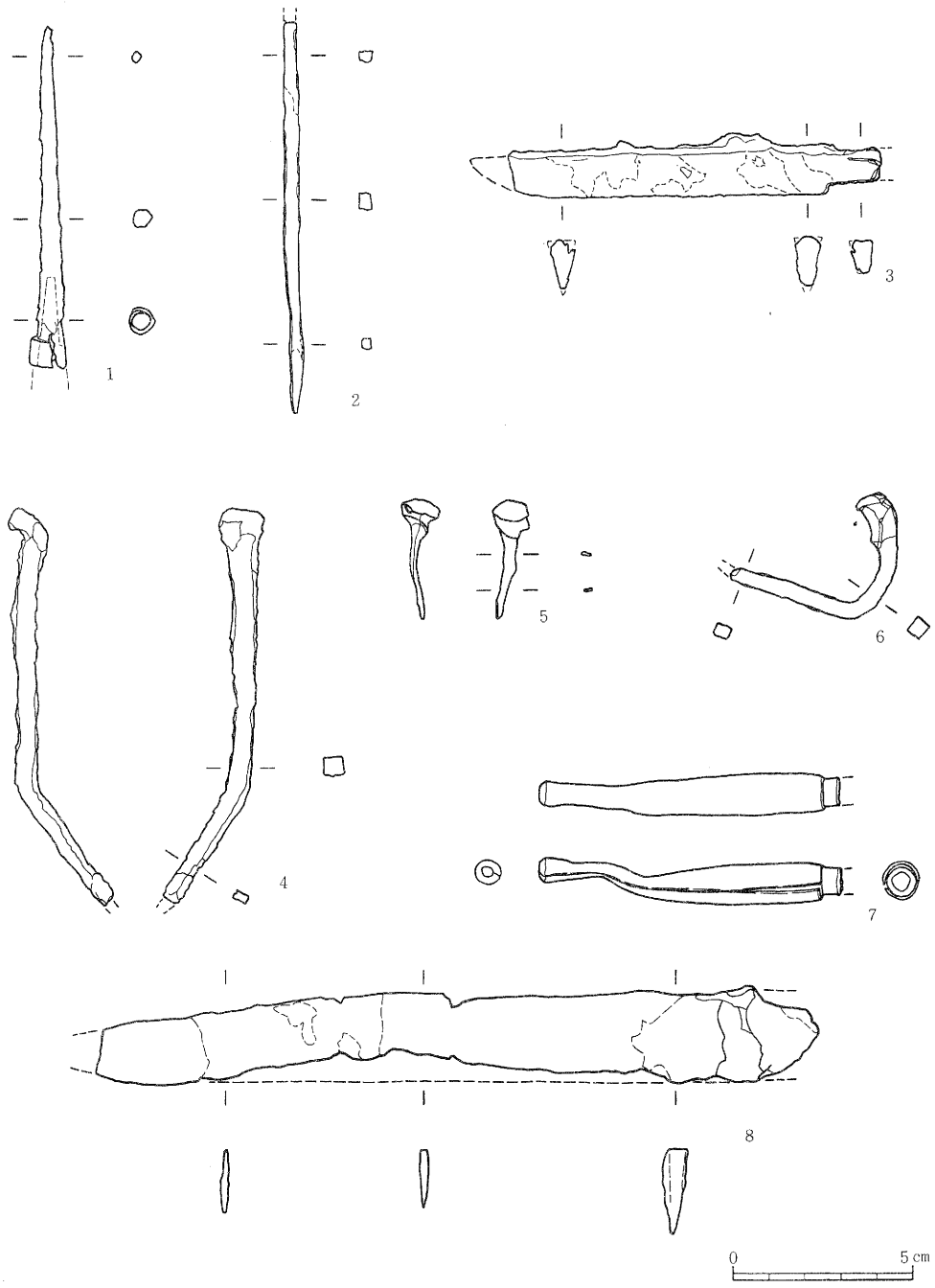
図版	グリット	遺構	層位	種類	材質	時期	寸法 長さ(cm)	(寸)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ (g)	(匁)	備考	登録番号
1	A－3	9号土壙	埋土	釘	鉄	Ⅳ期	(完) 5.4	1.78	0.95	0.5	2.7	0.72		105-②
2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(残) 4.9	1.68	1.0	0.75	5.2	約1.4		105-①
3	B－2	11号土壙	〃	〃	〃	Ⅱ～Ⅲ期	(残) 4.3	1.42	0.9	0.5	6.0	1.6	釘頭有り。	364
4	F－6	32号土壙	2層	〃	〃	Ⅳ期	(完) 6.5	2.15	1.2	〃	12.4	約3.3		634
5	〃	〃	5層	〃	〃	〃	(残)6.05	2	1.4	1.1	4.3	約1.1	中空の釘。内部よりわずかに木炭検出。	909-①
6	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(完) 8.1	2.67	0.9	0.7	5.0	約1.3	未使用。	997
7	〃	34号土壙	埋土上部	〃	〃	〃	(残)5.75	1.9	0.8	〃	3.0	0.8	釘頭無し。	557-②
8	E－4	45号土壙	埋土	不明	〃	Ⅰ期	(残) 8.9	2.94	1.4	1.0	20.7	5.52	錆付着。	991
9	F－6	46号土壙	フラン確認面付近	坩堝	－	Ⅱ～Ⅲ期	口径7.4cm	－	器高3.3	－	－	－	口縁から内面にかけて溶解物付着。内面に緑青みられる。亀裂がみられる。	1075

第107図　Ⅰ・Ⅱ区土壙出土金属製品



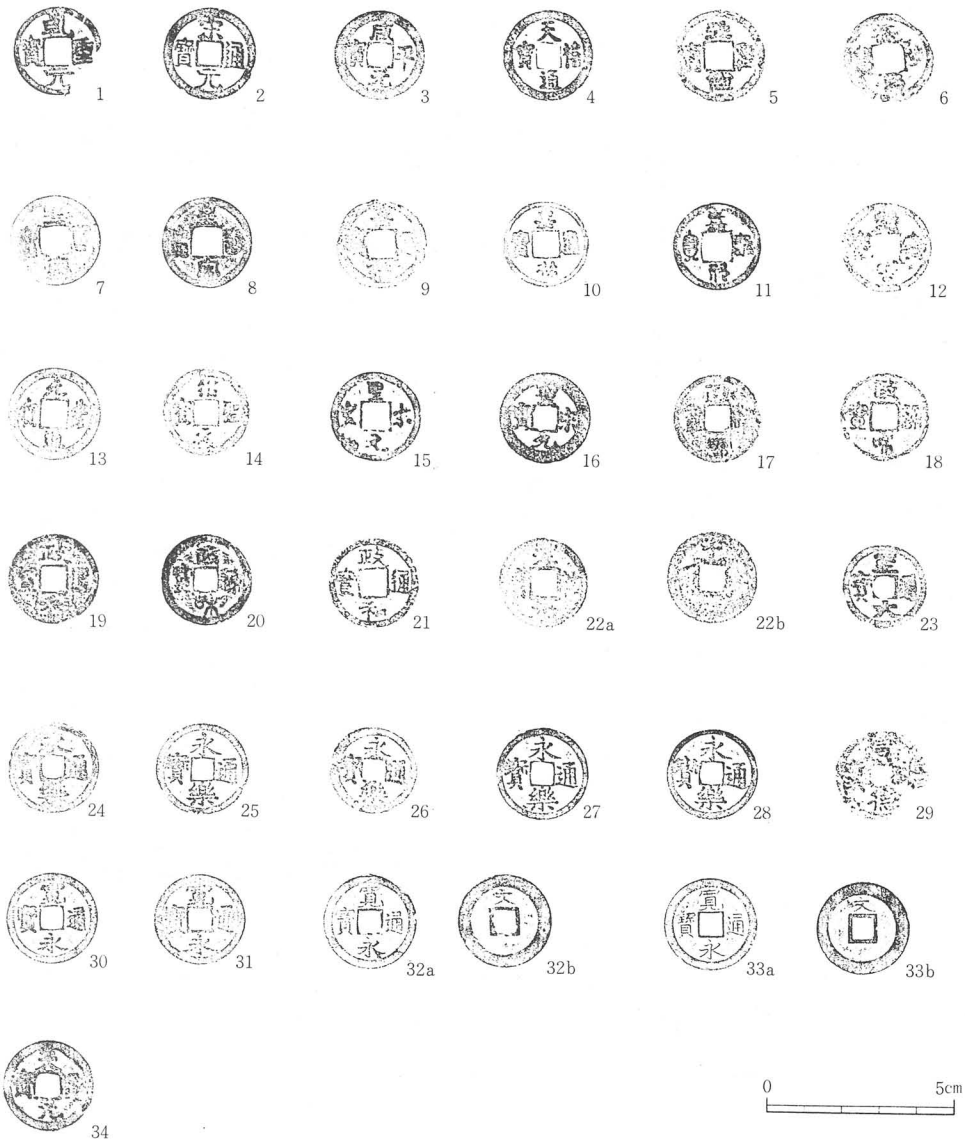
図版	グリット	遺構	層位	種類	材質	時期	寸法 長さ(cm)	(寸)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ (g)	(匁)	備考	登録番号
1	B-7	4号掘立柱(南東コーナー)	埋土	鏃	鉄	Ⅳ期	(残) 6.8	2.24	1.1	0.8	18.8	約5	足最大高 2.1 cm (約6分)	971
2	E-8	18号掘立柱ピット2	底	刀子(茎)	〃	〃	(残) 5.1	1.68	1.4	0.25	6.0	1.6		732
3	〃	18号掘立柱ピット6	埋土1層	釘	〃	〃	(残)4.85	1.6	0.9	0.55	6.9	1.84	未使用	994
4	〃	〃	埋土2層	刀子(茎)?	〃	〃	(残) 7.7	2.54	1.0	0.35	2.7	0.72	錆のため非常にもろい。接合出来ないが同一個体。	736
5	B-1	17号井戸	6層	錘	銅	〃	(完) 3.4	−	長径 3.1	短径2.95	120.1	約32	棹秤の銅錘、ひょうたん形、極印なし	981
6	E-7	20号井戸	−	釘	鉄	〃 ?	(完) 8.0	2.64	0.55	0.8	9.0	2.4	未使用	−
7	B-4	10号井戸	埋土下部	鍋	〃	Ⅰ期	(残)10.0	−	枝線径 13.2	(残) 1.1	−	−		443

第108図　Ⅰ・Ⅱ区掘立柱建物跡・井戸跡・出土金属製品　　7は1/3



図数	グリット	竜構	層位	種類	材質	時期	寸法 長さ(cm)	(寸)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ (g)	(匁)	備考	登録番号
1	A、B－1		II層	鏃（先端）	鉄	－	(残) 9.5	3.14	径1.0	－	8.8	約2.3		144
2	A － 7		〃	火箸？	〃	－	(残)10.85	3.58	0.42	0.4	8.6	〃		17－①
3	〃		〃	刀子(小柄？)	〃	－	(残)10.3	3.4	1.7	0.7	24.3	6.48	刀身8.8cm（約2寸7分）、茎1.5cm（約5分）、区(段)0.3cm	49
4	B － 7		〃	釘	〃	－	(完)11.5	3.8	1.3	0.9	22.3	約5.9	釘頭有り。釘先端わずかに曲っている。頭部丸くなり若に幅広である。	19
5	B－7東壁付近		〃	飾り鋲	銅	－	(完) 3.3	1.09	1.0	－	1.7	約0.5		987
6	B － 6		III層	釘	鉄	－	(完) 7.3	2.41	〃	1.0	4.9	約1.3	釘頭有り。	1001
7	〃		表採	煙管(吸口+雁首)	銅	V期？	(完) 7.8	2.57	径1.15	－	15.0	4	雁首側から吸い口に向けて細くなり、吸い口の手前で段を持つ。雁首と銅版を丸く接合している。	45
8	F － 6	21号溝	2層	短刀？	鉄	－	(残)20.0	6.77	2.7	1.45	25.2	6.72	刃先の背の部分がゆるやかにカーブしている。刃の部分は使用のため凹に減っている。	720

第109図　21号溝、Ⅰ・Ⅱ区基本層位出土、表採金属製品



第110図　Ⅰ・Ⅱ区出土古銭

使用していた可能性がある。

鉄砲玉（第102図４）

鉄砲玉は１点出土している。１号溝の東側（Ａ－７区）２層上面より出土したものである。鉛製である。本例は１号溝との関連があるものと考えられ、Ⅳ期のものであろう。

11．その他の金属製品

性格や用途不明のものは37点出土している。このうち、特徴的なもの４点を図示した。

第18表　Ⅰ・Ⅱ区出土古銭観察表

図版	銭名	グリット	遺構	層位	初鋳年（西暦）	時代	書体	備考	登録番号
1	乾元重宝	F－7		II層	乾元2年（759）	唐		26号土壙上	C－39
2	宋通元宝	E－2	31号溝	I層	建隆元年（960）	北宋			－25
3	咸平元宝	B－5	11号溝	2層	咸平元年（998）	〃			－12
4	天禧通宝	A－3	1号井戸	2層	天禧年間（1017～）	〃			－8
5	天聖元宝	B－5	11号溝	1層	天聖元年（1023）	〃	篆		－10
6	天聖元宝	B－2	15号溝	確認面	〃（〃）	〃	〃		－4
34	天（聖）元宝	F－7	21号溝	1層	〃（〃）	〃	真		－29
7	皇宋通宝	A－5	11号溝ベルト	2層	宝元2年（1039）	〃	篆		－18
8	〃	F－5	11号溝	底	〃（〃）	〃	〃		－27
9	嘉祐通宝	B－6	3号井戸	埋土下	嘉祐元年（1056）	〃	真		－19
10	〃	B－8		II層下	〃（〃）	〃	〃		－36
11	〃	F－7		II層下部	〃（〃）	〃	篆		－38
12	熙寧元宝？	B－4	11号溝	埋土	熙寧元年（1068）	〃	〃		－33
13	元豊通宝	B－5	〃	底	元豊元年（1078）	〃	真		－14
	〃？	〃	11号溝内ピット	埋土	〃（〃）	〃	篆		－21
14	紹聖元宝	B－6		III層	紹聖元年（1094）	〃	真		－17
—	〃	F－2	31号溝	底付近	〃（〃）	〃	篆		－23
—	元符通宝	A－5	11号溝	埋土上部	元符元年（1098）	〃			－15
15	聖宋元宝	F－7	21号溝	1層	建中靖国元年（1101）	〃	真		－28
16	〃	F－8	〃	〃	〃（〃）	〃	〃	縁	－32
17	政和通宝	A－3	11号井戸	埋土	政和元年（1111）	〃	篆		－7
18	〃	A－8	No19ピット	埋土	〃（〃）	〃	〃		－16
19	〃	F－8	21号溝	1層	〃（〃）	〃	真		－26
20	〃	F－6	〃	2層	〃（〃）	〃	篆	鉈銭	－30
21	〃	B－6	5号井戸	埋土上層	〃（〃）	〃	真		－41
22	淳祐元宝	F－7	21号溝	2層	淳祐元年（1241）	南宋		背十	－31
23	至大通宝	B－5	3号溝上ピット	埋土上部	至大3年（1310）	元			－20
24	永楽通宝	B－2		II層	永楽6年（1408）	明			－1
25	〃	A－7	1号溝	西壁密着	〃（〃）	〃			－5
26	〃	B－2	14号土壙	埋土下部	〃（〃）	〃			－9
27	〃	F－6	34号土壙	底	〃（〃）	〃			－24
28	〃	表採			〃（〃）	〃			－44
—	〃	E－7	21号井戸	黒色土最上部	〃（〃）	〃			－42
29	宣徳通宝	F－7	21号溝	2層	宣徳8年（1433）	〃			－43
30	寛永通宝	A－6	2号溝	埋土	寛永3年（1626）	江戸		古寛永？	－2
31	〃	〃	1号溝	2層	〃（〃）	〃		〃	－34
32	〃	〃	〃	〃	寛文8年（1668～）	〃		新寛永　正字文	－35
33	〃	〃	〃	〃	〃（〃）	〃		〃　〃	－40
—	大（　）（　）宝	B－2	15号溝	埋土上部				鉈銭	－11
—	判読不能	A－8	1号溝	2層					－6
—	〃	A－5	11号溝	埋土下部					－13
—	〃	B－2	16号溝	埋土上部					－3
—	〃	F－6	21号溝	埋土下部					－30
—	〃	A－2	15号井戸	埋土					－22
—	〃	A－5		II層					－37

第103図6は鉄製品で、形状が刀子に類似するが、本来このような形であったのかは判断できない。断面は片側が弧状になる部分があることから刀子ではないと考えられる。

同図7は両端では口径が異なる管状銅製品である。本例は銅板を管状に貼り合わせたもので、12条の沈線がある。この沈線は、口径の大きい方に向って間隔が狭くなっていく。箸（あるいは火箸）の金具にこれと類似するものがあるが定かではない。II期に属する。

第105図7は有孔銅製金具である。孔の反対側には小さな突起が認められる。15号溝より出土し、III期～IV期に属する。

第109図5は銅製の飾り鋲である。B－7区II層より出土した。時期や用途は不明である。

12．鉄塊・鉄滓・銅滓

小鍛冶に関するものとして鉄塊1点、鉄滓（鉱滓）23点、銅滓1点がある。

鉄塊

第103図8は鍛造直前段階の鉄塊と考えられる。9.15×7.15cmで、重量338.0gである。

鉄滓

鉄滓15点とコークス状の重量の軽い鉱滓（酸化分）８点が出土している。特にII区からの出土品が多い。Ⅰ期～IV期の各遺構から出土するが、特にIII・IV期の遺構出土のものが多い。遺構別の数量の差はほとんどないが、11号溝がやや多い。

銅滓

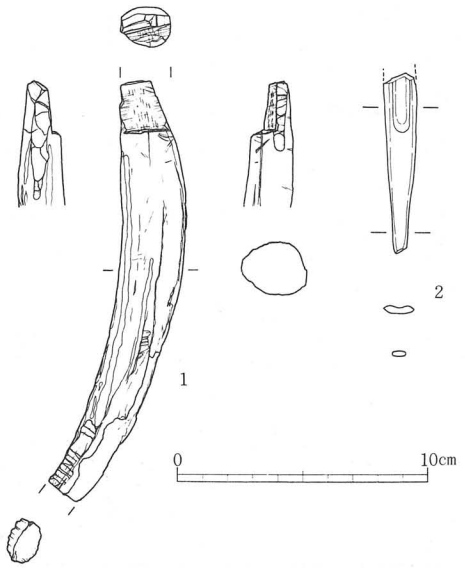
15号溝（III期）Ｂ－２区より１点出土している（第105図10）。重量42.9ｇである。

(10) 骨角器（第111図１・２）

１は21号溝（Ｆ－６区）溝底出土の鹿の角製の加工品であるが、性格不明である。長さ16.7cm、径は最大2.6cmである。先端部はカギ形に加工されている。形状は弓の弭に類似する。

２は14号井戸２層出土のイノシシの腓骨製の笄である。現在長7.3cm、最大幅1.2cmである。

その他に鹿角の枝角を切断したもの（図版34－11）がある。



第111図　21号溝跡・14号井戸跡出土骨角器

(11) 植物遺存体

植物遺存体は、すべての遺構から採集したのではなく、遺存体の保存の良好な遺構を選んで採集した。その際、各時期別の変化が理解できるように配慮したが、Ⅰ期の遺構からの採集は不十分であった。

サンプルは、水洗選別を行った後に、水洗を行なわないものと一緒に東北大学農学部作物学研究室に同定を依頼した。後に、水洗選別したものは、表皮が欠落するなど同定しにくくする結果となってしまった。したがって、土壌付着のまま同定を依頼する方が良いことがわかる。

植物遺存体の同定は、東北大学農学部教授星川清親氏、同大学文部技官庄司駒男氏にお願いした。改めてお礼申し上げたい。

さて、植物遺存体の同定結果は、第19、20表に示したが、調査者として気付いた点を列記してみたい。

○どの時期（Ⅰ～Ⅴ期）にも、およそ、モモ・クルミ・稲（籾）・麦が出土する。

○確実な大麦の出現はIII期からである（ただし、Ⅰ期の３号土壙からも大麦らしきものが出土している）。すでに、仙台周辺では山口遺跡の調査（佐藤洋：1981）などによって、平安

第19表　植物遺存体同定結果一覧表(I)

	遺構名	遺　構	層　位	時　期	種　別
1	B－5	7号井戸	埋　土	I　期	オナモミ、雑草？
2	F－6	23号井戸	8　層	〃	籾、籾殻塊、茶色籾殻、炭化籾、稲、麦稈・葉、雑草種子、モモ その他
3	B－8	3号土壙	最下層	〃	炭化米、大麦？
4	B－8	3 号 溝	－	〃	炭化米、雑草種子？、モモ(1個・炭化)
5	B－3	13号井戸	8層下グライ土層	I期～II期	モモ
6	A－1	17号土壙	5　層	〃	モモ（2個）
7	A－7	2号井戸	－	II　期	籾殻、黄色籾殻、稲ワラ、その他、炭化米、雑草種子？、豆類種子？
8	B－6	3号井戸	8　層	〃	クルミ（1個・炭化）
9	B－6	4号井戸	7層下	〃	モモ（1個）
10	B－4	9号井戸	埋　土(4～8層？)	〃	籾、黄化籾、麦稈・葉類、雑草種子？
	〃	〃	4　層	〃	モモ（1個）
	〃	〃	5　層	〃	〃　（2個）
	〃	〃	7　層	〃	〃　（3個）
11	A－2	15号井戸	埋　土	〃	〃　（1個）
12	B－5(ベルト)	11 号 溝	底	〃	？　（破片）
	E－4	〃	最下層	〃	クルミ（1個）
	〃	〃	最下層及びその上	II期～III期	クルミ（2個）、モモ（1個）
13	A－3	12号井戸	埋　土	III　期	〃　（1個・炭化）
14	B－5(ベルト)	11 号 溝	4　層	〃	モモ（1個）
	B－4	〃	11～14層	〃	茶色籾殻、小麦、炭化大麦、炭化米、雑草種子か(食用か?)、ハンノキ その他
	〃				クルミ2個（うち1個炭化）、木片、枯木？
	F－4	〃	北溝確認面	III期(前半)	ヒョウタン・殻・種子(茶色)、炭化米・その他、ソバ？、雑草種子、その他
	E－4	〃		III　期	ヒョウタン片・種子・殻？、籾、炭化雑草種子、その他
	〃	〃		〃	クルミ（1個）
	〃	〃	埋土上部	〃	モモ（1個）
	E－4	〃	グライ層	〃	クルミ（10個うち1個炭化）、モモ（2個）、その他（1個）
		〃	埋土下部	〃	クルミ（1個）、モモ（1個）、ヒョウタン種子・殻、雑草種子、その他
15	B－4	12 号 溝		〃	炭化籾殻、炭化米、炭化大麦
	〃	〃	ベルト3層	〃	炭化米塊、その他
	〃	〃	埋土下部	〃	籾、炭化籾、茶色籾殻、米、炭化大麦、麦稈？、稲葉・稈？、雑草種子
16	F－6	21 号 溝	埋土上部	〃	モモ（1個）
	〃	〃	10　層	〃	雑草種子（2～3種類）
	〃	〃	埋土下部	〃	炭化麦か稲の稈？、炭化米、炭化大麦、雑草種子（タデ、イヌビエ、カナムグラ、オナモミ）
					モモ（2個）
17	F－4	27 号 溝	埋　土	〃	クルミ（1個）
18		28 号 溝	1　層	〃	ブナ殻斗（1個）、炭化米、大麦・小麦？、その他
19	B－2	16 号 溝	最下層	〃	炭化米、大麦、小麦？、稲稈・葉
20	B－2	31 号 溝	上　層	IV　期	クルミ、ヒョウタン種子殻、雑草（ソバ状雑草？）
	〃	〃	2　層	III～IV期	大豆、炭化大豆、炭化麦稈、炭化米、大麦、雑草種子、その他
	〃	〃	3　層	〃	炭化米、その他多数（$\frac{1}{2}$米、$\frac{1}{4}$大麦、$\frac{1}{8}$小麦、大豆）、クルミ
	〃	〃	埋土下部	III　期	クルミ（1個）
	〃	〃	20～23層(グライ層)	〃	クルミ（1個）
21	A－3	11号井戸	埋土下部	IV　期	籾殻、黄色籾殻、稲藁葉？、モモ（3個）
22	E－7	20号井戸		〃	籾殻、麦稈・葉、雑草種子？

第20表　植物遺存体同定結果一覧表(2)

	遺構名	遺　構	層　位	時　期	種　別
22	E－2	26号井戸		IV　期	麦・稈・葉、稲藁・稈、籾殻、ソバ、炭化大豆、炭化小豆、炭化大麦、炭化米、茶色籾殻、雑草
23	F－2	27号井戸	下　層	〃	モモ（1個）
24	A－3	9号土壙	埋　土	〃	モモ（1個）
25	B－2	14号土壙	5　層	〃	炭化米、大麦、小麦、雑草種子、その他
	〃	〃	埋土(中位)	〃	籾、籾殻、麦稈・葉（稲の葉か）
26	〃	32号土壙	埋土1層	〃	炭化米、大麦、大豆、雑草種子
	〃	〃	埋土5層	〃	炭化米塊・その他、炭化籾塊、大豆、大麦、小麦、雑草種子
27		1号溝		〃	モモ（1個）
	A－7	〃	上　層	IV期～V期	モモ（8個うち1個炭化）、クルミ（1個）
	A－5、7・8	〃	3　層	IV　期	モモ（1個）、クルミ（2個）、その他
	A－7	〃	最下層	〃	モモ（1個）
28	B－2	16号溝	埋土上部	〃	クルミ（1個）
29	F－5	26号溝	1　層	〃	炭化米、大麦、大豆、小豆？、エゴマ？
	〃	〃	2　層	〃	炭化米、大麦、大豆、エゴマ？、雑草種子？
	〃	〃	3　層	〃	炭化米、小麦、大麦
30	F－2	31号溝	1　層	〃	炭化米、大麦、小麦？

時代後半には大麦・小麦の存在が確認されている。

○ソバ・ヒョウタンもIII期から出現するようである。

○大豆がIII～IV期、稲藁・アズキ・エゴマ？がIV期に出現している。このうち、大豆・アズキは前述した山口遺跡に出土例があり、平安時代後半にはすでに出現している。

○クリやドングリ類はV期の井戸跡（III区）から出土している。

○炭化したものは米が多く、他に大麦・大豆などがある。出土当初から炭化状態のものと、取り上げ後に色調が変化して、黄色や茶褐色に変化したものがある。

○調査時には、9号井戸から多量の草木類の出土があり、また、32号土壙の最下層からは、多量の炭化物が出土している。

以上、気付いた点を示したが、このうち、モモ・クルミ・ヒョウタンなどは城館の内外に植えられていたものであろう。ソバ・アズキ・大麦・小麦が出土することは、城館の内外に畑が存在していたことを証明するものであろう。

樹種同定結果について

樹種の同定については、尚絅女学院短期大学教授木村中外氏・東北大学植物園内藤俊彦氏に

お願いした。また、両氏の同定種以外のものは、奈良国立文化財研究所（埋文センター）光谷拓実氏に肉眼観察をお願いした。改めてお礼申し上げたい。

さて、漆器の樹種については、同定以前にブナ等の広葉樹を予想していたが、ほぼ同様の結果となった。現在の会津（福島）・川連（秋田）・鳴子（宮城）では、ブナ・トチ等の広葉樹を利用しており、中世段階の樹種の選択とほぼ同一と言える。また、同定の結果、現在の東北北部の能代春慶（秋田）・津軽（青森）では、主にヒバを利用していることを考慮すれば、本遺跡の漆器は、およそ東北中部以南において製作された可能性が考えられよう。

また、光谷氏の観察結果では、橋脚・下駄には樹種の選択性はないようで、前者はクリ・サクラ・ケヤキ、後者はケヤキ・ヒノキ・キハダ・マツが使用されているようである。曲物は、スギが多いが、以外にヒノキ（底板）が使用されている例がある。また、木簡・物忌札はヒノキらしい。ところで、木村・内藤両氏の指摘では、ヒノキは福島以南から持ち込まれたと予想されているが、これは非常に興味ある問題である。当時の活発な商業活動を知る手がかりとなる。しかし、中世以前に当地方のヒノキの存在の有無を明確にしておく必要があろう。

(12) 動物遺存体

動物遺存体は、哺乳類が平箱３箱分、魚貝類がビニール袋（小）で17袋分出土した。実際の出土数はさらに増える。

これらは東北大学院生高橋理氏に同定をお願いした。改めてお礼申し上げたい。なお、同定結果は高橋氏報文を参照されたい。

遺存体は調査開始時の予想をはるかに上回る出土量であった。調査時の所見では、11号溝（II区）の橋脚付近から多く出土している（第45図）。魚骨はIII期の16号溝（Ｂ－２区）の出土のものに限られる。また、11号溝出土の貝類は、溝底の砂地より検出されたもので、食料にされたものでなく、堀に生息していた可能性が強い。

また、特に注目したいものは、33号土壙内のピットより出土した馬歯である。33号土壙は皿状で底面の硬い特徴をもつ。また、この土壙は20号掘立柱建物跡とほぼ同時期と考えられる。したがって、想像をたくましくすれば、33号土壙は20号掘立柱建物跡の付属施設と考えられ、馬歯の出土から、この建物には馬屋が付属していた可能性も考えられる。

第Ⅳ章　Ⅲ区の調査

1．はじめに

Ⅲ区の調査は、宅地開発に伴って試掘調査を行なった。すでに調査前に盛土がなされており、試掘トレンチは壁の崩壊が著しい。

さて、トレンチはA～Eトレンチの5ヶ所を設定した(第112・113図)。各トレンチは、A 1.5×3.5m、B 1.5×4.5m、C 1.5×4m、D 1.5×6m、E 7×13mである。すでに調査中に一部造成が開始されており、変則的なトレンチ設定となってしまった。

調査は、昭和56年5月6日から同年6月11日の約1ヶ月間行なった。この試掘調査ではA～Dトレンチは遺構の確認調査とし、Eトレンチは精査を行なうことにした。基本層序はすでに第Ⅱ章2基本層序で扱っている（第4図)。

2．トレンチの状況（第112図）

ここでは、A～Dの各トレンチの状況を扱い、Eトレンチについては後述する。

（Aトレンチ）　このトレンチでは、ピット（あるいは土壙）5個、南側では東西にのびる溝1条を確認した。

（Bトレンチ）　このトレンチでは、ピット（あるいは土壙）4個、井戸と考えられるもの2基、東西に伸びる細い溝1条を確認した。

（Cトレンチ）　このトレンチでは、中央部に土塁状の高まりとこれに西側で接する南北に伸びる溝1条を確認した。溝上部より無釉擂鉢が1点出土した。溝に重なるように現在でも小さな堀がある。

（Dトレンチ）　このトレンチでは、何ら遺構は検出されていない。

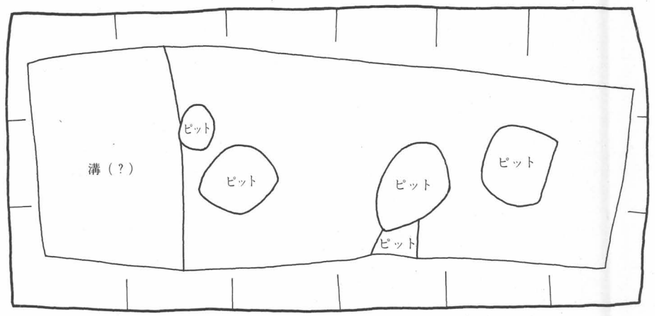
3．Eトレンチの検出遺構（第113図）

このトレンチでは、井戸跡10基、溝4条、柱穴2個、ピット2個が検出された。東側の2号溝があるためか、層位は東側に傾斜していく。各遺構の特徴は第25表に示した。

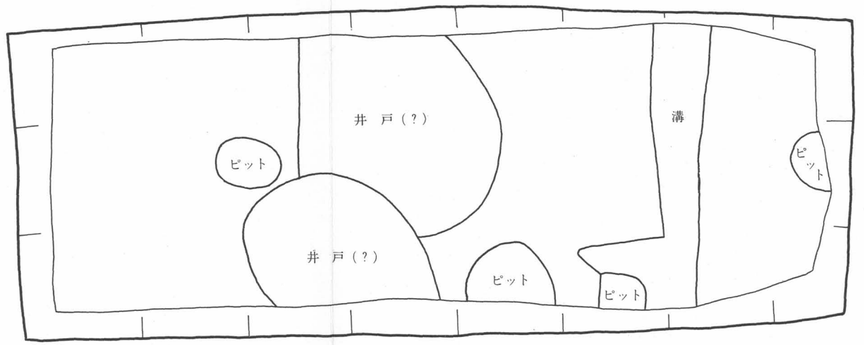
井戸跡

Eトレンチでは、Ⅰ・Ⅱ区より湧水が激しく、井戸跡は底まで十分な調査を行なうことができなかった。Eトレンチでは小型の井戸はほとんどなく、1号井戸跡（B類）だけである。2～10号井戸跡はC類・D類に属するものと考えられる。特に10号井戸跡は大型で直径はおそらく2mを起すものと予想される。遺物の出土状況は以下のようになる。

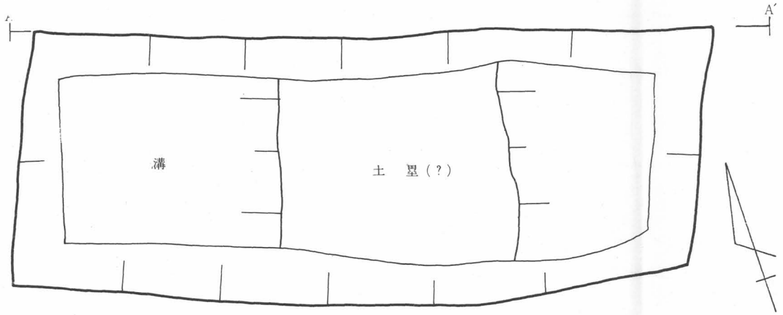
Aトレンチ

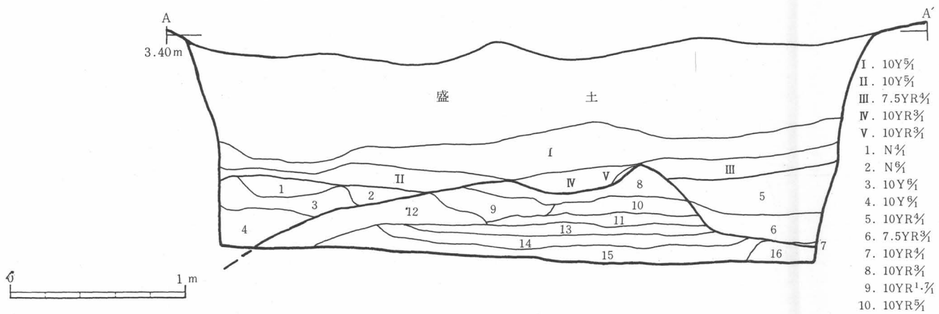


Bトレンチ

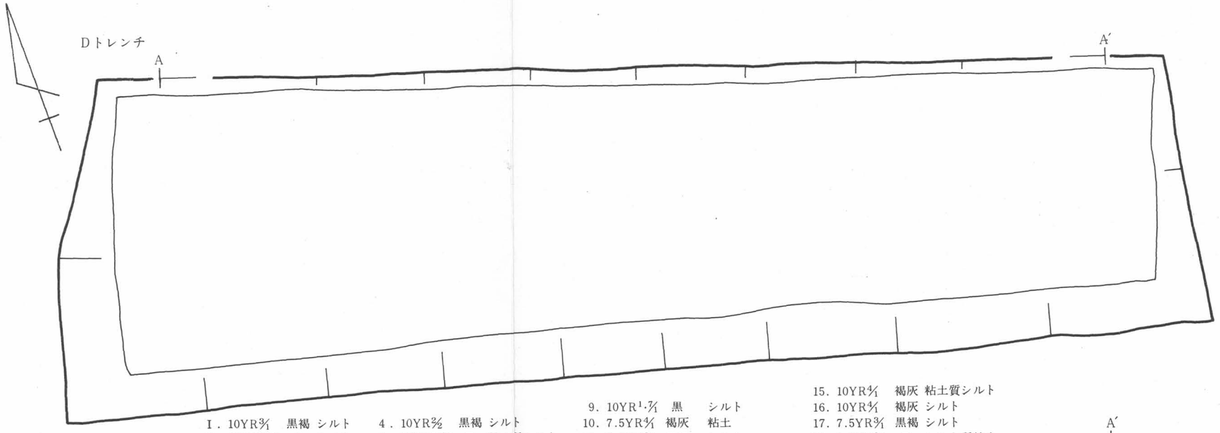


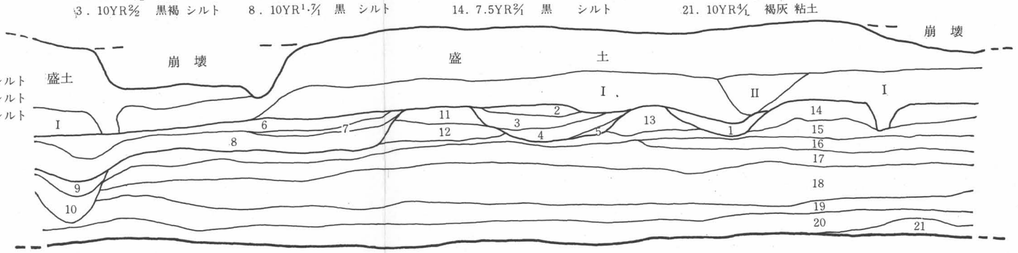
Cトレンチ





Dトレンチ

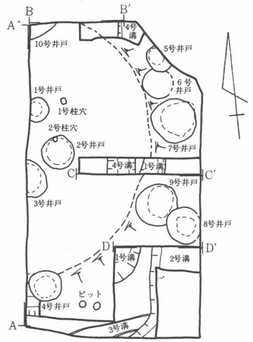


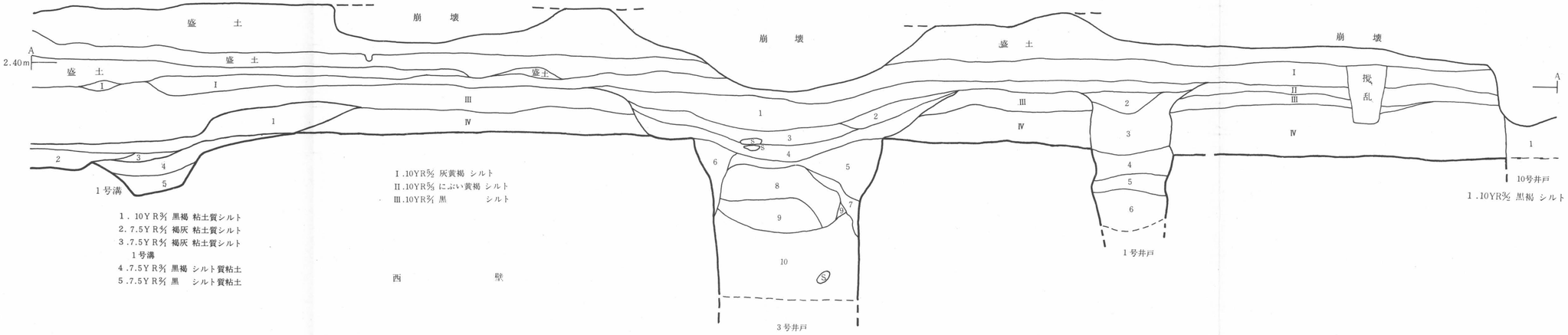


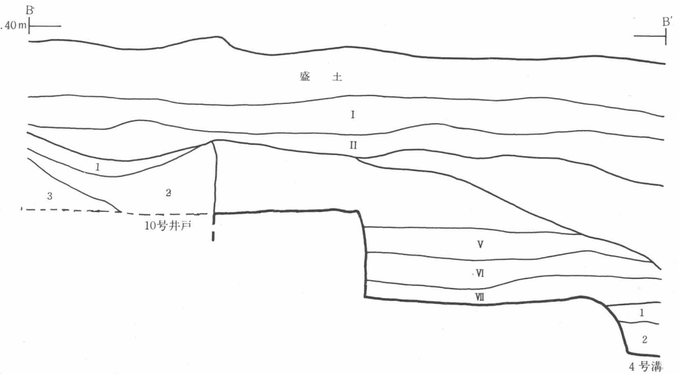
Ⅰ．10YR5/1 黒褐 シルト
Ⅱ．10YR1.7/1 黒 シルト
1．10YR5/1 黒 シルト
2．10YR5/2 黒褐 シルト
3．10YR5/2 黒褐 シルト
4．10YR5/2 黒褐 シルト
5．10YR1.7/1 黒 粘土質シルト
6．10YR5/1 褐灰 粘土質シルト
7．10YR1.7/1 黒 シルト
8．10YR1.7/1 黒 シルト
9．10YR1.7/1 黒 シルト
10．7.5YR5/1 褐灰 粘土
11．7.5YR5/1 黒褐 シルト
12．10YR5/2 灰黄褐 シルト質粘土
13．10YR5/1 黒 シルト
14．7.5YR5/1 黒 シルト
15．10YR5/1 褐灰 粘土質シルト
16．10YR5/1 褐灰 シルト
17．7.5YR5/1 黒褐 シルト
18．7.5YR5/1 黒 シルト質粘土
19．10YR5/1 黒 砂質シルト
20．10YR1.7/1 黒 粘土
21．10YR5/1 褐灰 粘土

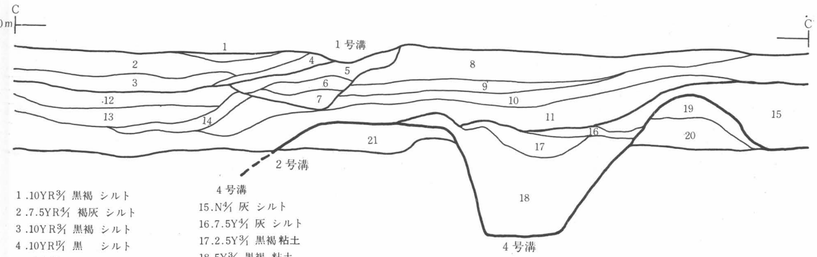
1．10Y5/1 褐灰 粘土質シルト
2．10Y5/1 褐灰 粘土質シルト
3．7.5YR5/1 褐灰 粘土質シルト
4．10YR5/1 黒褐 シルト
5．10YR5/1 黒褐 砂質シルト
1．N5/1 灰 粘土質シルト
2．N5/1 灰 シルト質粘土
3．10Y5/1 灰 粘土質
4．10Y5/1 灰 粘土質シルト
5．10YR5/1 褐灰 粘土質シルト
6．7.5YR5/1 黒褐 粘土質シルト
7．10YR5/1 褐灰 粘土質シルト
8．10YR5/1 黒褐 粘土質シルト
9．10YR1.7/1 黒 砂質シルト
10．10YR5/1 褐灰 シルト質粘土
11．2.5Y5/1 黒 シルト
12．10YR5/1 褐灰 粘土質シルト
13．10YR5/1 黒 粘土質シルト
14．10YR1.7/1 黒 粘土質シルト
15．10YR5/1 黒 シルト
16．10YR1.7/1 黒 シルト

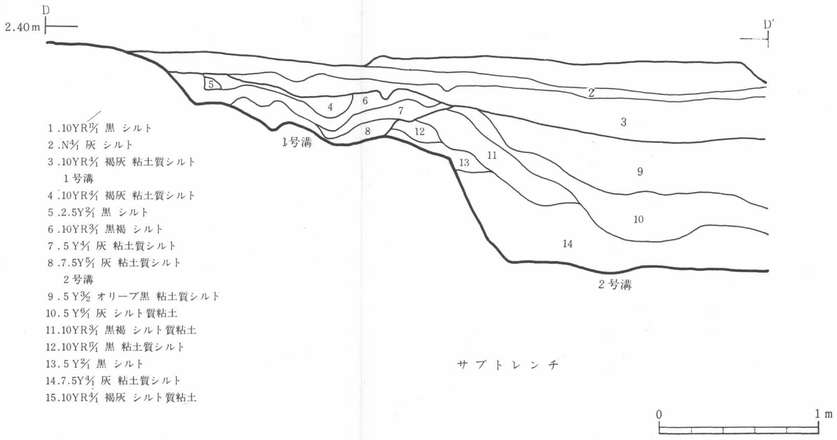
第112図 A・B・C・Dトレンチ実測図











0　5m

0　1m

第113図　Eトレンチ遺構配置図、Eトレンチ西壁・北壁・サブトレンチ実測図

1号……漆器
2号……煙管、唐津、肥前磁器・上野目など
3号……手塩皿（切込？）、徳利など
4号……鉄釉鉢（向付）
5号……肥前磁器（皿）
6号……唐津・肥前磁器・相馬・上野目？など
7号……遺物なし
8号……木箱・漆器（板物）
9号……唐津・土師質土器・漆器
10号……遺物なし

これらの井戸跡の中で、出土遺物の内容から9号が最も古いと考えられ、Ⅳ期に属するものと考えられる。Ⅴ期に属すると考えられるものは、2号・3号・5号・6号がある。1号・4号・7号・8号・10号については、明確な時期決定はできないが、これらも、およそⅤ期の井戸跡と考えられる。Ⅴ期の井戸跡でも切込焼や上野目焼を出土するものは、後半と考えてよいであろう。

溝

溝は4条確認された。これらの溝は井戸跡よりも古い。各溝の特徴は第25表に示した。

1号溝

1号溝は円を描くように続く溝で、井戸跡の中で最も古いと考えられる9号井戸跡に切られる。溝中から唐津と考えられる碗の破片が出土していることから、Ⅳ期後半の年代が考えられる。この溝は、4条の溝のうち、切り合い関係からも新しいことが判明している。性格については不明である。

2号溝

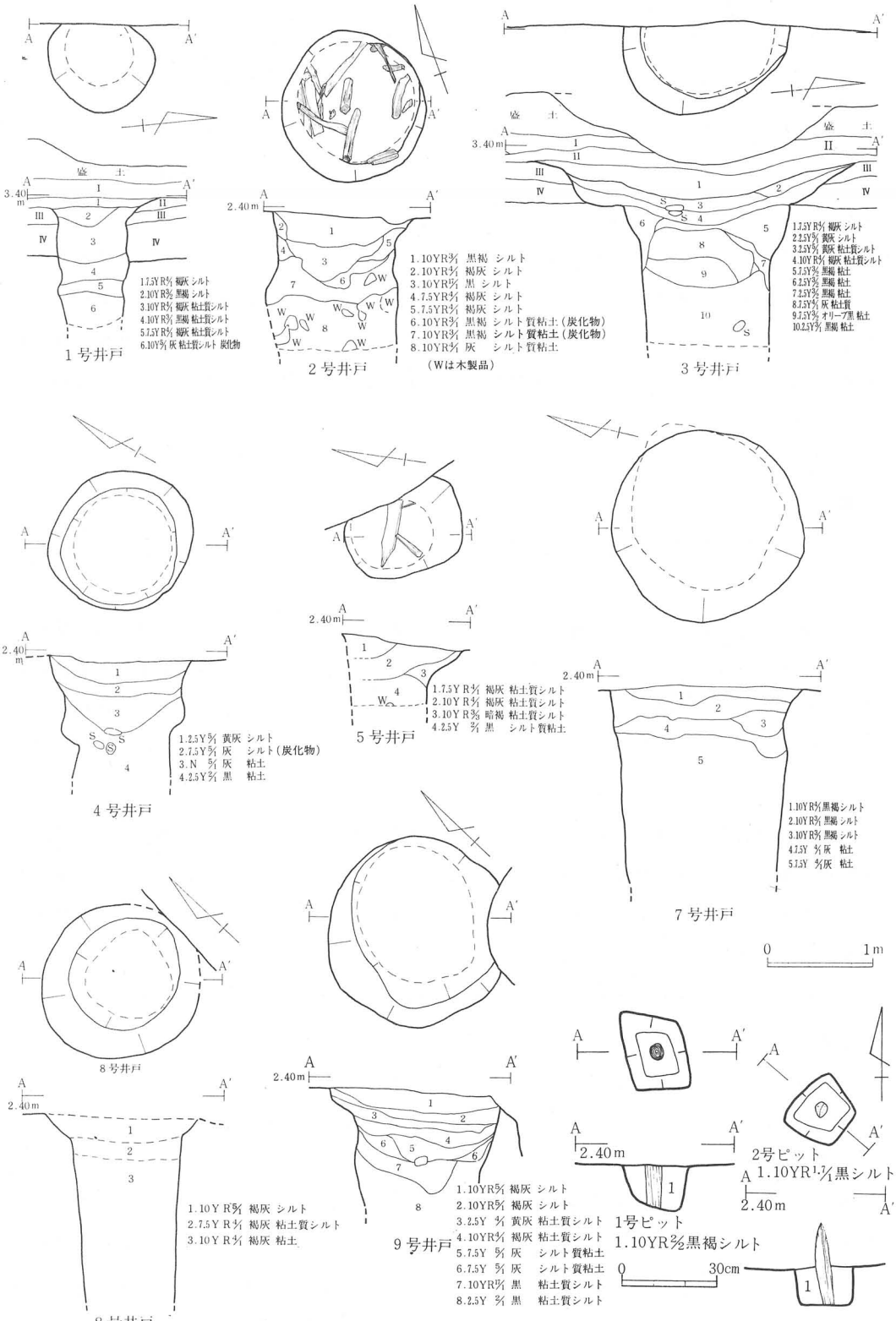
この溝はⅣ層上面で検出され、ごく一部だけの調査に留まったので、その内容については不明な点が多い。深さは確認面から80cmを測る。切り合い関係から1号溝（Ⅳ期）以前の溝である。この溝は南北にのびる溝であるが、南端では西側に曲がることが確実である。Ⅰ・Ⅱ区と外堀のほぼ中間付近では南側が一段低くなることから、少なくともその付近まで伸びていることが予想される。中世のいずれかの時期の館を区画する堀であろう。遺物の出土はない。

3号溝

この溝も、ごく一部を確認したにすぎず、その内容は不明な点が多い。この溝は2号との切り合い関係があるが、ほぼ同時期か古いものと考えられる。遺物の出土はない。

4号溝

この溝は、サブトレンチ内でⅦ層上面より検出された南北に伸びる溝である。しかし、調査区南部では確認できない。したがって、1号溝の手前で止まるか、西側に伸びるものと予想される。遺物の出土はないが、層位的には、Eトレンチ内の遺構中最も古い中世の溝と考えられる。この溝の西側では、畦畔状の高まりが確認されている。



第114図　Eトレンチ・井戸跡・ピット実測図

柱穴・ピット

Eトレンチでは、中央よりやや北側で柱材を伴う柱穴が2個確認されている（第114図）。柱穴は約20×20cmの掘り方があり、いずれも直径約5cmの柱材が出土した。V期の柱穴である。遺物の出土はない。ピットは南側で2個確認されている。いずれも直径20～30cmである。遺物の出土がなく時期も明確ではない。

4．遺物

III区出土遺物には、陶磁器・土師質土器・瓦質土器・金属製品・木製品などがある。大半はEトレンチの井戸跡よりの出土品である。

陶磁器

陶器

陶器は合計35点出土した。器種は碗・向付（？）・擂鉢・壺がある。

第115図1は9本単位の櫛目をもつ擂鉢で、口唇部が外へ折れ曲がる。本例はI・II区出土の第64図5・7と極めて類似する。およそ16世紀～17世紀のものであろう。同図2は6本単位の櫛目をもつ無釉擂鉢である。内面は燻焼となり、胎土中に白針を含む。およそ16世紀～17世紀初めのものであろう。同図3は4本単位と考えられる櫛目をもつ無釉擂鉢で、口縁部は縁帯をもつ。焼成は甘い。およそ江戸中期以後のものであろう。同図4は口唇部が折れ曲がる無釉の擂鉢と考えられる。外面は燻焼である。胎土中には金雲母を含む。およそ16世紀～17世紀初めの県内産のものであろう。同図5は口縁部内外側に、オリーブ黒色の鉄釉がかけられた擂鉢である。櫛目の単位は不明である。I・II区の第65図1・5と同一の生産地と考えられるが、産地は不明である。I・II区ではIV期の遺構に伴って出土していることから、16世紀～17世紀初めのものと考えられる。第116図4は内外面に鉄釉のかけられた小鉢あるいは向付と考えられる。底部は糸切り痕を留める。県内産のものであろうか。江戸時代のものであるが、詳細は不明である。同図5は灰オリーブ色の透明度の高い釉がかけられ、胴部上半は白色化粧土に浸している。畳付は露胎となり、砂粒の付着がみられる。およそ17世紀初めの唐津碗である。同図6は明オリーブ灰色の釉がかけられた小型の碗である。施釉部分と露胎部の境は、褐色に変化しており、上野目焼（宮城県岩出山町）と考えられる。およそ19世紀初めに前後する時期であろう。同図7も前述の6と同様、上野目焼の碗である。釉は明緑灰色を呈する。およそ19世紀初めのものと考えられる。その他に、唐津・相馬・上野目ではないかと考えられる碗、唐津・上野目（左に傾く飛鉋）の壺、産地不明の鉄釉擂鉢などがある。

磁器

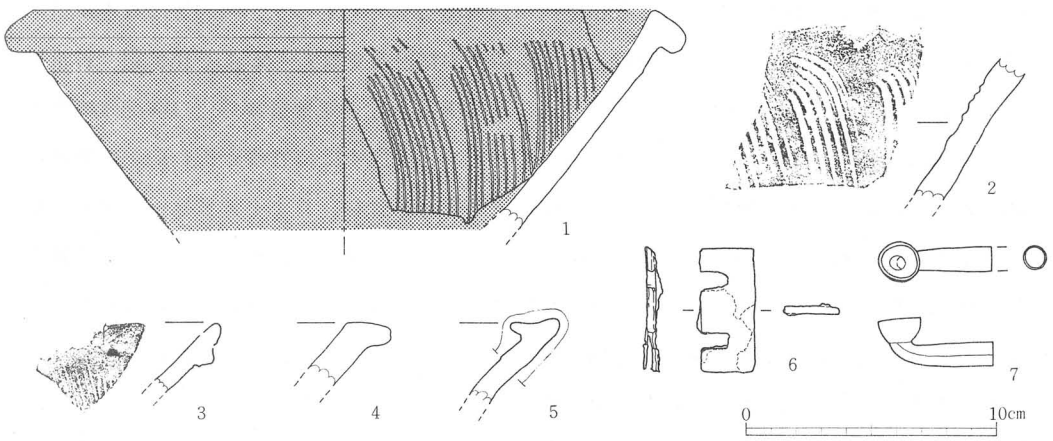
磁器は合計９点出土し、肥前・切込（？）等が出土している。

第116図１は型作りの手塩皿である。破損部分を半透明の接着剤（膠？）で接合している。切込に類似し、およそ19世紀初めの製品であろう。同図２は見込みに鹿の絵を描いた皿である。およそ17世紀後半の肥前の製品と考えられる。同図３は内面に菊花文を描く皿である。生産地は肥前かどうか判然としない。およそ19世紀以後のものであろう。同図８は染付徳利と考えられる。染付文様はどのようなものか不明である。施釉は外面だけで、内面は露胎となる。胎土は極めて特徴的で、白地に灰色の斑点が多量にみられる。その他に肥前の碗・皿、切込（？）の碗等が出土している。

土師質土器

土師質土器は９号井戸から出土した１点だけである。

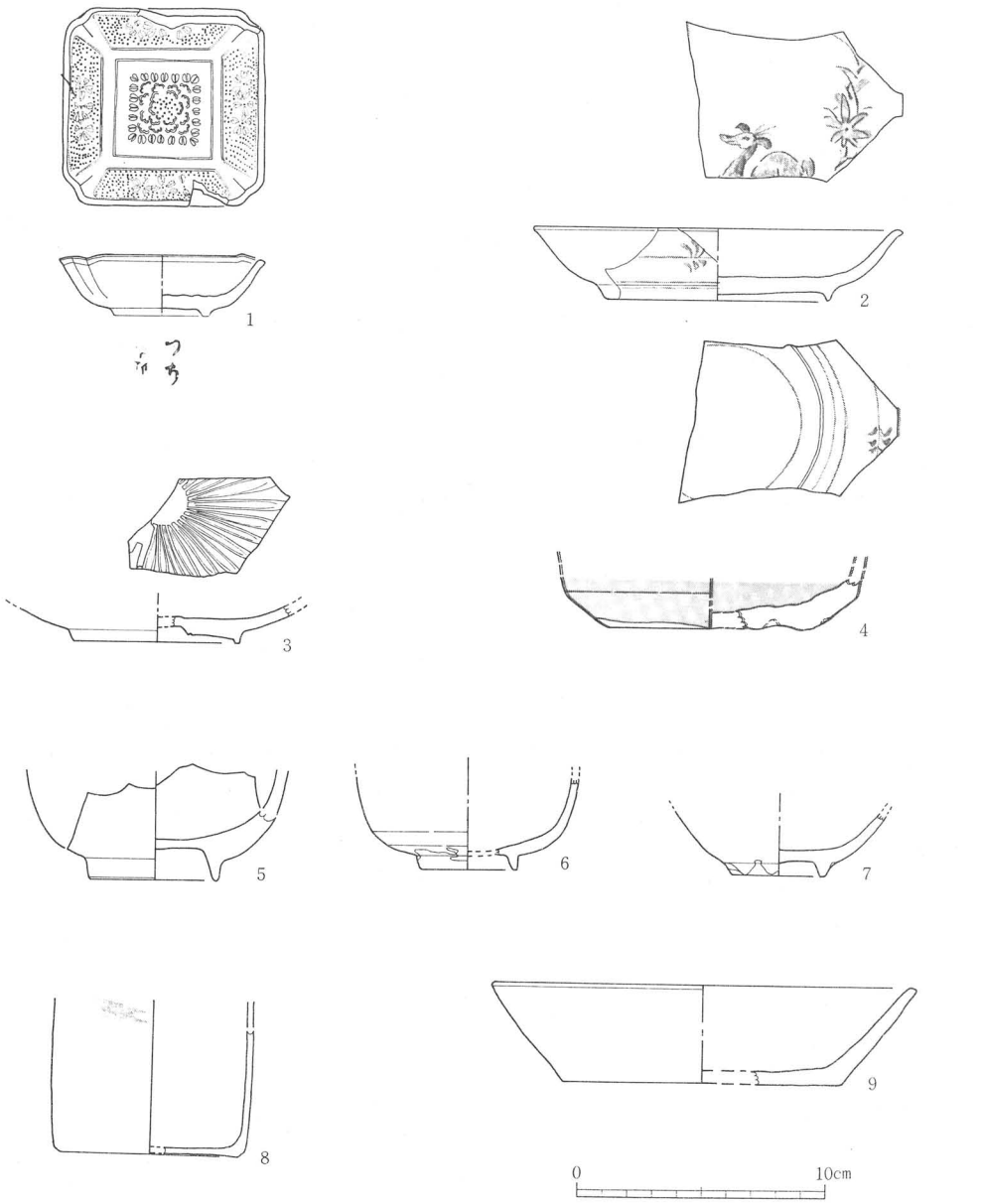
第116図９は外傾して立ち上がる皿で、口径に対して底径が大きい。他の遺物から判断して、江戸時代初め頃のものであろう。



図版	グリット	遺構	層位	取上番号	種類	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	Eトレ	９号井戸	埋土		陶器	擂鉢	口縁～胴部	県内	Ⅳ期	鉄釉(黒褐 2.5Y3/)	櫛目９本単位
2	Cトレ	西側溝	〃	32	〃	〃	胴部	不明	〃		櫛目６本単位
3	Eトレ	６号井戸	埋土上層	27	〃	〃	口縁部	〃	Ⅴ期		
4	〃	〃	埋土	3	〃	鉢	〃	〃	〃		金雲母含む
5	〃	２号井戸	〃	24	〃	擂鉢	〃	〃	〃	鉄釉(オリーブ黒 5Y3/2)	

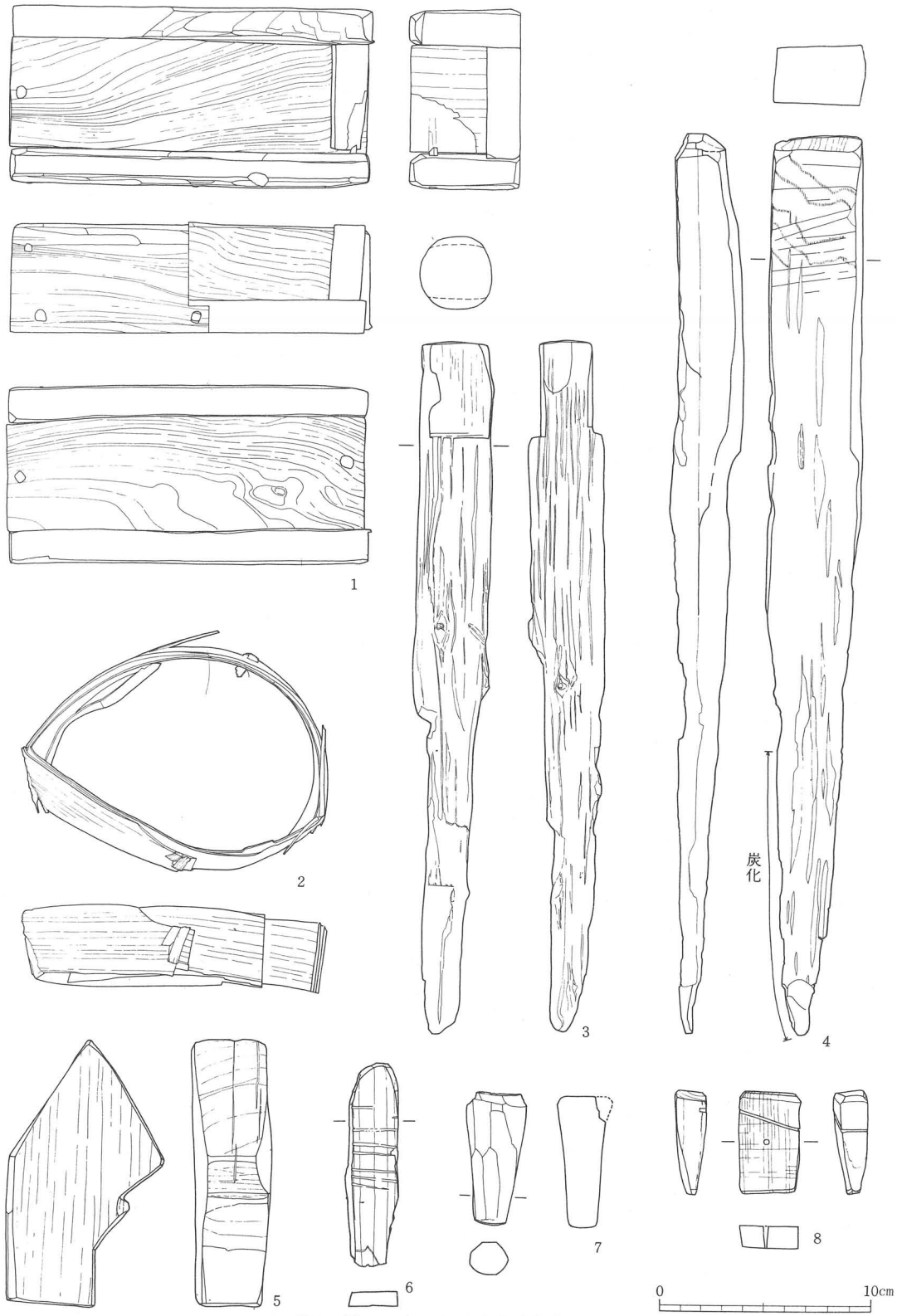
図版	グリット	遺構	層位	種類	材質	時期	寸法 長さ(cm)	(寸)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ (g)	(匁)	備考	登録番号
6	Eトレ		遺構面下層		鉄	Ⅴ期	4.95	1.5	2.3	0.65	9.1	約2.42		
7	〃	２号井戸		煙管	真鍮	〃	4.55	1.37			7	約1.86	羅宇側　内径1.3cm、外径1.6cm、吸い口側　内径0.9cm、外径1.0cm	

第115図　Eドレンチ出土陶器・金属製品



図版	グリット	遺構	層位	取上番号	種類	器形	部位	産地	時期	釉	備考
1	Eトレ	3号井戸	1層	14+17	磁器	手塩皿	口縁～底部	不明	V期	透明釉	破片を半透明の接着剤で掛合している。型作り。 高台内にうるし書き(赤色)の文字がみられる「つち口」
2	〃	5号井戸			〃	皿	〃	肥前	〃	〃	貫入あり　文様 内面 鹿＋草花文　外面 草花文
3	〃	試掘		9	〃	〃	底部	〃	〃	透明釉(明青灰5B7/1)	内面に菊花の文様をけずりこむ
4	〃	4号井戸		20	陶器	皿or向皿	〃	県内	〃	鉄　釉(暗赤褐 7.5R3/2)	外面に工具跡(？)あり　底部 回転糸切り
5	〃	9号井戸	3層		〃	碗	胴部～底部	唐津	Ⅳ期	透明釉(灰オリーブ 7.5Y5/2)	貫入あり　胴部上半は白化粧土で浸している。 高台は砂粒子が付着している。
6	〃	6号井戸	埋土上部		〃	〃	〃	上野目	V期	(明オリーブ灰2.5GY7/1)	貫入あり　胎土は磁器に似る。
7	〃	〃	〃		〃	〃	〃	〃	〃	(明緑灰 7.5Y7/1)	貫入あり
8	〃	3号井戸		7	磁器	徳利	〃	不明	〃	透明釉	破片に透明な接着剤がみられる。 外面に薄いブルーの染付がみられる。
9	〃	9号井戸			土師質土器	皿	口縁～底部		〃		内面 ロクロナデ　外面 ロクロナデ　底部回転糸切り

第116図　Eトレンチ出土陶磁器



第117図　Eトレンチ出土木製品

瓦質土器

内外面を燻焼した破片が１点出土している。器種は不明である。細片のため図示できない。

金属製品

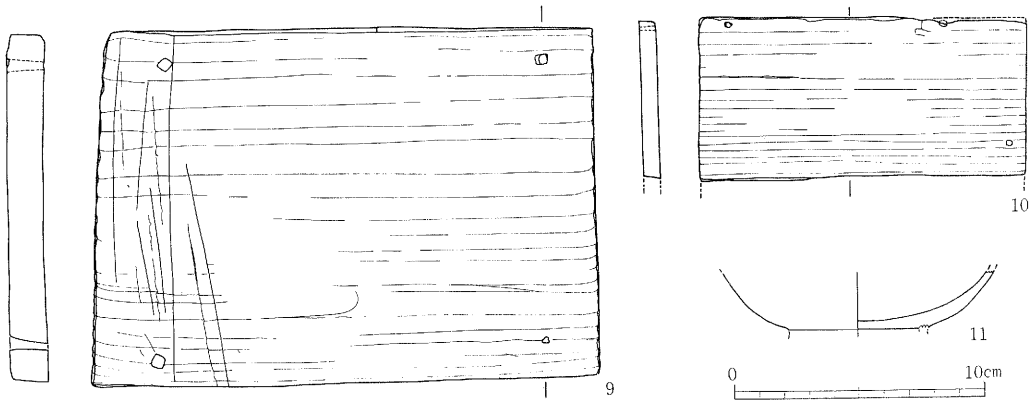
Ⅲ区出土の金属器は、わずか２点の出土で、Ⅰ・Ⅱ区とは対照的である。

第115図６は「E」字型の鉄製品である。用途は不明である。およそ江戸時代あるいはそれ以後のものと考えられる。同図７は２号井戸出土の煙管の雁首である。真鍮製と考えられ、火皿部は大きい。

木製品

木製品は合計33点出土した。このうち、６号井戸とともに最も出土数（12点）が多い。種類は自然木が最も多く、次いで削片、切片など木片が多い。

第117図１は板目材を使用した木箱で、木釘で打ち止めしている。用途は不明である。江戸時

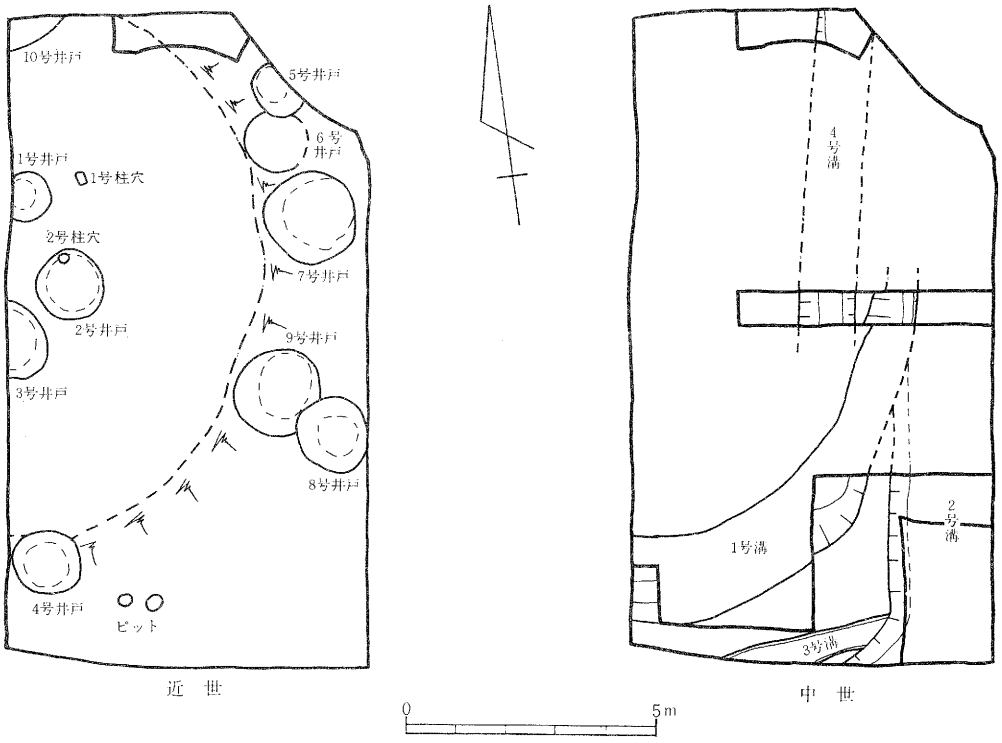


木製品観察表

図版	グリット	遺構	層位	種類	木取り	時期		登録番号
1	Eトレ	8号井戸	埋土	箱	板目	V期	長さ17cm×幅8cm×高さ5cm、深さ3.5cm、材の厚さ1.5cm。釘穴が一方の長い側板に４個、他方に５個、底板に２個あり、それぞれに木釘が残ってる。一方の短い側板が欠落。一枚の板から出来ている。	2
2	〃	4号井戸	〃	曲物(側板)	柾目	V期？	直径約12～13cm、厚さ0.1～0.2cmの板が2重にまいてあり、幅0.5cmのとじ皮で止めている。	22
3	〃	表採		杭			長さ33cm、直径３cm。	4
4	〃	2号Pit	〃	〃		V〃期	長さ43cm、幅４cm、厚さ2.5cm、先端より½焼けている。削痕あり。	3
5	〃	6号井戸	〃	切片？	柾目	V期前半	長さ12cm、幅７cm、厚さ３cm、両側縁に削痕あり。	30
6	〃	4号井戸	〃	板状木製品	枝目	V期？	長さ9.8cm、幅２cm、厚さ0.3cm、側縁に削痕、一方の面に傷あり。	13
7	〃	6号井戸	〃	栓		V期前半	長さ６cm、大直径2.8cm、小直径1.4cm、細い方の先端部は丸味がある。全体に削痕あり。	17
8	〃	6号井戸	埋土上層	楔？	板目	〃	長さ4.7cm、幅2.7cm、厚さ1.2cm、切り込みが斜めに入っており、深さ0.2～1.2cmである。中心に貫通孔あり。	26
9	〃	6号井戸	埋土	孔板状木製品	柾目	〃	長さ20cm、幅14cm、厚さ1.3cm、片面に削痕あり。四隅に方形の釘穴があり、１ヶ所に木釘が残存。	1
10	〃	8号井戸	〃	孔板状木製品	〃	V期	長さ13cm、厚さ0.65cm、釘穴３個（１個は欠損）あり、２個に木釘が残存。黒漆が片面に塗ってあり焙んど剥離している。他方の面の一部に漆が残存。	21
11	〃	1号井戸	〃	漆器(椀)	横木	〃	底径5.5cm、内面朱漆（うるみ色）、外面、黒漆。漆が剥離している。ブナ	405

第118図　Eトレンチ出土木製品

代（Ⅴ期）の遺物であろう。同図２は曲物の側板である。側板は２重に巻いている。１号溝(Ⅳ期）を切る溝から出土していることからⅤ期のものと考えられる。同図３・４は杭と考えられる木製品で、杭の頭部には３が削痕、４が凸形の加工痕がそれぞれ認められる。このうち、４はピットから出土したが柱材とは考え難い。先端部から⅓が焼けている。同図５は形が特異な板材で切片と考えられる。同図６は板状木製品で、頭部あるいは先端部と考えられる部分は楕円形を呈し、削痕が認められる。片面には側縁に直交する傷痕が７条認められる。用途不明。同図７・８はそれぞれ栓と楔（？）と考えられる。第118図９・10は有孔板状木製品で、孔には両者とも木釘の残片がある。９は何かの部材と考えられ、これ一つで完形品にはならないと考えられる。10は片面と木口面の一部に黒漆が塗られており、重箱や箱膳のような箱状のものの破片と考えられる。同図11は横木取りの漆器椀である。外面は黒漆、内面は赤漆（うるみ色）が塗られている。高台は低く、器厚は薄い。文様は認められない。



第119図　時期別遺構配置図

5．まとめ

Ⅲ区の調査は不十分ながらも、貴重な発見があった。すなわち、Ⅳ期あるいはそれ以前の溝が検出され、特にCトレンチの土塁状の高まりを伴う溝、そして、Eトレンチの2号溝は注目される。これらはⅠ・Ⅱ区の1号溝あるいは21号溝とほぼ平行関係を示すようである。Eトレンチの調査では、およそⅣ期を境として大きく2時期（第119図）の変遷を知ることができた。

また、その後（Ⅴ期）に展開された井戸跡群も、当地の江戸時代の農村の実態を知る貴重な手がかりとなろう。今回の調査では、農村部においても陶磁器が豊富に供給されていたことが理解される。特に、後述するごとく、六郷周辺は藩制初期には、相馬の武士が帰農したといわれ、今回の相馬焼の出土、あるいは昭和54年度の調査においても相馬焼が出土していることは両者の関係を知る上で注目されよう。

第21表　Ⅰ・Ⅱ区溝一覧表

溝名	旧名称	幅 上端最大幅 / 下端最大幅cm	深さ 最大 / 最小cm	時期	備考
1号溝	1号溝	225 / 45	113 / 64	Ⅳ～Ⅴ期	11号溝、1号井戸を切る。瀬戸瓶子、亀志野皿、御深井釉皿、唐津碗、元の天目茶碗、明の染付皿と直磁皿
2 〃	2号溝	54 / 65	17 / 5	Ⅳ期	ほぼ1号溝と同時期かやや古い。4号溝を切る
3 〃	9号溝	推定 73 / 34	推定 74 / 推定 32	Ⅰ期	9号溝に切られ6号溝を切る。常滑甕、渥美鉢
4 〃	24(11)号溝	79 / 67	26	平安時代	1号溝、3号土壙に切られ8号溝を切る
5 〃	—	60 / 計測不可能	計測不可能		1号溝、4号溝に切られる。元の青磁
6 〃	22(38)号溝	57 / 21	23	平安時代	4号溝、6号掘立柱建物に切られる
7 〃	26号溝	91 / 計測不可能	8	平安時代	6号掘立柱建物に切られる
8 〃	25(37)号溝	90 / 43	34 / 13	平安時代	火山灰あり、8号掘立柱建物に切られる
9 〃	13号溝	110 / 75	68.5 / 11.7	Ⅱ～Ⅲ期	9号掘立柱建物、1号溝に切られる。瀬戸大目茶碗
10 〃	14(7)号溝	220	85	Ⅳ期	11号溝、9号溝を切る
11 〃	7号溝	380 / 80	130.4 / 108	Ⅱ～Ⅲ期	下部のグライ層は2期、9号掘立柱建物に切られる。常滑鉢と壺、瀬戸肩衝茶入、瀬戸瓶子、東北窯製、竜泉窯系の碗
11'(北溝)	17号溝	南193 北210 / 70 168	南92.5 北55.5 / 10 16.5	Ⅱ～Ⅲ期	グライ層は2期、25号井戸を切る。景徳鎮窯系の梅瓶、鏡
12 〃	6号溝	135 / 76	51.7 / 22	Ⅳ期	11号溝、9号井戸を切る。東北窯製
13 〃	12号溝	177 / 130	53 / 31	Ⅲ期	11号井戸、12号井戸に切られる
14 〃	8号溝	129 / 78	35 / 2	Ⅰ期	15号溝、11号溝に切られる。渥美甕、東北窯製、道安窯系の碗
15 〃	5号溝	238 / 44	167 / 141	Ⅲ期	14号土壙に切られ14号溝を切る。竜泉窯系の碗
16 〃	4(31)号溝	320 / 150	33.6 / 24.6	Ⅲ期	15号溝、14号土壙に切られる。明の染付皿、魚骨
17 〃	3号溝	72 / 45	10.5 / 4	平安時代	14号溝に切られる
18 〃	20号溝	65 / 40	23.9 / 3.8	Ⅳ期	19号溝に切られ21号溝を切る
19 〃	29号溝	72 / 33	32.2 / 16.1	Ⅳ期	21号溝、18号溝を切る
20 〃	F 8区西側の溝	40 / 21	計測不可能		21号溝に切られる
21 〃	21号溝	推定 371 / 推定 70	東壁セクション 54 / 北壁セクション 125	Ⅱ～Ⅲ期	21号井戸、18号掘立柱建物に切られる。瀬戸柊腰香炉と天目茶碗と御皿、東北窯製、常滑甕
22 〃	41号溝	53 / 43	15	平安時代	19号井戸に切られて3号溝を切る
23 〃	40号溝	50 / 37	計測不可能	平安時代	22号井戸、22号溝に切られる
24 〃	39号溝	77 / 48	16	平安時代	30号土壙、19号掘立柱建物に切られる
25 〃	18号溝	64 / 43	20.5 / 3	Ⅳ～(Ⅴ)期	21号溝を切る。志野織部小皿
26 〃	16号溝	154 / 98	35.8 / 3	Ⅳ～(Ⅴ)期	20号掘立柱建物に切られ21号溝を切る
27 〃	27号溝	102 / 54	69 / 15.5	Ⅱ～Ⅲ期	26号溝に切られる
28 〃	28号溝	61 / 50	31 / 24	Ⅱ～Ⅲ期	
29 〃	30号溝	360 / 146	100.6 / 89.6	Ⅱ期	20号掘立柱建物16号溝に切られる。東北窯製
30 〃	33号溝	78 / 48	39	平安時代	2号住居に切られ49号土壙を切る
31 〃	19号溝	175 / 100	131.8 / 95.4	Ⅲ期	22号掘立柱建物、27号井戸に切られる。常滑水瓶、緑釉皿
32 〃	34号溝	84 / 35	36	平安時代	16号溝に切られ2号竪穴遺構を切る
33 〃	37号溝	68 / 30	—	平安時代	42号土壙、21号溝に切られる

第22表　Ⅰ・Ⅱ区掘立柱建物跡一覧表

掘立柱建物名	間数	棟方向	方位	東西総長 cm / 尺	南北総長 cm / 尺	柱式	面積㎡	時期	備考
1号掘立柱建物	(3×?)	—	N-約6°-W	—	(480) / (16尺)	—	—	Ⅱ～Ⅳ期	角柱あり、2号溝に切られる
2 〃	2×(1)	東西?	N-16°-E	—	398 / 13.2	側柱式?	—	Ⅱ～Ⅲ期	棟続きの建物? 2号溝に切られる
3 〃	2×2	東西	N-14°-E	370 / 12.3	310 / 10.3	総柱式?	11.47	Ⅱ～Ⅲ期	1号溝に切られ、4号溝を切る
4 〃	4×4	南北	N-約11°-E	550 / 18.3	610 / 20.3	側柱式	33.5	Ⅳ期?	角柱あり、1号溝に切られ、1号土壙、3号溝を切る

5号掘立柱建物	3×4	東西	N-約13°-E	750	25	570	19	側柱式	42.7	II期	角柱あり、元の白磁出土、1号溝に切られ、2号土壙、4号溝を切る
6 〃	3×4	南北	N-約3°-E	420	14	600	6.6	〃	25.2	III期	2号井戸、4号溝、3号土壙を切る
7 〃	3×3	東西	N-約4°-E	580	19.3	430	14.3	〃	24.9	～III期	庇(南)あり、1号溝に切られ、4号溝、7号溝を切る
8 〃	3×3	東西	N-約7°-E	600	20	470	15.6	〃	28.2	III期	角柱あり、庇(南)あり、中柱真北、側柱磁北出土、1号溝に切られ、3号溝を切る
9 〃	3×5	南北	ほぼ磁北	600	20	540	18	〃	32.4	III期末	角柱あり、N 20′ E 1号溝に切られ、9号溝、11号溝を切る
10 〃	3×3	—	N-6°-E	540	18	540	18	〃	29.1	III期末	庇(南)あり、ほぼ真北、1号溝に切られ、11号溝、14号溝を切る
11 〃	?×2	東西?	N 7°-E		—	340	11.3	—	—	II期	角柱あり、東北窯製品出土、1号溝、2号溝に切られる
12 〃	2×2	東西	N-1°-E	330	11	450	15	側柱式	14.9	I期?	1号竪穴遺構、13号溝を切る
13 〃	2×2	南北	N-3°-E	364	12.1	390	13	〃	14.2	〃 ?	6号土壙、14号溝に切られる
14 〃	2×2	東西	N-9°-E	300	10	276	9.2	〃	8.3	〃 ?	
15 〃	3×3 or(2×3)	〃	N 13° E(東) N-6° E(西)	310	10.3	234	7.8	〃	7.2	〃 ?	15号溝、16号溝に切られる
16 〃	?×2	〃	N 6°-E	(350～)	(11.6)	570	19	〃	—	IV～V期	角柱あり、掘り方あり、6号溝、22号土壙、24号土壙を切る
17 〃	2×(4?)	〃	N-4°-W	510	17	360	12	〃	18.4	II～III期	角柱あり、18号土壙、22号土壙を切る
18 〃	3×3	〃	N-5°-E	600	20	510	17	〃	30.5	IV期	角柱あり、21号溝を切る
19 〃	3×4	南北	N-7°-W	700	23.3	582	19.4	〃	40.7	II～III期	33号土壙、22号溝、3号住居を切る
20 〃	3×4?	〃	N-8°-W	500	16.6	592	19.7	〃	29.6	IV期	角柱あり、26号溝、3号住居を切る
21 〃	2×2	東西	N-6°-E(東) 磁北 (西)	(380) (380)	(12.6) (12.6)	298 334	9.9 11.3	〃	11.9	II～III期	F 3 2号住居、1C号溝を切る
22 〃	2×3	〃	N 6° E(東) 磁北 (西)	583 542	19.4 18	340 350	11.3 11.6	〃	18.6	III期	F 3間数変則2号住居、31号溝を切る
23 〃	2×2	南北	N-6°-E(東) N-12°-E(西)	340	11.3	284 250	9.4 8.3	〃	34.5	IV期	F 2東側ほぼ真北、16号溝、31号溝を切る
24 〃	?×2	東西?	N-約4°-E		—	250	8.3	—	—	II期～	8号溝、5号井戸を切る
25 〃	2×2	南北	N-6°-E	172	5.7	160	5.1	総柱式	2.7	I期～	角柱あり、24号溝を切る

( ) は推定

第23表　I・II区井戸跡一覧表

井戸名	旧名称	位置	直径cm 上端 下端	深さcm	タイプ	時期	備考
1号井戸	1号井戸	A-7	推定 220 151	128以上 (228)	E	II～III期	1号溝に切られる
2 〃	2号井戸	A-7	123 97		B	II～III期	6号掘立柱建物、1号溝に切られる
3 〃	1号井戸	B-6	215 107	148	C	II～III期	4号井戸を切る
4 〃	2号井戸	B-6	中端 187 114	180以上	C?	II～III期	3号井戸、5号井戸に切られる
5 〃	3号井戸	B-6	177 100	172	D	II～III期	漆器出土、8号掘立柱建物に切られる
6 〃	1号土壙	A-5	推定 99 推定 71	166以上 (187)	B	I期	9号溝に切られる
7 〃	1号井戸	B-5	推定 190 推定 96	153以上 (164)	E	I期	9号溝、11号溝に切られる
8 〃	2号井戸	A-4	推定 105 推定 54	164	A	III期	12号溝、54号土壙に切られる
9 〃	1号井戸	B-4	254 107	226	D	II～III期	12号溝に切られる。竜泉窯の碗
10 〃	2号井戸	B-4	232 142	250	D	I期	12号溝、11号溝に切られる。常滑壺、東北窯甕
11 〃	2号井戸	A 3	中端 226 136	21以上	D?		13号溝を切る。
12 〃	1号井戸	A-3	225 71	274	D	III期	材木、木製品出土、東北窯甕、瀬戸灰釉
13 〃	1号土壙	B-3	推定 151 推定 90	276	C	II～III期	7号土壙、14号井戸に切られる
14 〃	1号土壙	A-3	推定 218 推定 68	238	B	II～III期	9号土壙に切られ、8号土壙を切る
15 〃	1号井戸	A-2	推定 89 推定 46	50 (201)	B	I～II期	15号溝に切られる
16 〃	1号井戸	A-1	推定 122 推定 73	216以上	B	I～II期	16号溝に切られる
17 〃	1号井戸	B-1		107以上	不明		
18 〃	1号井戸	F 8	115 83	115	B	I期	21号溝、18号土壙を切る
19 〃	1号井戸	E-7	中端 215 108	230	C	V期	22号溝を切る
20 〃	2号井戸	E-7	中端 49 70	200以上	C		22号溝を切る。唐津碗
21 〃	1号井戸	F-7	中端 213 138	232以上	D	IV期	22号井戸、21号溝を切る。御深井釉平鉢、志野向付
22 〃	2号井戸	F-6	中端 172 118	120以上	D?		21号井戸に切られ、23号溝を切る。常滑擂鉢
23 〃	2号土壙	F 6	推定 141	141以上	B	I期	33号土壙に切られ、39号土壙を切る
24 〃	2号土壙	F 5	88	82以上	B		2号住居を切る
25 〃	3号土壙	E 3	96 66	61 (153)	B	I期前半	11号溝に切られる
26 〃	1号井戸	E-2	中端 221 147	110以上	CorD		16号溝、29号溝を切る
27 〃	1号井戸	F-2	推定 179 推定 105	66以上 (89)	C?		31号溝を切る
28 〃	1号土壙	F 2	131 59	101	A	平安時代	53号土壙を切る

( ) は推定

第24表　I・II区土壙一覧表

土壙名	旧名称	位置	長軸cm	短軸cm	深さcm	時期	タイプ 平面形	タイプ 断面形	備考
1号土壙	1号土壙	B-8	304以上	191以上	94	I期	C_1	I	5号掘立・3号溝に切られ、2号土壙を切る
2 〃	2号土壙	B-8	338	115	48	I期	C_2	I	5号掘立・1号土壙に切られる
3 〃	10号溝	B-8				I期	C_2	I	5号掘立・6号掘立に切られ、4号溝を切る。東北窯鉢
4 〃	23号溝	A-7	—			平安	不明	I	2号溝に切られる
5 〃	1号土壙	A-4	183	80	24	III期	D	II	10号掘立に切られる

6号土壙	2号土壙	B-3	95	85	23	平安～1期	A	II	13号掘立を切る
7 〃	1号 〃	B-3	115	推定93以上	50	I期	A	I	8号土壙、13号井戸を切る
8 〃	5号 〃	A-3	107	97	36	I期	A	I	14号井戸に切られ、13号井戸を切る
9 〃	4号 〃	A-3	118	88	63	III～IV期	B_1	I	13号井戸、14号井戸を切る
10 〃	3号 〃	A-3	—	—	—	中世	AorB$_1$	不明	井戸の可能性もある
11 〃	2号 〃	B-2	100	96			A	I？	15号溝に切られ、14号溝を切る
12 〃	4号 〃	B-2	129	91	14		C	不明	15号溝に切られ、14号溝を切る
13 〃	3号 〃	B-2	62	27以上	21	IV期	不明	不明	15号溝を切る
14 〃	1号 〃	B-2	226	135	48	IV期	C_1	I	石臼上下出土、15号溝、16号溝を切る
15 〃	5号 〃	B-2	—	—		平安？	AorB	不明	14号溝に切られる
16 〃	3号 〃	A-1	126	推定96	22	平安	B_1	I	16号溝に切られる
17 〃	1号 〃	A-1	推定96	72	22	平安	B_1	II	16号溝に切られる
18 〃	1号 〃	F-8	12以上	92	66	平安	C_1	I	18号井戸に切られる
19 〃	3号 〃	F-8	77	65	26	平安	B_1	I	焼土、6号溝、21号溝に切られる
20 〃	2号 〃	F-8	79以上	57	12	平安	B_1	I	焼土、6号溝、21号溝に切られる
21 〃	1号 〃	E-8	推定128	72	36	平安	B_1	II	土師器多量出土住居の貯蔵穴の可能性あり、52号土壙に切られ、6号溝を切る
22 〃	1号 〃	E-7	281	70	20	II期	D	I	23号溝を切る
23 〃	3号 〃	E-7	推定116	112	40(20)	I期	A	I	22号溝に切られる
24 〃	2号 〃	E-7	175(139)	72(41)	66(31)	II期	C_1	I	
25 〃	4号 〃	E-7	62	58	30		A	I	
26 〃	1号 〃	F-7	193	111	68	II期	C_1	I	21号井戸に切られ、27号土壙を切る。志野織部皿
27 〃	2号 〃	F-7	—	—	—	I期	不明	不明	21号井戸に切られる
28 〃	1号 〃	E-6	推定119	93	25		C_1	I	22号溝を切る
29 〃	2号 〃	E-6	推定 80	73	9		C_1	I	22号溝、23号溝を切る
30 〃	5号 〃	F-6	63以上	50	14	平安～I期	C_1	II？	31号土壙に切られ、24号溝を切る
31 〃	6号 〃	F-6	89	84	48	平安	C_1	I	33号土壙に切られ、30号土壙を切る
32 〃	4号 〃	F-6	480	計測不能	70	IV期	不明	II	21号溝を切る
33 〃	1号 〃	F-6	294	172	30	IV期	B_1	II	24号溝、23号井戸を切る。志野織部皿
34 〃	3号 〃	F-6	計測不能	67	58	IV期	B_2	I	21号溝を切る
35 〃	6号 〃	E-6	103	74	32		C_1	I	38号土壙に切られ、39号土壙を切る
36 〃	5号 〃	E-6	76	推定65	41		A	I	37号土壙に切られる
37 〃	4号 〃	E-6	推定 82	78	16	II期	C_1	I	38号土壙に切られる
38 〃	3号 〃	E-6	185以上	82	28	II期	C_2	I	37号土壙、39号土壙を切る
39 〃	7号 〃	E-6	推定235	111	21	I期	C_2	I	38号土壙、23号井戸に切られる
40 〃	4号 〃	F-5	92	53	30	平安	B_1	I	
41 〃	3号 〃	F-5	170	85	14	I期	C_1？	I？	3号住居、19号掘立に切られる
42 〃	1号 〃	F-5	115	82以上	40	II期	C_1？	I	26号溝に切られ、33号溝を切る
43 〃	1号 〃	E-5	118以上	71以上		平安	D？	II？	25号溝、33号溝に切られる
44 〃	2号 〃	E-5	104	48		平安	B_1	不明	33号溝に切られる
45 〃	1号 〃	E-4	推定 45	計測不能	29	I期	分類不可 AorB	I？	28号溝に切られる
46 〃	2号 〃	E-4	97	83	51	II期	B_1	II	28号溝を切る
47 〃	1号 〃	E-3	計測不能	34	15	I期	B_2	不明	溝の可能性あり、11号溝に切られる
48 〃	2号 〃	E-3	推定122	計測不能	115	平安～I期	分類不可 不明	I	29号溝に切られる
49 〃	1号 〃	F-3	156以上	計測不能	48	平安	分類不可 B_1	I	11号溝、30号溝に切られる
50 〃	2号 〃	F-2	128	88	24	平安～I期	C_1	III	1号住居を切る
51 〃	施19ピット	F-2	85	74		平安	A？	I	
52 〃	—	E-8	計測不能	98	27	平安	B_1？	I	28号井戸を切る

第25表　III区遺構一覧表

単位cm

井戸名	直　径	深　さ	タイプ	時　期	位　置	備　考
1	上 102(推定) 下 66(推定)	110以上	B？	不　明	Eトレ	漆器
2	上 141 下 112(推定)	130以上	C？	V期 前半	〃	唐津、肥前、鉄釉擂鉢、相馬？、上野目
3	不　明	170以上	CorD？	V期 後半	〃	鉄釉擂鉢、徳利、切込？(手塩皿)
4	上 132 下 94(推定)	115以上	C？	V期	〃	鉄釉皿(向付)
5	上 113 下 76(推定)	70以上	CorD？	V期 前半	〃	肥前皿(鹿)17C後半
6	上 180 下 164	180以上	C？	V期	〃	
7	不　明	不　明	不　明	V期 前半	〃	相馬？唐津、上野目、切込？、伊万里、唐津、鉄釉擂鉢、無釉陶器(金雲母)
8	上 140 下 80(推定)	176以上	C？	V期	〃	漆器(箱)、木箱
9	上 182 下 132	110以上	C？	IV期	〃	土師質、唐津、漆器
10	不　明	50以上	不　明	不　明	〃	

単位cm

溝　名	幅　深さ	時　期	備　考
1	上 158 下 124　34	IV　期	唐津？
2	不　明　80	II～III期？	無釉擂鉢、内掘と外掘との中間
3	58 42　34	II～III期？	
4	126 46　68	IV期以前	

第Ⅴ章　考　　察

Ⅰ．平安時代の土器について

（Ⅰ）土器の分類

本遺跡の平安時代に属する遺物は種類が豊富である。すなわち、土師器（甕・坏・高台坏・皿・耳皿・台付鉢）、須恵器（甕・壺・坏）、灰釉陶器（瓶・碗）、緑釉陶器（碗）、常滑鉢・渥美鉢がある。このうち土師器には、いわゆる「赤焼土器」を含めて分類している。これは「上新田遺跡」における考察にしたがって分類し、土師器の類型分類で区別して扱っている。

土師器

甕　　1類　ロクロ調整の認められないもの（極めて数は少ない）

ａ．器面調整に刷毛目が施されたもの。

ｂ．器面調整は内外面ともにミガキが、内面はさらに黒色処理が施されたもの。

2類　ロクロ調整の認められるもの

a_1．ロクロ調整後、外面にヘラケズリが施された長胴形のもの。

a_2．a_1と同様であるが、体部が球形状を呈するもの。

口径・高さともに、約20cm前後に集中し、その比率はほぼ1：1となり、極めて規格性に富んでいる。

ｂ．ロクロ調整後、外面はヘラケズリ、内面はミガキ・黒色処理が施されたもの（いわゆる内黒甕）。

長胴形のものはないようで、口径・高さの比率がほぼ1：1のものであろう。

c_1．いわゆる「赤焼土器」と考えられるもので、口縁部付近の破片のみで、全体の器形は定かではないが、おそらく長胴形になると考えられる。

c_2．いわゆる「赤焼土器」と考えられるもので、ロクロ調整が施される小型のもの。再調整は認められない。

坏：今回の調査では、すべて回転糸切り・無調整の坏で構成されている。

1類　ロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理が施されたもの。

ａ．体部が内弯ぎみに立ち上がるもの。

口径は13～17cmと比較的バラエティーに富む

ｂ．体部が内弯ぎみに立ち上がり、口唇部付近がわずかに外反するもの（端反り口縁）。

c．体部がほぼ外傾しながら立ち上がるもの。

aと同様、口径は13～16cmと比較的バラエティーに富む

本類にはロクロ調整後､体部外面に縦位のナデが認められるものが2点ある。このナデは調整として施されたものか判断できない。

2類　ロクロ調整後、内面にミガキが施されるが、黒色処理が認められないもの。

従来は、黒色処理が再加熱等で消失したと理解される傾向があった。しかし、それは個々の土器において証明される必要がある。本遺跡では、それを証明できるものがないため、独立して分類している。

器形のわかるものは、内弯ぎみに立ち上がり、口径13～14cmのものがある。

3類　ロクロ調整後、何ら調整の加えられないもの。

本類はいわゆる「赤焼土器」に属するものを主体とするが、須恵器と区別のつけにくいものも含めている。

底部破片が多く、全体を知り得るものは少ない。

口径は14cm前後、底径は4～6cmまであり、5cm代のものが多い。高さは3～4cm代のものがある。

4類　内外面ともにミガキ・黒色処理が施されているもの。

本類はロクロ調整後に、ミガキが施されているものと思われる。いずれも細片で図示し得るものはない。

ここでは、本類を黒色土器と呼ぶことにする。

高台坏1類　坏部は調整後、内面ミガキ・黒色処理が施され、その後に、粘土貼り付けによる高台をもつもの。

本類は高台の形態にバラエティーがあり、また、高台の高さにも高低の差があるが、検討するほどの量的保障がないため、細分しなかった。

高台径も、およそ6～9cmと差が大きい。

2類　坏4類と同様のものであるが、これに高台がつくもの（黒色土器)。

本類は、細片で図示し得るものはなく、量も極めて少ない。

皿　高さが3cm以下のもので、口径・高さの比率がおよそ1：4のもの。

本類には、図示できない破片が多く、また中世の土師質土器皿との区別がつけにくい。確実に平安時代に属すると考えられるものは、極めて少ない。本類は、いわゆる「赤焼土器に属するものが大半を占める。

図示し得るものは、わずか2点で、赤焼土器に属するもので口唇部付近が大きく外反

するものと、ロクロを使用せず手捏ねによるものがある。

耳皿　「赤焼土器」に属すると考えられる耳皿が１点ある。

台付鉢　「赤焼土器」属すると考えられるが、破片のみで全体を知り得るものがない。

陶器　平安時代に属する陶器には、灰釉・緑釉・渥美・常滑がある。これらはいずれも破片で量が少なく、全体を知り得るものはない。

渥美・常滑の製品は、ほぼ12世紀後半頃のものと考えられるが、中世の遺物の項で扱かうことにする。

〔灰釉陶器〕

碗や瓶の破片が出土しているが、その特徴を十分に理解できない。これらは平安時代後半の美濃・東海系の製品と考えられる。

〔緑釉陶器〕

碗の底部が１点のみである。

（２）平安時代の遺構と土器群の様相

土器・陶器の特徴

本遺跡においては、おそらく中世以後の遺構群によって、著しく攪乱を受けている。したがって、細片が多く十分に土器を把握できないものが多い。このような状況下で、幸いにも21号土壙と１号住居跡貯蔵穴の出土土器は、極めて一括性が強い資料である。今回の調査では極めてバラエティーに富む遺物が出土しており、特に灰釉・緑釉も出土しているのだが、ほとんどこの時代の遺構に伴出しない憾みがある。

土師器

〔甕〕　1a類・1b類とした甕は、いずれも一点ずつで、その特徴を十分に理解できないが、1b類は2b類との関連性をもつものと理解したい。なお、1a類はこの時代の遺構出土のものはない。$2a_1$類は口唇部の成形は手抜きのためか、かなり簡略化されている。この類型の土器は図化できたものは１点だけである。不明な点が多い。$2a_2$類はあまり類例のしられていない甕であろう。この類型を仮りに「今泉型」と理解すれば、およそ口径と高さの比率が等しく、ロクロ調整後

ヘラケズリを施すものである。この甕は、体部の丸味が強く、器厚が薄い特徴をもち、規格性が強い。これに類似する例に、多賀城跡ＳＥ674井戸跡出土例があり、白鳥氏の分類によれば(白鳥良一：1980)、Ｆ群土器（11～12世紀）に属する。また、仙台市安久東遺跡（土岐山武：1980）第２号住居跡出土例に、本遺跡のものよりやや長胴の傾向があるが類似しているものがある。

この第２号住居跡は、灰釉陶器の年代から11世紀と理解されている。十分な比較検討を行っていないが、この「今泉型」甕の分布は、現在仙台平野周辺にみられる。ここでは11世紀頃を想定しておきたい。2b類は、名取市清水遺跡（丹羽・小野寺・他：1981）第Ⅷ Ａ群に属する第89号住居例や色麻町上新田遺跡（小井川和夫：1981）第１・第８号住居跡などに類例が認められる。いずれも回転糸切り後に再調整が施される土師器坏と共伴している。本遺跡では18号・21号土壙をみると回転糸切り無調整の土師器坏と共伴している。したがって、先の２遺跡よりはやや後出のものと考えられよう。清水遺跡例は平安時代前半と考えられている。$2c_1$類は赤褐色系の色調を呈する甕で、口縁部が長く長胴形になるものである。「赤焼土器」の範ちゅうに属するものと理解した。いずれも破片で出土数は少ない。南小泉遺跡（結城慎一：1982）１号溝、多賀城跡（宮城県多賀城跡調査研究所：1980）ＳＤ1221－Ｂ大溝第４層出土例などが、これに属するものであろう。$2c_2$類は「赤焼土器」の小型の甕である。本遺跡では、$2c_1$類を含めて最も多く出土している。しかし、図示できるものは極めて少ない。

〔坏〕　１類はその特徴から３種類に細分した。特に1b類としたものは、時代が下がるにしたがって増加する傾向がある。本遺跡では十分にその傾向を指摘することができないが、先述の安久東遺跡第２号住居跡出土土器などは特に顕著である。口唇部の外反する坏は、坏３類としたものにも存在する。この問題については、すでに小笠原好彦氏によってこの種の坏あるいは皿は「灰釉陶器および緑釉陶器との関連によって生じたものとみるべきである」（小笠原好彦：1976）と指摘されている。この指摘は傾聴すべきで、今後は灰釉陶器などの集落内における所有形態や、土師器坏・皿類の比較が必要であると考える。２類は従来出土例も少なく、あまり問題にされなかった土師器坏である。この類型の坏は内面にミガキが施されるが、黒色処理が施されない特徴に加えて、本遺跡ではおよそ赤褐色系の色調を呈している。この坏類の特徴を十分に把握できないが、いわゆる内黒坏と赤焼坏の調整技法の混乱あるいは簡略化と理解しておきたい。４類も細片ばかりで、その特徴を十分に把握できない。坏と高台付坏が出土しているが、皿は出土していないようである。

〔皿〕　皿は出土数が少ない。ロクロを使用するものと手捏ねがある。また、中世の土師質土器皿と区別のつかないものが存在するが、およそ平安時代のものは砂粒を多く含む傾向がある。

これらは、いずれも平安時代後半から末期にかけてのものである。

須恵器

須恵器は出土量が少なく、細片がほとんどである。したがって、各器種別の特徴は不明な点が多い。ただし、甕は青黒色系の色調を呈し、十分に環元焼成されたものである。これに対し、坏は灰白色を呈するものばかりで、黒斑のつくものも存在する。長頸壺は両色調を呈するものが存在する。こうした器種毎の色調の差をどう理解したらよいか問題のあるところである。器種毎に焼成窯が異なるのか、器種毎に異なった窯から供給されたものか、あるいは坏を赤焼土器の範ちゅうに包括した方がよいのか決めがたい。

陶器

陶器には、灰釉・緑釉・渥美がある。灰釉陶器には、碗・瓶・水瓶がある。碗は10世紀後半の美濃の製品で年代が理解できるものでは最も古い。最も新しいものとしては、12世紀初めと考えられる常滑の水瓶がある。その他に瓶類の胴部破片があるが、須恵器と区別のつかなくないものや、鎌倉時代以後に属する可能性のあるものが存在し、明確ではない。これらは合計28点出土しているが、胎土の特徴等から3個体以上あるものと考えられる。前述の美濃の碗の内面には一部縦位沈線が認められ、陰刻花文碗（第37図3）かと考えられる。

緑釉陶器は、わずか碗1点である。明確な年代は不明であるが、およそ平安時代中期以後のものであろう。渥美の鉢は2号住居跡より出土したもので、12世紀のものである。このような事例はまず初めてのことであろう。

以上、土器・陶器の特徴と問題点を述べてきたが、高台付坏・台付鉢については特徴を把めず、ここではふれなかった。

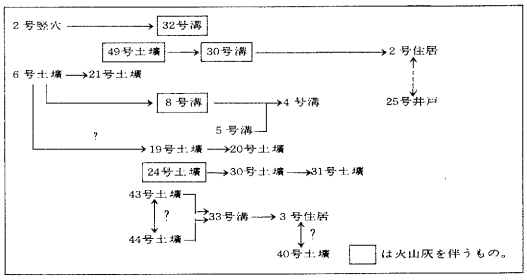
遺構の重複関係

平安時代の遺構重複関係は以下のようになる。

主な遺構は次頁の重複図式が成り立つ。したがって、灰白色土を伴う遺構を境として、大きく3時期に分けることができる。この灰白色土は、多賀城跡や仙台市内のこの時期の遺跡などで確認されており、庄司貞雄・山田一郎両氏によって降下火山灰であることが明らかにされた（庄司・山田：1979）。また、火山灰の降下年代は、およそ10世紀前半と考えられている（白鳥：1980）。さて、本遺跡の灰白色土は、後述するごとく庄司・山田両氏の分析によって、県内に分布する他の火山灰と同一起源の火山灰であることが判明している。

第26表　主要遺構出土土器共伴関係

	土師器　坏							土師器　甕						須恵器			その他				
	1a	1b	2a1	2a2	2b	2c1	2c2	1a	1b	1c	2	3	4	甕	坏	長頸壺	土師器高台付鉢	灰釉	渥美	皿(赤焼)	皿(手捏ね)
16号土壙									1												
18号土壙		1								2				1		1					
21号土壙			1		1			1		1	1										
49号土壙								2						4							
25号井戸											1			4							
1号住居貯蔵穴				3			1	1	1	2	1？	2			2						
2号住居													3						1	1	
3号住居												1	1				1	1		1	
3号住居(土壙)											1										
8号溝			1？		3		1？						1	3	1						
24号溝									1					1							
30号溝								2 1		1？			1		1		1				
32号溝									2		2		1 台付鉢	1							
33号溝														2			1				



まとめ

本遺跡の土師器坏には、底部切り離し後に再調整が施されるものがほとんどないことや、他の土器の特徴、そして遺構の重複関係から、およそ火山灰降下直前から平安時代末期まで展開された集落跡と理解される。遺構の重複関係から3時期に、さらに遺物の特徴を加えると、以下のように変遷したと考えられる。

A期　火山灰降下以前で火山灰を伴わない時期（2号竪穴、6号・18号・21号土壙）

B期　火山灰降下以前で埋土に火山灰を伴う時期（8号・30号・33号溝、49号土壙）

C期　火山灰降下以後で平安末期以前の時期（1号・3号住居跡、4号溝）

D期（今泉城Ⅰ期前半）　およそ平安末期（2号住居跡、25号井戸跡）

土師器類は以下のように変遷したものと考えられる。

A期　甕　1b類・$2a_1$類・2b類、坏　1a類・1c類・2類

B期　甕　$2a_1$類（？）・2b類・$2c_2$類、坏　1a類・1c類（？）・2類

C期　甕　$2a_2$類、坏　1a類・1b類・1c類・2類（？）・3類、灰釉碗

D期　皿、渥美鉢、灰釉水瓶

この他の類型や高台付坏・台付鉢、そして須恵器については、出土数が少なく十分に検討できない。坏4類については、本遺跡ではB期以後に出現するようである。

A期はおよそ9世紀末～10世紀初頭、B期はおよそ10世紀前半、C期は10世紀後半～11世紀、D期はほぼ12世紀に相当するものと考えられる。この年代観はなお十分な検討が必要であり、今後の課題としておきたい。いずれにしても、ほぼ平安時代を通じて展開された集落の様相を知ることができた。また、引き続いて展開されていく中世の基盤をなすものであろう。集落の構造

については他の機会を待ちたい。

2．今泉城跡出土の陶磁器について

本遺跡から出土した陶磁器類は、平安時代のものも含めると768点である。Ⅰ・Ⅱ区では、平安時代の灰釉陶器30点（美濃１点）、緑釉１点、Ⅰ期以後は渥美26点、常滑134点、瀬戸52点、県内産無釉陶器258点（東北窯及び類似品210点、白針を含むもの45点、金雲母を含むもの３点）、産地不明無釉陶器55点、Ⅳ期以後は美濃33点（志野10点、鼠志野２点、志野織部９点、黄瀬戸11点、御深井釉１点）、常滑２点、瀬戸（灰釉）１点、戸長里？１点、備前？５点、唐津12点、不明施釉陶器36点、肥前（磁器）35点、切込（磁器）２点である。中国製品は41点で、その内訳は青磁30点、白磁４点、天目１点、染付６点である。Ⅲ区では、およそⅣ期以後のもので、陶器35点、磁器９点である。その内訳は唐津５点、相馬20点、上野目３点、肥前磁器６点、切込２点、不明８点（１点は磁器）である。このうち相馬と上野目の区別のつきにくいものがあるが、可能性の強い方に入れて集計した。

ここでは、Ⅰ・Ⅱ区のⅠ～Ⅴ期の出土品について概観してみたい。

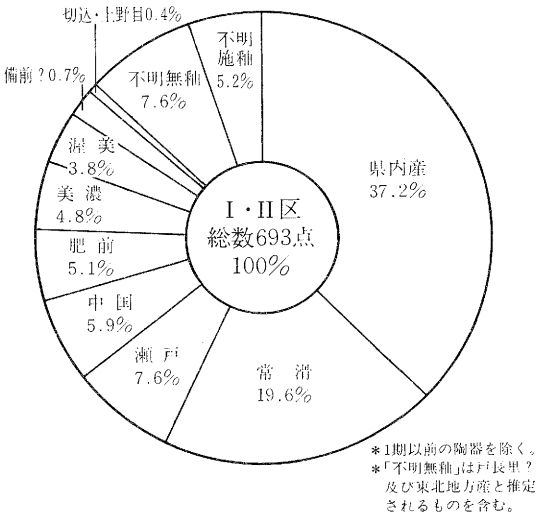
Ⅰ・Ⅱ区の日本製品と中国製品の出土比率は、Ⅰ期以前のものとⅢ区の出土品を除いた場合、それぞれ、94.1％と5.9％となる。この比率は東北地方の日本海側と大きく異なる。日本海側では中国製品が日本製品の２倍近い値を示している（佐々木達夫：1981）。Ⅰ・Ⅱ区の出土品693点で、日本製品の内訳（Ⅰ～Ⅴ期）は、渥美約3.8％、常滑約19.6％、瀬戸約7.6％、県内産無釉陶器37.2％、美濃約4.8％、唐津約1.7％、備前（？）0.7％、肥前磁器約5.1％、切込約0.3％、中国製品約5.9％、不明無釉陶器約８％、不明施釉陶器約5.2％である（第120図）。

次に陶磁器類の変遷についてみることにする（第121図）。

平安時代に東海地方を中心とした灰釉陶器が搬入され、平安時代末期以後は渥美・常滑・瀬戸の製品に変わるようになるが量的には少ない。鎌倉時代中期以後（Ⅱ期）には、館の成立に伴って多量の陶磁器が出土している。特に常滑や県内産の無釉陶器が多いと言えよう。これらは、武士の移住に伴う現象と考えられ、また、県内産陶器は武士（在地領主）などの儒要に答えるべく地元に成立したものと考えられる。また、中国製品もおよそこの時期から搬入され初めたものであろう。この時期には、瀬戸の製品がほとんど出土しなくなる。Ⅲ期には、常滑や県内産陶器が減少し、この時期の後半には再び瀬戸製品が増加してくる。また、前時期に引き続き中国製品が少量存在する。Ⅲ期からⅣ期の転換期には、ほとんど遺物は出土しなくなる。

Ⅳ期には美濃製品を主体として再び陶磁器の出土数が増加する。備前（？）はⅣ期の遺構に伴う伝世品であろう。備前の製品という見方が正しいとすれば、備前焼の編年のⅣ期(間壁忠彦：1977）と考えられ、最も流通が拡大した時期と一致する。また、この時期には、中国の染付

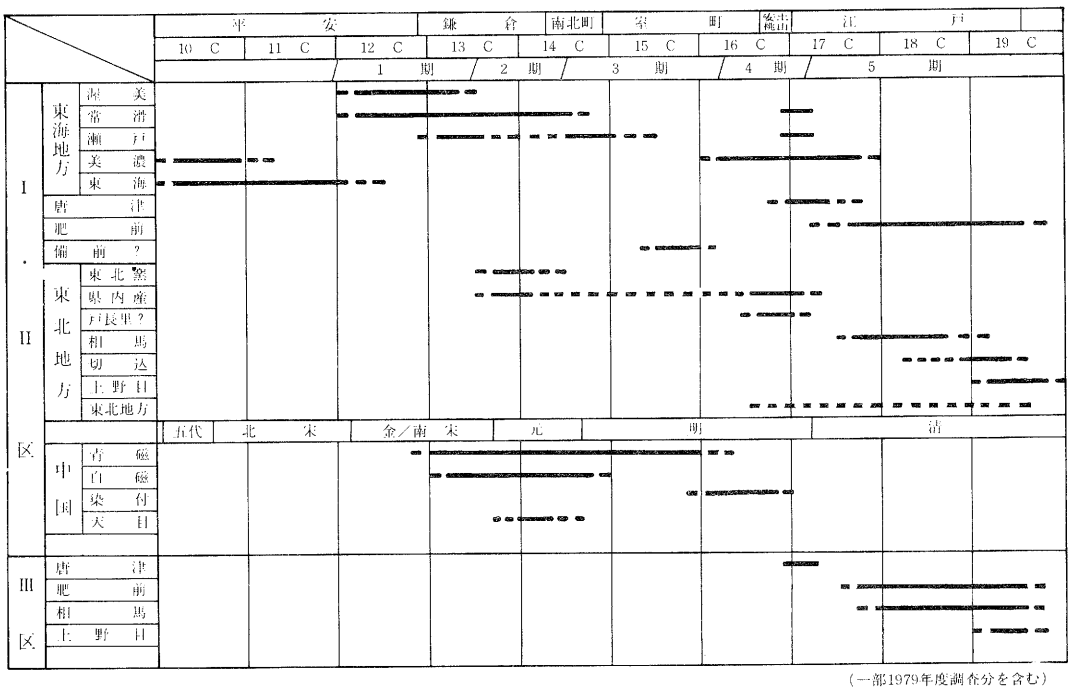
が出現し、青磁は著しく減少する。山形県米沢市の戸長里窯の類似品と考えられる擂鉢1点がある。戸長里窯製との見方が正しいとすれば、この時期の伊達氏の動向と無関係ではないと考えられる。しかし、産地についての即断はさけておきたい。Ⅳ期終末からⅤ期にかけては、肥前磁器が搬入される。Ⅴ期には肥前とともに、相馬・切込・上野目が搬入され、およそ幕末まで続く。仙台では藩窯となった堤焼があるが、本遺跡からは出土していない。また、明治以後の出土品も現在ない。



第120図　陶磁器類産地別組成

3．県内産無釉陶器について

まず、中世の無釉陶器については、その特徴から県内産の製品が多いであろうとの予測を立て、直接生産地において標本を採集し、あるいは東北歴史資料館の



（一部1979年度調査分を含む）

第121図　陶磁器変遷図

所蔵品の観察を行った。また、同資料館の藤沼邦彦氏の御好意で、直接資料を借用することができた。改めてお礼申し上げたい。観察し得たものは、東北窯、品ノ浦窯、多高田窯、熊狩窯、水沼窯であり、これらの資料のうち、特に胎土に着目し観察を行った。その結果、県内産陶器の特徴は、おおむね下記のとおりである。

1．東北窯

1．胎土の色調は、鉄分（？）が多いためか、他の県内産の製品に比較した場合、青黒いものが多い。

2．胎土中に白色砂礫（長石？）が目立つ。この特徴は、現在までに確認されている他の県内窯製品にないものであり、東北窯製品の判定に最も有効であると考えられる。ただし、東北窯製品のすべてにある特徴ではない。

3．器面調整は大半がナデであるが、刷毛目のものもが少量ある。

4．あめ状に溶けた白色（半透明）の吹き出し、褐色の吹き出しが認められるものが存在するが、後者は少ない。

5．耐火度が強いためか、灰被りで自然釉化しているものが少ない。（高温焼成の場合は、胎土の長石、鉄などが表面に吹き出て溶けている。4と共通する）

6．明黄褐色の焼成の甘い製品は、胎土がサンドウィッチ状に、色調の差を生じるものがある。

2．伊豆沼窯跡群（品ノ浦・熊狩）

1．耐火度が低いため、胎土の表面に光沢をもちやすく灰被りやすい。

2．胎土は東北窯と比較した場合、砂っぽく、石英等が溶けず残るものが目立つ。

3．品ノ浦の製品には、割れ口が劈開面を見せるものがある。

3．多高田窯

1．焼成のよいものは、胎土が東北窯・伊豆沼窯址群に比べ白っぽく、自然釉も多いものもある。

2．胎土が白っぽいものは、おそらく鉄分が少ないためであろう。

3．断面を観察すると、黒色粒（鉄分？）が霜降り状を呈するものがある。

4．伊豆沼窯址群のものと同様、砂っぽい。

また、水沼窯の製品は、県北の熊狩窯や多高田窯等よりも、県南の東北窯の胎土に類似しているとの印象を受けたが、なお不明である。なお、福島県の毘沙門窯の製品等も実見する機会を得たが、十分に理解するに至らなかった。以上、現在確認されている県内を中心とする中世の窯址群の製品の特徴を観察してきたが、なお不十分であることは否めない。

ところで、これらの窯址群と本遺跡の出土品を比較した結果、東北窯の製品、あるいは類似品が最も多いことが判明した。また観察・比較の結果、新に従来知られていなかった、胎土の特徴をもつ2つのグループの存在を確認することができた。

4.〔胎土に白針を含むグループ〕

表題のごとく、胎土中に白色針状物質を含むことが、特徴といえる。また、表面に光沢をもつものがあり、渥美の製品のごとく細砂質で、鉄分（？）・石英などを含む。この第4グループは、出土量が少なく、器形や年代についてはなお不明な点が多い。

現在までに、甕・擂鉢の器種が判明している。年代については、II期あるいはIII期の遺構に伴って出土する比較的硬質の甕、III～VI期の遺構に伴って出土する軟質の擂鉢（燻焼のものも存在する）・甕（？）があり、ほぼ遺構の年代と一致するものであろう。

生産地は不明であるが、胎土中に白色針状物質を含む特徴が手掛かりとなろう。従来、筆者が指摘してきた白色針状物質（佐藤洋：1981）は、主に名取川中流域から下流域の遺跡において、縄文～平安の土器胎土にみられる特徴である。したがって、この第4グループの生産地は、名取川流域、あるいは仙台周辺のどこかに存在するのではないかと予想される。

5．金雲母を多量に胎土に含むグループ

全体的に砂質で、白色粒子（長石？）を含み、特に金雲母を多量に含むことを特徴とする、第62図10に示すごとく、口縁部形態が極めて特徴的であり、出土数が少ないが、いずれもIV期の遺構より出土している。したがって、中世末～近世初め頃のものであろうか。生産地は全く不明である。

こうした分類を元に、生産地を各実測図中の注記表に示したが、なお東北窯の製品と思われるが判定できなかったものや、従来県内産の特徴とは異なる新な特徴をもつもので、その特徴をグルーピングできないものも存在する。また、東北大学の芹沢長介氏に、山形県米沢市に所在する戸長里窯の製品に類似すると御教示いただいた出土品もあるが、断定するに至っていない。

ところで、従来知られている多高田窯や、伊豆沼窯址群の製品と判定できるものはないようである。逆に、東北窯の製品と考えられるものや、それに類似するものが圧倒的優位を占めている。したがって、速断はできないが、仙台周辺は、おそらく東北窯等を中心とする製品の流通圏内にあったのではなかろうか。この問題は、他の遺跡の調査を待って、さらに検討されなければならない。

年代については、県内産の無釉陶器に関する藤沼氏の指摘があり、およそ鎌倉中期から後期

といわれている。本遺跡では、これらの陶器とともに、年代の判明する遺物に常滑の甕が存在する。この常滑の製品は、赤羽一郎氏の編年で、第3段階とされるものばかりである。したがって、先の藤沼氏の年代を追認する形となった。

今回は新に、従来知られていた窯の製品とは異なった2つのグループを抽出することができた。県内には、まだ未発見の窯があるものと考えられる。

また、これらの窯跡がどのような社会的背景のもとに消長したのか不明な点が多い。この点については、生産地である多高田窯は志田郡に、伊豆沼古窯は栗原郡に、そして東北窯はかつての刈田郡に属し、これらの諸郡はいずれも、鎌倉後半には北条氏の所領だった可能性のあるところである（小林・大石編：1978）。また、消費地である今泉城は名取郡に属し、この名取郡も北条氏の所領である。このような共通点は、おそらく偶然ではなく、中世窯業の成立に、北条氏あるいは、北条氏と関連する地元の領主層が関与していたことを推測させる。

生産地の問題、消費地の問題、そして流通・社会的背景など、まだまだ残された課題は多い。

4．今泉城をめぐって

今泉城を含む仙台市六郷地区[1]は、古代の陸奥国内においては、比較的早い時期に設置された名取郡内の地域である。

続日本紀　天平神護二(766)年十二月三十日の条に

陸奥国人正六上名取公龍麻呂賜姓名取朝臣

とあり、少なくとも766年以前には名取郡が設置されていたことが理解される。しかも、最近の郡山遺跡の調査によって、この遺跡が官衙跡と推定されるに至り（坏に「名取」の刻線文字のあるものと、畿内系・関東系の坏類が出土している）、またその創建年代が7世紀後半まで遡りうるものと考えられる。しかし、今泉城跡の2度の調査においては7・8世紀の遺構や遺物は皆無に近い。

また、和名類聚抄に名取郡の地名として「井上」の名がみえ、これは現在の仙台市井土（井土浜）ではないかとの指摘もある[2]。旧藩時代に見える今泉村の東側に隣接する二木村には、

□□□□□土地名有是則□□□上国ノ□□□線丸□□□□正則ト名蒙り□□□天長ニ

年空海法師ニ帰依シ灰練仏像ヲ給リ守本尊ト崇敬シ今ニ伝来所持セリ（二木家系譜）

とあり、二木家初代二木正則以来の系譜が示されている[3]。「二木家系譜」がどれほどの信憑性があるかは定かではないが、少なくとも名取川北岸の六郷地区では平安時代以後には継続的な集落が形成されたものと考えられる。本遺跡の調査結果では、それ以前にも集落が営まれた形

跡があるが極めて断続的である。

2

12世紀の末期には、源頼朝と平泉藤原氏による奥州合戦が起こり、その最初の戦いが阿津賀山の戦いである。阿津賀山は現在の福島県伊達郡にあり、ちょうど福島・宮城の県境付近で戦いが行なわれている。『吾妻鏡』文治五（1189）年八月七日の条には、

加之於苅田郡、又構城郭、名取広瀬両河引大縄柵、泰衡者陣干国分原鞭楯

とあり、藤原泰衡は名取川・広瀬川に柵をつくり、鞭楯（仙台市榴岡といわれる。）に陣取っていたといわれる。また、同八月十二日には、頼朝は多賀国府に入ったとある。この時の戦いで今泉付近がどのような状況にあったかは知るすべがないが、この戦いにまきこまれていたことは想像されるところで、また、『吾妻鏡』文治五年五月二日の条に

戊子、囚人佐藤庄司、名取郡司、熊野別当は厚免を蒙りて名本所に帰ると云々

とあり、名取郡司・熊野別当が平泉側について参戦したことがある。この合戦の論功行賞で陸奥国内では、葛西・伊沢・千葉・北条・三浦・和田などの御家人が支配者となって登場する。入間田宣夫氏によれば、奥羽の住人がそのまま地頭として留まったものはほとんどなく、また、例外的な場合でも、領主層はなんらかの新旧交代があったという[4]。現在の仙台市は、かつての名取郡・宮城郡に属しており、郡地頭職は転々と交替している。このうち仙台周辺には、国分胤通（千葉常胤の五男）が宮城郡国分庄（三十三郷）および名取郡に四千余貫の地(国分系図)、また結城朝光が名取郡内に所領を給与されている（白河古事考)。そして伊沢家景（のちの留守氏）が大河兼任の乱（文治六年）後、陸奥国留守職となり、宮城郡高用名地頭職が与えられた。今泉城を含む名取郡は、「最初、和田義盛に与えられたが、建保元（1213）年和田合戦の後、三浦義村に替えられ、宝治合戦によって三浦氏が滅亡すると北条時頼の所領となった」[5]のである。鎌倉時代の中期以後には、村・郷内にも地頭職が成立していたようで、本遺跡の館の成立もこのころであろうと考えられる。とすれば、鎌倉時代の住人は村あるいは郷の地頭クラスの人間であり、本遺跡は地頭クラスの館であろうとの推論が成り立つ。

鎌倉後期には、北条氏の所領が全国にひろがり、比較的早い時期に所領となったところでは、政所（郡）→地頭代（村・郷）といった支配方式が採用された。陸奥国では、遠田・名取などでこの方式が採用されたという[6]。現在の名取市上余田字大徳に「政所」という地名が残っており、これはその間の事情を物語るものであろうか。ここには、元徳三（1331）年の板碑があり、また屋敷跡があったと伝えている[7]。また、鎌倉末期には、津軽の曽我氏が名取郡土師塚郷・四郎丸郷（若四郎名・おたかせ村）の地頭を兼ねていた。

『石巻斎藤文書』には、

下　平光広　（時頼）（花押）

司令早為陸奥国名取土師塚郷地頭代職事

右人、依勲功之賞可為彼職状如件　以下

宝治元年七月十八日

とあり、また

曽我大郎光高童房名乙丸謹言上

欲早任重代相伝知行被成下安堵国宣備亀鏡

津軽平賀郡内岩楯大平賀沼楯村々幷奥州名取郡四郎丸郷

内若四郎名等全所領弥抽合戦忠勤事（中略）

右岩楯大平賀村々者重代相伝所領知行于今無相違（中略）

次四郎丸郷内若四郎名者、今荒一廃田地、雖為数々年

畠地、光高曽祖父宝治合戦勲功所領随一也、而當

知行于今無相違（後略）

とある。このうち、土師塚郷は現在の仙台市藤塚と考えられ、名取川北岸の河口付近に位置している。また、四郎丸郷は仙台市四郎丸付近と考えられている。いずれにしろ、名取郡内における曽我氏の所領は、名取川両岸の河口およびその周辺にあったと考えられ、隣接する今泉城と何らかの関係があったのであろう。

3

鎌倉幕府が倒れ、建武新政が始まると、新たな奥州支配が始まる。すでに後醍醐天皇は、元弘三（1333）年に北畠顕家を陸奥守に任じている。このころには、北条氏余党である北奥羽の領主層が抵抗を続け、仙台周辺の武士（留守氏・国分氏など）も顕家の軍に従って参戦している。国分氏（第六世盛胤）はこの戦いの勲功の賞として、建武三（1336）年名取郡の内、飯田・日辺・今泉を賜ったという。

建武三年正月源顕家ノ軍ニ従ヒテ各所ニ転載シテ武功ヲ擢デ

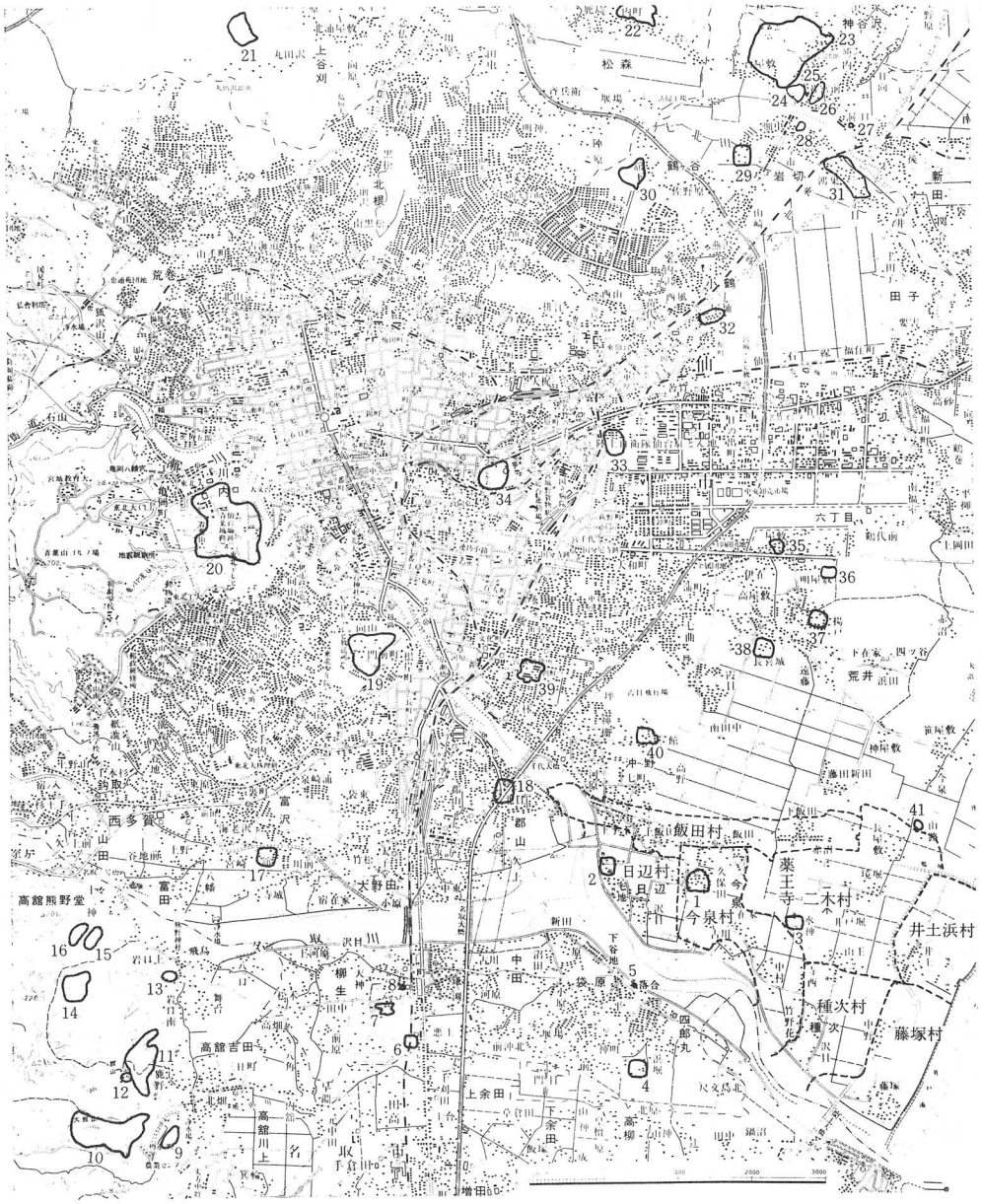
同年二月七日奥州国分荘名取郡ノ内飯田・日辺・今泉ノ邑ヲ

賜ハル（国分氏系図）

とある。したがって、逆に鎌倉時代の飯田・日辺・今泉は北条氏の所領だった可能性が考えられる。

しかし、留守氏・国分氏とも足利氏（北朝）に転じて戦うようになる。また、正平五(1350)年には、足利尊氏・直義の間に内紛があり、奥州探題の吉良貞定・畠山高国らも二派に分れて戦うことになる（岩切城合戦)。この時、国分氏は吉良方に、留守氏は畠山方についたが、吉良方が勝利を納め、国分氏は勢力を増大させ、留守氏は没落したとされる（餘目記録)。

また粟野氏は、もと越中国粟野庄の住人で、鎌倉時代には、伊達郡・信夫郡に所領をもって



1．今泉城跡	縄文～江戸	15．小館(古館)跡	中世	28．今市遺跡	平安・中世
2．日辺館跡	室町	16．黒崎城跡	中世	29．稲荷館跡	中世
3．二木館跡	中世末	17．富沢館跡	室町	30．笹森館跡	中世
4．四郎丸館跡	鎌倉	18．北目城跡	室町・江戸	31．鴻ノ巣遺跡	古墳・平安・中世
5．落合観音堂板碑群	中世	19．茂ヶ崎城跡	中世	32．小鶴城跡	中世
6．前田館跡	中世	20．仙台城跡	江戸	33．南ノ目城跡	中世
7．安久東遺跡	古代～江戸	21．長命館跡	鎌倉	34．国分鞭館跡	中世
8．伊豆野権現坂碑群	中世	22．松森城跡	中世	35．北屋敷遺跡	古代～明治
9．桑島館跡	中世	23．高森城跡(岩切城)	中世	36．地蔵浦遺跡	中世
10．大館山館跡	中世	24．東光寺城跡	中世	37．荒井館跡	中世
11．高館城跡	中世	同城板碑群磨崖仏	中世	38．長喜城館跡	中世
12．熊野那智神社	中・近世	25．地蔵堂板碑群	中世	39．若林城跡	(中)、近世
13．熊野経塚	中世	26．若宮前遺跡	古代・近世	40．沖野城跡	中世
14．熊野堂大館跡	中世	27．洞ノ口板碑群	中世	41．岡崎囲遺跡	中・近世

第122図　中・近世遺跡分布　破線は明治17年以前の村

いたが、粟野重直藤三郎の時に北朝について奥州名取荘（名取郡）に二千余貫を賜わり、康永二（1343）年に名取郡根岸城に移住した。のちの寛正年中（1460～66）には同郡北目城に移っている。

さて、北朝方の内紛後、南朝方が勢力をもり返し、国府周辺では再び南朝・北朝の戦いが活発に行なわれている。これらの戦いの一つに広瀬川の戦いがある。『白河文書』観応三(1351)年十月二十九日吉良貞家状に

結城参河守朝常甲恩賞事、申状一通謹令進覧候、去年宇津峯宮
伊達飛弾前司、田村庄司一族及宮城郡山村宮以下凶徒、寄一来名取
郡之時、差一進代官結城又七兵衛尉幷軍勢、同十一月廿二日、
於同郡広瀬川、致軍忠之尅、郎徒被疵候（後略）

とある。

ところで、この頃の国分氏の動静をみると、前述したように北朝方につき、また、北朝方の内紛時には、勝大将である吉良方に属していた。しかし、その後理由は不明であるが、国分寺郷の所領が没収され、相馬氏の所領になったという。『相馬文書』には、

陸奥国宮城郡国分寺半分国分淡路守幷一族等跡内地頭職事、為八幡介景朝跡之替所宛行也、
早守先例可致沙汰之状如件

貞治二年七月十一日

相馬讃岐守殿

正平十（1355）年以降、奥州は足利方の支配下となり元中九（1392）年には南北朝は統一される。

今泉城跡より検出された15号溝や31号溝は、およそこの時期ころのもので、14世紀終末～15世紀前半（Ⅲ期後半）の所産と考えられる。つまり、11号・21号溝がほぼその機能を果たさなくなった段階で、新に構築された溝であり、館を区画する掘と考えられる。この15号・31号溝は、Ⅳ期には埋没が完了している。

4

仙台周辺では、南北朝時代に一時没落した留守氏が本領を安堵され、また、国分氏も一部所領を没収されたが、両者とも再び勢力を拡大していった。室町時代には、伊達氏の勢力圏がしだいに北上し、戦国期には仙台周辺も伊達氏の勢力下に入っている。国分氏は応仁・文明頃伊達氏と戦い、文明四（1472）年に和睦している。また、留守氏は、すでに永和三（1377）年に伊達氏と一揆契約（伊達家文書）を結び、文明のころには伊達氏から入嗣して臣従化している。そして、粟野氏も文明年中には、伊達成宗と戦い服属している。しかし、これらの諸領主は、伊達氏の家臣になったのではなく、独立領主として地位を保っており、しだいに大名化してい

くのである。戦国末期には、先の粟野氏は国分氏の家臣となっている（国分文書）。

ところで、今泉村にはいくつかの寺社が存在しているが、このうち宝泉寺は大永三（1523）年に、円乗寺は元亀二（1571）年に開山したという。宝泉寺は『封内風土記』によれば、

> 今泉邑　（中略）如意山寶泉寺　曹洞宗　本郡宮沢宗禅寺末寺伝云、後柏原帝大永三年宗禅寺第四世海印舜巨和尚開山（後略）

とある。この中の宗禅寺は、名取郡根岸村宮沢（現仙台市根岸町）にあり、文安（1444）年に開山といわれ、ちょうど粟野氏が初めて名取郡に所領を賜った翌年になる。すなわち、前述したごとく、康永二（1443）年に名取郡に所領をもらい、根岸城（現茂ヶ崎城）に移住し、寛正年中に同郡北目城に移っている。のちの元和二（1616）年に宗禅寺は、北目城主粟野大膳大夫国重の菩提寺となっている。したがって、戦国期以来、宗禅寺は粟野氏との関連が極めて強いと考えられよう。この宗禅寺の末寺である宝泉寺も、粟野氏と何らかの関連があったという推測が可能であろう。

国分氏の領地は、三十三ヶ村あったといわれるが、今泉村などの名取川下流域北岸の六郷地区の村は含まれていない。したがって、国分氏が六郷周辺の領地を家臣である粟野氏に与えたもの、とは考えられないであろうか。『封内風土記』によれば、

> （前略）茂ヶ崎　在根岸邑　古壘也　名跡志曰　後小松帝　応永中
> 粟野大膳諱不伝者　領名取郡北方三十三郷　居此城

とあり、また、『仙台領古城書立之覚』茂ヶ崎城の項には、

> 右城主粟野大膳但名取郡北方三十三郷之旗頭之由申伝候

とある。名取郡北方三十三郷には、今泉村など六郷の村々が含まれている。また、今泉城の南東には小在家という地名があり、中世における今泉城の在家の名残りであろう。この小在家には、現在でも粟野姓を名のる人が多い。

一方、『仙台領古城書立之覚』にある今泉城主須田玄蕃は、上述のことなどを考慮すれば、粟野氏あるいは国分氏の家臣であると考えられよう。特に前者の可能性が強い。この点については、すでに飯沼氏も、須田玄蕃は「国分氏或は其の一門の家中ではなかったか」と指摘している[8]。今泉城は、先の『仙台領古城書立之覚』『仙台領古城書上』のいずれにも粟野氏関係の城の中に記載されていることから、粟野氏との関連が強いと考えられ、このことは前述の指摘の傍証となろう。

『仙台領古城書立之覚』には、

> 今泉村
> 一平今泉城　東西三十六間　南北四十五間
> 右城主須田玄蕃ト申者百年前迄居住仕候　西ニ掘形有リ

四重之土手有り

とある。『仙台領古城書立之覚』は享保十三(1728)年の写本であり、その原本は、延宝五(1677)年に幕府に提出した『仙台領古城書上』と考えられる。したがって、「百年前迄」の記述は1577年となり、須田玄蕃はおよそ天正年間以前に住んでいたことになろう。また、先の宝泉寺（あるいは円乗寺）は須田氏の氏寺的性格をもつものと考えられないだろうか。

天正年間の国分氏の動向をみると、伊達晴宗の五男彦九郎政重（国分第十七世盛重）が家督をついでいる。こののち、国分氏には政重をめぐって、家中騒動が起きている（伊達家治家記録・伊達文書)。また、国分系図には、

慶長元年三月、故アリテ国分城ヲ没落ス

とあり、このころには国分氏は滅亡し、その一部は伊達政宗の家臣になっている。

一方、粟野氏の動向をみると、大崎合戦（天正十六年、伊達政宗と宮城県北の大崎地方を領地としていた大崎氏との戦い）に参戦し、大任を果している。したがって、領地も安堵されたものと考えられる。

天正十七～十八（1589～90）年には、伊達政宗の所領は宮城県の南半に及んでいる[9]。豊臣秀吉の小田原征伐後に安堵された所領の中に、名取・宮城の名がみえる。今回の調査では、１号溝（館に伴う掘と考えられる）など今泉城Ⅳ期の遺構群が、およそこの時期に相当する。この１号溝からは、数多くの桃山～江戸初期の陶磁器が出土している。須田玄蕃が天正年間ころまで住んでいたとすれば、１号溝が江戸初期ころまで機能していたと考えられることから、須田玄蕃以後もこの館に武士が住んでいたことが推測される。しかし、須田氏なのか、粟野氏あるいは伊達氏の家臣なのか、にわかに決めがたい。

5

伊達政宗は、慶長六（1601）年に仙台城を普請し、北目城から移っている。その後、仙台藩では六郷地区などで盛んに新田開発が行なわれている。飯沼氏によれば[10]、慶長年間頃に郷六(現在の宮城町郷六)の住人である佐藤出雲家友が二木村三本塚に帰農し、開発を行ったという（佐藤家系譜)。また、『政宗君治家録引證記』慶長十六（1611）年十月二十八日の条には、

一、十月廿八日巳刻、大地震、津波入候ニ御分領中ニ而人千七百
八十三人、牛馬八十五疋死ト也

とあり、この時、名取川の河口付近の村は相当な被害にあっている。元和（1615～）頃には、福島県の相馬地方の相沢・大友・柴崎等の武士が荒所開発に当ったという。現在の今泉城跡及びその周辺には、大友・遠藤姓の人が多く、六郷地区内では現在でも相沢・大友姓が多くみられるのも、先の理由によるためであろう。一方、今泉城跡の北東に位置する下飯田は、寛永二（1625）年に留守家水沢城主宗利が小野新右衛門常勝に開墾を命じ、また、その後水沢に居住

する家臣42名を飯田村・今泉村等に帰農させている。災害の復旧や仙台藩の財政の建直しのために、荒所や新田開発が盛んに行われ、おそくとも17世紀前半ころ（元和～寛永）までには、純農村に変貌したものと考えられる（一応17世紀前半以後をⅤ期として扱っている)。ところで、前述した下飯田にある薬王寺から板碑が発見され、この碑は正安元（1299）年の「胎蔵界大日如来」をあらわしたものであるという。飯沼氏によれば、下飯田は藩政期の新田部落であり、この板碑は元来今泉村にあったと考えられると指摘している(11)。そうであるならば、この板碑は今泉城Ⅱ期に成立した館跡と関連するものであろう。

さて、江戸時代になると、名取川や木曳堀を利用した水運交通が盛んに利用されるようになり、名取川の水量の豊富さと相まって、馬渡船・平駄船・高瀬船が航行した。現在の仙台市四郎丸落合、日辺駄賃場は船着場だといわれている。このことは、中世にも水運が利用されていたことを推測させる。今泉城跡出土の多数の陶磁器類等は、こうした水運を利用してもたらされたものであろうか。

なお文末ではあるが、県立図書館吉岡一男氏に協力いただき、また文献では特に、大石直正他『中世奥羽の世界』、仙台市史３・８、飯沼勇義『六郷部落の歴史的考察(一)・(二)』に負うところが大である。改めて感謝申し上げたい。

注

(1)江戸時代以前は、日辺村・飯田村・今泉村・二木村・藤塚村等に分かれていたが、明治に入って統合され六郷村となった。現在では仙台市の一部となっている。

(2)飯沼勇義　1900　「六郷部落の歴史的考察(一)」『宮城県の歴史と地理』　国書刊行

(3)　同　　上

(4)入間田宣夫　1978　「鎌倉幕府と奥羽両国」『中世奥羽の世界』　P78　東京大学出版会

(5)　同　　上

(6)　同　　上

(7)名取市　　『名取市史』

(8)飯沼勇義　1900　「六郷部落の歴史的考察(二)」『宮城県の歴史と地理』

(9)小林清治　1959　『伊達政宗』人物叢書28　吉川弘文館

(10)(2)に同じ

(11)(8)に同じ

5．遺跡の構成 ―まとめにかえて―

今泉城跡は、縄文時代後期から江戸時代という極めて長期にわたる複合遺跡である。したが

って「今泉城」という遺跡名は適当ではない。しかし、この遺跡を最も特徴づけるものに中世の城館跡の存在があり、すでに古く仙台市の遺跡台帳にも「今泉城跡」として登録されている。ここではそれにしたがった。

縄文時代　さて、本遺跡の成立は縄文時代に遡る。この遺跡は、仙台市内における縄文時代の遺跡では、現在最も標高の低い遺跡であり、当該期の集落の領域に組み込まれたものと判断される。この傾向は続く晩期においても同様である。

弥生時代　その後、弥生時代中期（桝形囲式期）には、再び本遺跡にも生活の営みが開始された。しかし、遺構は前回の調査において、土壙・ピット各1基が確認されている程度で、なお不明な点が多い。おそらく、生活の中心は他に存在するのであろう。

古墳時代　古墳時代前半には遠見塚古墳を頂点として、仙台平野にも１つの地域社会が形成され、顕在化するとみてよいであろう。本遺跡では、塩釜式期～南小泉式期の遺物が出土し、前回の調査では、竪穴遺構や土壙が検出されている。この時期の居住者たちは、前述の地域社会の構成員として位置付けられよう。しかし、集落の構造については不明である。

平安時代（第123図）　その後、平安時代の初め頃までは、空白期間が続くようである。律令社会となって、新田の開発も活発になったと考えられる。本遺跡の北方には仙台東効条里跡があり、最近の調査では山口遺跡・地下鉄関係の各遺跡（現在整理中）では、水田跡の存在が確認されている。本遺跡の北西側にも、地形図等を観察すると条里跡の痕跡らしきものを見ることができる。集落の構造がしだいに明確になるのはこの時代からである。西側(昭和54年度調査)で、２×４間の建物跡が、東側では竪穴住居跡が分布し、その中間には数条の溝がある。継続的に集落が営まれるのは、しだいに律令体制に矛盾が生じ、崩壊しつつあった中期以後であろう。陸奥国では、10世紀後半から11世紀後半にかけて、武士たちが下向し、郡司や国衛の在庁官人などとなって土着したといわれ、伊具十郎平永衡や亘理権太夫藤原経清などが該当するという（大石直正：1978)。こうした武士たちがしだいに私領を拡大してくる。この時期には、灰釉陶器（陰刻花文碗？）や緑釉陶器が所有されており、前述の武士や在地領主層の居住地の性格をもつ集落の可能性が考えられる。また、３号住居跡としたものは、小鍛冶工房の可能性もあり、工房だとすれば、この時期の農民が鍛冶工房を所有できたのかどうかも問題となるところであろう。遺跡の性格については今後の類例を待ちたい。

Ⅰ期（123図）　平安時代末期（Ｄ期）から、館の成立以前（鎌倉時代中期）までをⅠ期とした。すなわち、12世紀から13世紀中頃となろう。この時期には２号住居跡や25号井戸跡が含まれる前半（12世紀）と８号・９号溝、６号・７号・10号井戸跡などや、また、Ⅰ区の南側に分布する建物跡群（12～15号）などで構成される後半（13世紀中頃以前）に大別できよう。

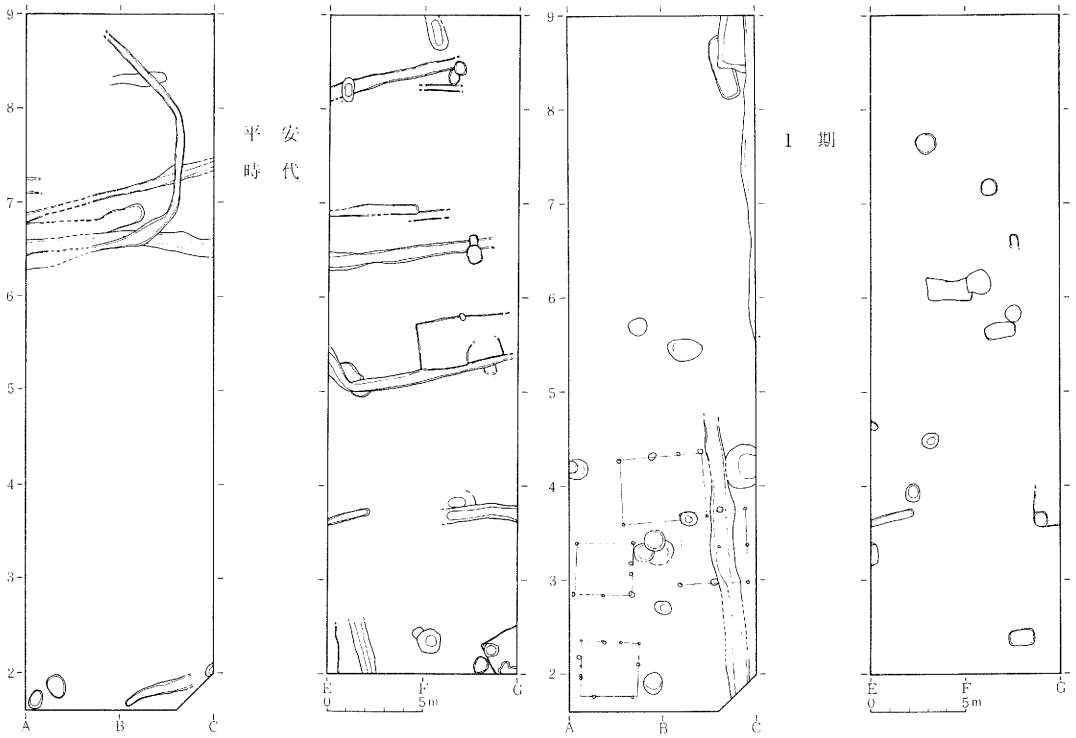
遺物としては、渥美の鉢・甕、常滑の水瓶・鉢・三筋壺、瀬戸灰釉瓶子等がある。これらの

遺物は、この時期の一般的な所有形態を示すものなのか、比較資料がなく判断できない。今後の調査事例を待つほかはないが、前時期と同様の性格をもつ集落が、継続的に営まれたものと理解したい。また、その後の城館を成立させる条件、あるいは基盤がしだいに整ったと考えてよいであろう。

II期（第124図）　11号・21号溝（堀）で区画される館の成立をもってII期の開始とした。この堀の底や最下層から常滑編年のIII期に属する甕や、県内産の陶器が出土すること、また、I期後半の遺構の中に、常滑や県内産の陶器が出土するものがあり、遅くとも鎌倉時代中期以後には成立したと考えられる。

II区では29号溝から11号溝へ改築していることから、さらに、少なくとも２時期の変遷が考えられよう。29号溝を埋め立てた後に、II区の11号溝には橋が架けられる。I区では堀の外(南)にいくつかの井戸跡が存在し、周囲の畑や水田に利用されたものであろうか。また、堀の内側（北）には、５号（A_4型）・11号等の建物跡、３号～５号井戸跡、22号・24号・26号（C_1・D型）等で構成される。

ところで、この時期には外堀が存在するのかどうか、確認されておらず不明である。前回調査した調査区の北側から堀が２条検出され、年代も今回の堀とほぼ一致するものと思われる。２条のうちのどちらに対応するものか不明であるが、南北の規模はおよそ22～27間と考えられ



第123図　各期の遺構変遷（I・II区）

る。現段階では、前述の規模程度の単郭の方形館と理解しておきたい。

III期（第124図）　II期に引き続き11号・21号溝によって区画される城館が存続する。出土遺物や国分氏の所領となったという文献記録から、およそ南北朝時代の初頭頃に開始年代を求めた。この時期には、C_2型やD_3型の建物が出現する。遺物としては木製品の出土が最も多く、物忌札や木簡、漆器椀などが注目されよう。陶器では県内産の陶器等から、後半には瀬戸の製品へと転換するようである。また、I区の堀（11号溝）から多量の礫が発見され、この時期の埋土に包含されていた。この礫が飛礫（つぶて）であるとすれば、南北朝の動乱期を象徴するかのごとくである。

さて、この時期の後半には、前述の堀がほぼ埋没を完了し、代って15号・31号溝が構築される。おそらく、新な館が成立したのであろう。31号溝の構底より15世紀の青磁が出土している。この時期の後半の遺構は、まだ、判然としないが、9号（D_3型）・10号（D_2型）の建物跡がある。

前述の溝はIV期に埋没が完了する。

IV期（第124図）　IV期は1号溝の成立をもってその開始とした。この溝は前回昭和54年度の調査では、さらに西側に伸びており、館を区画する堀と理解される。

遺構には、18号（A_3型）・20号（D_1orD_4型）建物跡や17号・18号・21号井戸跡、14号・32号土壙等がある。遺物では、美濃（黄瀬戸・志野・志野織部）、唐津、中国製染付・青磁、備前と考えられる壺（当時の伝世品か）があり、また、土師質土器皿も多い。石臼がこの時期に多いことも注目される。大豆・小豆等の出土と関連するものであろうか。IV期の縄張りがどのようなものか不明であるが、従来、外堀とされたものは、この時期のものかもしれない。江戸時代の記録によれば、東西三十六間、南北四十五間で、四重の土塁があったと記されているが、その内容は明らかではない。須田玄蕃なる人物が居住していたのはこの時期であろう。

V期（第124図）　IV期の城館が消滅し、しだいに農村に変貌する時期をV期の開始とした。IV期からV期への画期は、一国一城令の施行あるいは仙台藩の荒地開発が盛んに行なわれ、大規模な検地が行なわれた元和～寛永年間と考えられる。したがって、V期の開始年代はおよそ17世紀前半と理解したい。さて、この時期の遺構はI・II区では19号井戸跡に限られる。16号建物跡も考えられるが、明らかではない。I・II区とは対称的にIII区Eトレンチでは多くの井戸跡や柱穴が検出されている。また、前回の調査区の16号溝や10号井戸跡がある。

第124図　各期の遺構変遷（Ⅰ・Ⅱ区）（時期を特定できないものは複数の時期に示したもの）

まとめ

今回の調査で明らかになったのは以下のとおりである。

○すでに縄文時代から江戸時代の複合遺跡であることが知られていたが、中・近世の実体がより明確となった。

○中・近世の陶磁器や木製品、金属製品等の内容がより明確となり、遺構の変遷がかなり理解できるようになった。特に陶磁器では、東北地方の日本海側の事例との比較が可能となり、大きな成果となった。

○仙台市では始めての発見となった木簡、また東日本では例をみない中世の物忌札等貴重な遺物が検出できた。

○東北地方の古代から中世への展開を知る貴重な遺構や遺物の検出は、特に注目される事例となろう。

第Ⅵ章　付　　章

Ⅰ．今泉城跡の木簡について

国立歴史民俗博物館　平　川　　南

第１号

〔是ヵ〕

・□舅の□□×

〔是ヵ〕〔十ヵ〕

・□舅の□×

長さ（11.0cm）×幅（2.2cm）×厚さ（0.3cm）

11号溝埋土下部出土。下端は欠損している。柾目材

第２号

〔アカ〕〔ヒカ〕ラ　ウン　ケン

・□□ 急々如律令

長さ（19.6cm）×幅（2.7cm）厚さ（0.2cm）

11号溝埋土下部出土。形状は、上端を山形に削り、下端も尖らせている。片面は剥離され

木簡の面を失っている。柾目材

第３号

（天カ）
・□□□□☆
・□□急々如律令

長さ（20.4cm）×幅（2.7cm）×厚さ（0.3cm）

11号溝埋土下部出土。形状は第２号木簡とほぼ同じ。柾目材

第４号

・□□☆

（梵字大日如来カ）
・𑖀天□□急々如律令

長さ（19.4cm）×幅（2.5cm）×厚さ（0.3cm）

11号溝埋土下部出土。形状は第２号・第３号木簡とほぼ同じ。柾目材

考察

「急々如律令」は、もともと中国で公文書の末に付された法律用語で、「急速に律令の如く」施行するように命じた言葉であったが、魏晋時代に道教が呪符として取りいれたとされている。我が国へは古代に呪句の１つとして、入ってきた。当初は陰陽道と深く結びつき、中央や地方官衙およびその周辺で専ら用いられていたが、中世に入ると、広範に普及し、民間信仰の中に根づいたのである。

頭部を山形に削り、下端を尖らせた形状と慣用の呪句「急々如律令」の存在から、第２・３・４号木簡の３点はいずれも呪符木簡と判断できる。

第２号木簡の「急々如律令」の上文の５字は□(ア)・□(ヒ)・ラ・ウン・ケンとされ、広く用いられる胎蔵５字の真言であり、諸尊に普通する真言である。一般に七難即滅、七福即生を希う胎大日真言として各方面で用いられるという(註)。

第３・４号木簡は五行押点と「急々如律令」の呪句がみえる。おそらく、この２点の呪符は天刑星の信仰に関係するものであろうか。天刑星は諸々の疫鬼を食らい、摧邪の主として信仰を得た星で、その効験が意識されて呪符によく見られるものである。

近年、全国各地における中世の遺跡の発掘調査で、数多くの呪符木簡が出土して、注目されている。これらは古代にはじまった呪符木簡が中世に盛行したことをものがたっている。今泉

城跡の呪符木簡もこうした傾向に合致するもので、当地方における中世の信仰生活を解明する上で貴重な資料といえるのであろう。

〔註〕 水野正好「八萬四千六百五十四神王呪符の語り」(「古代研究」18．1979)

2．今泉城跡から出土した木製品の素材

尚絅女学院短期大学保育科　木村　中外
東北大学理学部附属植物園　内藤　俊彦

埋蔵文化財の発掘によって、数多くの木製品が出土されている。これらの木製品の素材に、どんな植物が利用されているかが、解明されることによって、その遺跡の周辺の植生や植物相あるいは、物資の移動経路など、その当時の生活環境について、何らかの情報提供ができれば、今後の調査研究に役立つものと思われる。そこで、仙台市南東部の今泉城遺跡から出土した、木製品のいくつかについて、素材に利用された植物が、何んであるかを調べてみた。

調査方法

調査は、遺跡出土品の中から、第27表に示したものを選んだ。貴重な出土品の価値を損わないように、顕微鏡観察の材料として耐えうる、1cm角くらいの出土品の細片を選んで、資料とした。資料は埋没していたために、もろくなっており、スライデング・ミクロトームで、切片を作成できなかったので、実体顕微鏡下で、カミソリ刃を用いて、手で切片を作成した。切片は木材の横断面、放射断面および接線断面の3方向を作成し、顕微鏡下で観察をして、植物名の判定を行なった。

調査結果および考察

第27表　木製品の素材名

出土品名	遺構名	出土区	台帳番号	年代	素材名	備考
杓の柄	11号溝	E－4	259	南北朝～室町初	ヒノキ	
杓の本体	11号溝	E－4	260	〃	ヒノキ	
漆器(板物)	21号溝	F－7	413	〃	ケヤキ	
漆器椀	11号溝	E－4	409	鎌倉後半	ブナ	材の性質および現在の利用面から考えて、イヌブナではなくブナとした。
漆器椀	1号井戸	Ⅲ区	405	江戸	ブナ	
漆器椀	11号溝	E－4	410	南北朝～室町初	ブナ	
漆器椀	29号溝	E－3	404	鎌倉後半	ブナ	
漆器椀	27号井戸	F－2	411	桃山～江戸初	ブナ	
漆器椀	11号溝	B－5	403	南北朝～室町初	ブナ	
漆器椀	11号溝	F－4	416	〃	ケヤキ	
有孔板状木製品	11号溝	A－5	87	室町前半	ケヤキ	
漆器椀	23号井戸	F－6	407	鎌倉前半	ケヤキ	
田下駄	2号井戸	A－7	396	鎌倉後半	クリ	

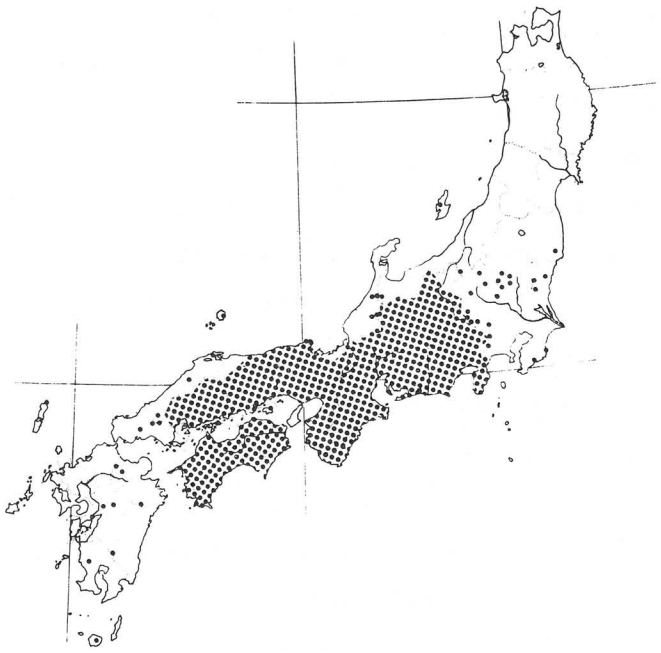
調査対象とした出土品は、第27表のように杓、漆器椀、漆品板物、有孔板状木製品および田下駄の５種類である。これらの５つの製品のうち、杓はヒノキで製作されており、現在利用されている材料と同じである。漆器に用いられた材料は、ブナおよびケヤキであった。この材料も現在漆器類の木地として、用いられているものである。ブナ材については、材の性質や現在の利用状況から、ブナとの判定を下した。田下駄の材料はクリであった。クリは現在、土台、杭や家具材として利用されている。特に、乾湿の変化に対して、耐性があるので、土台や杭に多く利用されており、湿気の多い水田の田下駄として、利用されていることは、興味あることである。

材料として利用されているヒノキ、ブナ、ケヤキおよびクリの４種のうち、ブナ、ケヤキおよびクリの自然分布は、宮城県内にもあるので、材料の収集については、県内からの産出は可能である。しかし、ヒノキについては、自然分布は福島県南部のいわき市以南であり、その分布も関東地方以北では、きわめて少ない(第125図)。また、ヒノキは林業上の主要樹種であり、現在宮城県内にも植栽されているが、ヒノキの植栽が宮城県内で、行なわれるようになったのは、明治以後であるという。このような状況から、杓に用いられたヒノキは、材料を中部地方以西から運搬して、宮城県内で製作したか、製品としての杓として、今泉城に持ち込んだかのいずれかであろう。

これら出土製品の材料が、明らかになってくることによって、人々の動きやその周辺の植生状況などについても、論究できるようになるものと思っている。

文献

倉田　悟：1971、原色日本林業樹木図鑑　第１巻、44、232.



第125図　ヒノキの自然分布（倉田：1971）

3．今泉城跡出土の動物遺存体

東北大学文学部院生　高橋　　理

今泉城跡においてはかなりの量の動物遺存体が、溝・井戸・土壙から出土している。それらは哺乳類3種・魚類4種・貝類5種に及んでおり、保存状態は貝類を除いては比較的良好である。最も多いのはニホンジカであり、ウマがそれに次ぐ。表28に遺構毎の時期別の出土状況を示した。殆どがII期及びIII期に属し、この時期に盛んに捕獲されたことが推測される。

1．出土状況

(1)　ニホンジカ

角・四肢骨が殆どで、脊椎骨は全く出土せず頭骨も前頭骨の一部が2点、下顎骨の一部が1点出土しているにすぎない。角・四肢骨には人為的な加工痕を残している例が多い。

(2)　ウマ

歯（臼歯）の出土が最も多い。その他にほぼ完全な上顎骨・肩甲骨・上腕骨・前腕骨・中手骨の一部が出土している。上顎骨についてその計測値を次に示しておく。（単位mm）

上顎骨―口蓋部長340.0　歯列長（P^2-M^2）160.0

また中手骨に人為的な加工痕が残存していることが注目される。

(3)　イノシシ

シカやウマに比較して非常に少ない。腓骨を加工したと推測される弁が1点出土している。保存されることの少い寛骨（腸・坐骨）が出土しているのが注目される。

(4)　魚類・貝類

魚類遺存体について同定できたものはメバル・ウナギ・スズキ・サケ科魚類である。すべて16号溝から出土している。出土量は多くない。

貝類はイシガイ・マシジミなど淡水産貝類が大部分で、これらは溝内に生息していた可能性もある。ヒメエゾボラは鹹水産貝類である。

2．性・死亡年齢推定

性・死亡年齢推定を行うことができるのはシカ・イノシシであるが、推定に必要な部位は少ない。以下にその結果を示す。なおシカの性・死亡年齢推定法は大泰司他（1980）による。

11号溝（II区）

II期　ニホンジカ　下顎骨：下顎高a23.1、前臼列長PL37.9、下顎高指数a/PL60.95よりメス。第1前臼歯臼歯率0.38より6～6.5歳　（単位はmm）

III(?)期　ニホンジカ　中手骨：骨端部が癒着せず消失しているため幼獣

29号溝

II期　ニホンジカ　中手骨：骨端部が癒着せず消失しているため幼獣

31号溝

III期　イノシシ　下顎骨:伴出した犬歯の大きさよりオス。臼歯の咬耗状態より成獣。

13号溝

III期　ニホンジカ　下顎第三大臼歯:磨滅指数7あるいは未萌芽で、1歳8ヶ月前後。

3．加工痕

シカの骨に加工が施された例が多い。21号溝出土の角は1点は切りとった角の枝を加工しているか未成品であろうか。他の1点は落角で上半分が切りとられている。完成した角器及びその使用目的については不明である。14号井戸出土の前頭骨のように明らかに角を切り取った痕跡を残している例もある。脛骨、中手・中足骨などは骨端部に鋭い刃物でそぎ落したような痕があり、骨自体を利用したというより解体、肉・皮の採取などの際の痕とみることができる。ただし11号溝(II区)出土の脛骨(右)は全体に敲打が加えられ、さらに両端に抉りが入り明らかに骨自体に加工を施している。イノシシの腓骨製の弁は研磨して整形したと推測される。また21号溝出土のウマの中手骨の遠位端に3ヶ所の切り込みがあるが加工目的は不明である。

4．まとめ

第28表に示したように動物遺存体はII～III期に集中しており、この時期に盛んに捕獲されたことがわかる。この場合、狩猟の選択性ということが考えられるが2で調べたようにシカに関しては幼・成獣の別なく捕獲されたとも考えられるが資料が少ないために、これが当時の狩猟そのものを反映していると断定することは危険である。性については不明である。またシカについて、脊椎骨は全く出土せず角・四肢骨に限られ、四肢骨に残る加工痕は解体あるいは肉・皮を採取した痕と推測されることから捕獲された後他の場所で解体され、必要な部分だけが遺跡内に持ち込まれたとも考えられる。角も盛んに利用されていることから、いずれにしてもシカは当時の重要な動物資源であったろう。動物資源としてはシカに匹適すると思われるイノシシの出土は非常に少なかった。イノシシは現在東北地方には殆ど生息しておらず、13世紀頃にはすでに相当少なくなっていたことも考えられる。ウマは、上顎骨の計測値からいくぶん小型と思われる。当時、相当価値があったと考えられるウマの中手骨に残っていた加工痕の意味については今後の類例の増加を待ちたい。

第28表　動物遺存体出土表

遺構＼時期	I　期	II　期	III　期	IV　期
11号溝(II区)	←?	シカ基節骨(1)脛骨(2.0) 下顎骨(1.0)肩甲骨(0.1) →? イノシシ距骨(1.0)踵骨(1.0)	シカ前頭骨(1)肩甲骨(4.0) 脛骨(1.1)踵骨(1.0) →?中足骨(1)基節骨(1) イノシシ下顎骨(1.0)	

11号溝（II区）		ウマ臼歯(1) ヒメエゾボラ(1) イシガイ(2)カラスガイ(1)	ウマ上顎骨(1)肩甲骨(0.1) ウマ前腕骨(1.0)	
21号溝		シカ角(2)上腕骨(0.1)脛 脛骨(0.1) ウマ中手骨(1)	ウマ臼歯(1)ウマ中手骨(1)	
29号溝		シカ肩甲骨(0.1)中手骨(1)		
31号溝			イノシシ下顎骨(1.0) 腸・坐骨(1.0)	
13号溝			シカ第三大臼歯(1.0)	
16号溝			メバル前上顎骨(0.1)椎骨 サケ科歯骨(1)椎骨 ウナギ椎骨スズキ椎骨	
16号井戸	?←——?——→		ネズミ頭骨(2)肩甲骨(1.0) マシジミ(1)	
	?←——?——→		カラスガイ(2)	
15号井戸（A－2）		シカ大腿骨(1.0)		
14号井戸（A－3）			シカ前頭骨一部(1)	
11号井戸（A－3）		?←——?——→		ウマ臼歯(1)
13号井戸（A－3）		←——?——→	イノシシ腓骨(1)(幷)	
1号井戸（A－7）		←——?——→	シカ脛骨(0.1)	
10号井戸（B－4）	シカ上腕骨(1.0)			
1号土壙（B－8）	ウマ上腕骨(0.1)			
33号土壙（F－6）				ウマ臼歯(1)

註：表中( )内の数字は左右の出土数を示す。ただし数字が１つの場合は左右の区別がつかないことを表わす。

矢印はそれがのびている時期にまで属す可能性のあることを示す。

参考文献：遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節推定法　大泰司紀之
考古学と自然科学　第13号　P.P.51～73　1980

4．今泉城遺跡の灰白色火山灰

東北大学農学部　庄子　貞雄
山田　一郎

今泉城遺跡の灰白色火山灰の分析結果を表29と表30に示した。なお、比較のため多賀城跡の泥炭の灰白色火山灰の結果を示した。実験方法と火山ガラスの形態については山田・庄子(1980)を参照されたい。

重鉱物含量は６％と低く、その組成はシソ輝石が大半で、次いで磁鉄鉱が22％、普通輝石が８％、角閃石が７％である。

軽鉱物組成は無色火山ガラスが63％と大部分で、長石が27％である。

火山ガラスの形態はスポンジ状が最も多く次いで顆粒状が多い。その他少量の繊維状と扁平状のガラスが認められる。

以上の結果は、多賀城跡の泥炭中の灰白色火山灰とほぼ同様の結果であり、宮城県一帯に認められる灰白色火山灰と同一のものとみてさしつかえない。

山田一郎・庄子貞雄：宮城県内に分布する灰白色火山灰について、宮城県多賀城跡調査研究所年報1979，97～102(1980)

表29．重鉱物組成(0.1～0.2㎜、比重2.9以上、粒数％)

	シソ輝石	普通輝石	角閃石	磁鉄鉱	重鉱物含量(重量％)
今泉城	63	8	7	22	6
多賀城	70	16	1	12	2

表30．軽鉱物組成(0.1～0.2㎜、比重2.9以下、粒数％)

	無色火山ガラス				長石	風化粒
	スポンジ状	繊維状	扁平状	顆粒状		
今泉城	36	2	1	33	27	
多賀城	69	2		17	11	1

引用文献

赤羽一郎　1977　「常滑―知多半島古窯址群」　『世界陶磁全集３　日本中世』　PP 208～214　（小学館）

伊東信雄　1935　「岩切城址発見の柱穴群」　『仙台郷土研究』第６巻３号

〃　　1961　「第五章五・鉄皿」　『陸奥国分寺跡』　P.105　（河北文化事業団）

岩本義雄　1981　「第Ⅲ章２(5)　金属製品」　『尻八館調査報告書』　PP.78～79（尻八館調査委員会）

上田秀夫　1982　「14～16世紀の青磁碗の分類について」　『貿易陶磁研究』No.２　PP.55～70　（貿易陶磁研究会）

太田博太郎　1971　『新訂　図説日本住宅史』　（彰国社）

小笠原好彦　1976　「東北における平安時代の土器についての二、三の問題」　『東北考古学の諸問題』
PP.407～422　（東出版　寧楽社）

小倉　強　1972　「二、論文三題」　『増補　東北の民家』　P.341　（相模書房）

加藤・阿部　1980　「(3)観音沢遺跡」　東北新幹線関係遺跡調査報告書―Ⅳ―宮城県教育委員会

北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団他　1980　『光明寺裏遺跡』　（北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団・東京都北区教育委員会）

小井川和夫　1981　「(2)上新田遺跡」　『長者原貝塚・上新田遺跡』　宮城県文化財調査報告書第78集　PP.３～112

小泉　弘　1974　「Ⅲ－７　木製品」　『青戸・葛西城址調査報告書』　葛西城址調査会　PP.89～90

後藤秀一　1979　「第五章Ⅻ　敲石・凹石・磨石」　『峠下聖山遺跡』　PP.167～171（七飯町教育委員会）

駒井鋼之助　1981　『かわら日本史』　P.40（雄山閣）

佐々木達夫　1981　「遺跡出土陶磁器の研究―北日本中世城館跡を中心にして―」
『金沢大学文学部論集　史学科篇』第２号　PP.１～48

笹間良彦　1981　『図録　日本の甲冑・武具事典』　（柏書房）

佐藤寒山編　1966　『日本の美術６　刀剣』　（至文堂）

佐藤洋　1981　「第Ⅱ章(3)　古墳時代の遺構と遺物」　『山口遺跡発掘調査報告書』
仙台市文化財調査報告書第33集　PP.218～219

宍戸武昭　1976　「Ⅳ－８　木製品」　『青戸・葛西城址Ⅱ区調査報告』　葛西城址調査会　P.60

庄子貞雄・山田一郎　1980　「宮城県に分布する灰白色火山灰について」　『多賀城跡―昭和54年度発掘調査概報―』
宮城県多賀城跡調査研究所年報1979　PP.97～102

潮田鉄雄　1982　「Ⅵ．鑑定及び分析　付－２」　『一戸バイパス関係埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』　一戸町教育委員会　PP.311

白鳥良一　1980　「多賀城跡出土土器の変遷」　宮城県多賀城跡調査研究所『研究紀要』Ⅶ　PP.１～38

芹沢長介・梶原洋・阿子島香　1981　「実験使用痕研究とその可能性　（東北大学使用痕研究チームによる研究報告　その４）」
『考古学と自然科学』第14号　PP.67～87

仙台市教育委員会　1976　『仙台市中田町安久東遺跡発掘調査概報』　仙台市文化財調査報告書第10集

仙台市教育委員会　1980　『今泉城跡―発掘調査報告書』　仙台市文化財調査報告書第24集

東京国立博物館　1976　『日本の武器・武具』

土岐山武　1980　「(1)安久東遺跡」　『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅵ』
宮城県文化財調査報告書第72集　PP.３～112

中沢厚　1981　『つぶて』　ものと人間の文化史44　（法政大学出版局）

中村たかを　1981　『日本の民具』　弘文堂　P.136・P.163

中村政樹編　1969　『日本の美術42　和鏡』　（至文堂）

丹羽茂・小野寺祥一郎他　1981　「(1)清水遺跡」　『東北新幹線関係遺跡調査報告書Ⅴ』
宮城県文化財調査報告書第77集　PP.３～540

能登志雄・中村嘉男　1967　「仙台」　『地形・表層地質・土じょう　仙台５万分の１』
土地分類基本調査　PP.１～25　（経済企画庁）

林英夫　1973　『秤座』　PP.33、39、261など。（吉川弘文館）
福島県教育委員会　1981　『梁川城跡―二ノ丸土塁発掘調査報告―』　福島県文化財調査報告書第94集
藤沼邦彦　1977　「宮城県出土の中世陶器について」　『東北歴史資料館研究紀要』第3巻PP.21～50
間壁忠彦　1977　「備前」　『世界陶磁全集3　日本中世』　PP.297～304（小学館）
宮城県多賀城跡調査研究所　1981　『多賀城跡』　宮城県多賀城跡調査研究所年報1980
宮本常一　1981　『絵巻物に見る日本庶民生活誌』　（中公新書）
三輪茂雄　1978a　『白』　ものと人間の文化史25　（法政大学出版局）
〃　1978b　『石臼探訪』　（産業技術センター）
村松貞次郎　1973　『大工道具の歴史』　（岩波新書）
森田勉　1982　「14～16世紀の白磁の分類と編年」　『貿易陶磁研究』No.2　PP.47～54　（貿易陶磁研究会）
安田喜憲　1978　「仙台湾周辺における後氷期の地形変化・海水準変動と人類の居住」　『上深沢遺跡　東北自動車道遺跡調査報告書Ⅰ』　宮城県文化財調査報告書第52集　PP.517～594
結城慎一　1982　『南小泉遺跡』　仙台市文化財調査報告書第35集
藤田宥宣・渡辺源二　1982　『山形県川西町　道伝遺跡　第2次重要遺跡確認調査概報』　（川西町教育委員会）

参考文献

秋岡芳夫・谷川建一編　1983　『日本の技①　みちのく玉芸の里　東北・北海道』　（集英社）
朝岡康二・田辺律子　1982　『暮しの中の鉄と鋳もの』　日本人の生活と文化7　（ぎょうせい）
岩井広寅　1978　「曲物の用途」　『大阪市立博物館研究紀要』第10冊　PP.1～32　（大阪市立博物館）
大三輪龍彦監修　1981　『掘り出された鎌倉　新発見の鎌倉遺跡と遺物展・図録』　（鎌倉考古学研究所）
黒川真頼　前田泰次校注　1974　『増訂　工芸志料』　東洋文庫254　（平凡社）
潮田鉄雄　1973　『はきもの』　ものと人間の文化史8　（法政大学出版局）
GK研究所・山口昌伴　1978　『主役の道具たち　図説／台所道具の歴史』　（柴田書店）
須藤護　1982　『暮しの中の木器』　日本人の生活と文化5　（ぎょうせい）
地学団体研究会仙台支部編　1980　『新編　仙台の地学』　（きた出版）
東京国立博物館編　1978　『日本出土の中国陶磁』　（東京美術）
古川庄作・竹本紀明　1979　『やきもののデザイン3　織部の絵文様』　双書美術の泉42　（岩崎美術社）
水沢市立図書館　1979　『解説　中世留守家文書』
満岡忠成他編　1980　『日本やきもの集成3　瀬戸・美濃・飛騨』　（平凡社）
〃　1981　『日本やきもの集成1　北海道・東北・関東』　（平凡社）
宮本馨太郎　1973　『めし・みそ・はし・わん』　民俗民芸双書76　（岩崎美術社）
〃　編　1979　『図録　民具の基礎知識』　（柏書房）
平井聖他編　1981　『日本城郭大系　別巻Ⅱ』　（新人物往来社）

編集後記

仙台市の中・近世の調査・整理を本格的に行なったことは初めてのことであり、アルバイトの人々には、大変御迷惑をかけてしまった。また、多くの研究者の方々の御指導・御協力をいただいた。改めてお礼申し上げたい。ところで、担当者が浅学のため、事実誤認や強引な用途や年代の推定等々危惧するものである。読者の御批評を願って是正していきたい。（さ）

今泉城跡全景
（昭和30年撮影）

今泉城跡近景（II区付近）

I区全景（南より）

図版I　今泉城跡・検出遺構

II区全景（南より）

I号住居跡全景（西より）

I号住居跡貯蔵穴

図版2　検　出　遺　構

2号住居跡全景（西より）

8号溝断面（Ⅰ区）
B－6区西壁

28号井戸跡全景（南より）

図版3　検出遺構（平安時代）

11号・29号溝（掘）全景
（II区西より）

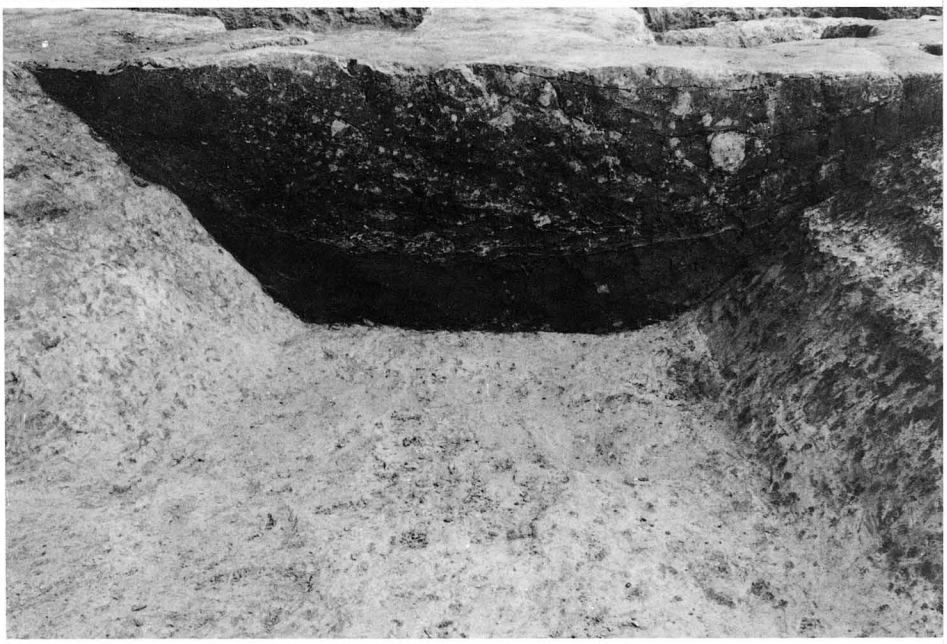
9号・11号溝（掘）全景
（I区西より）

11号溝断面（I区東より）

図版4　検　出　遺　構

11号・29号溝（掘）
（II区・南より）

29号溝断面（南より）
（E・F－3区）

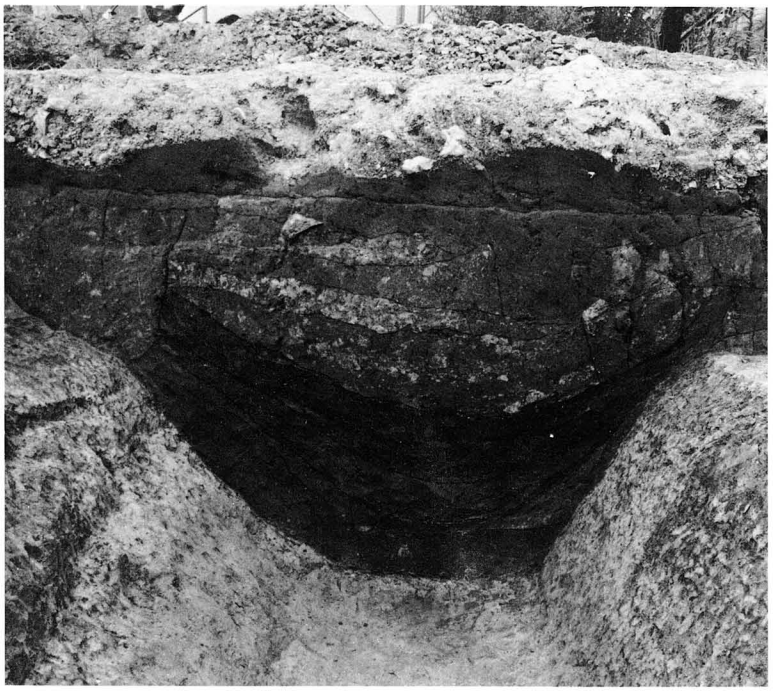


15号・16号溝全景（西より）

図版5　検　出　遺　構

21号溝全景（北より）

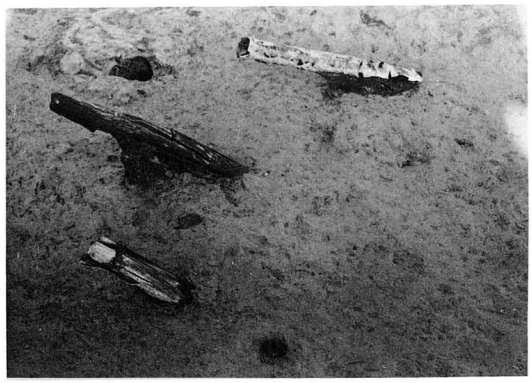
21号溝断面
（Ｆ－8区北壁）



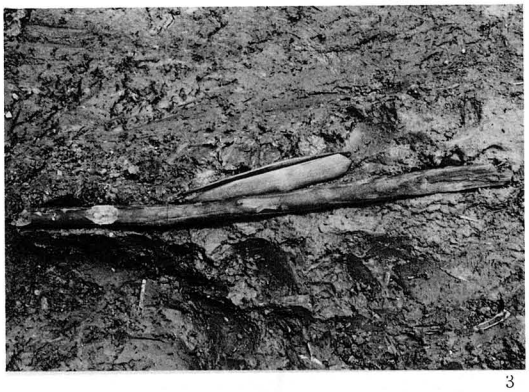
25号・26号溝全景（西より）

図版６　検　出　遺　構

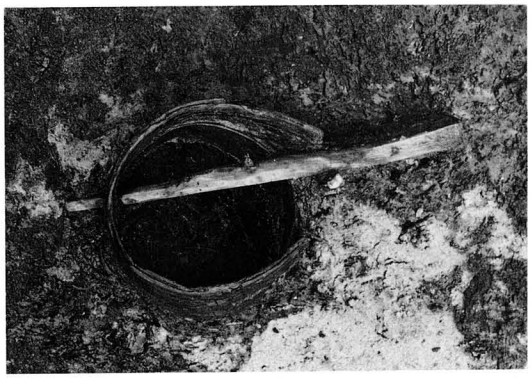
1



2



3



4

1．11号溝橋脚（北側）

2．　〃　（南側）

3．11号溝（Ａ－５区）物忌札出土状況

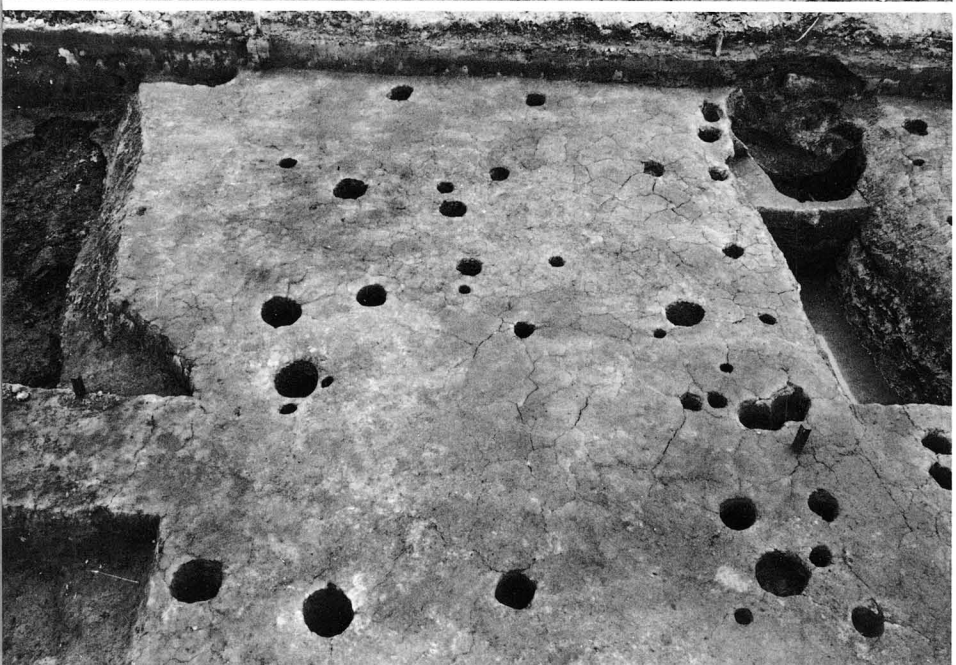
4．11号溝（Ｅ－４区）柄杓出土状況

Ⅰ号溝全景（北より）

図版７　検　出　遺　構

31号溝全景（西より）

31号溝断面（東より）
F－2区西壁



21号・22号掘立柱建物跡全景
（西より）

図版8　検　出　遺　構

15号井戸跡全景（南より）

4号・5号井戸跡全景（北より）

9号井戸跡全景（北より）

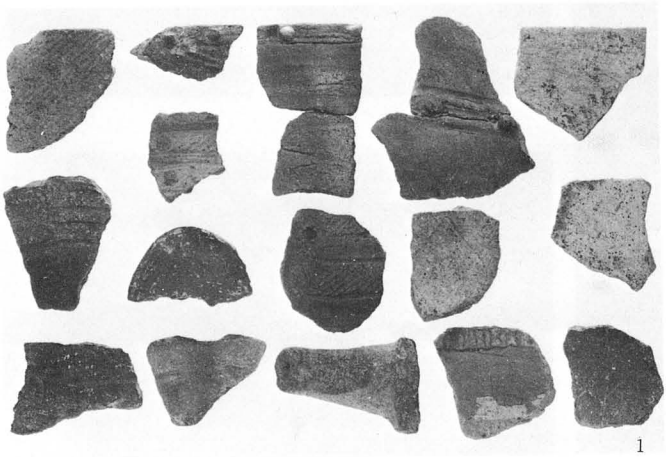
図版9　検　出　遺　構

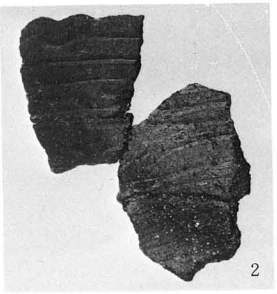
12号井戸跡遺物出土状況
（県内産陶器）

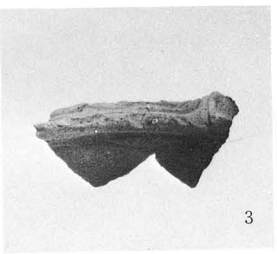
26号井戸跡全景（東より）

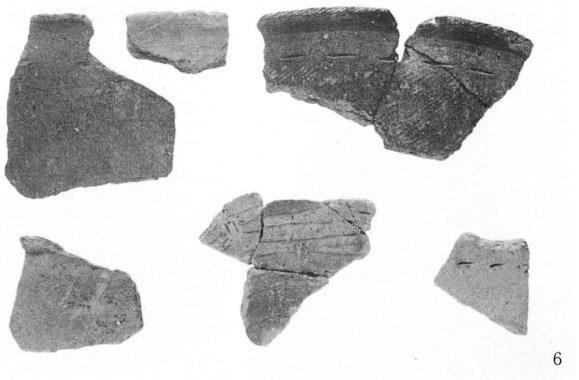
7号井戸跡全景（北より）

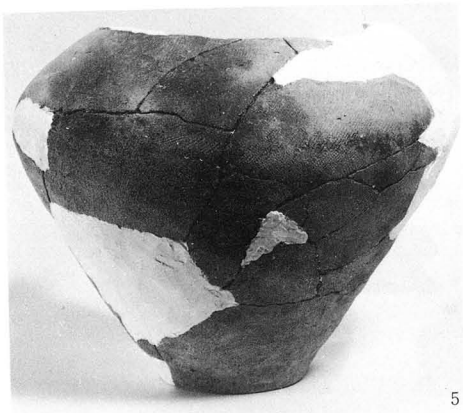
図版10　検　出　遺　構

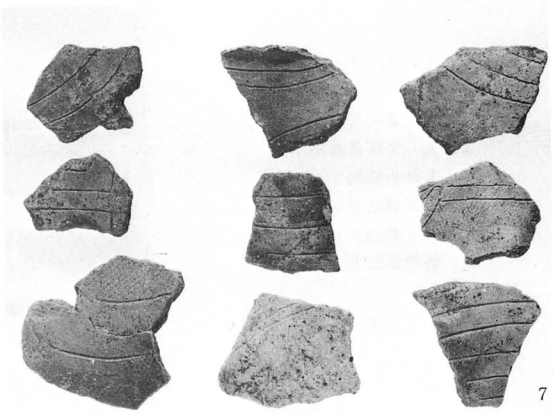






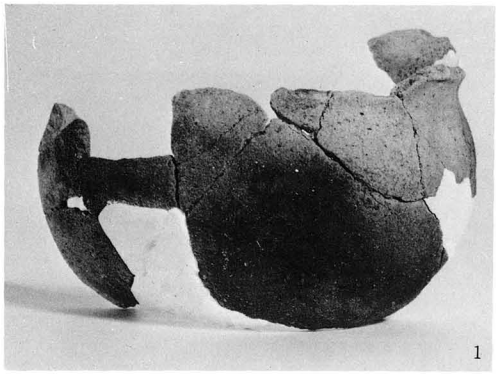


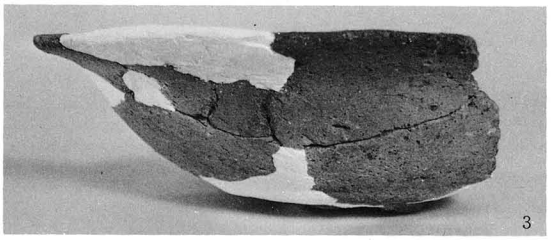


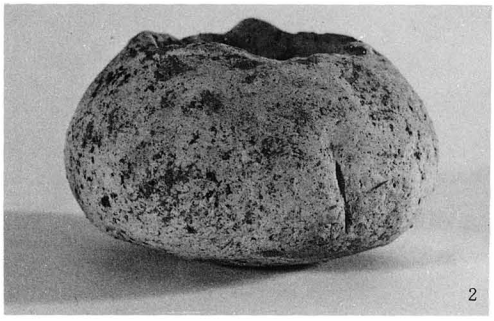


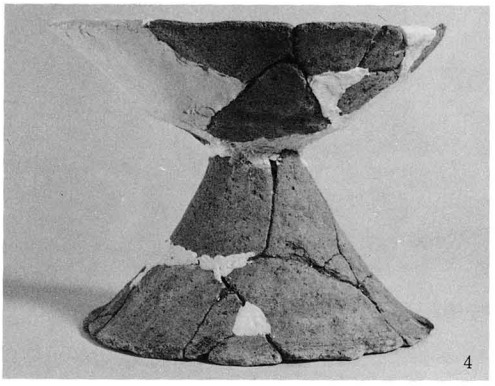
図版11　縄文・弥生時代出土遺物

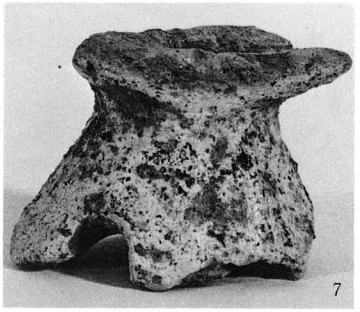
1．縄文後期、2･3．縄文晩期、4．弥生中期壺(15号溝出土)　5．弥生中期壺(B－3区出土)　6･7、弥生中期

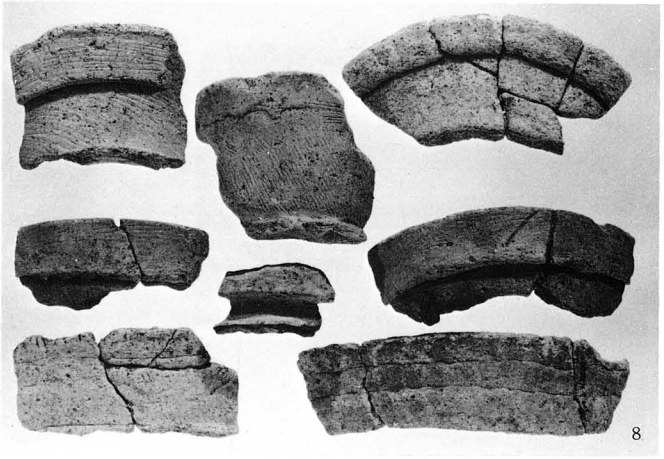






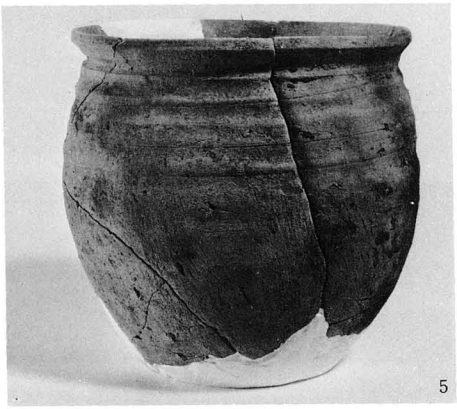


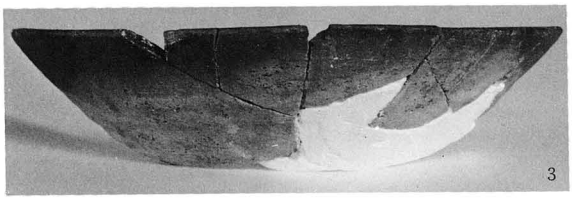


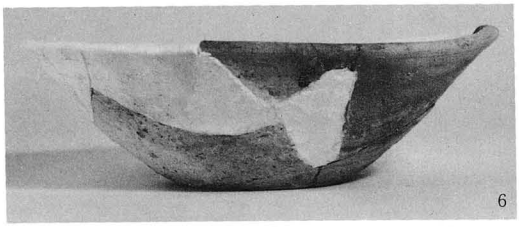


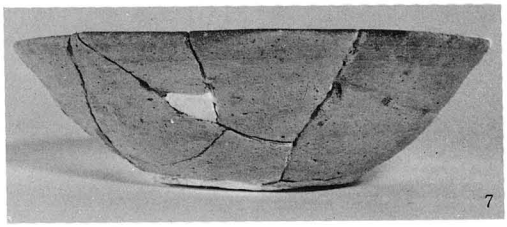
1．1号溝出土
2．B－6区Ⅲ層出土
3．B－8区Ⅲ層出土
4．A－7区Ⅲ層出土
5．5号土壙出土
6．11号溝出土
7．1号溝出土
8．各地区出土

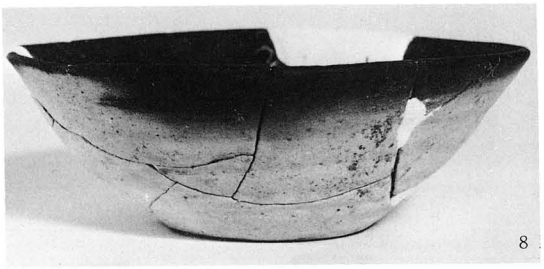
図版12　古墳時代出土遺物

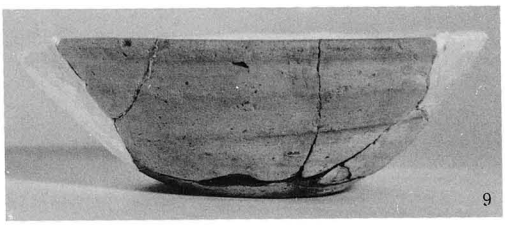


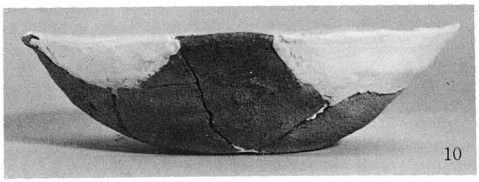


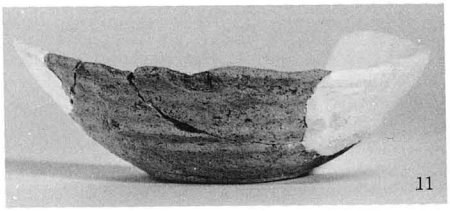






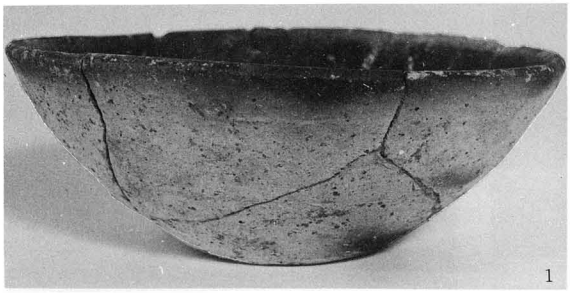


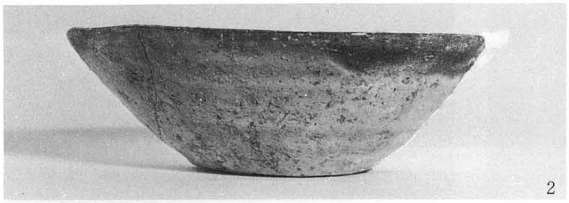


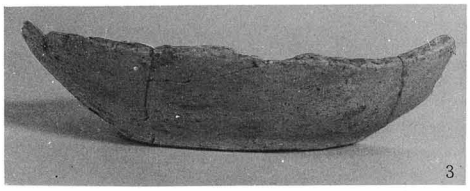


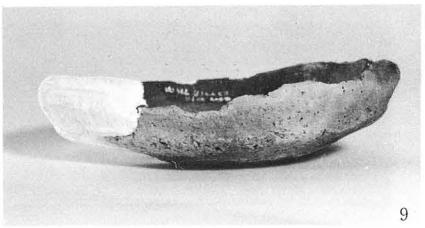
1～7．1号住居跡出土　10．11号溝出土
8．49号土壙出土　11．2層出土(F－2区)
9．34号溝

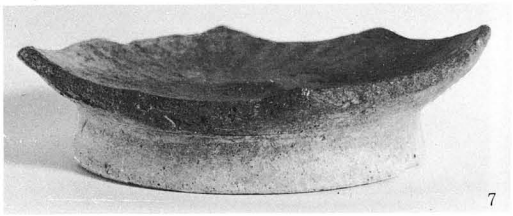
図版13　平安時代出土遺物(土師器)

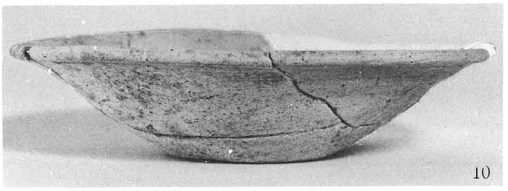


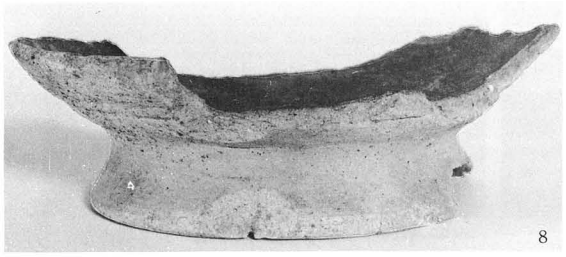


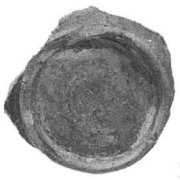






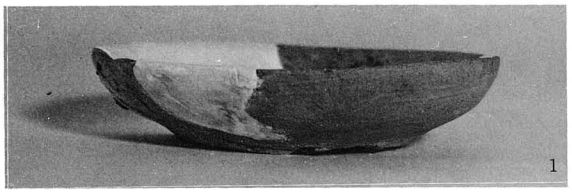


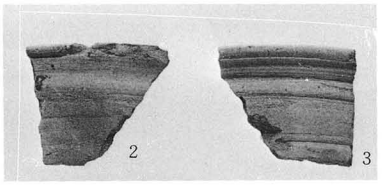


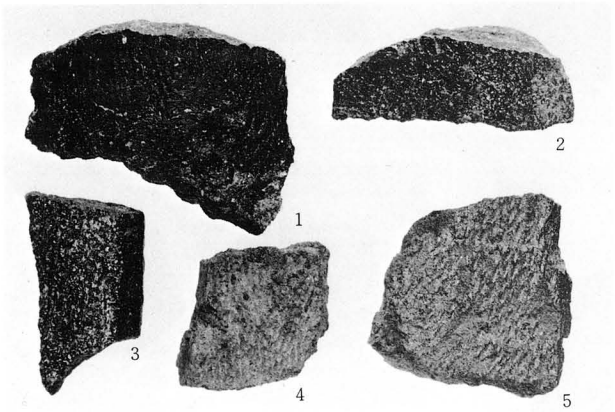


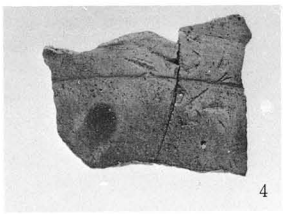
1～5．21号土壙出土　　9．25号井戸跡出土
6．18号土壙　　10．２号住居跡出土
7．30号溝出土　　11．19号溝出土(緑釉)
8．11号溝出土　　12．Ｂ－５ No.４ ピット出土(灰釉)

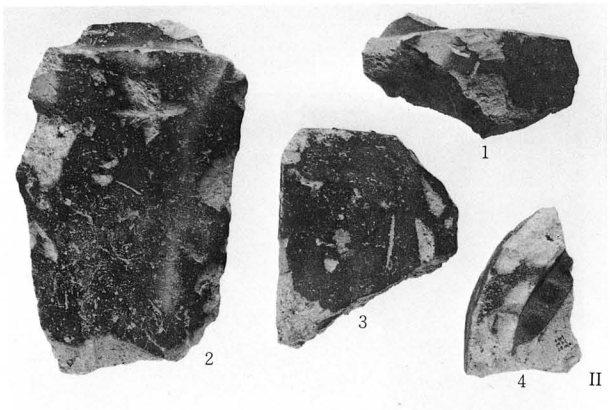
図版14　平安時代出土遺物（土師器・陶器）

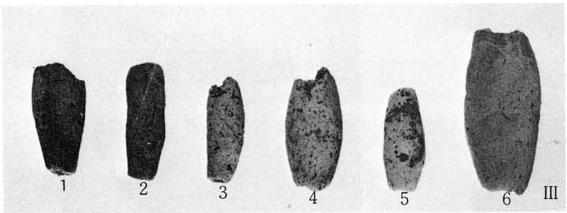


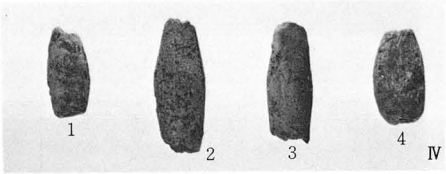








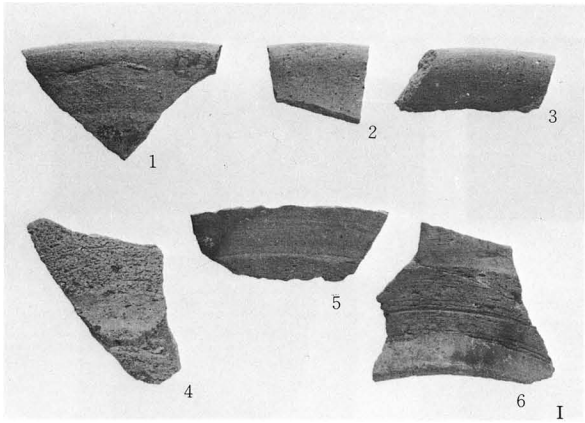


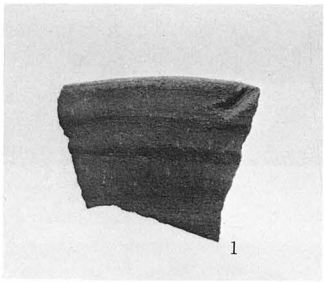


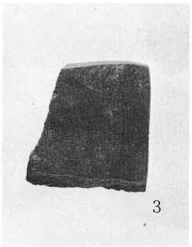
1.21M、2.28M(最下層)、3.11M(最下層)、4.II・III層(E－2)、5.11井、6.11M(底)、7.11M
I.{1.29M、2.11M、3.上層(B－3)、4.22井、5.6M}
II.{1.1M、2.18井、3.2M、4.1M}
III.{1.16M、2.33M、3.2竪・32M、4.III層、5.11M、6.11M(最下層)}
Ⅳ.{1.2竪、2・3.29M、4.28井(底)}

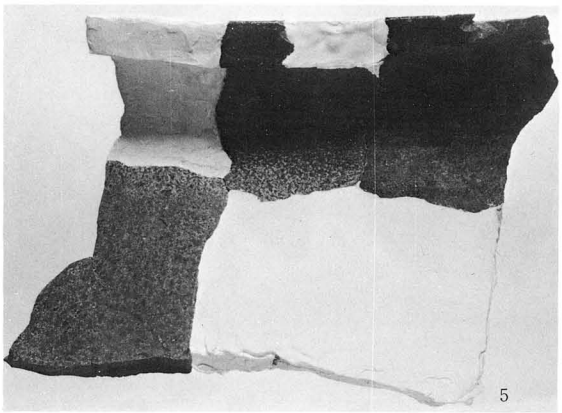
M：溝　跡
D：土　壙
井：井戸跡
竪：竪穴遺構
住：住居跡

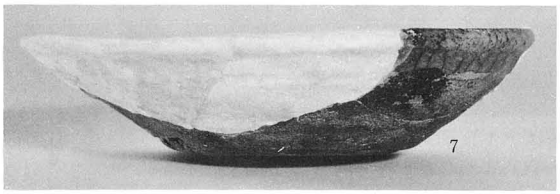
図版15　土師器、瓦、土錘

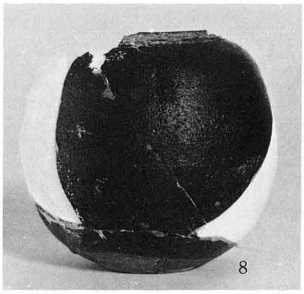






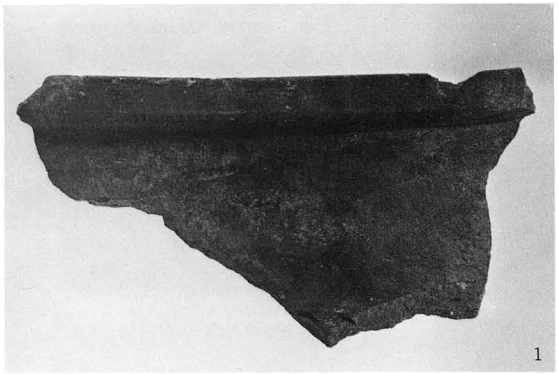


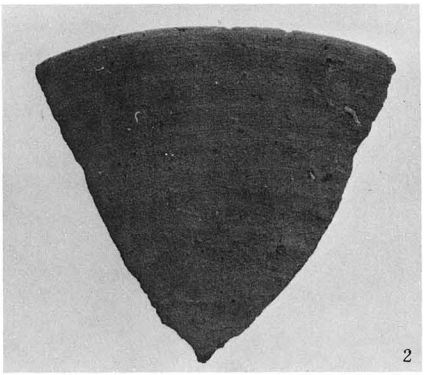


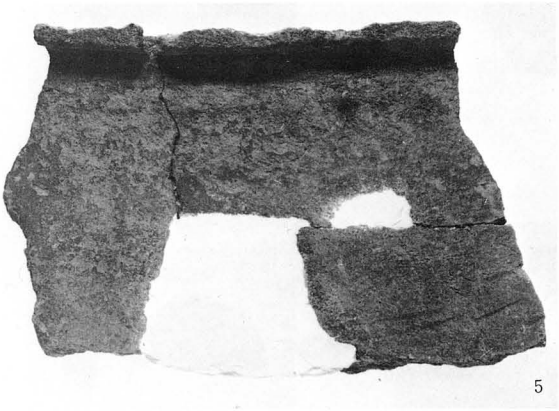


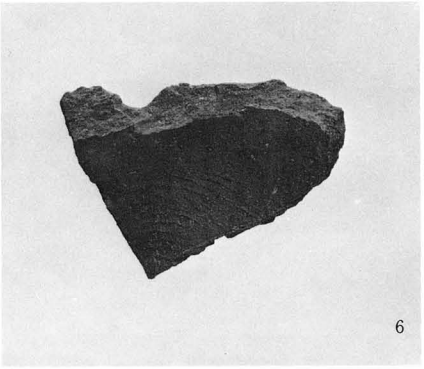
図版16　陶磁器(1)

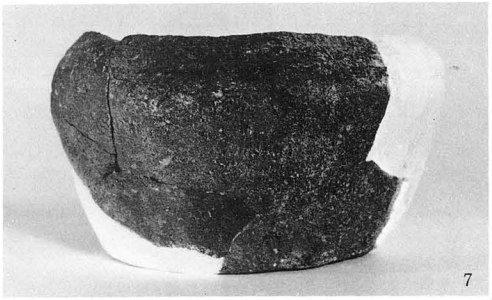
I　1. 11M(底)　2. 2住　3. II層(B－1)　4. 22井　5. 11M　6. 3M
1. 2住　2. 11M　3･4. 14M　5. 11M(底)、13M、9M　6. 26D　7･8. 11M





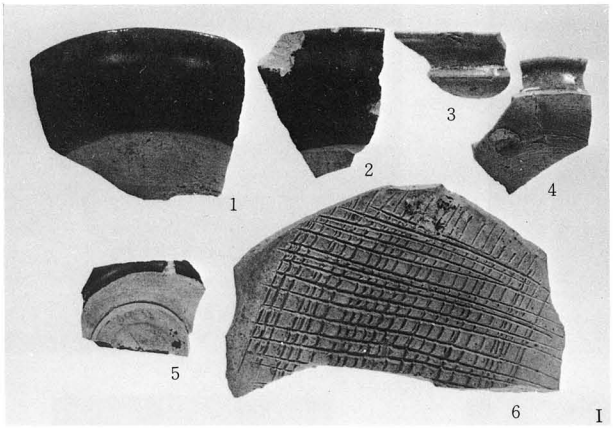


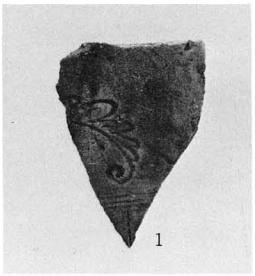


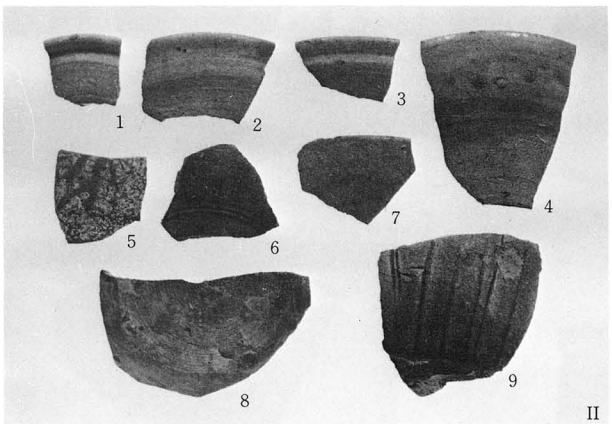


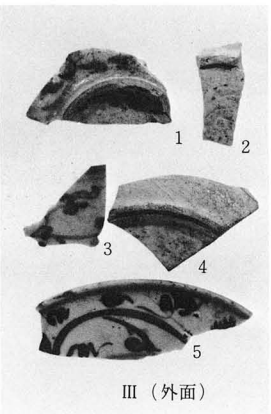
図版17　陶磁器(2)

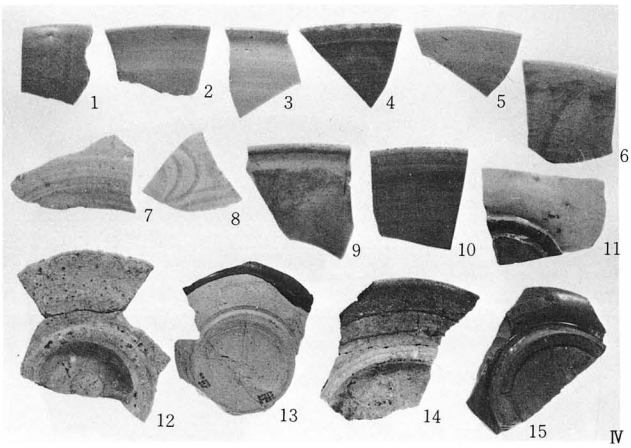
1･2. 21M　3. 11M・21M　4. 表採　5. 12M・14M　6. 32D　7. 21M　8. 8井

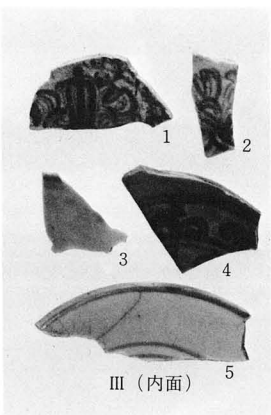






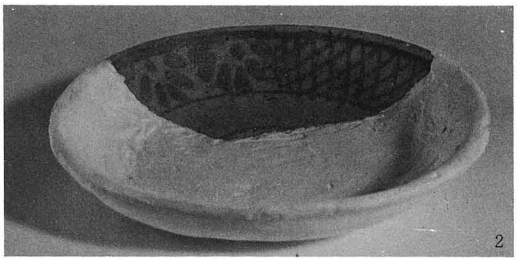


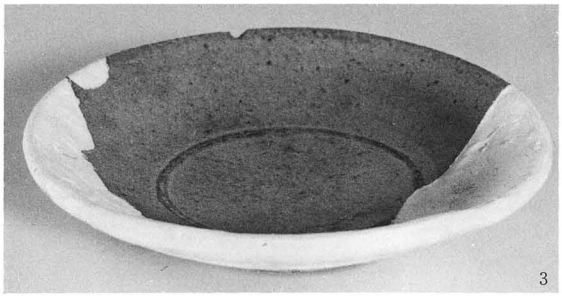


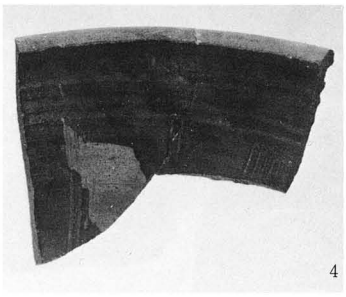


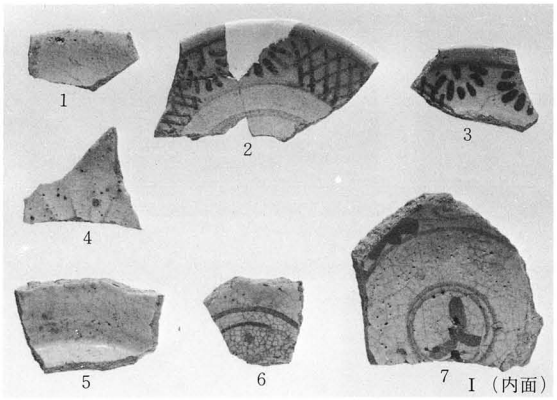
図版18　陶磁器(3)

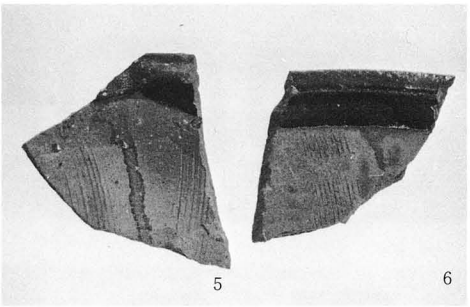
1．2.11M、I｛1～6.21M、II｛1.16M　2．12井　3．9M　4．12井　5．23井　6．II層(B－1)
7．表採　8．II層下(B－5)　9．II層下(B－8)｝
III｛1.31M　2．表採　3．26M　4．1M　5．15M　Ⅳ 1．31M　2．1D　3．No.15Pit(B－7)　4．3井
5．22井　6．15M　7．14M　8.9　11M　10．9井(B－4)　11．III層(B－5)
12．1M・2M　13．II層上　14．21井(F－7)　15．II層下(F－8)｝

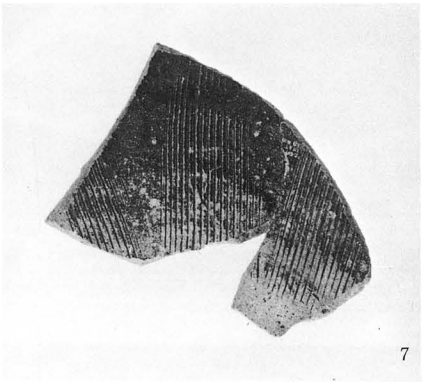


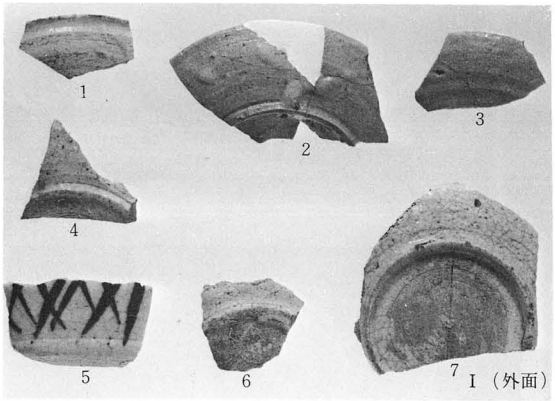






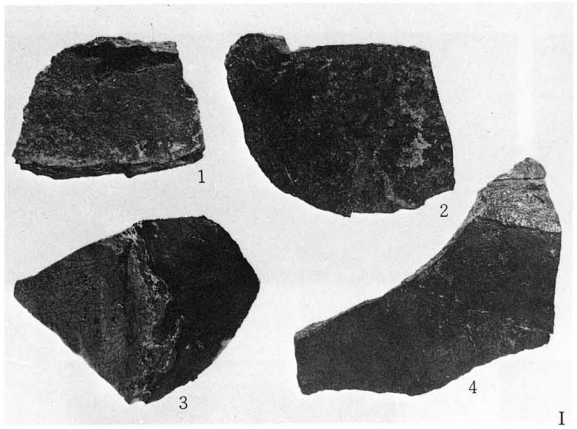


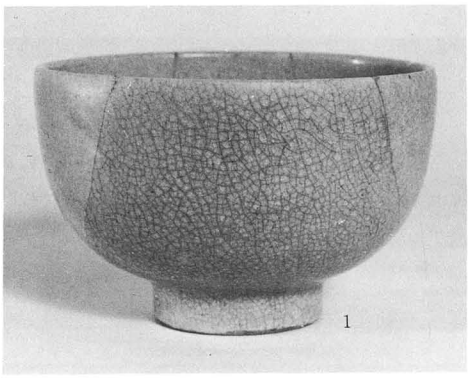


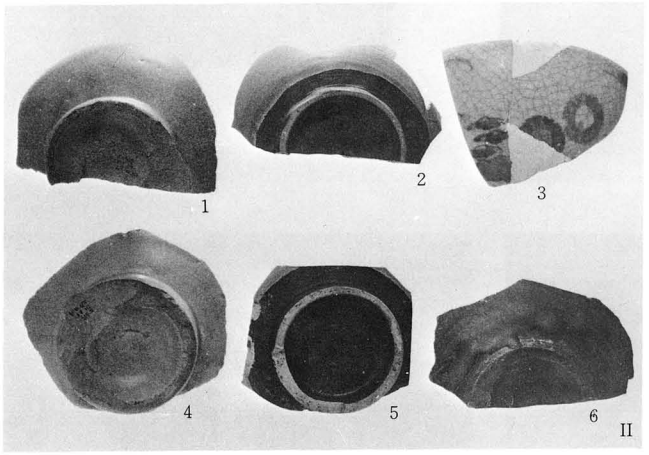


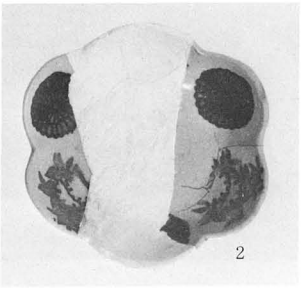
図版19　陶磁器(4)

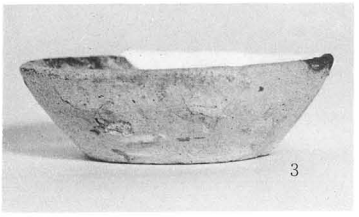
1．25M、2．21井、3～7、1M
I．{1．II層(A－3)、2．1M・15M・16M、3．II層(B－6)、4．II層(E－8)、5．21井、6．11井、7．33D}

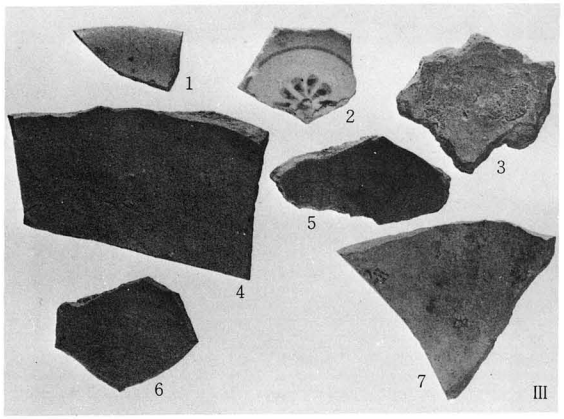


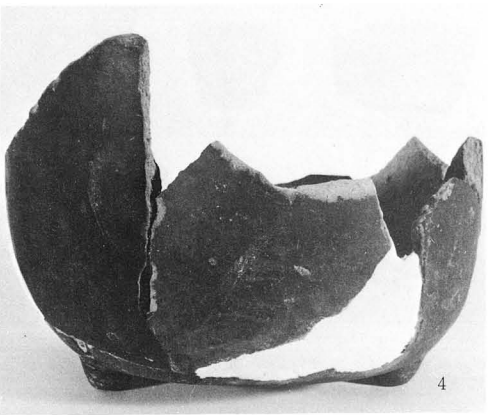


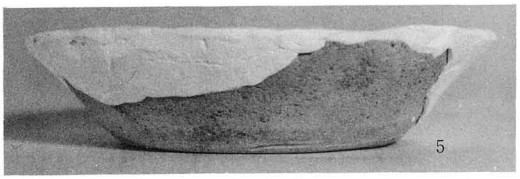


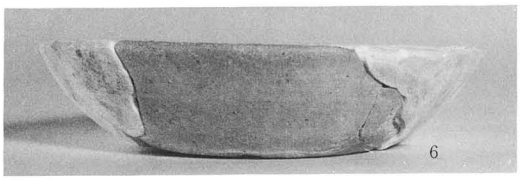






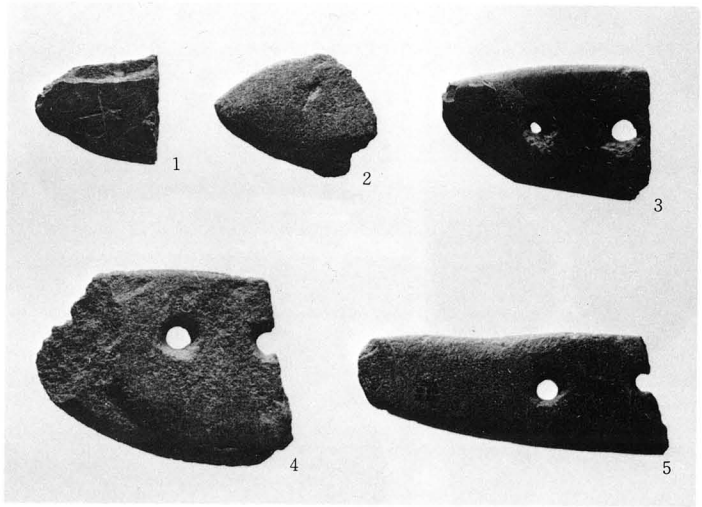


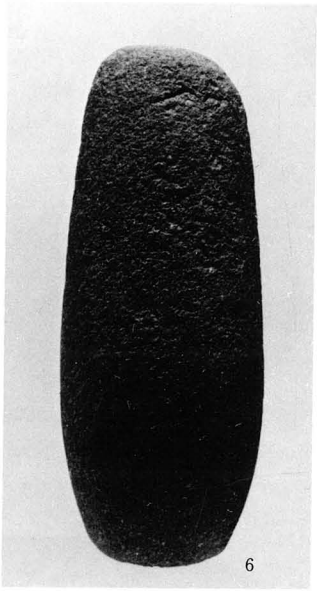


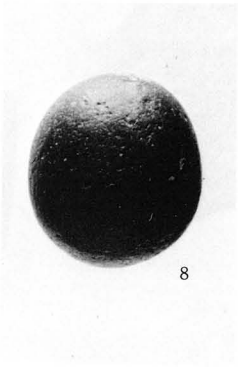


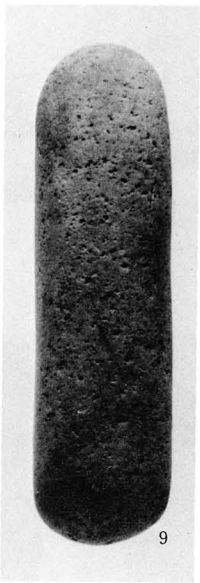
図版20　土師質土器、陶磁器(5)

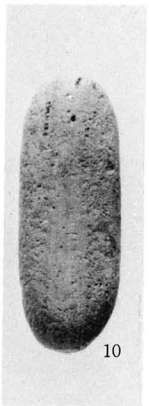
Ⅰ．1M、II．1M、Ⅲ．｛1　26D　2．20井　3．II層（E－3）
4．21井　5．II層（F－4）　6．26D　7．II層下（B－8）｝1～6．1M

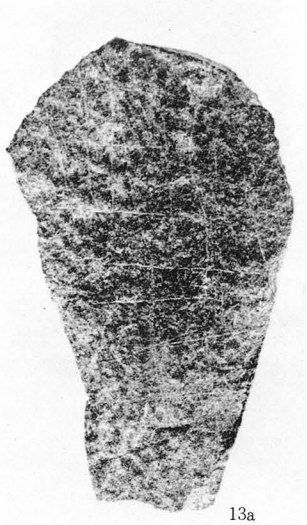


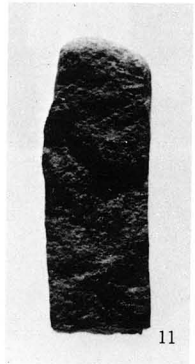






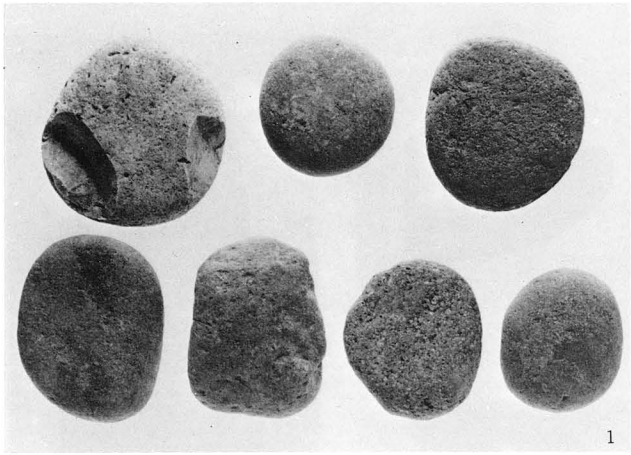


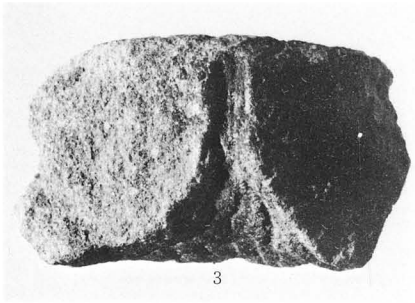


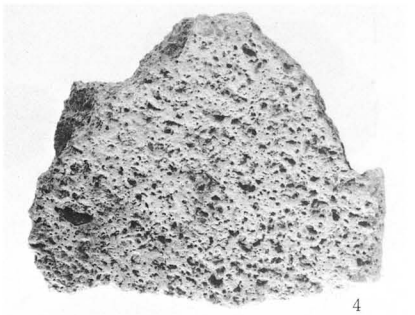


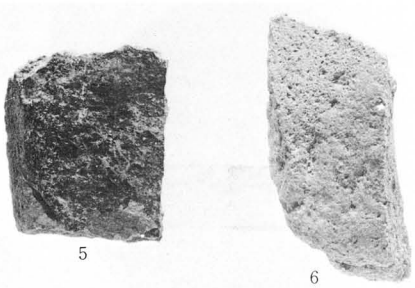
図版21　石製品(1)

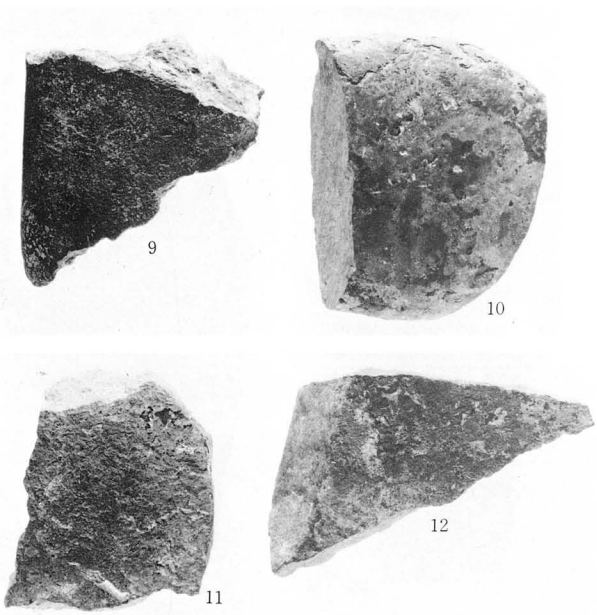
石包丁(1～5)、大型蛤刃石斧(6)、礫石器(7～12)　刻線のあるスレート(13a、b)









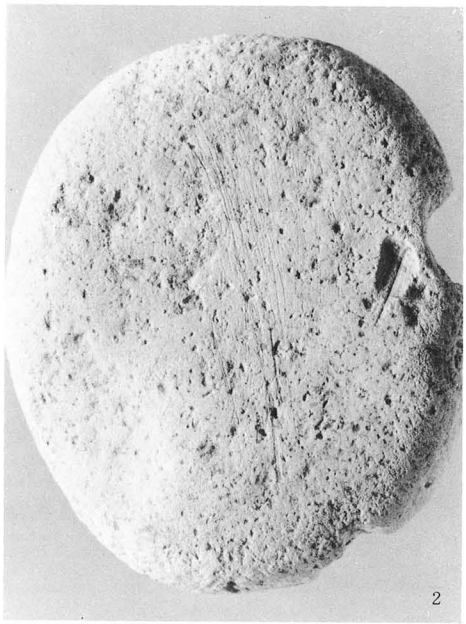


図版22　石製品(2)

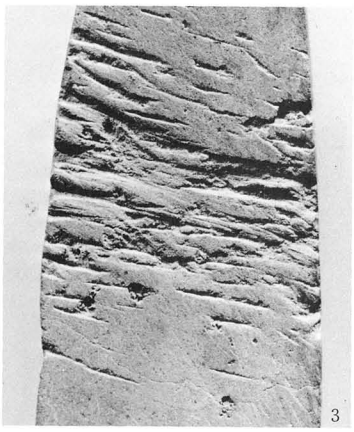
11号溝出土礫の一部(使用痕無)(1)、粉挽き臼・下臼(2・3)

大形礫石器　Ⅰ類(9・10)、Ⅱ類(11・12)、Ⅲ類(5・6)、Ⅳ類(7)、Ⅴ類(4)、使用痕有る珪化木(8)

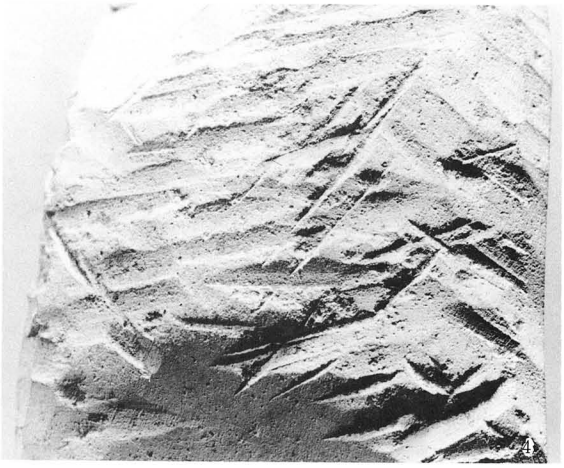
1



2

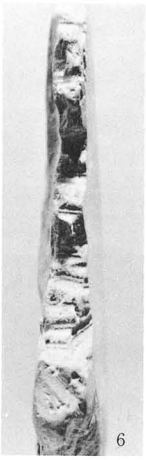


3



4

5

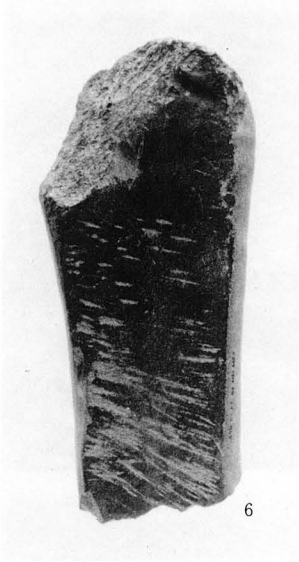


6

7

図版23　石製品(3)

礫石器の使用痕(１・２)、砥石の使用・加工(？)痕(3.5　No.４、６　No.１、７　No.25)



図版24　石製品(4)

砥石　Ⅰ類(1)、Ⅱ類(4)、Ⅲ類(2、5～8)、Ⅳ類(9・10)、Ⅴ類(11)、Ⅴ類(3・12・13)

1. 21M(F－7)
2. 9 D
3. 21M(F－8)
4. 1 M(A－7)鋤
5. 2井(井枠材)
6. 11M(E－4)下駄
7. 9井、下駄
8. 11M(F－4)草履
9. 11M(B－5)下駄
10. 2井、田下駄
11. 16井、附木(薪)

図版25　木製品(I)、履物・その他

1

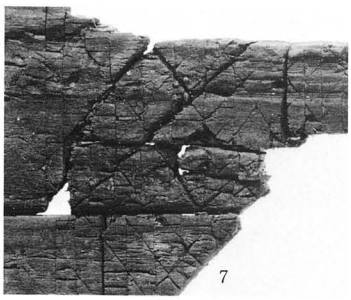
2

3

4

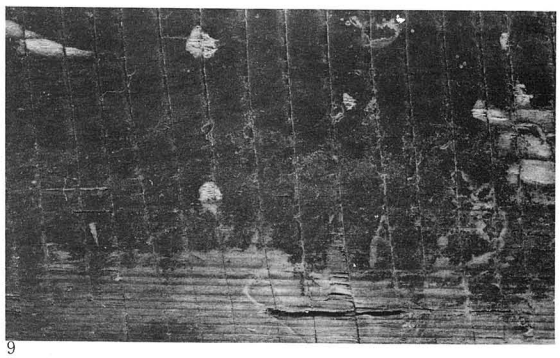
5a

5b


7

6

8

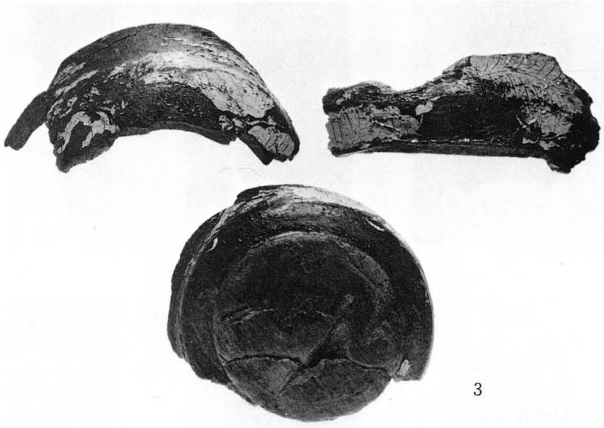

9

図版26　木製品(2)

1. 19井、2. 16井、3. 23井、4. 2井、5a.b 11M、6. 11M、7. 9井、8. 10井、9. 11M

1a

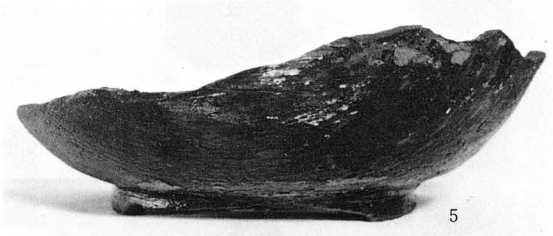
1b



3

2

4



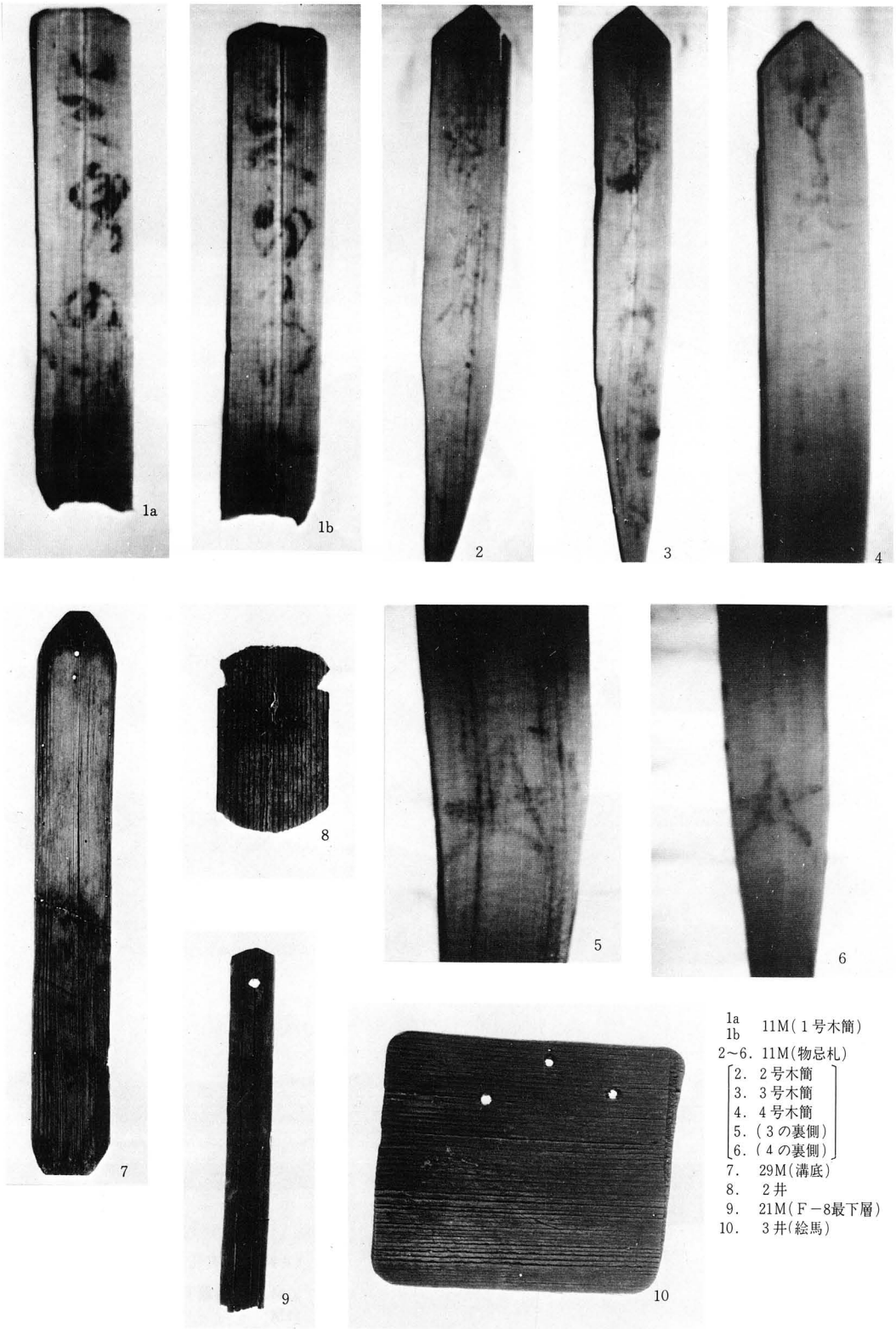
5

6

7

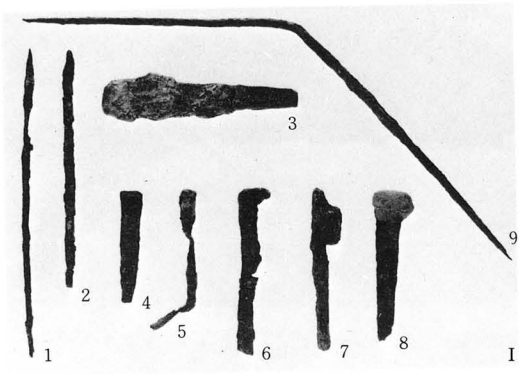
1 a
1 b　(4井)体部有孔
2．21M(F－7)最下層
3～7．11M

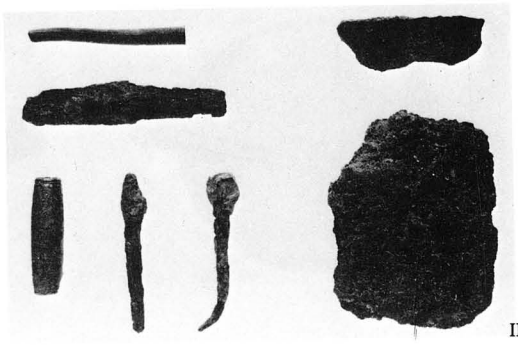
図版27　木製品(3)、漆器

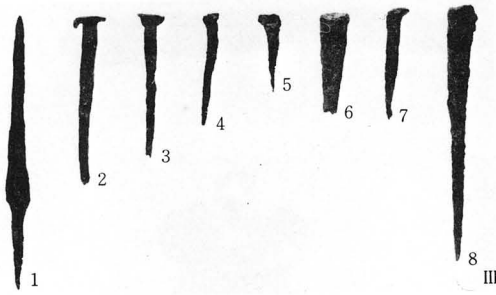


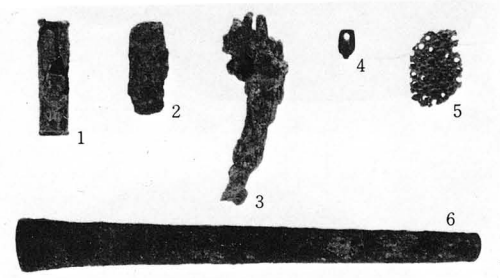
1a
1b　11M(1号木簡)
2～6. 11M(物忌札)
[2. 2号木簡
3. 3号木簡
4. 4号木簡
5. (3の裏側)
6. (4の裏側)]
7. 29M(溝底)
8. 2井
9. 21M(F－8最下層)
10. 3井(絵馬)

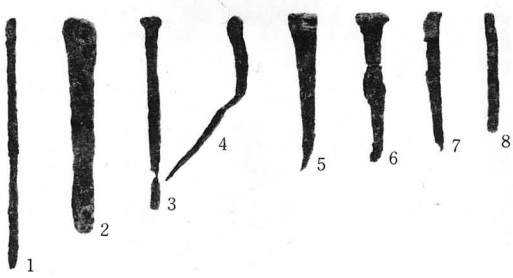
図版28　木製品(4)、木簡・物忌札・その他

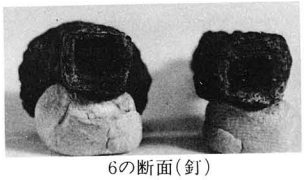




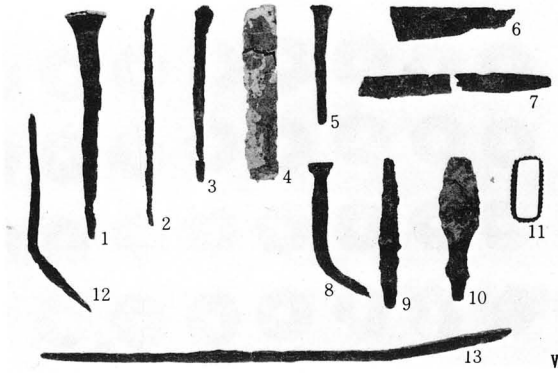








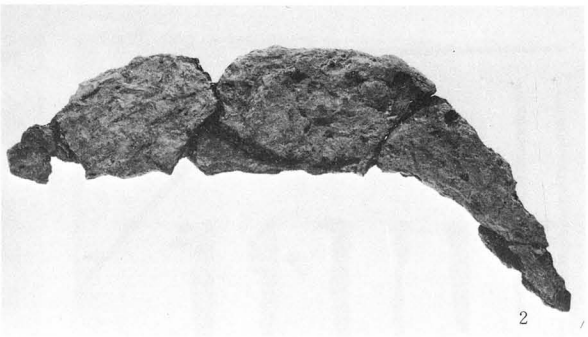
6の断面(釘)



Ⅰ. 1~3(16M)、4·5(14M)、6~9(12M)
Ⅱ. 11M(Ⅰ区)
Ⅲ. 1~6(1M)、7·8(2M)
Ⅳ. 1~6(15M)
Ⅴ. 1(18D)、2(45D)、3(20井)、4~6(32D)、7·8(34D)
Ⅵ. Ⅴ－6の断面
Ⅶ. 1(4建物)、2(32D)、3(9D)、4(11D)、5(10井)
Ⅷ. 1~4(26M)、5~7(18建物)、8~11(11M)、12·13(21M)

図版29　金属製品(1)

1a


2

1b

3

6

4

5

7

1a. 1b. 1M(手燭台)

2．21M(鎌)

3．21M(刀)

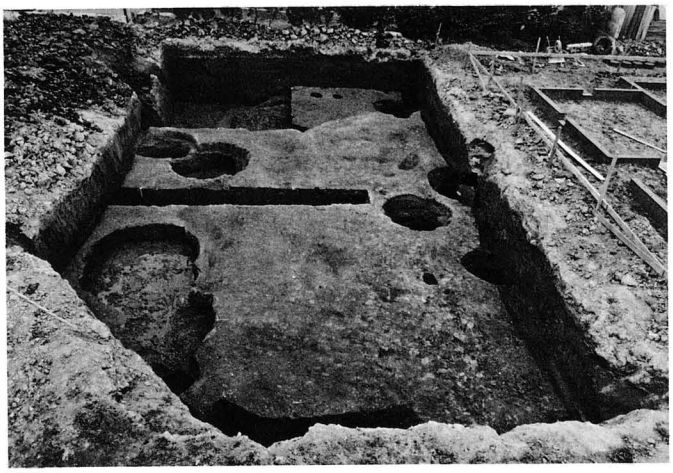
4．17井（銅錘)

5．31M(刀装具)

6．11M(銅鏡)

7．各遺構出土古銭

図版30　金属製品(2)



1

2

3

4

Eトレンチ

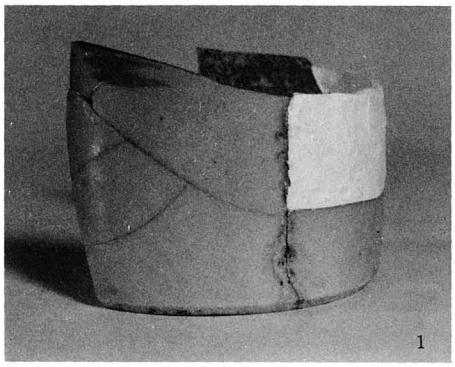
1．Eトレンチ全景

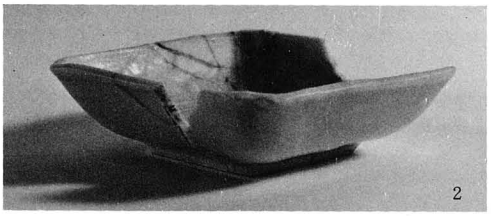
2．中央サブトレンチ全景（2号・3号溝）

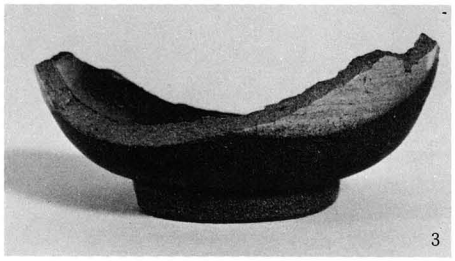
3．1号井戸跡

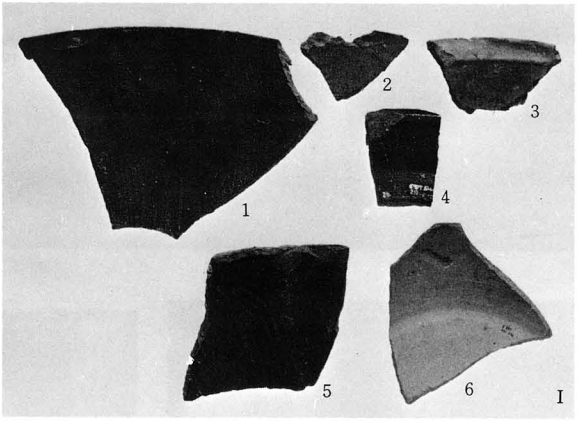
4．5号井戸跡

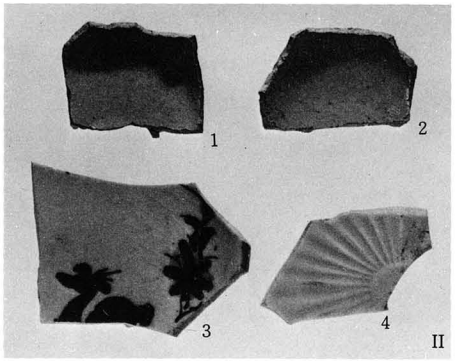
図版31　III区検出遺構

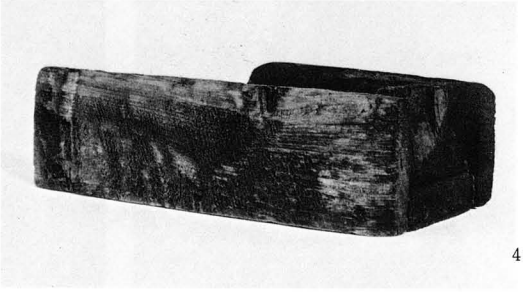


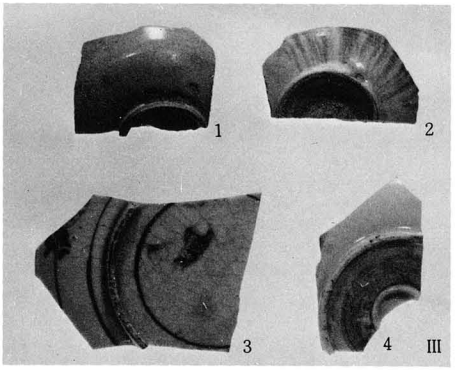


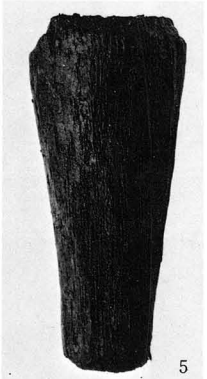


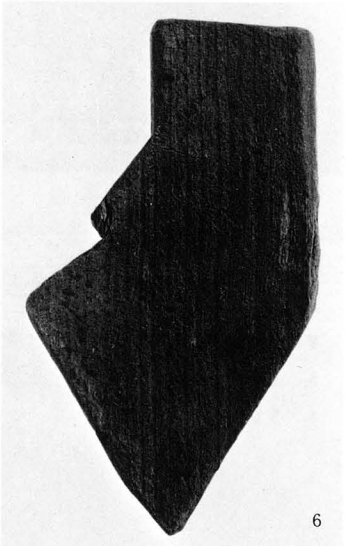






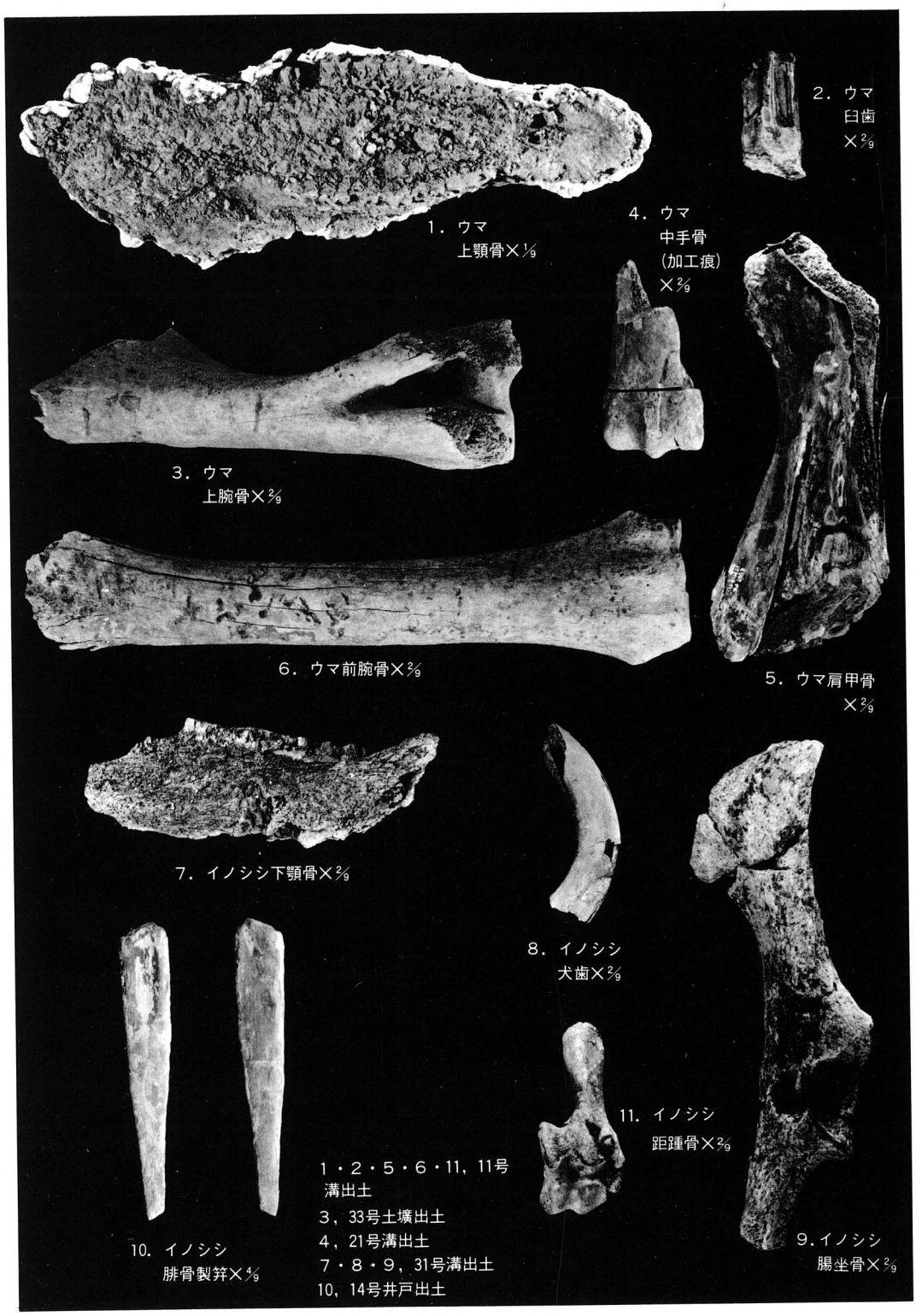




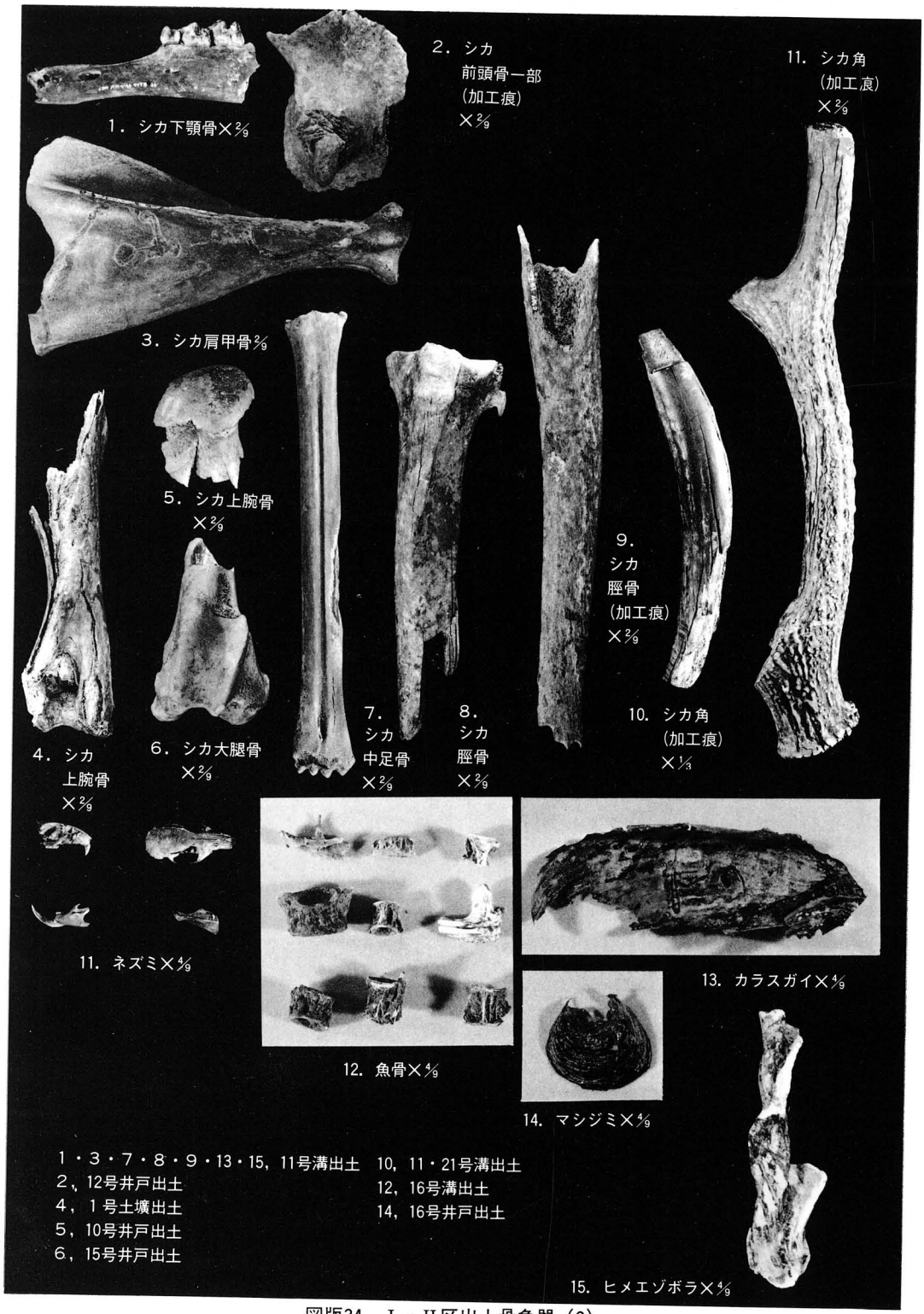


図版32　III区出土遺物

1．3井(Eトレ)　2．3井(Eトレ)　3．9井(Eトレ)　4．8井(Eトレ)　5．6井(Eトレ)　6．6井(Eトレ)
I｛1．9井(Eトレ)　2．西側溝(Cトレ)　3．6井(Eトレ)　4．2井(Eトレ)　5．西側溝(Cトレ)　6．9井(Eトレ)｝
II・III、｛1．6井(Eトレ)　2．6井(Eトレ)　3．5井(Eトレ)　4．試掘(Eトレ)｝



図版33　Ⅰ・Ⅱ区出土骨角器（1）



図版34　Ⅰ・Ⅱ区出土骨角器（2）

職　員　録

社会教育課

課　長	永野昌一
主　幹	早坂春一

文化財管理係

係　長	大沢隆夫
主　事	山口　宏
〃	渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼)	早坂春一
教　諭	佐藤　隆
〃	渡辺忠彦
〃	佐藤　裕
〃	加藤正範
主　事	田中則和
〃	結城慎一
〃	成瀬　茂
教　諭	青沼一民
主　事	柳沼みどり
〃	木村浩二
〃	篠原信彦
〃	佐藤　洋
〃	金森安孝
〃	佐藤甲二
〃	工藤哲司
〃	吉岡恭平
〃	渡部弘美
〃	主浜光朗
〃	斎野裕彦
〃	長島栄一
〃	荒井　格
派遣職員	高橋勝也
嘱　託	鈴木　実

仙台文化財調査報告書刊行目録

第１集　天然記念物霊屋下セコイヤ化石林調査報告書（昭和39年４月）
第２集　仙台城（昭和42年３月）
第３集　仙台市燕沢善応寺横穴古墳群調査報告書（昭和43年３月）
第４集　史跡陸奥国分寺跡環境整備並びに調査報告書（昭和44年３月）
第５集　仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書（昭和47年８月）
第６集　仙台市荒巻五本松窯跡発掘調査報告書（昭和48年10月）
第７集　仙台市富沢裏町古墳発掘調査報告書（昭和49年３月）
第８集　仙台市向山愛宕山横穴群発掘調査報告書（昭和49年５月）
第９集　仙台市根岸町宗禅寺横穴群発掘調査報告書（昭和51年３月）
第10集　仙台市中田町安久東遺跡発掘課査概報（昭和51年３月）
第11集　史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報（昭和51年３月）
第12集　史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報（昭和52年３月）
第13集　南小泉遺跡―範囲確認調査報告書―（昭和53年３月）
第14集　栗遺跡発掘調査報告書（昭和54年３月）
第15集　史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報（昭和54年３月）
第16集　六反田遺跡発掘調査（第２・３次）のあらまし（昭和54年３月）
第17集　北屋敷遺跡（昭和54年３月）
第18集　枡江遺跡発掘調査報告書（昭和55年３月）
第19集　仙台市地下鉄関係分布調査報告書（昭和55年３月）
第20集　史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報（昭和55年３月）
第21集　仙台市開発関係遺跡調査報告１（昭和55年３月）
第22集　経ヶ峯（昭和55年３月）
第23集　年報１（昭和55年３月）
第24集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和55年８月）
第25集　三神峯遺跡発掘調査報告書（昭和55年12月）
第26集　史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報（昭和56年３月）
第27集　史跡陸奥国分寺跡昭和55年度発掘調査概報（昭和56年３月）
第28集　年報２（昭和56年３月）
第29集　郡山遺跡Ⅰ―昭和55年度発掘調査概報―（昭和56年３月）
第30集　山田上ノ台遺跡発掘調査概報（昭和56年３月）
第31集　仙台市開発関係遺跡調査報告Ⅱ（昭和56年３月）
第32集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第33集　山口遺跡発掘調査報告書（昭和56年３月）
第34集　六反田遺跡発掘調査報告書（昭和56年12月）
第35集　南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第１次調査報告（昭和57年３月）
第36集　北前遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第37集　仙台平野の遺跡群Ⅰ―昭和56年度発掘調査報告書―（昭和57年３月）
第38集　郡山遺跡Ⅱ―昭和56年度発掘調査概報―（昭和57年３月）
第39集　燕沢遺跡発掘調査報告書（昭和57年３月）
第40集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅰ（昭和57年３月）
第41集　年報３（昭和57年３月）
第42集　郡山遺跡―宅地造成に伴う緊急発掘調査―（昭和57年３月）
第43集　栗遺跡（昭和57年８月）
第44集　鴻ノ巣遺跡発掘調査報告書（昭和57年12月）
第45集　茂庭―茂庭住宅団地造成工事地内遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第46集　郡山遺跡Ⅲ―昭和57年度発掘調査概報―（昭和58年３月）
第47集　仙台平野の遺跡群Ⅱ―昭和57年度発掘調査報告書―（昭和58年３月）
第48集　史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報（昭和58年３月）
第49集　仙台市文化財分布調査報告Ⅰ（昭和58年３月）
第50集　岩切畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第51集　仙台市文化財分布地図（昭和58年３月）
第52集　南小泉遺跡－都市計画街路建設工事関係第２次調査報告（昭和58年３月）
第53集　中田・畑中遺跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第54集　神明社窯跡発掘調査報告書（昭和58年３月）
第55集　南小泉遺跡―青葉女子学園移転新営工事地内調査報告―（昭和58年３月）
第56集　仙台市高速鉄道関係遺跡調査概報Ⅱ（昭和58年３月）
第57集　年報４（昭和58年３月）
第58集　今泉城跡発掘調査報告書（昭和58年３月）

仙台市文化財調査報告書第58集

昭和57年度

今泉城跡

昭和58年3月

発行　仙台市教育委員会

仙台市国分町3－7－1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷　株式会社　東北プリント

仙台市立町24－24　TEL63－1166